（府営大東北新町住宅建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査）

北新町遺跡第３次発掘調査概要報告書

大阪府大東市北新町所在

（本文編）

「東大寺」刻印

１９９７

大東市北新町遺跡調査会

（府営大東北新町住宅建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査）

北新町遺跡第３次発掘調査概要報告書

大阪府大東市北新町所在

（本文編）

「東大寺」刻印

１９９７

大東市北新町遺跡調査会

L区 SK－56 出土遺物

L区　出土　ヒスイ製勾玉

M区　SK－10 出土　白磁碗

M区　SP－244 出土　緑釉陶器

M区　SK－06 出土　東大寺瓦

同「東大寺」　刻印

K区　遺構及び包含層出土　青磁

同　包含層出土　白磁

L区　遺構出土　青磁

同　包含層出土　青磁

M区　遺構出土　青磁

同　包含層出土　青磁

M区　遺構出土　緑釉・灰釉陶器

同　包含層出土　緑釉陶器

はしがき

北新町遺跡は昭和60年に当地に所在する府営大東北新町住宅（当時の名称は大東四条畷住宅）の建替え工事がきっかけで発見された遺跡です。これによって建替え工事には、事前の発掘調査が必要であることがわかり、以後北新町遺跡調査会によって順次発掘調査が実施されており、多大な成果が得られています。

今回報告を致しますのは、平成２年12月から平成４年３月まで実施しました住宅敷地の南側部分を対象とする第Ⅲ期調査に関するものであります。調査結果の詳細につきましては本文を参照していただければ幸いと存じますが、今回の調査におきましても前回、前々回と同様に、当遺跡が縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが再確認できました。その中でも特に注目されるのは、中世（平安時代末～鎌倉時代前半）の遺構が濃密に検出されたことで、井戸、土坑、そして建物に伴う柱穴などが多数見つかっています。これらの遺構から推定しますに、当時この場所にはかなりの規模の集落が営まれていたと考えられます。加えて出土した遺物には、和泉地方や大和地方そして枚方楠葉で焼かれた瓦器椀、京都産の緑釉陶器、東播磨地方の須恵器、常滑焼、九州地方で産する石鍋や当時東大寺を再建するために吉備地方で焼かれた瓦など各地方のものが見られる他、青磁、白磁など当時の中国から輸入されたものも出土しています。これらの遺物からは、当時の人々の活発な活動を窺い知ることができます。また、当時集落の西側一帯には深野池が広がっており、想像の域を出ませんが、これら各地の製品は池を利用した舟運によって、この集落に運ばれてきたのでしょうか。そしてさらに言うなら、この集落は水上交通の要所としての役割を果たしていたのかも知れません。少々話が飛躍しましたが、このように想像をするだけでも、今まで遠い存在であった歴史が身近なものになったような気がします。今回の調査結果が大東の歴史の解明に、役に立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、今回の調査にご協力いただいたすべての方々に対し、記して感謝の意を表します。

平成９年３月

大東市北新町遺跡調査会

委員長　　大　東　元　二

例　　言

1．　本書は大阪府建築部住宅建設課が計画している、大東市北新町に所在する府営大東北新町住宅建替え第３期建築工事に伴って実施した、北新町遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．　本調査は大阪府建築部住宅建設課の委託を受けて、府住宅建設課、府文化財保護課、大東市教育委員会の三者において設立した北新町遺跡調査会が実施した。

3．　本調査は平成２年11月27日から平成３年５月18日まで道路拡幅及び水路整備を含む住宅建築予定地約2544㎡（Ｍ・Ｎ区）を、平成３年７月29日から平成４年２月14日まで住宅建築予定地と貯留槽部分約2071㎡（Ｌ・Ｏ・Ｑ区）を、平成４年７月13日から平成５年３月３日まで住宅建築予定地及び浄化槽部分、水路整備部分約2071㎡（Ｋ・Ｐ区）を第Ⅲ期の現地調査として実施した。土器の洗浄、接合等基礎的な整理作業については、上記の現地調査と並行して実施していたが、平成５年７月１日に第４期建築工事に伴う第Ⅳ期の現地調査が開始されたため一時中断し、平成８年４月１日から再開し、以後報告書作成のため整理作業を続け、平成９年３月31日に本報告書を完成している。

4．　本調査は大阪府教育委員会及び北新町遺跡調査会調査指導部長田代克巳（帝塚山短期大学教授）の指導の下同調査指導員黒田淳（大東市立歴史民俗資料館）が担当した。

5．　本調査に要した費用は大阪府建築部が負担した。

6．　現地調査及び内業整理作業の過程においては、下記の諸氏、諸機関より有益な御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

岡山県立博物館田村啓介、東大寺史研究所堀池春峰、瀬戸町教育委員会焔硝岩哲郎、帝塚山大学堅田直、四條畷市立歴史民俗資料館野島稔、寝屋川市教育委員会濱田延充、中世土器研究会、奈良国立文化財研究所

7．　現地調査及び内業整理作業にあたっては、下記の諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

辻本智英、大山清、山田芳樹、山本芳子、池田かずえ、益子澄子、浮田清子、宮田君子、吉本てるみ、野村香枝、清水芳子、宮田八重子、小矢田誠司、北田享子、倉奈津子、松永茂子、森石千枝子、井戸上照子、大谷聡、古川佳和、上島甲子三、鈴木真

澄美、末包知伸、辻照江、村上充紀、丸山茂男、湧川芳郎、塚山彦一郎、楽慎次郎、沖村保男、井尻由美子、徳田登喜子、嶽野幸一、皆見秀久、徳毛美佐子、清水崇子、仲上徹、小堀直子、古木あずさ、真下穂、松岡美佳子、中渓香織、沢田起代子、柴村智美、岩田令子、金城慶子、岩上直子

8．　本調査で出土した木製品及び金属製品の科学的保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

9．　本調査で実施した花粉・プラントオパール分析は、川崎地質株式会社に委託し、その報告を受けている。その分析結果は来年度刊行予定の第4次建替えの報告書に掲載することにしている。

10.　本調査で出土した遺物の写真は有限会社阿南写真工房の阿南辰秀氏に委託した。

11.　本書の執筆、編集は黒田が行なった。

12.　調査において作成した写真、実測図、カラースライド等は、大東市立歴史民俗資料館において保管している。今後、広く利用されることを希望する。

北新町遺跡調査会組織表

第Ⅲ期調査開始時

平成２年９月

委員長	大東市教育委員会教育長	中野昭明
委員兼調査部長	帝塚山短期大学教授	田代克巳
委員	大阪府教育委員会文化財保護課長	川瀬　誠
委員	大阪府建築部住宅建設課長	井上正義
委員	大東市教育委員会管理部長	北本慶三
委員	大東市教育委員会指導部長	大東元二
委員	大東市文化財保護委員会会長	萩家大蔵
監査委員	大東市教育委員会総合文化センター館長	小矢田光義
監査委員	大東市教育委員会管理部次長兼教育総務課長	蔀　正次
事務部長	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館長	橋本義一
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	太田基久
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主査	江野弘二
調査指導員	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館技術吏員	黒田　淳

北新町遺跡調査会組織表

第Ⅲ期調査終了時

平成９年３月

委員長	大東市教育委員会教育長	大東元二
委員兼調査部長	帝塚山短期大学教授	田代克巳
委員	大阪府教育委員会文化財保護課長	鹿野一美
委員	大阪府建築部副理事兼住宅建設課長	川崎正嗣
委員	大東市教育委員会管理部長	田口幹雄
委員	大東市教育委員会指導部長	乾　昇一
委員	大東市文化財保護委員会会長	合川昭夫
監査委員	大東市教育委員会総合文化センター館長	池田敦彦
監査委員	大東市教育委員会管理部次長兼教育総務課長	和田久樹
事務部長	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館長	橋本義一
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	江野弘二
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	森　泰章
調査指導員	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館技術吏員	黒田　淳

凡　　例

1．　北新町遺跡の略称は、ＫＳＭ（ＫＩＴＡＳＨＩＮＭＡＣＨＩｓｉｔｅ）である。

2．　調査区名は建て替え計画順にローマ数字で表記している。（Ⅰ～Ⅳ期）

3．　調査名は遺跡の略称と調査区名を組み合わせて表記しており、出土遺物の註記はこれに従っている。（例：ＫＳＭⅢ）さらに調査年次順を調査名の後に「－」（ハイフン）を付しアラビア数字で表記している。（例：ＫＳＭⅢ－１、ＫＳＭⅣ－２）

4．　各調査区において設定した地区（トレンチ）名は、住宅敷地の北から南に向かってアルファベット順で表記している。尚、調査年次と調査名、地区名との関係は、第１章第１節　調査に至る経過のなかで詳しく述べている。

5．　遺構及び断面図中の標高は、東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．）を基準としてｍ単位で表示している。

6．　遺構等の実測図作成の測量基準については国土座標第Ⅳ系を使用しており、挿図中の北はすべて座標北を基準としている。座標の記載は㎞単位で表示している。

7．　各地区の区割りについては、座標のメッシュとは関係なく独自に設定しており、地区名（アルファベット）の後に「－」（ハイフン）、アラビア数字の順に表示している。（例：Ｋ－１区）地区割りの詳細については第１章第２節　調査の方法で記述している。

8．　本書で使用する遺構名については、アルファベットとアラビア数字の組合せで表記しており、アルファベットは遺構の種類を、アラビア数字は遺構番号を表している。本書で登場する遺構の種類については以下に示す通りである。

ＳＡ	柵	ＳＢ	建物
ＳＤ	溝	ＳＥ	井戸
ＳＦ	焼土坑	ＳＩ	土器集積
ＳＪ	堰	ＳＫ	土坑
ＳＭ	水田、畑	ＳＮ	畦畔
ＳＰ	ピット	ＳＲ	河川
ＳＴ	池、落ち込み		

なお、遺構検出段階においてＳＫ（土坑）としたものの中には、遺構内掘り下げ後

ＳＥ（井戸）であることが判明したもの（その逆の場合もある）があり、遺構記号はそのまま使用しているが、このような場合には、遺構番号の後に実際の遺構の名称記すことにした。（例：ＳＫ－０６（井戸））

9．　本書で使用している基本層序、遺構面、遺構番号等については、これまで実施されたⅠ期、Ⅱ期の調査のものとは関連しておらず、Ⅲ期の調査で独自に設定したものである。各遺構番号の付し方については、Ⅲ期調査の中で連番で、調査年次順（M区→K区）に付しているが、本文での各地区の遺構の説明は、調査年次順とは関係なく、アルファベット順に記述をしているため、本文中に出てくる遺構は必ずしも順番にはなっていない。また、溝などの遺構で２箇所以上の調査区にわたり検出されて、同一の遺構と判断出来るものについては、なるべく同じ遺構番号を付すようにしている。

10.　遺物の実測図の縮尺は、土器が1／4、石器2／3、木器1／4を基本としているが、一部の遺物についてはそれぞれの大きさに応じて縮尺を変えている。各スケールを参照されたい。遺物の断面は、須恵器・陶磁器類を黒塗りで、土師器類を白抜きで、瓦器・瓦質土器・瓦をスクリーントーンで表現しているが、土器の種類がわかりにくい場合はその種類を実測図中に表示している。（例：黒色土器Ａ類（黒Ａ），緑釉陶器（緑））

11.　土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修による。

巻　頭　図　版

巻頭図版１　　Ｌ区ＳＫ－56出土遺物
巻頭図版２　　Ｌ区出土ヒスイ製勾玉
巻頭図版３　　Ｍ区ＳＫ－10出土白磁碗／Ｍ区ＳＰ－244出土緑釉陶器
巻頭図版４　　Ｍ区ＳＫ－06出土東大寺瓦／同「東大寺」刻印
巻頭図版５　　Ｋ区遺構及び包含層出土青磁／同包含層出土白磁
巻頭図版６　　Ｌ区遺構出土青磁／同包含層出土青磁
巻頭図版７　　Ｍ区遺構出土青磁／同包含層出土青磁
巻頭図版８　　Ｍ区遺構出土緑釉・灰釉陶器／同包含層出土緑釉陶器
はしがき
例　言
北新町遺跡調査会組織表
凡　例

本　文　目　次

第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　これまでの調査成果……2
　第３節　調査方法……3

第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……6

第３章　基本層序……13

第４章　遺構
　第１節　Ｋ区の遺構……17
　第２節　Ｌ区の遺構……40

第３節　Ｍ・Ｎ区の遺構…… 58
第４節　Ｏ区の遺構…… 82
第５節　Ｐ区の遺構…… 85
第６節　Ｑ区の遺構…… 89
第７節　ピット…… 91

第５章　遺物
第１節　出土遺物の概要…… 102
第２節　Ｋ・Ｐ区の出土遺物…… 105
第３節　Ｌ区の出土遺物…… 118
第４節　Ｍ・Ｎ区の出土遺物…… 139
第５節　出土銭貨…… 177

第６章　木製品
第１節　出土木製品の概要…… 180
第２節　Ｋ区の出土木製品…… 183
第３節　Ｌ区の出土木製品…… 193
第４節　Ｍ・Ｎ区の出土木製品…… 201

第７章　まとめ…… 234

遺物観察表…… 237
木製品観察表…… 294
遺構一覧表…… 300
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1 図　大東市位置図……1
第 2 図　調査区位置図……4
第 3 図　調査区区割り図……5
第 4 図　市内遺跡分布図……7～8
第 5 図　土層断面柱状図……15～16
第 6 図　ＳＤ－55平面図……18
第 7 図　Ｋ区西側第２遺構面上層平面図……19～20
第 8 図　ＳＥ－34平面、断面、土層断面図……21
第 9 図　ＳＥ－36平面、断面、土層断面図……21
第10図　ＳＥ－38平面、断面、土層断面図……22
第11図　ＳＥ－39平面、断面、土層断面図……22
第12図　ＳＥ－41平面、立面図……23
第13図　ＳＥ－42平面、立面、土層断面図……23
第14図　ＳＥ－43平面、立面、土層断面図……24
第15図　ＳＥ－44平面、断面図……25
第16図　ＳＥ－45平面、立面、土層断面図……25
第17図　ＳＫ－92平面、断面、土層断面図……26
第18図　ＳＫ－94平面、断面、土層断面図……26
第19図　ＳＫ－95平面、立面図……27
第20図　ＳＫ－97平面、立面、断面図……28
第21図　ＳＫ－98平面、立面、土層断面図……29
第22図　ＳＤ－59・68平面、断面、土層断面図……31～32
第23図　ＳＥ－46平面、立面、土層断面図……35
第24図　ＳＫ－99平面、立面、土層断面図……36
第25図　ＳＫ－111平面、立面、土層断面図……36
第26図　ＳＲ－02平面、土層断面図……38
第27図　ＳＤ－54平面図……40
第28図　Ｌ区西側及びＮ区第２遺構面上層平面図……41～42

第29図　ＳＥ－22平面、立面図……43
第30図　ＳＥ－28平面、立面、土層断面図……44
第31図　ＳＥ－30平面、立面、土層断面図……44
第32図　ＳＫ－56平面、立面、土層断面図……45
第33図　ＳＫ－61平面、断面図……46
第34図　ＳＫ－67平面、土層断面図……47
第35図　ＳＫ－68平面、立面図……48
第36図　ＳＴ－02平面、断面、土層断面図……48
第37図　ＳＥ－29平面、立面、土層断面図……50
第38図　ＳＥ－31平面、土層断面図……51
第39図　ＳＫ－70平面、土層断面図……51
第40図　ＳＲ－01平面、土層断面図……53
第41図　ＳＫ－80平面、立面、土層断面図……54
第42図　ＳＫ－84平面、立面図（拡大）……55
第43図　ＳＲ－02平面、土層断面図及び土器出土状況図……56
第44図　ＳＪ－01平面、土層断面図……57
第45図　ＳＥ－03平面、立面、土層断面図……60
第46図　Ｍ・Ｎ区西側第２遺構面上層平面図……61～62
第47図　ＳＥ－04平面、立面、土層断面図……63
第48図　ＳＥ－06平面、立面、土層断面図……63
第49図　ＳＥ－07平面、立面、断面図……64
第50図　ＳＥ－08平面、土層断面図……64
第51図　ＳＥ－09平面、土層断面図……65
第52図　ＳＥ－10平面、土層断面図……65
第53図　ＳＥ－11平面、立面、土層断面図……66
第54図　ＳＥ－12平面、土層断面図……67
第55図　ＳＥ－13平面、立面、土層断面図……68
第56図　ＳＫ－06平面、土層断面図……69
第57図　ＳＫ－08平面、立面、土層断面図……69
第58図　ＳＫ－09平面、断面図……69

第59図　ＳＫ－14平面、立面、土層断面図…… 70
第60図　ＳＫ－15平面、立面、土層断面図…… 70
第61図　ＳＫ－21平面、立面、土層断面図…… 71
第62図　ＳＫ－25平面、断面図…… 71
第63図　ＳＫ－27平面、断面図…… 72
第64図　ＳＤ－42平面図…… 72
第65図　ＳＦ－01平面、土層断面図…… 73
第66図　ＳＩ－01平面、断面図…… 74
第67図　ＳＩ－02平面、断面図…… 74
第68図　ＳＥ－16平面、断面図…… 77
第69図　ＳＫ－35平面、断面図…… 78
第70図　ＳＫ－39平面、立面、断面図…… 78
第71図　ＳＫ－41平面、立面、土層断面図…… 78
第72図　ＳＥ－17平面、断面、土層断面図…… 79
第73図　ＳＥ－18平面、断面、土層断面図…… 80
第74図　ＳＥ－20平面、断面図…… 81
第75図　ＳＥ－21、ＳＴ－04平面、立面、土層断面図…… 81
第76図　ＳＤ－54杭列検出状況…… 82
第77図　Ｐ区第２遺構面上層・下層平面図……87～88
第78図　ＳＰ－244平面、立面、土層断面図 …… 92
第79図　ＳＰ－320平面、断面図 …… 92
第80図　ＳＰ－436平面、断面図 …… 93
第81図　ＳＰ－799・812・826・1189・1193平面、断面図 …… 94
第82図　ＳＰ－106平面、断面図 …… 95
第83図　ＳＰ－1677・1779平面、断面図…… 96
第84図　ＳＰ－133・451・879・1176・1509平面、立面、断面図 …… 98
第85図　ＳＰ－157・1221～1222・1239・1406平面、立面、断面図 …… 99
第86図　ＳＰ－2214・2068平面、立面図…… 100
第87図　ＳＥ－32・34・35・38・39・40出土遺物…… 106
第88図　ＳＥ－43出土遺物…… 107

第89図　ＳＥ－42・44・45・46・47出土遺物…… 108
第90図　ＳＫ－92・94・95・96・97出土遺物…… 110
第91図　ＳＫ－100・101・108・111・120・131出土遺物…… 112
第92図　ＳＤ－59出土遺物…… 113
第93図　ＳＤ－68出土遺物…… 115
第94図　ＳＲ－01・02、ＳＰ、包含層出土遺物…… 116
第95図　ＳＴ－02、ＳＥ－22・28・31出土遺物…… 119
第96図　ＳＫ－56出土遺物（１）…… 120
第97図　ＳＫ－56出土遺物（２）…… 121
第98図　ＳＫ－56出土遺物（３）…… 122
第99図　ＳＫ－56出土遺物（４）…… 123
第100図　ＳＫ－56出土遺物（５）…… 124
第101図　ＳＫ－58・61・64・66・67・70・80・82・83出土遺物…… 126
第102図　ＳＫ－84、ＳＤ－39・56出土遺物…… 128
第103図　ＳＲ－01出土遺物…… 130
第104図　ＳＲ－02出土遺物…… 131
第105図　ＳＲ－02・05出土遺物…… 132
第106図　Ｌ区ＳＰ出土遺物（１）…… 133
第107図　Ｌ区ＳＰ出土遺物（２）…… 136
第108図　Ｌ区包含層出土遺物…… 138
第109図　ＳＴ－01出土遺物（１）…… 140
第110図　ＳＴ－01出土遺物（２）…… 141
第111図　ＳＴ－01出土遺物（３）…… 142
第112図　ＳＴ－01出土遺物（４）…… 143
第113図　ＳＴ－02・03・04・05出土遺物…… 145
第114図　ＳＥ－01・02・03・04出土遺物…… 147
第115図　ＳＥ－08・09・10出土遺物…… 148
第116図　ＳＥ－11・12・13出土遺物…… 150
第117図　ＳＥ－16・17出土遺物…… 151
第118図　ＳＥ－18・20出土遺物…… 153

第119図　ＳＫ－06出土遺物…… 154
第120図　ＳＫ－06・07・08出土遺物…… 155
第121図　ＳＫ－10・11・12・14・15・16出土遺物…… 157
第122図　ＳＫ－21・22・25・26・27・28・29・34・35・40出土遺物…… 159
第123図　ＳＫ－46・54・55出土遺物…… 161
第124図　ＳＤ－29・30・31・32・33・39・40・42・45出土遺物…… 162
第125図　ＳＩ－01・02出土遺物…… 163
第126図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（１）…… 166
第127図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（２）…… 167
第128図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（３）…… 170
第129図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（４）…… 172
第130図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（５）…… 173
第131図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（６）…… 175
第132図　Ｍ・Ｎ区包含層出土遺物…… 177
第133図　出土銭貨…… 178
第134図　ＳＤ－87、ＳＥ－34・36出土木製品…… 184
第135図　ＳＥ－41出土木製品（１）…… 185
第136図　ＳＥ－41出土木製品（２）…… 186
第137図　ＳＥ－42出土木製品（１）…… 187
第138図　ＳＥ－42出土木製品（２）…… 188
第139図　ＳＥ－42・43出土木製品…… 189
第140図　ＳＥ－43出土木製品…… 191
第141図　ＳＥ－44出土木製品…… 192
第142図　ＳＥ－46、ＳＫ－98出土木製品…… 194
第143図　ＳＲ－02、ＳＥ－23・24出土木製品…… 195
第144図　ＳＫ－61・68、ＳＥ－30出土木製品…… 196
第145図　ＳＰ－1847・2108・2130出土木製品…… 198
第146図　ＳＰ－1714・1904・2164出土木製品…… 199
第147図　ＳＰ－2004・2173・2214出土木製品…… 200
第148図　ＳＰ－1905・2084出土木製品…… 202

第149図　ＳＫ－84出土木製品（１）…… 203
第150図　ＳＫ－84出土木製品（２）…… 204
第151図　ＳＪ－01出土木製品…… 205
第152図　ＳＴ－01出土木製品…… 206
第153図　ＳＴ－01・05出土木製品…… 207
第154図　ＳＫ－06・10・14・15・40、ＳＤ－45出土木製品…… 209
第155図　ＳＥ－07出土木製品…… 211
第156図　ＳＥ－11出土木製品（１）…… 212
第157図　ＳＥ－11出土木製品（２）…… 213
第158図　ＳＥ－11出土木製品（３）…… 214
第159図　ＳＥ－11出土木製品（４）…… 215
第160図　ＳＥ－11出土木製品（５）…… 216
第161図　ＳＥ－11出土木製品（６）…… 217
第162図　ＳＥ－11出土木製品（７）…… 218
第163図　ＳＥ－11出土木製品（８）…… 219
第164図　ＳＥ－11出土木製品（９）…… 220
第165図　ＳＥ－11出土木製品（10）…… 221
第166図　ＳＥ－11出土木製品（11）…… 222
第167図　ＳＥ－11出土木製品（12）…… 223
第168図　ＳＥ－11出土木製品（13）…… 224
第169図　ＳＥ－11出土木製品（14）…… 225
第170図　ＳＥ－13出土木製品（１）…… 227
第171図　ＳＥ－13出土木製品（２）…… 228
第172図　ＳＥ－13・18出土木製品…… 229
第173図　ＳＰ－157・515・1104・1134出土木製品…… 230
第174図　ＳＰ－451・619・1104・1152・1327出土木製品…… 231
第175図　ＳＰ－1221・1222出土木製品…… 233

図　版　目　次

図版１	Ｋ区第１遺構面	全景（北より）／ＳＤ－55（南西より）
図版２	Ｋ区第２遺構面上層	全景（北東より）／ＳＤ－59（北西より）
図版３	Ｋ区第２遺構面上層	全景（北西より）／ＳＤ－68（北より）
図版４	Ｋ区第２遺構面上層	ＳＤ－59（北東）より／ＳＫ－97（東より）
図版５	Ｋ区第２遺構面上層	上・ＳＥ－38（東より）、下・ＳＥ－38（東より）、上・ＳＥ－34（西より）、下・ＳＥ－43櫛出土状況（西より）／ＳＥ－43（西より）
図版６	Ｋ区第２遺構面上層	ＳＥ－42（南より）／ＳＥ－42（南より）
図版７	Ｋ区第２遺構面上層	ＳＫ－97（南東より）／ＳＫ－98（南より）
図版８	Ｋ区第２遺構面下層	ＳＫ－101（西より）／ＳＫ－111（南より）
図版９	Ｋ区第２遺構面下層	ＳＲ－01付近（北より）／全景（北東より）
図版10	Ｋ区第３遺構面	全景（北東より）／全景（北西より）
図版11	Ｋ区第３遺構面	全景（東より）／全景（南西より）
図版12	Ｋ区第３遺構面	ＳＲ－02（北より）／ＳＲ－02（北より）
図版13	Ｋ区第４遺構面	全景（東より）／全景（北西より）
図版14	Ｋ区第４遺構面	ＳＲ－11（北西より）／南側側溝縄文土器出土地点（東より）
図版15	Ｌ区第１遺構面	全景（東より）／ＳＤ－54（西より）
図版16	Ｌ区第２遺構面上層	全景（西より）／全景（北西より）
図版17	Ｌ区第２遺構面上層	全景（西より）／全景（北より）
図版18	Ｌ区第２遺構面上層	ＳＥ－28（東より）／上・ＳＥ－22（東より）、下・ＳＥ－22（西より）、上・ＳＫ－61（南より）、下・ＳＫ－67（南より）
図版19	Ｌ区第２遺構面上層	ＳＫ－68（南西より）／ＳＫ－68（南東より）
図版20	Ｌ区第２遺構面上層	ＳＫ－56（西より）／上・ＳＫ－56土器出土状況（北より）、下・ＳＫ－56植物遺体検出状況（北西より）、上・ＳＫ－56植物遺体検出状況（南西より）、下・ＳＫ－56土層断面（西より）

図版21　L区第２遺構面上層　上・ＳＰ－1677瓦器釜出土状況（東より）、下・ＳＰ－1677瓦器釜出土状況（西より）、上・ＳＰ－1779（北西より）、下・ＳＰ－2068（北西より）／上・ＳＰ－2108（南より）、下・ＳＰ－2193（南より）、上・ＳＰ－2214（東より）、下・ＳＰ－2230（北より）

図版22　L区第２遺構面上層　全景（西より）／全景（北東より）

図版23　L区第２遺構面下層　ＳＲ－01（北東より）／ＳＲ－01（北東より）

図版24　L区第２遺構面下層　ＳＥ－31（南東より）／ＳＫ－70（西より）

図版25　L区第３遺構面　ＳＫ－82～84（北より）／ＳＫ－84（北より）

図版26　L区第３遺構面　ＳＫ－84植物遺体検出状況（北西より）／ＳＫ－84植物遺体除去後（北より）

図版27　L区第３遺構面　全景（西より）／ＳＲ－02付近（北より）

図版28　L区第３遺構面　ＳＪ－01（南より）／ＳＪ－01（南西より）

図版29　L区第３遺構面　ＳＲ－02（北東より）／上・ＳＲ－02凹み石出土状況（南西より）、下・ＳＲ－02杭出土状況（北東より）、上・ＳＲ－02土器出土状況（西より）、下・ＳＲ－02手焙り形土器出土状況（南より）

図版30　O区第１遺構面　全景（北より）／ＳＤ－54（東より）

図版31　O区第２遺構面下層　全景（北より）／全景（東より）

図版32　O区第３遺構面　ＳＲ－03・04（南東より）／ＳＲ－03・04（西より）

図版33　M区第１遺構面　全景（東より）／ＳＤ－05・06（東より）

図版34　M・N区第２遺構面上層　全景（北西より）／全景（北より）

図版35　N区第２遺構面上層　Ｎ－１～４・６区全景（南より）／Ｎ－７・８区全景（南より）

図版36　M・N区第２遺構面上層　ＳＥ－03（南より）／左・ＳＥ－06（南より）、右・ＳＥ－08（南より）

図版37　M区第２遺構面上層　ＳＥ－04（東より）／ＳＥ－04（北より）

図版38　M・N区第２遺構面上層　ＳＥ－07（東より）／ＳＥ－10（北西より）

図版39　M区第２遺構面上層　ＳＥ－11（北より）／上・ＳＥ－11（北より）、下・ＳＥ－11（北より）、上・ＳＥ－11（北より）、下・ＳＥ－

11（北西より）

図版40　M区第２遺構面上層　ＳＥ－13（東より）／ＳＥ－13（西より）

図版41　M区第２遺構面上層　ＳＫ－06（南西より）／ＳＫ－06（南より）

図版42　M区第２遺構面上層　ＳＫ－06（南より）／ＳＫ－06（東より）

図版43　M区第２遺構面上層　ＳＫ－06（北より）／ＳＫ－06（東より）

図版44　M区第２遺構面上層　ＳＫ－08（東より）／上・ＳＫ－14（西より）、下・ＳＫ－14（南より）、上・ＳＫ－09（南より）、下・ＳＫ－15（西より）

図版45　M区第２遺構面上層　ＳＫ－21（西より）／ＳＫ－21（南より）

図版46　M区第２遺構面上層　ＳＫ－25（北より）／ＳＫ－27（南より）

図版47　M区第２遺構面上層　ＳＩ－01（北より）／ＳＤ－42（北東より）

図版48　M区第２遺構面上層　ＳＦ－01（西より）／ＳＦ－01焼土（南より）

図版49　M区第２遺構面上層　ＳＰ－157下駄出土状況（北より）／ＳＰ－157柱根、礎石出土状況（北より）

図版50　M区第２遺構面上層　ＳＰ－244（南東より）／ＳＰ－244緑釉出土状況（南東より）

図版51　M・N区第２遺構面上層　上・ＳＰ－106（西より）、下・ＳＰ－210（南東より）、上・ＳＰ－320（北西より）、下・ＳＰ－359（北西より）／ＳＰ－711（西より）

図版52　M区第２遺構面上層　上・ＳＰ－436（南西より）、下・ＳＰ－451（西より）、上・ＳＰ－757（南より）、下・ＳＰ－799（南より）／上・ＳＰ－803（北より）、下・ＳＰ－812（西より）、上・ＳＰ－826（南より）、下・ＳＰ－1134（南西より）

図版53　N区第２遺構面上層・下層　Ｎ－５区第２遺構面上層全景（東より）／Ｎ－５区第２遺構面下層全景（東より）

図版54　M区第２遺構面下層　ＳＢ－06（北より）／ＳＴ－01（北より）

図版55　M区第２遺構面下層　ＳＴ－01（北東より）／上・ＳＴ－01石積み出土状況（西より）、下・ＳＴ－01下駄出土状況（東より）、上・ＳＴ－01栓出土状況（東より）、下・ＳＴ－01板材出土状況（南西より）

図版56　M区第２遺構面下層　　ＳＥ－16（南西より）／ＳＫ－35（南より）

図版57　M区第２遺構面下層　　ＳＫ－36（西より）／ＳＫ－36（南より）

図版58　M区第２遺構面下層　　ＳＫ－39（西より）／ＳＫ－39（南東より）

図版59　M区第２遺構面下層　　ＳＫ－41（北西より）／ＳＫ－41（東より）

図版60　M・N区第２遺構面下層　　上・ＳＰ－1153（北西より）、下・ＳＰ－1173（南より）、上・ＳＰ－1176（北東より）、下・ＳＰ－1189（西より）／上・ＳＰ－1193（北西より）、下・ＳＰ－1406（西より）、上・ＳＰ－133（南西より）、下・ＳＰ－1509（西より）

図版61　N区第２遺構面下層　　N－１～４区全景(北より)／N－６～８区全景(南より)

図版62　M・N区第２遺構面下層　　全景（北東より）／全景（北西より）

図版63　M区第３遺構面　　全景（東より）／全景（西より）

図版64　M区第３遺構面　　ＳＥ－17（南より）／ＳＥ－17（南西より）

図版65　M区第３遺構面　　ＳＥ－18（北西より）／ＳＥ－18（南より）

図版66　M区第３遺構面　　ＳＤ－45(南西より)／ＳＤ－45漆器椀出土状況(南より)

図版67　M区第３遺構面　　ＳＴ－04、ＳＥ－18（北より）／ＳＴ－04、ＳＥ－20・21（北西より）

図版68　M区第３遺構面　　ＳＥ－20（北より）／ＳＥ－20（北東より）

図版69　M区第３遺構面　　ＳＥ－21（東より）／ＳＥ－21（東より）

図版70　M区第３遺構面　　ＳＰ－1221～1222（東より）／ＳＰ－1239（北西より）

図版71　M区第３遺構面　　足跡検出状況（東より）／足跡検出状況（南西より）

図版72　M区第４遺構面　　全景（西より）／同上（東より）

図版73　P区出土遺物　　ＳＥ－32

図版74　K区出土遺物　　ＳＥ－34・35・38

図版75　K区出土遺物　　ＳＥ－39・42

図版76　K区出土遺物　　ＳＥ－43・45・46・47

図版77　K区出土遺物　　ＳＫ－94・96・97

図版78　K区出土遺物　　ＳＫ－108・111・131

図版79　K区出土遺物　　ＳＤ－59

図版80　K区出土遺物　　ＳＤ－59

図版81	K区出土遺物	ＳＤ－68
図版82	K区出土遺物	ＳＲ－01・02
図版83	K区出土遺物	ＳＰ－2505・2506・2510・2675
図版84	K区出土遺物	遺構及び包含層出土青磁、包含層出土白磁
図版85	K区出土遺物	包含層出土銭貨、ＳＤ－59、ＳＰ－2702、包含層
図版86	L区出土遺物	ＳＴ－02、ＳＥ－28、ＳＲ－01、ＳＰ－1847、包含層
図版87	L区出土遺物	ＳＥ－28・31
図版88	L区出土遺物	ＳＫ－56
図版89	L区出土遺物	ＳＫ－56
図版90	L区出土遺物	ＳＫ－56
図版91	L区出土遺物	ＳＫ－70・80・84、ＳＤ－39
図版92	L区出土遺物	ＳＥ－31・ＳＫ－84、包含層
図版93	L区出土遺物	ＳＲ－01
図版94	L区出土遺物	ＳＲ－02
図版95	L区出土遺物	ＳＲ－01・02
図版96	L区出土遺物	ＳＲ－02・05、包含層
図版97	L区出土遺物	ＳＰ－1677・1845・1937・1939・2016・2105、ＳＥ－31（銭貨）、ＳＰ－1593（銭貨）
図版98	L区出土遺物	ＳＰ－1604・1608・1792・1880・1896・2098
図版99	L区出土遺物	遺構及び包含層出土緑釉、包含層出土白磁
図版100	L区出土遺物	遺構出土青磁、包含層出土青磁
図版101	L区出土遺物	包含層出土土師器鉢、土馬、勾玉、縄文土器
図版102	M区出土遺物	ＳＴ－01
図版103	M区出土遺物	ＳＴ－01
図版104	M区出土遺物	ＳＴ－01
図版105	M区出土遺物	ＳＴ－01
図版106	M・N区出土遺物	ＳＴ－01・02
図版107	M・N区出土遺物	ＳＴ－02・04・05
図版108	M区出土遺物	ＳＥ－08
図版109	M・N区出土遺物	ＳＥ－02・04・08・10・13

図版110 M区出土遺物　ＳＥ－11・12

図版111 M区出土遺物　ＳＥ－16・17

図版112 M区出土遺物　ＳＥ－17

図版113 M区出土遺物　ＳＥ－17・18

図版114 M区出土遺物　ＳＥ－18

図版115 M区出土遺物　ＳＥ－20

図版116 M区出土遺物　ＳＫ－06・10

図版117 M区出土遺物　ＳＫ－06

図版118 M区出土遺物　ＳＫ－06

図版119 M区出土遺物　ＳＫ－06・08・10・12・16、ＳＫ－08（銭貨）、ＳＰ－146（銭貨）

図版120 M区出土遺物　ＳＫ－10・14・16

図版121 M区出土遺物　ＳＫ－21・25・26・28

図版122 M・N区出土遺物　ＳＫ－21・22・27・29・34・35・46・55

図版123 M・N区出土遺物　ＳＫ－10・55、ＳＤ－31・33・45

図版124 M・N区出土遺物　ＳＤ－29・30・31・32・33・39・40・42

図版125 M区出土遺物　ＳＩ－01

図版126 M区出土遺物　ＳＰ－244、遺構出土灰釉、緑釉

図版127 M・N区出土遺物　ＳＰ－106・200・203・260

図版128 M区出土遺物　ＳＰ－269・280・320・322・408・433・434

図版129 M・N区出土遺物　ＳＰ－436・439・593・721・770

図版130 M区出土遺物　ＳＰ－436・593・823

図版131 M区出土遺物　ＳＰ－757

図版132 M区出土遺物　ＳＰ－799

図版133 M・N区出土遺物　ＳＰ－37・38・203・803・805・812・823・826・883

図版134 M区出土遺物　ＳＰ－919・1078・1164

図版135 M区出土遺物　ＳＰ－1189

図版136 M・N区出土遺物　ＳＰ－1193・1440・1583

図版137 M区出土遺物　遺構出土青磁、遺構出土白磁

図版138 M・N区出土遺物　ＳＥ－05・06、ＳＴ－01、ＳＰ－43・604、包含層

図版139 M区出土遺物　包含層出土青磁（表裏）

図版140 M区出土遺物　包含層出土灰釉、包含層出土緑釉
図版141 M区出土遺物　包含層出土白磁
図版142 M・N区出土遺物　包含層、ＳＰ－436・672・681・1142・1305
図版143 M区出土遺物　包含層
図版144 K区出土木製品　ＳＤ－87、ＳＥ－34・36・41
図版145 K区出土木製品　ＳＥ－41・42
図版146 K区出土木製品　ＳＥ－42
図版147 K区出土木製品　ＳＥ－43・44
図版148 K区出土木製品　ＳＥ－44・46、ＳＫ－98
図版149 L区出土木製品　ＳＪ－01、ＳＫ－61・68、ＳＰ－1847・2108
図版150 L区出土木製品　ＳＰ－1714・1904・1905・2084・2214・2230
図版151 L区出土木製品　ＳＰ－2164・2173、ＳＲ－02
図版152 M区出土木製品　ＳＴ－01
図版153 M区出土木製品　ＳＴ－01・05、ＳＥ－07・11
図版154 M区出土木製品　ＳＥ－11
図版155 M区出土木製品　ＳＥ－11
図版156 M区出土木製品　ＳＥ－11
図版157 M区出土木製品　ＳＥ－11
図版158 M区出土木製品　ＳＥ－11
図版159 M区出土木製品　ＳＥ－11・13
図版160 M区出土木製品　ＳＥ－13
図版161 M区出土木製品　ＳＥ－18、ＳＤ－45、ＳＫ－10・14
図版162 M・N区出土木製品　ＳＰ－157・515・619・1104・1152・1327

付　図　目　次

付図１　第１遺構面全体図
付図２　第２遺構面上層全体図
付図３　第２遺構面下層全体図
付図４　第３遺構面全体図
付図５　第４遺構面全体図

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

昭和60年大阪府建築部（以下府建築部）より、ＪＲ学研都市線四条畷駅西側にある府営大東北新町住宅（以前は大東四条畷住宅）建替え工事の計画が出された。その内容は、既存の平屋住宅を順次中層の住宅に建替えていくもので、まず第一期工事分として、全敷地面積約42,000㎡のうち北側の約12,000㎡について実施されることになり、これを受けて大阪府教育委員会（以下府教育委員会）では建替え工事に先立ち、同年７月に試掘調査を実施し、その結果、府営住宅を中心に遺跡の存在することが確認された。試掘調査の結果に基づき、この遺跡を北新町遺跡と命名し新規の遺跡として登録する一方、府建築部に対しては、第一期工事はもちろんのこと、今後の建替え工事についても事前の発掘調査が必要であることを説いた。府建築部も調査の必要性を認識し、大東市教育委員会（以下市教育委員会）を含めた三者で具体的な調査方法について協議を重ねた結果、三者による北新町遺跡調査会（以下調査会）を新たに設立し、その調査部長に帝塚山短期大学田代克巳教授を迎え調査を委託して実施することで合意に達した。早速、第一期建替え工事に伴う調査に対応すべく、昭和60年11月25日に市教育委

第１図　大東市位置図

員会社会教育課内に事務局を置く調査会を設立し、府教育委員会文化財保護課技師辻本武が調査指導員として調査を担当することになった。

第Ⅰ期調査は、敷地北側の第一期工事分約12,000㎡のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分などを対象としてA～F区のトレンチを設定して、総面積約4,236㎡の発掘調査を実施した。調査は外業調査を昭和60年12月～翌61年5月まで実施し、引き続き内業整理作業を行い、同年10月にすべての作業を完了して、報告書の刊行をもって調査会を解散している。

第Ⅱ期調査は、第1期工事区の南側の第2期工事分約12,000㎡のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分に加え水路付け替え部分などを対象としてG～J区のトレンチを設定して、総面積約3,700㎡の発掘調査を実施した。第Ⅰ期調査と同様に、三者による調査会を昭和62年9月大東市立歴史民俗資料館に事務局を置いて設立し、調査部長を田代教授に依頼し、調査指導員は府文化財保護課技師松岡良憲が担当した。調査は外業調査を昭和62年9月から翌63年11月まで実施し、引き続き内業整理作業を行い、平成元年7月に終了し、報告書の完了をもって同年に調査会を解散している。

今回の第Ⅲ期調査は、第2期工事区の南側の第3期工事分約12,000㎡のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分、水路付け替え部分、道路拡幅部分などを対象としてK～Q区のトレンチを設定して、総面積約6649㎡について発掘調査を実施することになり、これに伴い平成2年9月4日に前回と同様に調査会を設立した。調査は平成2年11月27日に南側のM区から順次行い、平成5年3月3日にK区の調査が終了し、外業調査を完了した。その後引き続いて第4期工事に伴う第Ⅳ期調査が開始されるが内業調査はこれと並行して行い、平成9年3月31日をもってすべての作業を完了した。

第2節　これまでの成果

前節で記述したように、府営住宅敷地内ではこれまでに調査会による発掘調査が実施され、その成果が公表されている。(1) また、第Ⅱ期調査区と第Ⅲ調査区の間の敷地約2118㎡を対象として、都市計画道路四条畷駅前西線建設工事に伴い、平成2年5月から平成5年12月の間5次にわたり、大東市教育委員会によって実施されている。(2) ここではこれまでの各調査における成果の概略を簡単に述べておく。

第Ⅰ期調査

中世（鎌倉時代）、奈良時代、古墳時代中期に対応する遺構面が検出されている。古墳時代の遺構では自然河川とそれに伴う堰が検出された。古墳時代中期の遺構では、建物跡、

自然河川などが検出されているが、遺構の規模や密度は低かった。奈良時代では自然河川と水田が同一面で検出され、それに伴う護岸の杭や、河川から水田に水を取り入れるための堰が検出されている。中世では建物跡、柵列、井戸などが検出され、出土遺物から13世紀前半頃の時期が考えられる。主な出土遺物として、自然河川内から縄文時代中期土器、同後期土器が出土している。古墳時代の自然河川内から庄内式、布留式の土師器が出土している。注目すべきものとしては、奈良時代の自然河川内より、人面墨書土器２点が出土したことである。

第II期調査

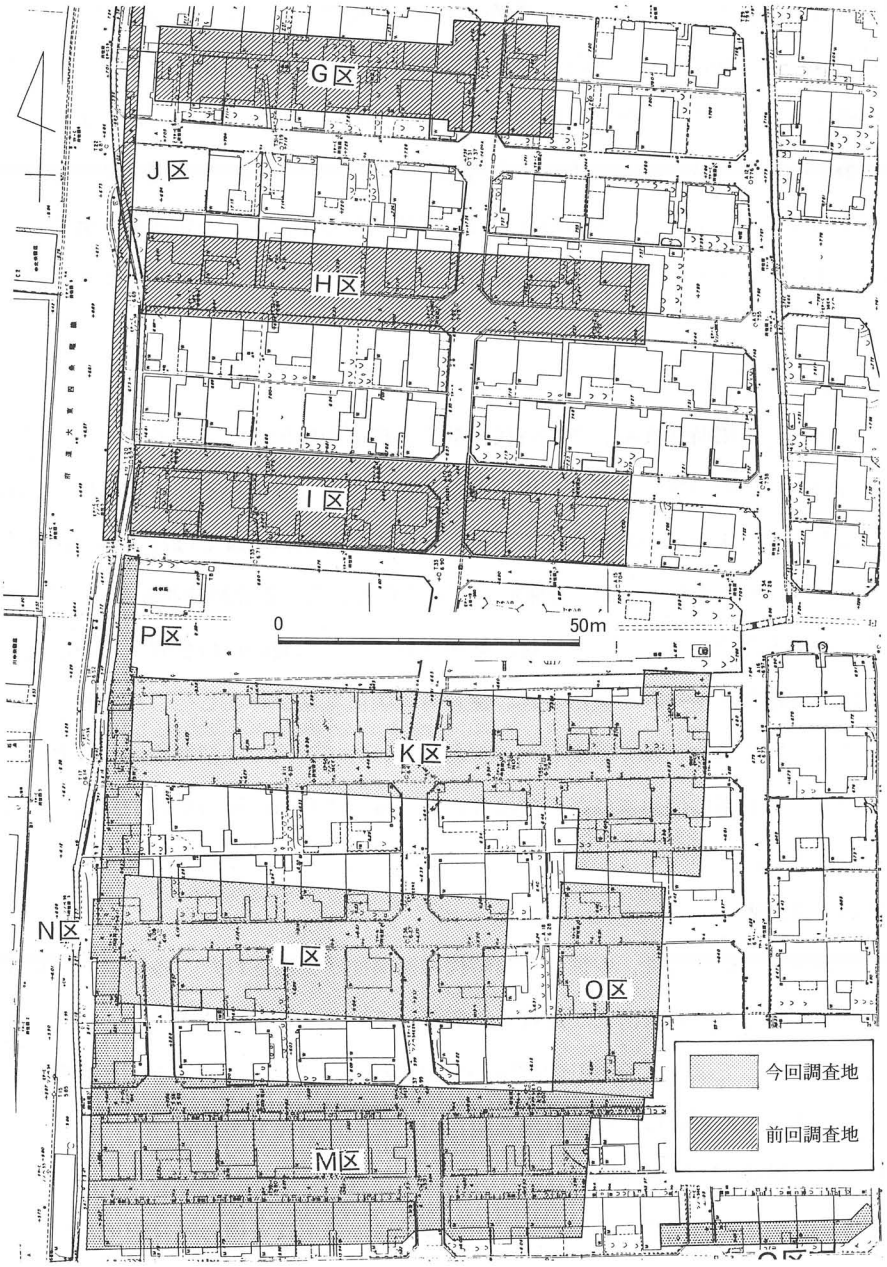
近世、中世、古墳時代前期、古墳時代後期の遺構面が検出されている。第Ｉ期調査に比べると各時代の遺構の密度は高く、出土遺物の量も多くなっている。古墳時代では調査区のほとんど全域で水田跡が検出されており、その所属時期は明確ではないが、前期のものと考えられている。また、中期の倉庫群と推定される大型の掘立柱建物が検出されており、同時代に属する井戸からは、井戸枠材に転用されていた木製の戸口装置一式が出土している。中世では建物跡や井戸が検出され、鎌倉時代頃に集落が存在したことが判明した。遺物としては中世の遺物が多く出土したのであるが、古墳時代では初期須恵器、韓式系土器や古墳の竪穴式石室に使用されたのではないかと推定される紅簾石片岩や絹雲母片岩などの石材が出土した。

都市計画道路調査

第II期調査と同様に近世、中世、古墳時代の遺構面が検出された。各遺構面の遺構の検出状況もよく似ており、遺構面が連続して広がっていることが確認された。また、注目される出土遺物としては、「美濃」の刻印入り須恵器や、ピットと推定される遺構から12世紀前半頃と考えられる和鏡（花枝双鳥文鏡）が出土したことである。

第３節　調査方法

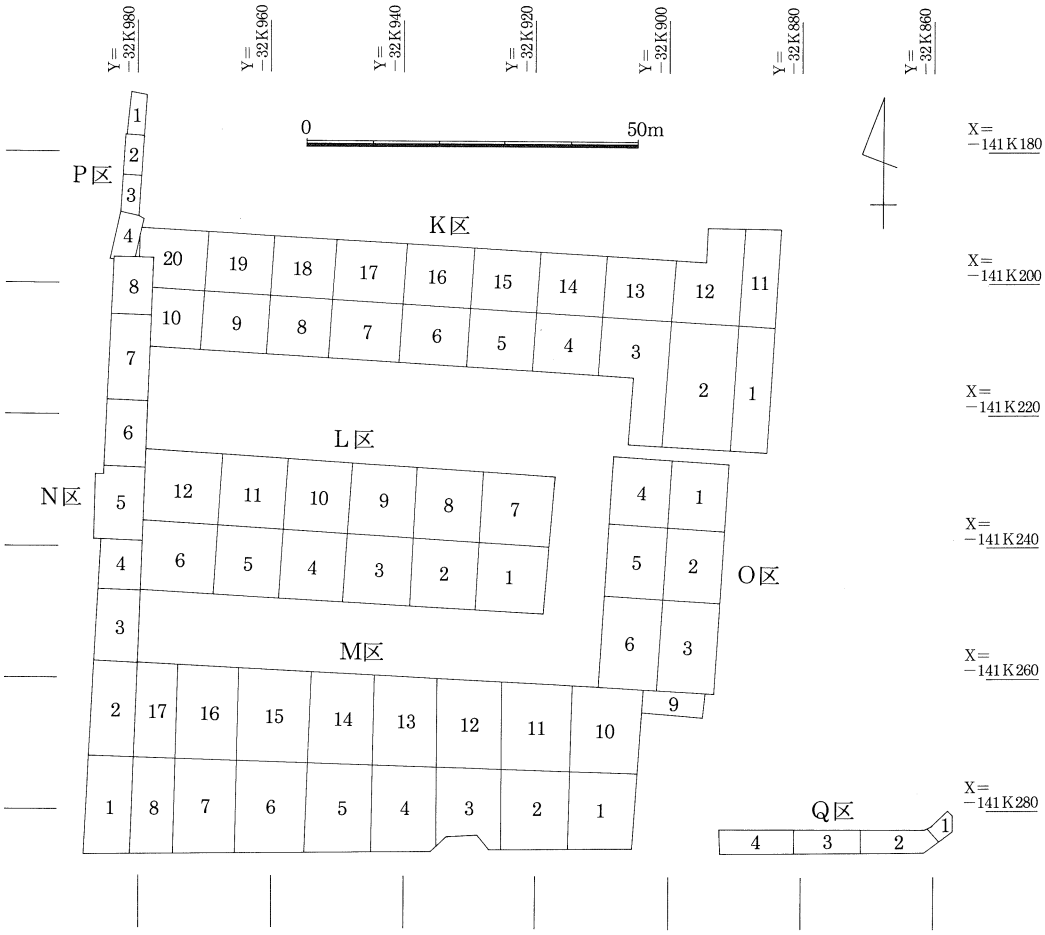
調査トレンチについてであるが、まず住棟部分については各種の埋設管工事が予想される外周部分を考慮して、約１ｍ余分に設定した。また前回と同様に、浄化槽や貯留槽などの付随施設が設置される場所についても調査対象となった他、今回の調査では、敷地西側の水路付替え部分、南側の道路拡幅部分についても調査対象となり、住棟部分とこれらを含めたトレンチを設定している。調査は基本的に、単年度で住棟１棟分とその付随施設部分を調査するものとした。各トレンチ名は第２図に示すとおりこれまでの調査のＡ～Ｊ区にに続くＫ～Ｑ区を大割りの名称として使用した。



第２図　調査区位置図

掘削方法は、これまでの調査結果に基づきＧＬ－約0.5mまでの盛土・旧耕作土部分をバックホウによる機械掘削を行い、ＧＬ－約２～2.2mの地山面まで人力掘削を行なった。

記録作業は、従来の実測作業とクレーンによる空中写真測量との併用で図化を行い、作業時間の短縮化を図った。今回対象となった府営住宅の敷地は、ほぼ国土座標のメッシュ



第３図　調査区区割り図

に合致しており、測量などの基準については、国土座標第Ⅳ系をそのまま使用した。区割りについては第３図に示す通り、各トレンチを約10m単位で区切る新たなものを設定してアラビア数字を付し、これに大割りの調査区名のアルファベットを冠して表示し（例　：Ｋ－１区、Ｌ－３区など）、遺物の取り上げ、本文中の記述もこれに従っている。

註

(1)『大東市北新町遺跡第１次発掘調査概要報告書』1986大東市北新町遺跡調査会
　『北新町遺跡第２次発掘調査概要報告書』1991大東市北新町遺跡調査会

(2)『北新町遺跡発掘調査報告書』1994大東市教育委員会

第2章　位置と環境

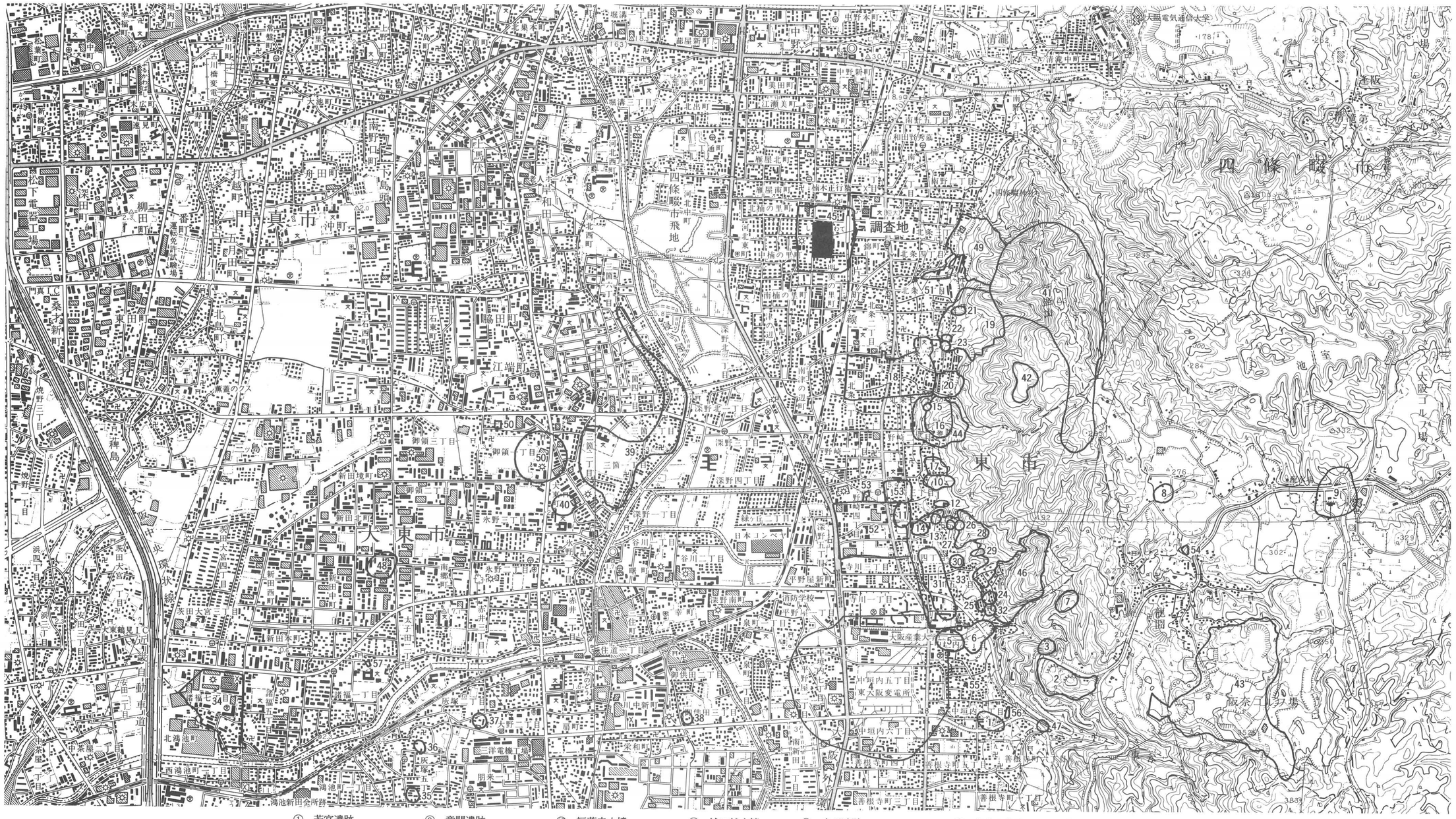
第1節　地理的環境

北新町遺跡の所在する大東市は大阪府の中部にあり、河内平野のほぼ中央部に位置している。市域の周囲は東南端の1部で奈良県生駒市と接するほか、東から北にかけては四條畷市と寝屋川市、西北は門真市、西は大阪市、南は東大阪市に接している。市域の面積は約18,058㎢で、人口約13万人（1997年現在）を数える。当地域は旧国名で河内国にあたり、その北部に位置することから枚方、交野、寝屋川、門真、守口、四條畷の各市を合わせて北河内と呼称されることが多い。

市域の地形を概観すると、山地、丘陵地、平地の主な3地形に分類され、山地、丘陵地で市域のほぼ東半分を占めている。山地は生駒山地が南北に走っている。生駒山地は南から信貴山、生駒山と高度を上げるが、山頂から北に向かって一旦高度を下げ、大東市竜間付近から再び高度を上げて、市域の東にある飯盛山に続いている。飯盛山も山頂の標高314mをピークとして、清滝峠に向かって高度を下げており、北西の枚方丘陵へと続いている。山塊の切れる竜間、清滝は古来から河内と大和を結ぶ重要な山越えのルートであり、竜間越え、清滝越えなどと呼ばれて来た。現在も阪奈道路、国道163号線がほぼ旧道に沿って走り、大阪と奈良を結ぶ主要幹線道になっている。山地から西側に向かって張り出した尾根は急激に高度を下げて丘陵地に続いており、丘陵地は山地と平地の間にあり、緩やかな傾斜で平地へと続いている。山地、丘陵地には一部大阪層群がみられるが、大部分が領家花崗岩類で構成されている。市域の西半分を占める平地は沖積地で、山裾には、山地より流れだす中小河川にっよって小規模な扇状地が形成されており、それから西はほとんど高度を変えることなく平坦で、かつては低湿地であったところであり、表土の下には粘土、シルト、砂などの水性堆積の起因による層が堆積している。平地のほぼ中央部である住道で、北から流れてくる寝屋川と南から流れてくる恩智川が合流し西に向かって流れている。これが現在の大東市の地形であるが、ここに至るまでは太古より自然的、人為的影響を受けて地形を変遷させてきたのであり、遺跡の立地と分布はその時代の地形の変遷に深く関係してるものと考えられる。

第2節　歴史的環境

市域の遺跡について述べるとき、地形の変遷が深く係わっていることは前節で述べた通



① 若宮遺跡
② 国見高地性遺跡
③ 七ッ廻り古墳
④ 中垣内遺跡
⑤ 元粉遺跡
⑥ 鍋田川遺跡
⑦ 太鼓山遺跡
⑧ 竜間ハンサカ遺跡
⑨ 竜間遺跡
⑩ 福蓮寺遺跡
⑪ メノコ遺跡
⑫ 峯垣内遺跡
⑬ 市寺川配水場古墳
⑭ 瓦堂遺跡
⑮ ヤタ山古墳
⑯ 野崎遺跡
⑰ 福蓮寺古墳
⑱ 北条西遺跡
⑲ 宮谷古墳群
⑳ 大将軍古墳
㉑ 北条古墳
㉒ 北条南古墳
㉓ 北条遺跡
㉔ 城の越上の段古墳
㉕ 城の越古墳
㉖ 堂山上古墳
㉗ 堂山下古墳
㉘ 堂山古墳群
㉙ 六地蔵古墳
㉚ 十林寺古墳
㉛ 寺川古墳群
㉜ 大谷神社古墳
㉝ 寺川遺跡
㉞ 西諸福遺跡
㉟ 灰塚古墳
㊱ 灰塚堂田遺跡
㊲ 灰塚水道局浄水場遺跡
㊳ 御供田遺跡
㊴ 三箇遺跡
㊵ 氷野遺跡
㊶ 飯盛山城跡
㊷ 北条東古墳群
㊸ 石切場跡
㊹ 野崎城跡
㊺ 北新町遺跡
㊻ 大谷古墳群
㊼ 大坂城残石
㊽ 新田遺跡
㊾ 墓谷古墳群
㊿ 御領遺跡
(51) 城ヶ谷遺跡
(52) 寺川浜遺跡
(53) 野崎条里遺跡
(54) 竜間マロウ遺跡
(55) 中垣内東遺跡
(56) 若宮東遺跡
(57) 諸福辻ヶ堂遺跡

第４図　市内遺跡分布図

りであるが、それは大阪平野の変遷、歴史そのものを指している。大阪平野の歴史については梶山彦太郎、市原実両氏の研究によって明らかにされつつある。ここでは大阪平野の変遷を辿りつつ、市域の遺跡について時代を追って説明していくことにする。

旧石器時代

今から約２万年前はウルム氷期の最盛期で、両極での氷河の発達により地球的規模で海水面が約150m低下し、海岸線の後退が起こっていた。当時の大阪の海岸線は現在のそれよりもずっと沖にあったと考えられており、大阪湾はもちろんのこと瀬戸内海も陸地化しており、現在の大阪平野よりも広い平野が広がっていたことが推定され、大阪湾を含むこの平野は「古大阪平野」と呼ばれている。約２万年前といえば後期旧石器時代の終り頃に相当するが、市域では北条遺跡、宮谷古墳群で後期に属すると考えられる有舌尖頭器が出土しているのみであり、今のところこの時代の生活面は検出されていない。

縄文時代

約１万年前にかけて、地球規模での気候の温暖化が進み、海水面の上昇が起こった。それでも現在の海水面より約20mは低かったと推定されており、海岸線はまだ沖にあったものと考えられている。南北に伸びる今の上町台地の両側に広がっていたこの陸地は、「古河内平野」と呼ばれている。この時代は考古学的には縄文時代早期に相当するが、市域では鍋田川遺跡で早期末の土器が出土しているのみである。その後も温暖化は進み、約6000年前の縄文時代中期頃には最も海水面が上昇し、古河内平野は上町台地を除き海域となり、「河内湾」と呼ばれる内湾が形成されるに至った。いわゆる縄文海進とと呼ばれる現象で、市域のほとんどは海水域となり、飯盛山西麓まで海岸線が迫り山地との間にわずかに陸地を残すのみであったと考えられている。それ以前の遺跡は水没することになりその後の堆積作用により沖積層の下に埋没することになる。結果として旧石器時代も含めた早期から前期の遺跡の発見は、水没を免れた丘陵地以外は期待できない状況となっており、市域では今のところ上方からの流れ込みによる土器の出土はあるが、遺構は検出されていない。その後晩期頃までは湾の状態が続き、前者は「河内湾Ｉ」、後者は「河内湾II」と呼ばれている。中期から晩期まででは本遺跡で奈良時代の自然河川から中期～後期、晩期末の土器が出土しており、丘陵上に立地する城ケ谷遺跡では晩期末の船橋式土器が、鍋田川遺跡でも晩期の土器が出土しているが、いづれも遺構に伴うものではなく上方からの流れこみによるものである。中垣内遺跡では、土坑と推定される浅い窪地状の遺構から中期の北白川Ｃ式土器が出土しており、海岸線に近い水際に集落の存在が推定される。

弥生時代

河内湾はそこへ流れこむ河川などの堆積作用により、次第に外海と隔てられるようになり、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃には、湾から「河内潟」となる。その後外海とは完全に隔てられ、弥生時代後期までには「河内湖」と呼ばれる淡水湖が形成される。この時代の遺跡としては、河内潟の水際に立地していたと考えられる中垣内遺跡や北条西遺跡、野崎条里遺跡などがある。特に中垣内遺跡では現在の関西電力東大阪変電所内で集落跡が検出されており、東大阪市鬼虎川遺跡や四條畷市雁屋遺跡と並び前期の拠点的集落であったと考えられている。中期では、河内潟の中の低湿地で一時的に特異な立地を見せる西諸福遺跡や、前述の中垣内遺跡でも引き続き集落が営まれていたことが判明している。後期では丘陵部にも立地をするようになり、各遺跡から遺物が出土している。北条遺跡ではこの時期の竪穴住居が検出されており、手焙り形土器が出土している。

古墳時代

河内湖形成以後も堆積作用により湖の規模は縮小するが、以前として市域の大半が水域に覆われていた。飯盛山から派生する丘陵上には古墳が造営され、その西麓の河内湖縁辺部では集落が営まれたようである。古墳に関しては、調査例が少ないため不明な点が多いが、市域では今のところ前期に属するものは確認されていない。中期に入ると三角板皮綴短甲、衝角付冑、鉄刀、鉄鏃などをはじめとする多量の鉄製武器・武具類が出土した堂山１号墳が造営される。この古墳は標高約100mの尾根上にあり、径25mを測る円墳で、出土遺物の内容などから首長墓的性格の強い古墳であると考えられている。このほかに、円筒埴輪が採集された峯垣内古墳、また瓦堂寺院跡では堂山１号墳より遡る５世紀前半の円筒埴輪が採集されている。後期古墳では北条１～３号墳、多量の形象埴輪が出土し、横穴式石室を主体部にもつ宮谷１号墳、横穴式石室基底部が残存し、鉄刀、玉類などの副葬品が出土した城ケ谷１・２号墳、円筒埴輪が10数本出土したと伝えられる六地蔵古墳のほか、群集墳では堂山古墳群、墓谷古墳群、宮谷古墳群、北条古墳群、寺川古墳群、大谷古墳群などが知られており、後期に入ると数多くの古墳が造営されたと推定されている。集落に関しては、祭祀色の強い前期の中垣内遺跡、鍋田川遺跡があり、本遺跡では中期の倉庫群と推定される掘立柱建物を検出している。また、鍋田川遺跡、北条遺跡、宮谷古墳群、メノコ遺跡、北新町遺跡、堂山下遺跡等で韓式土器、陶質土器、初期須恵器などが出土しており、渡来系の人々との関連が考えられる。

奈良時代～平安時代

この時代は各遺跡より遺物の出土をみるが、具体的な遺構の検出例は少なく　不明な点が多い。北新町遺跡では奈良時代の自然河川が検出され、そこから人面墨書土器が出土している。

中世

中世に入るとこの地域は、古代河内湖がそこへ流れ込む河川の堆積作用により徐々にその範囲を狭められ、勿入渕（広見池）と呼ばれる湖に姿を変え、そして、池の東縁には東高野街道が生駒山麓を南北に走るという水陸両交通の出会う重要な場所であった。この時代の遺跡は東高野街道沿いから湖までの間の低地上に立地していると考えられる。その代表的なものが本遺跡で、鎌倉時代の集落跡が広い範囲で検出されており、この時代の集落の景観を復元するのに大変重要な遺跡となっている。また最近、北新町遺跡の西方に位置し、これまで遺物の採集はあたっものの、湖の中の低湿地と考えられていた御領遺跡で、北新町遺跡より時期の下る鎌倉時代終わりから室町時代の集落跡が発見されている。この頃になると勿入渕も、河川の堆積作用などにより水深が浅くなり池の陸地化が進行し、このようにして形成された微高地に新たに集落が営まれたのであろう。他に同様な立地を示す遺跡には灰塚遺跡、灰塚堂田遺跡、西諸福遺跡などがある。また、この時代は各所で開墾、開発が行なわれたようで、丘陵部に立地する城ケ谷遺跡でも開発の跡を残す段状遺構と杭列が検出されている。東高野街道以東の丘陵地には、遺構は検出していないものの、中世の遺物が各所に散布しており、開発が盛んに行なわれたことを物語っている。時代が少し下降して中世後半には、眼下に東高野街道と池を見下ろすという絶好の交通の要衝にあり、戦国時代に一時的に畿内支配に成功した三好長慶の居城となった飯盛山城や宣教師ルイス・フロイス記述の「日本史」に登場する、キリシタン大名三箇サンチョの居城であった三箇城が存在した。三箇城は池に形成された島に存在したと伝えられており、このことから、当時の池はさらに堆積作用が進行し、微高地から発達した島が池のあちこちに点在していた光景が浮ぶ。残念ながら、今のところ三箇城に関連づけられる遺構・遺物は検出されていない。

近世

近世になると、池は深野池とその西方にある新開池となり、二つの池が形成され、池同士は、一本の川でつながっていた様子が古地図に描かれている。近世の遺跡としては、徳川家により元和六年（1620）から始まる、大坂城再築に伴う石垣用石の採石場が、生駒山中の竜間に存在する。石切場跡遺跡や国見高地性遺跡がそれで、刻印石、矢穴石等が今も

残っている。また、石の運搬経路であった、麓の中垣内１丁目には大坂城残石と呼ばれる巨石が存在するが、これにも石垣工事を請け負った諸藩の刻印がなされている。この場所は竜間山中で切り出され、谷筋を利用して麓まで運ばれた石を、ここから船に引かして、深野池、新開池を通り大坂城に運んだ中継地と考えられている。近世も中頃に入ると、宝永元年（1704）に大和川の付替え工事が行なわれ、これ以後古代河内湖の名残である深野池、新開池等の池沼は新田開発により陸地化が進み、ほぼ現在の大東市に近い姿になる。

参考文献

『大東市史』1973　大東市教育委員会
『大阪府史・第一巻古代編Ｉ』1978　大阪府
梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』1986　青木書店
『中垣内遺跡発掘調査報告書』1990　大東市教育委員会
『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』1991　大東市教育委員会
『中垣内遺跡発掘調査報告書』1997　大東市教育委員会
黒田淳「北条遺跡」「鍋田川遺跡」「宮谷古墳群」『韓式系土器研究II』1989　韓式系土器研究会
中逵健一「大東市メノコ遺跡出土の韓式系土器」『韓式系土器研究Ⅳ』1993　韓式系土器研究会
『鍋田川遺跡発掘調査概要・Ｉ』1992　大阪府教育委員会
『城ケ谷遺跡発掘調査報告書』1990　大東市教育委員会
『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987　大東市教育委員会
『堂山古墳群発掘調査概要』1973　大阪府教育委員会
『堂山古墳群発掘調査概要』1994　大阪府教育委員会
『大東市北新町遺跡第１次発掘調査概要報告書』1986　大東市北新町遺跡調査会
『北新町遺跡第２次発掘調査概要報告書』1991　大東市北新町遺跡調査会
『北新町遺跡発掘調査報告書』1994　大東市教育委員会
『平成７年度発掘調査速報展（御領遺跡）』1996　大東市立歴史民俗資料館
『近世大東の新田開発』1990　大東市立歴史民俗資料館
和田萃「河内の古道」『環境文化』第51号1981　財団法人環境文化研究所
日下雅義「第Ⅲ章　第１節　第２項　歴史・地理的景観」『河内平野遺跡群の動態Ｉ』1987　財団法人大阪文化財センター

第３章　基本層序

河内平野の沖積層の上に立地している本遺跡の土層は、太古から幾層もの層が複雑に重なり合い堆積して現在に至っている。調査で確認された土層をその層位、土色、土質などで分類すると数百にも及ぶので、全調査区の土層断面を図示することは煩雑になり、かえって層序と遺構面の関係を理解しにくくすることになる。したがって、ここではこれらの層を所属時期ごとにまとめた基本層序を設定して各遺構面との関係を示し、各調査区における基本層序を柱状図（第５図）で表すことにする。なお、この基本層序は今回の調査で独自に設定したものであり、府営住宅敷地内で実施されているこれまでの調査（第Ｉ期、第II期、市教委都計道路）の層序と関連していないことを断っておく。

基本層序Ｉ層

建替え前の平屋の府営住宅建設時の盛土とそれ以前の地表面であった旧耕作土より成る。盛土表面の標高はそれぞれＫ区でＴ．Ｐ．＋5.2～5.4m、Ｌ区でＴ．Ｐ．＋4.7～4.9m、Ｍ区でＴ．Ｐ．＋4.2～4.7mを測る。旧耕作土は黒灰色を呈し、後世の削平により消失している場所もあるが、層厚約10～30㎝を測り、第II期調査区でほぼ全体に認められる層で、府営住宅が建つ以前は、水田や畑として利用されていたことがわかる。含まれる遺物などから、近世～近代にかけて形成された層である。

基本層序II層

旧耕作土の下に堆積する灰白色～青灰色砂混じり粘質土で水田の床土となっていた層とその下に堆積する黄灰色～黄橙色粘質土から成る。南北方向、東西方向に走る無数の耕作痕（鋤溝）が観察され、分層をしづらいものとなっている。間層として薄いシルトや砂層の堆積が認められるが、一時的なものであり、完全に冠水して長期間池や沼地の状態であったわけではなく安定した耕作地として利用されていたようである。第１遺構面のベースとなっている層で、含まれる遺物から中世末～近世に形成された層であると考えている。

基本層序III層

調査で認識した層の中で最も遺物を多く含む層であるが、その堆積状況は調査区の西側で明確に認識できるのに比べると、東側ではほとんど認められない。この層の上面で中世の遺構面、下層で奈良時代末～平安時代の遺構面が存在したが、調査では明確に時期別に遺構面を分けて検出することができなかった。含まれる遺物から奈良時代～鎌倉時代に形

成された層であると考えている。

基本層序Ⅳ層

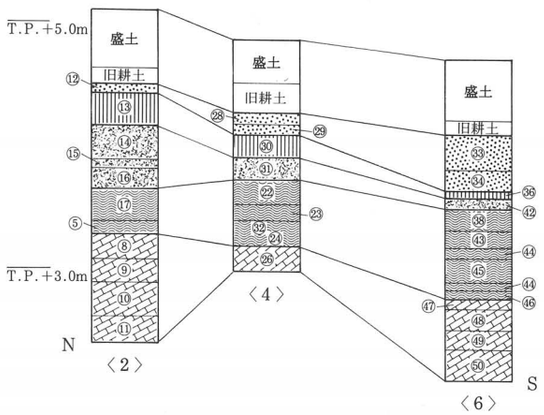
第3遺構面の水田面のベースである褐灰色粘土層が主体となっており、場所によっては上面に砂が薄く堆積している所もある。調査区の南へ行くに従い薄くなる傾向がある。遺物は小片が少量含まれる程度であるため、所属時期を今一つ明確にし得ないが、水田が古墳時代と考えられているので、弥生時代末～古墳時代にかけて形成されたものと考えている。

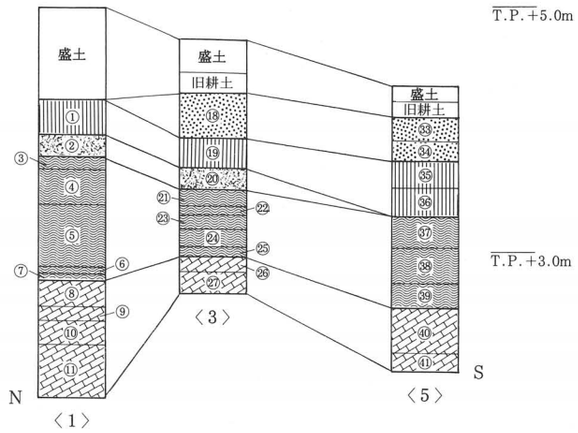
基本層序Ⅴ層

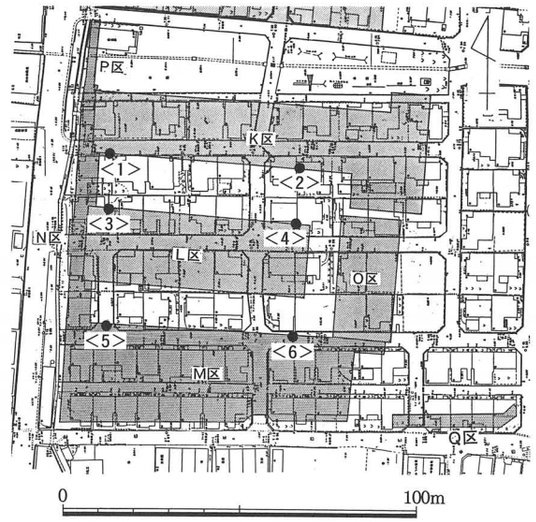
Ⅳ層直下の堆積層で調査地区によって層厚は異なるが、調査区全域で認められる砂、シルトを主体とする層である。遺物はほとんど含まれていないので所属時期を明確にし得ないが、弥生時代前期～末にかけて形成されたものと推定している。

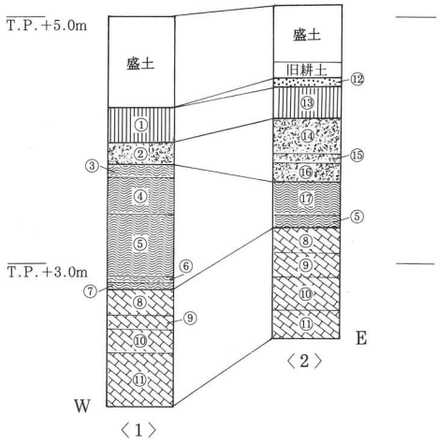
基本層序Ⅵ層

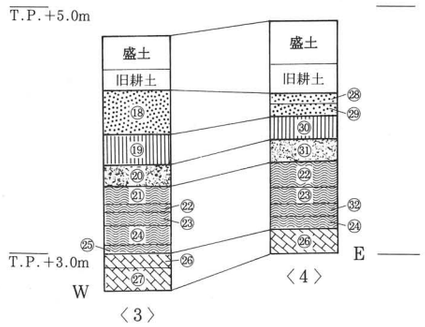
最終遺構面である第4遺構面のベースとなる黒色粘土層を含む下位の堆積層である。O区で実施した最終面からの土層確認トレンチでは、黒色粘土層から下位では砂、シルト、黒色粘土がほぼ水平に交互に堆積を繰り返している状況であった。従来からいわれているように河内潟、河内湖によって形成された堆積層と推定される。K区では下位の砂層から摩滅の著しい縄文土器が出土しているが、生活面の存在がほとんど期待できない層であり、今回の調査ではいわゆる考古学で言う“地山”と考えた。

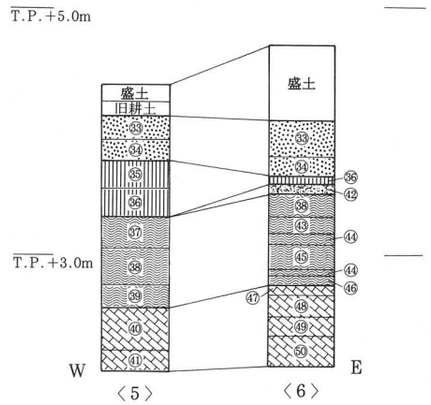












Ⅰ層　盛土、旧耕土

Ⅱ層　⑫　灰オリーブ色砂混じり土(7.5Y6/2)
⑱　灰オリーブ色土(5Y6/2)
㉘　灰白色砂質土(7.5Y7/2)
㉙　浅黄色土(2.5Y7/3)
㉝　灰白色土(10Y7/2)砂粒を多く含む
㉞　灰白色土(7.5Y7/2)

Ⅲ層　①　暗灰黄色土(2.5GY5/2)
⑬　にぶい黄色粗砂～砂質土(2.5Y6/3)
⑲　灰色シルト(5Y5/1)
㉚　にぶい黄橙色土(10YR6/4)
㉟　灰オリーブ色砂混じりシルト(7.5Y6/2)
㊱　褐灰色砂質土(10YR6/1)

Ⅳ層　②　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
⑭　暗灰色砂混じり土(7.5Y6/2)
にぶい黄橙色シルト混じり粘土(10YR6/4)
⑮　灰黄色砂質土(2.5Y6/2)
⑯　緑灰色シルト混じり粘質土(7.5GY6/1)
⑳　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/6)
㉛　褐灰色粘質土(7.5YR4/2)
㊷　灰褐色砂混じり粘質土(N5/)

Ⅴ層　③　褐色砂質土(10YR4/4)
④　灰白色粗砂(5Y8/2)
⑤　緑灰色微砂～中砂(5G6/1)
⑥　オリーブ灰色シルト混じり粘土
(2.5GY5/1)～緑灰色シルト混じり
粘質土(7.5GY6/1)
⑦　オリーブ灰色微砂(2.5GY6/1)
⑰　浅黄色砂層(2.5Y7/3)
㉑　暗灰黄色シルト混じり粘質土(2.5Y5/2)
㉒　褐灰色シルト混じり粘質土(10YR5/1)
㉓　オリーブ灰色シルト(5GY6/1)
㉔　緑灰色シルト(10GY6/1)
㉕　褐灰色シルト混じり粘土(10YR4/1)
㉜　灰白色砂層(2.5GY8/1)　緑灰色シルト
(7.5GY6/1)を含む
㊲　灰白色粗砂(2.5GY8/1)
㊳　灰色砂混じり粘質土(10Y4/1)
㊴　黒色砂混じり粘土(5Y2/1)
㊸　明褐色砂層(7.5YR5/6)
㊹　灰色シルト混じり粘土(10Y6/1)
㊺　緑灰色シルト混じり砂層(5G6/1)
㊻　緑灰色シルト(10GY6/1)

Ⅵ層　⑧　オリーブ灰色粘質シルト～粘土(5GY5/1)
黒色粘質シルト～粗砂(N2/1)
灰色粘土(10Y3/1)
⑨　オリーブ灰色細砂～中砂(2.5GY6/1)
灰白色粗砂(5Y8/2)が間層として含まれる
⑩　黒色シルト混じり粘質土(N2/)
黒色砂混じり粘土～粘質土(N2/)
⑪　緑灰色砂層(7.5GY6/1)
植物遺体、ラミナが認められる
㉖　青黒色粘土(5B1.7/1)
㉗　オリーブ灰色砂質土(5GY6/1)
㊵　緑灰色シルト(10GY5/1)
㊶　明オリーブ灰色砂層(2.5GY7/1)
㊼　灰色微砂混じりシルト(N5/)
㊽　オリーブ黒色シルト混じり粘質土(10Y3/1)
㊾　オリーブ灰色砂混じりシルト(2.5GY5/1)
㊿　オリーブ灰色砂層(5GY6/1)

凡例　Ⅰ層　Ⅱ層　Ⅲ層　Ⅳ層　Ⅴ層　Ⅵ層

第5図　土層断面柱状図

第４章　遺構

第１節　Ｋ区の遺構

Ｋ区は第Ⅲ期調査区の北側に位置し、調査前の地表面の標高はトレンチの東側でＴ．Ｐ．＋5.4m、西側でＴ．Ｐ．＋5.2mを測り、東から西への傾斜が認められた。

１．第１遺構面（付図１）

近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝や鋤溝などが検出され、水田や畑などの区画を兼ねた潅漑用の水路と考えられる。検出面は東側でＴ．Ｐ．＋4.5m、西側でＴ．Ｐ．＋4.2mを測る。

溝

ＳＤ－03

Ｋ－４・14区で検出された。南北方向に走り、北端、南端はトレンチ外に続く。幅1.2m、深さ0.2mを測り、埋土は基本層序Ｉ層の旧耕作土に類似する黒灰色土、灰オリーブ色砂混じり粘質土を主体としており、底部付近に細砂が堆積していたので、水が流れていたことがあったようである。遺物は少量であるが、主に近世の染付を中心とした陶磁器類が出土している。さらに南へ続いておりＬ・Ｍ区でも検出された。

ＳＤ－55（第６図）

Ｋ－８・18区で検出された。南北方向に走り、北端はトレンチ外に続き、南端はＬ区に続いている。18区で東西方向のＳＤ－90に合流する。幅1.3m、深さ0.2mを測るが、18区ではその幅を半分程度に縮小している。東側には杭の跡、石が残っていた。埋土は黒灰色土で、遺物は少量で、近世の陶磁器類の他、瓦器椀や土師器皿の小片が出土している。

ＳＤ－87

Ｋ－１・11区で検出された。南北方向に走り、北端、南端はトレンチ外に続く。幅1.7m、深さは0.1～0.3mを測る。埋土は暗灰黄色砂混じり粘質土、黄褐色砂混じり粘質土を主体としており、底面に細砂が堆積していた。遺物は少量で、近世の染付を中心に陶磁器類が出土している。

ＳＤ－88

Ｋ－１・２区で検出された。東西方向に走り、東端はＳＤ－87に合流し、西端はトレンチ外に続く。幅1.2m、深さは0.1～0.3mを測る。埋土は暗褐色砂混じり粘質土、灰黄褐

色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

ＳＤ－89

Ｋ－３・13区で検出された。南北方向に走り、南端はＳＤ－88に合流し、北端はトレンチ外に続いているが、途中で東西方向に走るＳＤ－91を分岐している。幅0.8m、深さは0.1mを測る。埋土は灰黄褐色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

ＳＤ－90

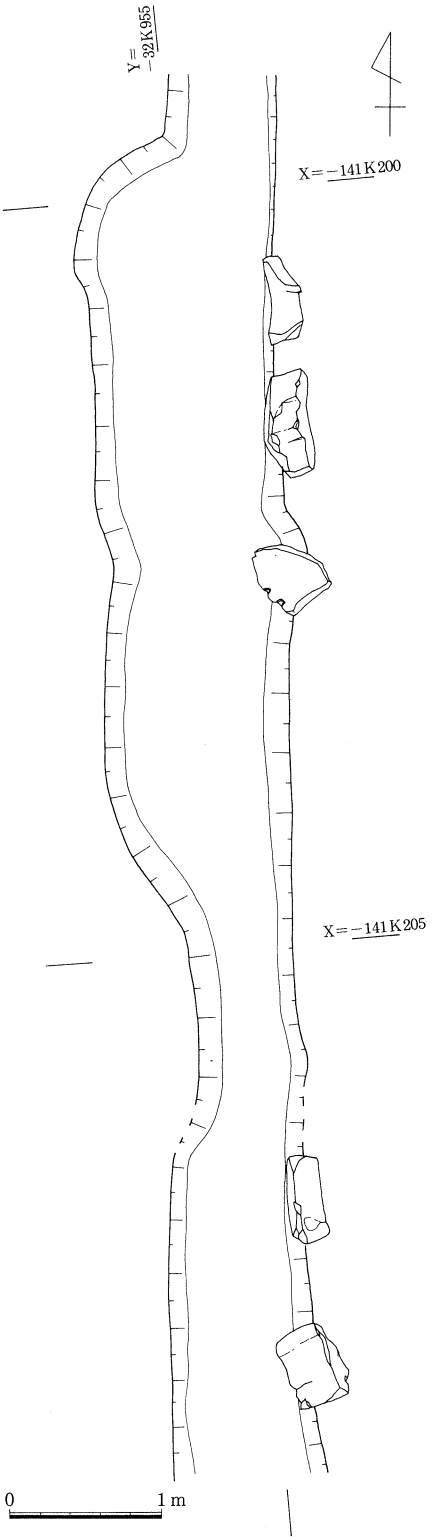
Ｋ－14～18区で検出された。東西方向に走り、東端はＳＤ－03に、西端はＳＤ－55にそれぞれ合流する。幅0.5m、深さは0.1mを測る。埋土は灰色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

ＳＤ－91

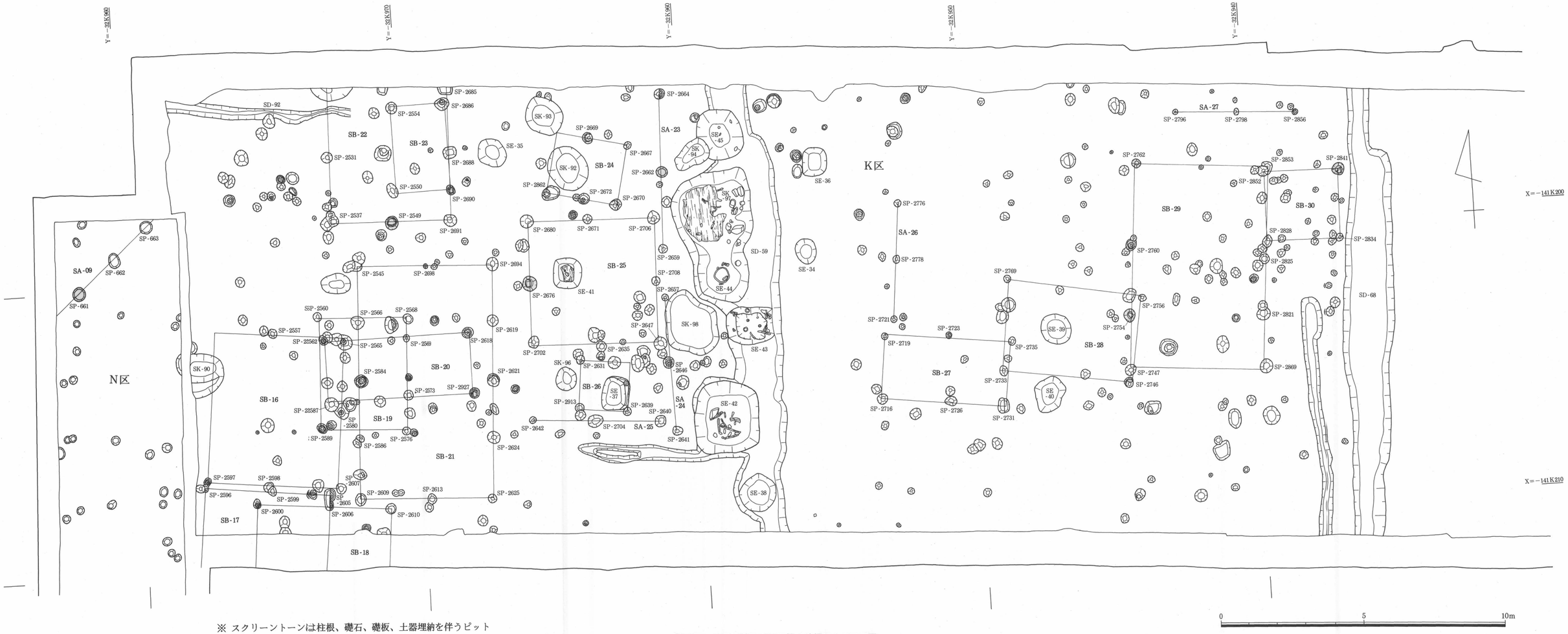
Ｋ－11～12区で検出された。東西方向に走り、東端はＳＤ－87に、西端はＳＤ－89にそれぞれ合流する。幅0.4m、深さは約0.1mを測る。埋土は暗灰色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

２．第２遺構面上層（付図２、第７図）

トレンチの西側半分で、中世の溝、井戸、土坑、ピットなどを検出しているが、トレンチの中央で検出した南北方向に走る溝ＳＤ－68から東側では遺構を検出しておらず、鋤溝が見られる程度であった。ピットは多数検出されており、



第６図　ＳＤ－55平面図



※ スクリーントーンは柱根、礎石、礎板、土器埋納を伴うピット

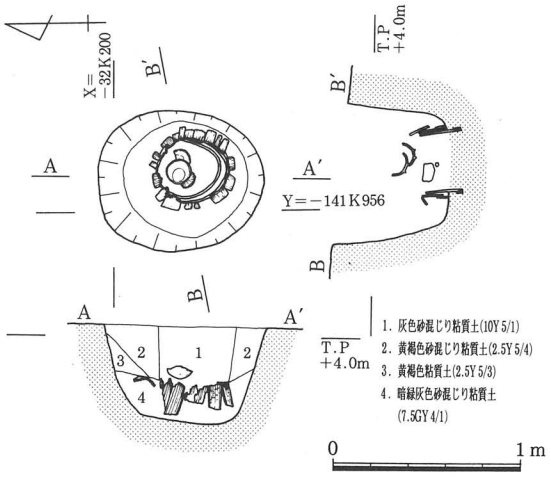
第７図　Ｋ区西側及びＮ区第２遺構面上層平面図

建物、柵が復元されている。検出面は東側でＴ．Ｐ．＋4.3m、西側でＴ．Ｐ．＋4.1mを測る。

井戸

ＳＥ－34（第８図）

Ｋ－18区で検出された。平面形は0.8×0.9mの楕円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。底には水溜用の曲物が２段で置かれており、小型の縦板が曲物を取り囲むようにしてあった。埋土の状況は層位の乱れはないので、当時のそのままの状況で埋没しているものと考えられる。曲物内の上部でほぼ完形の瓦器椀が２個出土しており、井戸廃絶時に人為的に埋納されたものと考えられる。遺物は他に土師器皿の小片が出土している。時期は12世紀末～13世紀初め頃と考えられる。



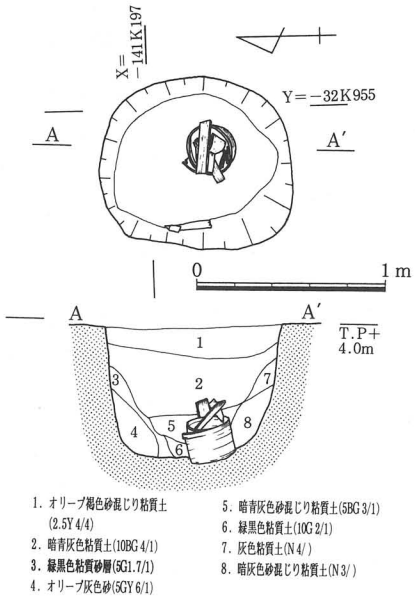
第８図　ＳＥ－34平面、断面、土層断面図

ＳＥ－35（土坑）

Ｋ－19区で検出された。平面形は１×1.2mの不整円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。底から、須恵器の壺底部が出土している。曲物やその他の板材などは出土していないので、井戸ではなく土坑と考えた方が良さそうである。遺物はその他土師器皿、土師器脚付皿、瓦器椀片などが出土している。時期は12世紀末～13世紀初め頃と考えられる。

ＳＥ－36（第９図）

Ｋ－18区で検出された。平面形は0.9×１mの不整円形を呈しており、深さは0.7mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は擂鉢状を呈する。底面の中央やや西側寄りに、北側に傾いた状態で水溜用の曲物が１段置かれていた。本来の位置ではなく、井戸廃絶時の埋め戻し時に移動したものであろう。曲物内には灰色粘

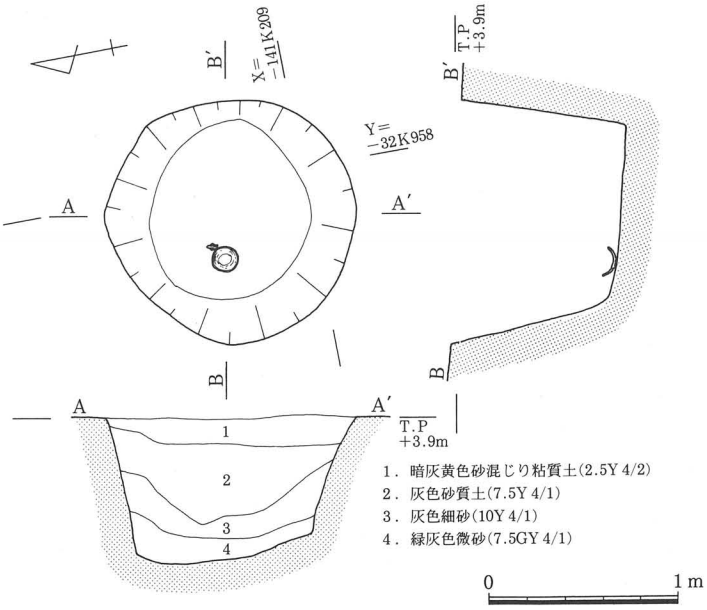


第９図　ＳＥ－36平面、断面、土層断面図

土が堆積しており、曲物上部からは板材が重なり合った状態で出土している。これも廃絶時のものであろう。遺物は小片ばかりで図化し得るものがなかったが、瓦器椀、土師器皿、須恵器甕などが出土している。時期は明確にし難いが、12世紀末～13世紀初め頃と考えられる。

ＳＥ－38（土坑）（第10図）

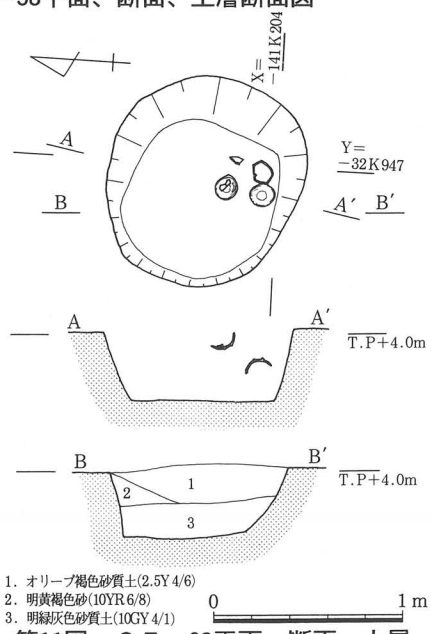
Ｋ－８区で検出された。平面形は１×1.3ｍの不整円形を呈しており、深さは0.8ｍを測る。ＳＤ－59と重複するが、前後関係は明確ではない。断面形は逆台形状で底面はほぼ平坦である。底には完形の瓦器椀が１個正立した状態で置かれてあった。井戸に関連するようなものは認められなかったので、土坑と考えた方が良さそうであるが、井戸の抜き取り跡の可能性も否定できない。遺物は瓦器椀の他に、土師器皿や、須恵器、白磁などの小片が出土している。時期は12世紀後半頃と考えられる。



第10図　ＳＥ－38平面、断面、土層断面図

ＳＥ－39（土坑）（第11図）

Ｋ－７区で検出された。平面形は１×1.1ｍの不整円形を呈しており、深さは0.4ｍを測る。断面形は逆台形状で底面は平坦である。井戸に関連するようなものは認められなかったので、土坑と考えた方が良さそうである。遺物は土師器皿の小片の他、瓦器椀が完形品も含め５個体まとまって出土しており、12世紀末～13世紀前半頃の時期を

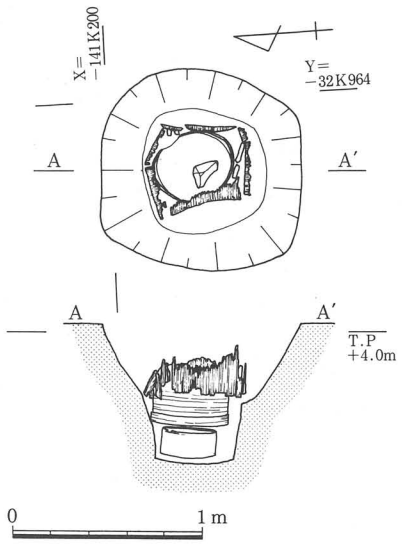


第11図　ＳＥ－39平面、断面、土層断面図

示している。

ＳＥ－41（第12図）

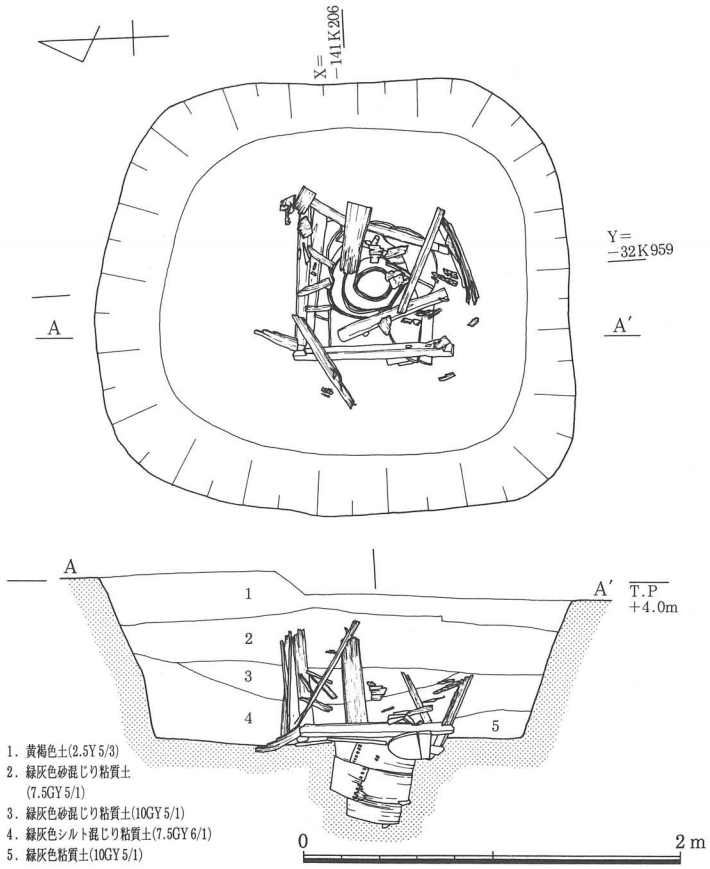
Ｋ－19区で検出された。平面形は一辺約1.1ｍの隅丸方形を呈しており、深さは0.8ｍを測る。壁は検出面から約0.5ｍまで斜めに掘り込まれており、後は底面まで垂直に下がる。水溜用として大小２段の曲物が置かれており、井戸側として縦板が方形に曲物を囲んでいた。縦板は上部が欠落していたが、実際は検出面まで存在したのであろう。埋土は掘り形が黄灰色粘質土で、曲物内にはオリーブ黒色粘土が堆積しており、上部に割り石が１個置かれてあった。遺物は土師器皿片、黒色土器Ｂ類、砥石などが出土しているが、図化し得たものはない。時期は明確に断定できないが、黒色土器Ｂ類を混入品とするならば、13世紀前半頃と考えられる。



第12図　ＳＥ－41平面、立面図

ＳＥ－42（第13図）

Ｋ－８区で検出された。平面形は2.3×2.5ｍの隅丸方形を呈しており、深さは1.2ｍを測る。ＳＤ－59と重複するが、調査時の遺構検出段階ではＳＤ－59を切っていることが確認できた。断面形は逆台形で、底部はほぼ平坦であるが、そこからさらに掘り下げた状態で、水溜用として曲物が３段置

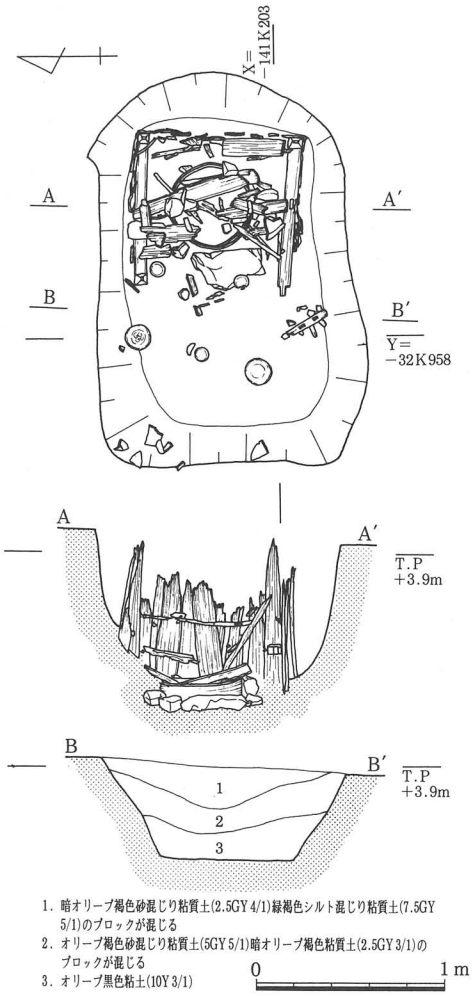


第13図　ＳＥ－42平面、立面、土層断面図

かれてあった。井戸側はすでに崩壊していたが、四隅に隅柱を据え、枘を切って横桟を組み、側板には縦板を使用していたと考えられる。曲物と井戸側の間には、曲物底板、折敷を敷板として使用していた。遺物は瓦器椀、土師器皿などがまとまって出土しており、13世紀前半頃の時期を示している。

ＳＥ－43（第14図）

Ｋ－８区のＳＥ－42の北側で検出された。平面形は1.4×2.1mの東西軸が長い隅丸長方形を呈しており、深さは約１mを測る。ＳＤ－59と重複しているが前後関係は明確ではなく、調査時の検出面はＳＤ－59の底面からであった。底には水溜用の曲物が１段置かれ、周りには割り石が散在していたが、割り石は曲物を固定させるためと土圧から保護するためのものと考えられる。四隅に隅柱を立て、枘を切り横桟を組み、側板として縦板を使用する方形の井戸側が作られていた。埋土は主に３層に分かれているが、緑灰色シルト混じり粘質土や暗オリーブ褐色粘質土のブロックが混ざっているので、廃絶時に埋め戻されたものと考えられる。遺物は瓦器椀、土師器皿、瓦器釜、瓦器鍋などが出土しており、12世紀末～13世紀前半頃の時期を示している。



第14図　ＳＥ－43平面、立面、土層断面図

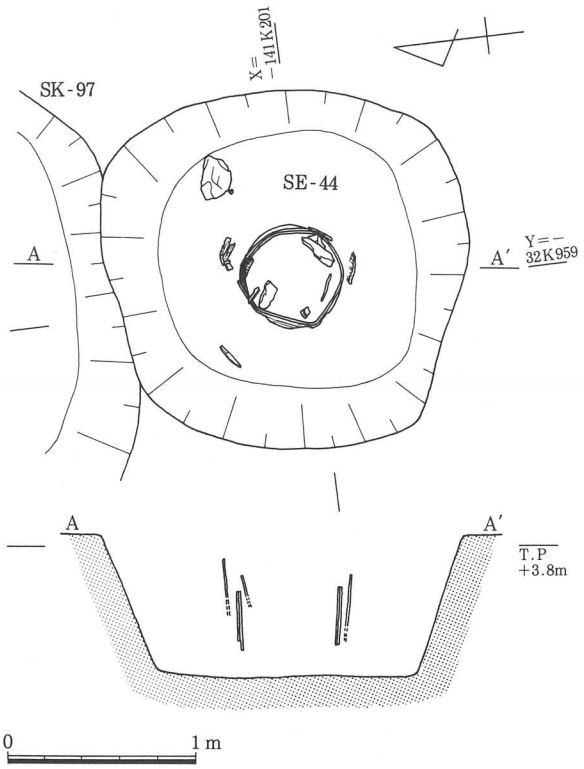
ＳＥ－44（第15図）

Ｋ－18区のＳＫ－97の南側に接して検出された。平面形は1.5×1.9mのほぼ隅丸方形を呈しており、深さは約0.8mを測る。ＳＫ－97と一部重複するが、前後関係は明らかではない。また、ＳＤ－59とも重複するが前後関係は明らかではなく、調査時の検出面はＳＤ－59の底面であった。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。掘り形のほぼ中央の底に水溜用の曲物が２段置かれており、北東隅に花崗岩の割り石が１個残存していた。埋土は人為的に埋め戻された様相を呈し、井戸廃絶時のものと考えられる。遺物は

瓦器椀、土師器皿などが出土しており、13世紀前半頃の時期を示している。

ＳＥ－45（第16図）

Ｋ－18区で検出された。すぐ東側にＳＤ－59、南側にＳＫ－94・97があり遺構が密集している場所である。平面形は1.6×1.7mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。埋土は３層に分かれ、上層から灰黄色砂質土、灰色砂質土の混じる緑灰色砂混じり粘質土、緑灰色砂混じり粘質土がほぼ水平に堆積している。内部には割り石が１個残っていただけで、素掘りの状態であった。遺物は瓦器椀、土師器皿、土師器高台付皿、白磁椀片などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

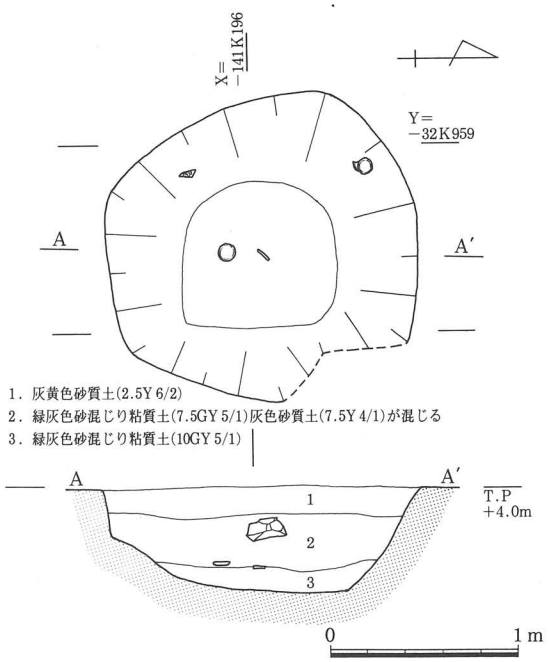


第15図　ＳＥ－44平面、断面図

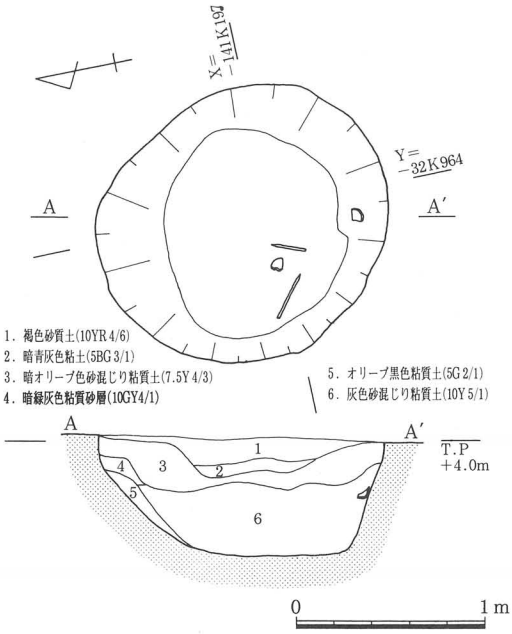
土坑

ＳＫ－92（第17図）

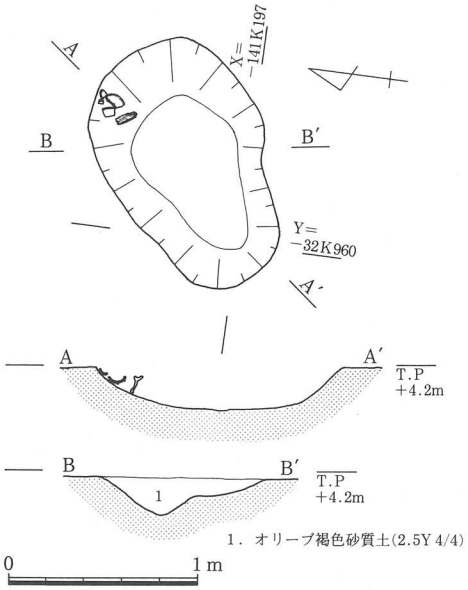
Ｋ－19区で検出された。平面形は1.4×1.6mのほぼ円形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。埋土は検出面から約1/2まで暗オリーブ灰色砂混じり粘質土、暗青灰色粘土、褐色砂質土が主として堆積し、以下底面までは灰色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は瓦器椀、土師器皿、白磁片など



第16図　ＳＥ－45平面、立面、土層断面図



第17図　ＳＫ－92平面、断面、土層断面図



第18図　ＳＫ－94平面、断面、土層断面図

が出土しており、時期は13世紀初め頃と考えられる。

ＳＫ－94（第18図）

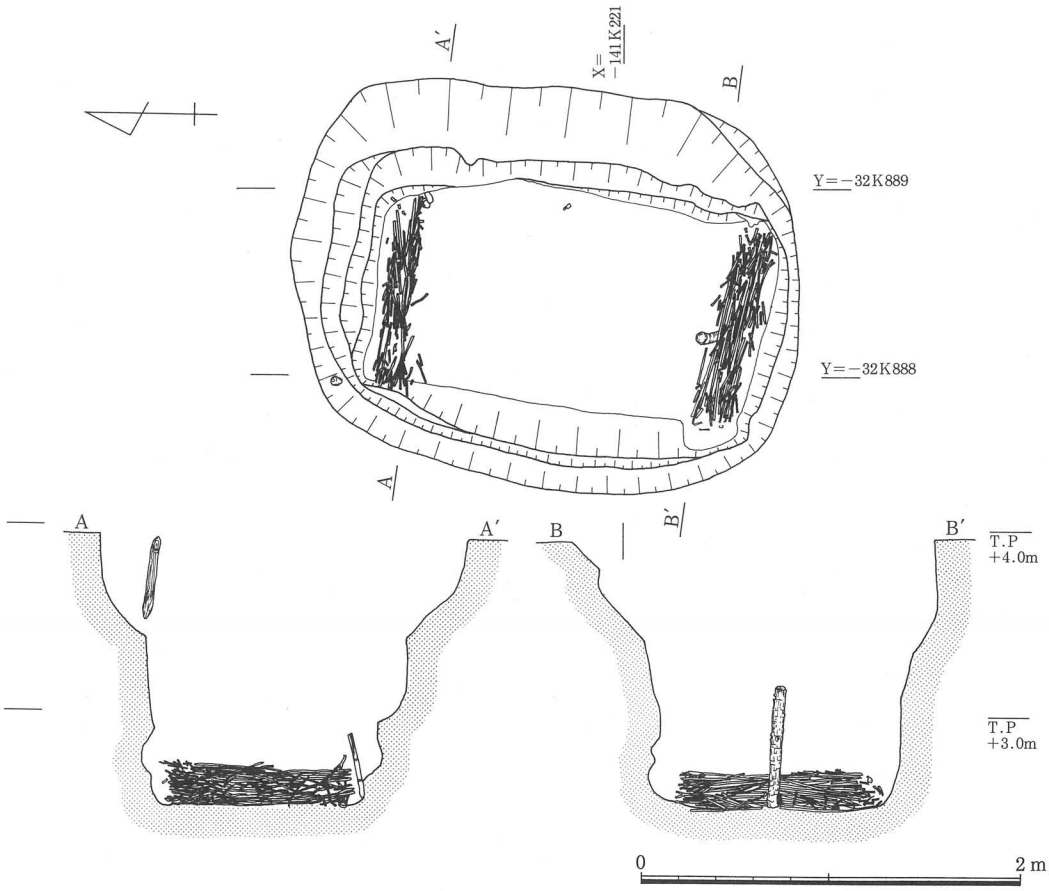
Ｋ－８区で検出された。平面形は1.3×1.4mの不定形を呈しており、深さは0.2mを測る。断面形は浅い擂鉢状で、埋土はオリーブ灰色砂質土が堆積していた。掘り形の北東壁際から瓦器椀、土師器皿、土師器釜などが出土している。遺物はこの他青磁片が出土している。時期は13世紀後半頃考えられる。

ＳＫ－95（第19図）

Ｋ－９区で検出された。平面形は2.1×2.7mの隅丸長方形を呈しており、深さは1.4mを測る。壁は検出面から約0.5mまで斜めにに掘り込まれているが、後は底面までほぼ垂直に下がる。底面の南北端に、柴状の枝、自然木が束ねられた状態で埋まっており、南側にはそれらの束を支持するように杭が打ち込まれていた。出土遺物はなく、時期は不明である。

ＳＫ－97（第20図）

Ｋ－18・19区で検出された。平面形は一辺約2.7mの隅丸方形を呈しており、深さは0.5mを測る。ＳＤ－59と重複しているが前後関係は明確ではなく、調査時の検出面はＳＤ－59の底面からであった。南側でＳＥ－44に接するが、切り合い関係はなさそうである。断面形は擂鉢状で底面はほぼ平坦である。底面の西側約半分に菰状の植物遺体が約２～４㎝の厚さで堆積し、東側には割り石が散在していた。植物遺体は観察するところ、人工的に編んだものではないようである。遺物は埋土内からも出土しているが、菰状植物遺体の下からも出土している。瓦器椀、土師器皿、須



第19図　ＳＫ－95平面、立面図

恵器甕、土師器台付き皿などが出土しており、時期は12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

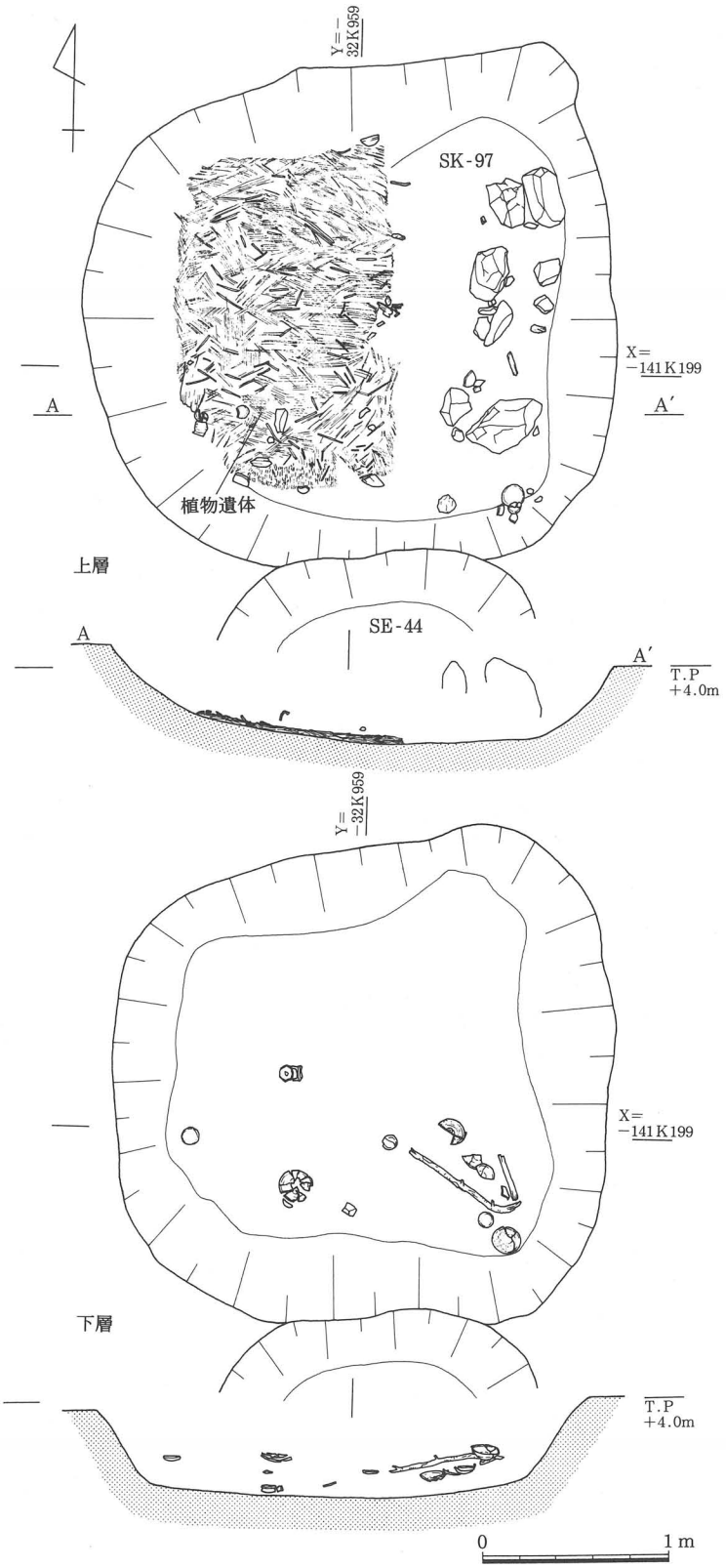
ＳＫ－98（井戸）（第21図）

Ｋ－８・９・18・19区にまたがって検出された。平面形は1.9×2.2mの不定形を呈しており、深さは0.2mを測る。断面形は擂鉢状で底面はほぼ平坦である。底面のほぼ中央に水溜用の曲物が置かれてあった。大小２段で構成されており、上段に径の大きいものを載せていた。曲物を囲むように花崗岩の割り石が置かれており、曲物を固定させるためのものであろう。石には熱を受けたような形跡があった。埋土は人為的に埋め戻された土のようで、緑灰色シルトや灰色粘土のブロックを含む土が堆積していた。遺物は瓦器椀片、土師器皿片が出土している。

溝

ＳＤ－59（第22図）

K－8・9・18・19区で検出された。トレンチを横切る形で南北方向に走り、北端は側溝に切られるがトレンチ外へ続いていることが予想され、南端はトレンチ外に続き、L区で検出され、西に向きを変えＳＴ－01につながっている。平面形は幅の広いところと狭いところの差が大きいためいびつになっている。深さは約0.04～0.2mと割合浅く、埋土は暗黄灰色砂混じり粘質土の一層であった。遺構内からは瓦器椀、瓦器皿、土師器皿などが散在して出土しており、時期は13世紀頃と考えられる。その後遺構内を掘り下げたところ、底面を検出面として、北からＳＫ－97、ＳＥ－44、ＳＥ－43、ＳＥ－42、ＳＥ－38が検出され、平面形がいびつなのはこれらの遺構と

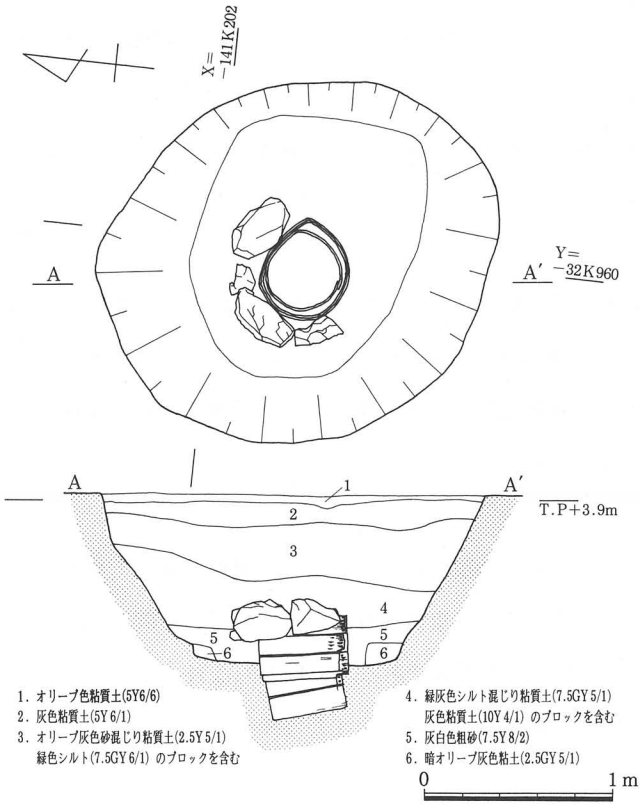


第20図　ＳＫ－97平面、立面、断面図

の重複によるものであった。時期的にはＳＤ－59と大差なく、同時期に存在していたと考えられ、排水のための溝と考えられる。

ＳＤ－68（第22図）

Ｋ－６・16区で検出された。トレンチを横切るように南北方向に走り、北端は側溝に切られてるがトレンチ外へ続いていることが予想され、南端はトレンチ外へ続き、Ｌ区で検出されている。幅は広い所で約1.8ｍで深さは0.1～0.2ｍと浅い。溝内からは瓦器椀、土師器皿などが散在して出土しており、時期は12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。この溝を境に東側は遺構の数が激減し耕作痕（鋤溝）が目立つようになり、屋敷地と耕作地を区画する溝と考えられる。



第21図　ＳＫ－98平面、立面、土層断面図

建物・柵（第７図）

多数のピットの中から建物15棟、柵５列が復原された。さらに多くの建物、柵の存在が考えられるが、復原は困難であった。

ＳＢ－16

Ｋ区の西側で検出された。ＳＢ－17・19・20と重複し、ＳＢ－17・20よりも旧いが、ＳＢ－19との前後関係は明らかではない。トレンチ隅での検出のため全体の規模は明らかではないが、西側のＮ区ではこの建物に対応する柱穴は検出されていないので、南北２間（5.2ｍ）×東西２間（4.8ｍ）の建物と考えた。主軸方向はＮ－８°－Ｅである。柱間は南北が2.6ｍの等間隔で、東西が2.3～2.5ｍで、柱穴の規模は25～55㎝、深さは20～45㎝を測る。遺物は土師器皿、瓦器椀などの小片が出土している。

ＳＢ－17

ＳＢ－16・18と重複し、ＳＢ－16よりも新しいが、ＳＢ－18との前後関係は明らかではない。東西は２間（4.3m）であるが、トレンチ隅での検出のため南北の規模は不明である。主軸方向はＮ－８°－Ｅを示し、ＳＢ－16と一致する。柱間は２～2.3mで、柱穴の規模は20～40㎝、深さは12～43㎝を測る。遺物は土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器鉢、瓦器足釜などの小片が出土している。

ＳＢ－18

ＳＢ－17と重複するが、前後関係は明らかではない。ＳＢ－17と同様南北の規模は不明であるが、東西は２間（4.8m）で、主軸方向はＮ－８°－Ｅを示し、ＳＢ－16・17と一致する。柱間は2.3～2.5mで、柱穴の規模は25～40㎝、深さは38～48㎝を測る。遺物は土師器皿、瓦器椀などの小片が出土している。

ＳＢ－19

ＳＢ－16・20・21・と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は推定で東西１間（3.3m）×南北２間（3.9m）と考えられるが、東西の柱間が長いので、２間であった可能性もある。南北の柱間は1.9～２ｍのほぼ等間隔である。主軸方向はＮ－５°－Ｅで、柱穴の規模は30～35㎝、深さは15～38㎝を測る。遺物は出土しなかった。

ＳＢ－20

ＳＢ－16・19・21・と重複しＳＢ－16よりも新しいが、ＳＢ－19・21との前後関係は明らかではない。規模は推定で東西２間（5.2m）×南北１間（2.2m）である。東西の柱間は2.3m～2.9mと一定ではない。主軸方向はＮ－90°－Ｅで、柱穴の規模は25～35㎝、深さは18～41㎝を測る。ＳＰ－2927には礎石を使用していた。遺物は瓦器椀、土師器片が出土している。

ＳＢ－21

ＳＢ－16の東側で検出された。ＳＢ－19・20と重複するが前後関係は明らかではない。規模は東西２間（4.9m）×南北４間（8.2m）で、主軸方向はＮ－５°－Ｅを示し、ＳＢ－19と一致する。東西の柱間は2.3～2.6m、南北の柱間は南端１間が2.2mと長くなる他は２ｍの等間隔で、柱穴の規模は15～50㎝、深さは８～52㎝を測る。ＳＰ－2586・2694に柱根が残存していた。遺物は瓦器椀、土師器皿、須恵器、黒色土器Ａ類などの小片が出土している。

ＳＢ－22

ＳＢ－21の東側で検出された。ＳＤ－92、ＳＢ－23と重複するが前後関係は明らかでは

第22図　ＳＤ－59・68平面、断面、土層断面図

ない。規模は東西２間（4.2m）で、南北はトレンチ外のため不明であるが２間（4.6m）を検出している。西側南北列の北端はＳＫ－91に切られている。主軸方向はＮ－５°－Ｅを示し、ＳＢ－19・21と一致する。東西の柱間は2.1mの等間隔で、南北の柱間は2.2～2.4mである。柱穴の規模は25～55㎝、深さは４～32㎝を測り、ＳＰ－2549には礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿、須恵器の小片が出土している。

ＳＢ－23

ＳＢ－22と重複するが前後関係は明らかではない。東西１間（1.8～２m）×南北１間（3.1m）で、主軸方向はＮ－４°－Ｅを示し、ＳＢ－19・21・22とほぼ一致する。柱穴の規模は30～55㎝、深さは15～32㎝を測る。ＳＰ－2690に礎石が使用されていた。遺物は土師器皿、須恵器などの小片が出土している。

ＳＢ－24

ＳＢ－23の東側で検出された。ＳＫ－92と重複するが前後関係は明らかではない。北西隅の柱穴は検出されなかったが、推定で東西２間（2.5m）×南北１間（2.2m）の建物と考えた。主軸方向はＮ－15°－Ｅである。東西の柱間は1.7mの等間隔で、柱穴の規模は30～65㎝、深さは25～42㎝を測る。遺物は瓦器椀、瓦器釜、土師器皿などの小片が出土している。

ＳＢ－25

ＳＢ－24の南側で検出された。内部にＳＥ－41を含み、井戸の覆屋の可能性もあるが、建物の規模が大きいので関連はなさそうである。前後関係は明らかではない。東西２間（4.5m）×南北２間（4.4m）のほぼ正方形で、主軸方向はＮ－15°－Ｅである。東西の柱間は2.1～2.4mと一定ではなく、南北は2.2mの等間隔で、柱穴の規模は30～50㎝、深さは25～38㎝を測る。ＳＰ－2676には礎石が使用されていた。遺物は土錘が一点出土している他は、瓦器椀、土師器皿、須恵器甕などの小片が出土している

ＳＢ－26

ＳＢ－25の南側、ＳＢ－21の東側で検出された。内部にＳＥ－37を含み、建物の規模から井戸の覆屋と考えられる。北東隅の柱穴は検出されなかったが、推定で東西１間（1.7m）×南北１間（1.9m）の建物と考えられる。主軸方向はＮ－３°－Ｅを示し、柱穴の規模は28～30㎝、深さは15～28㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＢ－27

ＳＤ－59の東側で検出された。東西２間（4.3～4.6m）×南北１間（2.3m）で、柱の

通りは悪い。主軸方向はN－86°－Wである。東西列の柱間は北側が2.3mのほぼ等間隔であるが、南側は1.9～2.4mと一定ではい。柱穴の規模は20～50㎝、深さは15～28㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿などの小片が出土している。

ＳＢ－28

ＳＢ－27の東側で検出され、南西隅の一部でＳＢ－27と重複するが、前後関係は明らかではない。東西１間（4.6～4.8m）×南北１間（3.2m）であるが、東西列の北側、南側それぞれの間にピットがあり、柱間は一定ではないが、東西２間であった可能性もある。主軸方向はN－80°－Wを示し、柱穴の規模は20～30㎝、深さは13～24㎝を測る。遺物は土師器皿などの小片が出土している。

ＳＢ－29

ＳＢ－28の東側で検出され、ＳＢ－28・30と重複しており、ＳＢ－30より旧いが、ＳＢ－28との前後関係は明らかではない。東西２間（4.7m）×南北３間（7.4m）で、主軸方向はN－５°－Eである。東西の柱間は2.4mで、南北は1.8～3.2mと一定ではなく、柱穴の規模は30～50㎝、深さは８～39㎝を測る。ＳＰ－2754・2760に柱根が残存していた。遺物は瓦器椀、灰釉陶器、土師器皿などの小片が出土している。

ＳＢ－30

ＳＢ－29とＳＤ－68の間で検出された。ＳＢ－29と重複するが、ＳＢ－29より新しい。東西１間（2.7m）×南北１間（2.6m）のほぼ正方形で、主軸方向はＳＢ－29と同じくN－５°－Eを示す。柱穴の規模は25～44㎝、深さは18～26㎝を測る。ＳＰ－2841には礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿、須恵器甕、瓦器釜、土師器釜などが出土している。

ＳＡ－23

ＳＢ－24の東側、ＳＤ－59との間で検出された。方位はN－３°－E、２間で長さは5.5m、柱間はほぼ等間隔で2.7mを測る。柱穴の規模は35～40㎝、深さは22～28㎝を測る。ＳＰ－2662は柱根が残存していた。遺物は瓦器椀、土師器皿、東播系須恵器片口鉢などの小片が出土している。

ＳＡ－24

ＳＢ－25・26の東側、ＳＤ－59との間で検出された。方位はほぼ南北方向に一致し、２間で長さは4.7m、柱間はほぼ等間隔で2.4mを測る。柱穴の規模は25～40㎝、深さは24～32㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿などの小片が出土している。

ＳＡ－25

ＳＢ－26の南側で検出された。方位はＮ－84°－Ｗ、２間で長さは4.6m、柱間は等間隔で2.3mを測る。柱穴の規模は15～40㎝、深さは22～41㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿、東播系須恵器片口鉢などの小片が出土している。

ＳＡ－26

ＳＢ－27の北側で検出された。方位はＮ－６°－Ｅ、２間で長さは４ｍ、柱間は等間隔で２ｍを測る。柱穴の規模は20～23㎝、深さは12～21㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＡ－27

ＳＢ－29・30の北側で検出された。方位はＮ－86°－Ｗ、２間で長さは4.3m、柱間はほぼ等間隔で2.2mを測る。柱穴の規模は20～25㎝、深さは12～37㎝を測る。ＳＰ－2856には柱根が残存していた。

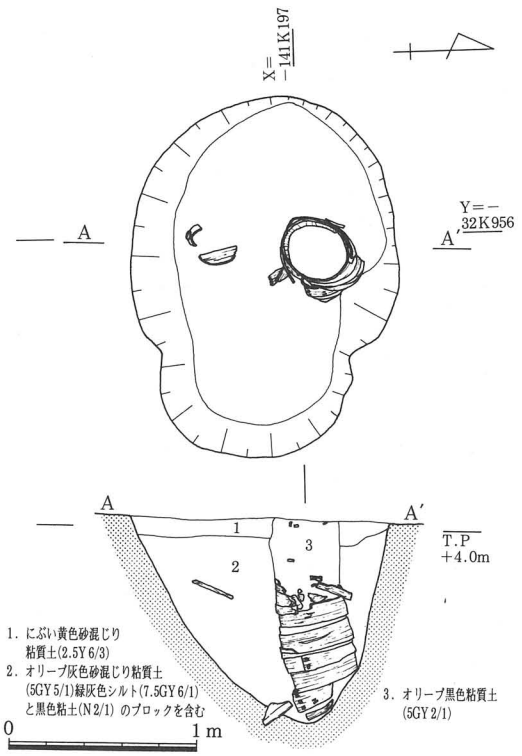
３．第２遺構面下層（付図３）

井戸、土坑、ピット、自然河川などが検出されている。第２遺構面上層で未検出の遺構も含まれているが、トレンチの東側では新たに中世の土坑、ピットなどが検出された。しかし、第２遺構面上層のように、建物を復原するまでには到らなかった。基本的には中世の遺構面と考えられるが、古墳時代の土坑、自然河川も検出されている。検出面は東側でＴ．Ｐ．＋4.2m、西側でＴ．Ｐ．＋3.9mを測る。

井戸

ＳＥ－46（第23図）

Ｋ－18区で検出された。平面形は1.4×1.9mの不定形を呈しており、深さは1.1mを測る。掘り形内の北寄りに曲物が５段重ねた状態で検出されており、検出時は南側に傾いていた。曲物は５段以上存在したと推定され、土層断面を見ると井戸廃絶時に上部の曲物を抜き取ったようであるが、かなり無理に抜き取った



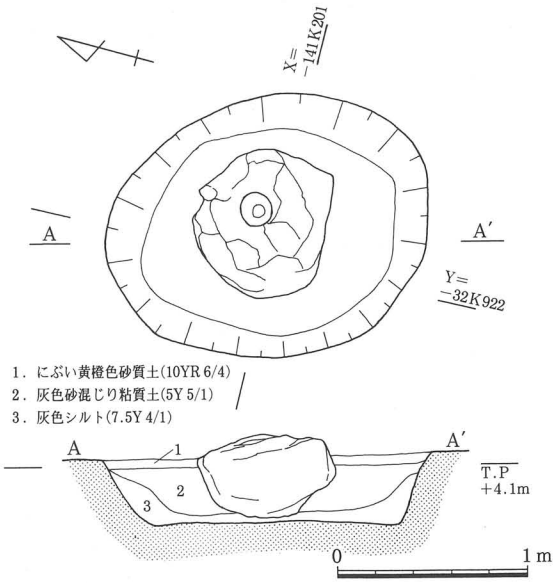
第23図　ＳＥ－46平面、立面、土層断面図

ためか途中で曲物が破損している。井戸側などの施設は存在しないので、水溜用の曲物が井戸側を兼ねていたものと考えられる。遺物は瓦器椀、土師器皿、瓦器釜などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

土坑

ＳＫ－99（第24図）

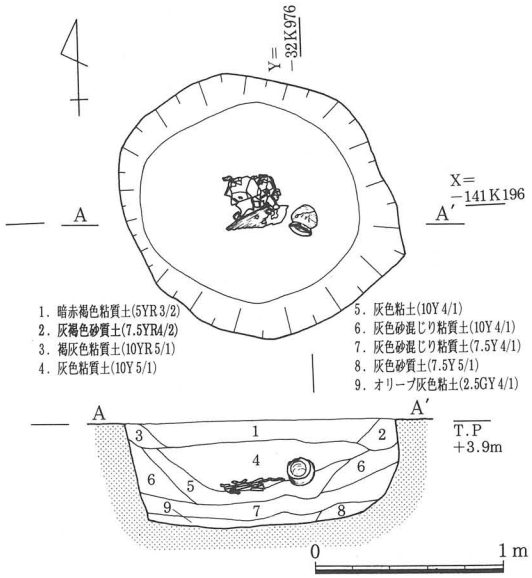
Ｋ－15区で検出された。平面形は1.4×1.7mの長円形を呈しており、深さは0.4mを測る。断面形は擂鉢状で底面はほぼ平坦である。遺構内には約×mの花崗岩製の礎石が据えてあった。石の上部は面を取りほぼ平坦に加工され、ほぼ中央に径約20㎝、深さ８㎝の穴が穿孔されおり、形状からして塔心礎ではないかと考えられるが、周辺には関連するような遺構は検出されておらず、遺物もほとんど出土していない。掘り形内からの出土遺物も少量で、土師器皿片、瓦器足釜の脚部片などが出土しているにすぎないため、時期は明らかではない。



第24図　ＳＫ－99平面、立面、土層断面図

ＳＫ－111（第25図）

Ｋ－20区で検出された。平面形は1.4×1.6mの不整円形を呈しており、深さは0.6mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦であった。埋土は暗赤褐色～灰色の粘質土が堆積している。遺物は掘り形の中央で土師器甕が破砕された状態で出土し、そのすぐ東側で、ほぼ完形に近い土師器甕が口縁部を南側に向けて横置きの状態で出土している。時期は古墳



第25図　ＳＫ－111平面、立面、土層断面図

時代前期と考えられる。

自然流路・河川

ＳＲ－01

Ｋ－７・17区で検出された。南側にあるＬ区で検出された北東から南東方向に走るＳＲ－01の続きと考えられ、Ｋ区では向きを変えほぼ南北方向で検出された。、幅1.5～５ｍ、深さは0.5～0.8ｍを測る。北端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いていると考えられる。埋土は粗砂、細砂、シルトなどが堆積しており、自然河川と考えられる。遺物は古墳時代の須恵器杯身、杯蓋などが出土しており、古墳時代後期の５世紀後半～６世紀初め頃と考えられる。

４．第３遺構面（付図４）

土坑、自然河川が検出されている。ＳＲ－02の出土遺物から古墳時代前期の遺構面と考えられるが、他の遺構からは遺物が出土していないので、各遺構の時期は明確ではない。これまでの調査で検出されている、古墳時代の水田面は検出されなかったが、トレンチの東側で北東から南西方向に走る畦状の高まりと溝が検出された。水田面のベースとなる粘土層が認めらず、削平されたか流失したものと考えられ、大型の畦畔がかろうじて残ったものと推定される。検出面は東側でＴ．Ｐ．＋4.1ｍ、西側でＴ．Ｐ．＋3.7ｍを測る。

土坑

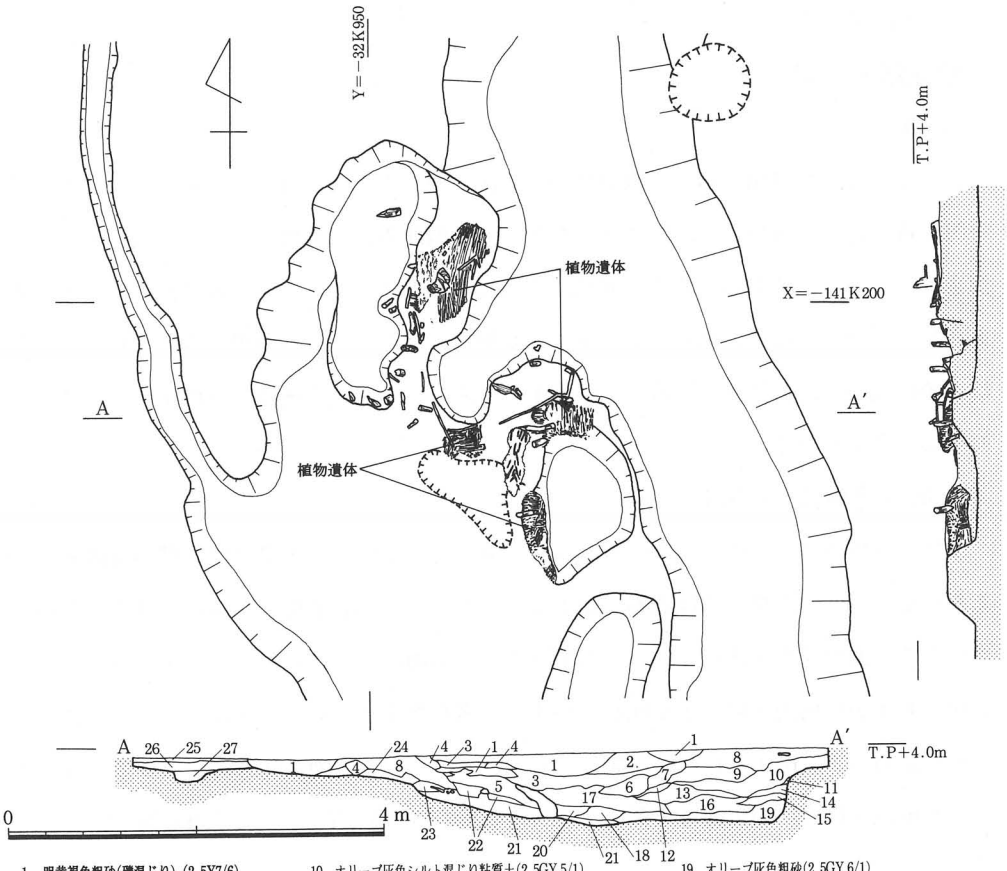
ＳＫ－126

Ｋ－20区で検出された。平面形は１×2.5ｍの隅丸長方形を呈するが、北東の短辺が少し膨らんだ形状をしている。深さは0.5ｍを測るが、調査時に掘り過ぎてしまったため、実際の底面は、オリーブ灰色粗砂の上面であると考えられ、深さは0.3ｍ程度である。断面形を見ると２段掘りになっており、埋土はにぶい黄褐色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は出土していないので時期は特定できないが、形状から土壙墓の可能性もある。

自然流路・河川

ＳＲ－02（第26図）

Ｋ－７・17・18区で検出された。南北方向に走り、第２遺構面下層で検出されたＳＲ－01と重複しており、同一の流路と考えられる。北端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いていると考えられる。南側にも続いており、Ｌ区では北東から南西方向に走る形で検出されている。幅約７ｍ、深さは0.3ｍを測る。埋土は砂層やシルトが堆積しており、ラミナが認められた。中央部に杭が打ち込まれており、そこから菰状の植物遺体が検出さ



1．明黄褐色粗砂(礫混じり)（2.5Y7/6)
2．浅黄色微砂(2.5Y 7/4)
3．緑灰色シルト(7.5GY 6/1)
4．灰色砂混じり粘質土(N 4/)
5．灰色粘質土(N 5/)
6．明オリーブ灰色中砂(2.5GY 7/1)
7．オリーブ灰色粘質土(2.5GY 5/1)
8．黒褐色砂混じり粘質土(10YR 3/2)
9．灰色粘質シルト(5Y 4/1)
10．オリーブ灰色シルト混じり粘質土(2.5GY 5/1)
11．灰色砂礫混じり土(10Y4/1)
12．オリーブ灰色微砂(5GY 6/1)
13．灰白色粗砂(5Y 7/2) ～オリーブ灰色微砂(2.5GY 6/1)
14．オリーブ灰色シルト混じり粘質土(10Y6/2)
15．灰色シルト(7.5Y 5/1)
16．明オリーブ灰色粗砂(礫混じり)（2.5GY7/1)
17．オリーブ灰色砂混じり粘質土(2.5GY 5/1)
18．緑灰色砂質土(10GY6/1)
19．オリーブ灰色粗砂(2.5GY 6/1)
20．緑灰色シルト混じり粘質土(7.5GY6/1) 植物遺体
21．オリーブ灰色砂混じり粘質土(2.5GY 5/1)
22．明オリーブ灰色粗砂(2.5GY 7/1)
23．オリーブ灰色細砂(2.5GY 6/1)
24．灰白色中砂(5Y 8/2)
25．オリーブ灰色砂混じり粘質土(5GY 6/1)
26．浅黄色砂質土(5Y 7/3)
27．にぶい黄色(2.5Y 6/3)

第26図　ＳＲ－02平面、土層断面図

れた。菰は厚さ約２～４㎝を測り、杭と一緒に川の中央部に敷かれていたようで、堰などの施設と考えられる。遺物は少量であるが、古墳時代前期の土師器が出土している。

５．第４遺構面（付図５）

基本層序Ⅵ層の黒色粘土をベースとする最終遺構面である。トレンチ全面に黒色粘土が検出され、蛇行をしながら南北に走る畦状の高まりが検出された。遺構検出当初は畦状遺構として理解していたが、調査区壁の断面観察したところ、黒色粘土の下に灰白色の砂がレンズ状に堆積しているのが認められたため、自然河川の跡であることがわかった。この自然河川は上面の黒色粘土を堀込んで流れていたのではなく、黒色粘土は河川が埋没してから堆積しているので、検出面とは時間的にかなりの差があるものと考えられる。遺物は

まったく出土していないので時期は明らかではないが、この黒色粘土は「河内潟」、「河内湖」起因によるものと考えられるので、時期は弥生時代以前として考えている。この高まりを河川として掘削したのはK区おいてだけで、他のトレンチでは高まりのままで調査を終了している。検出面は東側でT.P.+3.3m、西側でT.P.+2.8mを測り、かなりの高低差がある。

自然流路・河川

SR−11

K−3・13・14区で検出された。蛇行をしながら南北方向に走り、両端は側溝に切られるが、トレンチ外に続いている。幅約2m、深さは0.5mを測り、埋土は灰白色砂層が堆積しており、自然河川と考えられる。遺物は出土していない。

SR−12

K−1・2・11区で検出された。蛇行をしながら南北方向に走り、両端は側溝に切られるが、トレンチ外に続いている。幅3.8〜4.3m、深さは0.8mを測り、埋土は灰白色砂層とオリーブ灰色微砂が堆積しており、自然河川と考えられる。遺物は出土していない。

第２節　Ｌ区の遺構

Ｌ区はＫ区の南側に位置しており、調査前の地表面の標高は東側でＴ．Ｐ．＋4.9m、西側でＴ．Ｐ．＋4.7mを測り、東から西への傾斜が認められた。

１．第１遺構面（付図１）

近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝や鋤溝などが検出された。水田や畑などの区画を兼ねた用水路と考えられる。検出面は東側で4.3m、西側で4.1mを測る。

溝

ＳＤ－03

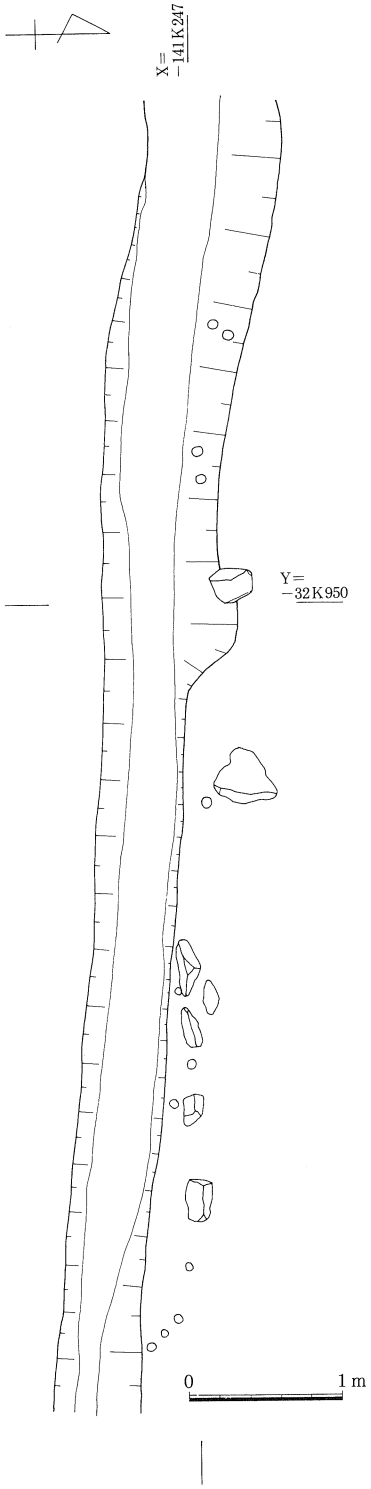
Ｌ－１・７区で検出された。トレンチを横切るように南北方向に走り、北はＫ区から続いており、南はさらにＭ区へと続いている。幅0.3～0.5m深さ約0.1mを測り、埋土はは灰黒色土で遺物は近世の染付など陶磁器類が出土している。南端で東西方向に走るＳＤ－54と交差するようである。

ＳＤ－54（第27図）

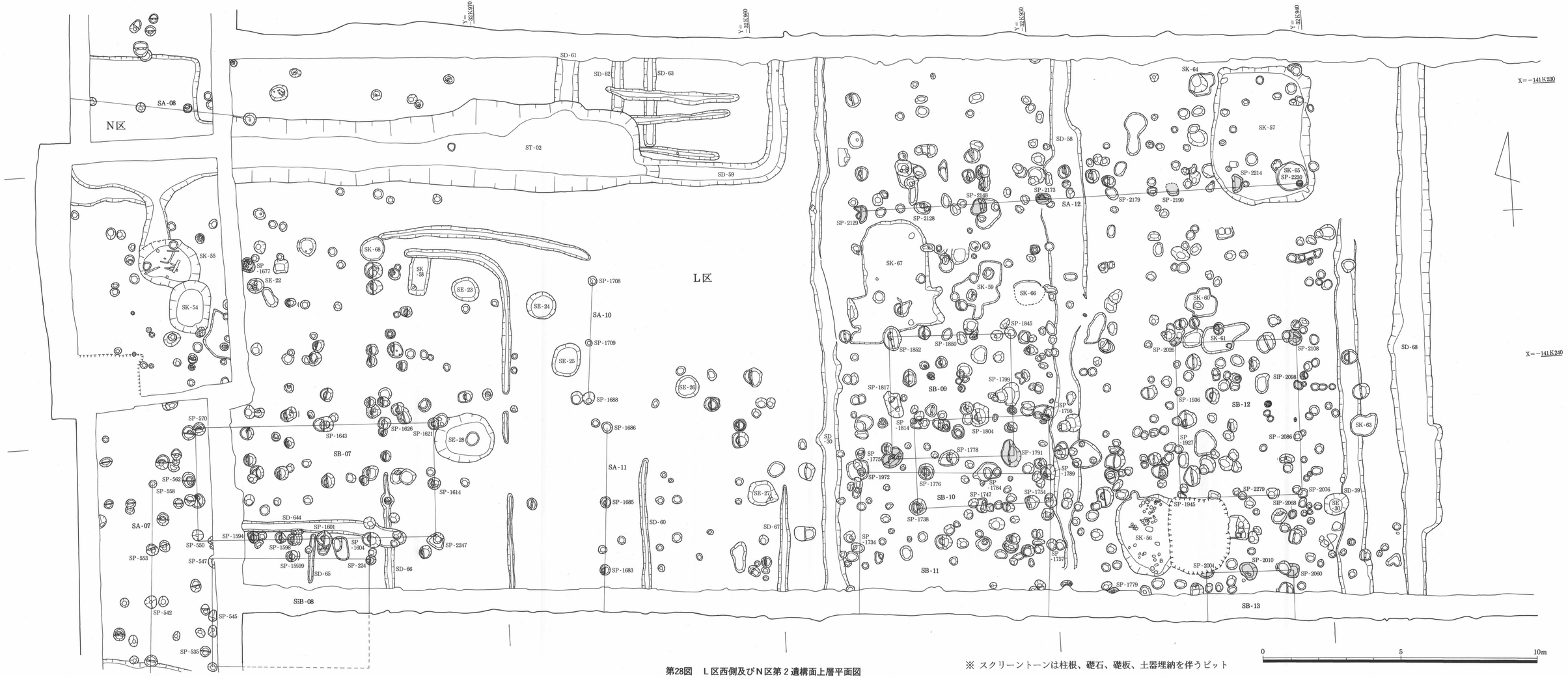
Ｌ－１～６区で検出された。東西方向に走り、東端は側溝に切られるがＯ区へ続いており、西端はＮ区に続くようである。トレンチの南側側溝に沿って検出されているために、遺構の全体幅を検出するに至らなかった。検出幅は１区で約1.2mを測り、深さは約0.1mを測る。北側には杭と石が残っていた。埋土は黒灰色土で、遺物は近世の染付などの陶磁器類が出土している他、土師器皿片や瓦器椀片が混入している。

ＳＤ－55

Ｌ－４・14区で検出された。南北方向に走り北はＫ区から続いており、南端で東西方向に走るＳＤ－54に合流していた。幅約1.3m、深さは0.1～0.3mを測る。埋土



第27図　ＳＤ－54平面図



第28図　L区西側及びN区第２遺構面上層平面図

※ スクリーントーンは柱根、礎石、礎板、土器埋納を伴うピット

は黒灰色土で、遺物は近世の染付などの陶磁器類が出土している他、土師器皿片や瓦器椀片が混入している。

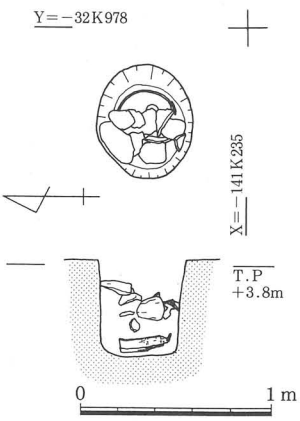
2．第2遺構面上層（第28図、付図2）

K区と同様に、トレンチの西側半分で、中世の溝、井戸、土坑、水路、ピットなどを検出しているが、東側半分では鋤溝が見られる程度であった。ピットは多数検出されており、建物、柵が復原できた。検出面は東側でT．P．+4.2m、西側でT．P．+3.9mを測る。

井戸

ＳＥ－22（第29図）

Ｌ－12区で検出された。平面形は0.5×0.6mの楕円形を呈しており、深さは0.5mを測る。検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。底には水溜用の曲物が1段置かれており、検出時には上部は花崗岩の割り石によって塞がれていた状況であった。割り石は井戸廃絶時に埋め戻されたものと考えられるが、石積みの井戸側に使用されていた可能性も否定できない。出土遺物は少なく、土師器皿、須恵器甕などがあり、時期を特定するのは難しいが、13世紀後半頃と考えている。



第29図　ＳＥ－22平面、立面図

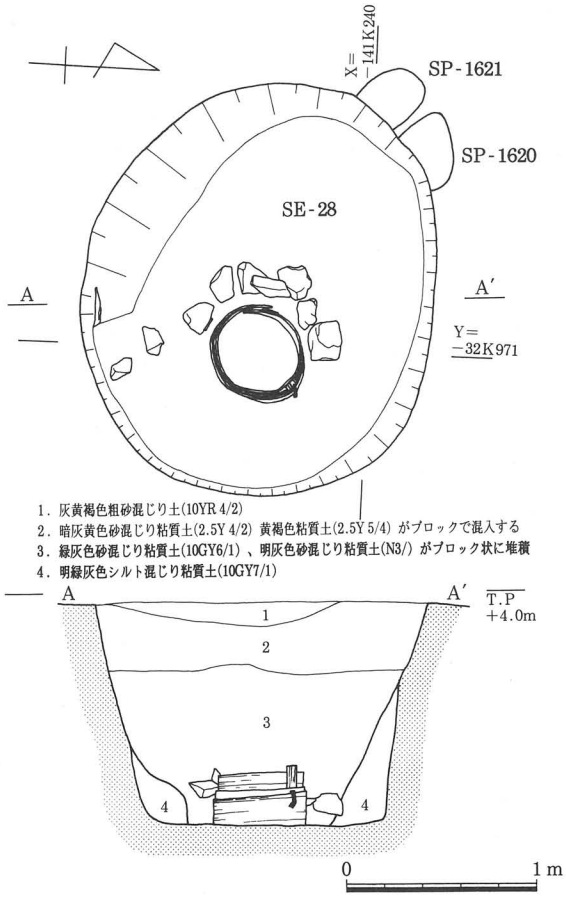
ＳＥ－23

Ｌ－12区で検出された。平面形は0.9×1mの不整円形を呈しており、深さは0.7mを測る。検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。埋土は3層に分かれており、上から灰黄褐色土、褐灰色砂混じり粘質土、オリーブ黒色砂混じり粘質土が水平に堆積していた。遺物は瓦器椀、土師器皿などの小片が少量出土しているだけで、時期は明らかではない。まったくの素掘りのため、井戸とは断定できないが、抜き取り跡の可能性も否定できない。

ＳＥ－28（第30図）

Ｌ－6区で検出された。平面形は2.2×2.4mの楕円形を呈しており、深さは1.2mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。底には水溜用の曲物が2段置かれており、その東側には曲物を取り囲むように割り石が散在していた。埋土は3層に分かれており、中層、下層はブロックの混入する土であり、人為的に埋め戻された堆積状況を示す。割り石は井戸側に使用されていたものと考えられ、元々は検出面まで石積みの井戸側が存在していたことが推定される。井戸廃絶時に、ある程度上部の石を抜き取り、底部の石と曲物

を残した状態で埋め戻されたと考えられる。遺物は瓦器椀、瓦器皿、瓦器釜、白磁片、などが出土している。瓦器皿は破片も含めて約５個体を出土している。その他混入品と考えられる縄蓆文が施された須恵器甕片が出土している。時期は12世紀前半頃と考えられる。

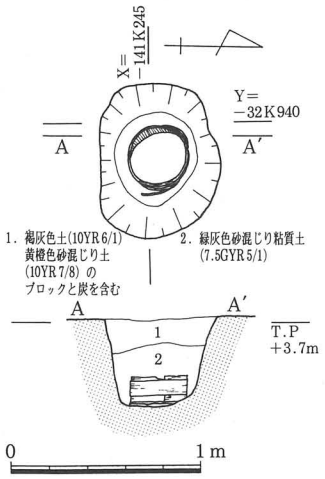


第30図　ＳＥ－28平面、立面、土層断面図

ＳＥ－30（ＳＫ－62）（第31図）

Ｌ－３区で第２遺構面下層の遺構として検出された。検出面での平面形は0.8×0.5mの長円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は台形で、底には水溜用の曲物が１段置かれてあった。しかし、第２遺構面上層で検出したＳＫ－62と重複しており、同一遺構と考えられるため、実際の平面規模は0.8×0.9mと大きくなり、断面形は二段掘りとなっていたようである。遺物は小片ばかりで図化し得るものはなかったが、土師器皿、須恵器、青磁、黒色土器Ａ類などが出土している。

土坑



第31図　ＳＥ－30平面、立面、土層断面図

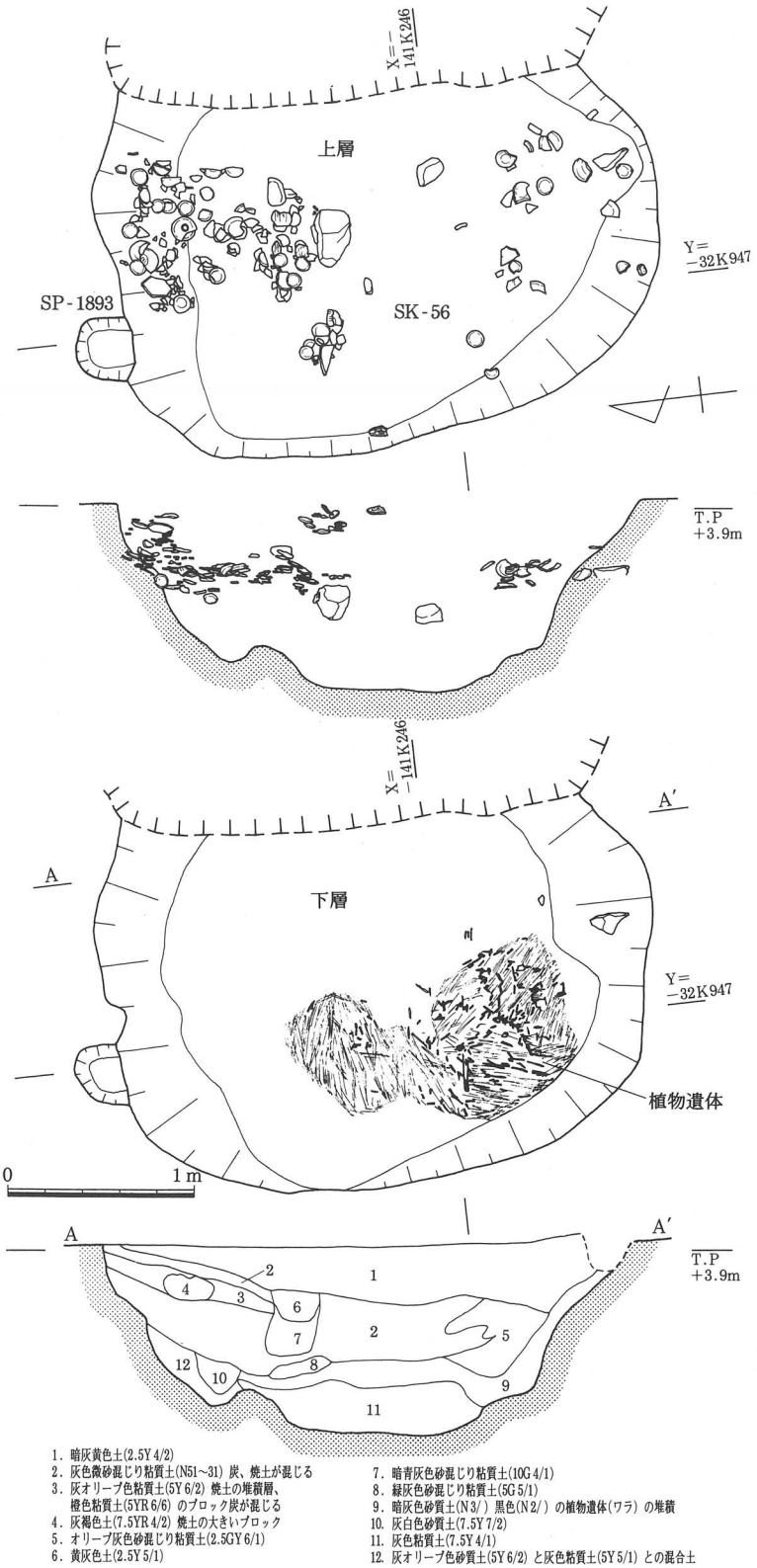
ＳＫ－56（第32図）

Ｌ－３区で検出された。東側を攪乱によって切られており、検出規模は1.8×３mで、平面形は不定形を呈し、深さは約1mを測る。検出面から約20～40㎝の間に堆積する炭化物、焼土の混じる灰色砂混じり粘質土から瓦器椀、土師器皿がまとまって大量に出土している。その数量は図化可能なものでも瓦器椀28個体、土師器皿243個体あるが、実数はさらに多い。また検出面から約40㎝下には、菰状の植物遺体が約0.8×1.8mの範囲で約１㎝の厚さで堆積していた。径約３㎜の植物の茎からなるが、１本１本の方向は

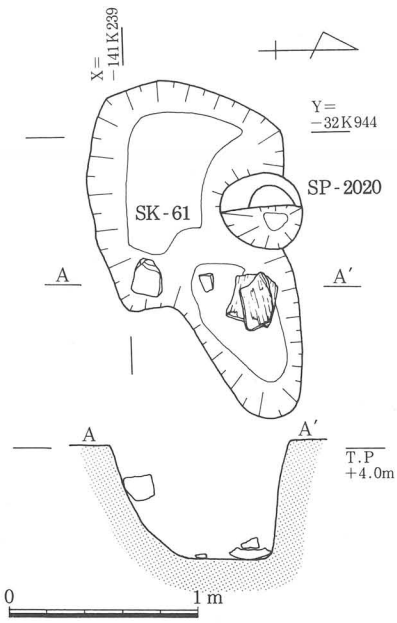
不揃いであるため人工的に編まれたものではなさそうである。土器は破砕しているものが多く見られることから、使用できなくなったものを廃棄した土坑であろう。時期は13世紀初め～後半と考えられる。遺物としては他に青磁、白磁片や、混入品と考えられる須恵器杯身などが出土している。

ＳＫ－61（第33図）

Ｌ－３区で検出された。北側でＳＰ－2020に切られており、平面形は１×1.9mの不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。遺構検出時では土坑と考えていたが、遺構内を掘り下げたところ、礎板と礎石とが底面で検出され、これらの出土位置から少なくとも３個のピットが重複



第32図　ＳＫ－56平面、立面、土層断面図



第33図　ＳＫ－61平面、断面図

しているものと考えられ、平面形がいびつなのはこのためであろう。各ピットどうしの前後関係は明らかではないが、遺物は瓦器椀、土師器皿などが出土しており、時期は13世紀前半頃を示す。

ＳＫ－67（第34図）

Ｌ－10区で検出された。平面形は3.3×4.4mの不定形を呈しており、深さは0.12mと浅い。ＳＫ－69、ＳＰ－1852に切られており、底面では複数のピットが検出されているが、前後関係は明らかではない。埋土は焼土の混じる褐灰色砂混じり土で、特に中央で検出した土器片の周囲に、焼土が多く混入していた。遺物は土師器皿、東播系須恵器鉢などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ－68（井戸）（第35図）

Ｌ－12区で検出された。平面形は径約0.7mのほぼ円形を呈しており、深さは0.8mを測る。検出面から垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦であった。底面には完形の柄杓が口を下にして伏せた状態で置かれてあった。遺物は土師器皿、瓦器椀の破片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。水を汲むための柄杓が出土しているので、この遺構は素掘りの井戸の可能性も否定できない。

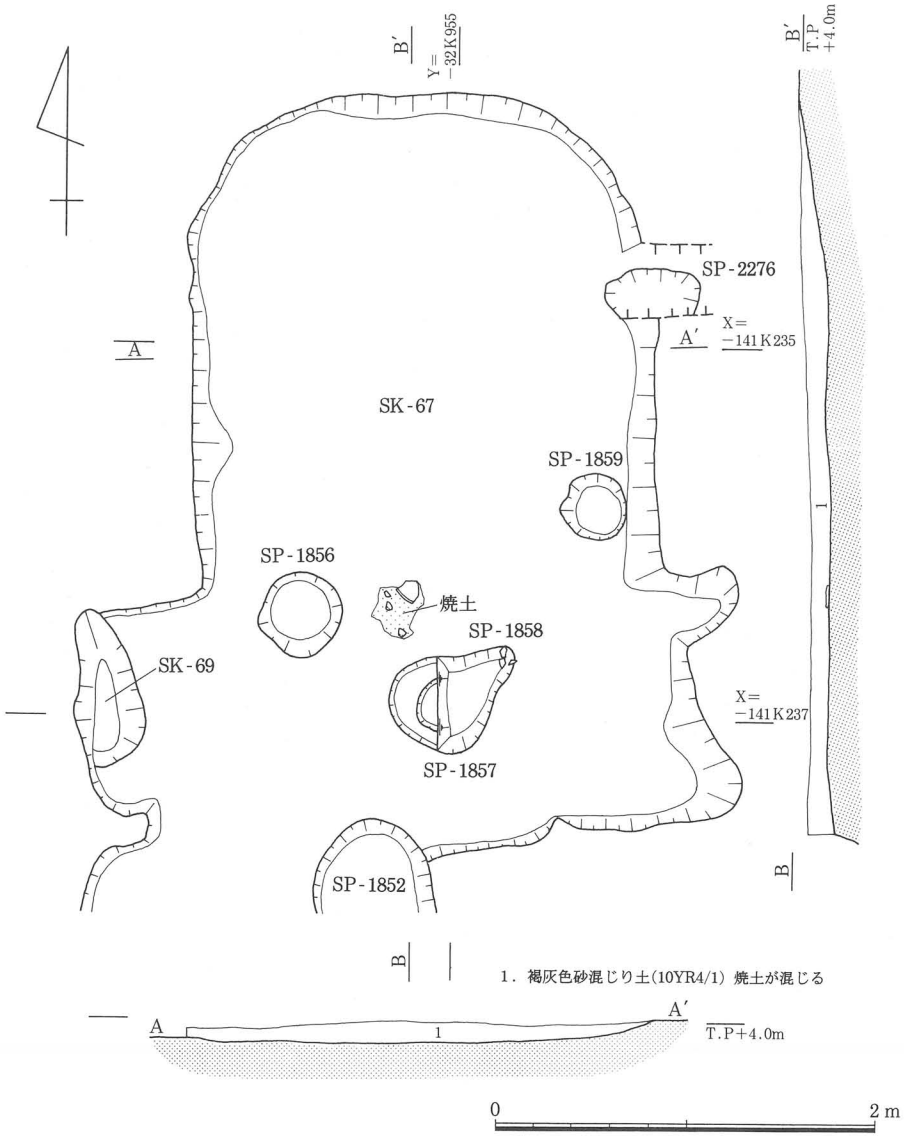
水路・落ち込み

ＳＴ－02（第36図）

Ｌ－11・12区で検出された。東西方向に走り、幅約３ｍ、深さは0.7mを測る。東端は幅が狭くなってＳＤ－59となり、直角に方向を変えて北に向かい、側溝に切られるがトレンチ外へ続き、Ｋ区でもその続きを検出している。北からはＳＤ－61が合流する。西端も側溝に切られるが、トレンチ外へ続いておりＮ区でも検出されており、さらに西側へ続いている。埋土は上層が灰黄褐色土、灰色砂混じり粘質土で下層には灰色粘土、底面付近にはオリーブ灰色砂質土が堆積しており、埋土の状況からかつては水が停滞した状態にあったと考えられる。東西方向に直線的に走ることから、人為的に開削された水路と考えられる。

建物・柵列（第28図、付図２）

建物７棟、柵３列が復原された。さらに多くの建物、柵の存在が考えられるが、復原は



第34図　ＳＫ－67平面、土層断面図

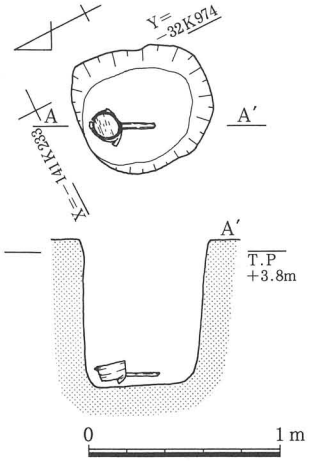
困難であった。

ＳＢ－07

Ｌ区の西側で検出された。規模はＮ区で検出した柱穴を含めて、東西４間（9.1m）×南北２間（4.2m）で、主軸方向はＮ－86°－Ｗを示す。東西の柱間は1.7～2.5mと間隔にばらつきがあり、南北は2.1mのほぼ等間隔であるが、Ｎ区で検出した２間は柱の通りが悪い。柱穴の規模は40～57㎝と大型で、深さは12～50㎝を測る。ＳＰ－1594には礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿、青磁碗、白磁、須恵器などの小片が出土している。

ＳＢ－08

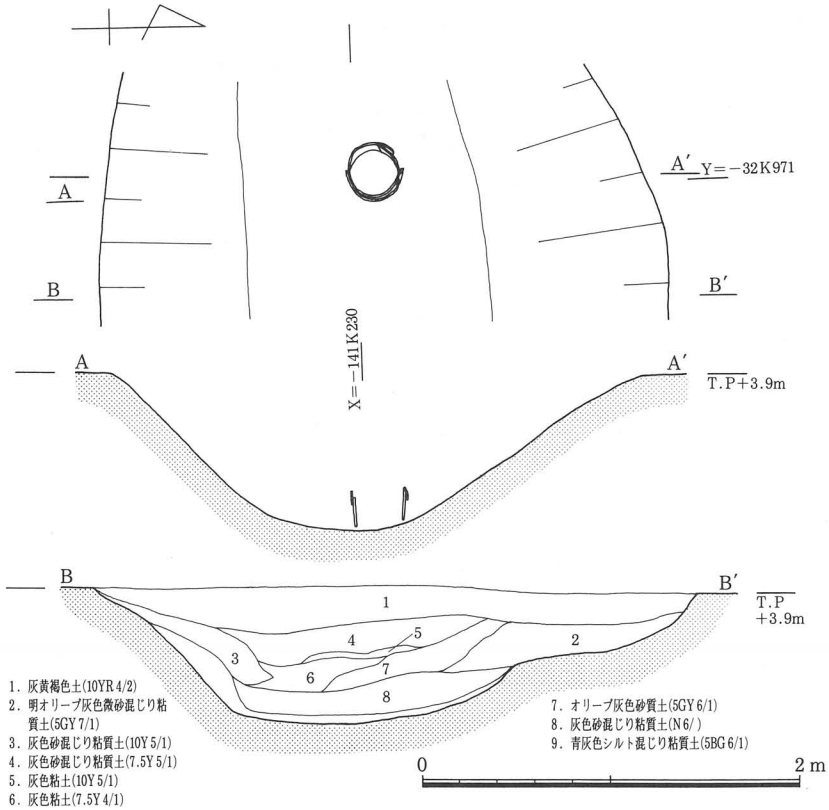
Ｌ区の西側、ＳＢ－07の南側で検出された。規模はＮ区で検出した柱穴を含めて、推定で東西２間（5.9m）×南北２間（4.9m）であると考えた。主軸方向はＮ－86°－Ｗを示し、ＳＢ－07と一致する。東西の柱間は2.8～3.1mと広めで、南北は1.9～２mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は35～50㎝、深さは20～33㎝を測る。ＳＰ－2244には柱根が残存していた。遺物は瓦器椀、土師器皿、白磁、須恵器などの小片が出土している。



第35図　ＳＫ－68平面、立面図

ＳＢ－09

Ｌ区の中央よりやや西側で、ＳＤ－31とＳＤ－58の間で検出された。ＳＢ－10と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西２間（4.3m）×南北２間（4.4m）の正方形で、主軸方向はＮ－４°－Ｅである。東西の柱間は北側で2.6～2.7mと一定ではなく、南北は2.2mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は大型のものが多く30～100㎝、深さは35～64㎝を測る。ＳＰ－1849には柱



第36図　ＳＴ－02平面、断面、土層断面図

根が残存し、ＳＰ－1775・1791には礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿、瓦器釜、須恵器の小片の他に、各柱穴から焼土塊が出土している。

ＳＢ－10

Ｌ区の中央よりやや西側で、ＳＤ－31とＳＤ－58の間で検出された。ＳＢ－９・11と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西２間（4.9m）×南北１間（3.3m）で、主軸方向はＮ－90°－Ｅである。東西の柱間は北側で2.4～2.5mで、柱穴の規模は大型のものが多く22～80㎝、深さは21～53㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿、瓦器足釜、黒色土器Ａ類の小片が出土している。

ＳＢ－11

Ｌ区の中央よりやや西側で、ＳＤ－31とＳＤ－58の間で検出された。ＳＢ－10と重複するが、前後関係は明らかではない。トレンチの端のため全体の規模は不明であるが、推定で東西３間（6.8m）×南北１間以上で、南側に続くものと考えられる。主軸方向はＮ－４°－Ｅである。東西の柱間は2.3mの等間隔で、柱穴の規模は28～101㎝、深さは８～45㎝を測る。ＳＰ－1972に礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿、須恵器などの小片が出土している。

ＳＢ－12

Ｌ区の中央よりやや東側で、ＳＤ－39とＳＤ－58の間で検出された。規模は東西２間（4.2m）×南北３間（5.6m）で、主軸方向はＮ－２°－Ｅである。東西列の北側の中央のピットはＳＫ－61と重複しており、掘り方は検出されなかったが、礎石が残存していたので柱とみなした。南北の柱の通りは悪く、柱間は1.9～2.4m、柱穴の規模は20～88㎝、深さは20～37㎝を測る。ＳＰ－2026には柱根が、ＳＰ－2098には礎板が、ＳＰ－2108には柱根と礎板が残存していた。遺物は瓦器椀、土師器皿、土師器、須恵器などの小片が出土している。

ＳＢ－13

Ｌ区の中央よりやや東側で、ＳＢ－12の南側で検出された。トレンチの端で柱穴が３個東西に等間隔で並ぶため、建物とした。全長は3.1mを測り、主軸方向はＮ－２°－Ｅで、ＳＢ－12と一致する。柱間は1.6mの等間隔で、柱穴の規模は34～66㎝、深さは10～46㎝を測る。ＳＰ－2004には礎板が残存し、ＳＰ－2010・2060には礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿、須恵器などの小片が出土している。

ＳＡ－10

Ｌ区の西側で検出された。方位はＮ－５°－Ｅ、２間で長さ4.3m、柱間は２～2.3mを

測る。柱穴の規模は22～45㎝、深さは13～27㎝を測る。遺物は出土していない。方位は西側で検出されたＳＢ－07・08の主軸とほぼ一致する。

ＳＡ－11

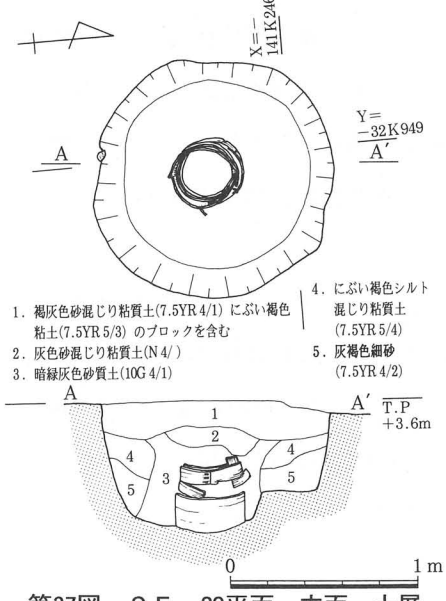
Ｌ区の西側、ＳＡ－10の南側で検出された。方位はＮ－４°－Ｅ、２間で長さ5.2m、柱間は約2.6mの等間隔であるが、さらに南側へ続くようである。柱穴の規模は34～40㎝、深さは21～29㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿の小片が出土している。方位は西側で検出されたＳＢ－07・08の主軸と一致する。

ＳＡ－12

Ｌ区のほぼ中央で検出された。方位はＮ－89°－Ｅでほぼ東西方向に並び、７間で長さ16.1m、柱間は2.2～2.5mで、柱穴の規模は34～65㎝、深さは2～50㎝を測る。ＳＰ－2128・2179を除くすべての柱穴に礎石や礎板または柱根が残存していた。遺物は瓦器椀、土師器皿、東播系須恵器片口鉢、瓦器足釜の小片が出土している。方位は西側で検出されたＳＢ－07・08の主軸と一致する。

３．第２遺構面下層（付図３）

井戸、土坑、ピット、自然河川などが検出された。トレンチの東側では中世の土坑、ピットが検出され、建物、柵を復原することができた。基本的には中世の遺構面と考えられるが、古墳時代の土坑、自然河川も検出されている。検出面は東側でＴ．Ｐ．＋3.9m、西側でＴ．Ｐ．＋3.6mを測る。



第37図　ＳＥ－29平面、立面、土層断面図

井戸

ＳＥ－29（第37図）

Ｌ－３・４区で検出された。平面形は径約1.3mの円形を呈しており、深さは0.7mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、北側には段がある。底面のほぼ中央に水溜用の曲物が２段置かれてあった。埋土の状況は、上層の土はブロックを含む層で、人為的に埋め戻された土のようであるが、下層は曲物の両側に縦方向の土層の境が認められ、これが井戸掘削時に掘り込まれた曲物を据えるための掘り形であろう。遺物は小片ばかりで図化し得るものはなかった。

ＳＥ－31（第38図）

Ｌ－３区で検出された。平面形は1.4×1.7mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。埋土を見ると、縦方向の土層の境があり、掘り形の中央に径約0.6mの円形の穴が、底まで掘り込まれていたようである。かつては、ここに水溜用の曲物が据えてあったと推定され、井戸廃絶時に曲物が抜き取られた跡と考えられ、側板の木片が残っていた。遺物は底部外面にそれぞれ「□福」、「西」の墨書がある黒色土器Ａ類椀や土錘などが出土している。時期は10世紀前半頃と考えられる。

土坑

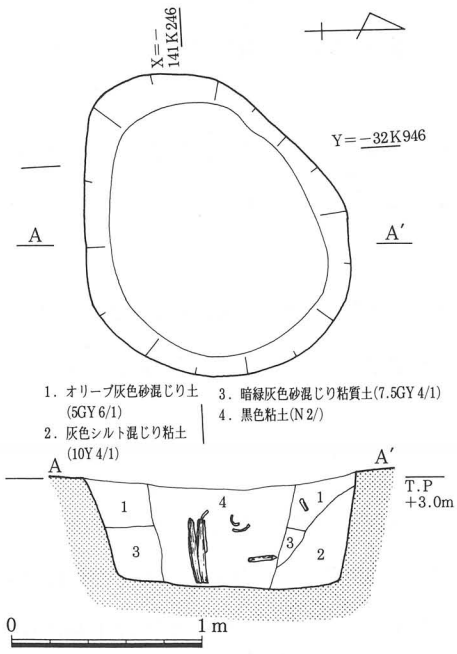
ＳＫ－70（第39図）

Ｌ－３区で検出された。平面形は径約1.7mのほぼ円形を呈しており、深さは0.6mを測る。掘り形の中央で菰状の植物遺体と炭化材が検出されている。遺物は掘り形の東寄りで、土師器壺が破砕された状態で出土している他、そのすぐ隣で小型の壺が出土している。また埋土内から滑石製の臼玉が１点出土している。時期は古墳時代前期頃と考えられる。

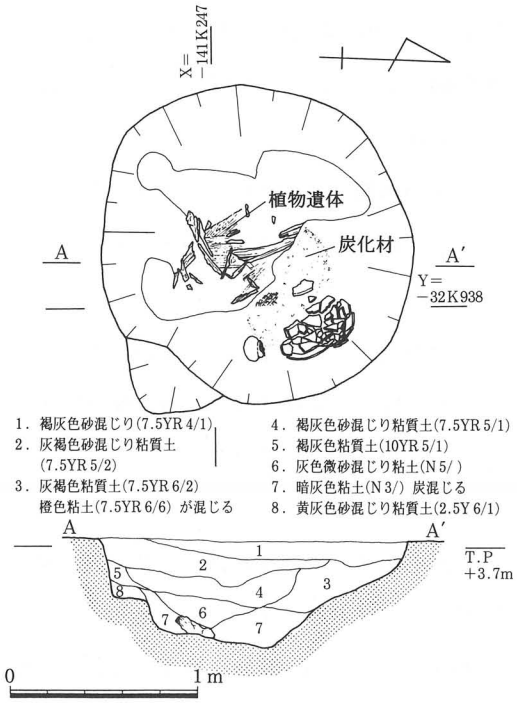
自然流路・河川

ＳＲ－01（第40図）

Ｌ－５・６・10・11区で検出された。北東から南西方向に走り、幅約1.7m，深さ0.4～



第38図　ＳＥ－31平面、土層断面図



第39図　ＳＫ－70平面、土層断面図

0.7mを測る。埋土は主に明黄褐色や黄褐色の細砂～粗砂が堆積している。遺物は古墳時代の須恵器杯蓋、杯身が出土している。時期は古墳時代後期である。

建物・柵列（付図３）

建物２棟、柵５列が復原された。

ＳＢ－14

Ｌ区の北東隅で東西２間（3.3m）、南北２間（3.2m）を検出しており、建物と考えた。トレンチ外に続くものと考えられるが、全体の規模は不明である。柱間は1.1～1.6mで、主軸はＮ－３°－Ｅを示す。柱穴の規模は18～52㎝、深さは５～29㎝を測る。遺物は瓦器椀の小片が出土しているが、全体としては少量である。

ＳＢ－15

Ｌ区の東端で東西２間（4.4m）、南北２間（1.7m）を検出しており、建物と考えた。さらに東側へ続くものと考えられるが、全体の規模は不明である。柱間は2.2mの等間隔で、主軸はＮ－３°－Ｅを示す。

柱穴の規模は20～36㎝、深さは14～29㎝を測る。遺物は土師器皿、黒色土器Ａ類などの小片が出土している。

ＳＡ－13

Ｌ区の西側で検出された。方位はＮ－37°－Ｗ、３間で長さ6.9m、柱間は1.2mでほぼ等間隔である。柱穴の規模は30～57㎝、深さは４～20㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＡ－14

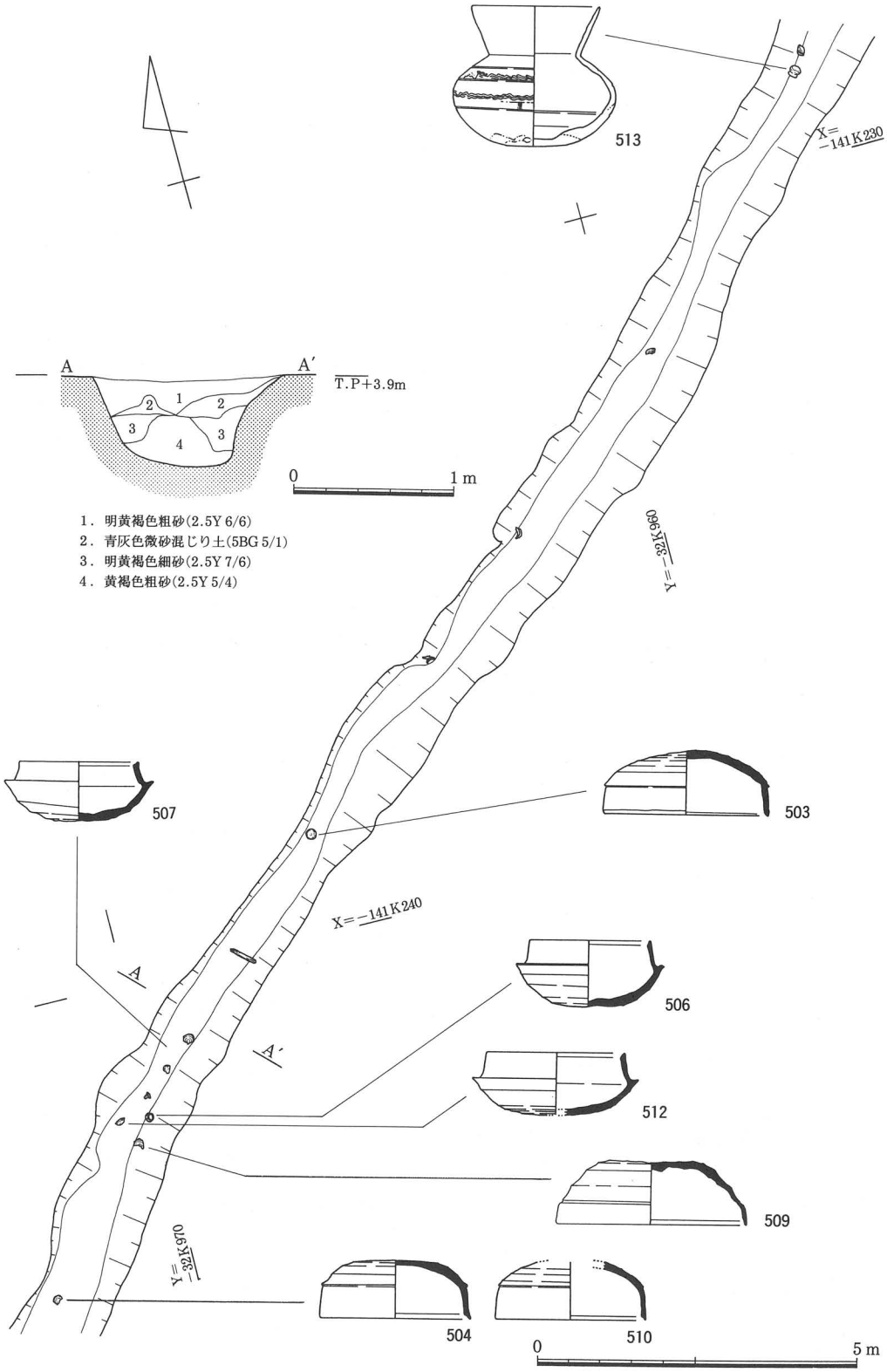
Ｌ区の西側で検出された。方位はＮ－75°－Ｅ、２間で長さ2.3m、柱間は1.8～2.2mである。柱穴の規模は20～39㎝、深さは13～30㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＡ－15

Ｌ区の西側で検出された。方位はＮ－11°－Ｗ、２間で長さ4.5m、柱間は2.1～2.4mである。柱穴の規模は23～36㎝、深さは３～19㎝を測る。ＳＰ－2331には柱根が残存していた。遺物は出土していない。

ＳＡ－16

Ｌ区の西側で検出された。方位はＮ－82°－Ｅである。６間で長さ8.5mを検出しているが、さらにトレンチ外に続くものと考えられる。柱間は１～1.8mで、柱穴の規模は15～29㎝、深さは10～21㎝を測る。ＳＰ－2348には柱根が残存していた。遺物は土師器皿、須恵器の小片が出土している。



第40図　ＳＲ－01平面、土層断面図

ＳＡ－17

Ｌ区の西側、ＳＢ－14の南側で検出された。方位はＮ－87°－Ｅで、ＳＢ－14の方向と一致する。２間の長さ4.3mを検出しているが、さらにトレンチ外に続くものと考えられる。柱間は2.1～2.2mで、柱穴の規模は31～46㎝、深さは28～35㎝を測る。遺物は土師器片が出土している。

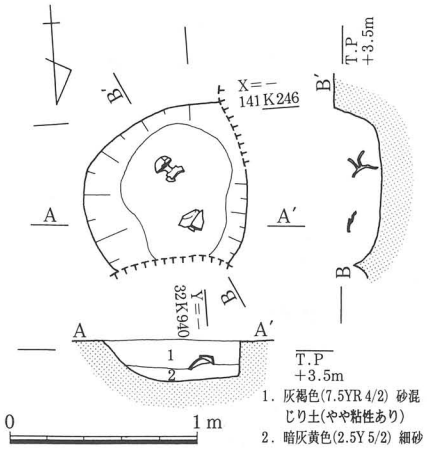
４．第３遺構面（付図４）

土坑、自然河川などが検出されているが、その数は少ない。古墳時代前期の遺構面と考えられるが、水田面は確認することはできなかった。検出面は東側でＴ．Ｐ．＋3.7m、西側でＴ．Ｐ．＋3.5mを測る。

土坑

ＳＫ－80（第41図）

Ｌ－３区で検出された。北側と東側を攪乱によって切られており、平面形は推定で0.9×１mの長円形を呈しており、深さは0.2mを測る。断面形は擂鉢状で、埋土は上層から灰褐色砂混じり土、暗灰色細砂の２層が堆積している。遺物は古墳時代前期に属する土師器高杯が出土した。



第41図　ＳＫ－80平面、立面、土層断面図

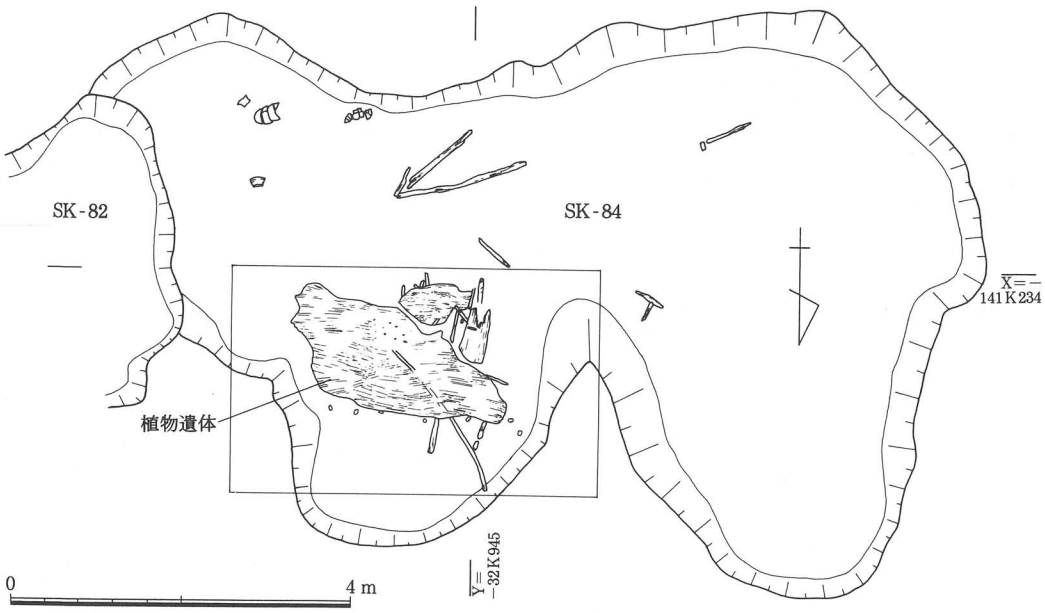
ＳＫ－84（第42図）

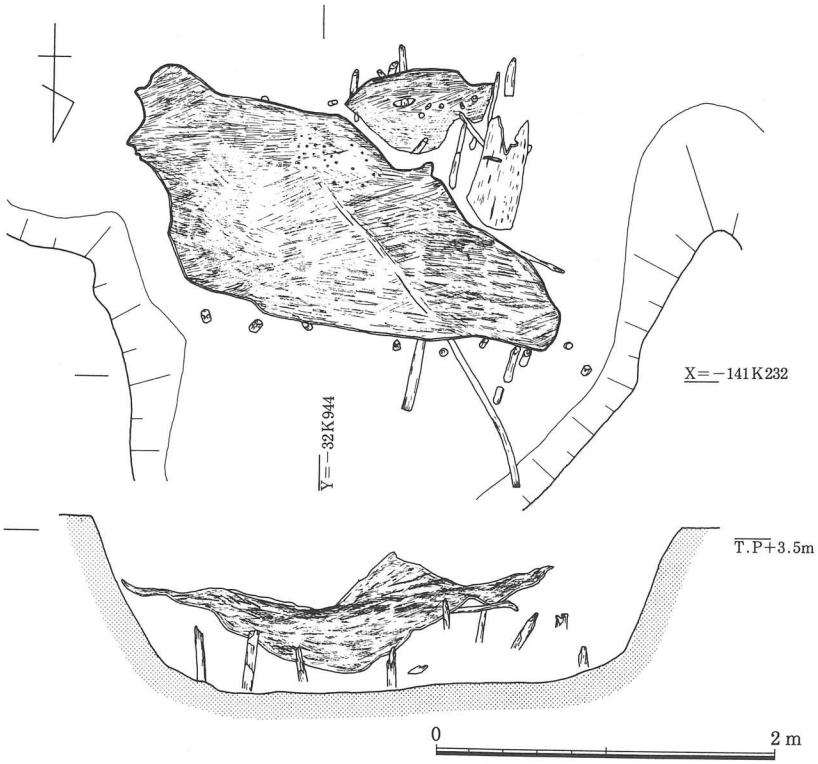
Ｌ－９・10区で検出された。東側をＳＫ－82に切られており、平面形は７×10mの不定形を呈しており、深さは0.4mを測る。埋土はシルトや微砂、細砂などが堆積しており、堆積状況は自然河川の埋土に近い。掘り形内の東側で菰状の植物遺体が検出された。厚みは約0.5～１㎝程で、その周囲と下には杭が打ち込まれており、人為的に造られた何らかの施設であり、その用途を明確にし得ないが、すぐ西側をＳＲ－02が流れていたと考えられ、川に関連するものと想像される。出土遺物は少なく、古墳時代前期の土師器の破片が出土している。

自然河川・流路

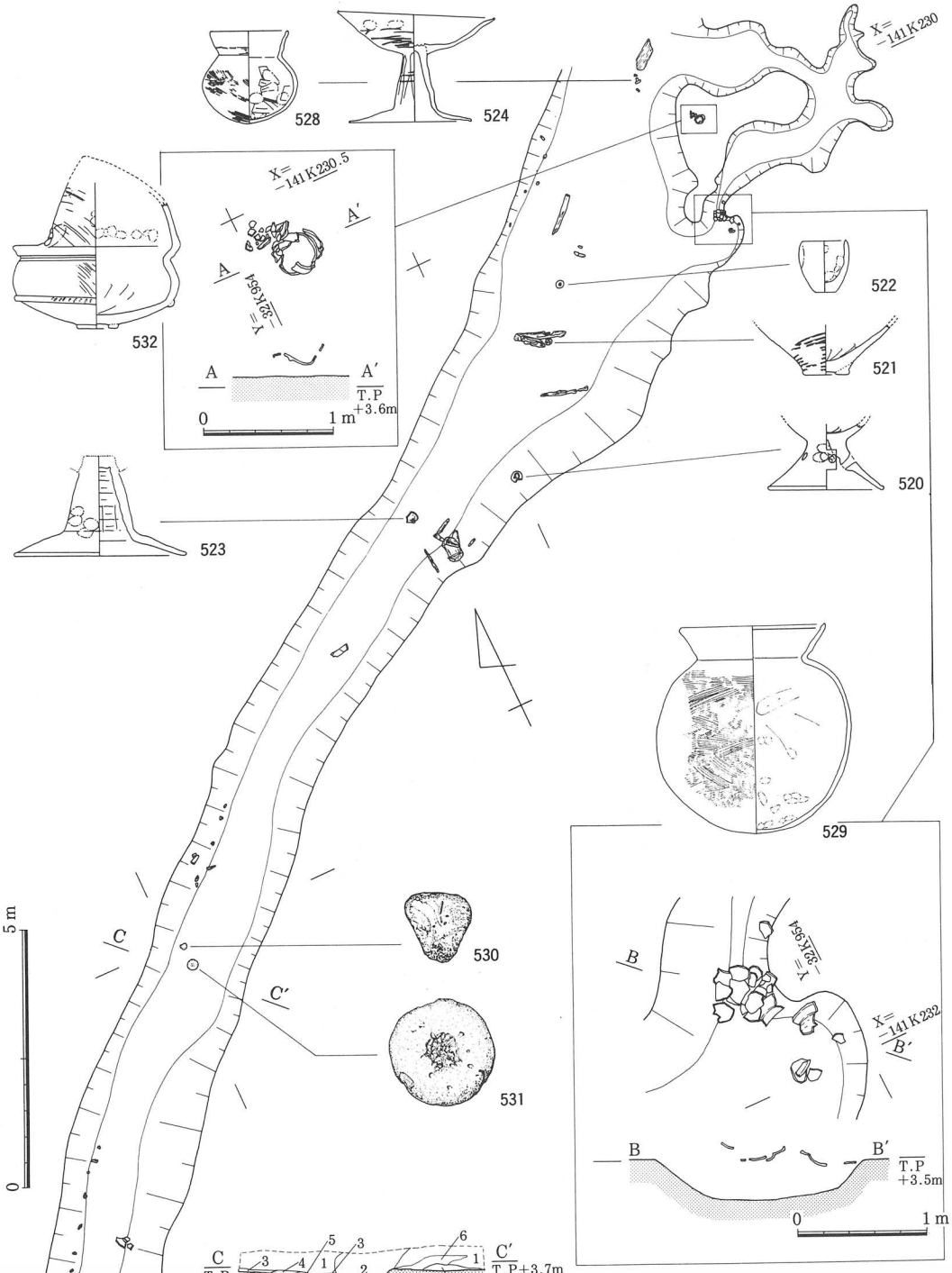
ＳＲ－02（第43図）

Ｌ－５・６・10・11区で検出された。北東から南西方向に走り、幅2.5～3.8m、深さは





第42図　ＳＫ－84平面、立面図（拡大）



第43図　ＳＲ－02平面、土層断面図及び土器出土状況図

0.1～0.7mを測る。上面で検出したＳＲ－01と同一の流路であり、幅は広くなっている。遺物は古墳時代前期の土師器を中心に出土しており、北東端の底の浅い地点から手焙り形土器がほぼ１個体分破砕された状態で出土しているほか、敲き石、凹石がセットで出土している。掘り形内の東側壁には所々に杭列が見られ、人為的に護岸が為されているようである。

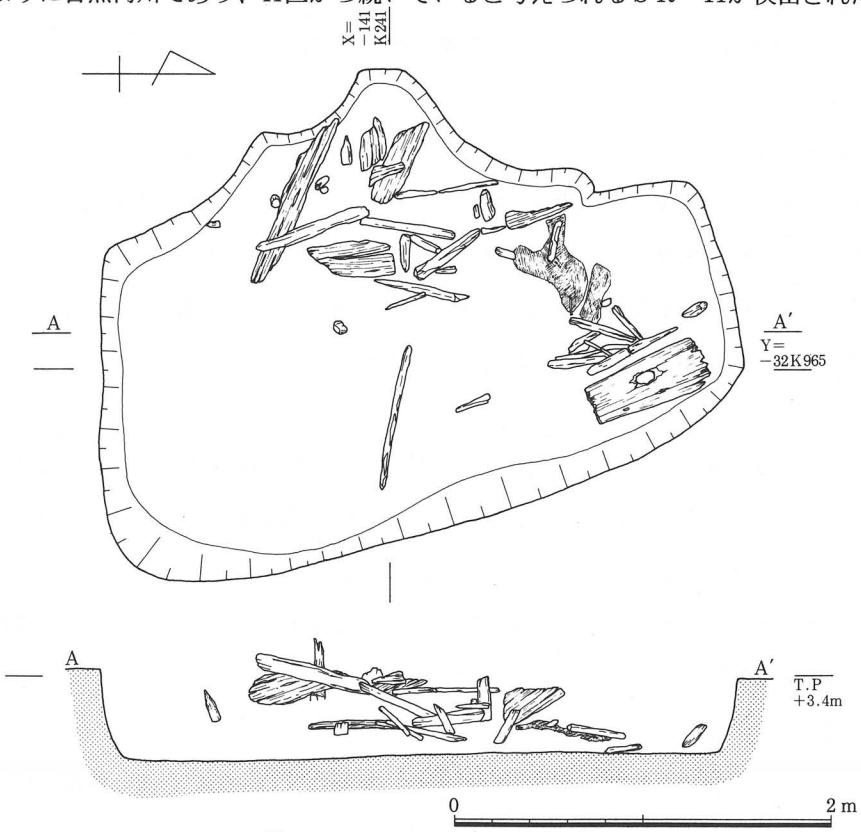
堰・柵

ＳＪ－01（第44図）

Ｌ－５区で検出された。平面形は2.5×3.5mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。掘り形内には杭が打ち込まれ、板材や棒などの木製遺物が散在した状態で検出されているが、大半が自然木である。なかには一部に人為的に加工が施されているものも認められるが、用途は不明である。人為的に何らかの施設が築かれていたと考えられるが、不明である。土器は出土しなかった。時期はＳＲ－02と同様に古墳時代前期頃と考えている。

５．第４遺構面（付図５）

トレンチの東側で蛇行しながら南へ続く畦状の高まりを検出されたが、Ｋ区の項でも述べたように自然河川であり、Ｋ区から続いていると考えられるＳＲ－11が検出された。



第44図　ＳＪ－01平面、立面図

第3節　M・N区の遺構

M区は第Ⅲ期調査区の南側に位置しており、N区は西側に位置する。調査はM・N区を一つのトレンチとして掘削したが、N区は水路改修部分にあたり、掘削の深度はGL－約1.5mまでで、第2遺構面下層で調査を終了している。調査前の地表面の標高は、M区の東側でT.P.＋4.7m、西側でT.P.＋4.2mを測り、N区の北側でT.P.＋5.1m、南側でT.P.＋4.1mを測る。

1．第1遺構面（付図1）

近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝や鋤溝、土坑などが検出された。溝は水田や畑などの区画を兼ねた潅漑用の水路で、土坑は水溜用の野井戸と考えられる。検出面はM区の東側でT.P.＋4.0m、西側でT.P.＋4.1mを測り、ほぼ平坦であった。

溝

SD－01

M－9区で検出された。南北方向に走り、南端はトレンチ外へ続いているものと考えられるが、北端はO区で検出されなかったので、途中で終わっているようである。幅0.9m、深さは0.2mを測る。埋土は灰色土で、遺物は染付の小片が出土している。

SD－02

M－10区で検出された。東西方向に走り、検出長6.4m、幅0.3m、深さは0.1mを測り、埋土は灰色土である。遺構検出段階では溝としたが、トレンチ全体で見られた耕作痕（鋤溝）の一つで、深度が深かったために溝のように検出されたものである。SD－02の他にSD－04・06・08～23がそれに該当し、SD－22・24・25なども幅は広いものの、複数の鋤溝が集まったものと考えられ、水路としての溝とは区別されるべきものである。

SD－03

M－2・11区で検出された。南北方向に走り、両端とも側溝に切られ、北側はトレンチ外へと続いており、L・O区でも同一遺構と考えられる溝が検出されている。南側もさらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。幅は0.8～1.6mを測るが、途中SD－05に合流する地点からその幅を半分に狭めている。埋土は灰色土及び灰色砂質土で、遺物は染付などの陶磁器類が少量出土しているだけである。

SD－05

M－11～17区で検出された。東西方向に走り、東端はSD－03に合流し西端は側溝に切られるが、トレンチの西側に続いているようである。途中の15区でSD－07が合流してい

る。幅0.4～0.8m、深さは0.3mを測り、埋土は黒灰色土で、遺物は少量の土師器皿や瓦器椀の小片が混入するが、近世の陶磁器類を中心に出土している。

ＳＤ－07

Ｍ－６・15区で検出された。南北方向に走り、北端はＳＤ－05に合流し南端は側溝に切られるが、トレンチの南側に続いているようである。幅0.6～1.2m、深さは0.3mを測り、埋土はオリーブ黒色土で、遺物は少量の土師器皿や瓦器椀の小片が混入するが、近世の陶磁器類を中心に出土している。

ＳＤ－26

Ｎ－４・５区で検出された。東西方向に走り、検出長2.6m、幅2.2m、深さ0.2mを測る。西端は舌状に終わり東側はトレンチ外へ続いているが、Ｌ区では検出されておらず途中で終わっているようで、全長は３ｍ未満と推定される。幅広の溝で、畝状遺構と考えられる。埋土は黄灰色土が堆積しており、遺物は染付の他、瓦器椀、土師器皿などの小片が混入して出土している。

ＳＤ－26

Ｎ－５区、ＳＤ－26の北側で検出された。ＳＤ－26に平行して東西方向に走り、検出長2.7m、幅1.6m、深さ0.1mを測る。検出状況、形状、規模、埋土、出土遺物はＳＤ－26と同様の状況を示しており、畝状遺構と考えられる。

土坑

ＳＫ－01

Ｍ－１区で検出された。平面形は径約0.8mの円形を呈しており、深さは0.8mを測る。埋土は灰黒色土で、遺物は出土しなかった。用途は不明であるが、耕作地に水を供給するために雨水などを一時的に貯めておく水溜用の野井戸と考えられる。

ＳＫ－02

Ｍ－13区で検出された。平面形は0.8×1.2mの楕円形を呈しており、深さは0.6mを測る。埋土はオリーブ黒色土で、遺物は出土しなかった。水溜用の野井戸と考えられる。

ＳＫ－03

Ｍ－６区で検出された。平面形は0.6×１ｍの隅丸長方形を呈しており、深さは0.5mを測る。埋土は灰黒色土で、遺物は出土しなかった。水溜用の野井戸と考えられる。

ＳＫ－04

Ｍ－15区で検出された。平面形は0.6×1.5mの楕円形を呈しており、深さは0.5mを測

る。埋土は灰黒色土で、遺物は出土しなかった。水溜用の野井戸と考えられる。

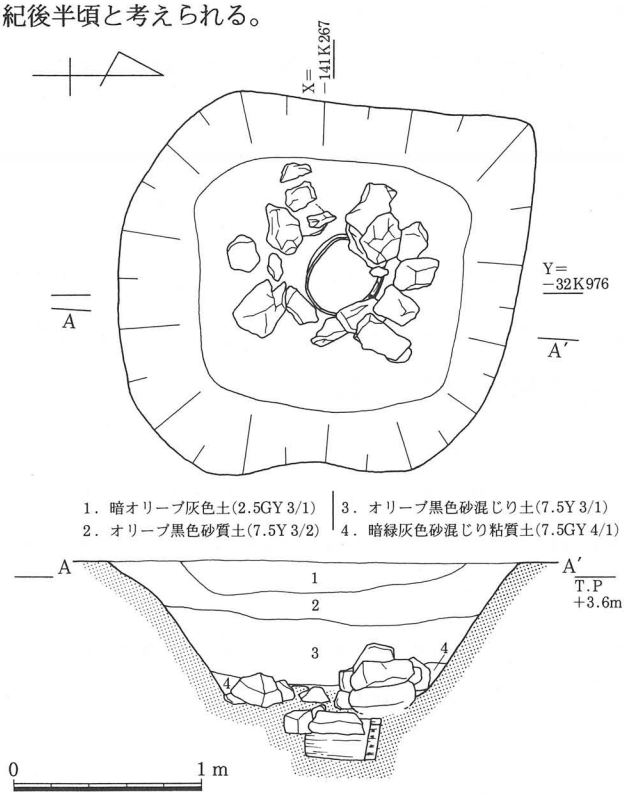
2．第２遺構面上層（第46図、付図２）

M区の西側、N区の全域で中世の溝、井戸、土坑、ピットなどが検出され、M区の東側では遺構は検出されておらず鋤溝が見られる程度であった。ピットは多数検出されており、建物、柵が復原できた。検出面はM区の東側でＴ．Ｐ．＋3.8m、西側でＴ．Ｐ．＋3.7mを測り、N区の北側でＴ．Ｐ．＋4.1m、南側でＴ．Ｐ．＋3.7mを測る。

井戸

ＳＥ－03（第45図）

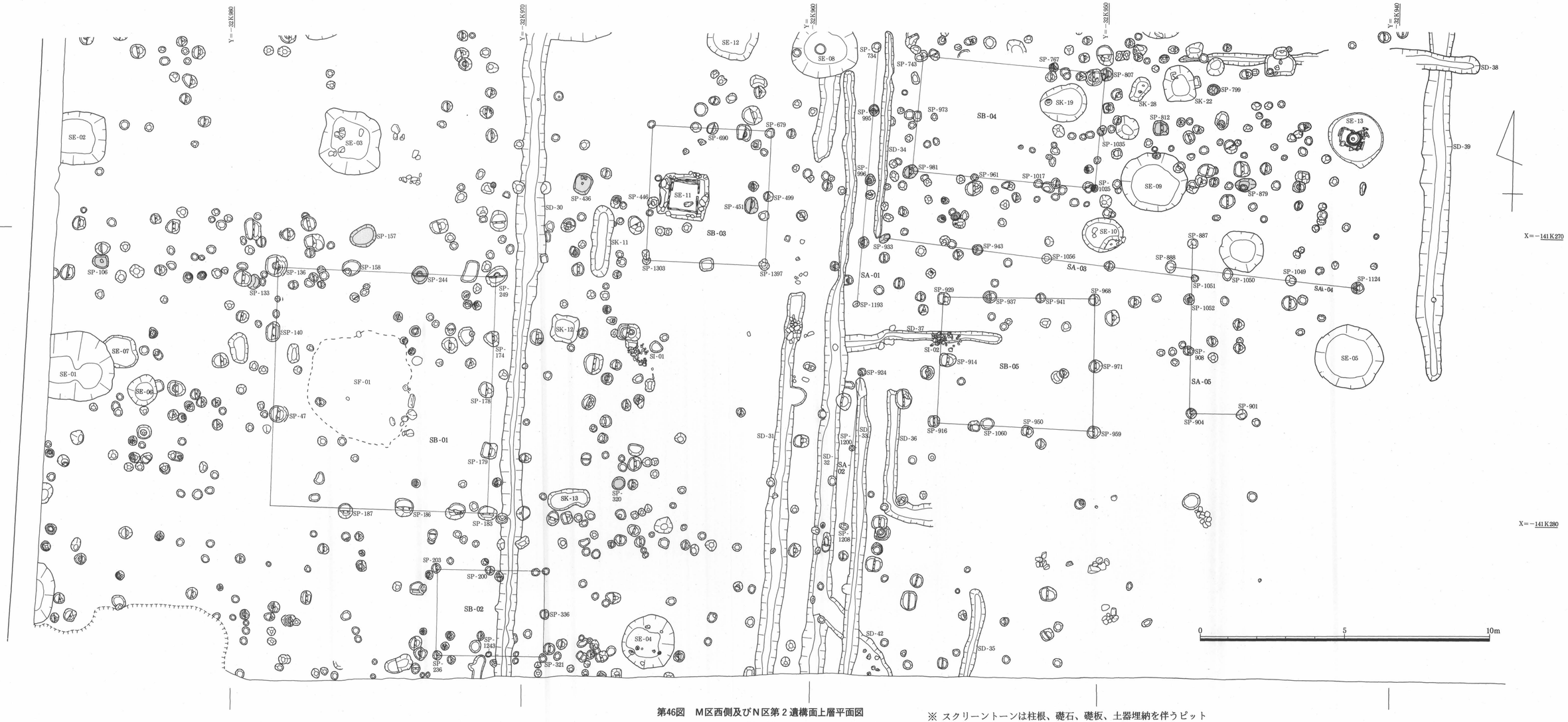
M－17区で検出された。平面形は2.1×2.2mの隅丸方形を呈しており、深さは0.9mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。掘り形の中央に水溜用の曲物が底面からさらに掘り下げて１段置かれており、その上部には曲物が隠れないように花崗岩の割り石が曲物の周囲を取り囲んでいた。石は井戸側に使用されたものと考えられ、元々は石積みが検出面まで存在していたと推定され、井戸廃絶時に上部にあった石を抜き取り、埋め戻されたものと考えられる。遺物は瓦器椀、土師器皿の小片が出土しており、時期は13世紀後半頃と考えられる。



第45図　ＳＥ－03平面、立面、土層断面図

ＳＥ－04（第47図）

M－６・７区で検出された。平面形は径約1.8mの円形を呈しており、深さは1.8mを測る。断面形を見ると、上段は検出面から垂直に近い傾斜で掘り込まれており、下段は掘り形が一辺約1.2mの隅丸方形となり、そこから底面まで、西壁以外の壁は垂直に掘り込まれている。上段と下段の境はテラス状を呈している。四隅に隅柱を立て、横桟と縦板を使用した方形の井戸側であるが、検出時は南側と西側の縦板が、土圧により傾いた



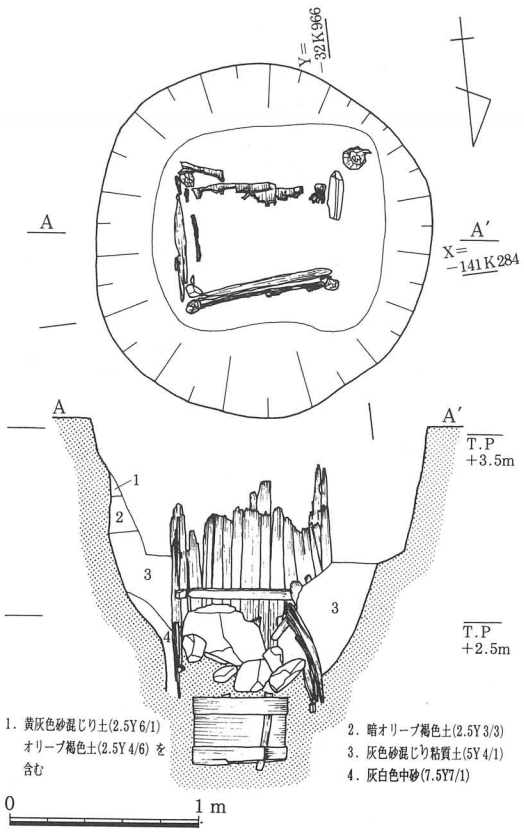
第46図　M区西側及びN区第２遺構面上層平面図

※ スクリーントーンは柱根、礎石、礎板、土器埋納を伴うピット

状態であった。井戸側の底には水溜用の曲物が１段置かれており、曲物の上部は井戸の廃絶時に入れられたと推定される花崗岩の割り石で塞がれていた。遺物は土師器皿、瓦器椀、常滑甕、砥石などが出土しており、土師器皿は11世紀前半の時期を示し、瓦器椀は13世紀初の時期を示している。出土遺物の年代幅が広いが、井戸の廃絶時期を13世紀初～前半頃と考えている。

ＳＥ－06（第48図）

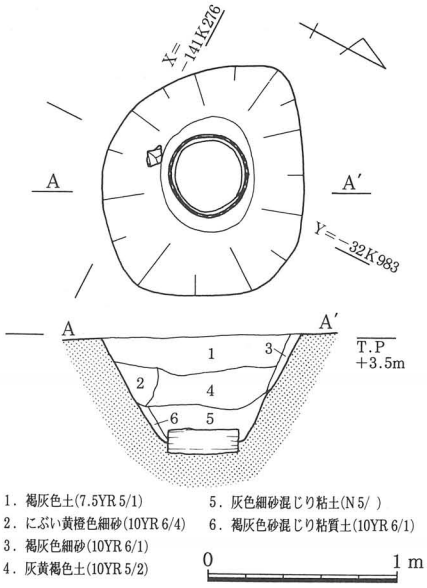
Ｎ－１区で検出された。ＳＥ－01・07のすぐ東側で検出されており、３個の井戸が集中して存在している。平面形は1.1×1.4mのやや隅丸方形に近い不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は擂鉢状で底面は平坦である。掘り形の底には水溜用の曲物が１段置かれてあった。遺物は瓦器椀、土師器皿などの小片が出土しており、時期は明確にし得ないが、13世紀代と考えられる。



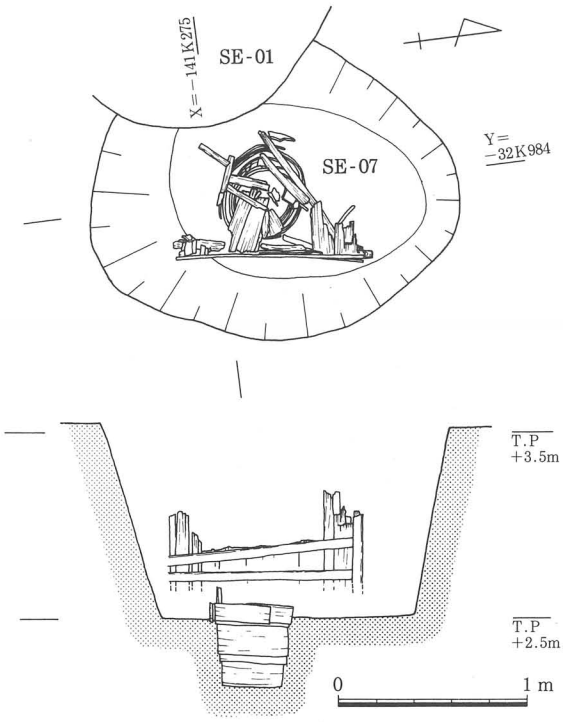
第47図　ＳＥ－04平面、立面、土層断面図

ＳＥ－07（第49図）

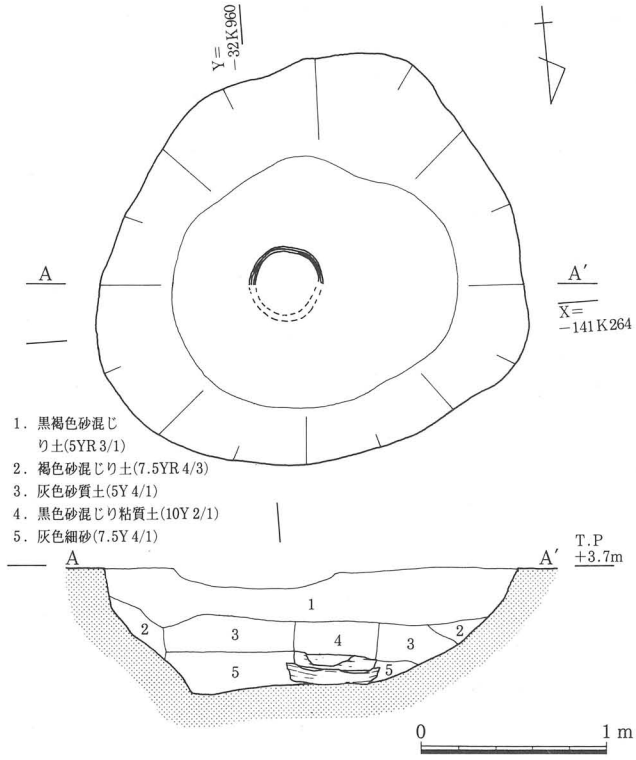
Ｎ－１区で検出された。ＳＥ－01東側で検出されており、切られている。平面形は1.7×２mの不定形を呈しており、深さ1.4mを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。底面からさらに掘り下げた所で水溜用の曲物が３段重ねて置かれてあった。井戸側は隅柱を立て、横桟と縦板で方形に囲んでいたようであるが、遺存していたのは東側部分だけであった。遺物は瓦器椀、土師器皿、常滑甕などが出土して



第48図　ＳＥ－06平面、立面、土層断面図



第49図　ＳＥ－07平面、立面、断面図



第50図　ＳＥ－08平面、土層断面図

いるが、出土量も少なく、破片ばかりで図化し得たものはない。時期は特定し難いがＳＥ－01との切り合い関係から13世紀初頭～前半頃と考えている。

ＳＥ－08（第50図）

Ｍ－15区で検出された。平面形は2.2×2.3mの不整円形を呈しており、深さは0.7mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。水溜用の曲物が底面の中央やや東寄りに置かれていたが、遺存状況は悪く曲物の上部は既に破損していた。土層断面を見ると、井戸廃絶時に埋め戻す前に曲物を抜き取った跡があり、少なくとも２段以上の曲物が上に重ねられていたと推定される。遺物は完形に近い瓦器椀や、土師器皿、青磁などの破片が出土しており、瓦器椀には古い形態の特徴が見られるので、時期は11世紀末～12世紀前半頃と考えられる。

ＳＥ－09（第51図）

Ｍ－14区で検出された。北側はＳＰ－1040・1041の２個のピットに切られているが、平面形は２×2.2mの長円形を呈しており、深さは0.7mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。水溜用の曲物が３段置かれていたが、掘り形の南壁に

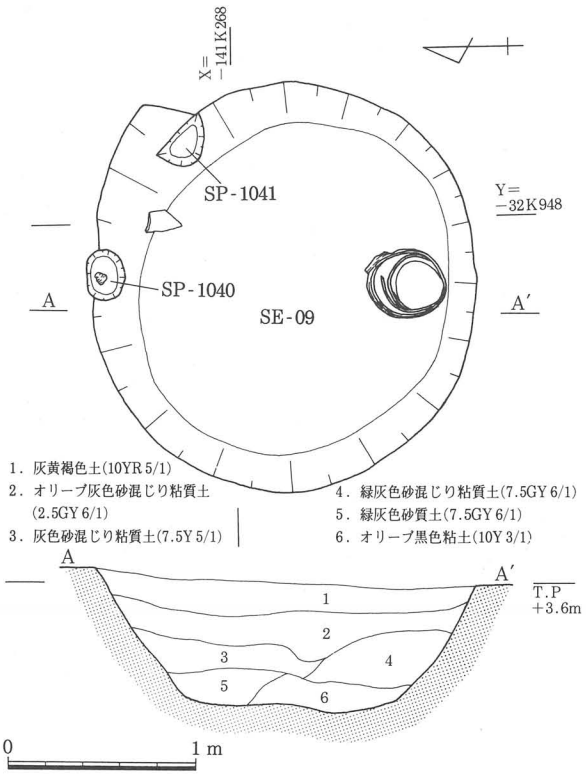
寄せられており、井戸廃絶時の埋め戻しの際に移動されたものと推定される。検出時は素掘りの状態であったが、掘り形がが大きいので井戸側などの上部施設が存在した可能性も考えられる。遺物は瓦器椀、土師器皿、常滑甕と混入品と考えられる須恵器杯身が出土しており、時期は12世紀後半～13世紀初め頃と考えられる。

ＳＥ－10（土坑）（第52図）

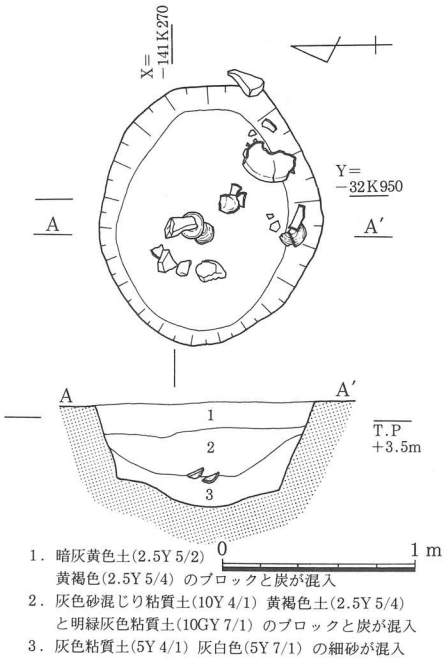
Ｍ－14区で検出された。平面形は1.2×1.4mの長円形を呈しており、深さは0.6mを測る。埋土は３層に分かれており、上層、中層は炭化物を含み、黄褐色土、明緑灰色土のブロックが混ざるので人為的に埋め戻された土で、下層は灰色粘質土で、底面近くに細砂が堆積している。遺物の出土状況を見ると、底面付近に瓦器椀と白磁碗が重なり合い、白磁碗の上に砥石が置いてあった他、上層の掘り形の南東寄りから、土師器脚付き鍋、瓦器椀、瓦器足釜などが出土している。遺構検出時では井戸としていたが、井戸と決定づけるようなものは検出されず、土坑と考えた方が良さそうである。時期は12世紀初頭～13世紀初頭頃と考えられる。

ＳＥ－11（第53図）

Ｍ－15区で検出された。平面形は一辺が約1.7mのほぼ方形を呈しており、深さは1.4mを測る。掘り形の壁は検出面から約1.2m程度まで斜めに

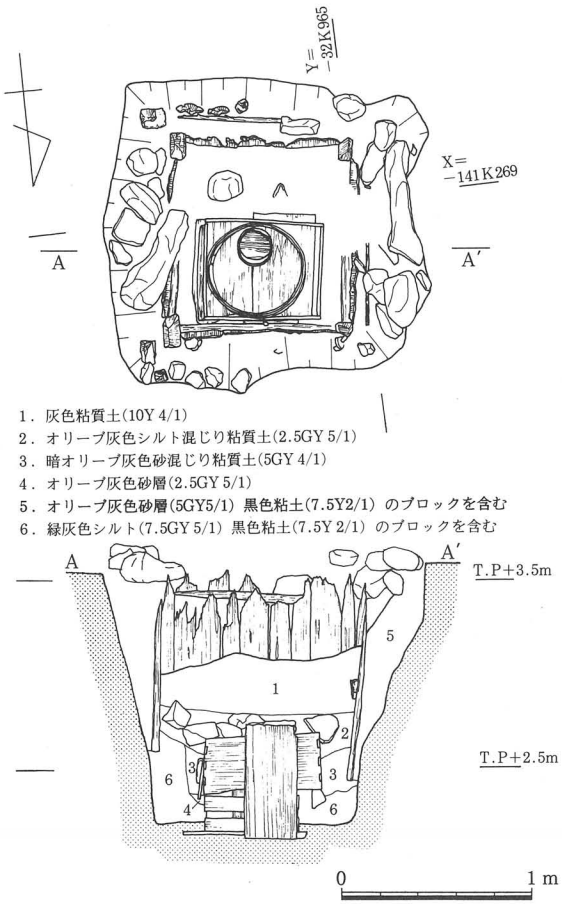


第51図　ＳＥ－09平面、土層断面図



第52図　ＳＥ－10平面、土層断面図

掘り込まれており、そこから底面まではほぼ垂直に下がり、底面は平坦である。方形の井戸側とその内部の底には水溜用の曲物が置かれていた。井戸側は四隅に角材で隅柱を立て、それに穴を切り横桟を組んでおり、縦板を立て並べて囲んでいる。南側、西側では、さらにその外側に縦板を充てて、補強している部分も見られる。底面には水溜用の曲物が置かれており、底板として板材が２枚合わせて敷かれていた。曲物内には小型の曲物容器が入っており、水汲み用として使用されていたものであろう。曲物上部の外側には、土圧から曲物を保護するため箱枠をかぶせ、箱枠を支えるように北側と南側に縦板を当てている。検出面では割り石が井戸側を囲むようにして残っており、上部施設として石積みによる井桁が存在していたと推定される。井戸側内の埋土は灰色粘質土の１層で、井戸廃絶時の埋め戻しの土である。また、井戸側の外側を囲むようにして、隅柱を立て縦板を立てた別の井戸側が存在していたようであるが、残念ながら調査時にはそのような問題意識はなく、土層断面でも確認することはできなかった。しかしながら、井戸側は１度作り換えられてると考えられ、最初に作られた井戸側の内側に、２度目の井戸側が作られていたようである。遺物は土師器甕、須恵器壺、須恵器甕、緑釉陶器、黒色土器Ａ類・Ｂ類椀、土師器皿、土師器椀など出土しているが、掘り形内、井戸側内の遺物とも10世紀末～11世紀初頃の時期を示してる。黒色土器Ａ類椀の底部外面に「廣正？」の墨書がされていた。



第53図　ＳＥ－11平面、立面、土層断面図

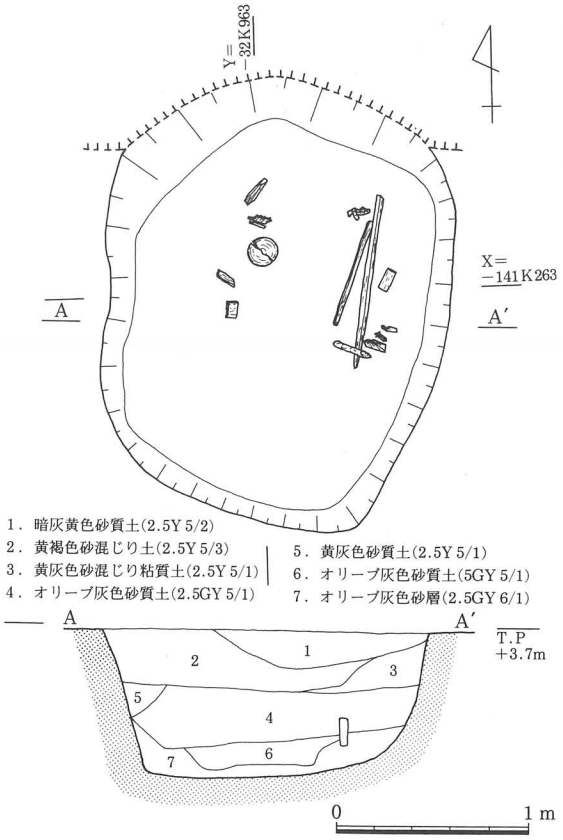
ＳＥ－12（第54図）

Ｍ－15区で、ＳＥ－08の西側で検出された。平面形は1.9×2.4mの不定形を呈しており、深さは0.8mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦であるが、底面検出時に掘り

下げ過ぎてしまったようで、実際の底面は土層断面図のオリーブ灰色砂層の上面であったと考えられる。井戸であったことを示すような施設は検出されなかったが、板材や木片などが残っており、また底面の中央部が窪んでいるのは、水溜用の曲物が置かれていたためと推定されるので、井戸の抜き取り跡と考えられる。遺物は瓦器椀、瓦器皿、土師器皿、土師器高台付き皿、白磁片などが出土しており、井戸の廃絶時期は12世紀末～13世紀初頃と考えられる。

ＳＥ－13（第55図）

Ｍ－13区で検出された。平面形は上部を攪乱によって削平されていたため不明であるが、推定で径約1.8～２ｍの円形を呈していたと考えられ、深さは約1.2ｍを測る。掘り形は３段掘りになっており、上段は擂鉢状に検出面から斜めに掘り込まれており、中断は袋状に壁を抉るように掘られ、下段は曲物が入る程度の穴を垂直に掘り込んでいる。隅柱と縦板を使用した方形の井戸側であるが、上部は朽ちており、横桟はなかった。水溜用の曲物は４～５段で構成されており、井戸側の縦板と曲物の間には石が充填されていたようで、割り石が数個残存していた。遺物は曲物内底部で完形の土師器皿が出土している。時期は11世紀中頃～後半頃と考えられる。

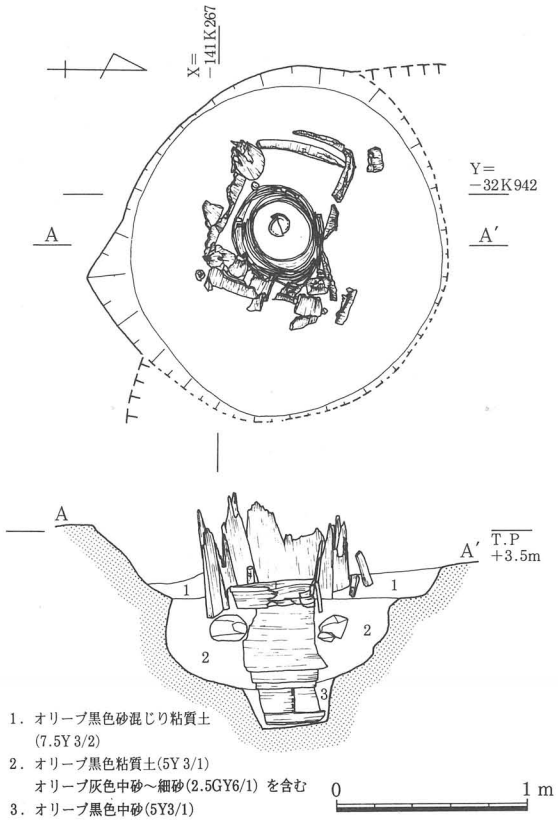


第54図　ＳＥ－12平面、土層断面図

土坑

ＳＫ－06（井戸）（第56図）

Ｍ－17区で検出された。北側の一部分をＳＤ－29と重複するが、前後関係は明確にし得なかった。平面形は２×2.5ｍの不定形を呈しており、深さは1.3ｍを測る。南側の壁は検出面から斜めに掘り込まれ、北側は垂直に掘り込まれている。遺構検出時は土坑と考えていたが、掘り形内で常滑甕の上半部とその下から水溜用の曲物が検出されたため、井戸で



第55図　ＳＥ－13平面、立面、土層断面図

あることが判明した。井戸の構造は、底面からさらに掘り下げた最下部に水溜用の曲物を置いていた。曲物の外側には土圧による曲物の変形を防ぐためか、３枚の平瓦を密着させた状態で曲物を囲んでいたが、平瓦はその内１枚が完形で、３枚の瓦でできる円弧と曲物の円弧はよく符合していた。曲物の上には底部を欠く常滑大甕が載せられていたが、崩壊して北東へずれた状態で検出された。甕内部にも曲物があり、その径は下の曲物のそれとほぼ一致するので、元々真上に載っていたものが、井戸廃絶時の埋め戻しの際に移動したと考えられる。さらに甕の上部には、甕の口縁部を取り巻くように径の大きい曲物があり、これが井筒の最上部になっている。また、その曲物を囲むように、周囲に割り石が残っていたので、検出面まで石積みによる井戸側が存在していた可能性も考えられる。遺物は前述の平瓦、常滑甕の他に、東播系須恵器片口鉢、瓦器鍋、土師器皿、鉄釘などが出土している。この中で注目されるのは、最下部の曲物を囲んでいた平瓦の１枚に「東大寺」の刻印が施されていたことである。この瓦は平安末から鎌倉時代初頭にかけて、東大寺再建のため岡山県瀬戸町にある万富瓦窯で焼かれたものであることはほぼ確実であり、12世紀末～13世紀初頃のものである。他の２枚の瓦も刻印はないものの、タタキメの文様の特徴から同窯産と推定され、どの時期で井戸に使用されたかは明確ではないが、土器の時期は13世紀前半頃を示している。

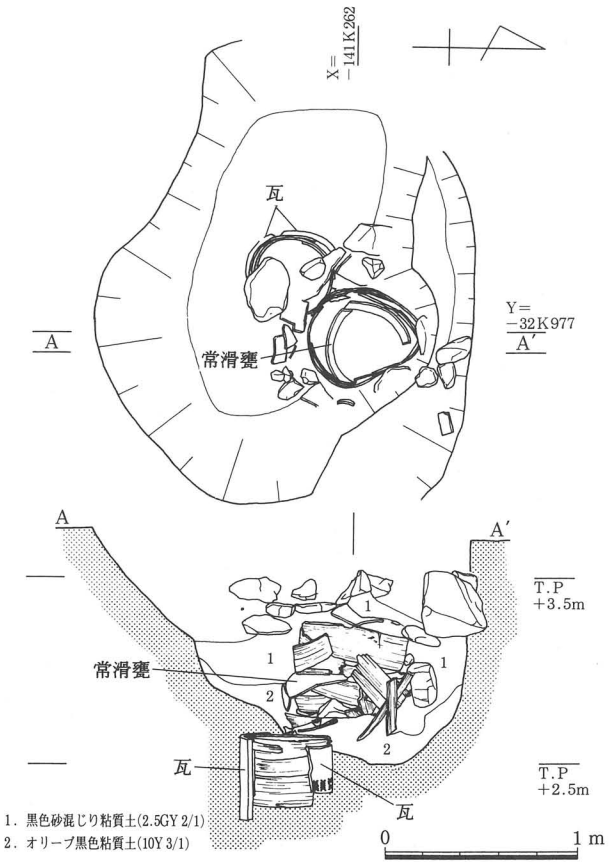
ＳＫ－08（第57図）

Ｍ－16区で検出された。平面形は1.5×1.8mの不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は擂鉢状で、埋土は中央が窪むレンズ状の堆積をしており、底部には灰色砂層の堆積が認められた。遺物は瓦器足釜、土師器皿、土師器高台付き皿などが出土している。

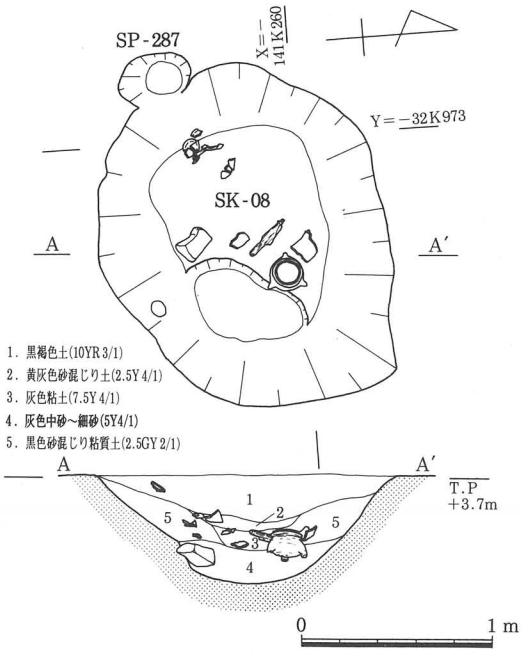
時期は13世紀中頃～後半頃と考えられる。

ＳＫ－09（第58図）

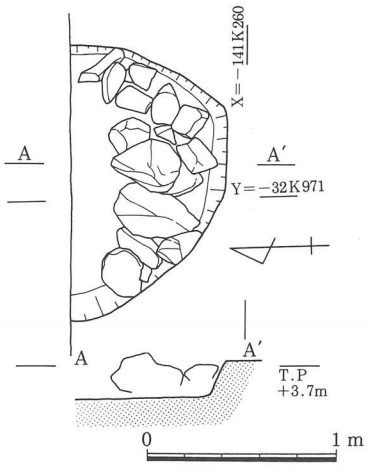
Ｍ－16区で、ＳＫ－08の北東に接して検出された。北側を側溝により切られているため半円形で検出されているが、平面形は推定で径約1.4mのほぼ円形を呈しているものと考えられる。深さは0.2mと浅く、掘り形内で花崗岩の割り石がほとんど隙間なく置かれた状態で検出された。石を除去して底面を調べたが、何も検出されなかった。遺物は瓦器椀や土師器皿の小片が出土しているが、時期は特定し難い。



第56図　ＳＫ－06平面、立面、土層断面図



第57図　ＳＫ－08平面、立面、土層断面図



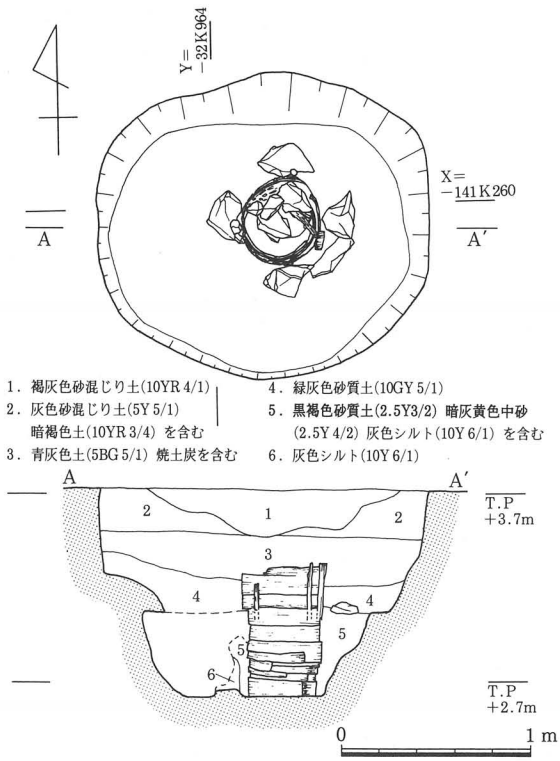
第58図　ＳＫ－09平面、断面図

ＳＫ－14（井戸）（第59図）

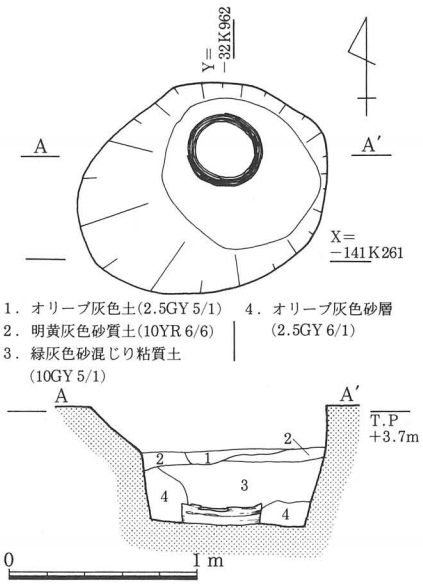
Ｍ－15区で検出された。北側を側溝に切られており、平面形は推定で1.7×1.8mのほぼ円形を呈しており、深さは1.1mを測る。壁は検出面から約0.6m程までは垂直に、そこから底面までは斜めに掘り込まれている。底面はほぼ平坦で、中央に水溜用の曲物が５段置かれてあった。最上段の曲物の周りには杭を打ち込み、曲物を固定していたようである。また、割り石が囲んでおり、石積みの井戸側が存在した可能性がある。埋土はおよそ５層に分かれており、褐色砂混じり土、暗褐色土の混じる灰色砂混じり土、焼土や炭化物の混じる青灰色土が堆積しており、井戸廃絶時に人為的に埋め戻された土であり、下層の曲物の掘り込まれている砂質土は、湧水層と考えられる。遺物は瓦器椀、土師器皿、瓦器釜などが出土しており、時期は12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ－15（井戸）（第60図）

Ｍ－15区で検出された。平面形は0.9×１mの楕円形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形を見ると東壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれるが、西壁は検出面から約0.2m程まで斜めに掘り込まれた後、底面まで垂直に下がる。底面はほぼ平坦である。掘り形の北寄りの底面に、水溜用の曲物が２段



第59図　ＳＫ－14平面、立面、土層断面図

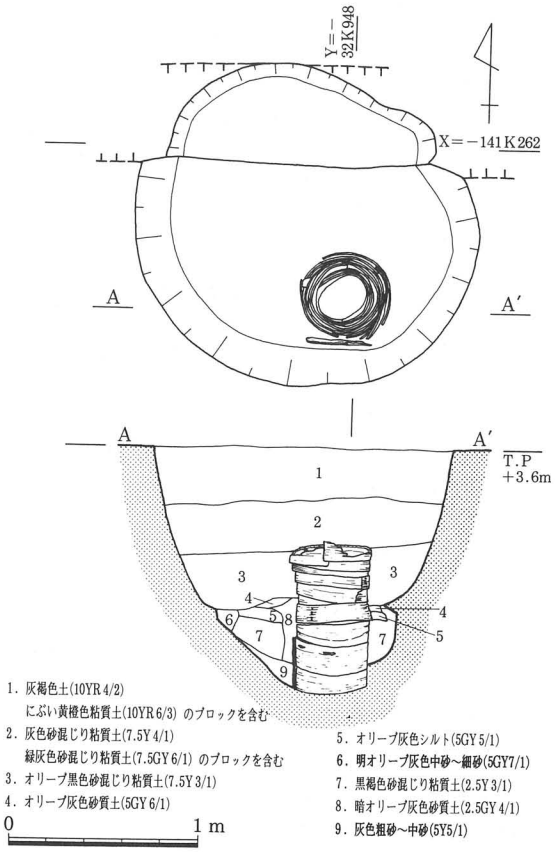


第60図　ＳＫ－15平面、立面、土層断面図

置かれてあったので井戸と考えられる。遺物は少量の瓦器椀、土師器皿が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ－21（井戸）（第61図）

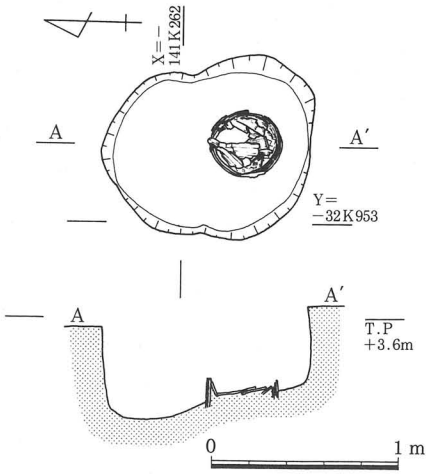
Ｍ－14区で検出された。平面形は1.7×1.8mの不整円形を呈しており、深さは1.3mを測る。断面形は擂鉢状を呈し、底面の南寄りに、水溜用の曲物が５～６段置かれていたので井戸と考えられる。検出面から曲物の約上半部まで黄橙色粘質土、緑灰色砂混じり粘質土のブロックが混入する灰褐色土、灰色粘質土、オリーブ黒色砂混じり粘質土の３層が水平に堆積しており、井戸廃絶時の埋め戻しの土と考えられる。曲物内上部には土師器皿10数枚がまとまって出土しており、井戸廃絶時に人為的に埋納されたものと考えられる。遺物はこの他に瓦器椀が出土しており、時期は13世紀前半～後半頃と考えられる。



第61図　ＳＫ－21平面、立面、土層断面図

ＳＫ－22

Ｍ－14区で検出された。平面形は１×1.3mの隅丸方形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。埋土は灰色土、オリーブ灰色砂混じり粘質土が堆積している。検出面から約0.3mの深さ北壁寄りの所で、土師器皿、瓦器足釜の破片がまとまって出土している。時期は13世紀前半頃と考えられる。



第62図　ＳＫ－25平面、断面図

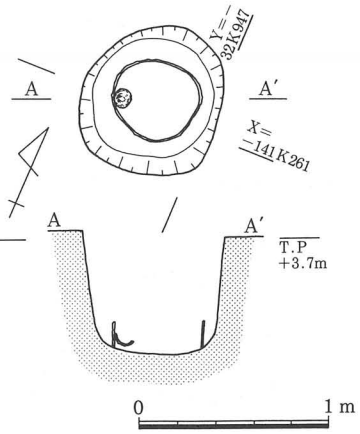
ＳＫ－25（井戸）（第62図）

Ｍ－14区で検出された。平面形は１×1.1mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。

壁は検出面から垂直に掘り込まれており、底面は北側でやや深くなっている。底面の南寄りで水溜用の曲物が１段置かれており、井戸と考えられる。曲物内は灰色粘土が堆積し、上部から曲物の破片や割り石が検出された。瓦器椀、土師器皿などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ－27（井戸）（第63図）

Ｍ－14区で検出された。平面形は0.7×0.8mの不定形を呈しており、深さは0.7mを測る。掘り形の壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。底面には水溜用の曲物が１段置かれており、井戸と考えられる。曲物内からは瓦器椀が完形で出土している他、土師器皿、瓦器釜片が出土しており、時期は13世紀中～後半頃と考えられる。



第63図　ＳＫ－27平面、断面図

溝

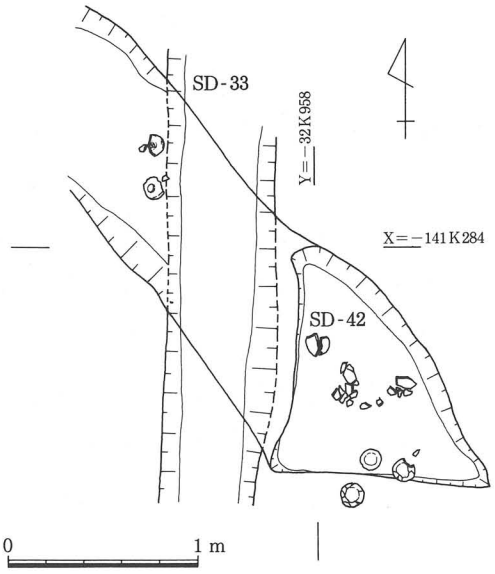
ＳＤ－42（第64図）

Ｍ－６区で検出された。北西から南東方向に走り、南東側は側溝に切られ、中央をＳＤ－33に切られている。南東端はさらにトレンチ外へ続いているものと考えられるが、北西端はＳＤ－32に切られて終わっている。幅は約1.3mで、深さは0.1～0.2mを測る。遺物は瓦器椀、土師器皿が点在して出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

焼土坑

ＳＦ－01（第65図）

Ｍ－７・８区で検出された。平面形は3.6×４mの不定形を呈しており、深さは0.3～0.4mを測る。断面形は擂鉢状で底面は平坦である。埋土には暗赤褐色やにぶい黄褐色を呈する焼土のブロックと炭化物が含まれており、特に土坑内の西北側に多く見られた。また、東側には花崗岩の割り石がかたまって検出されている。遺物は土師器、黒色土器Ａ類杯などの小片が出土している。



第64図　ＳＤ－42平面図

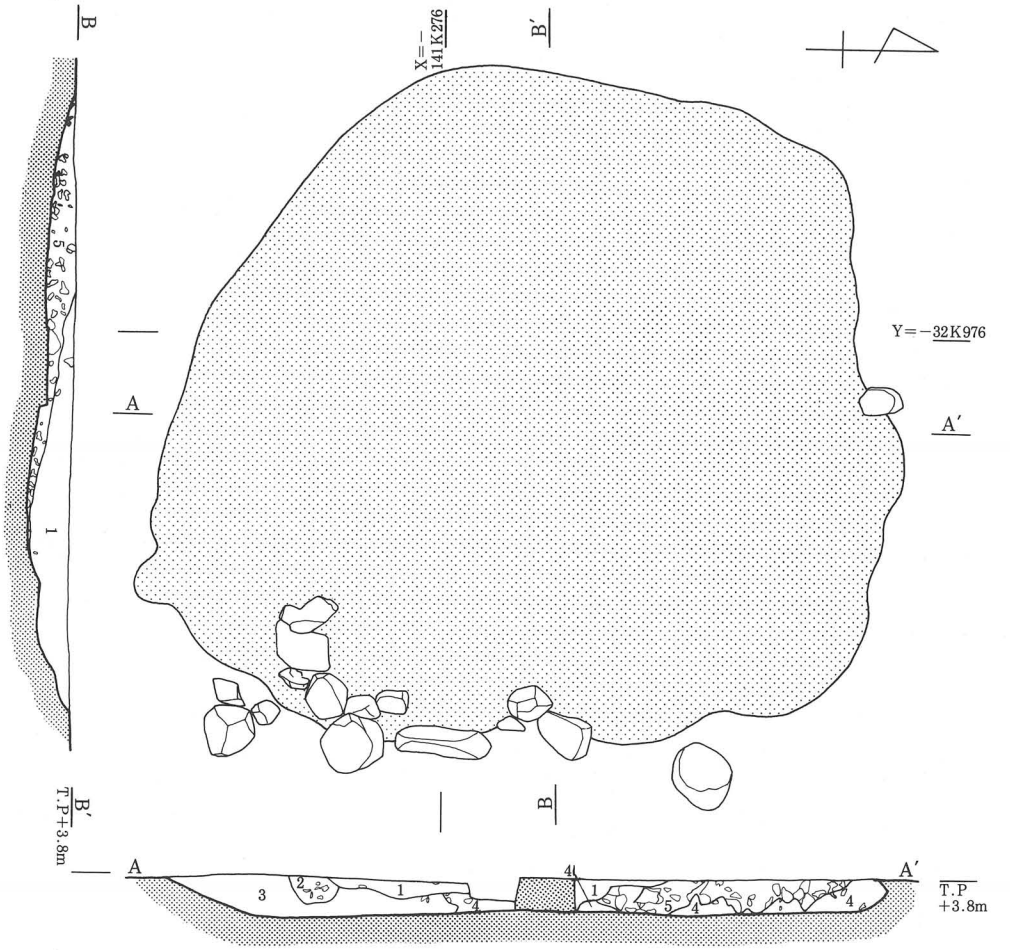
土器集積・土器群

ＳＩ－01（第66図）

Ｍ－７区で検出された。約0.8×１ｍの範囲で、遺構の掘り形を伴わずに割り石と土器が集積していた。その内容は黒色土器Ａ・Ｂ類、瓦器椀、土師器皿、土師器釜、土師器鍋などで、10世紀末～11世紀前半頃の時期を示している。

ＳＩ－02（第67図）

Ｍ－６区で検出された。遺構の掘り形を伴わずに割り石の集積と伴に土器が出土している。その内容は瓦器椀、土師器皿、瓦器足釜などで、時期は12世紀後半頃と考えられる。



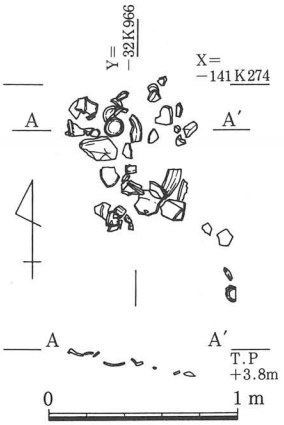
1．灰オリーブ色砂混じり土(5Y 4/2) 暗赤褐色焼土(5YR 3/4) を含む(微量)
2．オリーブ黒色砂混じり土(5Y 3/2) 暗褐色焼土(10YR 3/4) と木炭を含む(少量)
3．暗灰黄色土(2.5Y 4/2) 赤褐色焼土(5YR 4/6) を含む(微量)
4．灰黄褐色砂質土(10YR 4/2) 黒色焼土(5YR 1.7/1)、黒褐色焼土(7.5YR 2/2)、暗褐色焼土(5YR 3/6) を含む(少量)
5．オリーブ黒色土(5Y 3/2) 黒色焼土(5YR 1.7/1) 明赤褐色焼土(5YR 5/8)、にぶい褐色焼土(7.5YR 5/6) 暗褐色焼土(7.5R 3/4)、にぶい黄褐色焼土(10YR 5/6)、にぶい赤褐色焼土(5YR 4/4) 含む(多量)

0　2 m

第65図　ＳＦ－01平面、土層断面図

建物・柵列（第45図、付図２）

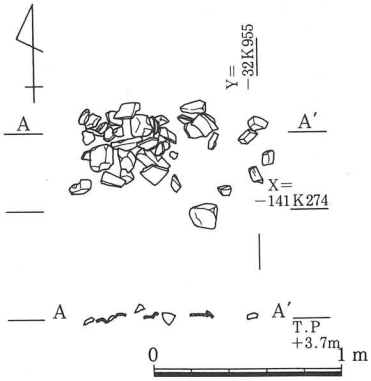
多数のピットの中から建物５棟、柵９列、が復原された。さらに多くの建物、柵の存在が考えられるが、復原は困難であった。



第66図　ＳＩ−01平面、断面図

ＳＢ−01

Ｍ区の西側で検出された。焼土坑ＳＦ−01と重複しており、その前後関係は明らかではないが、ＳＦ−01を囲むようにしてあるので、同時期に存在し、関連するものと考えられる。規模は東西３間（7.6m）×南北４間（8.4m）で、主軸はＮ−２°−Ｅを示す。柱間は東西が2.1〜2.9m、南北が1.8〜2.9mと一定せず、西側の東西列は３間のようである。柱穴の規模は50〜70㎝、深さ22〜54㎝を測る。遺物は黒色土器Ａ類、緑釉陶器、須恵器、土師器などの小片が出土している。



第67図　ＳＩ−02平面、断面図

ＳＢ−02

ＳＢ−01の南側で検出された。規模は東西２間（3.8m）×南北２間（３m）で、主軸はＮ−90°−Ｅである。柱間は南北が1.9m、東西が２mのほぼ等間隔であるが、西側の南北列は１間の検出である。柱穴の規模は19〜33㎝、深さ6〜37㎝を測る。遺物は瓦器椀、黒色土器Ａ類、須恵器、土師器などの小片が出土している。

ＳＢ−03

Ｍ区の中央やや西寄りで検出された。ＳＥ−11と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西２間（3.9m）×南北２間（4.6m）で、主軸はＮ−３°−Ｅである。柱間は東西が1.9〜２mのほぼ等間隔であるが、南北は1.9〜2.4mで一定していない。柱穴の規模は24〜38㎝、深さ4〜31㎝を測る。遺物は黒色土器Ａ類、須恵器、土師器などの小片が出土している。

ＳＢ−04

Ｍ区の中央やや西寄りで検出された。攪乱の影響を受けて北側の東西列の柱穴を検出していないが、南北列と南側の東西列との組合せから、推定で東西３間（6.3m）×南北２間（3.9m）の建物と考えた。主軸はＮ−85°−Ｗである。柱間は南北が1.9mのほぼ等間

隔であるが、東西は1.9～2.2mで一定していない。柱穴の規模は22～55㎝、深さ15～34㎝を測り、ＳＰ－767・807・981・1025には柱根が残存していた。ＳＫ－19と重複するが、前後関係は明らかではない。遺物は瓦器椀、土師器皿、黒色土器Ａ類などの小片が出土している。

ＳＢ－05

Ｍ区の中央やや西寄りで検出された。ＳＤ－37と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西３間（5.2m）×南北２間（4.7m）で、主軸はＮ－88°－Ｗである。柱間は1.5～2.3mで、柱穴の規模は34～52㎝、深さ4～36㎝を測る。ＳＫ－19と重複するが、前後関係は明らかではない。遺物は瓦器椀、土師器皿、土師器釜、東播系須恵器片口鉢、黒色土器Ｂ類、白磁などの小片が出土している。

ＳＡ－01

ＳＢ－04の西側で検出された。方位はＮ－３°－Ｅ、４間で、ＳＢ－03・04の主軸の方向と一致する。長さ8.9m、柱間は2.2～2.4mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は20～37㎝、深さ６～37㎝を測る。ＳＰ－995・996には礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿の小片が出土している。

ＳＡ－02

ＳＢ－05の西側で検出された。方位はＮ－３°－Ｅ、２間で長さ5.5m、柱間は2.7～2.8mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は20～30㎝、深さ12～20㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＡ－03

ＳＢ－04とＳＢ－05の間で検出された。方位はＮ－83°－Ｗ、４間で長さ10.8m、柱間は1.9～3.2mと間隔が一定ではない。柱穴の規模は22～36㎝、深さ３～29㎝を測る。ＳＰ－943に礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿が出土している。

ＳＡ－04

ＳＡ－03の東側で検出された。方位はＮ－84°－Ｅ、３間で長さ6.4m、柱間は２～2.2mで一定ではない。柱穴の規模は32～45㎝、深さ24～36㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿、黒色土器Ａ類、須恵器の小片が出土している。

ＳＡ－05

ＳＢ－05の東側で検出された。南北３間（4.9m）、東西１間（1.8m）のＬ字状に柱穴が並ぶ。方位は東西南北の方向に一致し、柱間は1.8～2.2mである。柱穴の規模は34～35

㎝、深さ11～31㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿、須恵器の小片が出土している。

ＳＡ－06

Ｎ区の中央やや南寄りで検出された。検出状況からトレンチの東側、西側に続いているものと考えられる。方位はＮ－82°－Ｅ、４間で長さ3.9m、柱間は短いが0.9～１mで等間隔である。柱穴の規模は30～34㎝、深さ４～27㎝を測る。遺物は瓦器椀、土師器皿、黒色土器Ａ・Ｂ類、須恵器の小片が出土している。

ＳＡ－07（第28図）

Ｎ区の中央やや南寄りで検出された。方位はＮ－４°－Ｅ、５間で長さ11.2m、柱間は1.9～2.4mである。柱穴の規模は23～45㎝、深さ８～43㎝を測る。遺物は土師器皿、土師器釜、緑釉陶器、東播系須恵器鉢の小片が出土している。

ＳＡ－08（第28図）

Ｎ区の中央やや北寄りで検出された。方位はＮ－83°－Ｗ、東側のＬ区で検出された柱穴を含めて、３間で長さ5.1m、柱間は1.7～2.6mである。柱穴の規模は31～45㎝、深さ５～45㎝を測る。遺物は瓦器椀の小片が出土している。

ＳＡ－09（第７図）

Ｎ区の北端で検出された。方位はＮ－49°－Ｅ、２間で長さ3.4m、柱間は1.7mであるが、トレンチ外へ続くものと推定され、２間以上の規模を持つと考えられる。柱穴の規模は41～50㎝、深さ27～38㎝を測る。遺物はいずれの柱穴からも古墳時代前期の土師器甕、高杯が出土しており、中世の遺物がまったく含まれていないので、古墳時代前期の遺構と考えられる。

３．第２遺構面下層（付図３）

Ｍ・Ｎ区で中世の溝、井戸、土坑、ピット、落ち込み、水路などが検出された。Ｍ区では西側に遺構が集中している。検出面はＭ区の東側でＴ．Ｐ．＋3.8m、西側でＴ．Ｐ．＋3.7mを測り、Ｎ区の北側でＴ．Ｐ．＋3.9m、南側でＴ．Ｐ．＋3.7mを測る。

落ち込み・池

ＳＴ－01

Ｍ－４～６区で検出された。南側を側溝に切られるがトレンチ外に続いており、検出規模は約10×16.7mで、深さは0.8mを測る。埋土は上層に黒色砂混じり粘質土や黒色砂混じり粘質土が見られるが、下層は完全な粘土が堆積しているので、ＳＴ－01は常時水が停滞した状態で存在したと推定され、池のような遺構と考えられる。遺物は廃棄されたものと考えられ、瓦器椀、瓦器皿、土師器皿、須恵器、鬼瓦など、この時期のほとんどの種類のものが大量に出土しており、土器類の他に木製品も多く出土している。遺物が示す時期は、11世紀末～13世紀後半頃と年代幅があり、これがＳＴ－01の存続した期間と考えている。

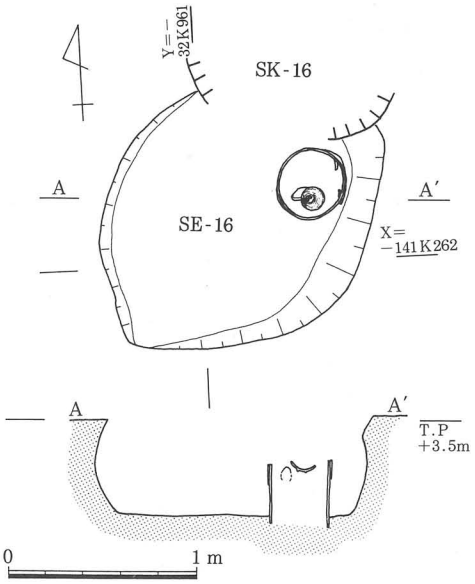
井戸

ＳＥ－14

Ｍ－６区で検出された。平面形は径約1.5mのほぼ円形を呈しており、深さは0.8mを測る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。素掘りで、井戸側や水溜用の曲物などが検出されていないので、井戸と断定し難いが、井戸の抜き取り跡と考えている。遺物は小片ばかりで、また出土量も少ないため時期は特定できない。

ＳＥ－16（第68図）

Ｍ－15区で検出された。北側でＳＫ－16と重複するが、前後関係は明らかではない。平面形は1.4×2.4mの不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。壁は検出面から抉るように掘り込まれており、底面は平坦である。掘り形の東寄りに水溜用の曲物が３段置かれてあった。遺物は瓦器椀、土師器皿、瓦器釜、瓦器鍋などが出土しており、12世紀初～13世紀初頃と考えられる。

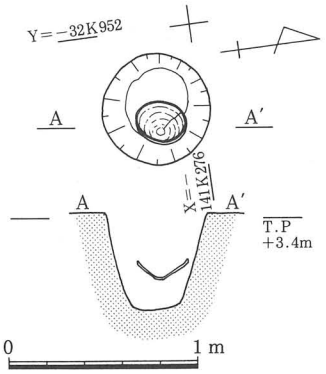


第68図　ＳＥ－16平面、断面図

土坑

ＳＫ－35（ピット）（第69図）

Ｍ－５区で検出された。平面形は径0.6mの円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。検出面から約0.3mの下で、完形の東播系須恵器片口鉢が正立の状態で検出された。平面形と規模からピットの可能性が高く、須恵器鉢は礎板に使用されていたと考えられる。時期は12世紀末～13世紀初頭頃と考えられる。



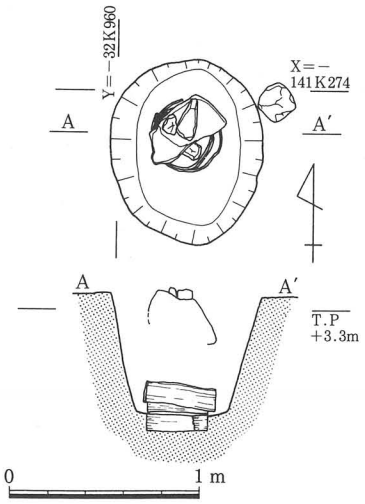
第69図　ＳＫ－35平面、断面図

ＳＫ－39（井戸）（第70図）

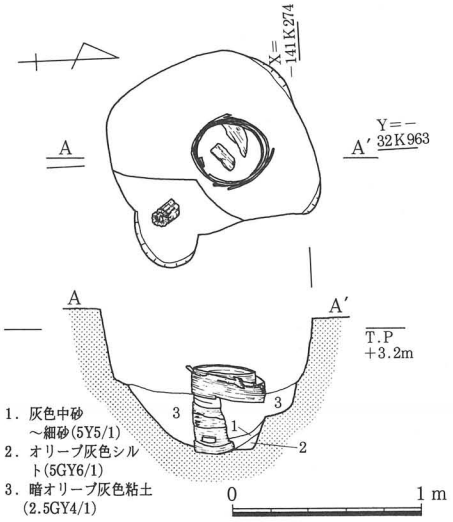
Ｍ－６区で検出された。平面形は0.8×１mの楕円形を呈しており、深さは0.7mを測る。断面形は擂鉢状で底面は平坦である。底面のほぼ中央で水溜用の曲物が２段検出されているので、井戸と考えられる。曲物の真上には花崗岩の割り石が検出されており、井戸廃絶時に入れられたものであるが、曲物との間には距離があり、曲物がある程度埋められてから置かれたようである。遺物は瓦器椀、土師器皿が出土している他、黒色土器Ａ類が混入していた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ－41（井戸）（第71図）

Ｍ－６区で検出された。平面形は1.1×1.2mの不定形を呈しており、深さは0.8mを測る。壁は検出面から約0.4mまでほぼ垂直に掘り込まれ、そこから底面までは斜めに掘り



第70図　ＳＫ－39平面、立面、断面図



第71図　ＳＫ－41平面、立面、土層断面図

込まれており、断面形は擂鉢状を呈する。底面のほぼ中央に水溜用の曲物が３～４段重ねられて置かれてあった。遺物は瓦器椀、土師器皿が少量出土している程度で、時期は明確ではないが、13世紀頃と考えている。また、掘り形内の南東寄りで柱根が検出されており、重複するピットのものと考えられるが、前後関係は明らかにし得なかった。

建物

ＳＢ－06

Ｍ区の中央北端で検出された。南西隅の柱穴は攪乱の影響で未検出であるが、東西列は３間（6.4m）で、南北列は２間（４ｍ）を検出しているが、さらにトレンチ外へ続くものと考えられる。柱間は２～2.2m、主軸はＮ－２°－Ｅを示す。柱穴の規模は30～85㎝、深さは14～47㎝を測る。遺物は土師器甕、甑、黒色土器Ａ類などの小片が出土している。

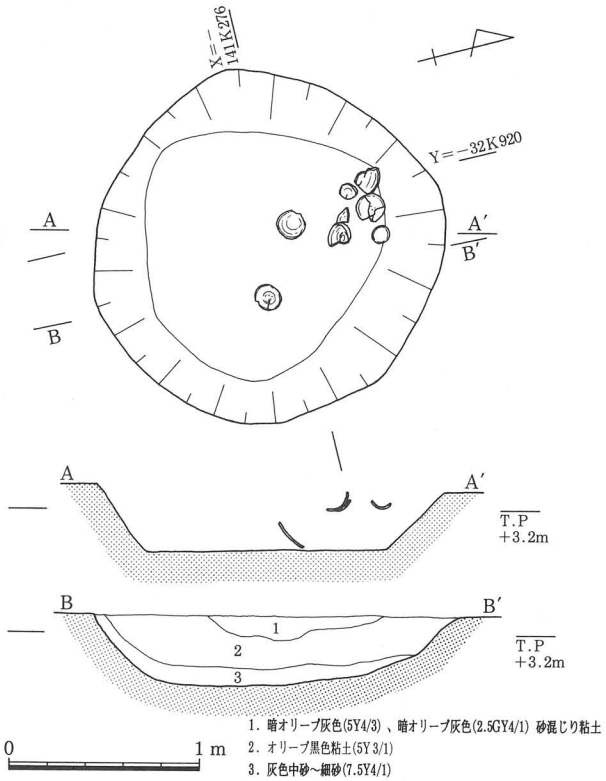
４．第３遺構面（付図４）

土坑、井戸、溝、水田跡を検出している。水田跡は遺存状況が悪く、トレンチの西側でかろうじて、水路と考えられる溝が伴う大型畦畔と小畦畔が、また、南東隅では、足跡が無数に残る畦畔が検出された。出土遺物が少ないので時期は明確ではないが、古墳時代前期と考えられる。基本的には古墳時代の遺構面であるあが、同一面で中世の井戸や落ち込み、奈良時代の井戸を検出している。検出面は，調査区の東側でＴ．Ｐ．＋3.4ｍ、西側でＴ．Ｐ．＋3.3mを測る。

井戸

ＳＥ－17（土坑）（第72図）

Ｍ－２区で検出された。トレンチの東側にあり、遺構の密集する西側と異なり、周囲にはこれ以外に遺構は検出されておらず単独で孤立した状態で検出された。平面形は径約1.9mのほぼ円形を呈しており、深さは約0.4mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平



第72図　ＳＥ－17平面、断面、土層断面図

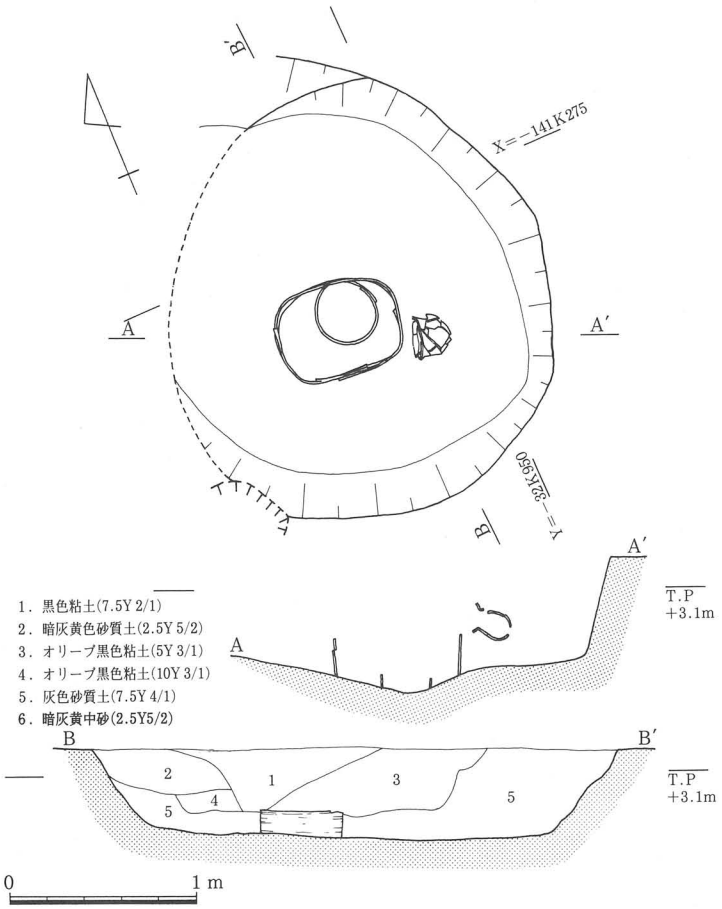
坦である。埋土は３層に分かれるが、最下層の灰色中砂～細砂は底面検出時の掘り下げ過ぎによるもので、遺構内の埋土とは考え難い。遺物は完形に近い瓦器椀、瓦器皿などが出土しており、瓦器椀には古い形態の特徴があり、時期は11世紀後半から12世紀初頃と考えられる。

ＳＥ－18（第73図）

Ｍ－５区で検出された。平面形は2.2×2.8mの長円形を呈しており、深さは0.5mを測る。東側を平面形2.8×3.2mの不定形の遺構と重複しているが、前後関係は明らかではない。断面形は擂鉢状で、底面は平坦である。底面に水溜用として隅丸長方形の曲物が置かれ、その内部には北寄りの位置に円形の曲物が置かれていた。曲物の東側には土師器甕がほぼ１個体が破砕された状態で出土している他、曲物内より「⊗」の墨書の入った須恵器蓋付や鉢などが出土している。時期は８世紀後半頃と考えられる。

ＳＥ－20（第74図）

Ｍ－４区で検出された。東側をＳＴ－04、西側をＳＤ－45の双方の遺構に上部を切られており、検出規模は1.6×1.7m、深さは0.6mを測り、底面は平坦である。平面形は下部の検出面での形状から推定すると隅丸方形を呈しており、深さは約１mはあったであろうと考えられる。埋土は上層に灰色砂混じり土、下層に黒褐色粘土、オリーブ黒色粘土が堆積してい



第73図　ＳＥ－18平面、断面、土層断面図

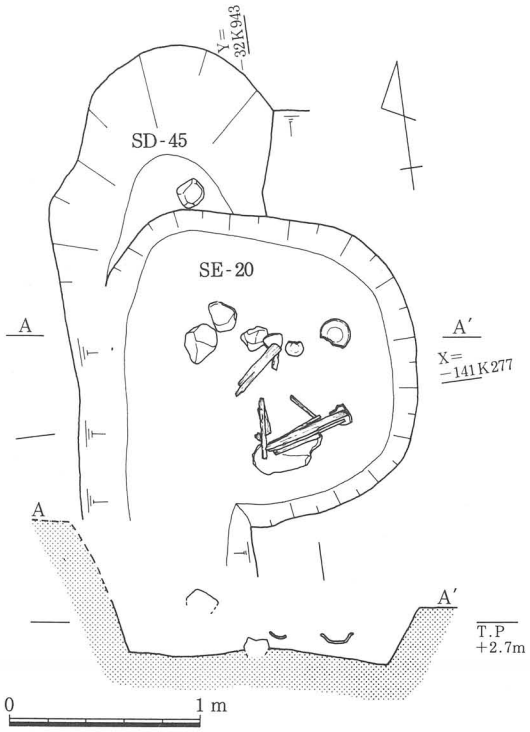
る。井戸の抜き取り跡と考えられ、掘り形内には土器の他、花崗岩の割り石や、井戸側に使用されていたと考えられる板材や木片などが散在して出土している。遺物は瓦器椀、瓦器皿、土師器皿、白磁碗などが出土しており、時期は11世紀末～12世紀前半頃と考えられる。

ＳＥ－21（第75図）

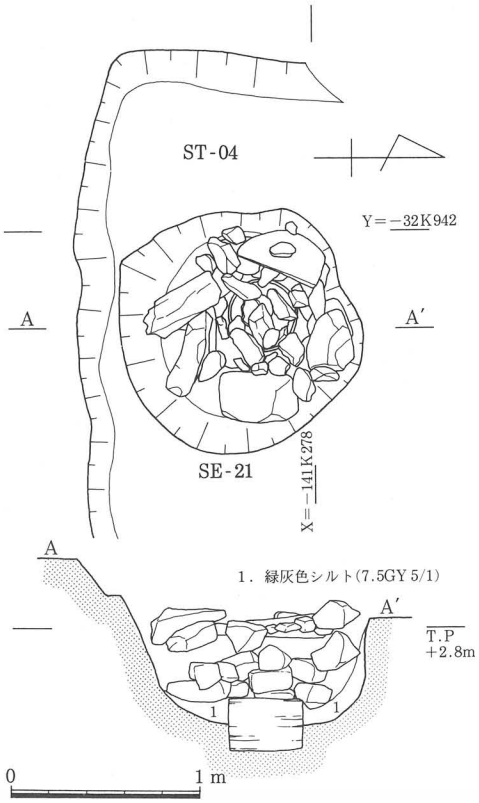
Ｍ－４区のＳＴ－04内で重複して検出された。前後関係は明確ではないが、ＳＴ－04の検出時ではＳＥ－21の遺構の輪郭は確認されておらず、ＳＴ－04を底面まで掘り下げた段階で初めて検出することができたので、ＳＴ－04よりも前か、同時期に存在していたと考えられる。平面形は径約1.3mの円形を呈しており、深さはＳＴ－04の底面から0.5mを測る。北側の壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南側は傾斜をもって平坦な底面に続く。底部には水溜用の曲物が１段置かれており、その上には掘り形内を隙間なく埋めるようにして、花崗岩の割り石で覆われていた。割り石は石積みの井戸側に使用されていたもので、井戸廃絶時の際にこのような状態で埋め戻されたものであろう。遺物は出土していないので時期は明らかではないが、12世紀代と考えている。

５．第４遺構面（付図５）

調査区を蛇行しながら南北方向に走る、畦畔状に高まりが検出されたがＫ区、Ｌ区の項でも述べたように、自然河川の跡と考えられる。



第74図　ＳＥ－20平面、断面図



第75図　ＳＥ－21、ＳＴ－04平面、立面、土層断面図

第４節　Ｏ区の遺構

Ｏ区はＫ区の東側に位置しており、調査前の地表面の標高はＴ．Ｐ．＋約4.9mであった。

１．第１遺構面（付図１）

水路と考えられる溝を１条検出している以外は、南北方向に走る鋤溝が見られるだけであった。

溝

ＳＤ－54（第76図）

Ｏ－３・６区で検出された。東西方向に走り両端は側溝に切られるが、西側へさらに続いてＫ区でも検出されており、東側もさらにトレンチ外へ続いている。幅約1.2m、深さは0.1～0.3mを測り、埋土は灰色土が堆積する。溝の底面中央部に杭列の跡が残っていた。遺物は近世の陶磁器類の破片が出土している。近世から近代にかけて利用されていた農業用の水路と考えられる。

２．第２遺構面上層（付図２）

南北方向に走る鋤溝が検出されただけで他に遺構は検出されなかった。中世の面に相当すると考えられるが、居住地ではなく耕作地として利用されていたようである。

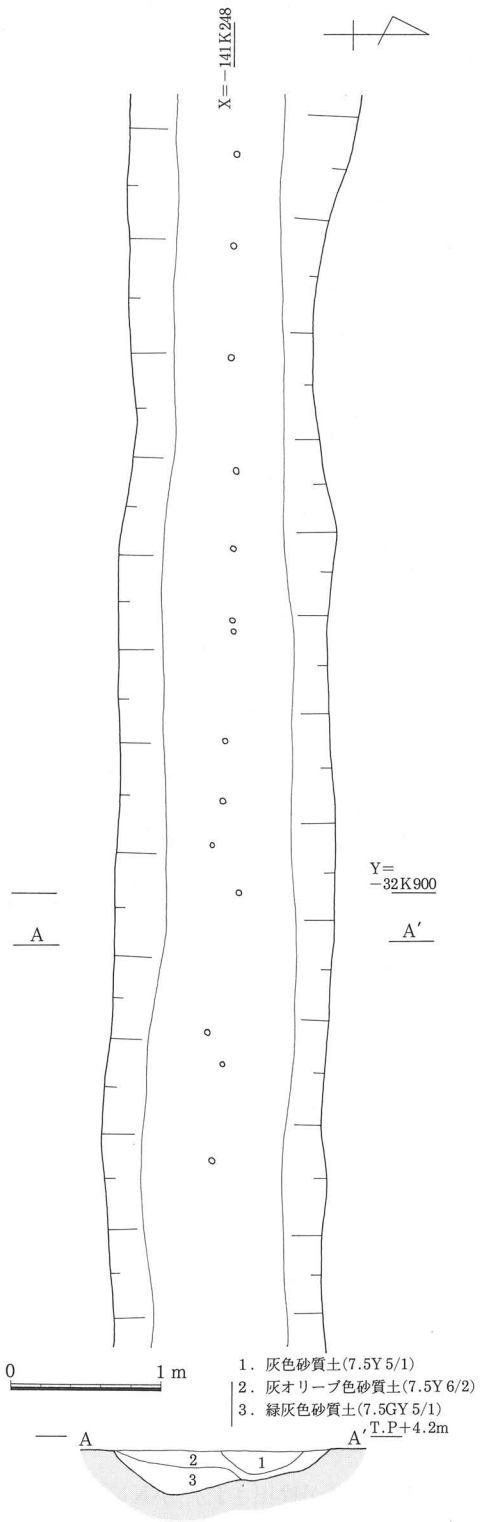
３．第２遺構面下層（付図３）

土坑、ピットが散在的に検出されており、柵を復原することができたが建物は復原することができなかった。

土坑

ＳＫ－76

Ｏ－３区で検出された。平面形は径約0.7m



第76図　ＳＤ－54平面、土層断面図

の不整円形を呈しており、深さは0.3mを測る。埋土は黄灰色砂混じり粘質土で、遺物は出土していない。

ＳＫ－78

Ｏ－４区で検出された。平面形は0.7×0.8mの隅丸方形を呈しており、深さは0.6mを測る。埋土は黄灰色砂混じり粘質土で、遺物は出土していない。

柵列

ＳＡ－18

Ｏ区の北側で４間の長さ6.4mを検出しているが、さらにトレンチの北側に続くものと考えられる。方位はＮ－７°－Ｗである。柱間はほぼ等間隔の1.6mを測る。柱穴の規模は18～26㎝、深さは６～14㎝である。遺物は出土していない。

ＳＡ－19

Ｏ区の中央、西側で検出された。方位はＮ－４°－Ｅ、３間で長さ11m、柱間は3.7mとやや広めで、ほぼ等間隔である。柱穴の規模は23～50㎝、深さは８～17㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＡ－20

ＳＡ－19の西側で検出された。方位はＮ－３°－Ｅ、５間で長さ12.3m、柱間は2.2～2.8mで一定ではない。柱穴の規模は31～95㎝、深さは９～25㎝を測る。遺物は土師器皿、土師器などの小片が出土している。

ＳＡ－21

Ｏ区の北西隅で、ＳＫ－98をコの字形に囲むように検出している。東西２間（2.1m）、南北１間（１m）で、主軸はＮ－５°－Ｅを示す。柱間は0.9～1.2m、柱穴の規模は15～35㎝、深さは19～30㎝をはかる。遺物は出土していない。

ＳＡ－22

Ｏ区の南側で４間の長さ12.8mを検出しているが、さらにトレンチ外へ続くものと考えられる。Ｎ－81°－Ｗである。柱間は3.5mであるが、東側の１間分が5.9mと広くなっている。間に柱穴が１個存在したようであるが、攪乱の影響で消失している。柱穴の規模は24～48㎝、深さは９～25㎝を測る。遺物は出土していない。

４．第３遺構面（付図４）

自然河川と土坑、溝が散在的に検出された以外は遺構は検出されていない。

土坑

ＳＫ－85

Ｏ－６区で検出された。平面形は1.2×1.3mの不定形を呈しており、深さは0.4mを測る。埋土は暗緑灰色砂質土が堆積しており、遺物は出土してない。

ＳＫ－86

Ｏ－５区で検出された。西側は側溝に切られており、平面形は1.2×1.3mの不定形を呈しており、深さは0.4mを測る。埋土は暗緑灰色砂質土が堆積しており、遺物は出土してない。

自然流路・自然河川

ＳＲ－03

Ｏ－１・２・４区で検出されており、大きく蛇行をしながら北西方向から南東方向に走る。幅約2.6m、深さは0.6mを測り、埋土は灰オリーブ色～オリーブ黄色砂層が堆積している。遺物は土器片が１点のみ出土しているが、磨耗が激しく種類、時期などは特定できない。検出状況から自然河川と考えられ、北端は側溝に切られるがトレンチ外に続いておりＫ区でも検出されている。また東端も側溝に切られているが、さらにトレンチの東側へ続いているものと考えられる。

ＳＲ－04

Ｏ－１区で検出された。トレンチ北東隅での検出のため規模は不明であるが、埋土はオリーブ灰色砂層が堆積しており、ＳＲ－03と同様に自然河川と考えられる。両端ともトレンチ外へ続いていると考えられ、北側でＳＲ－03と合流しているようである。

ＳＤ－73

Ｏ－６区で検出された。北東から南西方向に走る溝で、幅0.4m、深さは0.03～0.08mと浅い。埋土は灰オリーブ色微砂、オリーブ色シルトが堆積しており、自然流路と考えられる。

５．第４遺構面（付図５）

第４遺構面は基本層序Ⅵ層の黒色粘土をベース面として、蛇行しながらほぼ南北方向に走る畦状の高まりが検出された。幅約１～２ｍ、高さ約15～20㎝を測る。両端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。北側、南側の土層断面を観察すると、ちょうどこの高まり部分の下層には、灰色砂層がレンズ状に堆積しているのが認められるので、自然河川が埋まった跡であると考えられる。畦状の高まりは、この砂の

堆積に起因するもので、河川が埋まった後水没して、上層に黒色粘土が堆積しても高まりが残ったようである。ここでは砂層を掘削しなかったが、K区では自然河川として検出している。

第5節　P区の遺構

P区は第Ⅲ期調査区の北西隅にあり、K区の北側に位置する。調査前の地表面の標高はT.P.+4.9m前後であった。

1．第1遺構面（付図1）

近世の水路と考えられる東西方向に走る溝を1条検出した以外は、他に遺構は検出しておらず、東西方向に走る鋤溝が見られる程度である。

SD－81

P－2区で検出された。東西方向に走る溝で、幅2.4m、深さ0.5mを測る。両端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いているものと考えられる。埋土は灰色土で、遺物は近世～近代の陶磁器類が少量出土しているだけで、図化し得るものはなかった。水田、畑などに伴う水路と考えられる。

2．第2遺構面上層（付図2、第77図）

調査区北半分で溝、土坑、ピットなどが検出されており、中世の面に対応する。

SD－81

P－1区で検出された。ほぼ南北方向に走る溝で、幅0.5m、深さ約0.1mを測る。南端はSK－89に切られて終わっており、北端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いているものと考えられる。埋土は灰色土で、遺物は瓦器椀、土師器皿などの小片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

SD－83

P－1区で検出された。SD－82の東側に接し、平行してほぼ南北方向に走る。幅0.6m、深さ0.4mを測る。南端はSK－89に切られて終わっており、北端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いているものと考えられる。埋土は灰色土で、遺物は瓦器椀、土師器皿などの小片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。なお、掘り形内で複数のピットと重複するが、前後関係は明確ではない。

SD－84

P－2区で検出された。東西方向に走る溝で、幅0.5m、深さ0.1mを測る。東端はSK－88・89に切られて終わっており、西端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いてい

るものと考えられる。掘り形内で２個のピットと重複するが前後関係は明らかではない。遺物は出土しておらず、時期を明確にすることはできないが、ＳＤ－83と同様の13世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ－88

Ｐ－２区で検出された。東側を側溝に切られるが、平面形は推定で1.6×1.6mの不定形を呈しており、深さは0.3～0.4mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。掘り形内では板材が散在した状態で検出されており、井戸の抜き取り跡とも考えられるが、検出面から底面までが浅いためその可能性は低く土坑と考えた。遺物は土師器皿、土師器釜、東播系須恵器片口鉢、足釜の破片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ－89

Ｐ－１区で検出された。東側を側溝に切られるが、平面形は推定で1.3×1.7mの不定形を呈しており、深さは約0.1mを測る。断面形は擂鉢状で、底面はほぼ平坦である。埋土は褐灰色砂混じり粘質土で、遺物は瓦器椀、土師器皿などの小片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

ピット

この面において確認されたピットは17個を数えるが、調査範囲が限られているため建物を復元するまでには至らなかった。

３．第２遺構面下層（付図３、第77図）

溝とピットが散在して検出された。

ＳＤ－85

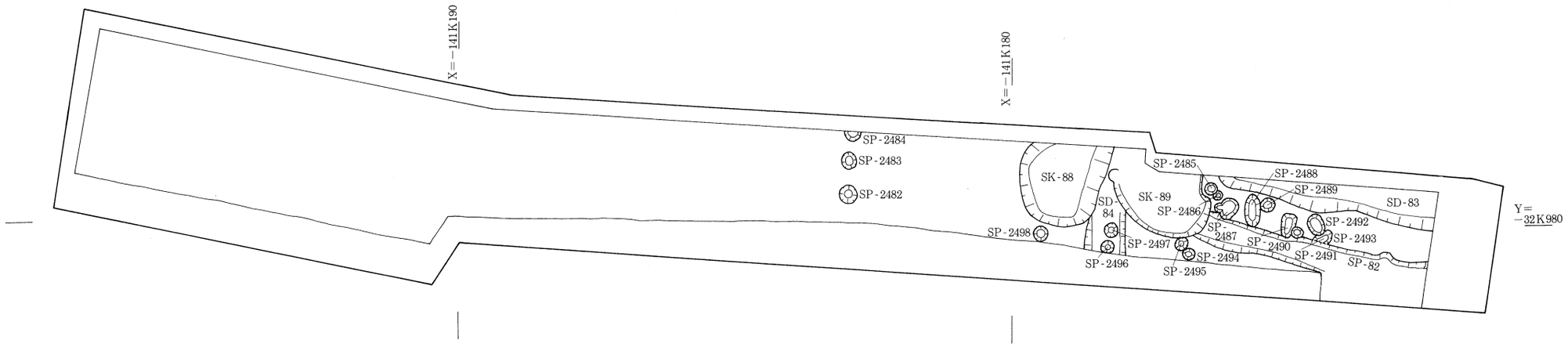
Ｐ－４区で検出された。トレンチ隅での部分的な検出のため詳細は不明であるが、北東から南西方向に走る溝のようである。深さは0.1～0.2mを測る。埋土は褐灰色粘質土の１層で、遺物は出土していない。

ＳＤ－86

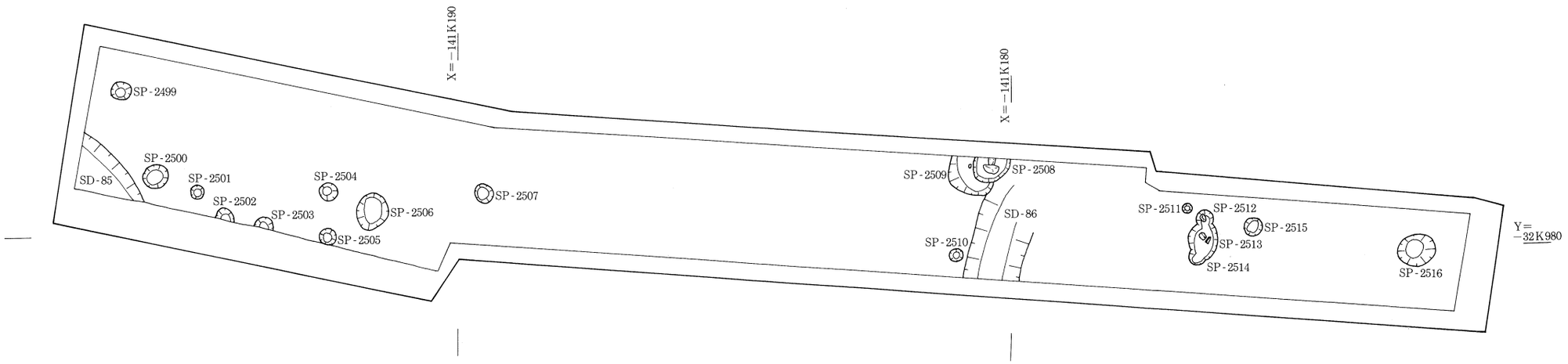
Ｐ－２区で検出された。東西方向に走る溝で、両端は側溝に切られるがさらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。幅１m、深さは約0.2mを測る。西端付近ではＳＰ－2508に切られている。埋土は褐灰色砂混じり粘質土の１層で、遺物は土師器皿、須恵器などの小片が出土しているが、その出土量は少なく時期を明確にすることはできない。

ピット

この面において確認されたピットは17個を数え、ＳＰ－2305には柱根が、ＳＰ－2508・



第２遺構面　上層



第２遺構面　下層

0　5　10m

第77図　Ｐ区第２遺構面上層・下層平面図

2509・2512・2513には礎石が残っていたが、調査範囲が限られているため建物を復元するまでには至らなかった。また、土師器皿が埋納されたピット（ＳＰ－2505）が検出された。

ＳＰ－2505

Ｐ－４区で検出された。平面形は径約0.3mの円形を呈しており、深さは0.2mを測る。掘り形内部に完形の土師器皿が４～５枚重ねられた状態で置かれていた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

４．第３遺構面（付図４）

自然河川と考えられる遺構と井戸が検出された。

ＳＥ－32

Ｐ－２区で検出された。平面形は径約１mの円形を呈しており、深さは約0.3mを測る。本来ならば上面の第２遺構面上層或いは下層で検出されるべき遺構であったため、実際の平面規模と深さはさらに大きくなるものと推定される。内部には水溜用の曲物が２～３段で置かれていたようであるが、上部は欠落している。遺物は曲物内から瓦器椀、土師器皿、土師器高台付き皿などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＲ－06

Ｐ－１・２区で検出された。北東から南西方向に走り、幅１m、深さは約0.2mを測る。埋土は褐灰色中砂が堆積しており、自然河川と考えた。遺物は出土していない。

５．第４遺構面（付図５）

基本層序Ⅵ層である黒色粘土の上面まで掘削したが、この面での遺構は検出されなかった。

第６節　Ｑ区の遺構

Ｑ区は第Ⅲ期調査区の南東隅にあり、Ｍ区の東側に位置する。調査前の地表面の標高はＴ.Ｐ.＋4.8m前後であった。

１．第１遺構面（付図１）

近世の水路と考えられる溝が２条検出されている。それ以外の遺構は検出されておらず、南北方向の無数の鋤溝が見られるだけであった。

ＳＤ－74

Ｑ－４区で検出された。南北方向に走る溝で、両端は側溝により切られるが、さらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。幅1.7m、深さ0.3mを測り、埋土には旧耕作土に類似する灰色土が堆積していた。遺物は近世～近代の陶磁器類の他に、瓦器椀、土師器皿などが混入して出土しているが、小片ばかりで図化できるものはなかった。水田、畑な

どに伴う用水路と考えられる。

ＳＤ－75

Ｑ－３区で検出された。南北方向に走る溝で、両端は側溝により切られるが、さらにトレンチ外へ続いていると考えられる。幅1.8m、深さ0.2mを測り、この溝を境にして東側の検出面は、西側よりも約５㎝程高くなっており、段差があるようである。埋土には旧耕作土に類似する灰色土である。遺物は近世～近代の陶磁器類の他に、瓦器椀、土師器皿などが混入して出土しているが、小片ばかりで図化できるものはなかった。ＳＤ－74と同様で用水路と考えられる。

２．第２遺構面上層（付図２）

中世の面に対応すると考えられるが、土坑を１基検出した以外は遺構は検出されておらず、検出面全体に南北方向に走る鋤溝が見られるだけで、集落の範囲からは外れているようである。

ＳＫ－87

Ｑ－２区で検出された。平面形は径約１ｍの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。埋土は緑灰色砂混じり粘質土の１層で、遺物は出土しなかった。

３．第２遺構面下層（付図３）

第２遺構面上層と同様で鋤溝が走り、 遺構は南北方向に走る溝が検出されているだけである。

ＳＤ－76

Ｑ－３区で検出された。南北方向に走る溝で、幅2.3m、深さは0.9mを測る。両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へ続いていると考えられる。埋土は明黄褐色～褐色粘土のブロックが混じる灰色砂混じり粘質土や明オリーブ灰色～灰色砂質土、灰黄色～オリーブ灰色粘土が堆積する。土層堆積状況はＳＴ－02とよく似ており、常時水が滞水していたような状況を示している。遺物はほとんど出土しておらず、瓦器椀、土師器皿の小片が散見する程度で時期を確定するのは難しいが、中世前半頃と考えられる。

４．第３遺構面（付図４）

自然河川と考えられる北東から南西方向に走る溝が２条検出された以外は、遺構は検出されていない。

ＳＤ－78

Q－４区で検出された。幅3.3m、深さは0.3mを測る。北東から南西方向に走り、両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へと続いていると考えられる。埋土には灰色砂層やシルトが混ざり、ラミナも認められるので自然河川と考えられる。遺物が出土していないため時期を確定するのは難しいが、今のところ古墳時代頃と考えている。

ＳＤ－79

Q－３区で検出された。幅2.4m、深さは0.3～0.5mを測る。北東から南西方向に走り、両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へと続いていると考えられる。埋土はＳＤ－78と同様の様相を呈するので自然河川と考えられる。遺物は出土していないが時期は古墳時代頃と考えられる。

５．第４遺構面（付図５）

第３遺構面と同様で、自然河川と考えられる北東から南西方向に走る溝が検出されたが、これ以外には遺構は検出されなかった。

ＳＤ－80

Q－４区で検出された。幅2.4m、深さは0.1～0.2mを測る。両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へと続いていると考えられる。第３遺構面で検出したＳＤ－79とほぼ重複しており、同一河川の下層部分を検出したものと考えられる。遺物は出土しておらず、時期を明確にするのは難しいが、弥生時代以前に形成された自然流路と考えている。

第７節　ピット

１．埋納ピット

ここで取り上げるのは、何らかのの理由により明らかに人為的に土器を埋納しているピットで、その性格は建物柱穴とは異なると考えられるものである。以下調査で検出された埋納ピットについて、主なものを報告する。

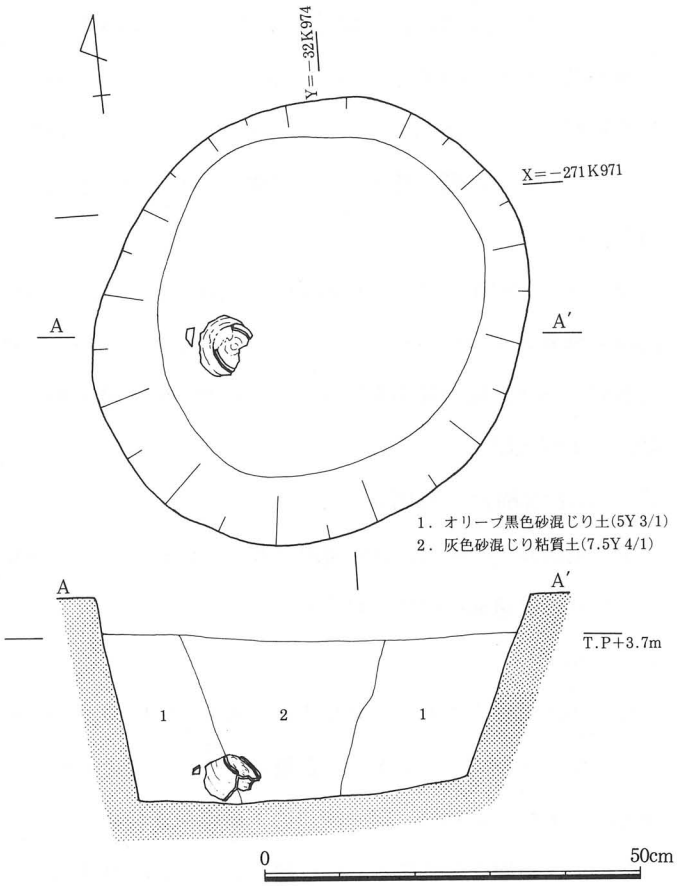
ＳＰ－244（第78図）

M－16区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.6mの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。ピット内から洛北産の緑釉陶器が出土している。出土状況は、底面で東に少し傾きながら底部を上に向けた状態で埋納されていた。埋土の土層断面を見ると、柱が抜き取られた様相を示しており、建物の柱穴を兼ねていたようである。土器の出土位置から推定すると、土器は柱を立てる際に埋納された可能性が高い。また、近くで検出されたＳＰ－172から同一個体の破片が出土しており、接合することができたことは興味深

い。建物の柱を立てる時に何らかのの理由で埋納されたものと考えられる。時期は９世紀末～10世紀前半頃と考えられる。

ＳＰ－320（第79図）

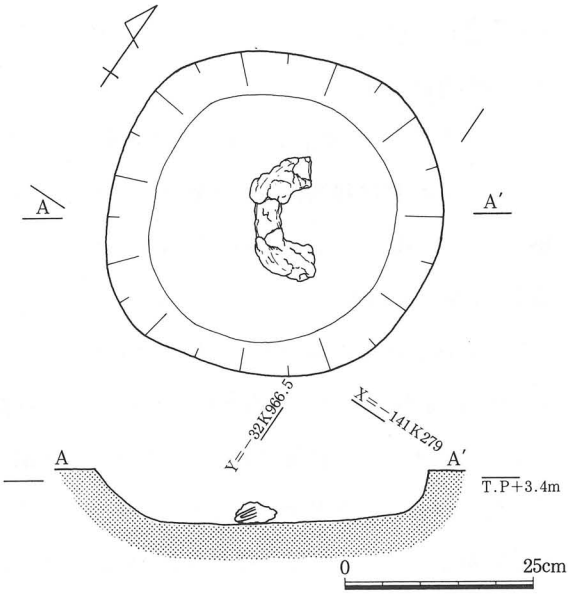
Ｍ－７区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.5ｍのほぼ円形を呈しており、深さは0.2ｍを測る。ピット内からは鉄製の鍬先が出土している。出土状況を見ると、底面の中央で刃先を南西に向け水平に置かれていた。攪乱の底面で検出しているため、上部は削平の影響を受けているが、削平の分を差し引いても深さは0.3ｍと浅いので柱穴とは異なるピットと考えられる。



第78図　ＳＰ－244平面、立面、土層断面図

ＳＰ－436（第80図）

Ｍ－16区、第２遺構面上層で検出された。平面形は一辺が約0.6ｍの隅丸方形を呈しており、深さは0.3ｍを測る。検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。ピット内からは土師器甕、土師器杯、黒色土器Ａ類椀、土錘などが出土している。出土状況を見ると、土器は完形ではなく破砕された状態で出土しており、その

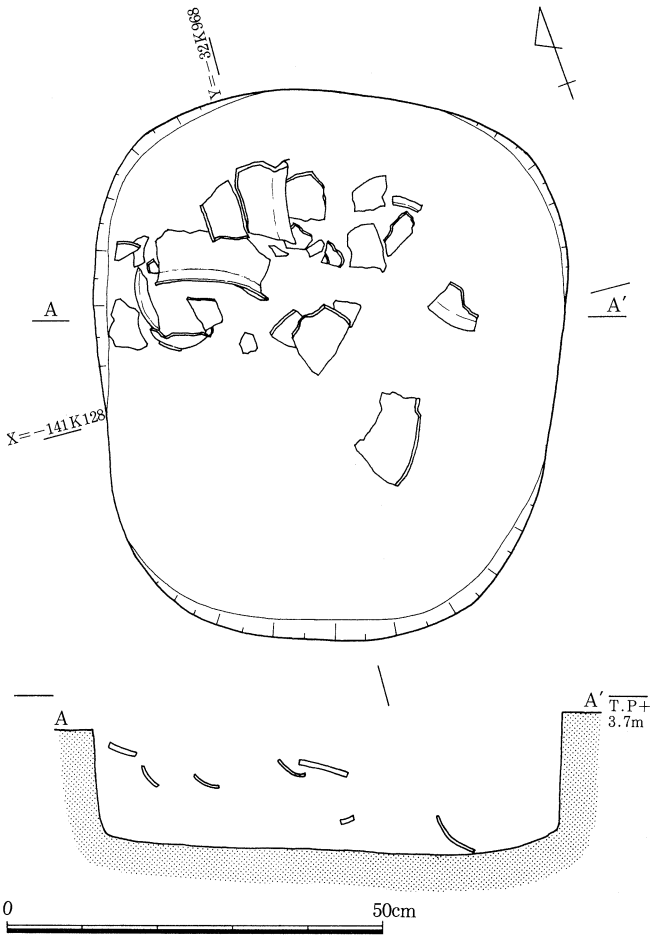


第79図　ＳＰ－320平面、断面図

内容は甕三点、黒色土器八点、杯二点であった。黒色土器の中の一点には、底部外面に「廣」の線刻が刻まれていた。完形品の埋納がないので埋納ピットというよりも、廃棄土坑と考えた方が良いかも知れない。時期は10世紀前半～後半頃と考えられる。

ＳＰ－799（第81図）

Ｍ－14区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.4mの円形を呈しており、深さは0.1mを測る。ピット内からは土師器皿が約25点出土している。出土状況を見る限り、土器は正立して置かれるものや底部を上に向けたものなど、埋納のされ方には規則性ないようである。後世の削平や検出過程の削平のため上部の土器が破砕されているが、埋納時は完形品だけを入れたと考えられる。時期は13世紀前半頃と考えられる。



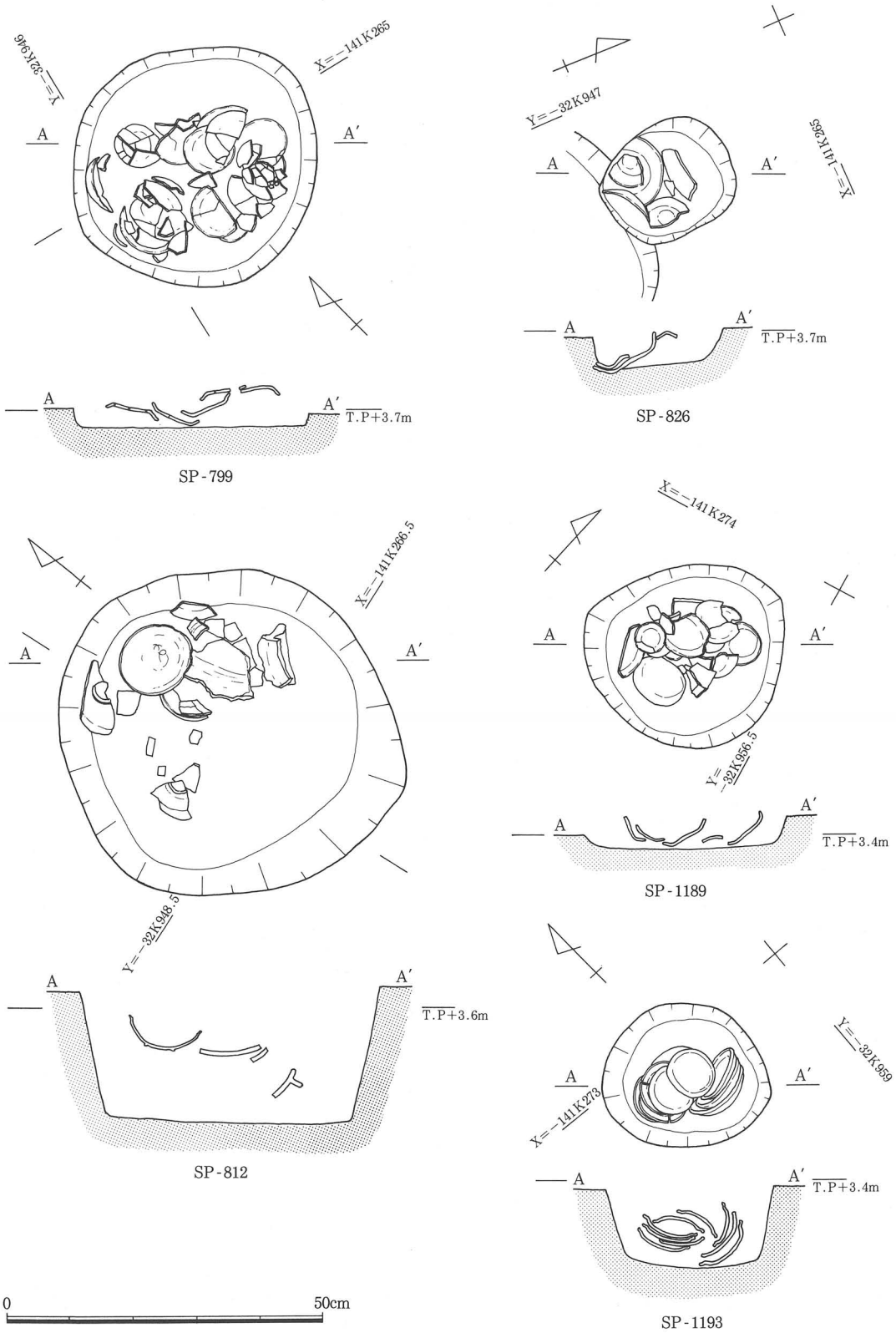
第80図　ＳＰ－436平面、断面図

ＳＰ－812（第81図）

Ｍ－14区、第２遺構面上層で検出された。平面形は一辺が約0.5mの隅丸方形を呈しており、深さは0.3mを測る。検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦であった。ピット内からは瓦器椀、瓦器釜が出土しているが、完形で出土したのは瓦器椀一点だけである。出土状況を見ると、掘り形内の北寄りに破片が集まり、その上に完形の瓦器椀が正立して出土した。時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＰ－826（第81図）

Ｍ－14区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.2mの不整円形を呈しており、深さは0.1mを測る。ピット内からは土師器皿が５点出土している。出土状況を見ると、



第81図　ＳＰ－799・812・826・1189・1193平面、断面図

正立に置かれたものや、垂直に近い縦置きのものがあり、全体では南に傾いた状態で出土している。この状況が埋納時の土器の原位置を示しているとは考え難く、元々は垂直に重ねられていたと考えられる。時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＰ－1189（第81図）

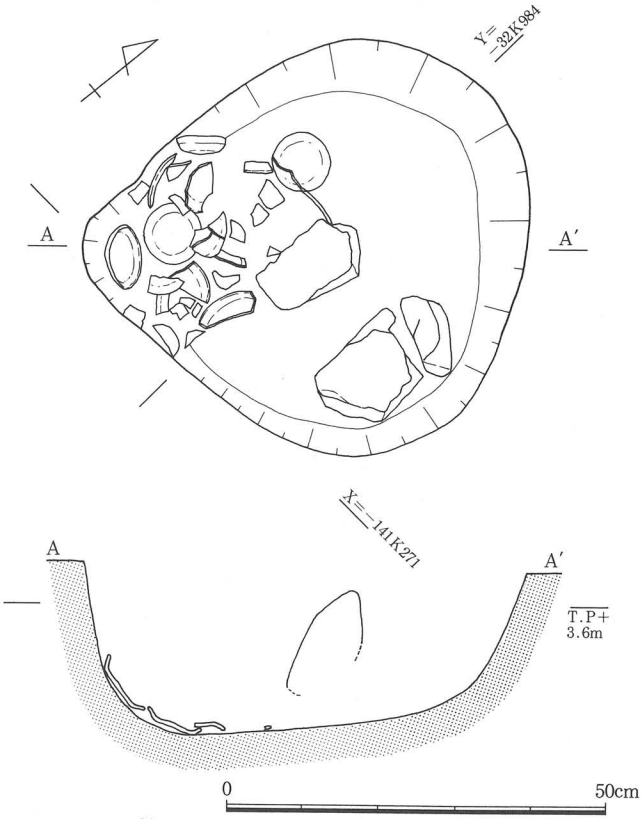
Ｍ－６区、第２遺構面下層で検出された。平面形は径約0.3mの不整円形を呈しており、深さは0.1mを測る。底面はほぼ平坦である。ピット内からは土師器皿が12点出土している。出土状況は完形品も含めて破片が重ねられており、正立に置かれるものと、底部を上向きにして置くものが半々である。時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＰ－1193（第81図）

Ｍ－15区、第２遺構面下層で検出された。平面形は径約0.2mの不整円形を呈しており、深さは0.2mを測る。ピット内からは土師器皿が10点出土している。出土状況は10点の内７点が垂直方向に重ねられており、３点がその隣で傾いた状態で出土している。垂直方向に重ねられた７点の内５点が正立に置かれ、２点が底部を上に向け置かれてあった。残りの３点の検出状況をみると、この３点は元々は底部を上に向けた状態で垂直に重ねられていたものが、移動したものと推定される。したがって埋納時の状況は、底面から５点の皿を正立の状態で重ね置き、残りの５点を底部を上に向けて被せるように置かれていたものと推定される。時期は口縁端部に「て」の字状の形態が見られるので、10世紀末頃と考えられる。

ＳＰ－106（第82図）

Ｎ－２区、第２遺構面上層で検出された。平面形は0.5×0.6mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は擂鉢状を呈し、底面はほぼ平坦である。ピット内からは土師器皿と



第82図　ＳＰ－106平面、断面図

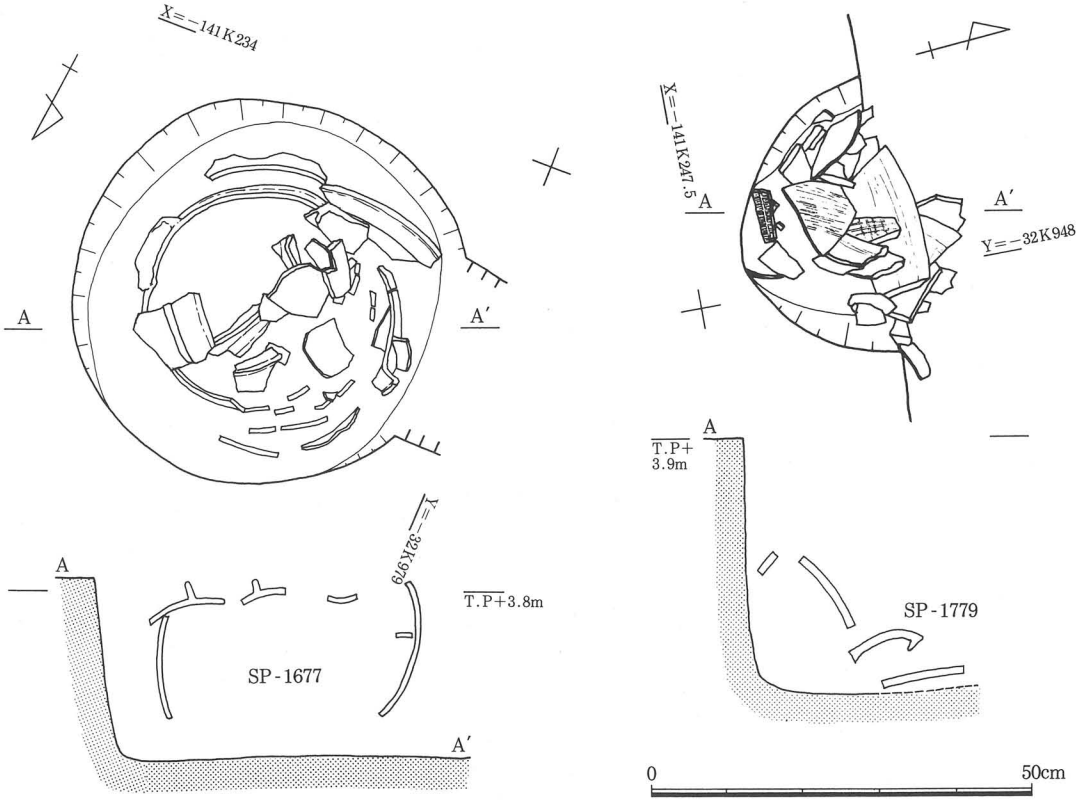
礎石と考えられる花崗岩の割り石が出土している。出土状況を見ると、土師器皿は南西隅にかたまって出土しているが、柱を立てる際，同時に埋納されたものと考えられる。時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＰ－1677（第83図）

Ｌ－12区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.5mの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。ピット内からは瓦器釜が大小２点出土している。出土状況を見ると、径の大きい瓦器釜を正立の状態で置き、その内側に小さい瓦器釜を置いてあった。遺構検出時ではピットと考えたが、両方の瓦器釜には底部が残存していなかったので、曲物の代わりに瓦器釜を水溜用に転用した井戸であった可能性もある。時期は13世紀後半頃と考えられる。

ＳＰ－1779（第83図）

Ｌ－３区、第２遺構面上層で検出された。北側を側溝に切られているが、平面形は推定で径約0.3mの円形を呈しており、深さは0.4mを測る。土器は完形ものはなく須恵器甕片、黒色土器Ｂ類片、瓦器椀片が出土している。破片しか出土していないので埋納ピットとい



第83図　ＳＰ－1677・1779平面、断面図

うよりも破片を転用して礎板に使用していたものではないかと考えられる。時期は11世紀後半頃と考えられる。

2．礎石・礎板・柱根を伴うピット

建物の柱穴には、柱の沈み込みを防ぐため下に敷かれた礎板や、礎石を伴うものや、柱の抜き取りが行なわれずに、柱根がそのまま残っている柱穴が検出されている。調査では多数検出されており、ここでは一部であるが紹介する。

ＳＰ－133（第84図）

Ｍ－17区、第２遺構面上層で検出された。平面形は0.4×0.5m楕円形を呈しており、深さは0.3mを測る。断面形は擂鉢状で、底面は平坦である。平瓦の破片を礎板として転用していた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＰ－451（第84図）

Ｍ－15区、第２遺構面上層で検出された。平面形は0.4×0.6m隅丸長方形を呈しており、深さは0.5mを測る。穴を切った板材を半分に縦割りにしたものを礎板に使用していた。

ＳＰ－879（第84図）

Ｍ－13区、第２遺構面下層で検出された。平面形は径約0.5mの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。花崗岩の割り石の上面を平坦に加工して、礎石にしている。

ＳＰ－1176（第84図）

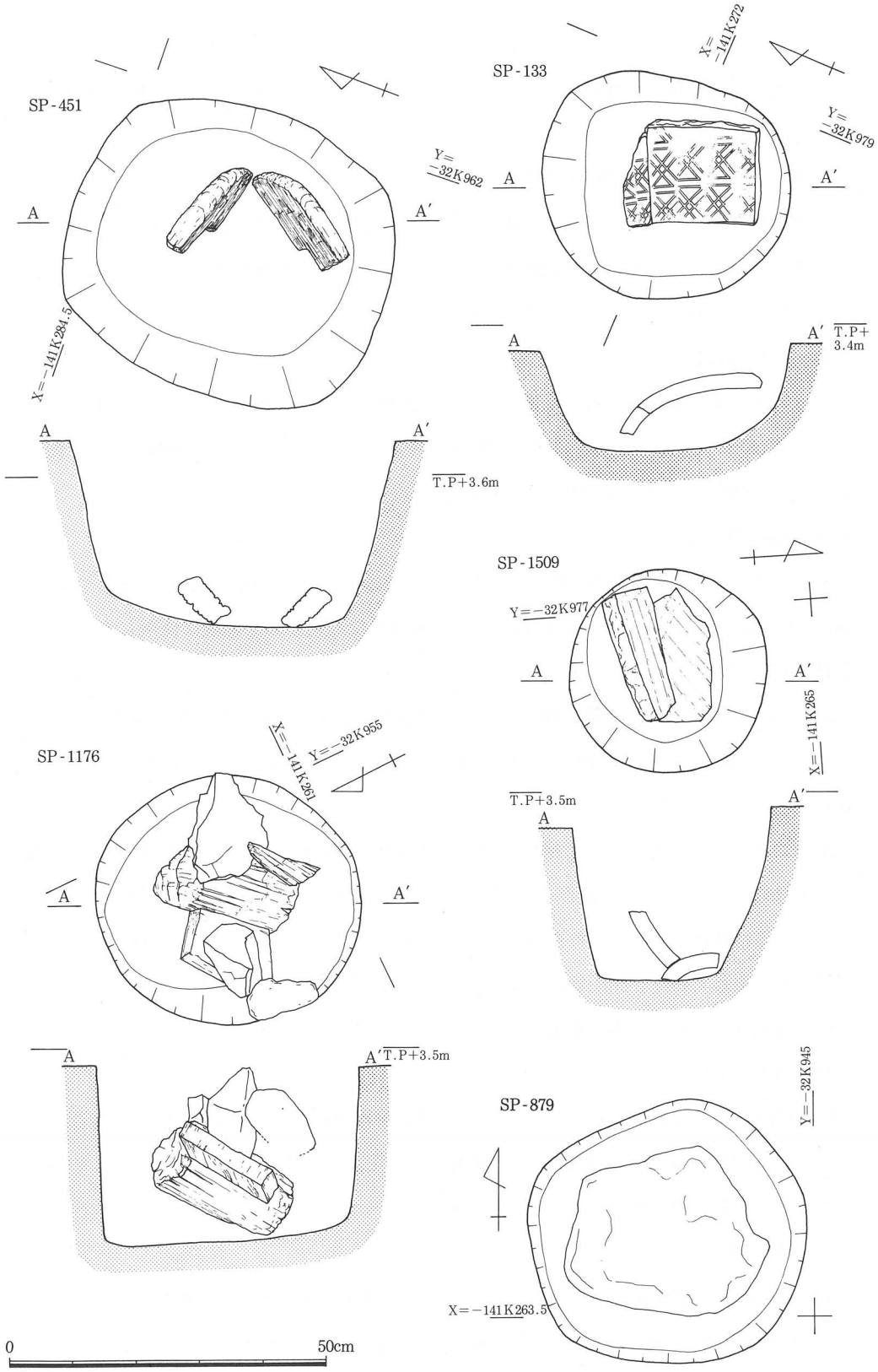
Ｍ－15区、第２遺構面下層で検出された。平面形は径約0.4mの円形を呈しており、深さは0.4mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。掘り形内には柱根が斜めに倒れた状態で、その傍らには礎板と考えられる板材と花崗岩の割り石が出土している。出土状況から礎板を底に敷き柱を立て、その周りを石によって囲み柱を固定させていたものと推定される。

ＳＰ－1509（第84図）

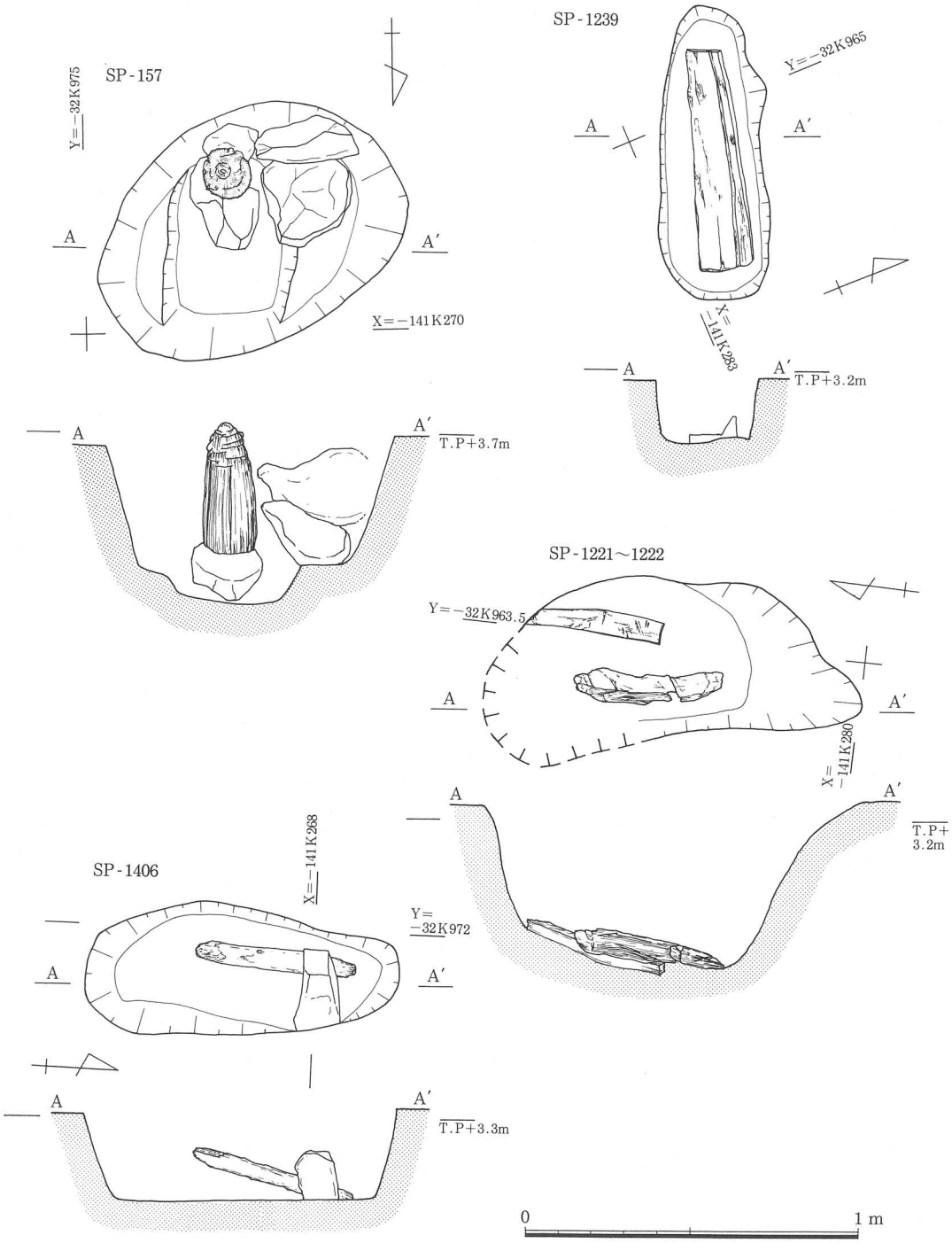
Ｍ－17区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.3mの円形を呈しており、深さは0.4mを測る。断面形は擂鉢状で、底面は平坦である。平瓦の破片を礎板として転用していた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

ＳＰ－157（第85図）

Ｍ－17区、第２遺構面上層で検出された。平面形は0.7×0.9mの長円形を呈しており、深さは0.5mを測る。礎石の上に柱根が載っている状態で、柱根の周りには、固定させるための割り石が置かれてあった。



第84図　ＳＰ－133・451・879・1176・1509平面、立面、断面図



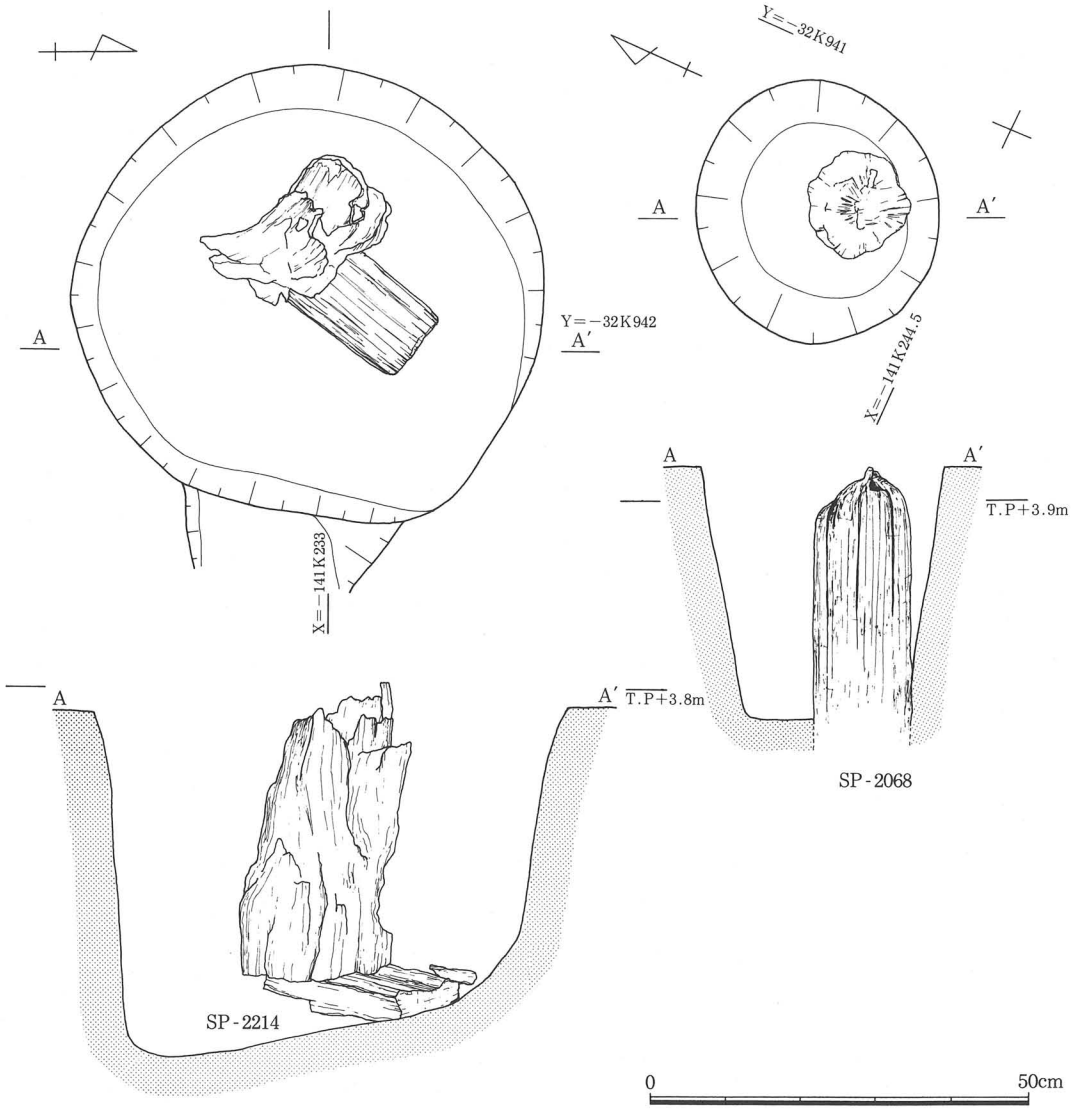
第85図　ＳＰ－157・1221～1222・1239・1406平面、立面、断面図

ＳＰ－1239（第85図）

Ｍ－６区、第２遺構面下層で検出された。平面形は0.2×0.8mの不定形を呈しており、深さは0.2mを測る。長い板状の材が底に敷かれていた。このような形状の遺構が果たして柱穴であるのかどうかは、疑問が残る。

ＳＰ－1221～1222（第85図）

Ｍ－６区、第２遺構面下層で検出された。遺構検出時はには２個のピットが重複しており、ピット内を掘り下げたところ図のような平面形0.3×0.9mの不定形の掘り形となった。２個のピットの前後関係は明ではないが、それぞれのピットには底面に長い板状の材と角



第86図　ＳＰ－2214・2068平面、立面図

材が置かれており、礎板として考えた。を呈しており、深さは0.2mを測る。長い板状の材が底に敷かれていた。しかしＳＰ－1239と同様、柱穴であるのかどうかは疑問が残る。

ＳＰ－1406（第85図）

Ｍ－16区、第２遺構面下層で検出された。平面形は0.3×0.5mの楕円形を呈しており、深さは0.4mを測る。底面に柱状の材が横たわり、その隣に角材が立った状態で出土した。底面はほぼ平坦である。ＳＰ－1221～1222、1239と同様、柱穴であるのかどうかは疑問が残る。

ＳＰ－2214（第86図）

Ｌ－９区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.5mの円形を呈しており、深さは0.5mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面に礎板と考えられる板材が敷かれ、その上に柱根が載せられている状態で検出された。

ＳＰ－2068（第86図）

Ｌ－３区、第２遺構面上層で検出された。平面形は径約0.3×0.4mのほぼ円形を呈しており、壁は検出面からやや斜めに垂直に掘り込まれており、掘り形内には円柱形の柱根が残存していた。

第５章　遺物

第１節　出土遺物の概要

調査では中世の遺物が大量に出土しているが、それ以外にも各時代の出土遺物が見られる。木製品については次章の第６章に説明を譲り、ここではそれ以外の出土遺物について概略を述べる。

陶磁器類

近世～近代までのものが、第１遺構面で検出した溝（水路）や基本層序Ⅱ・Ⅲ層から出土している。染付が中心で、出土量は少なく破片ばかりで、図示できるものはなかった。

瓦器椀

中世を代表する土器である瓦器椀は「楠葉型」、「大和型」、「和泉型」があり、それぞれ特徴を持った出土の仕方をしている。「楠葉型」は当遺跡から生産地が近く出土量も多いと考えられたが、予想に反して出土量は少なかった。瓦器椀の初現期である11世紀から13世紀末頃までのものが見られるが、量的には主流を占めるまでには至っていない。これに対して「大和型」は12世紀後半頃から多くなるようで、12世紀末～13世紀代に入ると当遺跡では完全に主流となるようである。「和泉型」はその生産地が遠いためか流通圏外となっているようで、やはりその出土量は少なかった。

瓦器皿

瓦器椀と同じ焼成法で作られたもので、形態的には口縁部に強いヨコナデが施されたために端部が外反するものと、そのまま斜め上方に向かって終わるものと、大きく２つに分類されるようである。見込みの暗文は、ジグザグを見込み全体に隙間なく施すもの、粗いジグザグ状、ジグザグの方向を変えて格子状に施されるもの、２条の幅狭のジグザグを直交させて十字状に施されるものなどがあり、その手法は瓦器椀のそれと同じである。概観すると12世紀後半～13世紀初頭頃までの間で見られるようである。

土師器皿

土師器皿は11世紀代の「て」の字状口縁を呈するものもあるが、12～13世紀代のものが圧倒的に多く出土している。口径の大きさで、小皿と中皿に分類できるが小皿の出土量が多い。小皿では口縁端部を内側に折り曲げるものが、少数ではあるが出土している。また、小皿の底部に高台を付けるものもあり、中には高い高台が付いている高杯のような形態を

呈するものもある。

土釜

口縁部付近に鍔をめぐらす煮炊き道具で、羽釜とも呼ばれる。その材質によって瓦器釜、土師器釜に分けられる。完形での出土はなくそのほとんどが破片であるが、口縁部と鍔の形態の特徴により「河内型」、「大和型」、「摂津型」、「山城型」があり、それぞれ出土している。「河内型」、「大和型」の出土量が多いようである。

瓦器足釜

扁平球状の瓦質の体部に短い太めの鍔をめぐらし、三方に棒状の脚が付くもので、その形状から三足とも呼ばれる。破片も含めて個対数は多い。底部の下で直接火を焚いて使用されたため、出土時は全体に煤が付着しているのが通常である。

土師器足付き鍋

形状は足釜によく似るが、口縁の形態が受け口状を呈するものである。出土数は少なく調査では１点しか確認されていない。

須恵器

時代的には古墳時代～中世のものまで幅広く出土しており、古墳時代のものには、破片ではあるが初期須恵器も数点含まれ、また、韓式系土器も少量であるが出土している。奈良時代の須恵器では、蓋杯に「⊗」の墨書が記されたものが出土している。中世では13世紀代の東播系須恵器片口鉢の出土が目立つ。

常滑

甕の破片がほとんどで、12世紀代～13世紀代のものが出土している。

緑釉陶器

破片で出土量はさほど多くないが、洛北産、近江産のものが見られる。

輸入陶磁器

白磁、青磁が出土しており、白磁は玉縁口縁を呈する碗が多く、一部外反するものも見られる。青磁は碗、皿ともに見られ、同安窯系、竜泉窯系のものが出土している。

瓦類

井戸側（井筒）、礎板に使用されていた平瓦と、鬼瓦などがあるが、概して出土量は少ない。井戸に使用されていた平瓦の１枚には、「東大寺」の刻印が施されていた。

黒色土器

Ａ・Ｂ類とも出土しているが、その出土量は少ない。Ａ類の方の出土が目立つ。Ａ類で

は「廣」の線刻、「西」の墨書が記されていたものが出土している。

土師器

皿以外の器種では、古墳時代～中世まで幅広く出土している。古墳時代では前期の庄内式～布留式期に比定されるものが少量出土しており、奈良時代の土師器も少量ではあるが出土している。土師器杯では「廣」の墨書が記されているものが出土している。

弥生土器

前期～後期のものが少量出土しているが、自然河川や包含層からの出土であり、上方からの流れ込みによるものがほとんどである。

縄文土器

遺構からの出土はなく、破片が少量出土しているが、上方からの流れこみによるものである。中期～後期のものが出土している。

その他

土器以外の遺物として、土錘、土馬、紡錘車などが出土しているが、量は少ない。土錘には中央に孔が貫通する紡錘形のものと、両側に溝を切る「工」字形のものがある。金属製品も出土量は少なく、銅銭、鉄製鍬先、鉄製刀子などが出土している。石製品ではヒスイ製勾玉、碧玉製臼玉やサヌカイト製石鏃、剝片が出土しているが量は少ない。また、敲き石、凹み石がセットで出土している。その他第II期調査で出土していた絹雲母片岩、紅簾石片岩、石英安山岩などの石片も量は少ないが出土している。

第2節　K・P区の出土遺物

ＳＥ－32（第87図）

楠葉型瓦器椀（１～３）と土師器高台付皿（４）が出土している。瓦器椀は橋本編年[1]のＩ－３～II－１期（以下Ｉ－３～II－１と記す）に属し、外面に分割ヘラミガキ、内面には細く密な圏線ミガキが施され、見込みの暗文は連結長楕円状、連結輪状が主体を成す。

ＳＥ－34（第87図）

楠葉型瓦器椀（５・６）が出土している。内面の圏線ミガキは比較的粗くなっており、外面には分割ヘラミガキが施されるが省略化の傾向が見られる。見込みには連結輪状の暗文が施されている。II－３に属する。

ＳＥ－35（第87図）

土師器高台付皿（７）、須恵器壺底部（８）が出土している。７は口縁端部にヨコナデを施す他は脚部、杯部には指押さえの痕が顕著に残る。

ＳＥ－38（第87図）

瓦器椀（９）が出土している。楠葉型で内面は密な圏線ミガキ、外面は底部付近まで分割ヘラミガキが施される。見込みには連結輪状の暗文が施されている。II－２に属する。

ＳＥ－39（第87図）

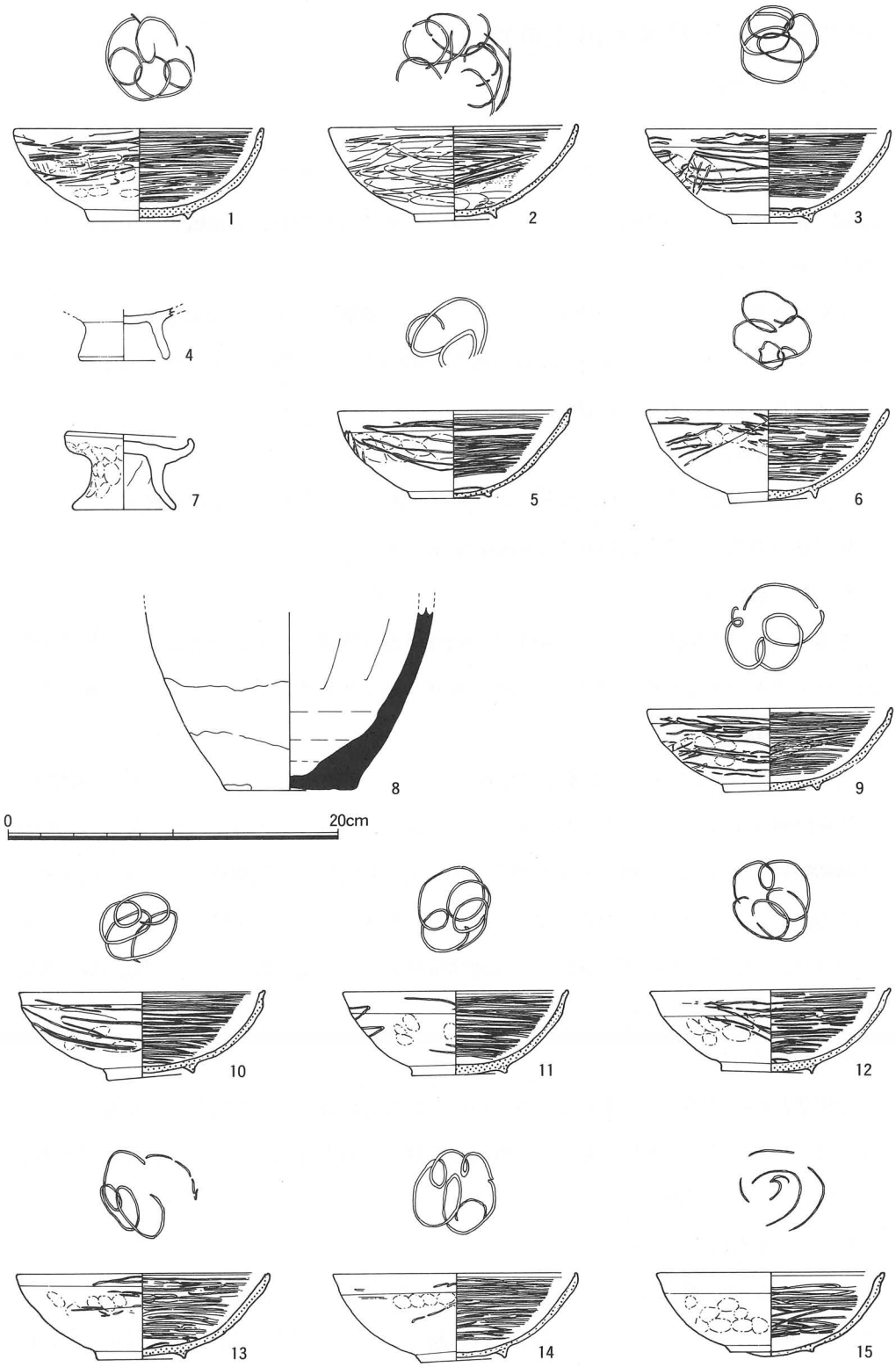
大和型瓦器椀（10～12）、楠葉型瓦器椀（13・14）が出土している。大和型は川越編年[2]の第III段階Ａ型式（古）以下（III－Ａ（古）と記す）に属すると考えられ、見込みの暗文は連結輪状で、外面には粗い分割ヘラミガキが施されている。楠葉型はII－３に属する。13は内面にハケメの上から圏線ミガキが施され、外面のヘラミガキは口縁部付近に施されるのみで、省略されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。14も同様で外面のヘラミガキはほとんど見られない。

ＳＥ－40（第87図）

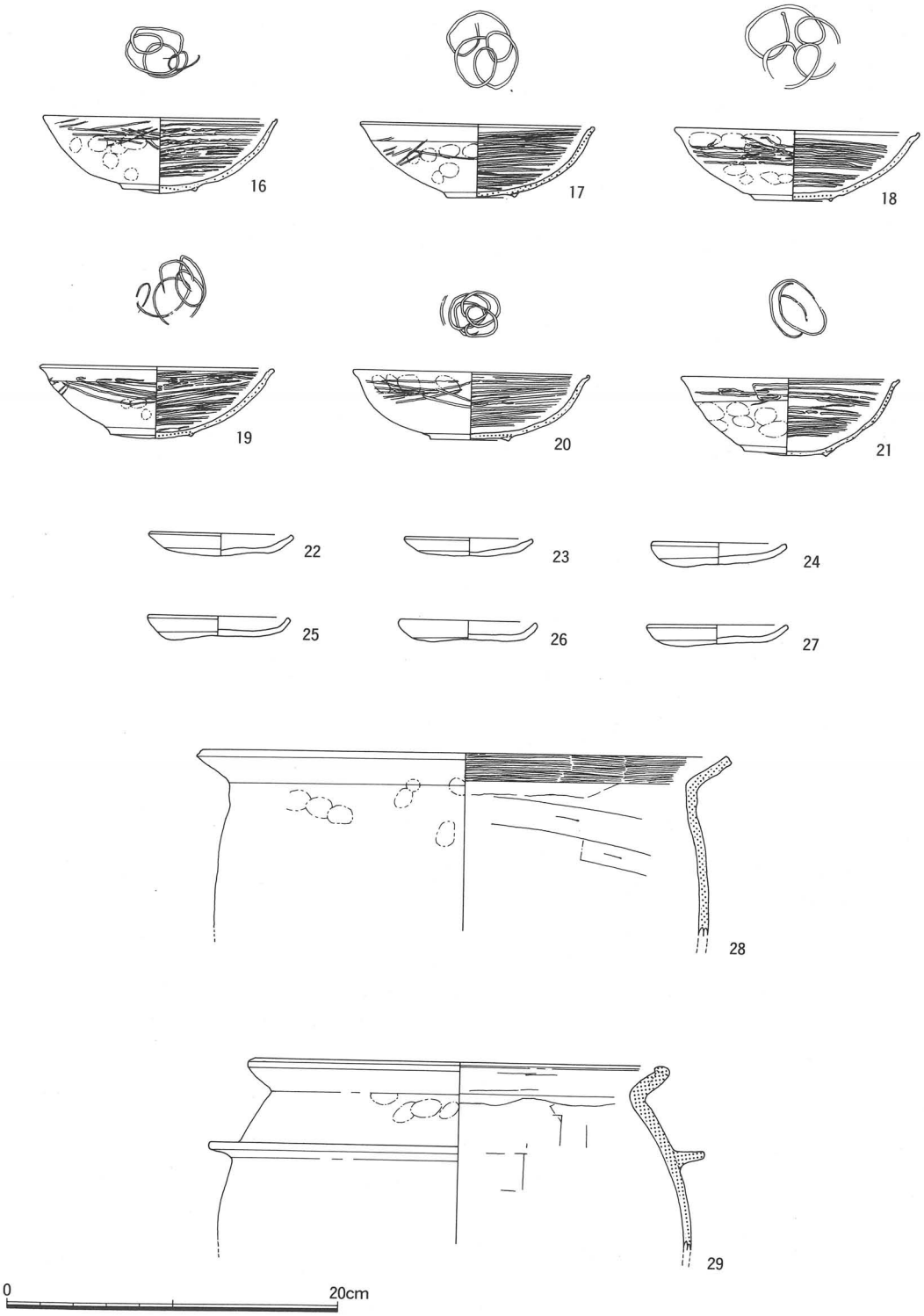
大和型瓦器椀（15）が出土している。内面には粗い圏線ミガキが施され、外面のヘラミガキはほとんど見られない。見込みの暗文は磨耗のため不鮮明であるが、連結輪状であろう。III－Ａ（新）に属する。

ＳＥ－42（第89図）

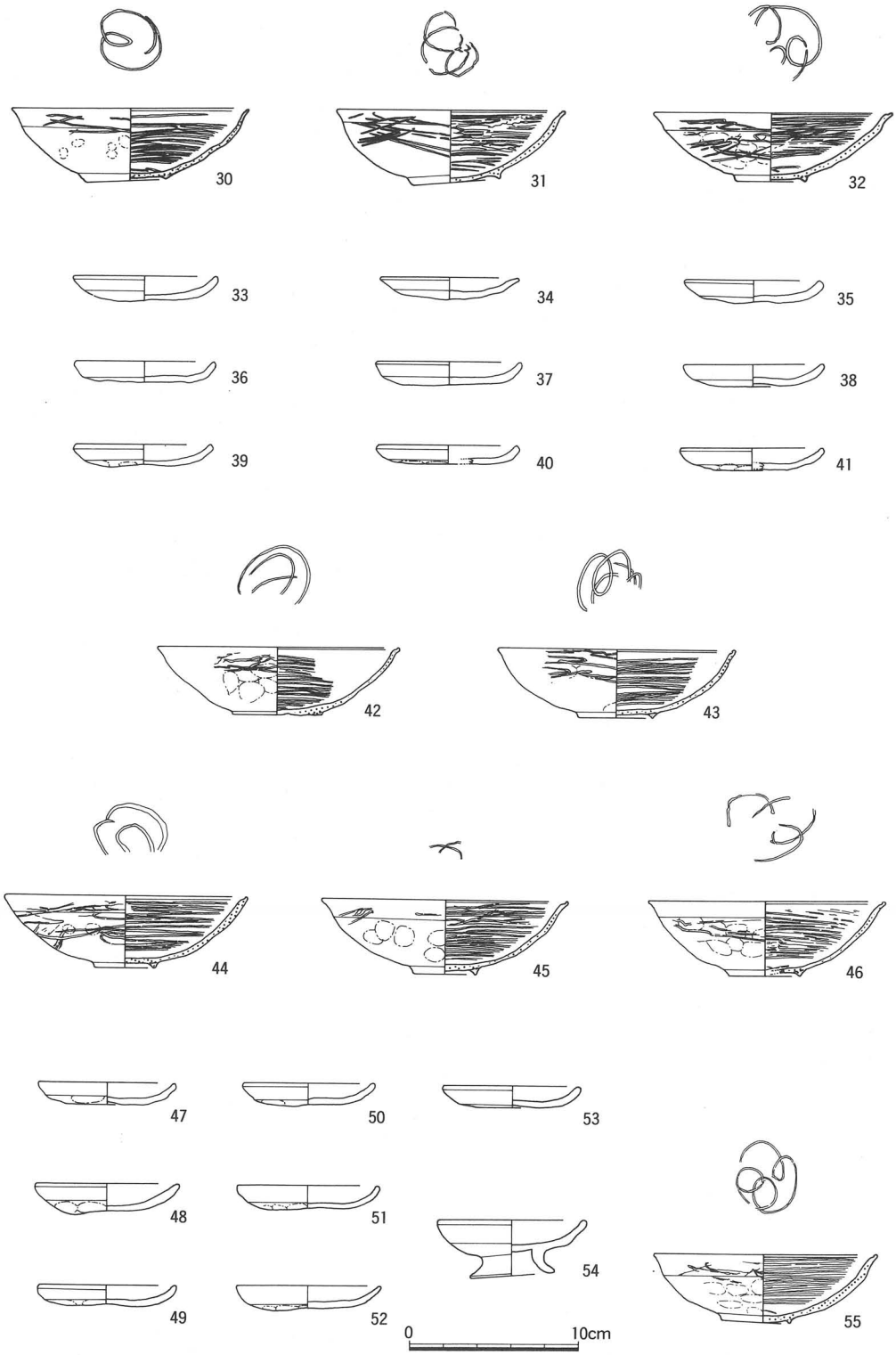
大和型瓦器椀（30～32）、土師器皿（33～39）が出土している。瓦器椀は30に見込みの暗文の省略化が見られる。いずれもIII－Ｂに属する。土師器皿は34が口縁端部を外側に開いた状態で終っている。



第87図　ＳＥ－32・34・35・38・39・40出土遺物



第88図　ＳＥ－43出土遺物



第89図　ＳＥ－42・44・45・46・47出土遺物

ＳＥ－43（第88図）

大和型瓦器椀（16～21）、土師器皿（22～27）、瓦器鍋（28）、瓦器釜（29）が出土している。瓦器椀は退化した高台を持ち、器高も低くなる傾向を示している。17には暗文の省略化が見られる。16・17・20がⅢ－Ａ（新）で、18・19・21がⅢ－Ｂに属すると考えられる。29は口縁端部を内側に折り返すのが特徴で、菅原編年[3]の大和Ｂ$_1$型に属する。

ＳＥ－44（第89図）

土師器皿（40・41）、大和型瓦器椀（42・43）が出土している。42は高台の退化と暗文の省略化が見られ、42はⅢ－Ｂ、43はⅢ－Ａ（新）に属する。

ＳＥ－45（第89図）

大和型瓦器椀（44～46）、土師器皿（47～53）が出土している。瓦器椀はいずれも見込みの暗文の省略化が見られ、内面の圏線ミガキも隙間が出来る程、粗くなっている。Ⅲ－Ａ（新）に属する。

ＳＥ－46（第89図）

大和型瓦器椀（55）が出土している。Ⅲ－Ａ（新）に属し、外面のヘラミガキは省略化され、見込みには連結輪状の暗文が施されている。

ＳＥ－47（第89図）

土師器高台付皿（54）が出土している。

ＳＫ－92（第90図）

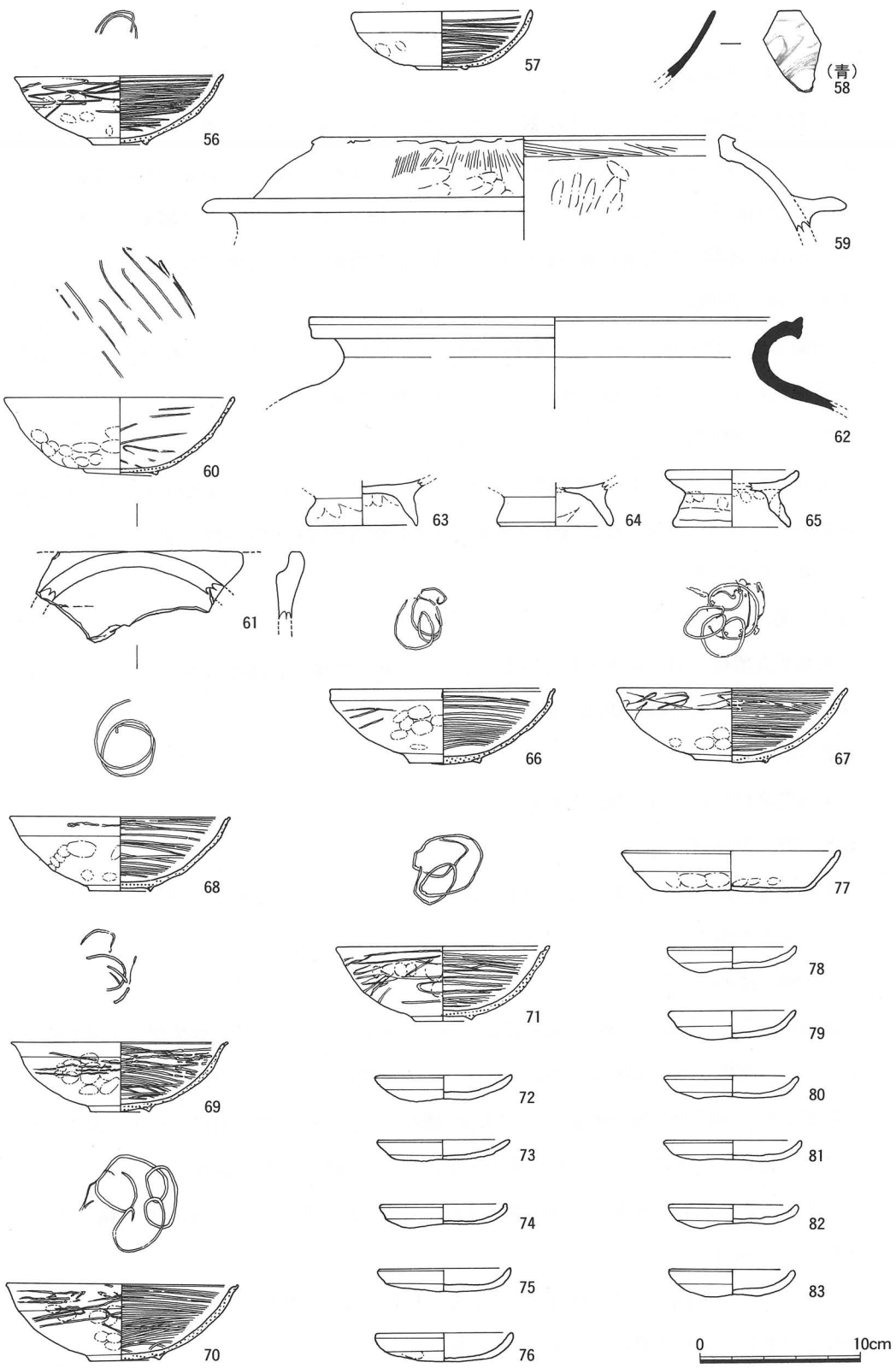
大和型瓦器椀（56）が出土している。Ⅲ－Ａ（新）に属し、外面は体部上半部まで分割ヘラミガキが施されている。

ＳＫ－94（第90図）

瓦器椀（57）、青磁片（58）、土師器釜（59）が出土している。57は楠葉型で法量が縮小し、内面の圏線ミガキは粗く、外面にはヘラミガキはほとんど施されていない。Ⅲ－２～３に属する。58は青磁碗口縁部片で、内面に櫛状もしくはヘラ状工具による花文が施されている。龍泉窯系青磁と考えられ、横田・森田編年[4]の碗Ⅰ－２類に属する。59は内外面ともハケメによる調整が施され、口縁端部は直立気味にたちあがり、河内Ｂ$_1$型に属する。

ＳＫ－95（第90図）

土師器の円筒形製品（61）が出土している。形状は丸瓦に類似しており、同形のものを連続して差し込んで使用したようである。樋のようなものか。



第90図　ＳＫ－92・94・95・96・97出土遺物

ＳＫ－96（第90図）

瓦器椀（60）が出土している。和泉型で外面のヘラミガキはほとんど省略化れ、内面の圏線ミガキもやや粗い。見込みの暗文は粗い平行線状である。尾上編[5]年のII－３期（以下II－３と記す）に属する。

ＳＫ－97（第90図）

須恵器甕（62）、土師器高台付皿（63～65）、瓦器椀（66～71）、土師器皿（72～83）などが出土している。63～65は、底径の大きい「ハ」の字状に開くしっかりとした高台が付く。瓦器椀は大和型で、型式的にはいずれもIII－Ａ（新）～Ｂ相当するようである。

ＳＫ－100（第91図）

瓦器椀（84）が出土している。大和型で外面のヘラミガキは省略化され、見込みには連結輪状の暗文が施されている。III－Ｂに属する。

ＳＫ－101（第91図）

瓦器椀（85）、土師器皿（86・87）、青磁皿（88）が出土している。85は大和型で見込みの暗文は省略化されている。III－Ａ（新）に属する。88は同安窯系で、内面に片彫りの花文が施されている。皿Ｉ－１類に属する。

ＳＫ－108（第91図）

瓦器椀（89・90）、土師器皿（91）、が出土している。89は大和型でII－Ａ～Ｂに属し、90は楠葉型でII－２～３に属する。

ＳＫ－111（第91図）

土師器甕（92・93）が出土している。いずれも器壁の薄い球形の体部から「く」の字状に屈曲する短い口縁部が付き、口縁端部は内側に肥厚して終る。92には体部の２箇所に穿孔が施されている。布留式に属する。

ＳＫ－120（第91図）

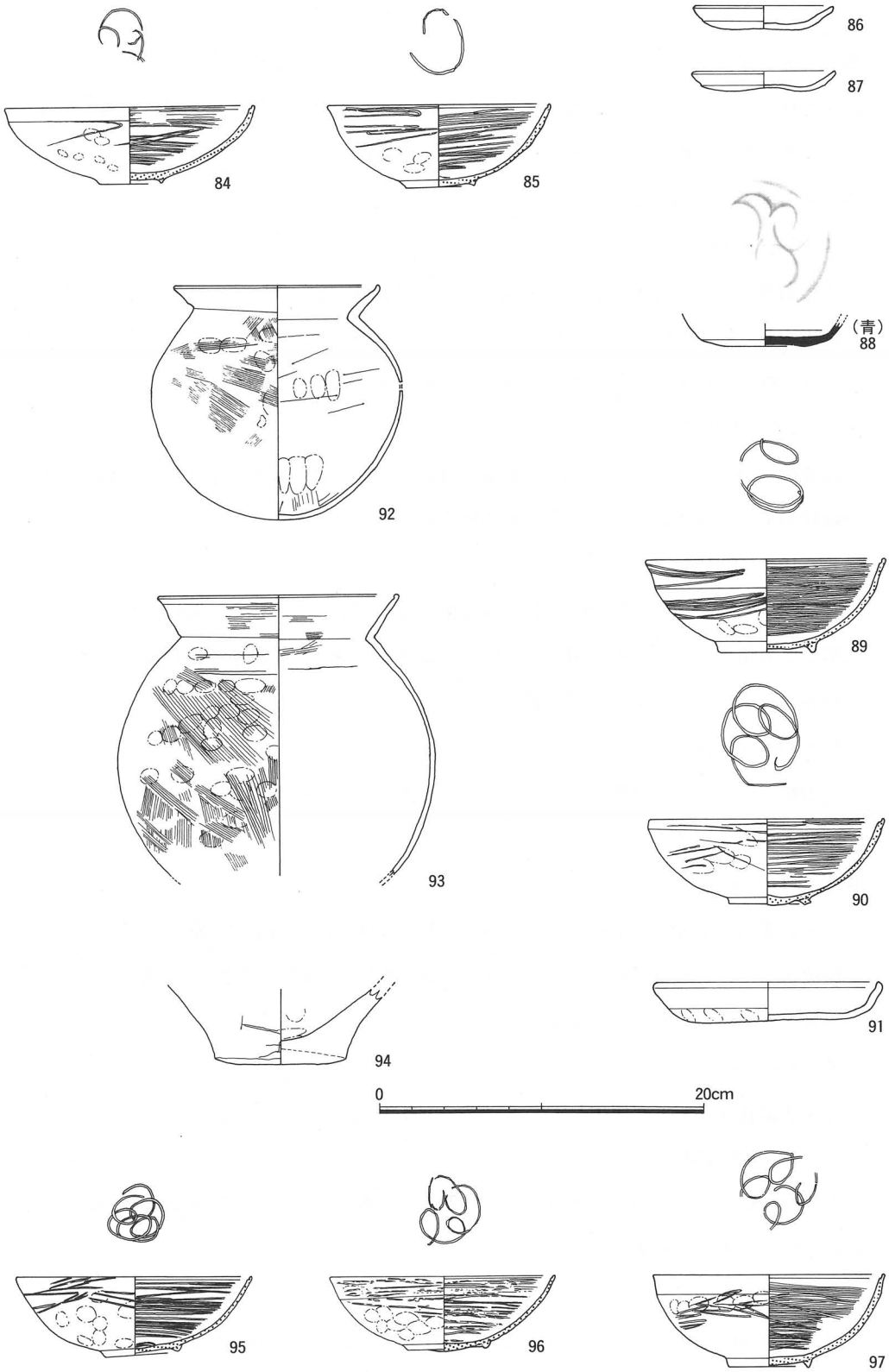
弥生土器底部（94）が出土している。

ＳＫ－131（第91図）

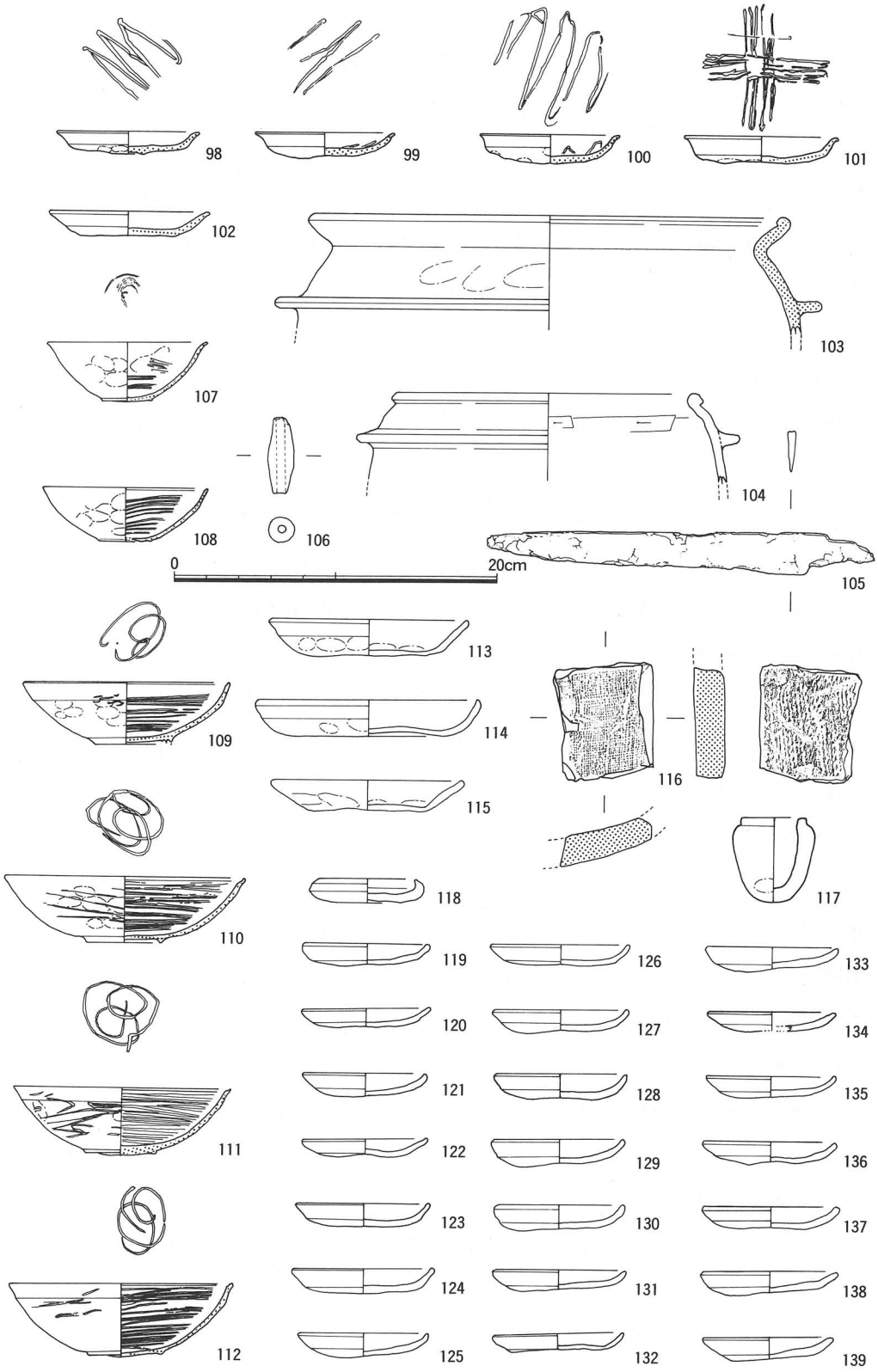
瓦器椀（95～97）が出土している。いずれも大和型で、見込みには連結輪状の暗文が施されている。III－Ａに属する。

ＳＤ－59（第92図）

瓦器皿（98～102）、瓦器釜（103）、土師器釜（104）、瓦器椀（107～112）、土師器皿（113～115、118～139）、鉄製刀子（105）、土錐（106）、瓦（116）、小型壺（117）などが



第91図　ＳＫ－100・101・108・111・120・131出土遺物



第92図　ＳＤ－59出土遺物

出土している。瓦器皿は見込みの暗文がジグザグ状のもの（98～100）とジグザグの方向を変えて２度施した十字状のもの（101）、暗文の施されないもの（102）がある。103は大和Ｂ$_1$型で12世紀後半～13世紀前半頃の時期を示す。104は河内Ｂ$_1$型か。瓦器椀はいずれも大和型であるが、型式はⅢ－Ａ（新）～Ⅲ－Ｅの範囲で、時期的には12世紀末～14世紀初頃と広い年代幅を示している。土師器皿は113～115が中皿である。118は口縁端部を内側に折り返している。

ＳＤ－68（第93図）

瓦器椀（140～147）、白磁碗（148）、土師器皿（149～151、153～156）、瓦器皿（152）、土師器釜（157）、常滑甕（158）などが出土している。瓦器椀はいずれも外面のヘラミガキが省略化の傾向を示し、見込みには連結輪状の暗文が施されている。141・142は楠葉型で、Ⅱ－３～Ⅲ－１に属し、140、143～147は大和型でⅢ－Ａ（新）～Ⅲ－Ｂに属する。白磁碗は底部のみの出土であるが、厚くて低い高台を持ち碗Ⅳ－１類に属する。土師器釜は短い鍔を持ち、口縁端部は内側に肥厚して終る。大和Ｂ$_1$型に属する。

ＳＲ－01（第94図）

須恵器（160・161・163）が出土している。160・161は須恵器杯蓋で、中村編[6]年のⅡ型式１段階（以下Ⅱ－１と記す）に属する。163は須恵器杯身で、Ⅱ－１に属する。

ＳＲ－02（第94図）

須恵器（159・162・164）と土師器（165・166）が出土している。159は須恵器提瓶で、把手は欠損している。口縁部は直立気味に立ち上がり、外反して後端部は肥厚し丸く終る。162は須恵器高杯蓋で、Ⅰ－５に属する。164は須恵器杯身で、Ⅱ－１に属する。165は土師器杯で、外面にヘラケズリが施されている。166は布留式甕である。体部外面には不定方向のハケメが施されており、内面にはヘラケズリの痕が認められる。

ＳＰ－2505（第94図）

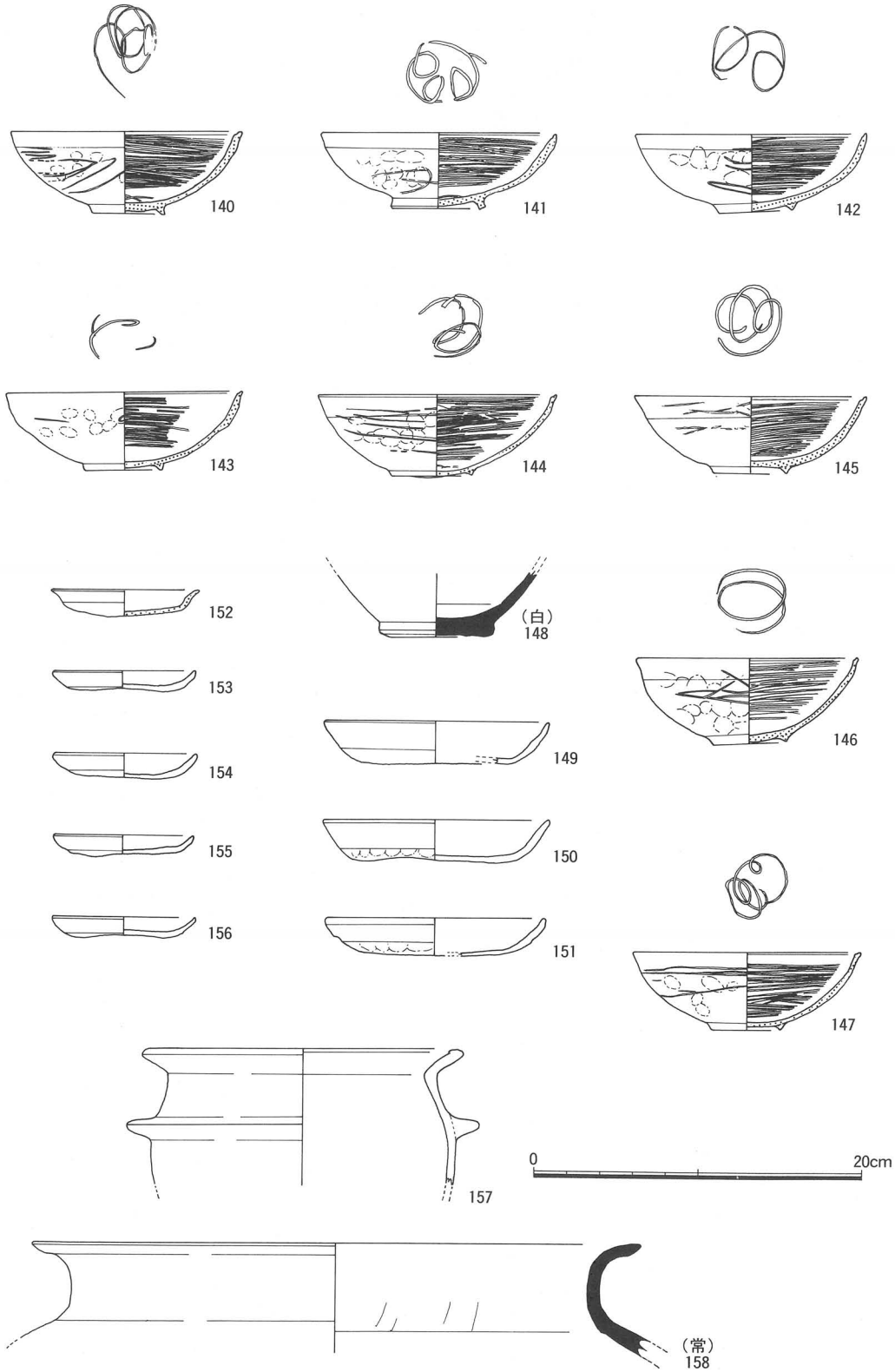
瓦器椀（167）、土師器皿（168～171）が出土している。167は大和型でⅢ－Ａ（新）に属する。

ＳＰ－2506（第94図）

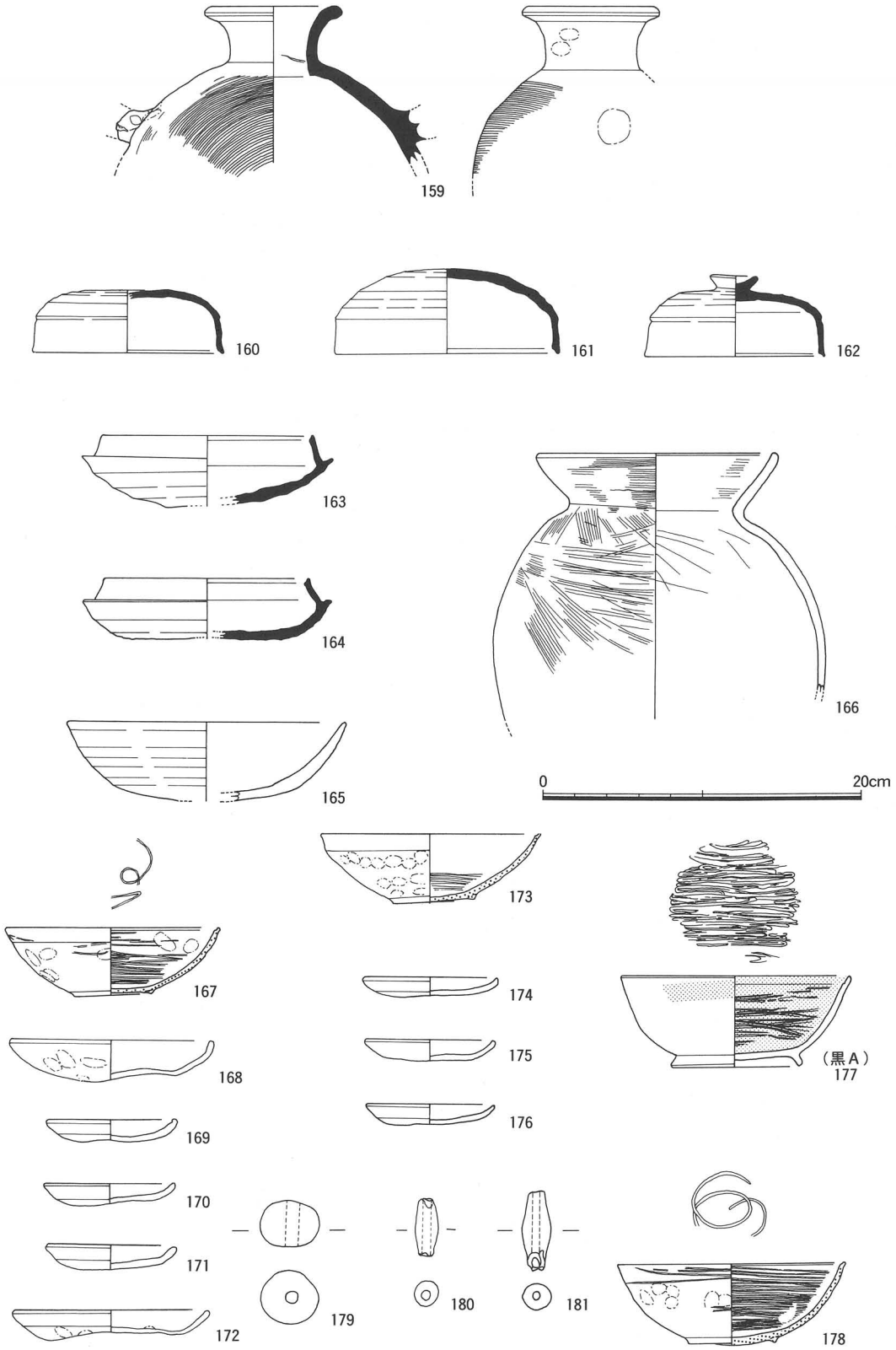
土師器中皿（172）と大和型瓦器椀（173）が出土している。Ⅲ－Ａ（新）に属する。

ＳＰ－2510（第94図）

球状の土錘（179）が出土している。



第93図　ＳＤ－68出土遺物



第94図　ＳＲ－01・02、ＳＰ、包含層出土遺物

ＳＰ－2531（第94図）

土師器皿（174・175）が出土している。

ＳＰ－2640（第94図）

土師器皿（176）が出土している。

ＳＰ－2675（第94図）

黒色土器Ａ類（177）が出土している。森編[7]年の畿内系Ⅲ類に属する。

ＳＰ－2702（第94図）

紡錘形の土錘（180）が出土している。

ＳＰ－2828（第94図）

大和型瓦器椀（178）が出土している。Ⅲ－Ａ（新）に属する。その他、包含層（Ⅲ層）からも紡錘形の土錘（180）が出土している。

第3節　L・O・Q区の出土遺物

ＳＴ－02（第95図）

瓦器椀（182～187）、土師器皿（188～196）、瓦器皿（199）、瓦器足釜（197）、砥石（198）などが出土している。瓦器椀は184が和泉型、187が楠葉型で、その他は大和型である。182は大和型で、外面のヘラミガキが口縁部付近に施される程度で、内面の圏線ミガキも粗く隙間がある。Ⅲ－Ｃに属する。183も大和型瓦器椀で、法量の縮小化見られ内面の圏線ミガキもさらに粗くなっている。Ⅲ－Ｄに属する。184は和泉型瓦器椀で、外面のヘラミガキは施されずほとんど省略化され、内面の圏線ミガキも下部に粗く施されている。Ⅳ－１に属する。186は大和型瓦器椀で、法量の縮小化がが見られ、外面にはヘラミガキが施されず、内面は粗い圏線ミガキと見込みに渦巻き状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｅに属する。187は楠葉型瓦器椀で、外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面の圏線ミガキは粗く、見込みの暗文も粗いジグザグ状である。Ⅲ－３に属する。瓦器皿（199）は、見込みにジグザグの方向を変えた十字状の暗文が施されている。

ＳＥ－22（第95図）

土師器皿（206）が出土している。底部の外側から径約２㎜の穿孔が施されている。

ＳＥ－28（第95図）

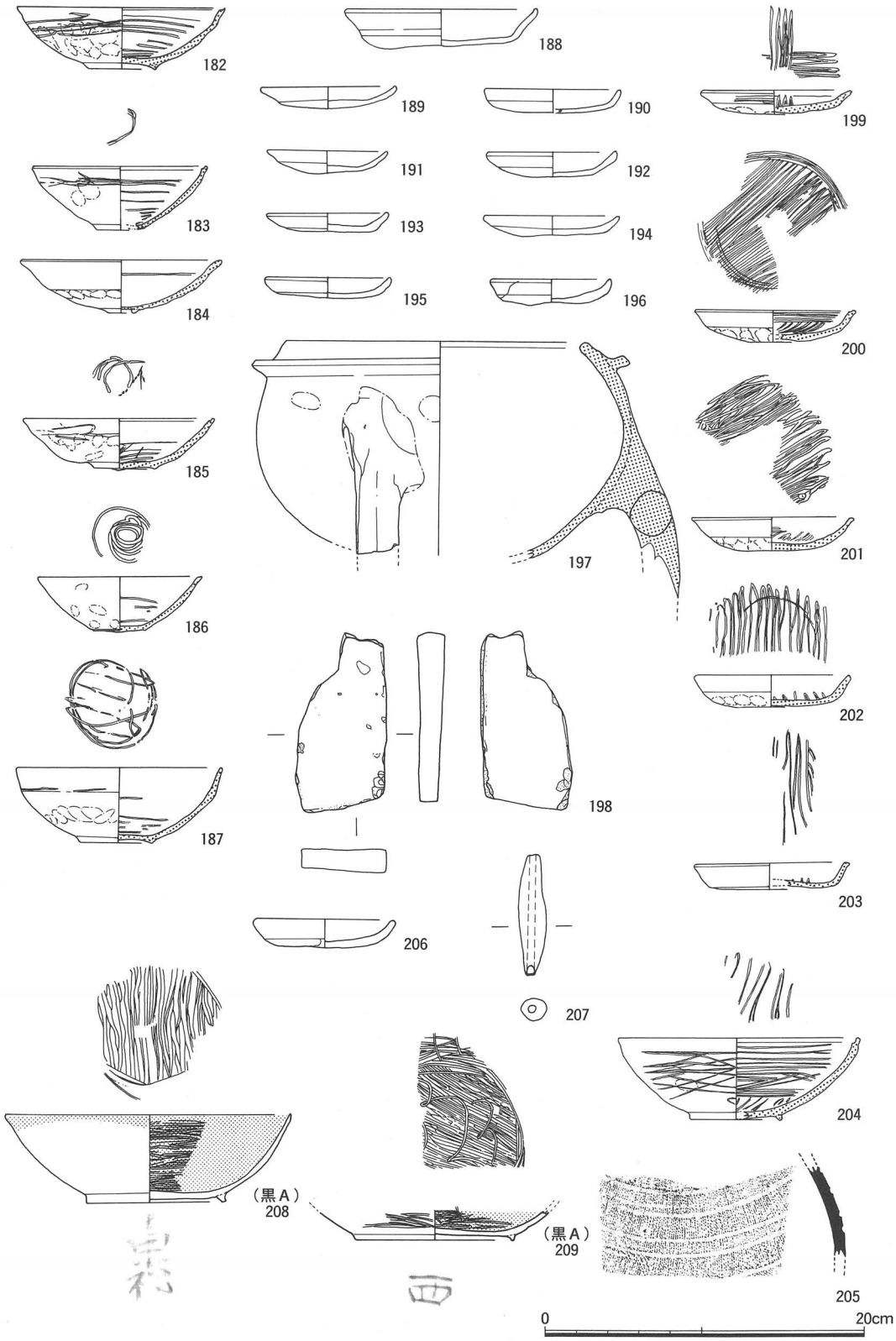
瓦器皿（200～203）、瓦器椀（204）、須恵器片（205）が出土している。200は内面に密な圏線ミガキが施され、見込みにも密なジグザグ状の暗文が施されている。201は見込みに複雑なジグザグ状の暗文が施されている。202・203は粗いジグザグ状の暗文が施されている。204は大和型で、外面は粗い分割ヘラミガキ、内面は粗い圏線ミガキと見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。Ⅱ－Ｂに属する。205は混入品の須恵器片である。甕の体部と推定され、外面には縄蓆文と圏線が施されている。

ＳＥ－31（第95図）

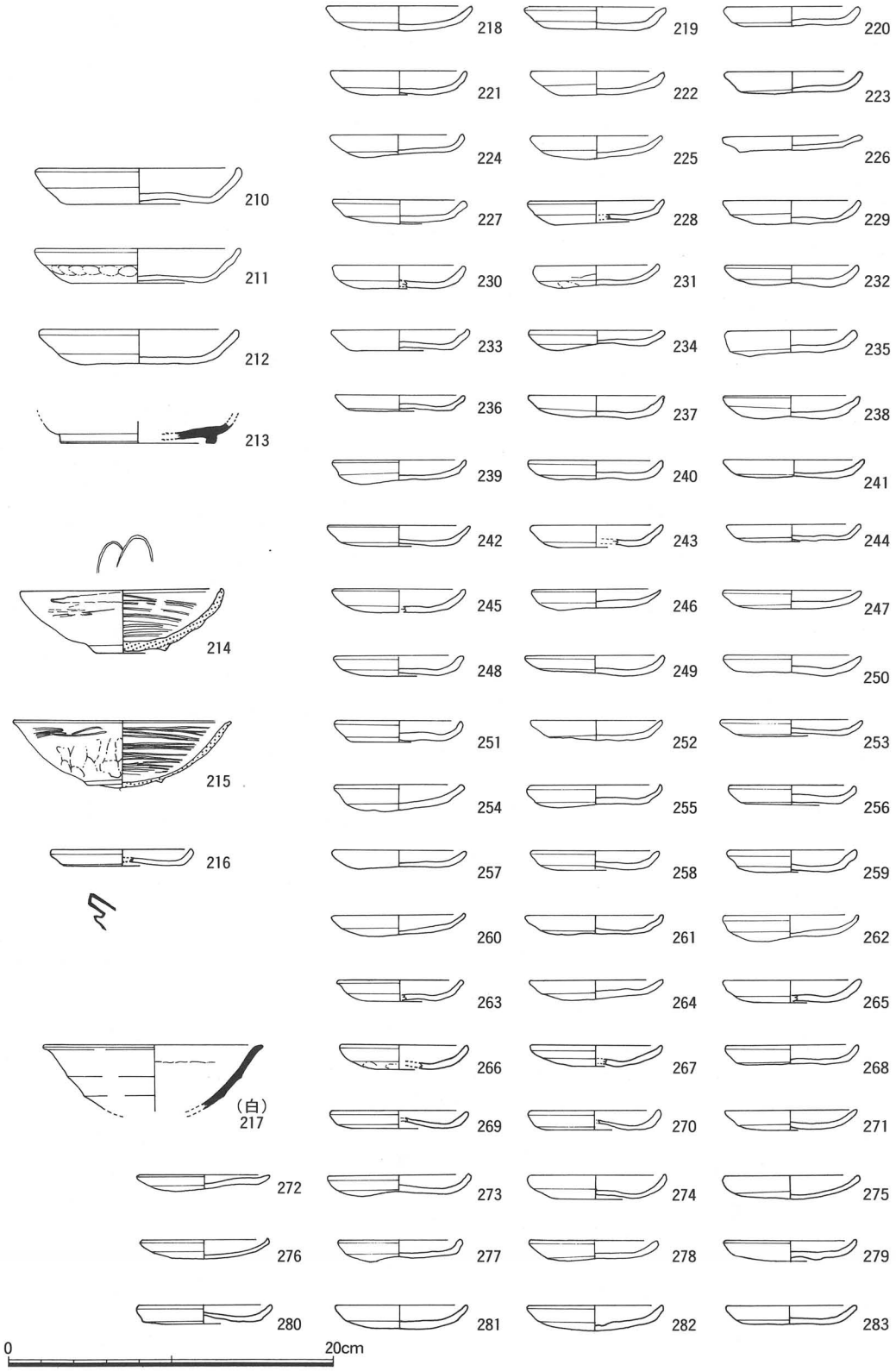
土錘（207）、黒色土器Ａ類（208・209）が出土している。208は太めのヘラミガキを密に施しており、底部外面に「□福」の墨書があるが、１文字は読解不能である。209は細いヘラミガキを密に施しており、見込みには螺旋状の暗文が施されている。底部外面に「西」１文字の墨書がある。いずれも畿内系Ⅲ類に属する。

ＳＫ－56（第96・97・98・99・100図）

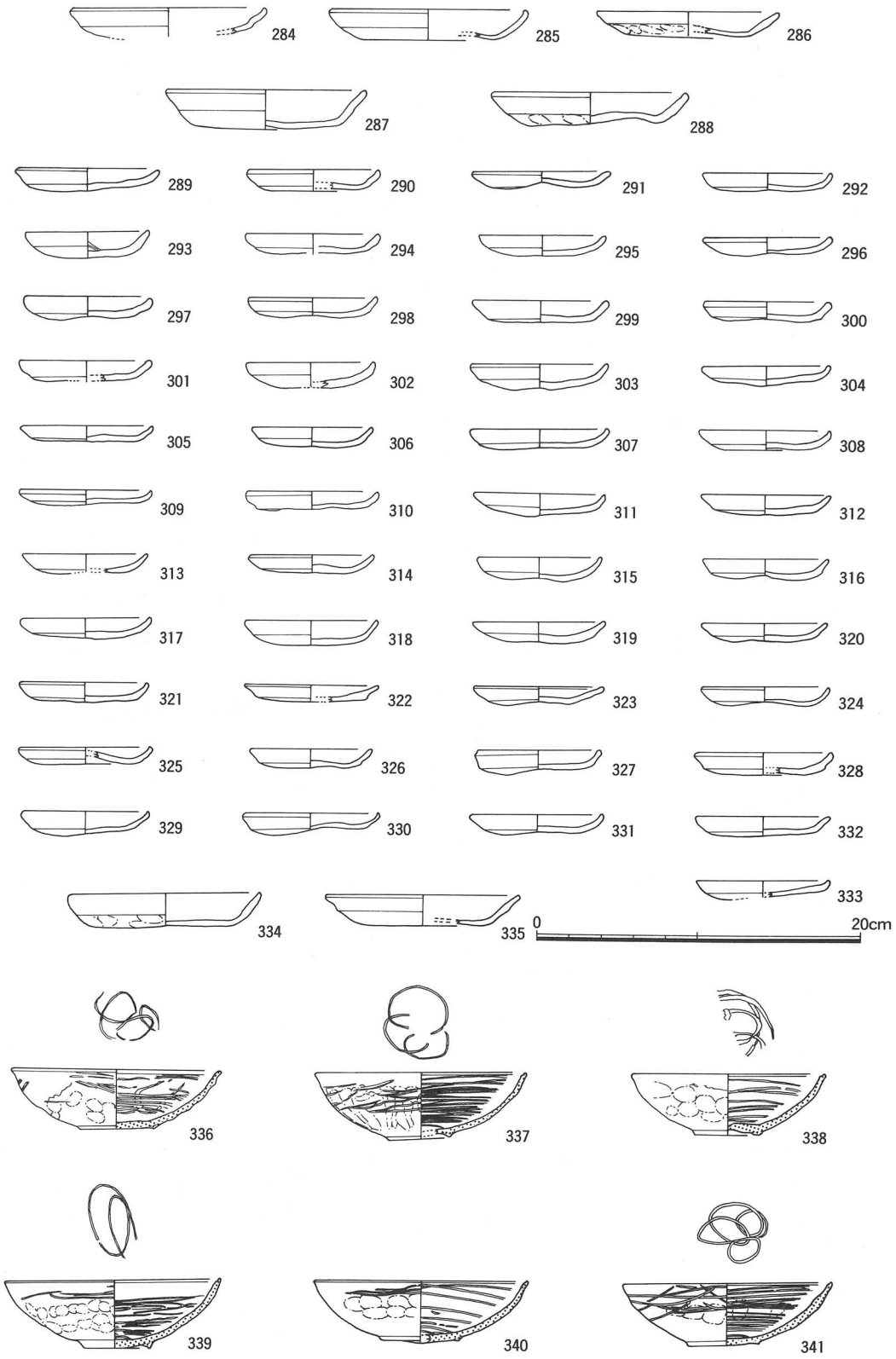
廃棄土坑と考えられるこの遺構からは、大量の遺物が出土した。種類別には土師器皿が最も多く出土しており、型式的には大体13世紀代の時期に相当すると考えている。そのう



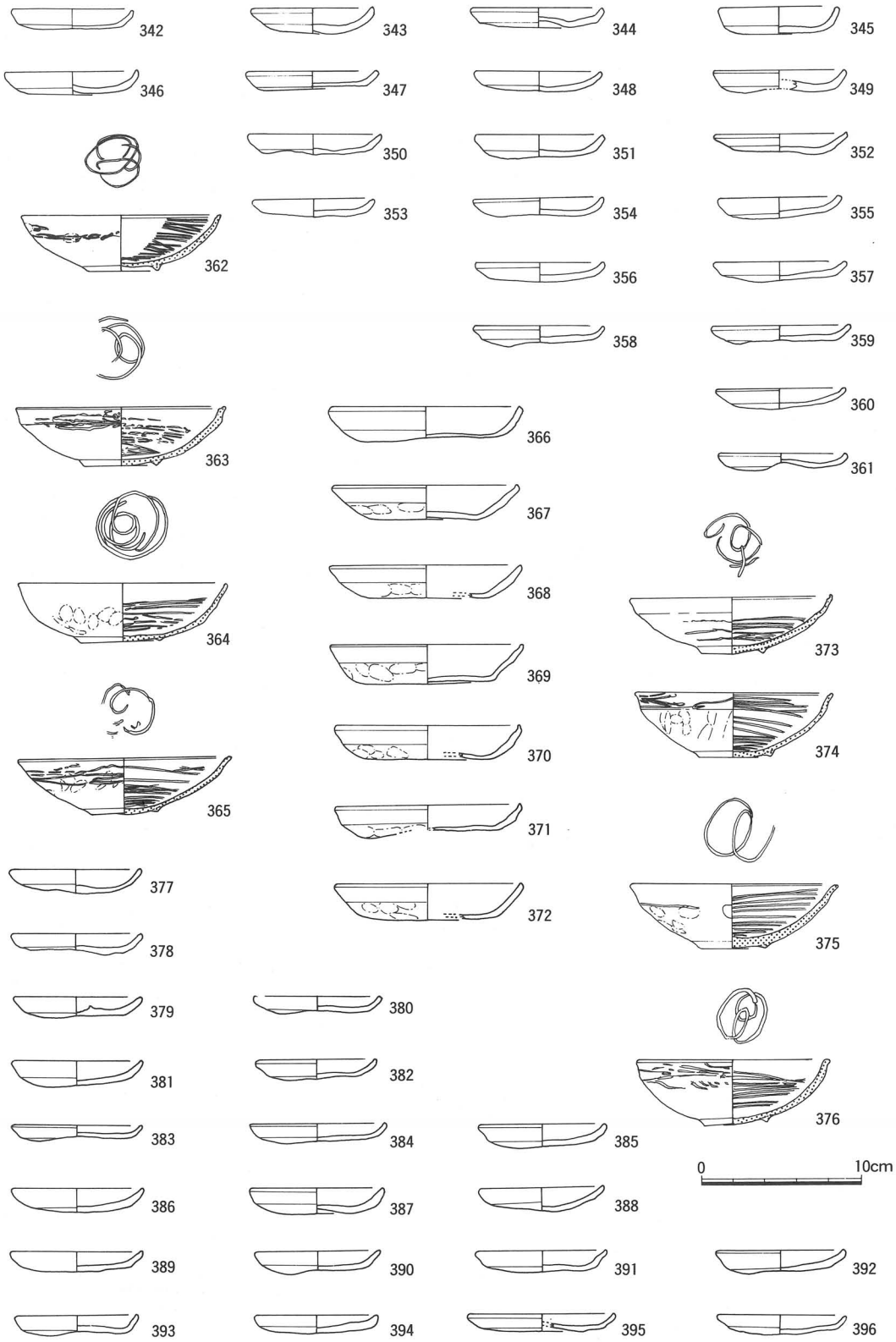
第95図　ＳＴ－02、ＳＥ－22・28・31出土遺物



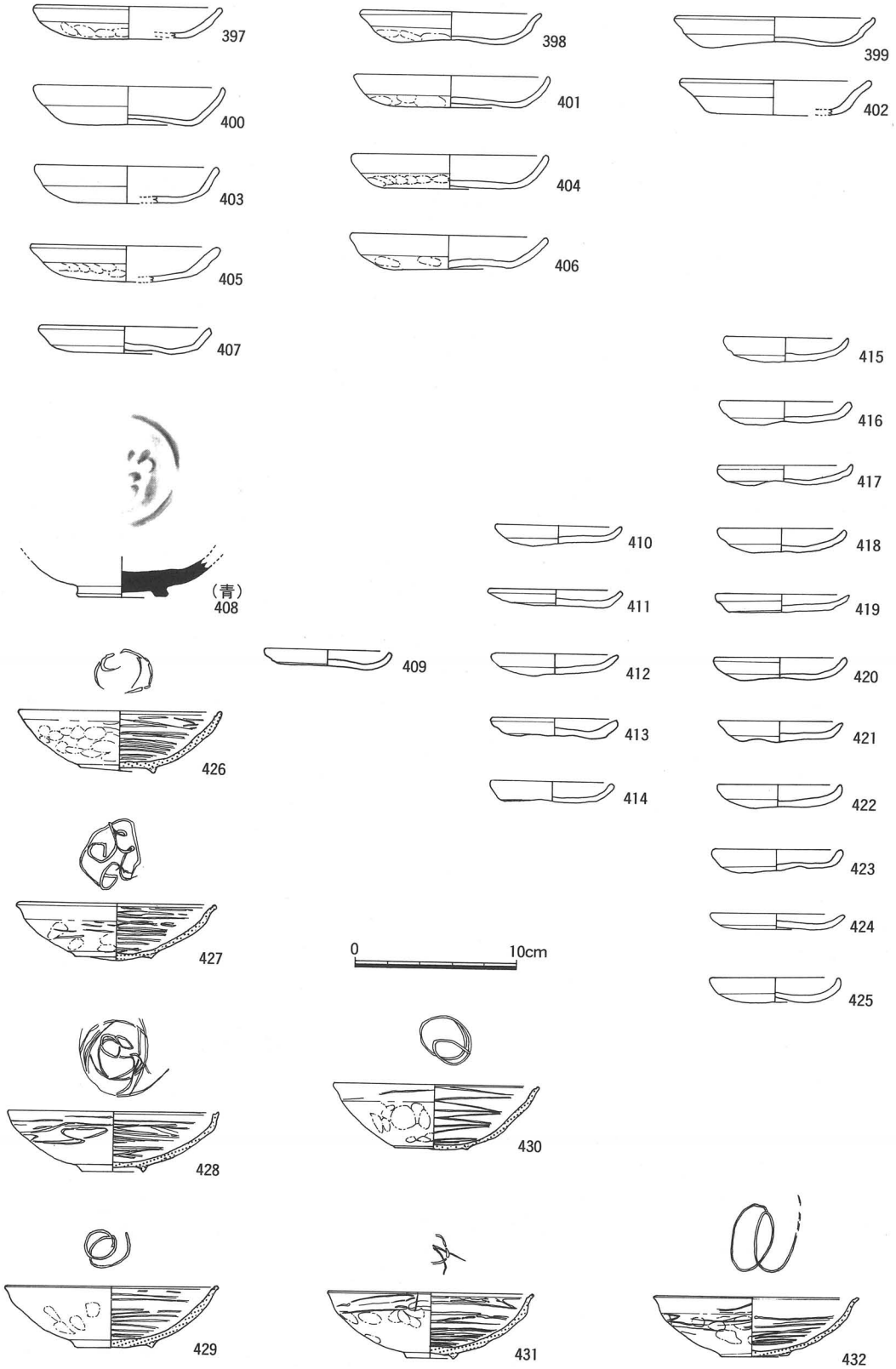
第96図　ＳＫ－56出土遺物（１）



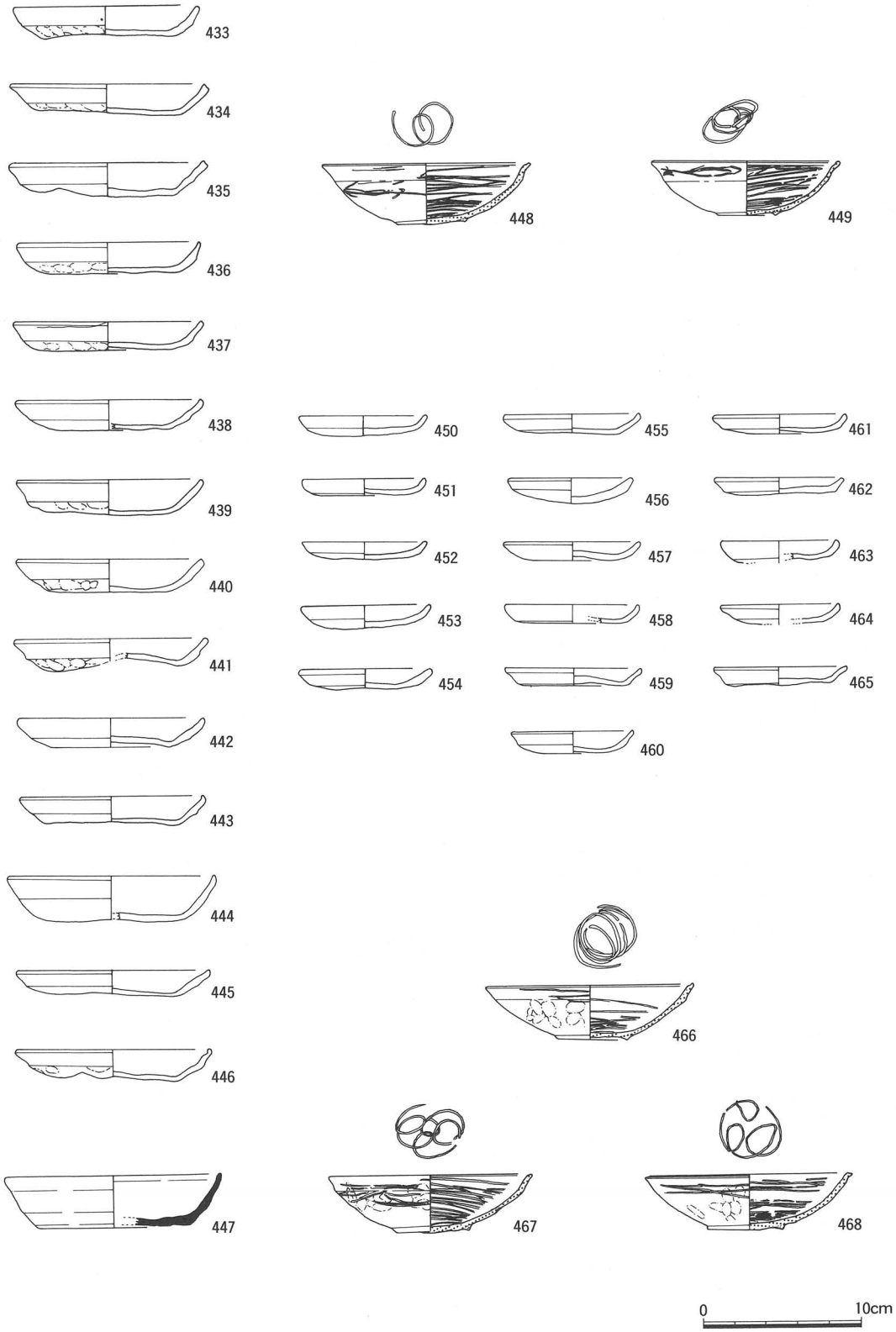
第97図　ＳＫ－56出土遺物（２）



第98図　ＳＫ－56出土遺物（３）



第99図　ＳＫ－56出土遺物（４）

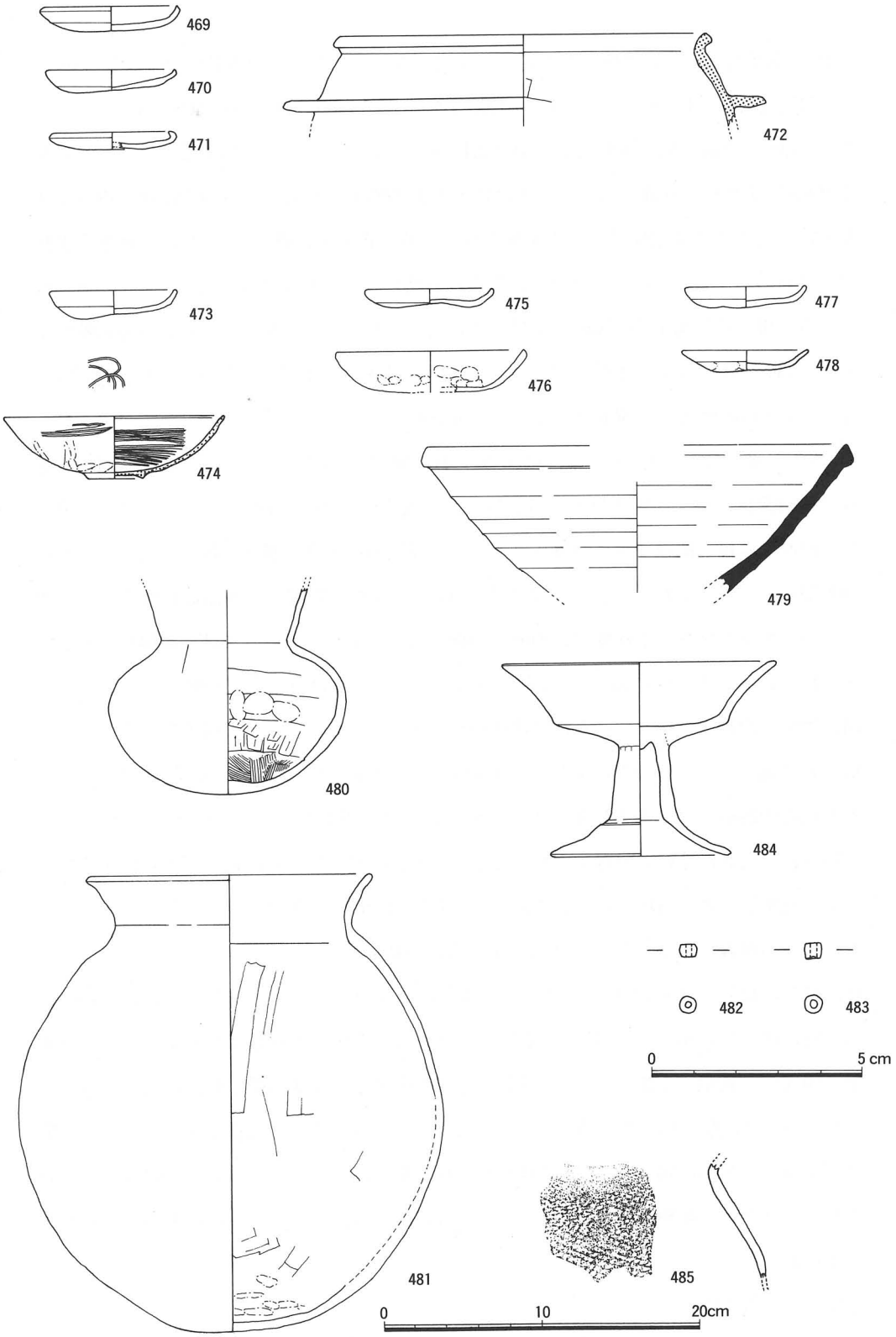


第100図　ＳＫ－56出土遺物（５）

ち216の底部外面には、意味不明の記号の墨書がされていた。土師器皿の他には瓦器椀（214・215、336～341、362～365、373～376、426～432、448・449、466～468）、白磁（217）、青磁（408）や混入品の遺物として須恵器杯身（213・447）などが出土している。瓦器椀は214が楠葉型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化されており、内面は粗い圏線ミガキと、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－１に属する。215は大和型瓦器椀で、外面のヘラミガキは口縁部付近に限られ省略化され、内面は粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｃに属する。336～341はいずれも大和型瓦器椀で見込みの暗文が連結輪状のもの（336～338、341）、長楕円状のもの（339）、省略されるもの（340）がある。圏線ミガキは338・340が粗く、隙間が大きい。336がⅢ－Ｂ～Ｃ、337がⅢ－Ｂ、338がⅢ－Ｃ～Ｄ、339がⅢ－Ｂ、340がⅢ－Ｃ、341がⅢ－Ｂに属する。362・363は大和型瓦器椀で見込みに連結輪状の暗文が施されており、Ⅲ－Ｂに属する。364は外面のヘラミガキは省略され、内面には粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は渦巻き状である。形態的に楠葉型と考えられ、Ⅲ－１～２に属する。365は大和型瓦器椀で、外面は口縁部付近に粗いヘラミガキが施される程度で、内面の圏線ミガキも粗い。見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｃに属する。373は外面のヘラミガキはほとんど省略されており、内面には粗い圏線ミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施されている。楠葉型と考えられ、Ⅲ－３に属する。374～376は大和型瓦器椀で、374はⅢ－Ｂ、375・376は外面のヘラミガキと内面の圏線ミガキの省略化が大で、Ⅲ－Ｃ～Ｄに属する。426は外面のヘラミガキが省略され、内面には粗い圏線ミガキ、見込みにも簡略化された連結輪状の暗文が施されている。楠葉型と考えられ、Ⅲ－２に属する。427～432は大和型瓦器椀で、外面のヘラミガキ、内面の圏線ミガキ、見込みの暗文が省略化の傾向を示す。427・429・430がⅢ－Ｃ～Ｄに属し、428・431・432がⅢ－Ｂ～Ｃに属する。448・449、466～468は大和型瓦器椀で、いずれもⅢ－Ｃに属する。217は白磁碗で、底部は欠損するが口縁部を外反させ端部を水平に伸ばす。碗Ⅷ－１類に属する。408は青磁碗底部で、器壁が厚く断面四角形の高台を「ハ」の字状に削り出している。見込みには草花文と推定される文様が施されている。龍泉窯系碗Ⅰ－２類に属する。213は須恵器杯身で断面四角形の高台がやや内傾気味に付いており、Ⅳ型式の範疇に入ると考えられる。447は無高台で、底部外面は未調整であるⅣ－４に属する。

ＳＫ－58（第101図）

土師器皿（469～471）、瓦器釜（472）が出土している。471は口縁部を内側に折り返し



第101図　ＳＫ－58・61・64・66・67・70・80・82・83出土遺物

ている。472は河内B_1型に属する。

ＳＫ－61（第101図）

土師器皿（473）、大和型瓦器椀（474）が出土している。474は外面のヘラミガキが口縁部付近にのみ施され、内面にはやや粗い圏線ミガキが、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ａ（新）に属する。

ＳＫ－64（第101図）

深めの形態の土師器皿（476）が出土している。

ＳＫ－66（第101図）

土師器皿（475）が出土している。

ＳＫ－67（第101図）

土師器皿（477・478）、東播系須恵器片口鉢（479）が出土している。

ＳＫ－70（第101図）

古墳時代の土師器壺（480）、土師器甕（481）、碧玉製臼玉（482）が出土している。

ＳＫ－80（第101図）

古墳時代前期に属する土師器高杯（484）が出土している。

ＳＫ－82（第101図）

韓式系土器（485）が出土している。口縁部近くの体部の破片で、全面に格子タタキメが施されている。

ＳＫ－83（第101図）

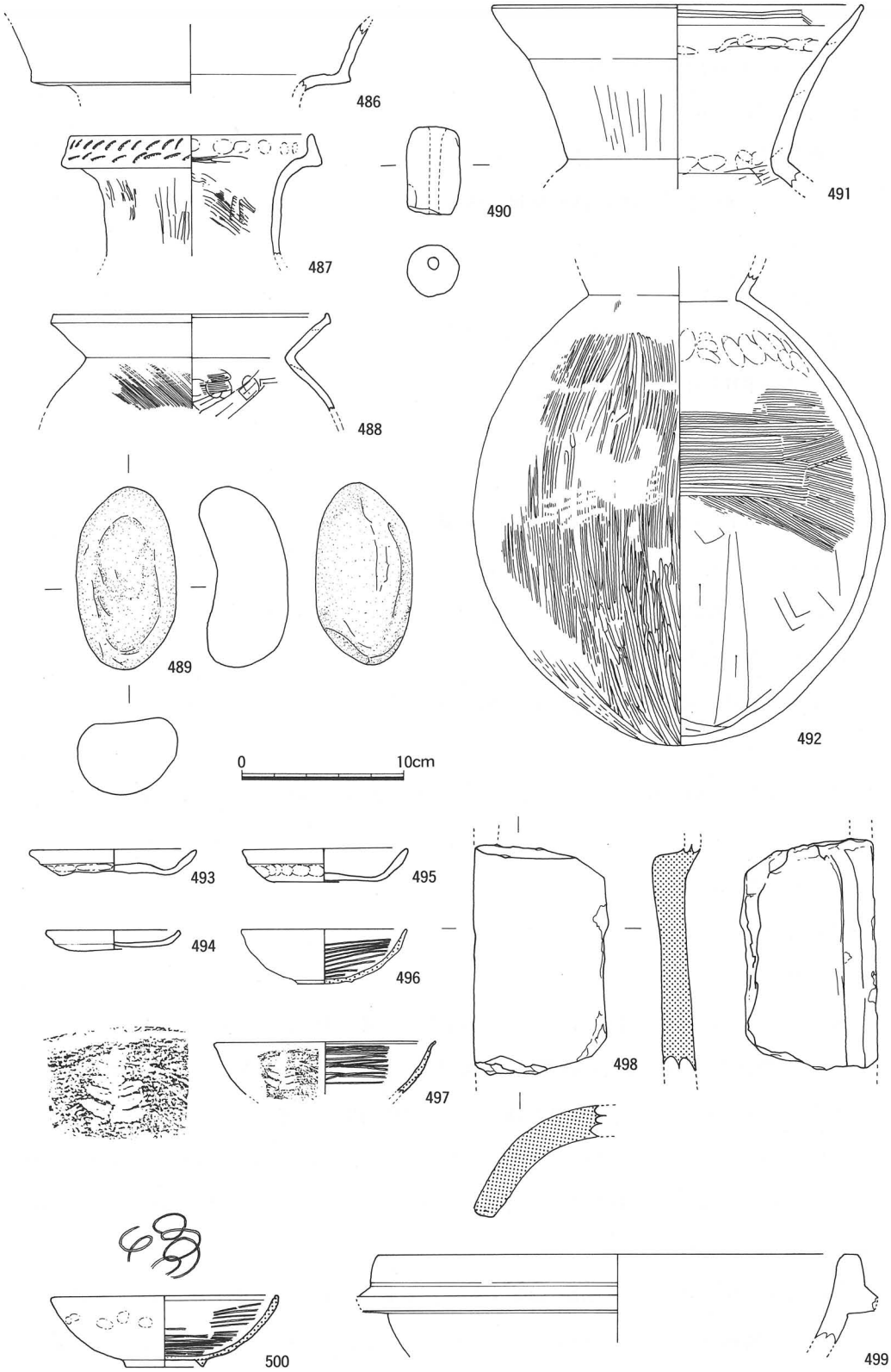
碧玉製臼玉（483）が出土している。

ＳＫ－84（第102図）

古墳時代前期に属する土師器を中心に出土している。486は壺口縁部で二重口縁を呈する。487は弥生時代中期の壺口縁部で、口縁部は受け口状に段を成し、端部外面には櫛描き烈点文が施されている。Ⅲ様式に属する。488は布留式の甕である。491は壺口縁部、492は壺の体部である。489は丸石で用途不明品。片側に凹面があり一部に熱を受けた形跡がある。490は土錘で、円柱形を呈し中心からやや外れた位置に径約７㎜の孔が貫通する。

ＳＤ－39（第102図）

土師器皿（493～495）、瓦器椀（496・497）、丸瓦（498）、滑石製石鍋（499）が出土している。瓦器椀はいずれも大和型で、496は外面のヘラミガキが省略され、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｃ～Ｄに属する。497は外面に葉文（シダか？）が付い



第102図　ＳＫ－84、ＳＤ－39・56出土遺物

ている。内面には粗い圏線ミガキが施されており、Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。498は磨耗が激しいため調整は不明である。

ＳＤ－56（第102図）

滑石製石鍋（499）、瓦器椀（500）が出土している。瓦器椀は楠葉型で、外面のヘラミガキが省略され、内面には粗い圏線ミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－１に属する。

ＳＲ－01（第103図）

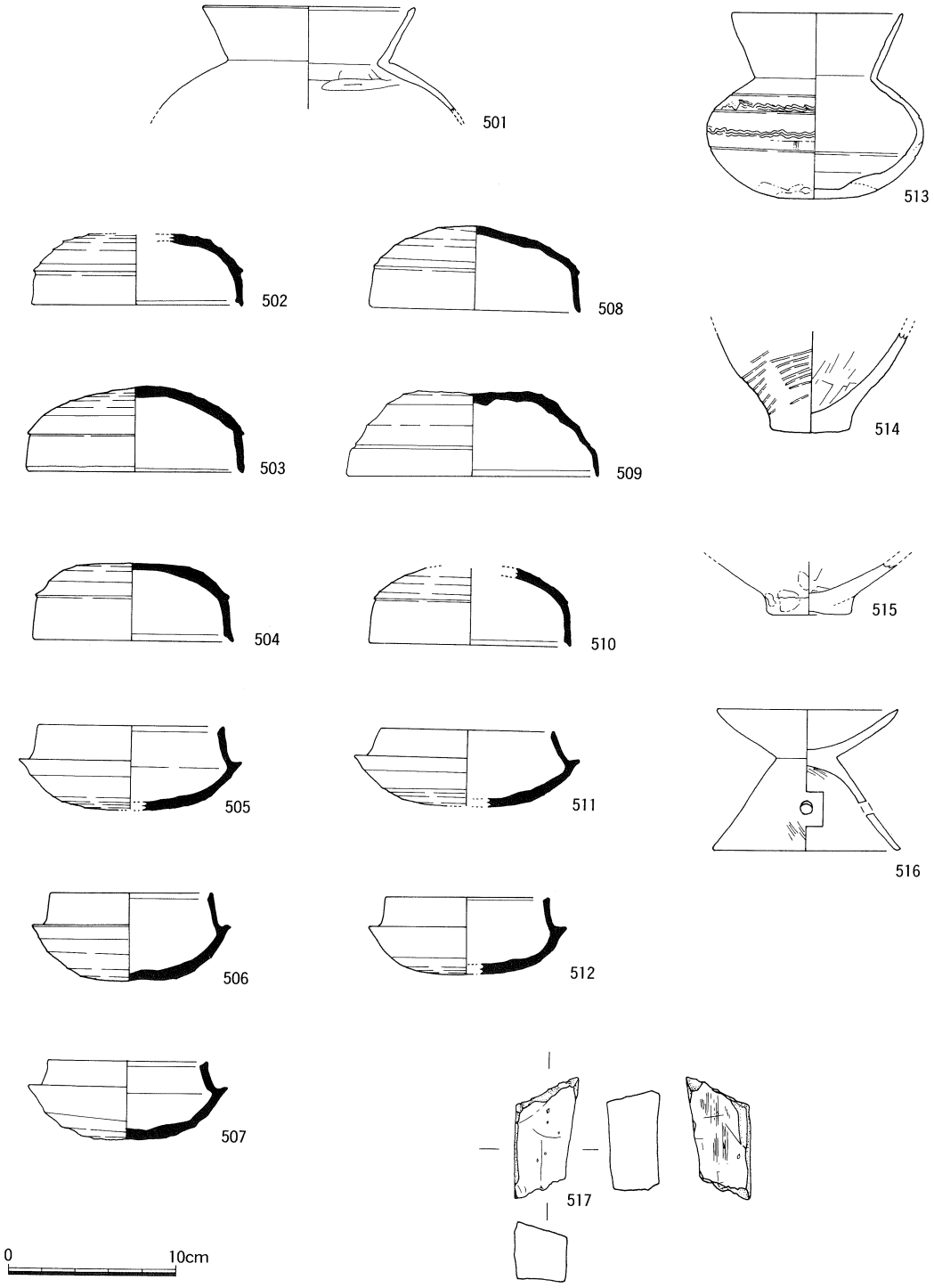
須恵器、土師器など、主に古墳時代の遺物が出土している。須恵器には杯蓋（502～504、508～510）、杯身（505・506・511・512）がある。杯蓋は稜が短く口縁端部には明確な段があり、器高は口径に対して比較的高く、天井部の約1/2に回転ヘラケズリが施されている。杯身は立ち上がりが比較的高く内傾気味で、端部は蓋と同様に内傾する明確な段を成す。Ⅰ－５～Ⅱ－１に属する。501は土師器の甕で、内面にヘラケズリによる調整が施され、口縁端部は内側に肥厚し折り曲げて終る。513は土師器壺で、扁平な体部に逆「ハ」の字状に開く口縁部が付き、底部は僅かに平坦な面を残す。体部には沈線と波状文が施されている。514・515は底部のみの出土で、515にはタタキメが残る。516は土師器器台で、脚部に円形の透かし孔がある。517は砥石で、砂岩製である。使用により両面に凹面を持つ。

ＳＲ－02（第104・105図）

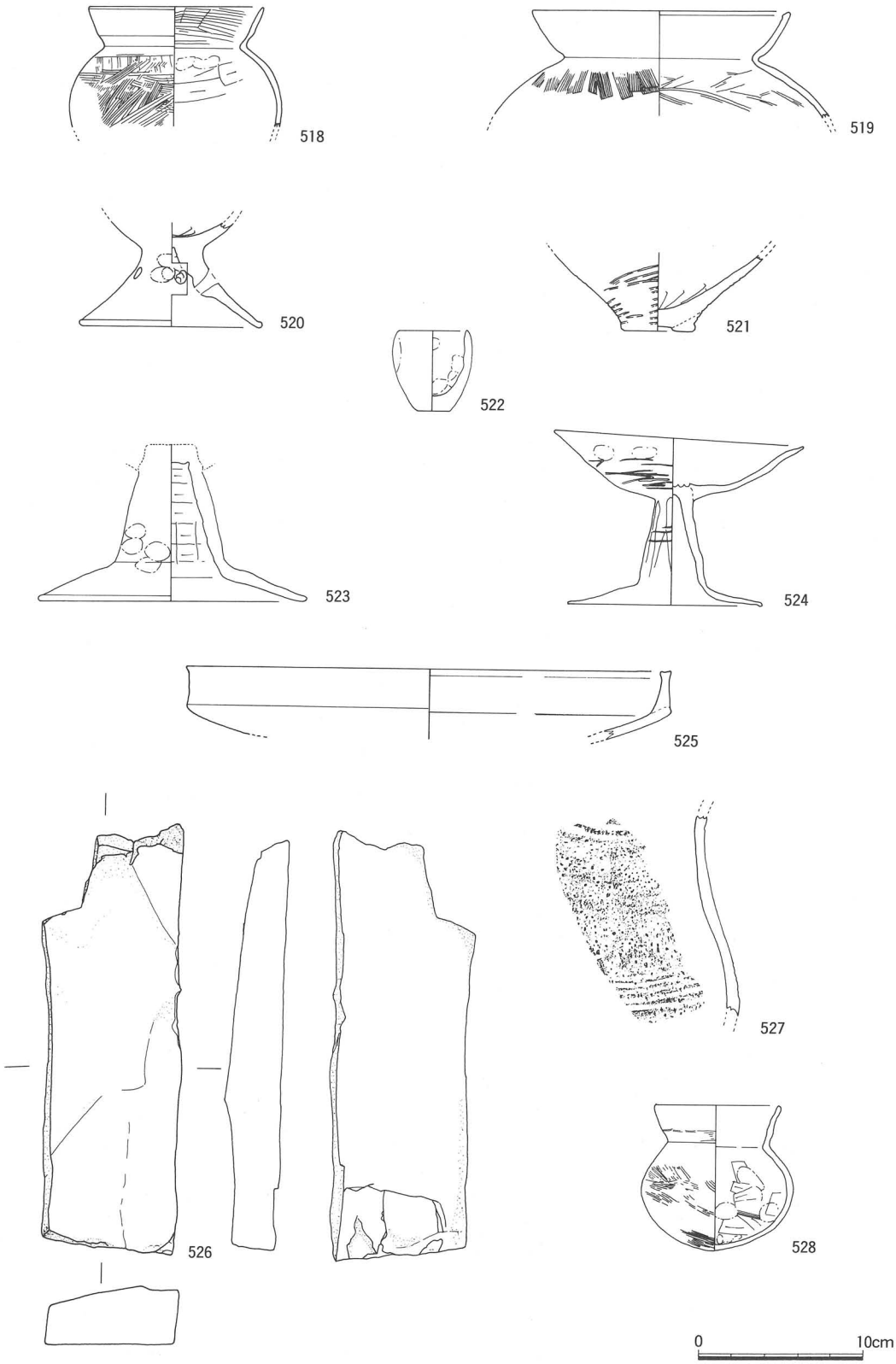
古墳時代前期の土師器の他、弥生土器、石製品が出土している。。518・519は甕で、球形の体部に短い口縁が付く。519は端部が内側に肥厚する。520は器台の脚部で、四方向から円形の透かし孔が施されている。522はミニチュアの甕。521は底部のみの出土でタタキメが残る。523～525は高杯、528は小型の甕、529も甕である。532は手焙り型土器で、天井部は欠損する。体部に貼り付けによる刻目突帯が付く。526は石英安山岩の板石で、表面に使用痕が認められるので砥石と考えられるが、古墳の石室石材に使用されていた可能性も考えられる。530は敲き石で、尖端部に使用痕が認められる。角礫岩製で非常に堅緻である。531は凹石で530とのセットでの使用が考えられる。円盤状で、両面の中央に凹面があるが、一方の窪みが深い。砂岩製で軟らかい。

ＳＲ－05（第105図）

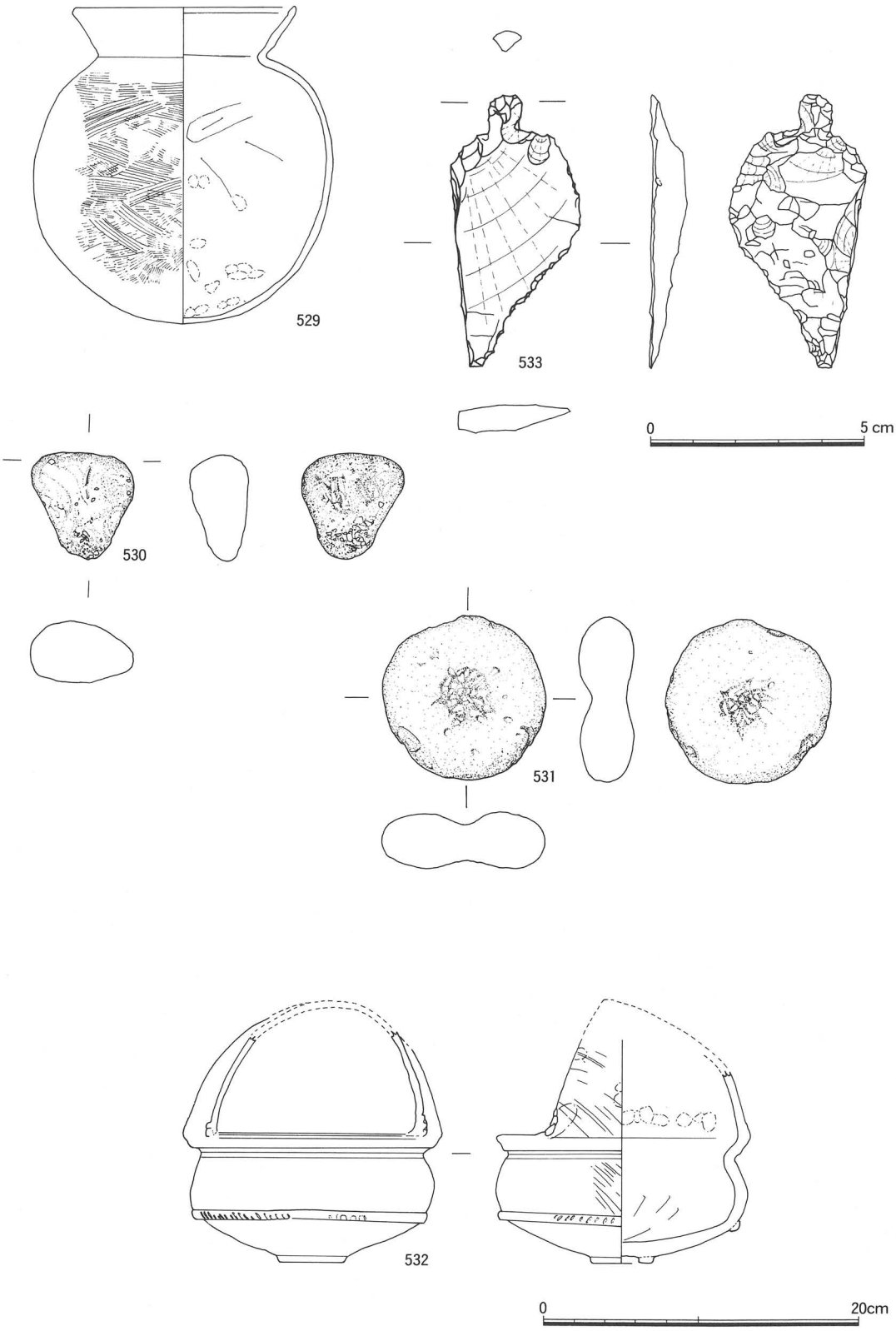
石匙（533）が出土している。



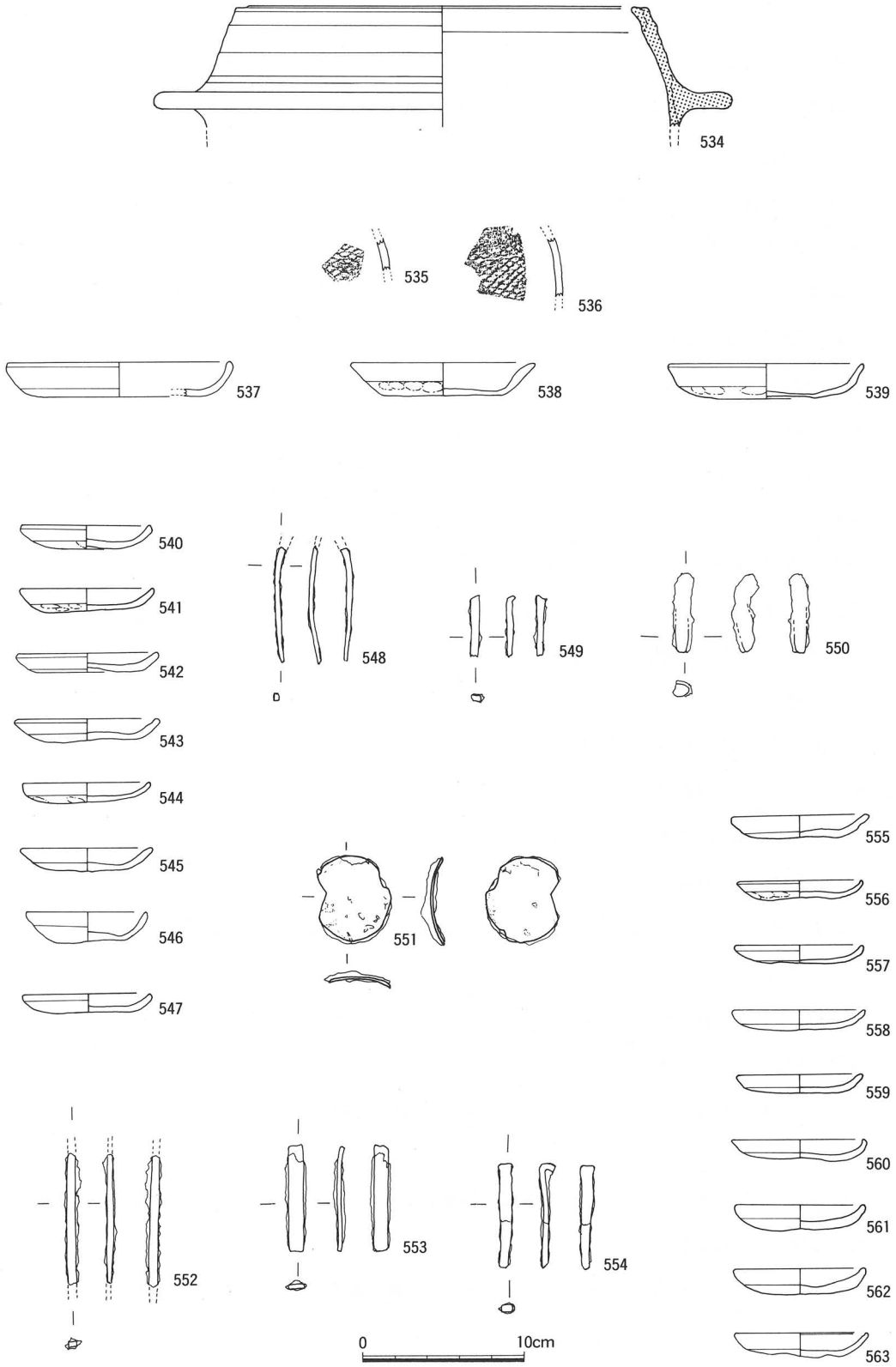
第103図　ＳＲ－01出土遺物



第104図　ＳＲ－02出土遺物



第105図　ＳＲ－02・05出土遺物



第106図　Ｌ区ＳＰ出土遺物（１）

ＳＰ－1608（第106図）

瓦器釜（534）が出土している。河内D_1型に属する。

ＳＰ－2047（第106図）

韓式系土器片（536）が出土している。

ＳＰ－2054（第106図）

韓式系土器片（535）が出土している。

ＳＰ－1604（第106図）

土師器皿（537・540）が出土している。

ＳＰ－1939（第106図）

土師器皿（538）が出土している。

ＳＰ－2105（第106図）

土師器皿（539）が出土している。

ＳＰ－1781（第106図）

土師器皿（541）が出土している。

ＳＰ－1820（第106図）

土師器皿（542・543）が出土している。

ＳＰ－1917（第106図）

土師器皿（544）が出土している。

ＳＰ－1939（第106図）

土師器皿（546・547）が出土している。546はやや深めの形態を呈する。

ＳＰ－1842（第106図）

鉄釘（548）が出土している。断面は角形で頭部は欠損している。

ＳＰ－1858（第106図）

鉄釘（549）が出土している。断面は角形で両端は欠損している。

ＳＰ－1920（第106図）

鉄製品（550）が出土している。断面は円形に近く両端は欠損している。用途不明品。

ＳＰ－2044（第106図）

鉄製品（551）が出土している。円形で厚さは薄く傘型を呈する。用途不明品。何かの飾り金具か。

ＳＰ－2038（第106図）

鉄釘（552）が出土している。断面は角形で両端は欠損している。

ＳＰ－2150（第106図）

鉄釘（553）が出土している。厚さは薄く、形状からしてノミのような工具の刃先のようである。

ＳＰ－2181（第106図）

鉄釘（554）が出土している。断面は角形で折り返しにより頭部を作り先端部は欠損している。

ＳＰ－2049（第106図）

土師器皿（555）が出土している。

ＳＰ－2105（第106図）

土師器皿（556・557）が出土している。

ＳＰ－2121（第106図）

土師器皿（558）が出土している。

ＳＰ－2122（第106図）

土師器皿（559）が出土している。

ＳＰ－2158（第106図）

土師器皿（560～562）が出土している。

ＳＰ－2265（第106図）

土師器皿（563）が出土している。

ＳＰ－1880（第107図）

土師器甕（564）が出土している。外面に指押さえの痕が顕著にのこる。

ＳＰ－1896（第107図）

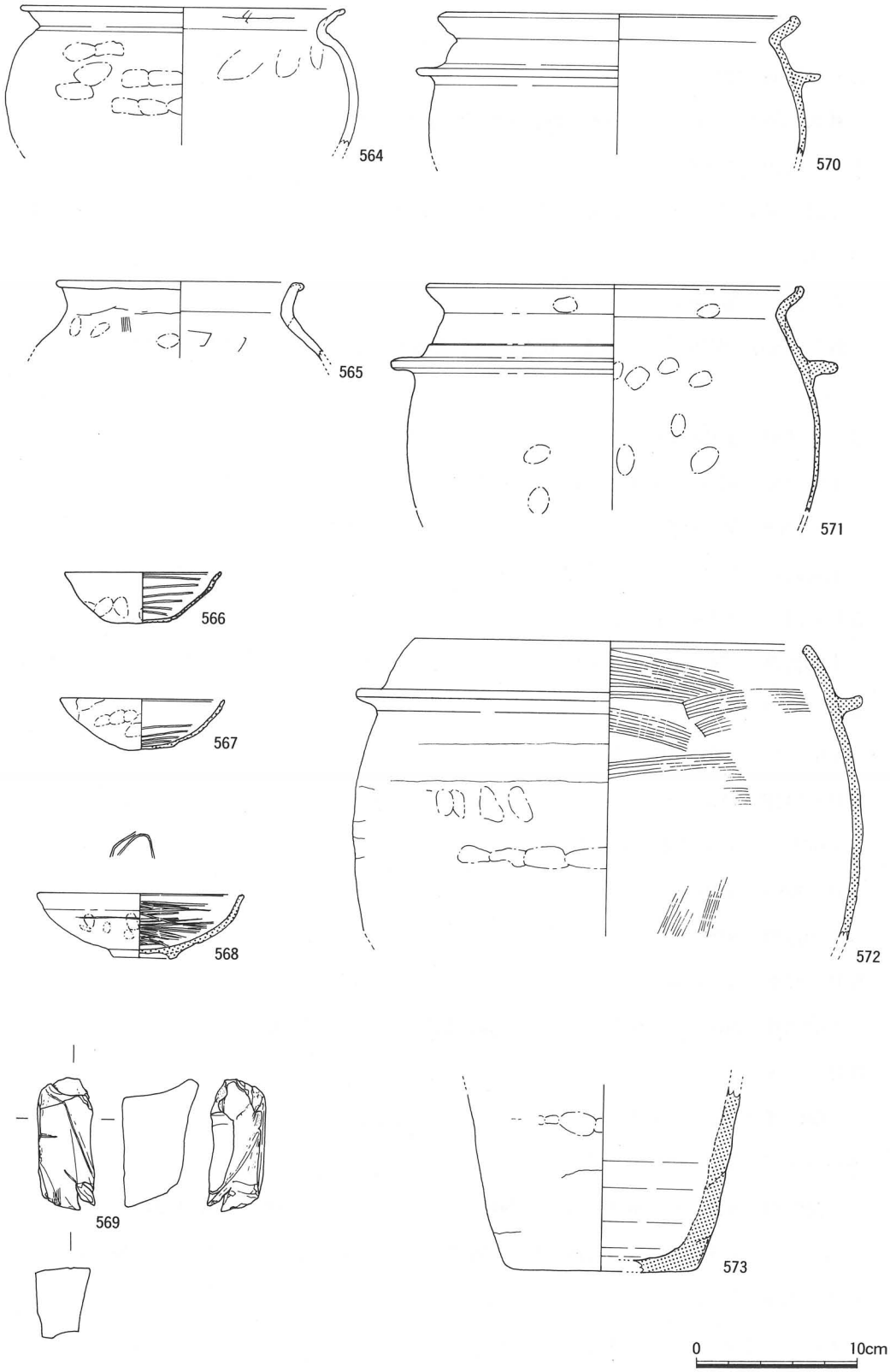
土師器甕（565）が出土している。

ＳＰ－1937（第107図）

土師器皿（545）と大和型瓦器椀（566）が出土している。566は法量は縮小し、外面にはヘラミガキが施されず、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｅに属する。

ＳＰ－2016（第107図）

大和型瓦器椀（567）が出土している。Ⅲ－Ｅに属する。



第107図　Ｌ区ＳＰ出土遺物（２）

ＳＰ－1845（第107図）

大和型瓦器椀（568）が出土している。外面にはヘラミガキがほとんど施されず、内面には粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は簡略化された連結輪状のようである。Ⅲ－Ａ（新）～Ｂに属する。

ＳＰ－1847（第107図）

砥石（569）の破片が出土している。

ＳＰ－1792（第107図）

瓦器釜（570）が出土している。短い鍔と屈曲する口縁部を持ち、端部は肥厚し内側に折り返している。大和Ｂ$_1$型に属する。

ＳＰ－1677（第107図）

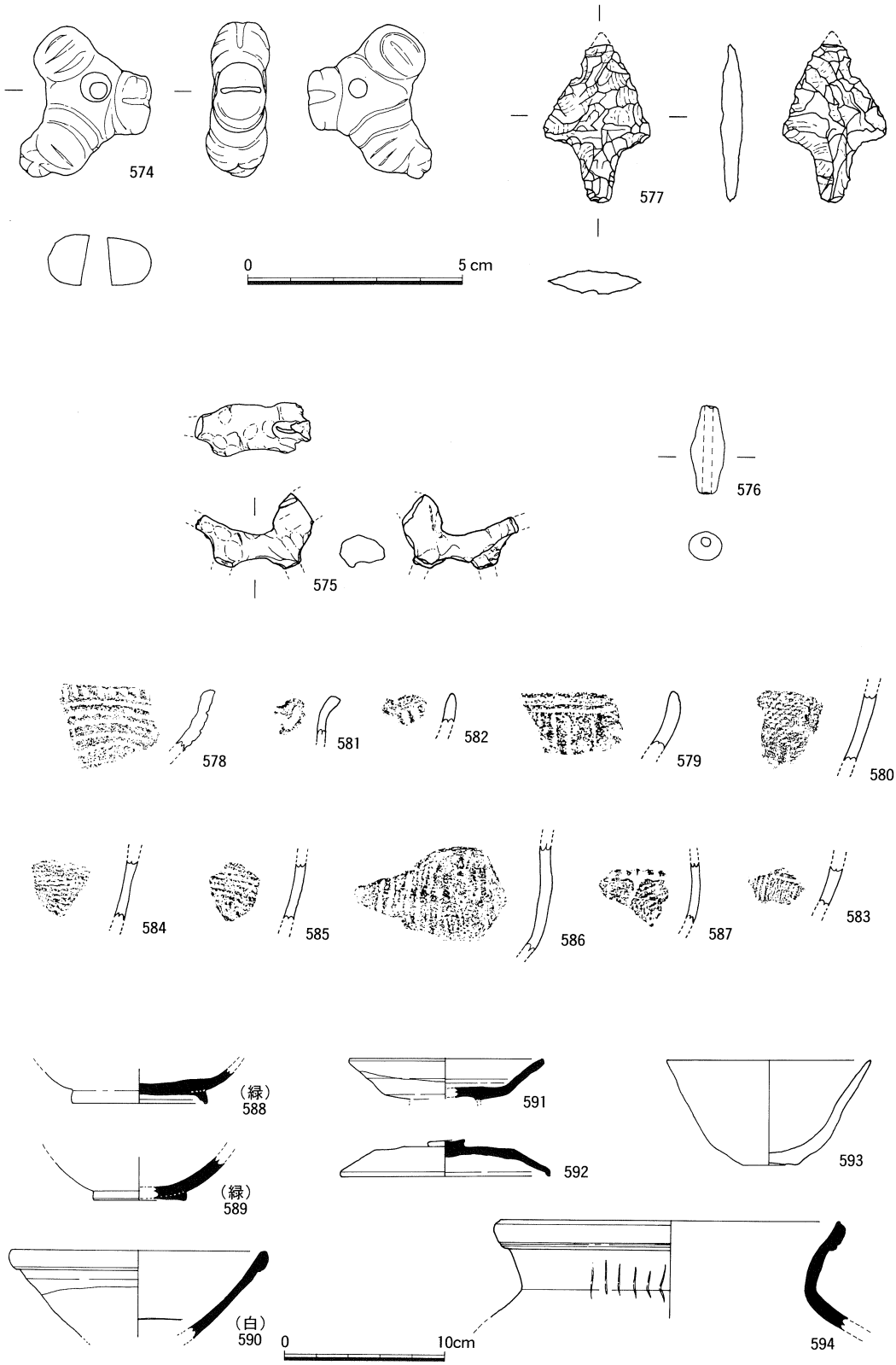
瓦器釜（571・572）が出土している。571は短い鍔と屈曲する口縁部を持ち、端部は肥厚し内側に折り返している。大和Ｂ$_1$型に属する。572はやや上向きに短い鍔が付き、口縁部は内傾して端部は内側に面を持つ。摂津Ｅ型に属する。

ＳＰ－2098（第107図）

瓦器製の壺底部（573）が出土している。

包含層出土遺物（第108図）

574はヒスイ製勾玉である。青緑がかった乳白色を呈し、線刻により装飾が施されている。575は土馬で、頭部、脚部、尾部は欠損している。576は土錘。577は有茎式石鏃で、やや大型である。578～587は縄文土器である。588・589は緑釉陶器椀である。588は貼り付けの有段輪高台で、589は削り出しの平高台である。590は白磁碗で、玉縁口縁を呈し、碗Ⅳ類に属する。591・592・594は須恵器で、591は皿で、底部に高台が付いていたものと推定される。592は杯蓋で、Ⅳ－２に属する。594は甕の口縁部である。593は土師器鉢である。

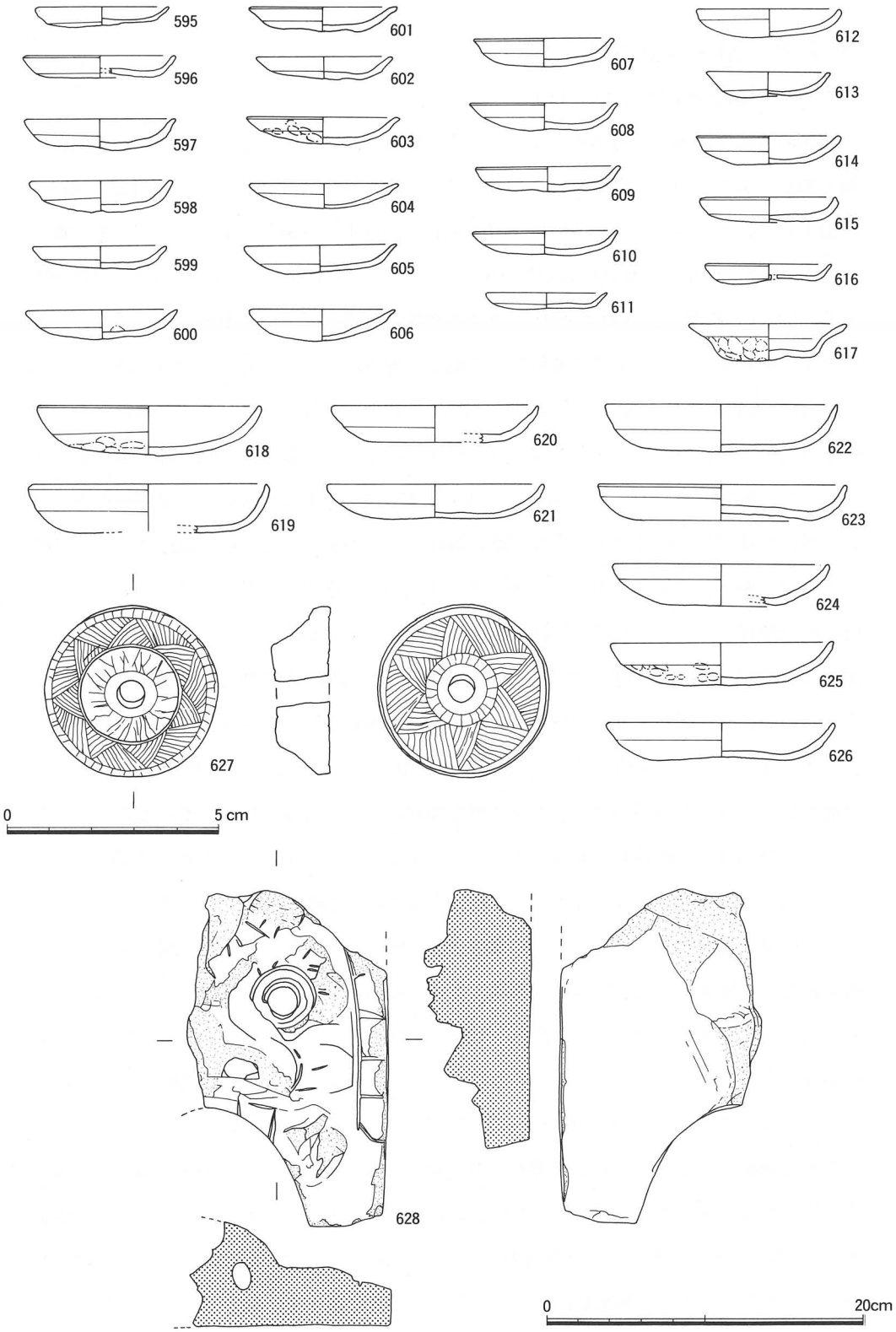


第108図　L区包含層出土遺物

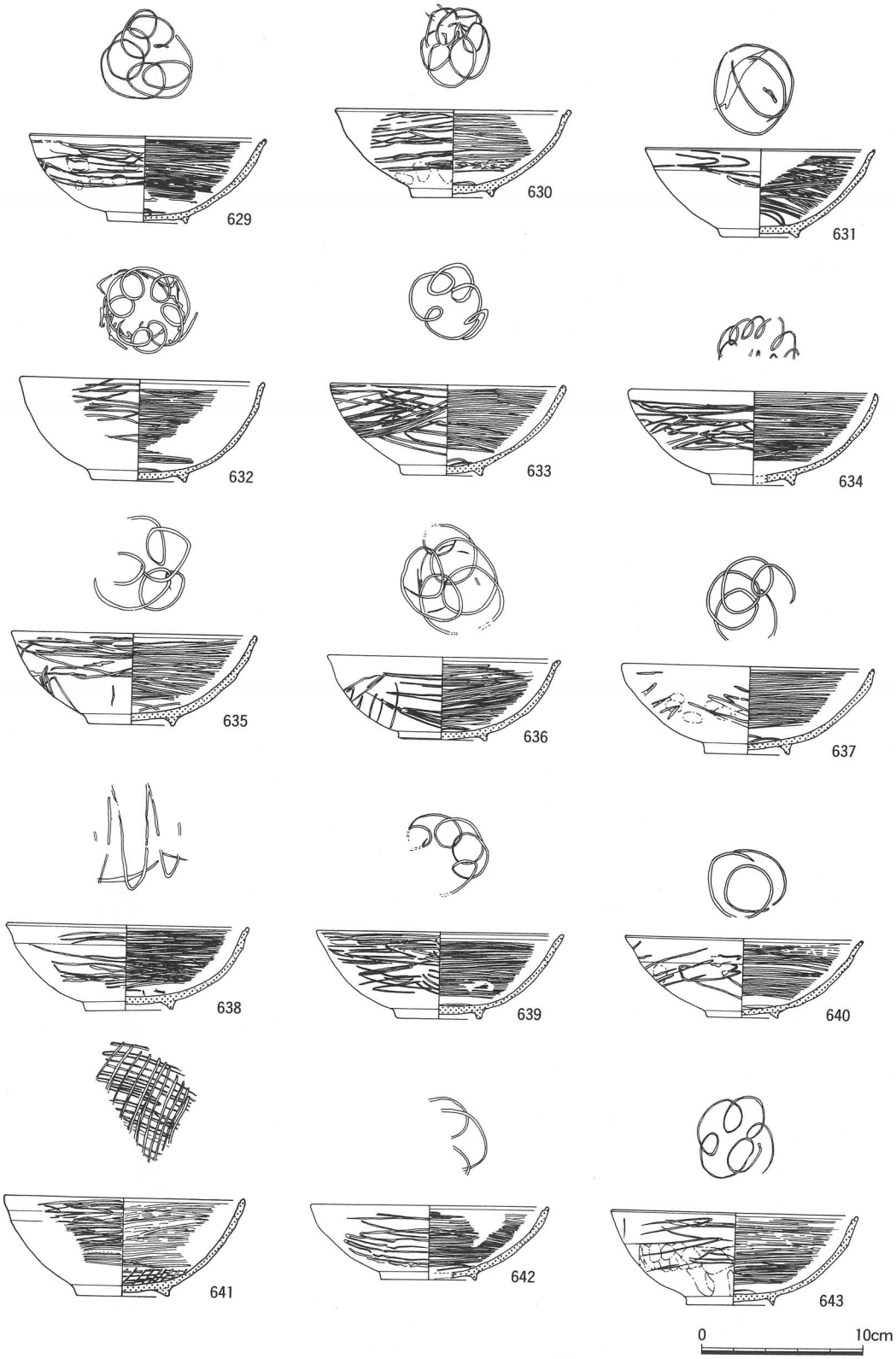
第４節　Ｍ・Ｎ区の出土遺物

ＳＴ－01（第109・110・111・112図）

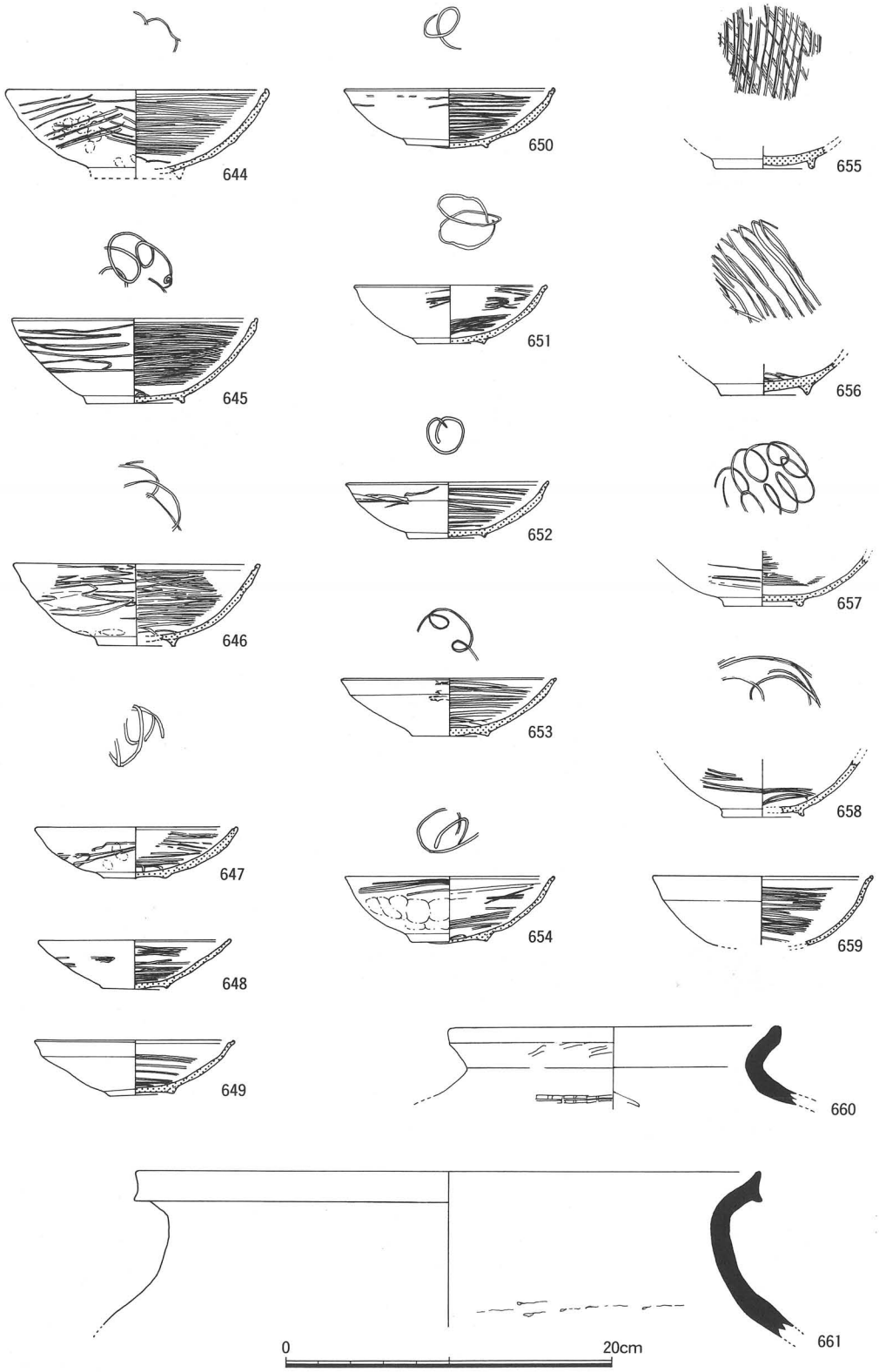
池状の遺構で、種々の遺物が出土している。595～617は土師器皿、618～626が土師器中皿である。またこの他に高台が付くもの（674～677）、口縁を内側に折り返すもの（678）が出土している。677は瓦質である。627は滑石製紡錘車で、細い線刻により花文を表現している。628は鬼瓦で、形式的には13世紀中頃のものと考えられる。629～659は瓦器椀である。629は大和型で、外面は全体の約1/2の範囲に分割ヘラミガキが施され、内面の圏線ミガキは割合密で、見込みには連結輪状の暗文が施されている。II－Ａ～Ｂに属する。630も同様で大和型のII－Ａ～Ｂに属する。631は大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略されているが、内面には密な圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は二重の輪を大きく描く程度である。II－Ｂ～III－Ａ（古）に属する。632は大和型で、深い椀形態を呈し、外面には分割ヘラミガキ、内面は密な圏線ミガキが施されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。II－Ａに属する。633は楠葉型で、外面は分割ヘラミガキ、内面は密な圏線ミガキで、見込みには太めの連結輪状の暗文が施されている。II－１～２に属する。634も同様で、楠葉型のII－１～２に属する。635は大和型で、外面は分割ヘラミガキ、内面に密な圏線ミガキが施され、見込みには連結輪状の暗文が施されている。II－Ｂ～III－Ａ（古）に属する。636も同様で、大和型のII－Ｂ～III－Ａ（古）に属する。637は楠葉型で、外面の分割ヘラミガキは省略化傾向にあり、内面は割合い密に圏線ミガキが施され、見込みは連結輪状の暗文が施されている。II－２に属する。638は大和型で、外面の分割ヘラミガキは底部付近まで施され、内面は密な圏線ミガキで、見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。II－Ａに属する。639は楠葉型で、外面の分割ヘラミガキは底部付近まで施され、内面には密な圏線ミガキと見込みには連結輪状の暗文が施されている。II－１に属する。640は大和型で、外面の分割ヘラミガキは省略化されており、内面の圏線ミガキもやや粗いものとなっており、見込みの暗文は簡略化された輪状になっている。III－Ａ（古）に属する。641は大和型で、外面には密な分割ヘラミガキが施され、内面も密な圏線ミガキで見込みには斜格子状の暗文が施されている。Ｉ－Ｃに属する。642は大和型でIII－Ａ（古）、643も大和型で、II－Ｂ～III－Ａ（古）属する。644～646は楠葉型で、644は外面の分割ヘラミガキが底部付近まで施され、II－２に属し、645・646は外面の分割ヘラミガキが省略化傾向にあり、II－２～３に属する。647～654は大和型で、外面の分割ヘラミガキがほとんど省略化され、内面の圏線ミガキも隙間が空く程度に粗くなっ



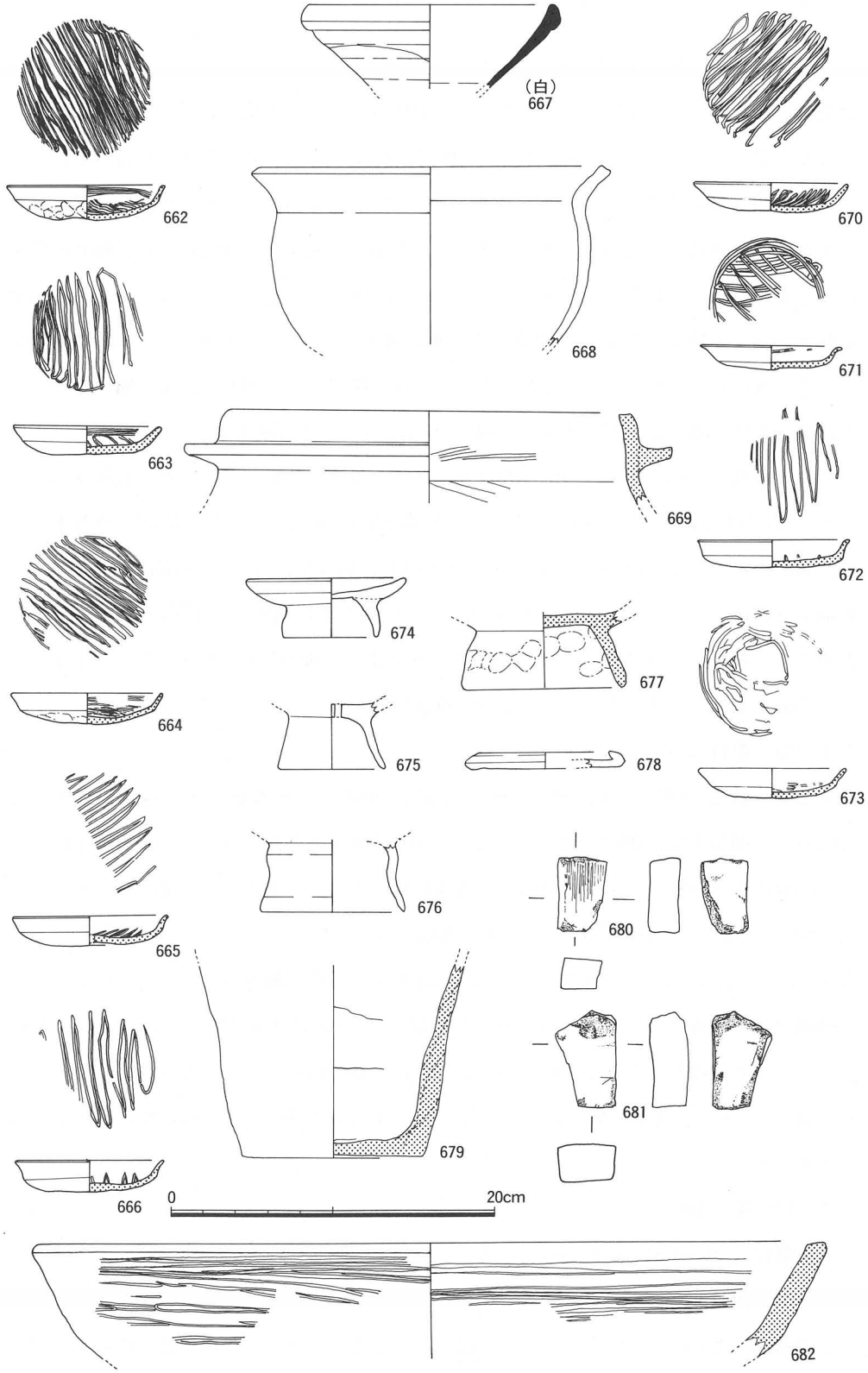
第109図　ＳＴ－01出土遺物（１）



第110図　ＳＴ－01出土遺物（２）



第111図　ＳＴ－01出土遺物（３）



第112図　ＳＴ－01出土遺物（４）

ている。見込みの暗文も簡略化れた輪状のもが施されている。Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。655は底部の破片で、しっかりした高台が付き、見込みの暗文は斜格子状である。大和型か。Ⅰ－Ｄ～Ⅱ－Ａに属する。656も底部の破片で、断面三角形のしっかりした高台が付き、見込みの暗文はジグザグ状である。楠葉型か。Ⅱ－２に属する。657は外面の分割ヘラミガキが底部付近にまで施され、内面の圏線ミガキも密である。見込みには連結輪状の暗文が施されている。大和型でⅡ－Ｂに属する。658は外面に分割ヘラミガキ、見込みには連結輪状の暗文が認められる。大和型でⅡ－Ｂに属する。659は大和型で、口縁部は強いナデにより外反している。外面の分割ヘラミガキは省略化され、内面にはやや粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｂに属する。660・661は須恵器甕口縁部である。660はには平行タタキメが残る。662～666、670～673は瓦器皿で、見込みの暗文はジグザグ状が主流であるが、671のようにジグザグの方向を変えて斜格子状に施したものや、673のような不定方向のものがある。667は白磁碗で、玉縁口縁を成し、碗Ⅳ類に属する。668は土師器鍋で、外面全体に煤が付着している。669は瓦器釜で、山城Ｆ型に属する。679は瓦質で底部のみの出土で、器種は不明である。680・681は砥石である。682は瓦器火鉢である。外面にヨコ方向のミガキ、内面は割合密なミガキが施されている。

ＳＴ－02（第113図）

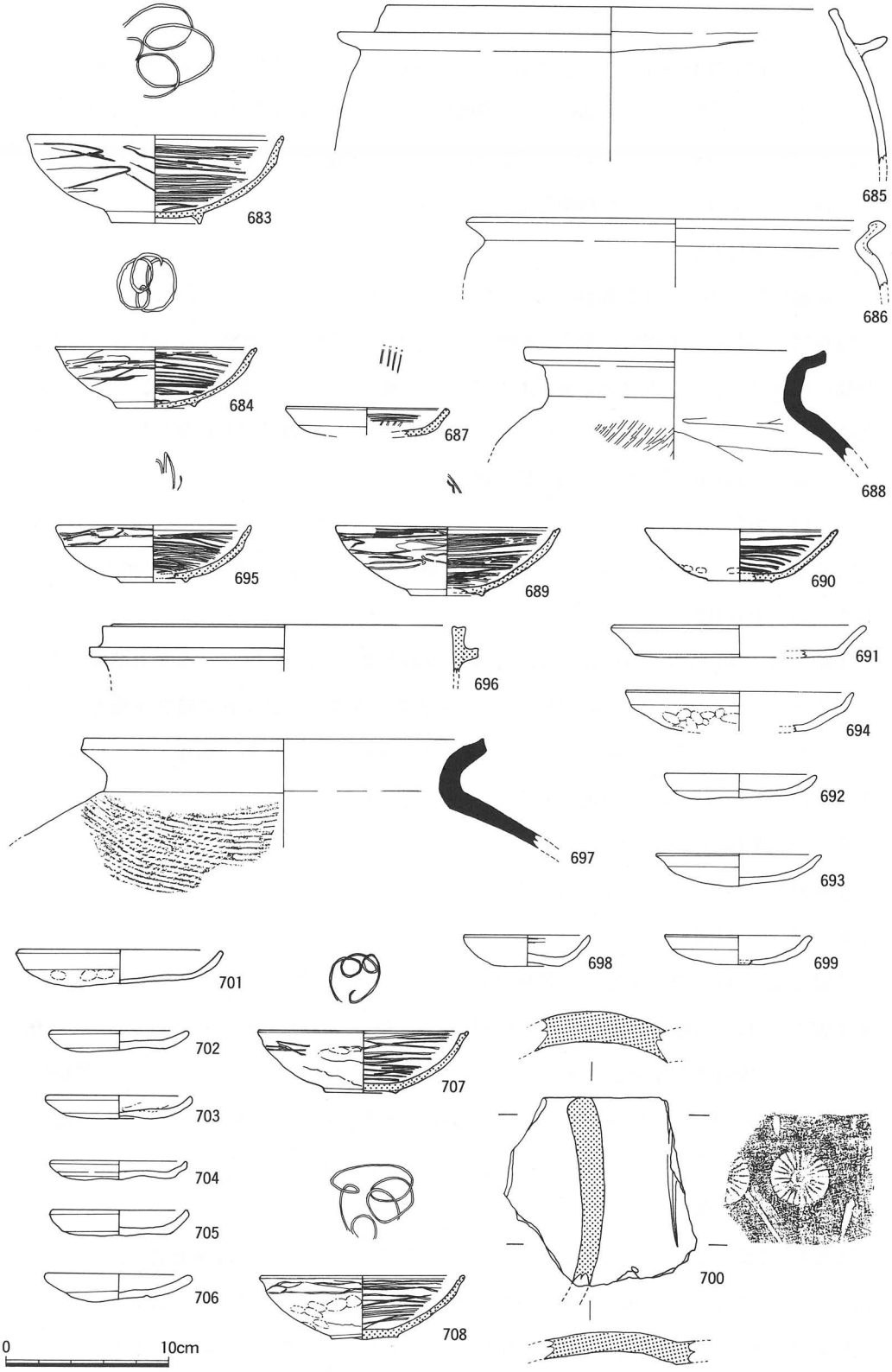
大和型瓦器椀（683・684・689・690）、瓦器皿（687）、土師器釜（685・686）、須恵器甕（688）、土師器中皿（691）が出土している。683は外面の分割ヘラミガキが省略されており、内面は密な圏線ミガキで、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｂに属する。684は法量が縮小化し、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｃに属する。689は粗い分割ヘラミガキが体部全体の約1/2を超える程度に施されており、内面はやや密な圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。690は法量の縮小化が見られ、外面のヘラミガキはほとんど省略されており、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｄに属する。685は摂津Ｅ型である。686は鍔が欠損しているが、大和B_1型に属していると考えられる。

ＳＴ－03（第113図）

土師器皿（692・693）が出土している。

ＳＴ－04（第113図）

土師器皿（694・698・699）、瓦器椀（695）、土師器釜（696）、須恵器甕（697）、瓦器火鉢（700）などが出土している。695は大和型で、外面のヘラミガキは口縁部付近に施され



第113図　ＳＴ－02・03・04・05出土遺物

る程度で、内面は圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。696は直立する口縁に短い鍔が付く。摂津Ｃ$_1$型に属する。697は器壁は厚く外面に格子タタキが施されている。700は奈良火鉢の破片で、平面形は六弁ないし、八弁の輪花形をを呈するものと推定される。外面に花文のスタンプを押捺している。

ＳＴ－05（第113図）

土師器中皿（701）、土師器皿（702～706）、瓦器椀（707・708）などが出土している。瓦器椀はいづれも大和型で、707は外面のヘラミガキがほとんど省略されており、内面には粗い圏線ミガキと、見込みに連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｃに属する。708は外面のヘラミガキが口縁部に限られており、内面には粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状である。Ⅲ－Ｃに属する。

ＳＥ－01（第114図）

瓦器釜（709）が出土している。直立する口縁に短い鍔が付く。摂津Ｅ型に属する。

ＳＥ－02（第114図）

土師器皿（710・711）、瓦器皿（712）、東播系須恵器片口鉢（713）、大和型瓦器椀（714）などが出土している。712は見込みにジグザグの方向を変えた格子状の暗文が施されている。714は外面のヘラミガキがほとんど省略されており、内面も粗い圏線ミガキが施される程度である。Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。

ＳＥ－03（第114図）

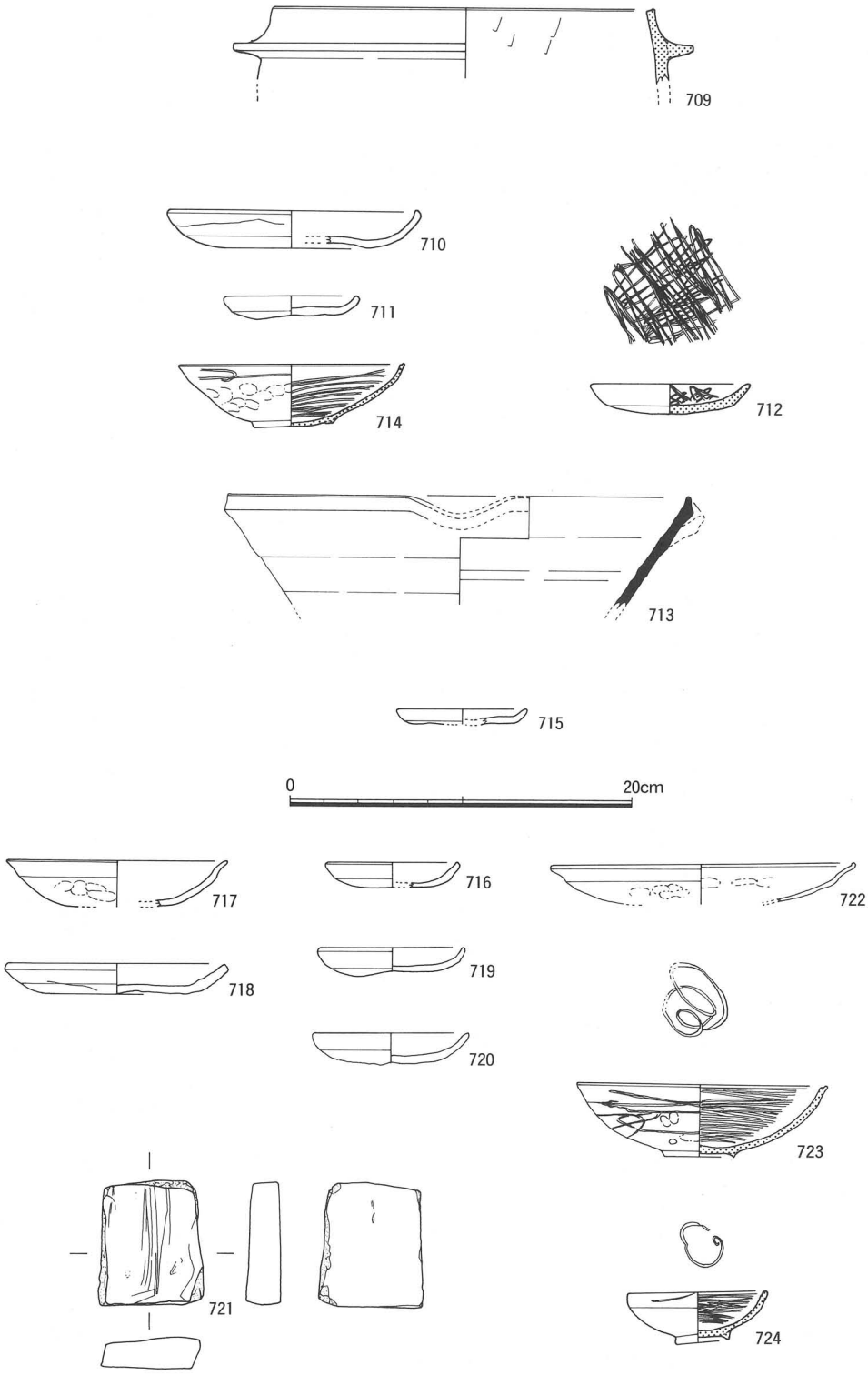
土師器皿（715・716）が出土している。

ＳＥ－04（第114図）

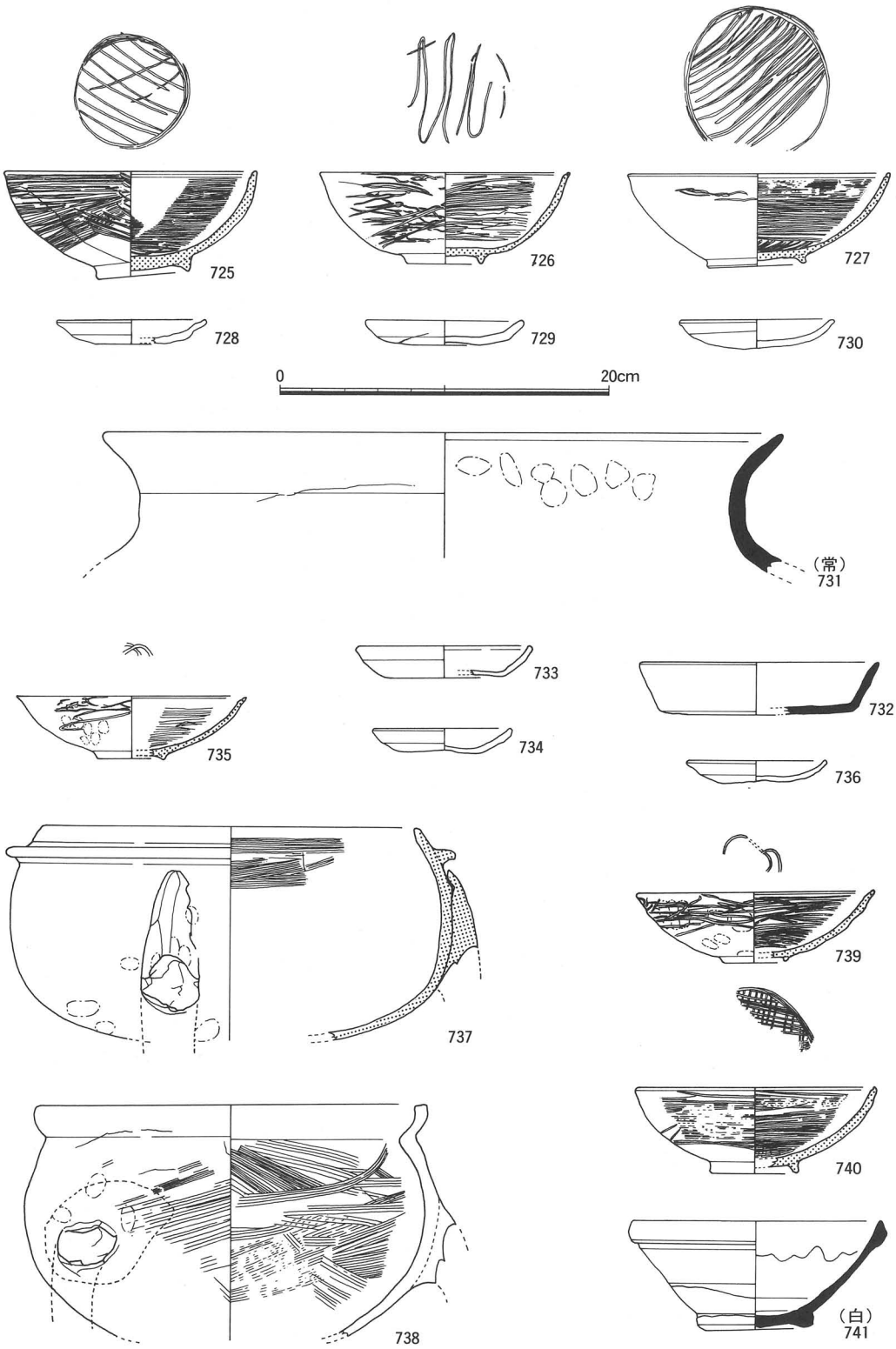
土師器皿（717～720、722）、瓦器椀（723・724）、砥石（721）などが出土している。土師器皿では717が口縁部が強いナデにより外反して終る。722はいわゆる「て」の字形口縁を呈する。723は大和型で、外面のヘラミガキに省略化が見られ、内面は割と密な圏線ミガキが施されており、見込みの暗文は連結輪状である。Ⅲ－Ａ（新）に属する。724は小型の瓦器椀で燻しが足らないせいか全体に灰白色を呈する。

ＳＥ－08（第115図）

瓦器椀（725～727）、土師器皿（728～730）が出土している。725は楠葉型で、外面の分割ヘラミガキは密で、内面には密な圏線ミガキが施されており、見込みの暗文はジグザグ状である。Ｉ－３に属する。726は大和型で、外面のヘラミガキは底部付近まで施され、内面は密な圏線ミガキと、見込みには間隔の大きなジグザグ状の暗文が施されている。Ｉ



第114図　ＳＥ－01・02・03・04出土遺物



第115図　ＳＥ－08・09・10出土遺物

－Dに属する。727は楠葉型で、外面にはヘラミガキがほとんど施されないが、内面には密な圏線ミガキと、見込みにジグザグ状の暗文が施されている。II－1～2に属する。728・730は口縁部が外反気味に終る。

ＳＥ－09（第115図）

常滑甕（731）、須恵器杯身（732）、土師器皿（733・734）、瓦器椀（735）などが出土している。732は無高台の杯身で、混入品である。735は大和型で、III－A（新）に属する。

ＳＥ－10（第115図）

土師器皿（736）、瓦器足釜（737）、土師器足付き鍋[8]（738）、瓦器椀（739・740）、白磁碗（741）などが出土している。737は体部内面にハケメ調整、全体に煤が付着する。738は口縁部が受け口状で内外面ともハケメによる調整が施されている。739は大和型で、外面には体部上位の約1/2に分割ヘラミガキが施され、内面には圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状文であろう。III－A（古）に属する。740は楠葉型で、外面は底部付近まで密な分割ヘラミガキ、内面には密な圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は格子状である。II－1に属する。741は玉縁口縁で、幅広の削り出し高台を持つ。碗IV－2類に属する。

ＳＥ－11（第116図）

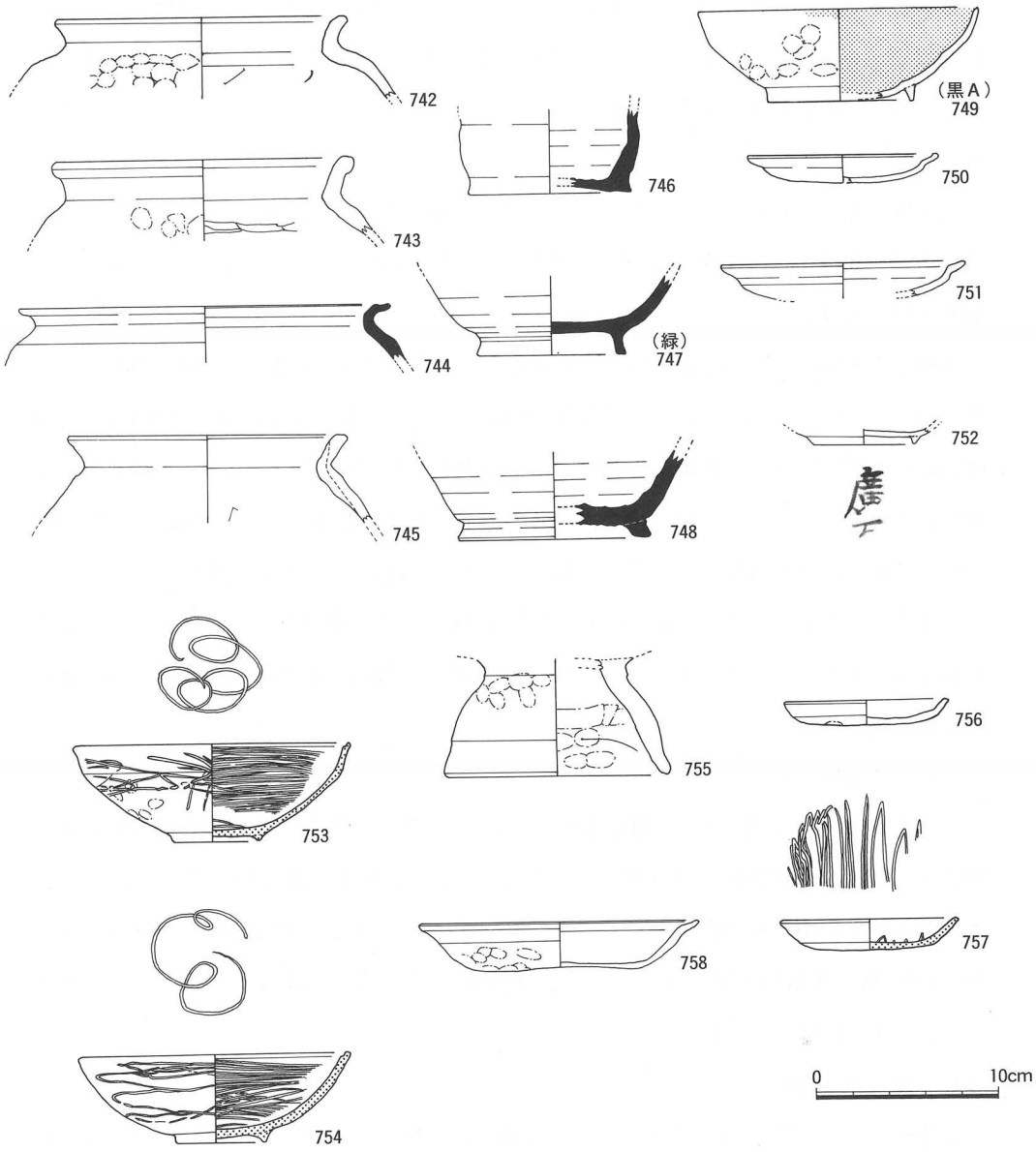
土師器甕（742・743・745）、須恵器甕（744）、須恵器瓶（746）、須恵器壺（748）、緑釉陶器椀（747）、土師器皿（750・751）、土師器杯（752）、黒色土器A類（749）など主に10世紀末～11世紀頃のものが出土している。須恵器746・748はV－2に属し、748は長頸壺か。749は畿内系III類に属する。752には底部外面に「廣正？」の墨書がある。750・751は「て」の字状口縁を呈する。

ＳＥ－12（第116図）

瓦器椀（753・754）、土師器高台付き皿（755）、土師器皿（756）、瓦器皿（757）などが出土している。753は大和型で、外面のヘラミガキは省略化されつつも、内面の圏線ミガキは割と密に施されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。III－Bに属する。754も同様でIII－A（新）に属する。757は見込みにジグザグ状の暗文を施している。

ＳＥ－13（第116図）

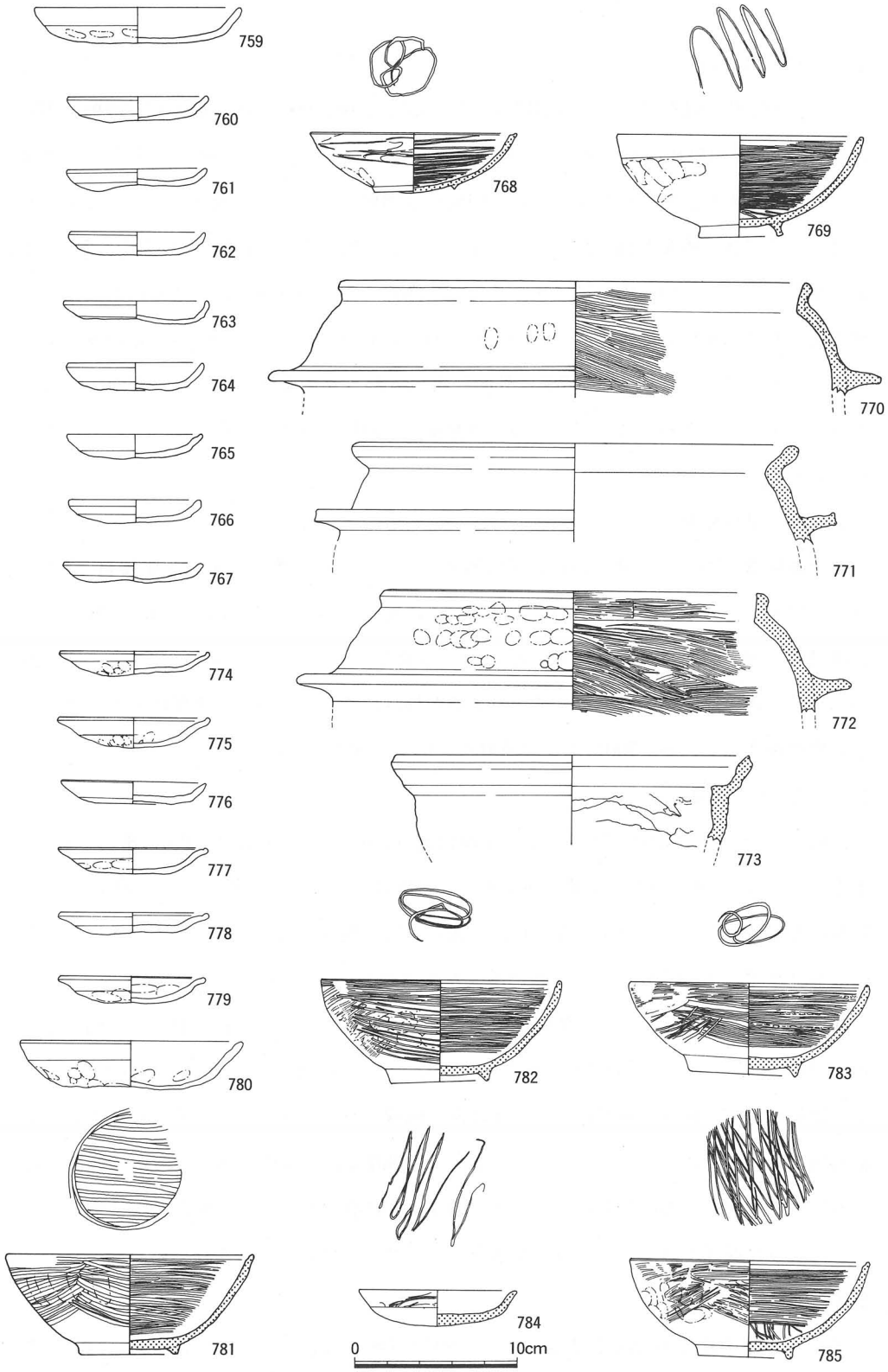
土師器皿（758）が出土している。体部下半には指押さえの痕が顕著に残り、上半は2段ナデにより、端部は外反している。煤の付着が認められる。



第116図　ＳＥ－11・12・13出土遺物

ＳＥ－16（第117図）

土師器皿（759～767）、瓦器椀（768）、瓦器釜（770～772）、瓦器鍋（773）などが出土している。768は大和型で、外面にはヘラミガキが僅かに施され、内面の圏線ミガキはやや粗い。見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。770・772は口縁部を直立気味に外反させるもので、河内Ｂ$_1$型に属するものと考えられる。771は屈曲する口縁部で、端部を肥厚させており、大和Ｂ$_1$型に属する。



第117図　ＳＥ－16・17出土遺物

ＳＥ－17（第117図）

「て」の字状口縁を呈する土師器皿（774～779）、土師器杯（780）、楠葉型瓦器椀（769、781～783）、大和型瓦器椀（785）、瓦器皿（784）が出土している。769は楠葉型で、外面にはヘラミガキが認められなかったが、内面には圏線ミガキが密に施されている。見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。Ｉ－２～３に属する。781は体部外面の約2/3程度まで密なヘラミガキが、内面には底部まで密な圏線ミガキが施され、見込みの暗文はジグザグ状である。Ｉ－２に属する。782・783も同様であるが、見込みの暗文は連続長楕円状である。Ｉ－２～３に属する。785は外面に密な分割ヘラミガキが施され、内面には密な圏線ミガキと、見込みにはジグザグの方向を変えた斜格子状の暗文が施されている。Ｉ－Ｃに属する。

ＳＥ－18（第118図）

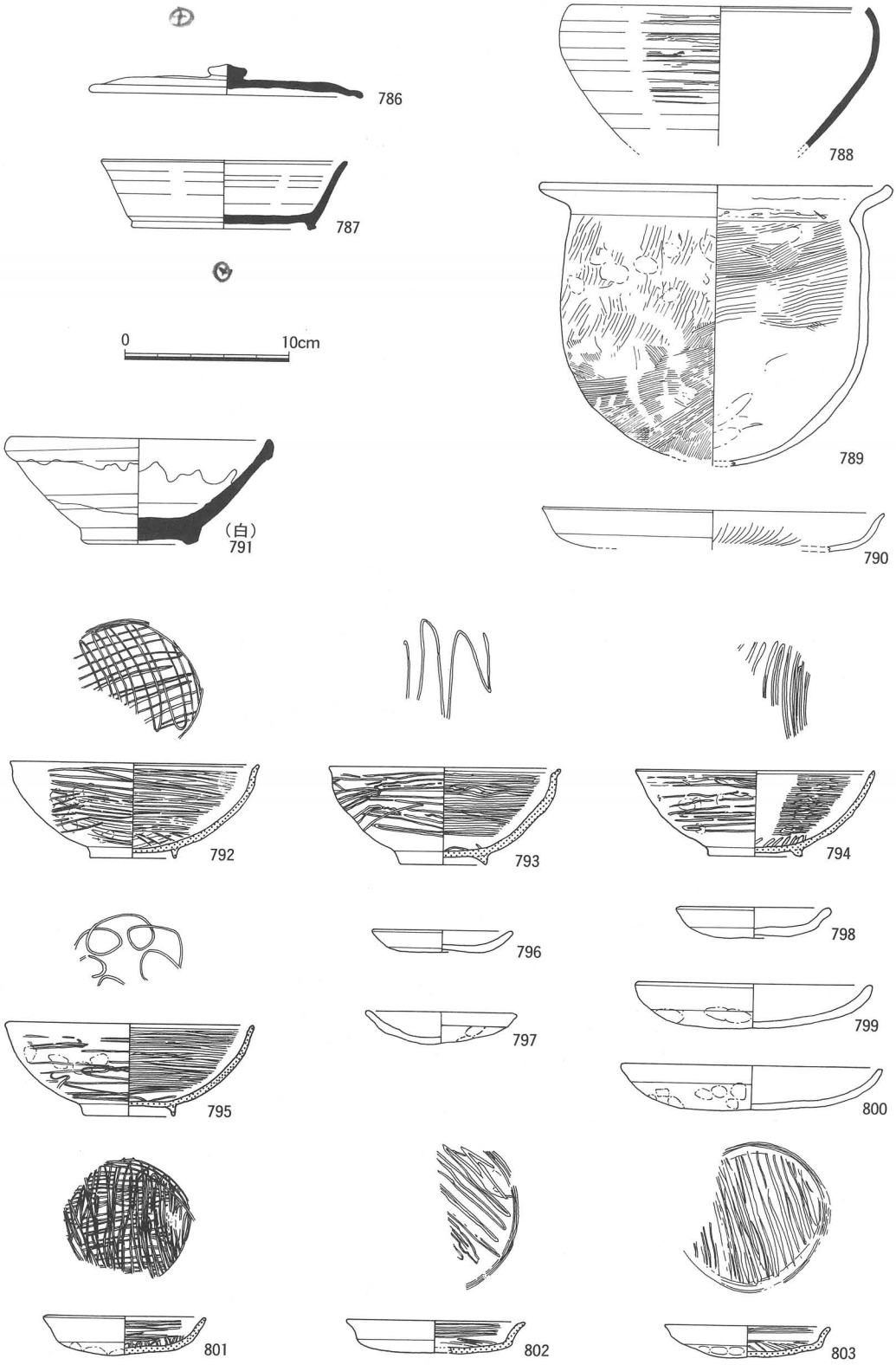
須恵器杯蓋（786）、杯身（787）、須恵器鉢（788）、土師器甕（789）、土師器盤（790）などが出土している。須恵器786・787はⅣ－４に属しており、786の外面と787の底部外面に墨書で「⊗」の記号が書かれている。788は鉄鉢形をしている。789は体部の上半部は粗いハケメ、過半部は細かいハケメによる調整が施されており、内面上半部にもハケメによる調整が施されている。790は内面に放射状の暗文が施されている。

ＳＥ－20（第118図）

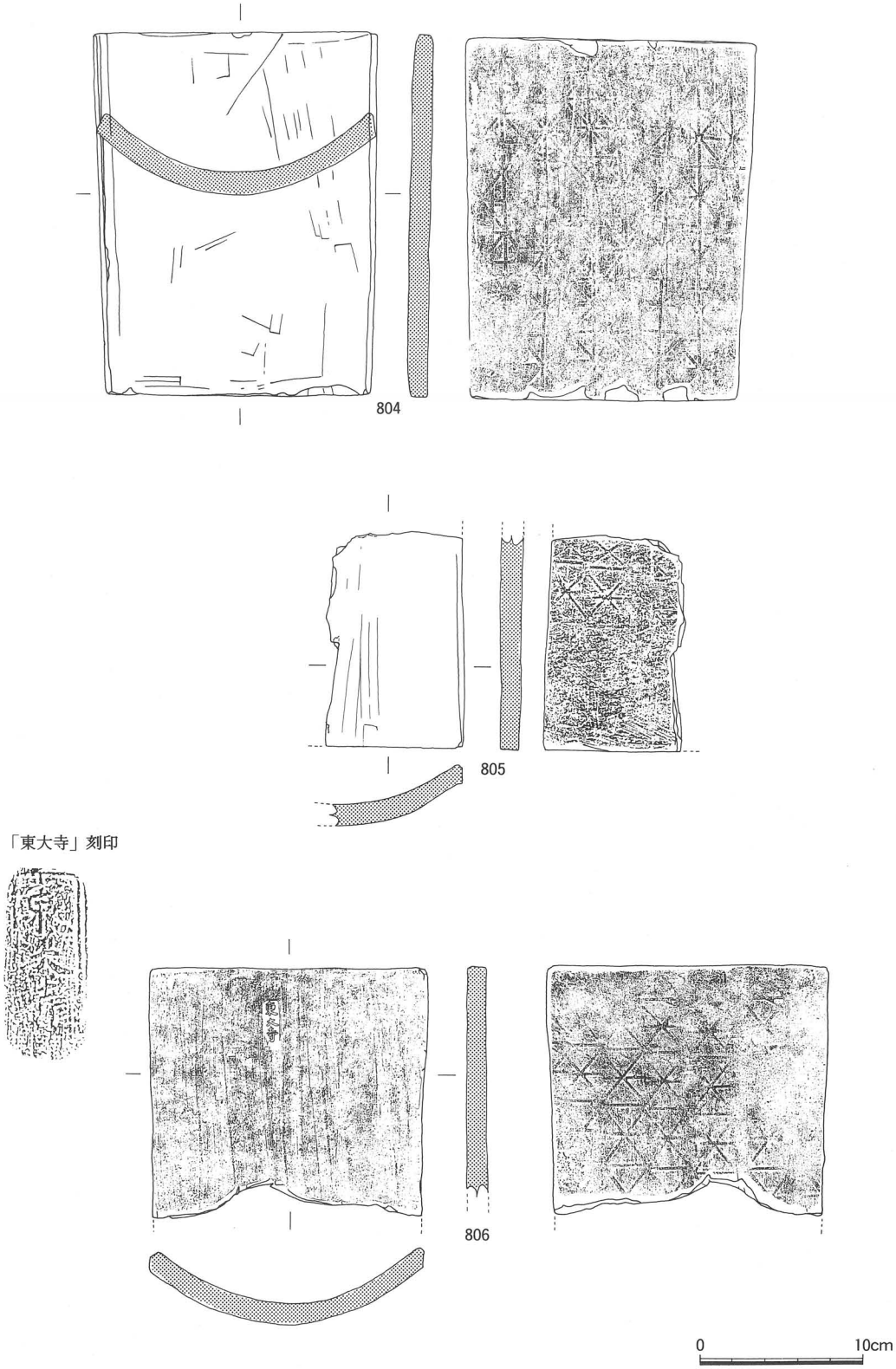
白磁碗（791）、瓦器椀（792～795）、土師器皿（796～800）、瓦器皿（801～803）などが出土している。791は碗Ⅳ－１類に属する。瓦器椀はいずれも大和型である。792は外面の底部付近まで分割ヘラミガキが施され、内面にも密な圏線ミガキが施されている。見込みにはジグザグの方向を変えた格子状の暗文が施されている。Ｉ－Ｃ～Ｄに属する。793も同様であるが、見込みの暗文は隙間の広いジグザグ状である。Ｉ－Ｄ～Ⅱ－Ａに属する。794も見込みにジグザグ状の暗文が施されており、Ｉ－Ｄに属する。795は外面のヘラミガキは底部付近まで施されるが粗く、内面は密な圏線ミガキが施されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅱ－Ａに属する。801は口縁端部が外側上方向に伸び、見込みにはジグザグの方向を変えた格子状の暗文が密に施されている。802・803は強いヨコナデにより口縁部が外反しており、見込みにジグザグ状の暗文が施されている。

ＳＫ－06（第119・120図）

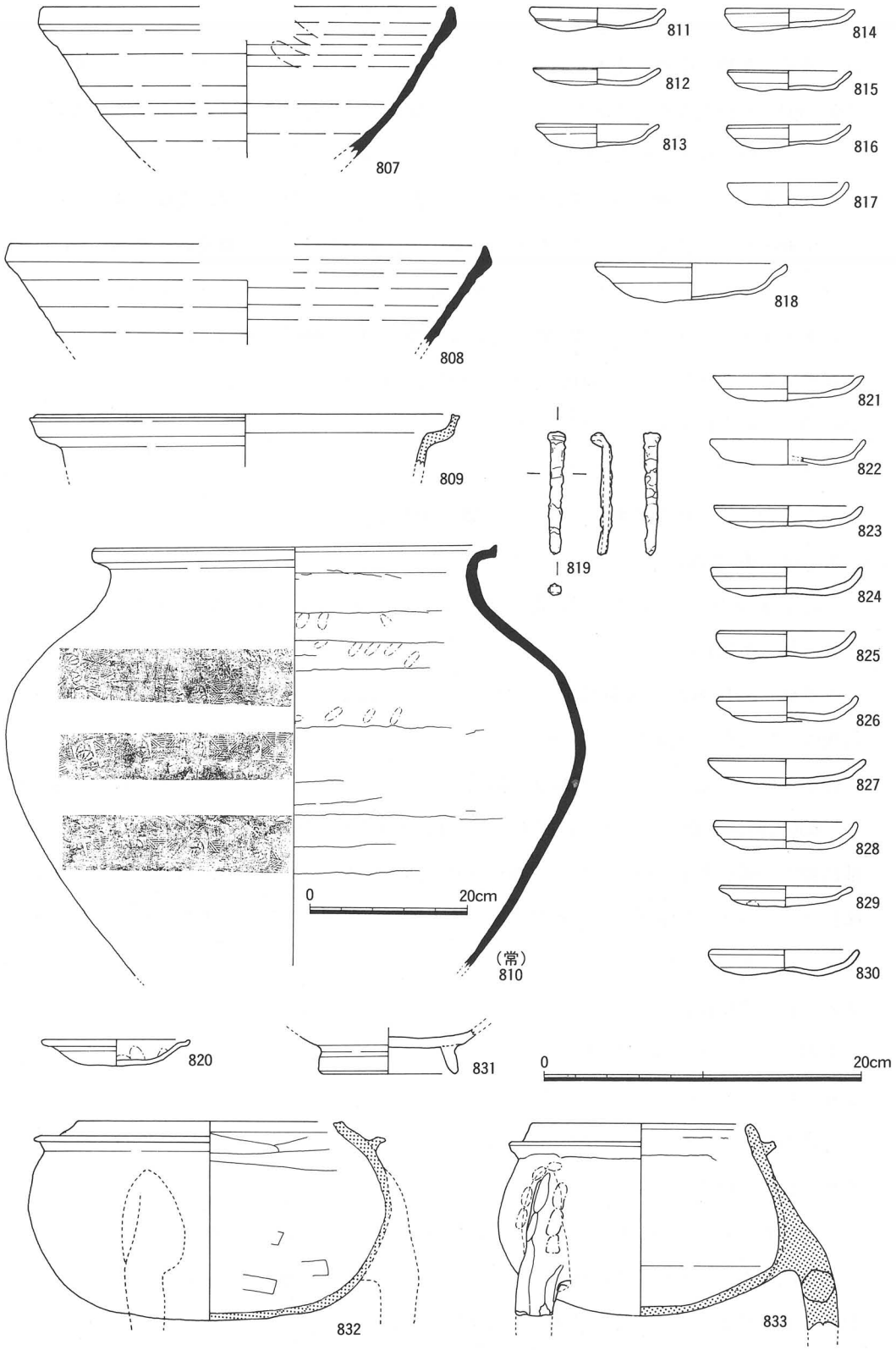
平瓦（804～806）、東播系須恵器片口鉢（807・808）、瓦器鍋（809）、常滑甕（810）、鉄釘（819）、土師器皿（811～818）などが出土している。804は完形で、凸面は菱形文に縦



第118図　ＳＥ－18・20出土遺物



第119図　ＳＫ－06出土遺物



第120図　ＳＫ－06・07・08出土遺物

線と横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残る。805は804と同様の菱形文であるが、縦線がなく横線だけを配するタタキメである。凹面には板ナデの痕が残る。806は805と同様のタタキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残り、「東大寺」の刻印が上部に施されてあった。この瓦はタタキメの文様の特徴から、岡山県瀬戸町の万富東大寺瓦窯で焼かれたもので、平安時代末から鎌倉時代初めにかけて行なわれた、重源による東大寺再建のために焼かれた瓦である。[9] 804・805も刻印はないもののタタキメの文様から、同窯の産と考えられる。807・808は口縁端部が上方に向かって伸びている。13世紀前半頃の時期を示す。810は井筒に転用されていたので底部は欠くが、形態的には13世紀前半頃の時期を示す。

ＳＫ－07（第120図）

「て」の字状口縁を呈する土師器皿（820）が出土している。

ＳＫ－08（第120図）

土師器皿（821～830）、土師器椀高台（831）、瓦器足釜（832・833）などが出土している。

ＳＫ－10（第121図）

瓦器椀（834～836）、土師器皿（837～840）、土師器釜（841）などが出土している。瓦器椀はいずれも大和型で、834・835は外面に省略化された分割ヘラミガキが施され、内面に圏線ミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ａ（古）～（新）に属する。836も同様でⅢ－Ａ（新）に属する。839は口縁部を内側に折り曲げている。841は頸部に幅広の鍔が水平に伸び、短い口縁が外側に開き気味に立ち上がる。体部は肩が張り気味に下部へ続き、体部器壁は口縁部に比べると薄い。体部の器形は長胴形と推定され、10世紀頃の大和型B_1型と考えられる。

ＳＫ－11（第121図）

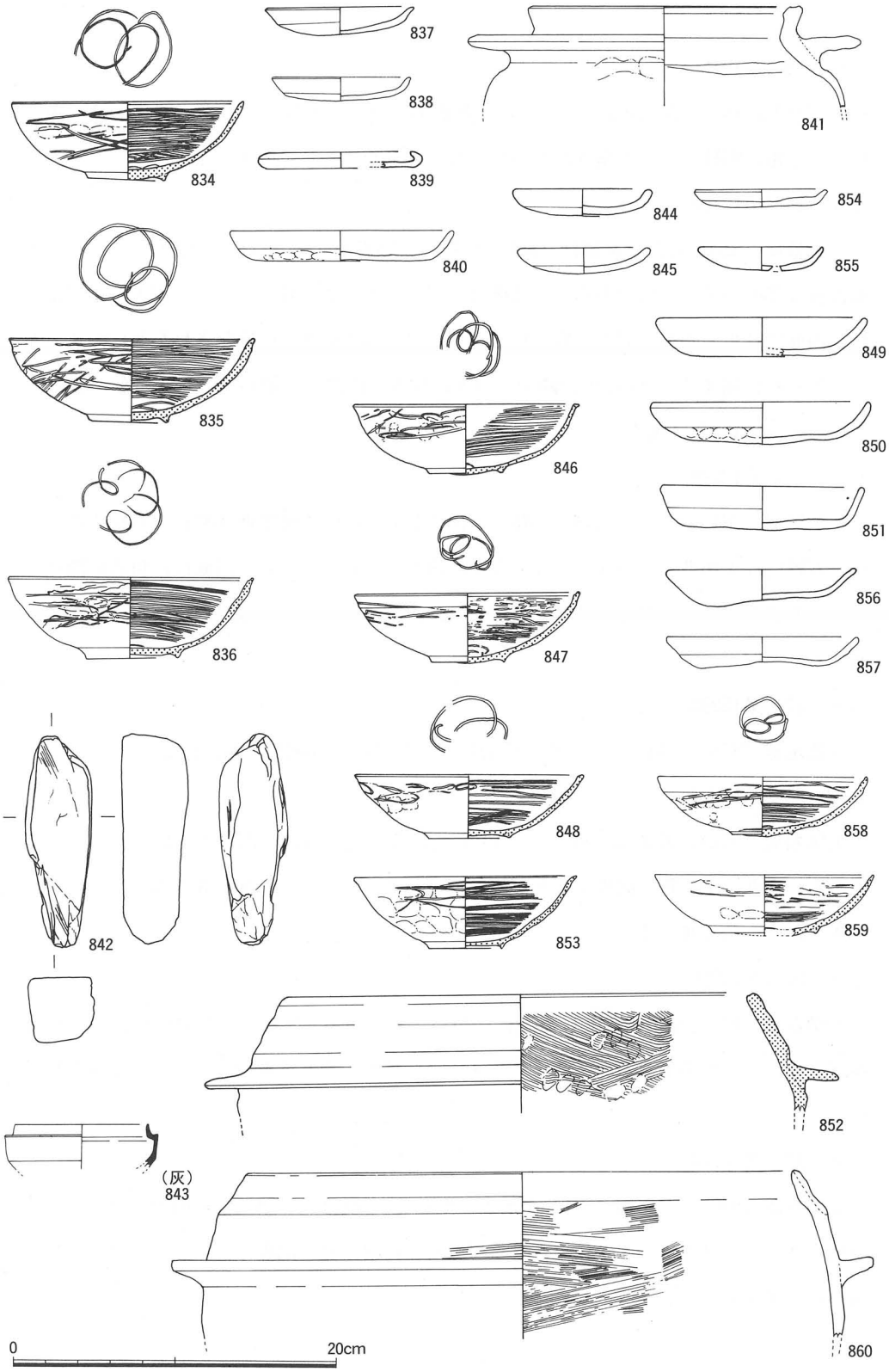
砥石（842）が出土している。

ＳＫ－12（第121図）

灰釉陶器合子（843）の破片が出土している。

ＳＫ－14（第121図）

土師器皿（844・845、849～851）、瓦器椀（846～848）、瓦器釜（852）が出土している。瓦器椀はいずれも大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面にはやや粗い圏線ミガキが施されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ａ（新）～Ｂに属する。852は内面に細かいハケメが施されている。河内D_1型に属する。



第121図　ＳＫ－10・11・12・14・15・16出土遺物

ＳＫ－15（第121図）

大和型瓦器椀（853）が出土している。外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面にはやや粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ａ（新）～Ｂに属する。

ＳＫ－16（第121図）

土師器皿（854～857）、瓦器椀（858・859）、土師器釜（860）などが出土している。土師器皿は856・857が中皿である。瓦器椀はいずれも大和型で外面のヘラミガキは省略化され、内面には粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文も簡略化された連結輪状である。Ⅲ－Ｃに属する。860は短い鍔が上向きに付き、内側には細かいハケメ調整が施されている。河内D_1型に属する。

ＳＫ－21（第122図）

土師器皿（861～874）、瓦器椀（875）が出土している。土師器皿は871～874が中皿である。瓦器椀は大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面には粗めの圏線ミガキが施されている。見込みには簡略化された連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｂに属する。

ＳＫ－22（第122図）

瓦器足釜（878）が出土している。内面にはハケメによる調整が施されている。

ＳＫ－25（第122図）

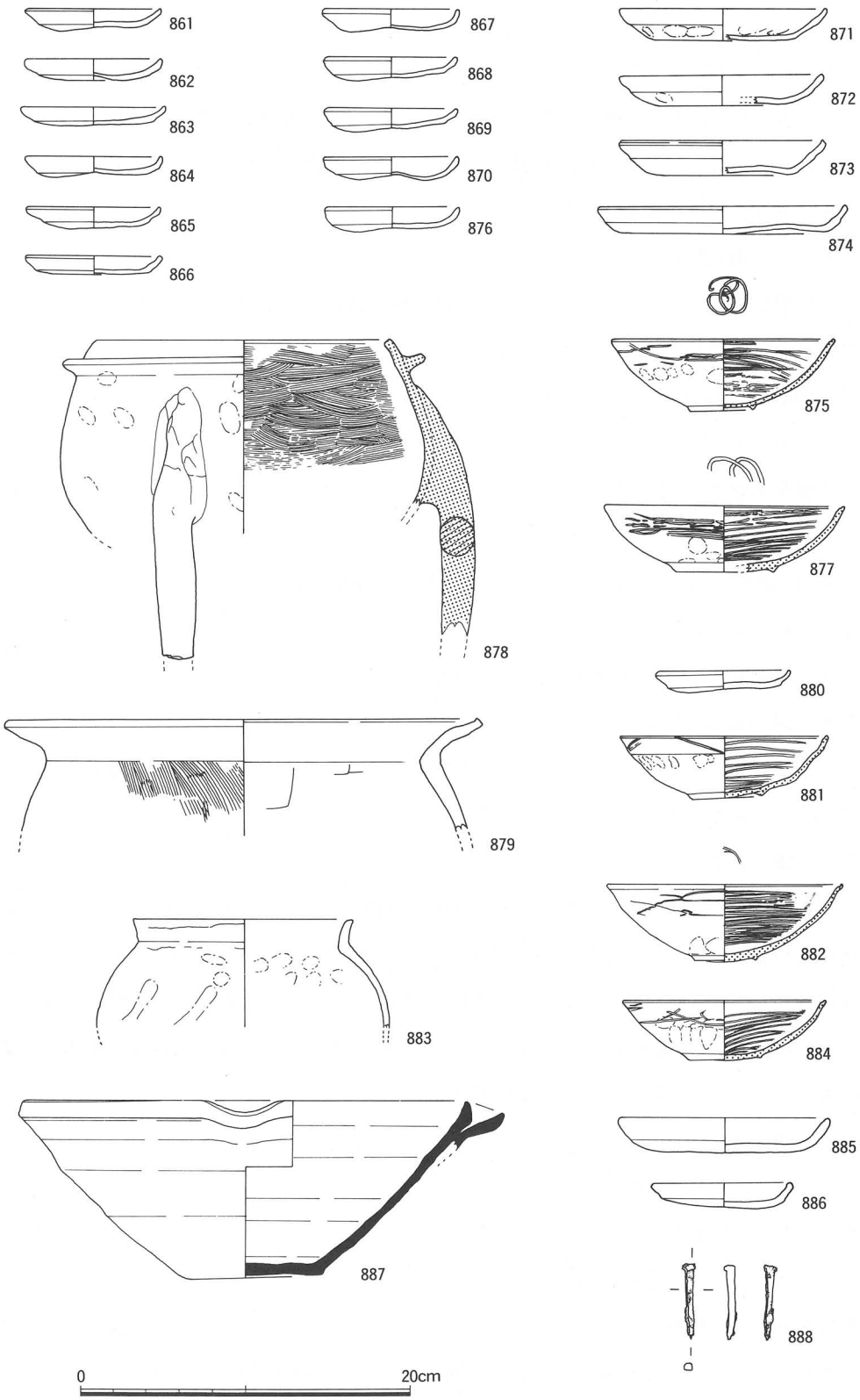
土師器皿（876）、瓦器椀（877）が出土している。瓦器椀は外面に省略化されたヘラミガキと、内面にやや粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状である。Ⅲ－Ａ（新）～Ｂに属する。

ＳＫ－26（第122図）

土師器甕（879）が出土している。体部から「く」の字に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部上部には平坦面がある。外面にハケメによる調整、内面は板状によるナデが施されている。

ＳＫ－27（第122図）

土師器皿（880）、瓦器椀（881）が出土している。881は大和型で、外面のヘラミガキは省略化され、口縁部にわずかに施される程度で、内面は粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｃに属する。



第122図　ＳＫ－21・22・25・26・27・28・29・34・35・40出土遺物

ＳＫ－28（第122図）

瓦器椀（882）、土師器甕（883）が出土している。882は大和型でⅢ－Ａ（新）に属する。883は球形の体部に短い口縁部が外側に開いて付き、端部は上面に平坦面を持つ。内外面とも指押さえの痕が顕著に残る。

ＳＫ－29（第122図）

大和型瓦器椀（884）が出土している。内面に粗い圏線ミガキが施され、Ⅲ－Ｃに属する。

ＳＫ－34（第122図）

土師器皿（885・886）が出土している。

ＳＫ－35（第122図）

東播系須恵器片口鉢（887）が出土している。

ＳＫ－40（第122図）

鉄釘（888）が出土している。断面は長方形で、頭部は折り返している。

ＳＫ－46（第123図）

大和型瓦器椀（889）が出土している。Ⅲ－Ａ（新）に属する。

ＳＫ－54（第123図）

瓦器皿（890）が出土している。口縁部は強いヨコナデにより外反する。見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。

ＳＫ－55（第123図）

瓦器椀（891～895）、土師器皿（896～900）、瓦器釜（901～903）が出土している。瓦器椀は大和型で、Ⅲ－Ａ（新）～Ｂに属する。901は肩部のやや下方に短い鍔を付け、口縁部は「く」の字状に屈曲し端部は内側に折り返す。大和Ｂ$_2$型に属する。902は口縁部を欠くが901と同様の形態を示し、大和Ｂ$_2$型に属する。903は直立気味の口縁部に幅の狭い鍔を水平にめぐらしている。山城Ｆ型に属する。

ＳＤ－29（第124図）

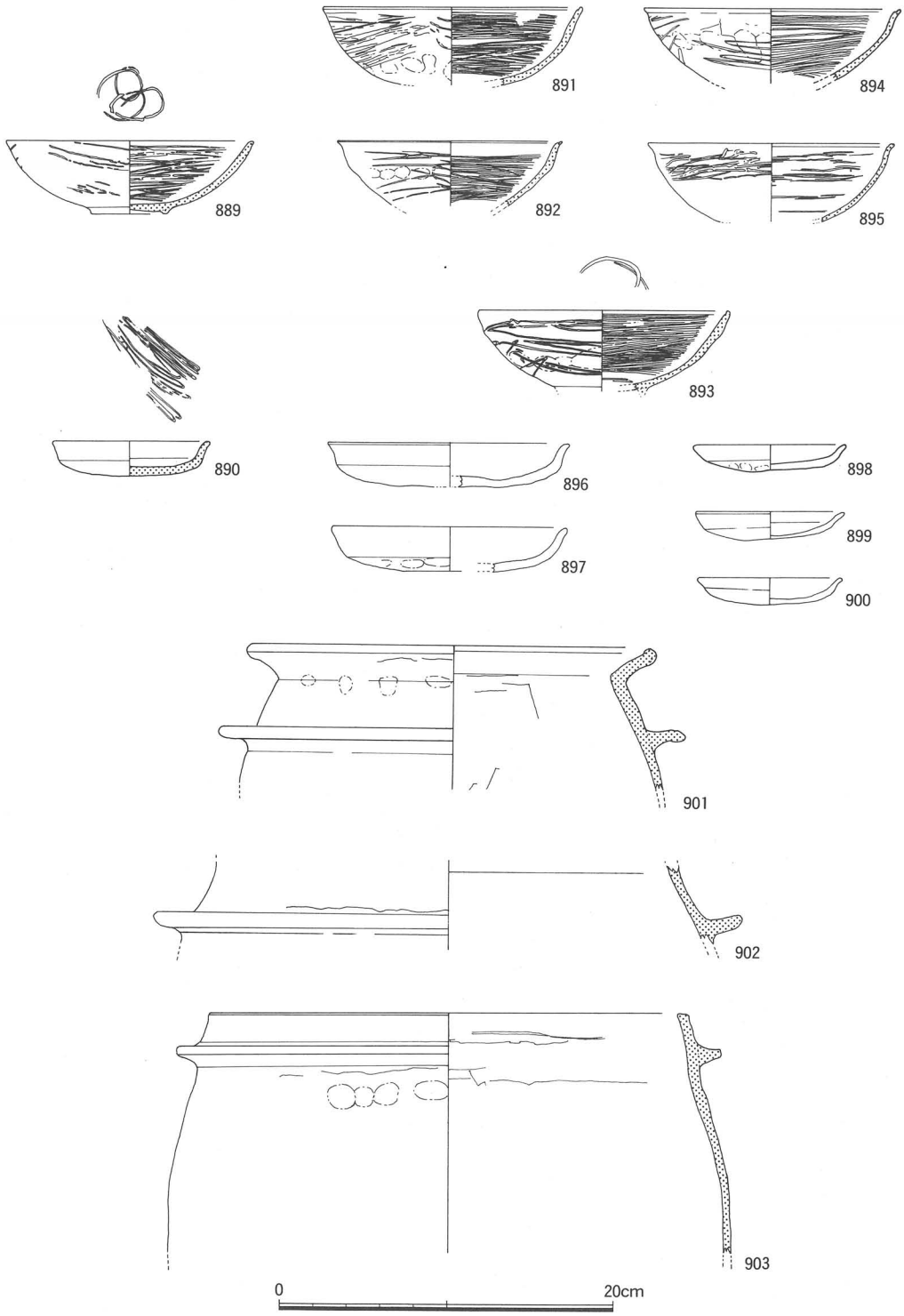
土師器皿（904）が出土している。

ＳＤ－30（第124図）

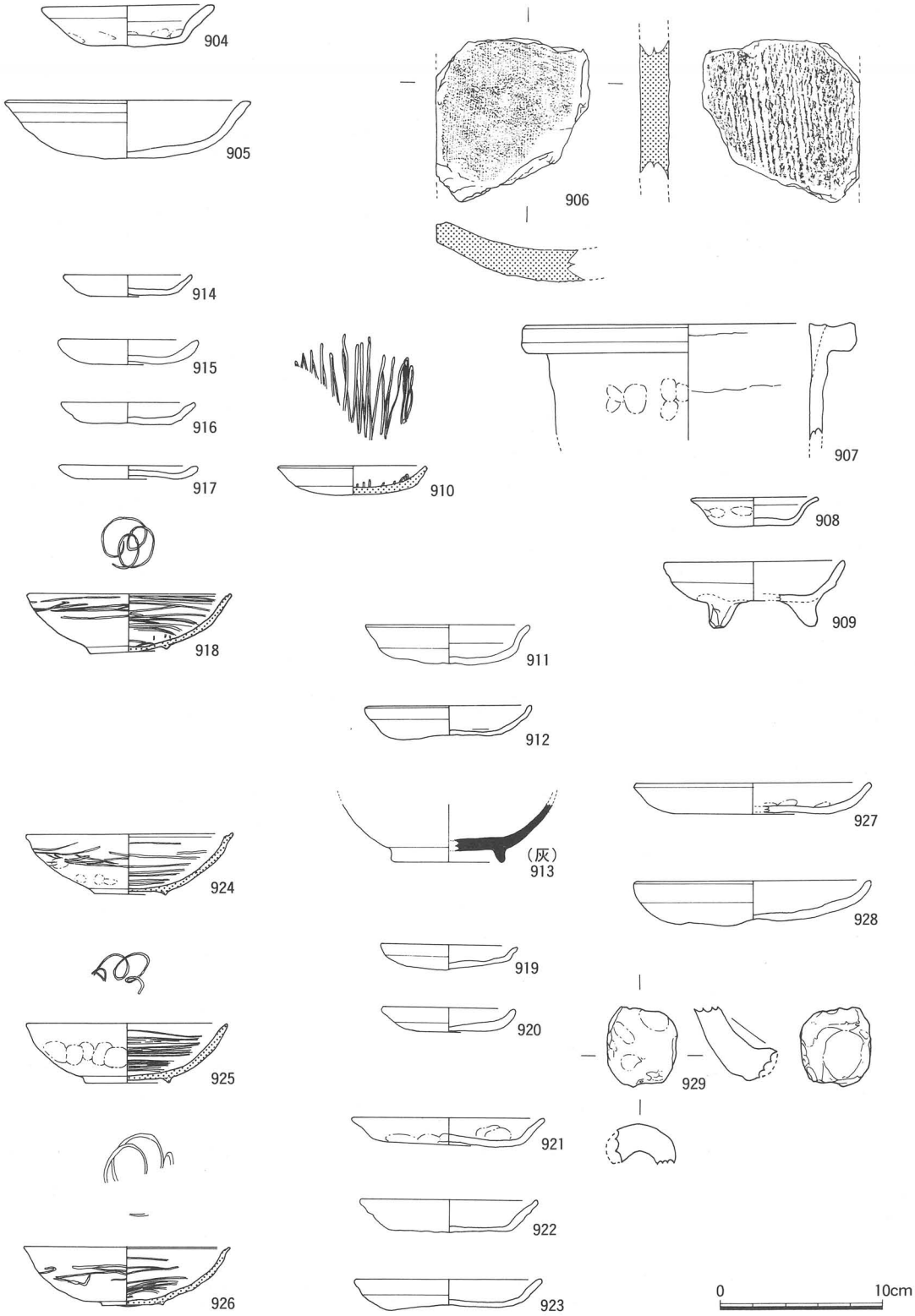
土師器皿（905）が出土している。

ＳＤ－31（第124図）

平瓦片（906）、土師器釜（907）、土師器皿（908）、土師器脚付き皿（909）などが出土している。906は凹面に布目、凸面に縄目が残る。907は口縁部に続けて厚い鍔を水平にめ



第123図　ＳＫ－46・54・55出土遺物



第124図　ＳＤ－29・30・31・32・33・39・40・42・45出土遺物

ぐらしている。11世紀頃の摂津C$_2$型に属する。909は破片での出土であるが、底部が三足の形態を呈するものと推定される。

ＳＤ－32（第124図）

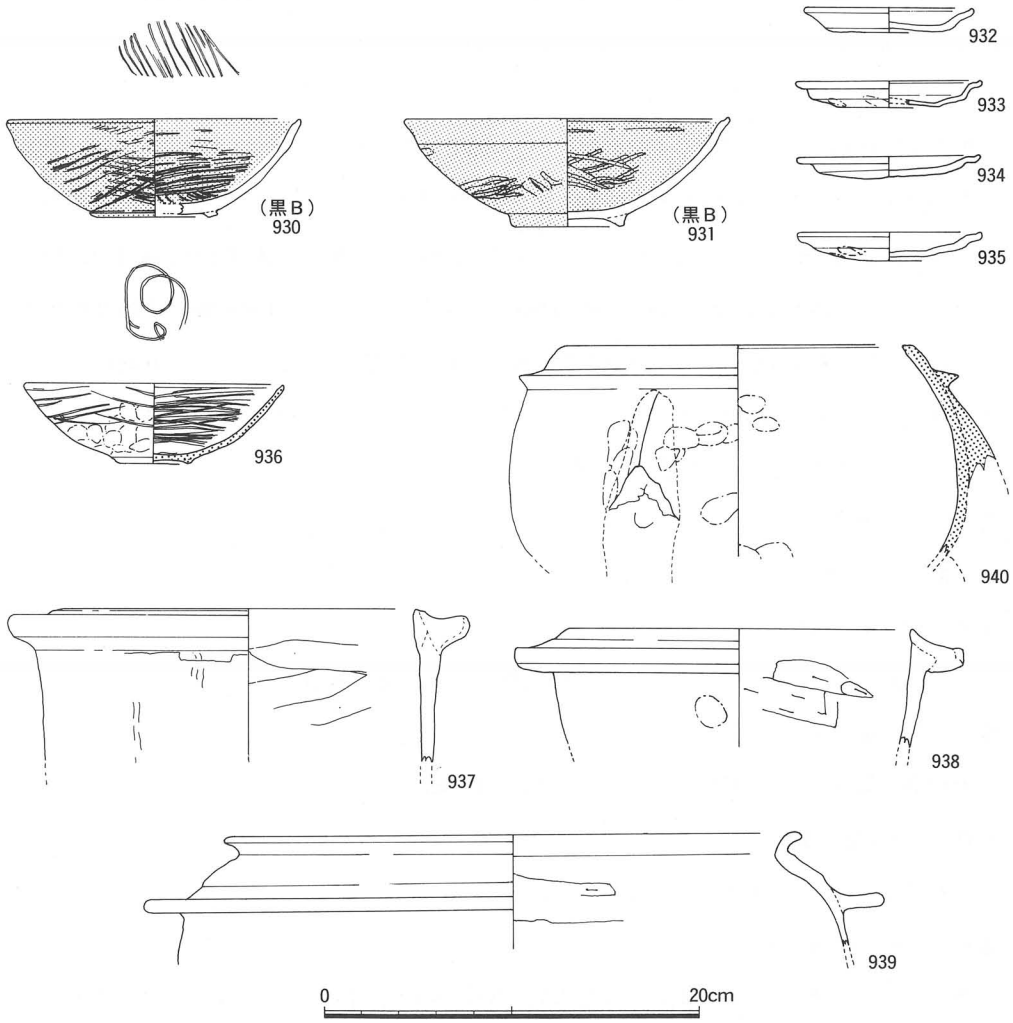
瓦器皿（910）が出土している。見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。

ＳＤ－33（第124図）

土師器皿（911・912）、灰釉陶器椀（913）が出土している。

ＳＤ－39（第124図）

土師器皿（914～917）、大和型瓦器椀（918）などが出土している。918は見込みの暗文はほとんど省略され、内面に粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。



第125図　ＳＩ－01・02出土遺物

ＳＤ－40（第124図）

土師器皿（919・920）が出土している。

ＳＤ－42（第124図）

土師器皿（921～923）、瓦器椀（924～926）が出土している。924は大和型で、外面のヘラミガキは省略され、内面に粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する。925は外面のヘラミガキは省略されるが、内面には割と密な圏線ミガキが施されている。楠葉型か。Ⅲ－１～２に属する。926は大和型で、外面のヘラミガキは省略化されており、内面には粗い圏線ミガキと、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｃに属する。

ＳＤ－45（第124図）

土師器皿（927・928）、土師質不明品（929）が出土している。929は中空状で脚部の破片か。全体に熱を受けているようで、赤味を帯びている。

ＳＩ－01（第125図）

黒色土器Ｂ類（930・931）、土師器皿（932～935）、瓦器椀（936）、土師器釜（937～939）などが出土している。930・931とも強いヨコナデにより口縁部は外反する。畿内系Ⅴ類に属する。932～935は「て」の字状口縁を呈する。936は大和型で、体部全体の約1/2に粗いヘラミガキが施され、内面にはやや粗い圏線ミガキと、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ－Ｃに属する。937・938は口縁部に続けて厚い鍔をめぐらし、外面にはハケメが残る。両者とも摂津C_2型に属する。939は「く」の字状に外反する口縁部に細い鍔を水平にめぐらしている。河内B_1型に属する。

ＳＩ－02（第125図）

瓦器足釜（940）が出土している。

ＳＰ－37（第126図）

平瓦（941）が出土している。にぶい橙色を呈し、凸面に縄目が残る。

ＳＰ－75（第126図）

大和型瓦器椀（942）が出土している。Ⅲ－Ｂに属する。

ＳＰ－118（第126図）

瓦器足釜（943）が出土している。

ＳＰ－106（第126図）

埋納ピットと考えられる遺構から瓦器皿（944・945）、土師器皿（946～953）などが一括して出土している。944は見込みの暗文はジグザグ状で、945はジグザグの方向を変えて

十字状に施されている。

ＳＰ－38（第126図）

土師器高台付皿（955）が出土している。

ＳＰ－43（第126図）

滑石製紡錐車（954）が出土している。

ＳＰ－75（第126図）

土師器皿（956）が出土している。

ＳＰ－131（第126図）

瓦器皿（957）が出土している。口縁端部はヨコナデにより外反している。見込みの暗文はジグザグの方向を変え十字状に施されている。

ＳＰ－157（第126図）

土師器皿（958）が出土している。

ＳＰ－161（第126図）

土師器皿（959）が出土している。

ＳＰ－200（第126図）

土師器皿（960）が出土している。「て」の字状口縁を呈する。

ＳＰ－203（第126図）

土師器甕（961）、瓦器椀（962）が出土している。961は短い頸部が直立気味に立ち上がり口縁部は外反している。口縁端部の上面は平坦面を成す。962は大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化されており、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｄに属する。

ＳＰ－244（第127図）

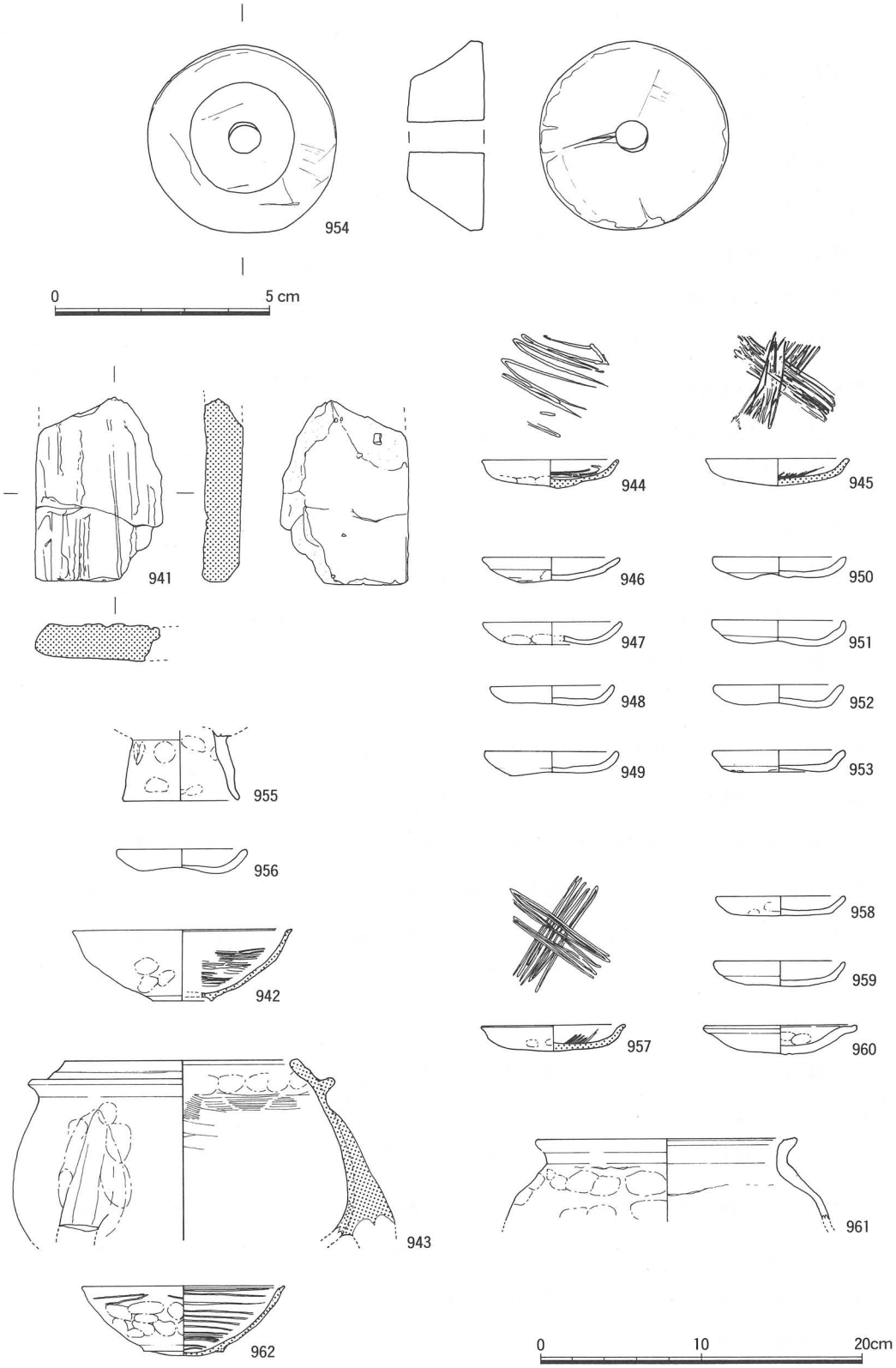
緑釉陶器（963）が出土している。焼成は軟質で胎土の色は赤橙色を呈する。洛北産であろう。

ＳＰ－260（第127図）

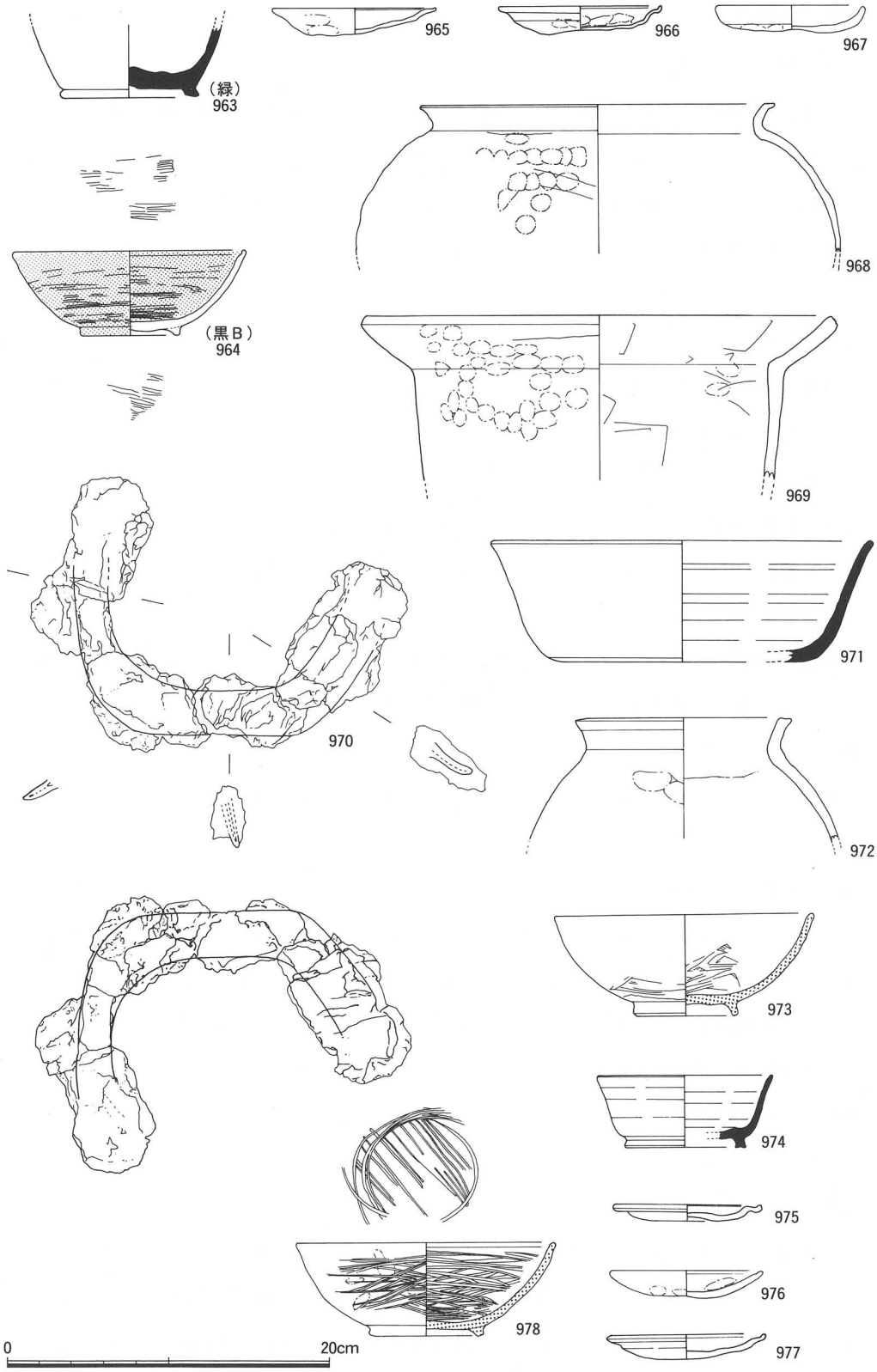
黒色土器Ｂ類（964）、土師器皿（965・966）が出土している。964は内外面とも密なヘラミガキが施され、見込みの暗文はジグザグ状に隙間無く施されている。畿内系Ｖ類に属する。965・966は「て」の字状口縁を呈する。

ＳＰ－270（第127図）

土師器皿（967）が出土している。



第126図　M・N区ＳＰ出土遺物（1）



第127図　M・N区SP出土遺物（2）

ＳＰ－269（第127図）

土師器甕（968）が出土している。球形の体部から短い口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部は外反してやや斜め上方向に尖り気味に終る。端部の上面には平坦面を持ち、体部外面に指押さえの痕が残る。

ＳＰ－280（第127図）

土師器鍋（969）が出土している。

ＳＰ－320（第127図）

鉄製の鍬先（970）が出土している。

ＳＰ－322（第127図）

須恵器杯（971）が出土している。Ｖ型式のものか。

ＳＰ－408（第127図）

土師器甕（972）、土師器皿（975）が出土している。975の口縁部は「て」の字状を呈する。

ＳＰ－425（第127図）

瓦器椀（973）が出土している。深い椀形態を呈し、内外面に不定方向の太いミガキが施されている。口縁端部に沈線は無く、和泉型と考えられる。

ＳＰ－426（第127図）

須恵器杯身（974）が出土している。断面四角形の高台が外側に向かって「ハ」の字状に付く。

ＳＰ－433（第127図）

土師器皿（976）、瓦器椀（978）が出土している。976は口縁部がやや屈曲気味に伸び、端部は肥厚し丸く納める。「て」の字状口縁の一種か。978は外面の分割ヘラミガキは密で、内面の圏線ミガキも密に施されている。見込みは粗いジグザグ状の暗文が施されている。楠葉型で、Ｉ－２に属する。

ＳＰ－434（第127図）

土師器皿（977）が出土している。「て」の字状口縁を呈する。

ＳＰ－436（第128図）

土師器甕（979～981）、土師器杯（982・983）、黒色土器Ａ類（984～990、992）土錘（991）などが出土している。979・981は球形の体部に短い口縁部が付き、端部は外反気味に開き端部上面には平坦面を持つ。体部の外面には指押さえの痕が顕著に残る。980は端部が肥厚し、水平方向に伸びて丸味を帯びて終る。982・983は口縁部はヨコナデにより

外反し、体部下半には指押さえの痕が残る。黒色土器A類はやや浅めの椀形態に、小さな輪高台が付く。992には底部外面には線刻で「廣」の字が彫られている。畿内系Ⅲ類に属する。

ＳＰ－439（第128図）

土師器杯（993）が出土している。

ＳＰ－721（第128図）

土師器皿（994）が出土している。

ＳＰ－593（第128図）

土師器杯（995）、瓦器椀（999）が出土している。瓦器椀は楠葉型で、法量の縮小化がみられ、外面のヘラミガキは省略されている。内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅳ－２に属する。

ＳＰ－558（第128図）

土師器皿（996）が出土している。「て」の字状口縁を呈する。

ＳＰ－537（第128図）

大和型瓦器椀（997）が出土している。外面には粗いヘラミガキが施され、内面にもやや粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状のようである。Ⅲ－Ａ（新）～Ｂに属する。

ＳＰ－604（第128図）

鉄釘（998）が出土している。断面長方形を呈しており、頭部を折り曲げている。

ＳＰ－672（第128図）

紡錘形の土錘（1000）が出土している。

ＳＰ－734（第128図）

鉄釘（1101）が出土している。断面は長方形で、頭部は欠損している。

ＳＰ－757（第129図）

埋納ピットと考えられる遺構で、土師器皿（1002～1016）が一括で出土している。

ＳＰ－766（第129図）

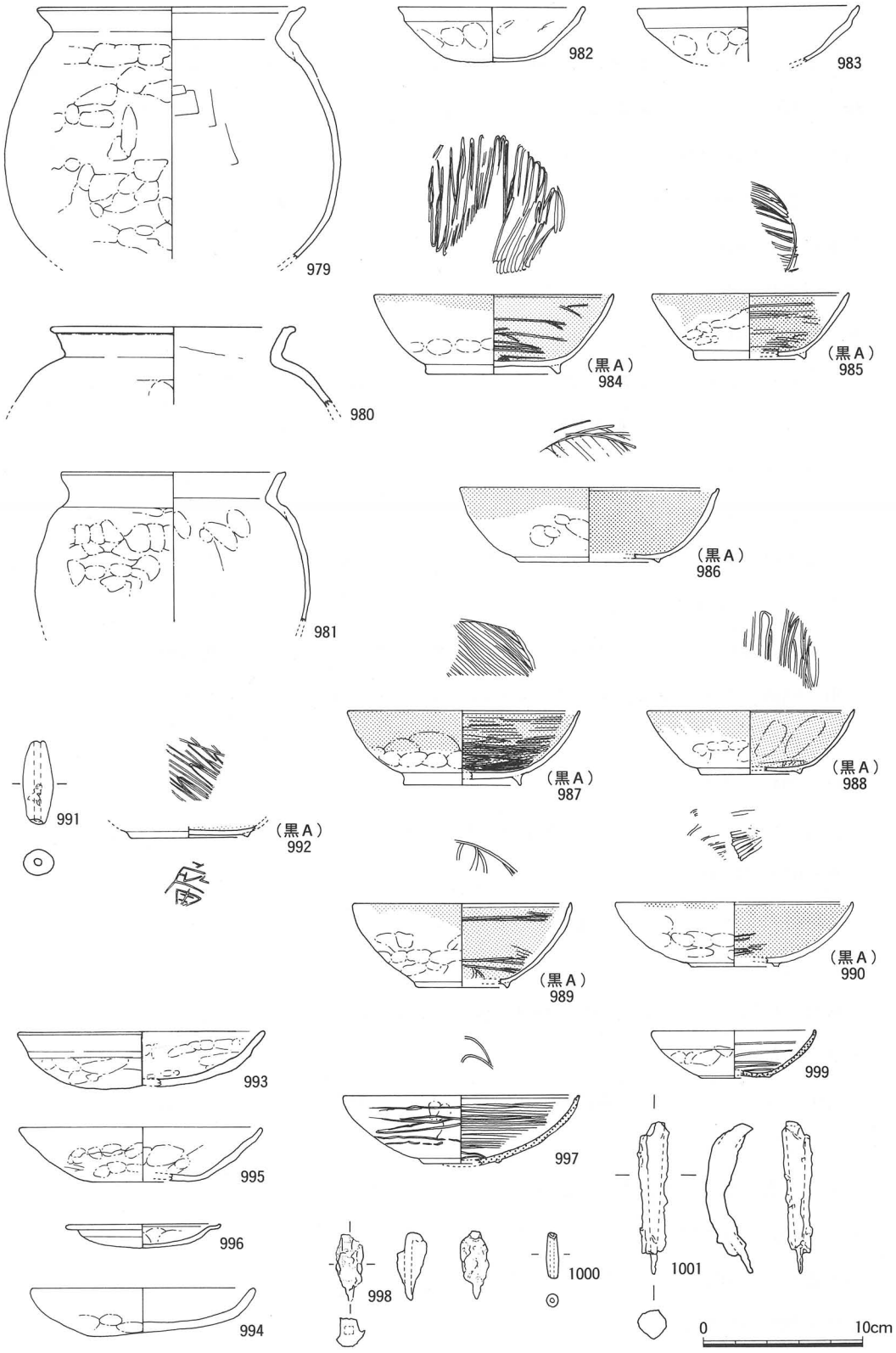
土師器皿（1017）が出土している。

ＳＰ－770（第129図）

土師器皿（1018・1019）が出土している。

ＳＰ－799（第129図）

埋納ピットと考えられる遺構から土師器皿（1020～1044）が一括で出土している。



第128図　M・N区SP出土遺物（3）

ＳＰ－803（第129図）

瓦器椀（1045・1050・1051）、土師器皿（1046～1048）、土師器杯（1049）が出土している。瓦器椀は1045が大和型で、外面の分割ヘラミガキは省略化され、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｂに属する。1050・1051が楠葉型でそれぞれⅢ－３、Ⅳ－２に属する。

ＳＰ－805（第129図）

土師器皿（1052）、土師器杯（1053）、瓦器椀（1054）が出土している。1054は大和型で、Ⅲ－Ｂ～Ｃに属する

ＳＰ－812（第129図）

瓦器椀（1055～1057）が出土している。いずれも大和型で、1055がⅢ－Ｂ～Ｃ、1056がⅢ－Ｃ～Ｄ、1057がⅢ－Ｂに属する。

ＳＰ－823（第130図）

黒色土器Ａ類（1058・1059）が出土している。1058は畿内系Ⅲ類、1059が畿内系Ⅱ類に属する。

ＳＰ－826（第130図）

土師器皿（1060～1062）、土師器中皿（1063・1064）が出土している。

ＳＰ－835（第130図）

土師器盤（1065）が出土している。

ＳＰ－878（第130図）

土師器中皿（1066）、土師器皿（1067）が出土している。

ＳＰ－883（第130図）

土師器杯（1068）が出土している。

ＳＰ－919（第130図）

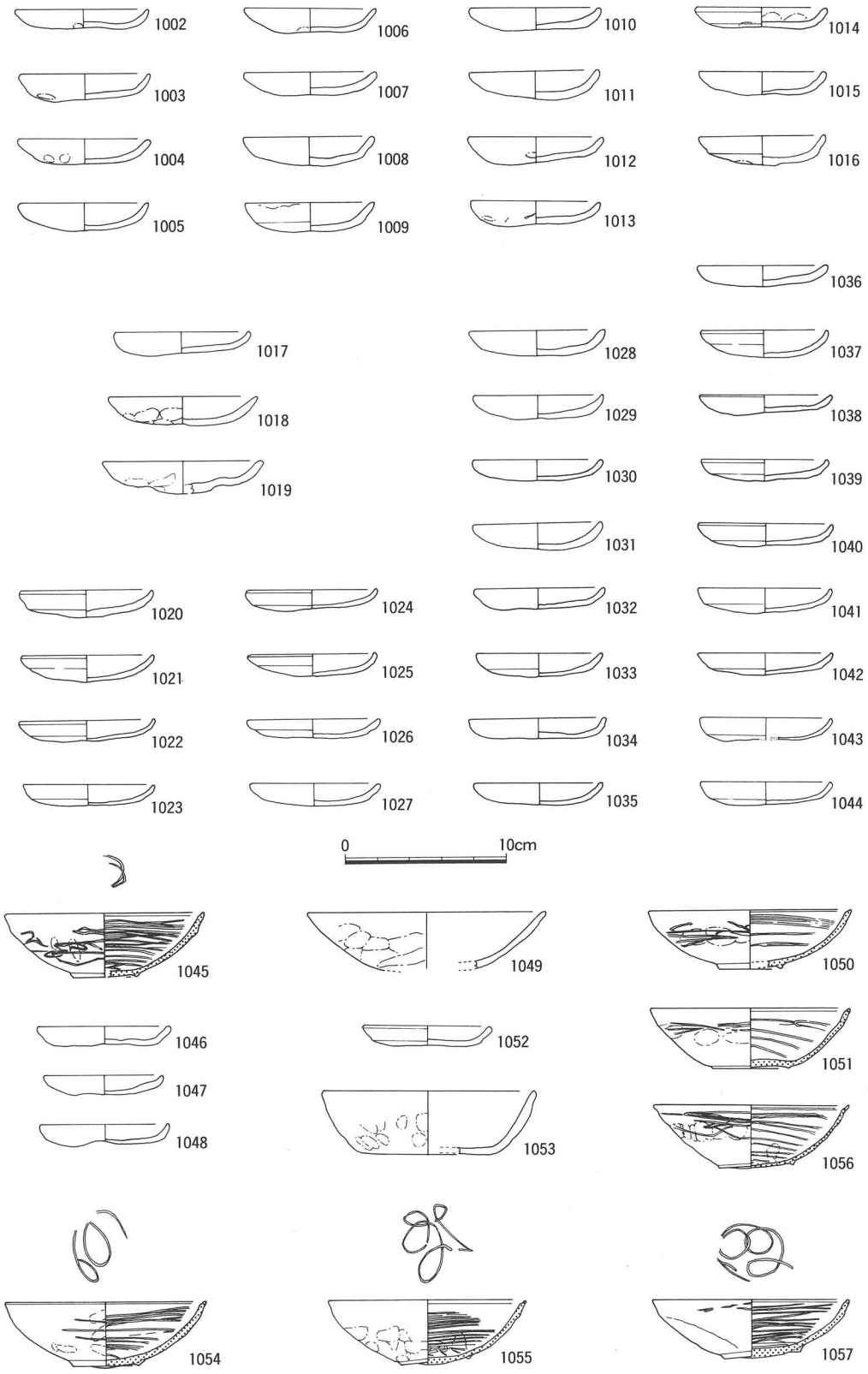
埋納ピットと考えられる遺構で、土師器皿（1069～1078）が一括で出土している。

ＳＰ－1095（第130図）

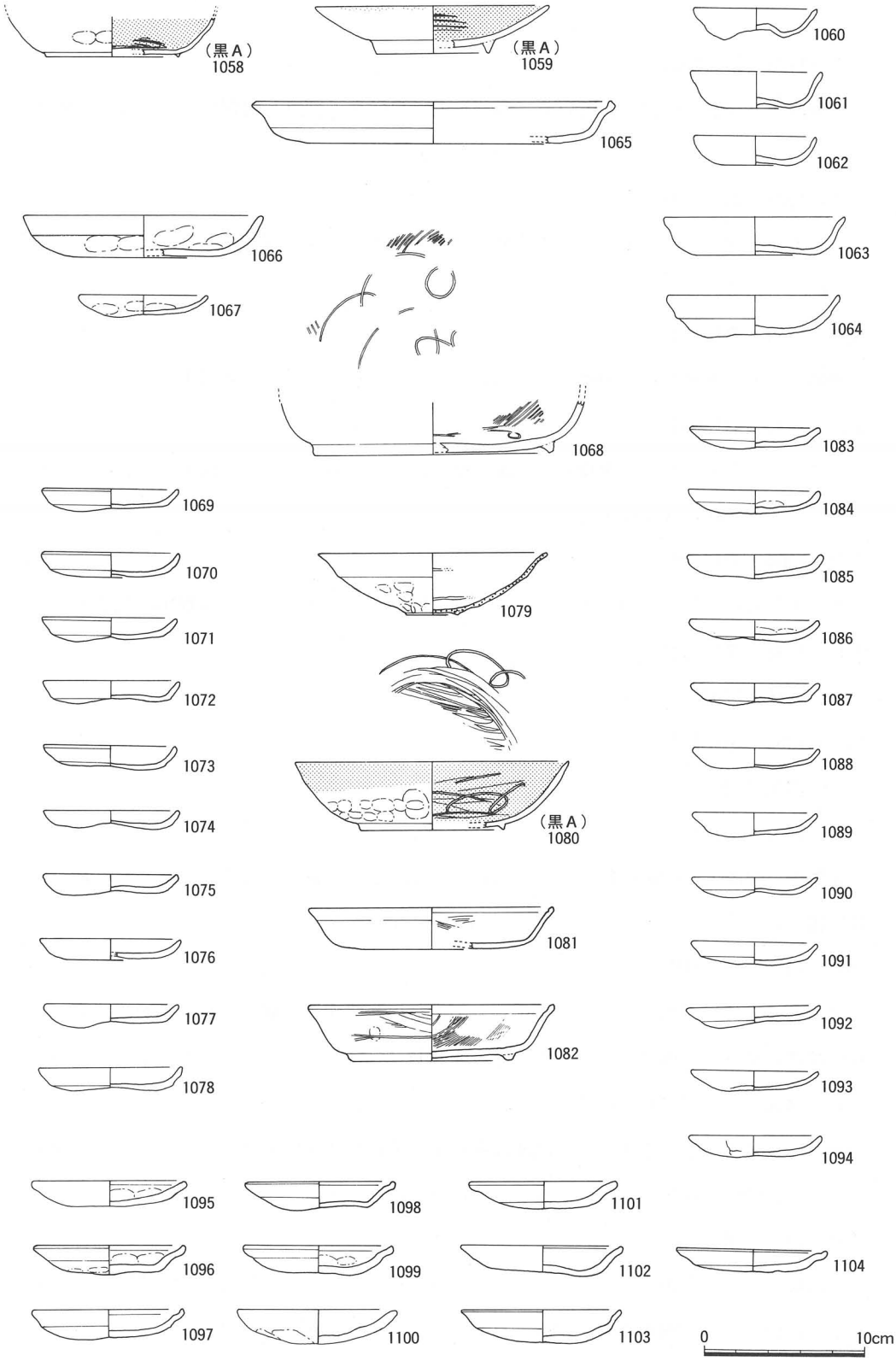
和泉型瓦器椀（1079）が出土している。Ⅳ－１に属する。

ＳＰ－1164（第130図）

黒色土器Ａ類（1080）が出土している。内面に連結輪状の暗文が施され、見込みはジグザグ状の暗文が隙間なく施されている。畿内系Ⅲ類に属する。



第129図　M・N区ＳＰ出土遺物（４）



第130図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（５）

ＳＰ－1178（第130図）

土師器杯（1081）が出土している。無高台で、口縁部は肥厚し内側に向かって丸く納めている。

ＳＰ－1078（第130図）

土師器杯（1082）が出土している。低い高台が付き、口縁端部は肥厚し内側に向かって丸く納めている。

ＳＰ－1189（第130図）

埋納ピットと考えられる遺構から土師器皿（1083～1094）が一括で出土している。

ＳＰ－1193（第130図）

埋納ピットと考えられる遺構から土師器皿（1095～1104）が一括で出土しており、いずれも「て」の字状口縁を呈する。

ＳＰ－1304（第131図）

黒色土器Ｂ類（1106）が出土している。細く低い高台が付き、畿内系Ⅳ類に属する。

ＳＰ－1228（第131図）

土師器杯（1105）が出土している。

ＳＰ－1383（第131図）

土師器皿（1107）が出土している。

ＳＰ－1403（第131図）

瓦器椀（1108）、土師器甕（1109）が出土している。1108は大和型で、Ⅲ－Ａ（新）～Ｂに属する。

ＳＰ－1438（第131図）

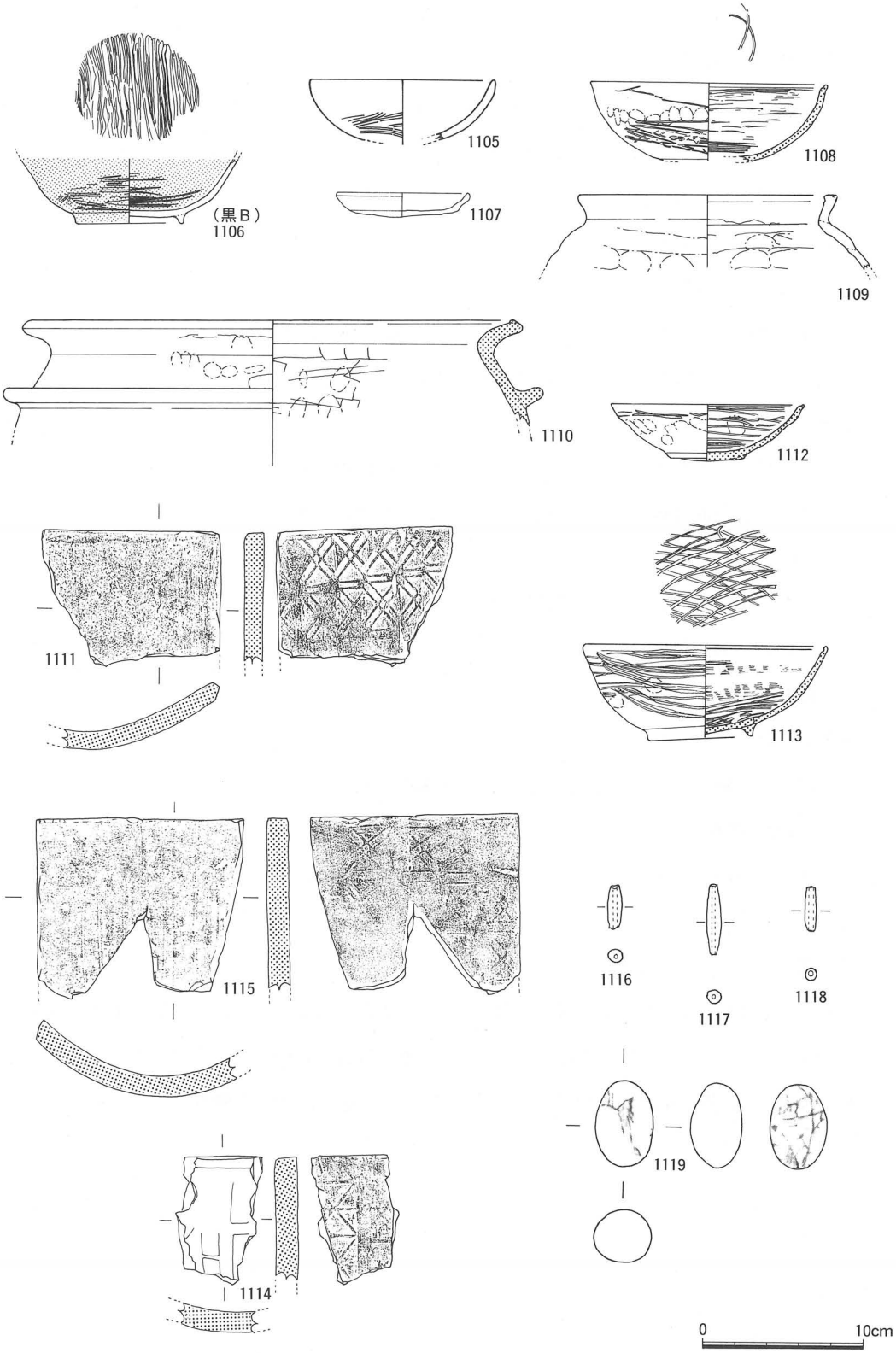
瓦器釜（1110）が出土している。「く」の字形に屈曲する口縁部に短い鍔をめぐらし、口縁端部は肥厚し内側に折り返している。大和B_1型に属する。

ＳＰ－1436（133）（第131図）

平瓦（1111）が出土している。凸面は菱形文に横線が交差する２重線のタタキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残る。万富瓦窯産である。

ＳＰ－1440（第131図）

瓦器椀（1112）が出土している。大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化されており、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－Ｃに属する。



第131図　Ｍ・Ｎ区ＳＰ出土遺物（６）

ＳＰ－1583（第131図）

瓦器椀（1113）が出土している。口縁端部は尖り気味にやや丸く納め、沈線はやや下がった位置に施されている。外面は密な分割ヘラミガキが底部付近まで施されており、内面には密な圏線ミガキと、見込みにはジグザグの方向を変えた斜格子状の暗文が施されている。楠葉型で、Ｉ－２に属する。

ＳＰ－1515（第131図）

平瓦（1114）が出土している。凸面は菱形文に横線が交差するタタキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残る。 万富瓦窯産である。

ＳＰ－1509（第131図）

平瓦（1115）が出土している。凸面は、菱形文に横線が交差する２重線のタタキメが施されており、凹面は板ナデと布目痕が残る。万富瓦窯産である。

ＳＰ－681（第131図）

紡錘形の土錘（1116）が出土している。

ＳＰ－1142（第131図）

紡錘形の土錘（1117）が出土している。

ＳＰ－1305（第131図）

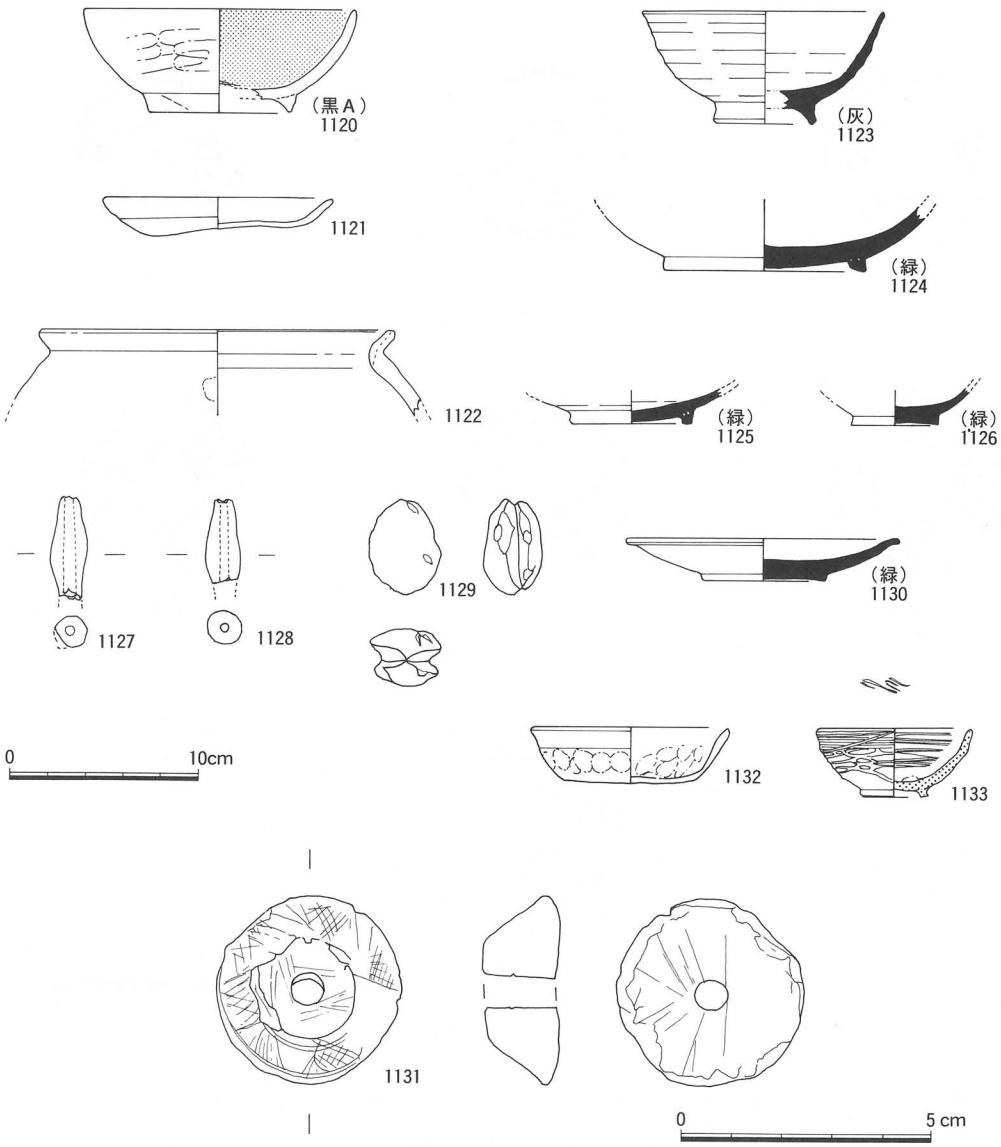
紡錘形の土錘（1118）が出土している。両端部は欠損している。

ＳＰ－407（第131図）

投弾？（1119）が出土している。卵状を呈する自然石であるが、形は整っており表面は滑らかである。

包含層出土遺物（第132図）

黒色土器Ａ類（1120）、土師器皿（1121）、土師器壺（1122）、灰釉陶器椀（1123）、緑釉陶器椀（1124～1126）、緑釉陶器皿（1130）、土錘（1127～1129）、土師器杯（1132）、紡錘車（1131）、小型の瓦器椀（1133）などが出土している。1129は両側縁に溝が切られ、断面が「工」字形を呈する土錘である。



第132図　M・N区包含層出土遺物

第5節　出土銭貨

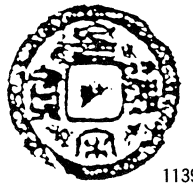
調査を通して数は少ないが銅銭が出土している。その主なものは初鋳年代を北宋時代に求められる渡来銭であるが、他に皇朝十二銭も出土している。（第133図）

1134は「皇宋通宝」で、真書体・対読、初鋳年は1038年（北宋）である。M区ＳＫ－08から出土している。1135は「嘉祐通宝」で、真書体・対読、初鋳年は1056年（北宋）である。M区ＳＰ－146から出土している。1136はＬ区包含層からの出土であるが、遺存状態は悪く判読不能である。1137は「隆平永宝」で、真書体・順読、初鋳年が796年の皇朝十

1134

皇宋通宝
1038年
北宋

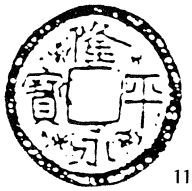
1136


1139

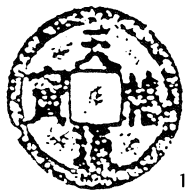
皇宋通宝
1038年
北宋

1135

嘉祐通宝
1056年
北宋


1137

隆平永宝
796年


1140

天禧通宝
1017年
北宋

1138

皇宋通宝
1038年
北宋

0　5 cm

第133図　出土銭貨

二銭の一つである。L区ＳＥ－31から出土している。1138は「皇宋通宝」で、篆書体・対読、初鋳年は1038年（北宋）である。L区ＳＰ－1593から出土している。1139も「皇宋通宝」で、篆書体・対読。K区包含層出土。1140は「天禧通宝」で、真書体・順書、初鋳年1017年（北宋）である。K区包含層出土。

註

(1)橋本久和「第５章　第２節　高槻における中世土器の編年」『上牧遺跡発掘調査報告書』1980高槻市教育委員会

(2)川越俊一「大和出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』1983

(3)菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1982

(4)横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』1978

(5)尾上実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念古文化論集』1983

(6)中村浩『和泉陶邑窯の研究』1981柏書房

(7)森隆「西日本の黒色土器生産(上)(中)(下)」『考古学研究』第37巻第2・3・4号1990・91

(8)橋本久和「脚付き土師質鍋について」『高槻市文化財年報平成4年度』1994高槻市教育委員会

(9)『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』1980岡山県教育委員会

参考文献

白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』第54号1969

白石太一郎「瓦器の生産に関する二・三の覚え書き」『古代文化』第27巻第1号1977

橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報昭和63・平成元年度』1991高槻市教育委員会

山本信夫「北宋貿易陶磁器の編年」『貿易陶磁研究』№.8 1988

中村浩『研究入門　須恵器』1990柏書房

『神出』1986妙見山麓遺跡調査会

中世土器研究会編『概説中世の土器・陶器』1995真陽社

鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1988日本中世土器研究会

百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』1986日本中世土器研究会

巽淳一郎「平城京における平安時代の焼物」『愛知県陶磁資料館研究紀要2』1983

斉藤孝正「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナル№.211』1982ニュー・サイエンス社

前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」『古代文化』第41巻第5号1989

久光重平・今井育雄『中世・近世渡来銭標本集』1981日本文化資料センター

坂詰秀一編『出土渡来銭』1986ニュー・サイエンス社

永井久美男編『中世の出土銭』1994兵庫埋蔵銭調査会

第６章　木製品

第１節　出土木製品の概要

木製品は古墳時代から近世のものまで出土しており、量的には中世（12世紀から13世紀代）のものが全体の約８割を占めている。ほとんどが遺構からの出土であるが、完形よりもむしろ破片の状態で出土する場合が多い。したがって、破片によっては製品名の把握が困難な場合も多々ある。ここでは主に古墳時代から中世のもので、実測可能で製品名が判るものはもちろんのこと、破片であってもその製品名が推定できるものや、一部不明品も含めてできる限り図化した。また製品名が判るものでも、本来の用途とは違う使用のされ方の状態で出土している場合もあるので、注意が必要である。特に中世の木製品には、このような転用品が多いので、出土木製品を遺構ごとに表にまとめたが、製品名と特徴の他に遺構での使用のされ方も示すことにした。

近世

近世では水路の護岸用として使用されていた杭や燭台が出土している。杭は径４～６㎝の丸木や自然木の先端を斧状工具のようなもので尖らせている。

中世

中世では前述のように、多くの木製品が出土している。これらの木製品を大まかに分類すると、日常生活全般にわたって使用されていた生活用具と建物やその他の構造物に用いられていた構築部材に分けられる。

１．生活用具

ひとくちに生活用具といってもその種類は多岐にわたっている。以下、調査で出土した製品名の判っているものについて簡単に説明する。

曲物

曲物がいつ頃から使用され始めたのかは、未だ明確にはされてはいないが、平城京跡からまとまった量の出土が報告されているので、奈良時代には既に、ある程度使用されていたようである。中世になるとさらに普及したようで、広く一般に使用されていたということは、各地の中世遺跡から出土する曲物の量が物語っている。

曲物は通常、側板と呼ばれる薄板に刃物で刻み目を入れ円形に曲げ重ね合わせて樺皮で綴じたものと、円形の底板から成る。底板は１枚のものや、２枚以上合わせたものがあり、

樺皮や木釘などで側板に固定される。円形の他に、四隅の曲がり角だけに刻み目を入れた角形のものも存在する。曲物は側板と底板から構成されるのが普通であるが、強度を高めるため側板を2重にしたり、さらに側板の外側に帯状に薄板を巻いて締め付けているものもある。この帯状の板はマワシと呼ばれている。また、マワシと側板とをしっかりと固定させるために、側板とマワシの隙間に薄板を差し込む場合があるが、この薄板をヘギと呼んでいる。ヘギは側板とマワシを固定させるだけでなく、同時に強度を高める役割もしている。文献や絵巻物などに散見されるように、曲物は当時の一般的な容器であったがその使用方法は様々で、調査では容器の他に柄杓の筒部や、側板だけを使用することが多い井戸の水溜、井筒に利用された状態で出土している。

折敷

折敷は方形若しくは長方形の薄板の四方に、折りまわした縁を付けたもので、食器や神饌を載せるのに用いられたもので、四隅を切り落とされているものが多いので隅切り盆、または角切り（すみきり）折敷ともいう。調査では完形品は出土しなかったが、破片であっても薄板のへりに縁を取り付けるための綴じ皮を通す穴のあるものは、折敷と判断した。

箱

板材を四角に組んで底板を付けたもので、板材を組むために両端を加工して、さらに釘、木釘、樺皮などを使用して組み合わせている。中には表面に漆を塗布しているものもある。調査では井戸に使用されていたものが多く、底板を外して箱枠の状態にしてその内側に曲物を入れ、水溜用として井戸の底に置いたり、解体して井戸側の縦板に転用された状態で出土している。

漆器

当時は土器とともにかなり一般的な食器として使用されていたと考えられるが、調査では椀が2点出土しているだけである。

櫛

横櫛、竪櫛があり、用途によって解き櫛、梳き櫛などがある。調査では横櫛が出土している。

下駄

下駄には一木製の連歯下駄と、台と歯が別材で作られる差歯下駄があるが、調査では連歯下駄が出土している。

草履状木製品

いわゆる金剛板と呼ばれるもので、左右対称をした薄板を2枚継ぎ合わせて、これを芯

板にして、外側に藁を編んで緒を付けたものである。素材の性質から芯板のみの出土例が多いが、草戸千軒町遺跡では藁が付着した状態のものが出土している。形態の特徴としては端部に穴があり、外縁にあたるところに１ヶ所の切り込みがある。調査では芯板の片方が出土している。

編具

俗にツチノコと呼ばれるもので、菰などを編むときに使用される錘である。

球（毬）状木製品

木片を球状にに削り整えたもので、表面が粗削りなものと、丁寧に丸く仕上げられ中央に穴が貫通しているものが出土している。前者は当時の遊戯の一種である打毬に使用された毬であろう。後者は用途不明である。

木製挽き臼

円柱形の材に中心から放射上に溝を切ったもので、凹形と凸形のものを重ねて回転させて使用した。材自体が頑丈なので、断ち割って礎板に使用されていた。

栓

角型の頭部と穴に差し込む棒状の部分を一木で作っている。桶などの穴に差し込んで使用されたものか。

俎板

俎板そのものの出土は確認されていないが、折敷などに多数の刃物傷が残るものがあり、これらを転用して俎板として使用されていたのであろう。

２．構築材

構築材としては井戸側の隅柱、縦板、横桟などに使用されていた角材、板材があり、枘穴を切っているものもある。柱穴からは柱根、礎板が出土しており、柱根には６角形に成形してあるものなどがあり、礎板には普通板材が使用されているが、よく観察すると他の製品の板材を転用していることが多い。鼻繰は材木を運搬する際に縄などを掛けるための穴を木材の端部に削り出したもので、材木を使用する時に切り落とされたもので、形状は台形を呈しており、ドーナツ状の穿孔がある。調査ではピットから出土しており、礎板に転用されていたようである。

奈良時代～平安時代

この時代の木製品としては、井戸（ＳＥ－18）より水溜に使用されていた曲物側板が出土しており、大型で方形のものと円形のものがある。曲物の形状自体、中世のものと変わ

りはないが、側板内側の刻み目の方向が斜めに入っており、古い様相を示している。

古墳時代

河川（ＳＲ－02）の護岸用の杭や、河川に接して検出された土坑（ＳＫ－84、ＳＪ－01）などから出土した杭、板材のほか菰状、木樋状のものが出土しているが、その用途は明らかではない。

第２節　Ｋ区の出土木製品

ＳＤ－87（第134図）

燭台（１）が出土している。円形の板の中心部に釘状の金属が刺してある。周縁部には削り出しによって段がある。

ＳＥ－34（第134図）

井筒として使用されていた曲物側板（４）が出土している。側板は２重で１枚のマワシが付く。

ＳＥ－36（第134図）

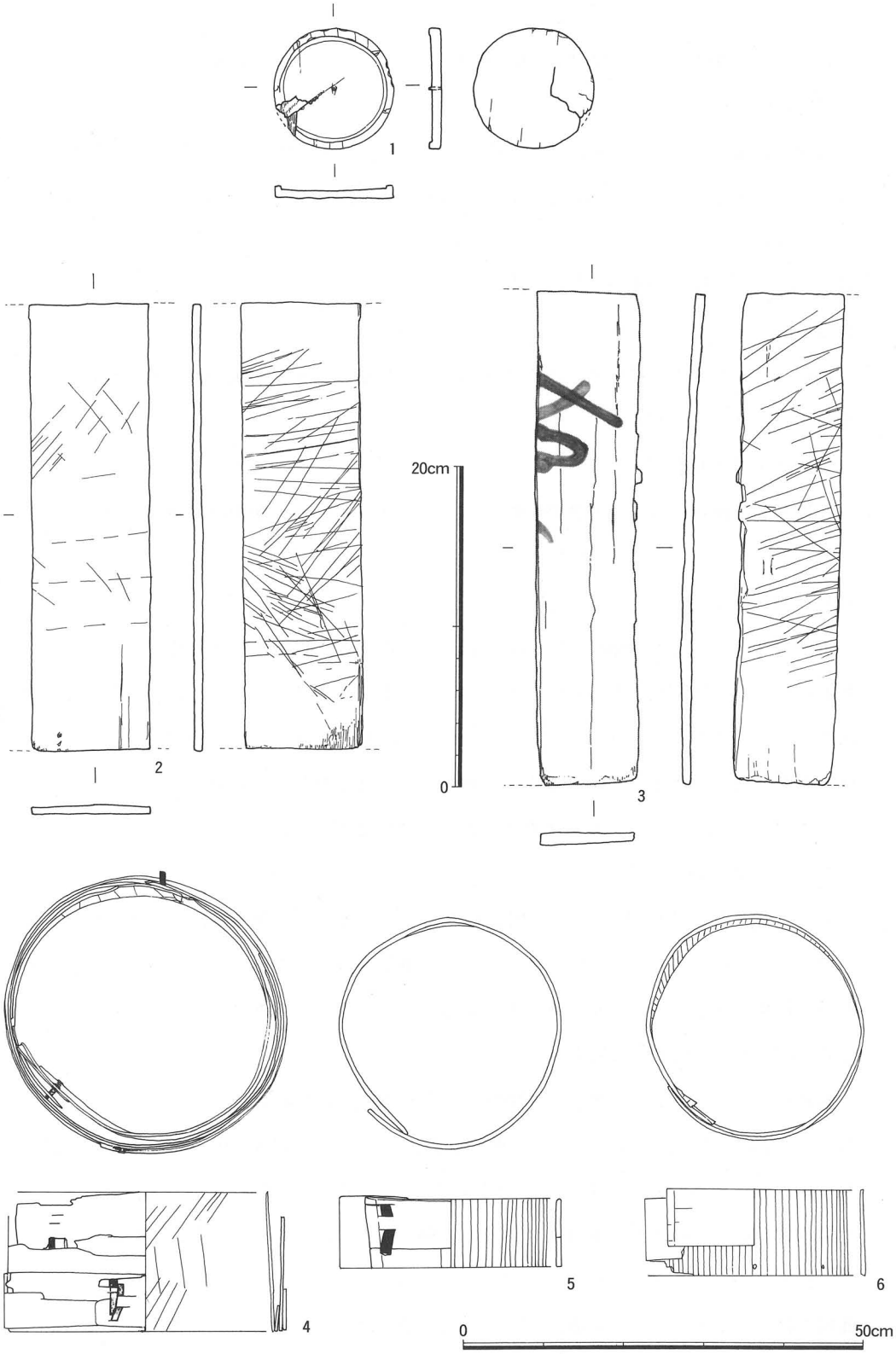
折敷（２・３）、曲物側板（５・６）が出土している。曲物側板は井筒に使用されていたもので、６には底板を取り付けるための木釘穴があるので、もともとは容器として使用されていたのであろう。５・６とも１重の側板から成り、木質や刻み目の様子から同一個体のものと考えられる。２・３はともに破片で、片面に無数の刃物傷が残っており、俎板としても使用されている。３には墨書があるが意味は不明である。

ＳＥ－41（第135・136図）

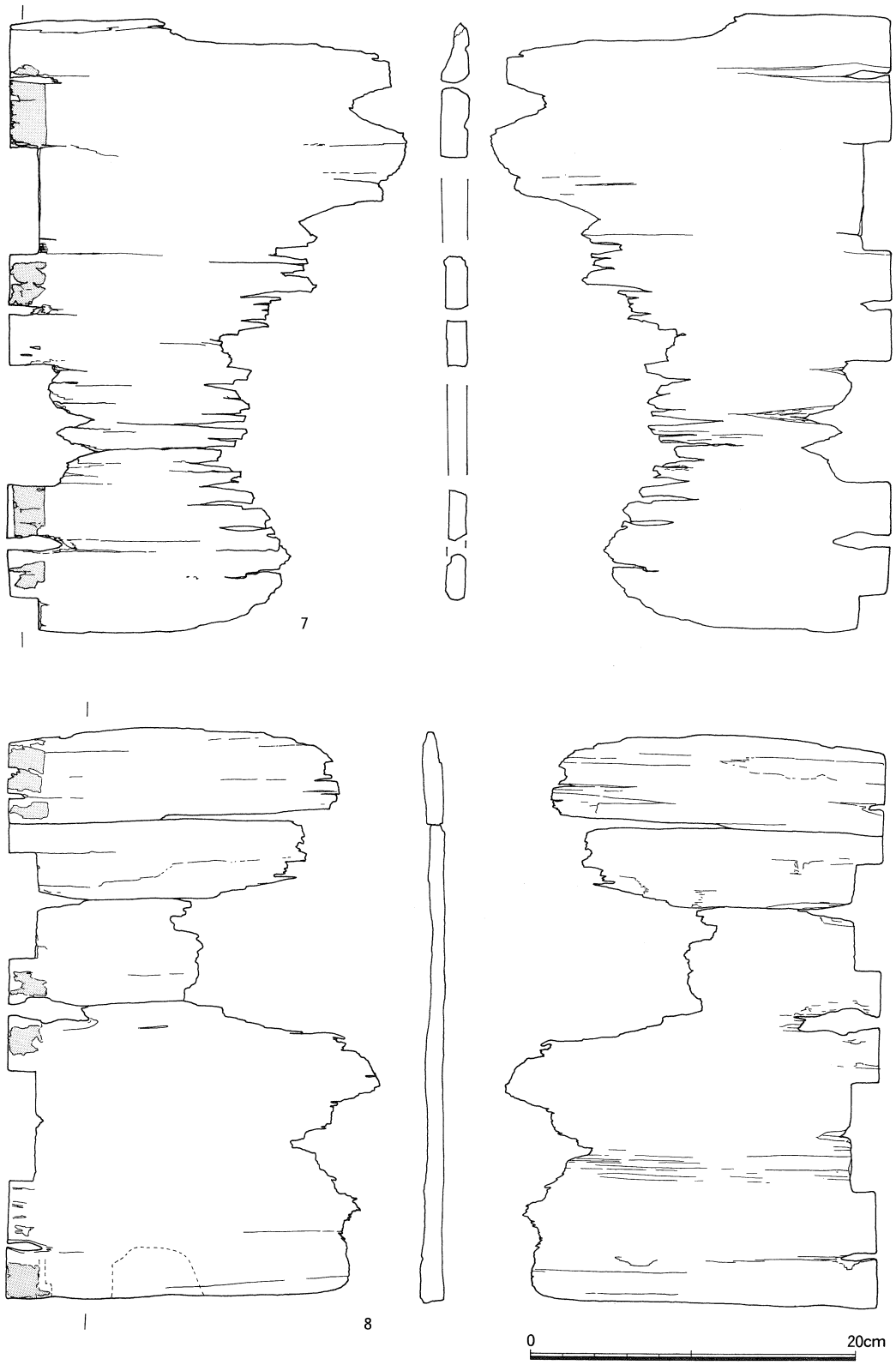
箱材（７～９）、杭（10～13）が出土している。箱材は井戸側の縦板に使用されていたもので、端部には組み合わせるために凹凸状の加工が施してある。組合せ部分には釘穴があり、樺皮も残っている。杭も井戸側に使用されていたものである。

ＳＥ－42（第137・138・139図）

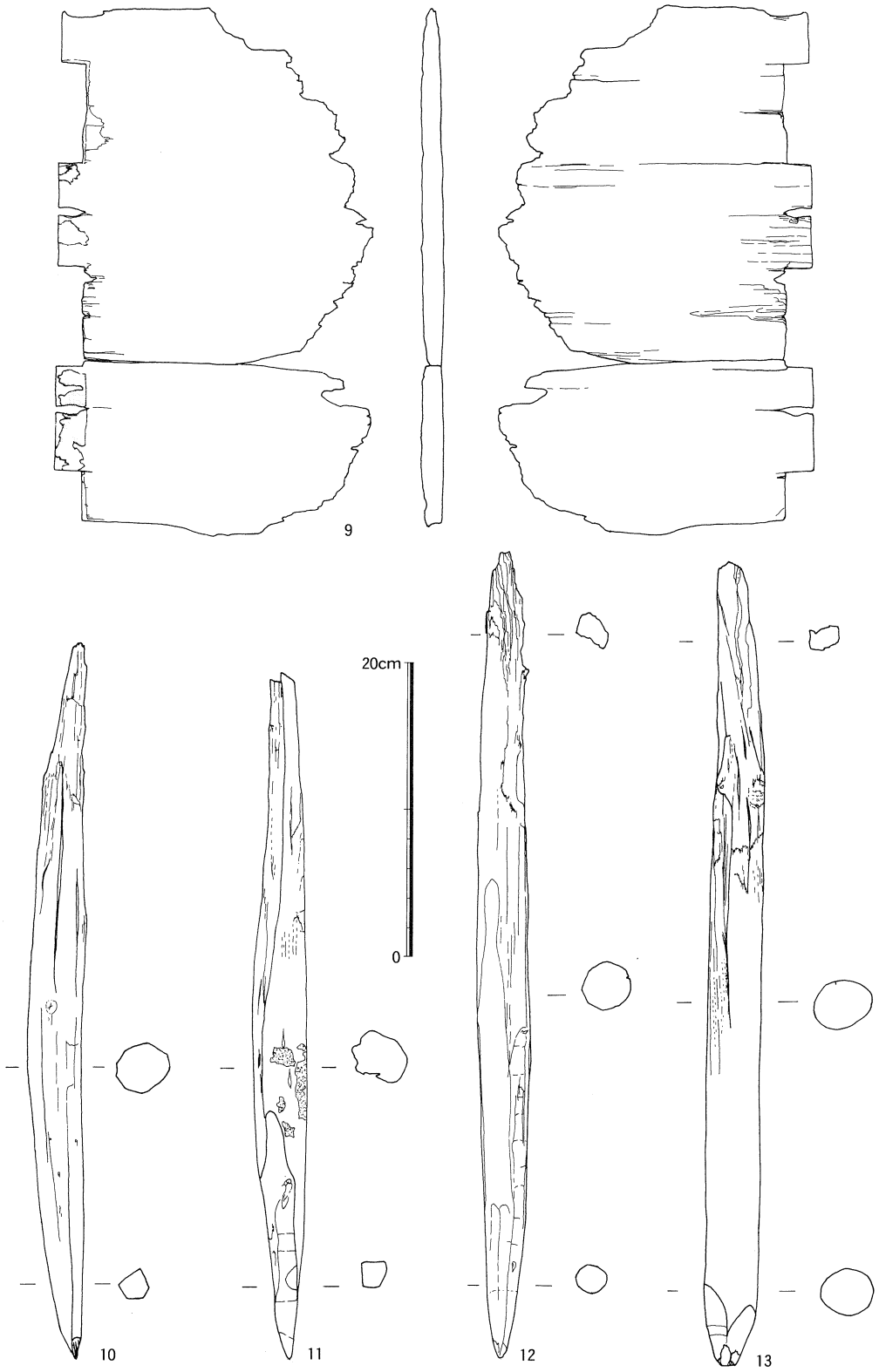
曲物底板（14～16、23・24）、曲物側板（17・18）、曲物（底板付き）（26）、角材（19～21）、不明品（25）が出土している。曲物底板は、井戸底面の曲物側板を使用した水溜と井戸側の間に敷きつめられていたものである。14・15は周縁部から約1.5㎝内側に等間隔で綴じ穴があり、樺皮も一部残っており、表側に側板の跡が着く。また、刃物傷が無数にみられるので、俎板として使用されていたらしい。16・23・24は底板を三日月状に削り、曲線を作っている。これは水溜と井戸側の間に敷く時に、水溜の曲物側板とうまく隙間なく合うようにするためであろう。16・24には縁に木釘穴の跡が残り、23には綴じ穴、樺皮



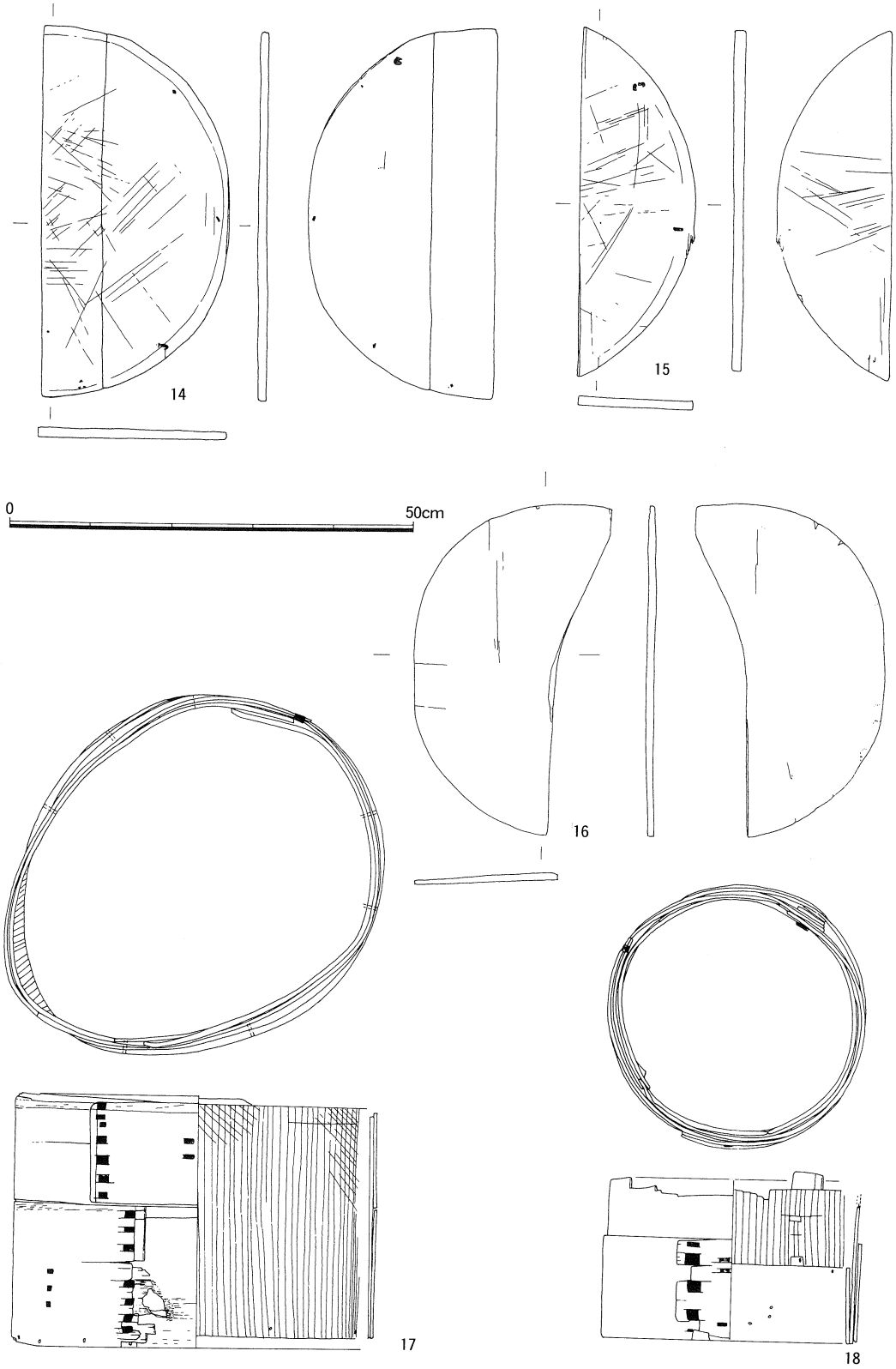
第134図　ＳＤ－87、ＳＥ－34・36出土木製品



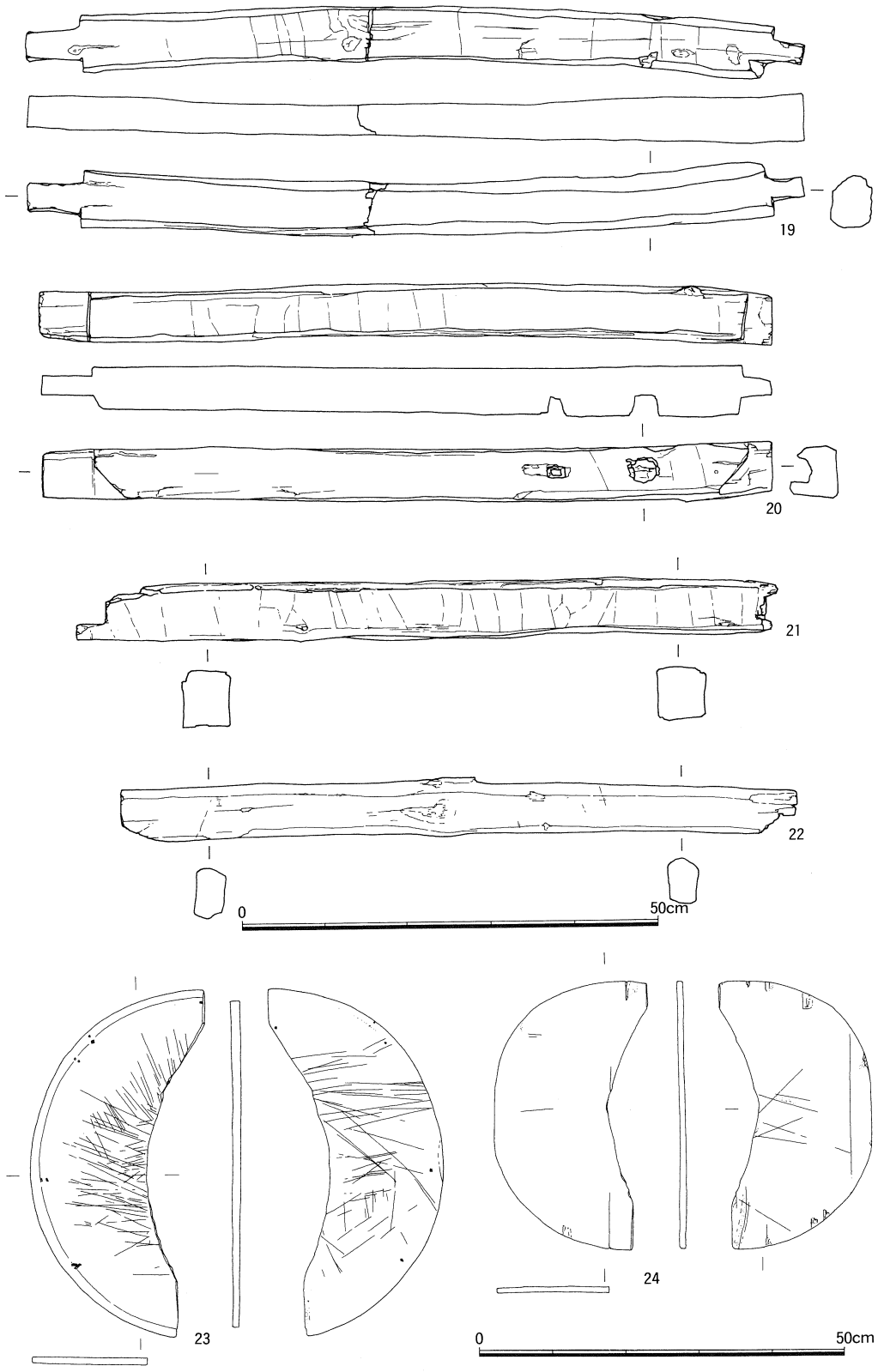
第135図　ＳＥ－41出土木製品（１）



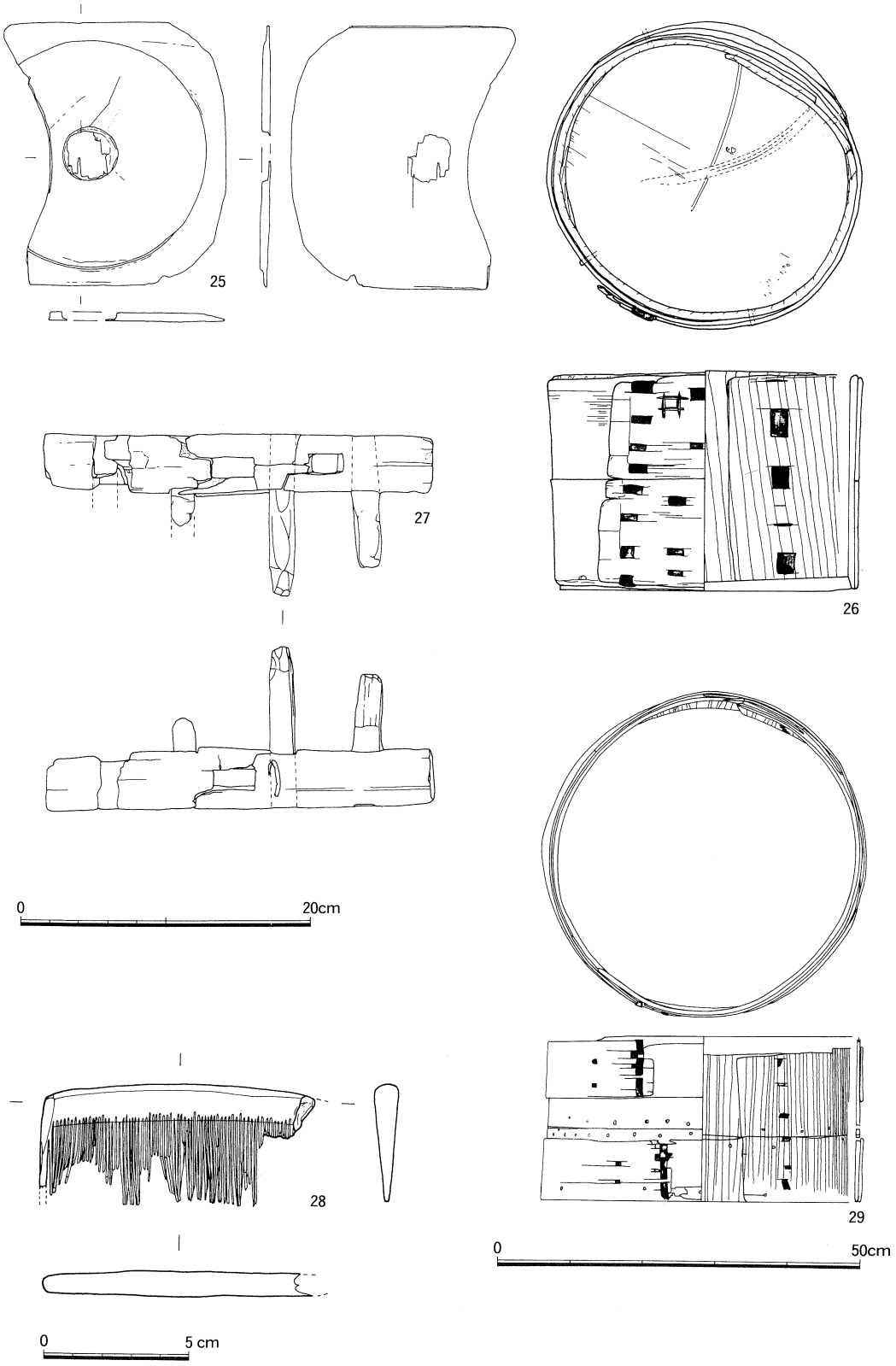
第136図　ＳＥ－41出土木製品（２）



第137図　ＳＥ－42出土木製品（１）



第138図　ＳＥ－42出土木製品（２）



第139図　ＳＥ－42・43出土木製品

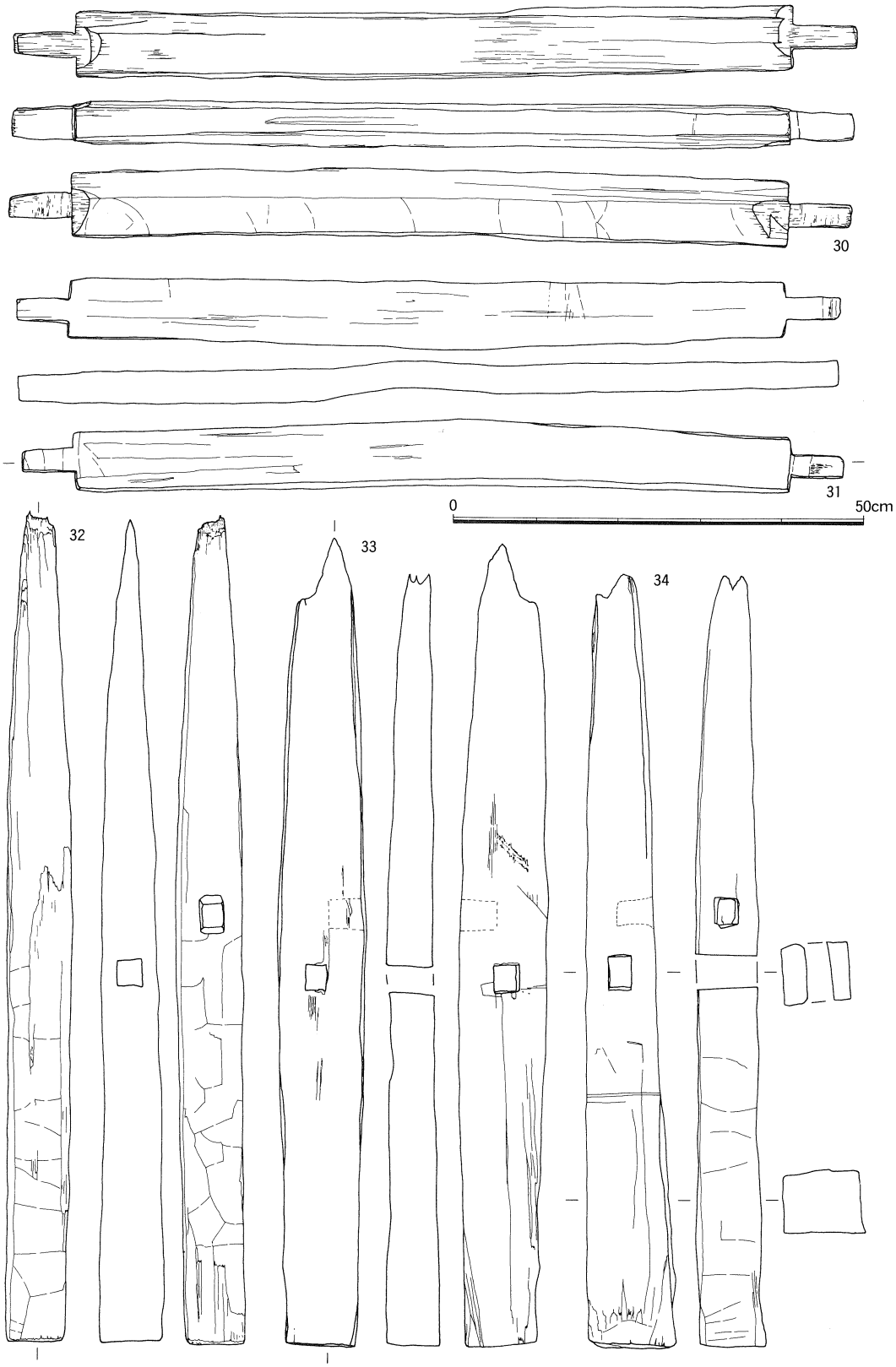
と側板の痕跡が残る。23は俎板として使用されており、両面に刃物傷が無数にみられる。25は隅丸方形に整形してある板材であるが、やはり湾曲状に削られている。周縁部から約3㎝内側で段状の円形の削りだしが施されており、中央に円形の穴が開けられている。穴は貫通しておらず、削り端が残っているので制作途中で転用されたものかも知れない。円形の削りだしは、そこに側板が取り付くことを意識して作られたと考えられるが、底板になるのか蓋になるのかは不明である。17は1重の側板に幅広の2枚のマワシから成り、側板はマワシに隠れて外側からは見えない。側板内面の刻み目は、縦方向と上部に1部に斜め方向のものが見られる。底部に木釘穴がある。18は1重の側板と幅広のマワシ1枚からなり、内側下部にも補強のためのマワシがある。外側のマワシと側板の間にはヘギが差し込まれている。側板内面の切り込みは縦方向である。26は1重の側板に幅広のマワシ2枚からなり側板はマワシに隠れて外側からは見えない。側板内面の刻み目は、やや斜め方向で、底板は厚みのある円形板を側板の内側にはめこむいわゆる落とし底である。上段のマワシの綴じ皮の横に「＃（井？）」の記号が刻まれている。17・18・26を組み合わせて3段からなる水溜として使用されており、26が最下段であった。19・20は両端を凸形に、21は凹形に作られている。22は片側のみを削り、幅を狭くしている。これらの角材は、井戸側の横桟に使用されていた。

ＳＥ－43（第139・140図）

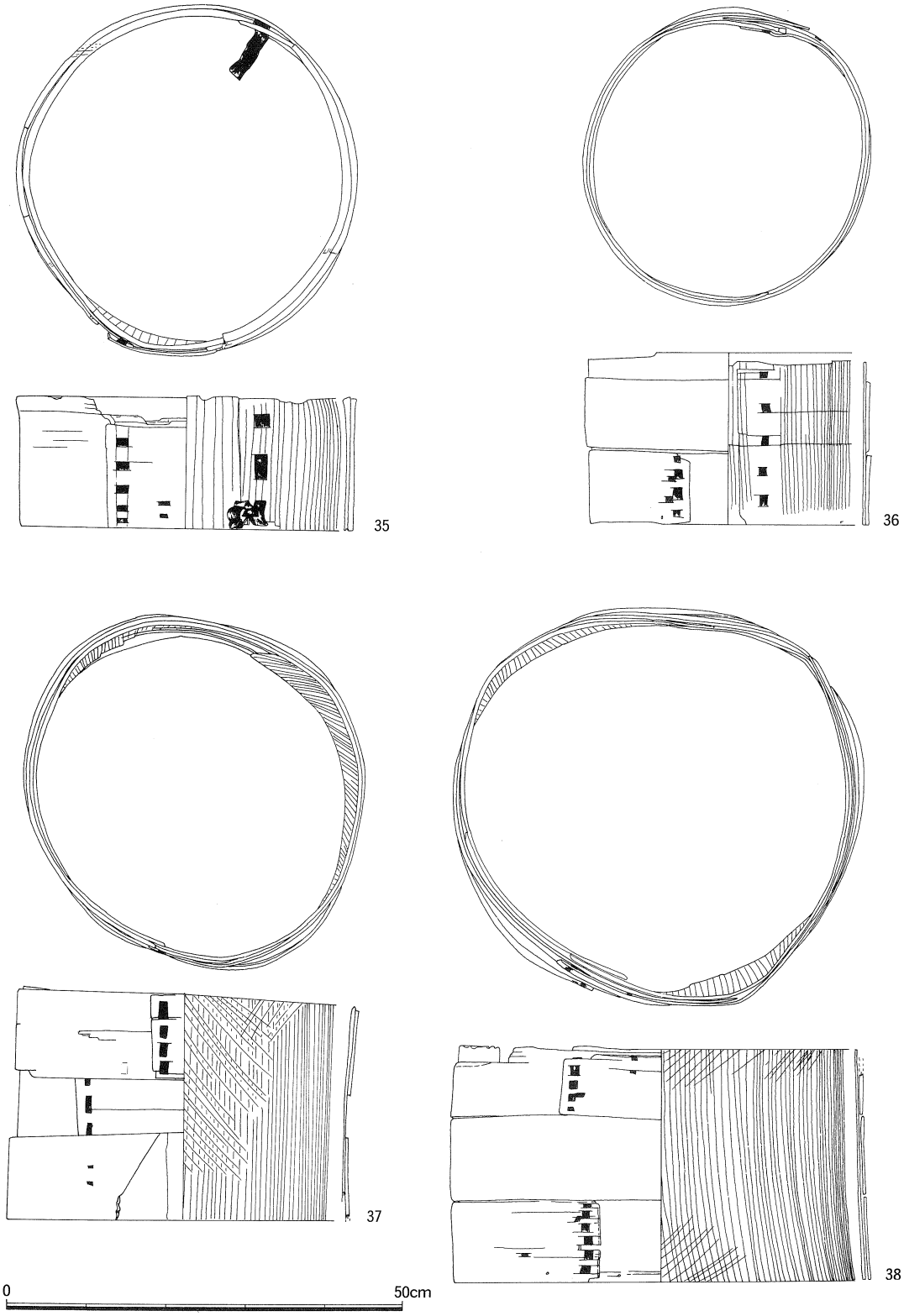
用途不明品（27）、櫛（28）、曲物側板（29）、角材（30～34）などが出土しているが、この他に図示はしていないが、井戸側の縦板に使用されていた板材が出土している。28は横櫛で、歯の間隔が密なので梳櫛であろう。29は水溜に使用されていたもので、1重の側板に上下2枚のマワシで構成され、側板内面の刻み目は、縦方向である。上下約半分に破損したらしく、修繕のためと考えられる綴じ穴がそれぞれ中間に残っている。30・31は井戸側の横桟に使用されていたもので、両端を凸状に作り出している。32～34は井戸側の隅柱に使用されていたもので、直角になる2面に横桟を差し込む穴がが開けられている。27は円柱状の材に7ヶ所の長方形の穴があり、中央の穴が最も大きく材を貫通し、両側にも穴がある。残り4ヶ所は、中央の穴に対して角度がほぼ直角で開けられており、そのうち3ヶ所には先端を削ってやや尖らせた棒状の材が差し込まれている。中央の穴に柄を差し込み、両側の穴は柄を支える材のためのものとすれば、形状は柄振に類似している。

ＳＥ－44（第141図）

井戸の水溜に使用されていた曲物側板（35～38）が出土している。35は2重の側板で、



第140図　ＳＥ－43出土木製品



第141図　ＳＥ－44出土木製品

内面の刻み目は縦方向である。36は１重の側板に２枚のマワシから成り、内面の刻み目は縦方向である。37は１重の側板に２枚のマワシから成り、内面の刻み目は縦方向と斜め方向がある。38も同様で、縦方向の刻み目の他に、上下に１部斜め方向の刻み目が認められる。

ＳＥ－46（第142図）

井戸の水溜に使用されていた曲物側板（39～41）が出土している。39は１重の側板に１枚のマワシが付き、下部に木釘穴が残る。内面の刻み目は縦方向である。40は１重の側板で上部に幅広の、下部に細めのマワシが付けられている。刻み目は縦方向である。41は側板のみで、下部に木釘穴が残り、内面の刻み目は縦方向と間隔の広い斜め方向のものが施される。

ＳＫ－98（第142図）

井戸の水溜に使用されていた曲物側板（42・43）が出土している。42は１重の側板をほとんど隠すように幅広の２枚のマワシが上下に付き、内面の刻み目は縦方向と１部に斜め方向が見られる。43は１重の側板をほとんど隠すように３枚のマワシが付き、内面の刻み目は縦方向と斜め方向のものが見られる。

第３節　Ｌ区の出土木製品

ＳＲ－02（第143図）

杭（44）と用途不明品（45）が出土している。44は護岸用に打ち込まれていた杭で、他に10数本出土しているが、どれも遺存状況は悪い。尖端部に加工の跡が認められる。45は一木製で、鋏状を呈し、先端はかなり鋭く尖っている。

ＳＥ－23（第143図）

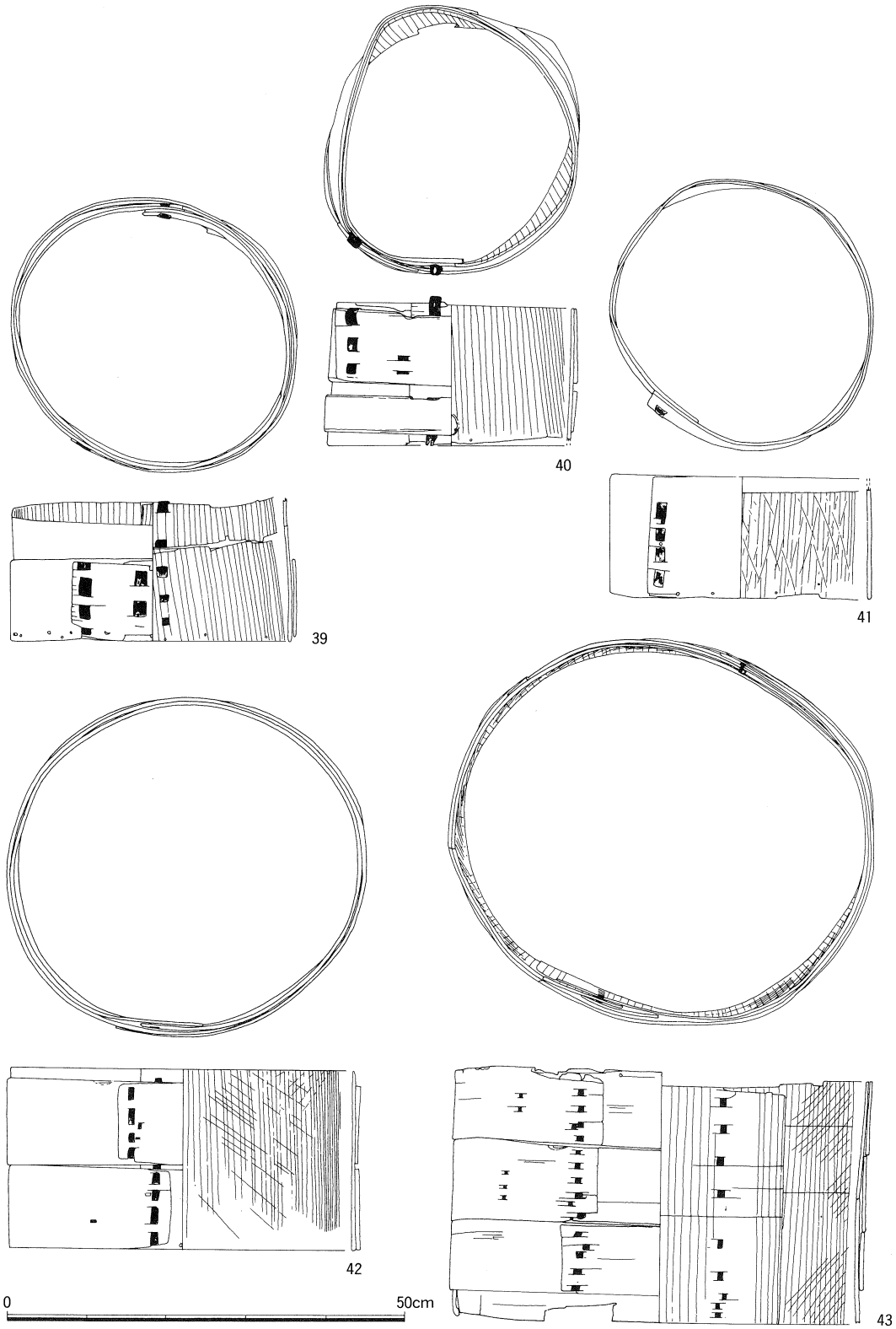
井戸の水溜に使用されていた曲物側板（46）が出土している。１重の側板に２枚のマワシが付き、ヘギを４ヶ所に差し込んでいる。内面の刻み目は縦方向であるが、上部と下部の１部に斜め方向のものが見られる。

ＳＥ－24（第143図）

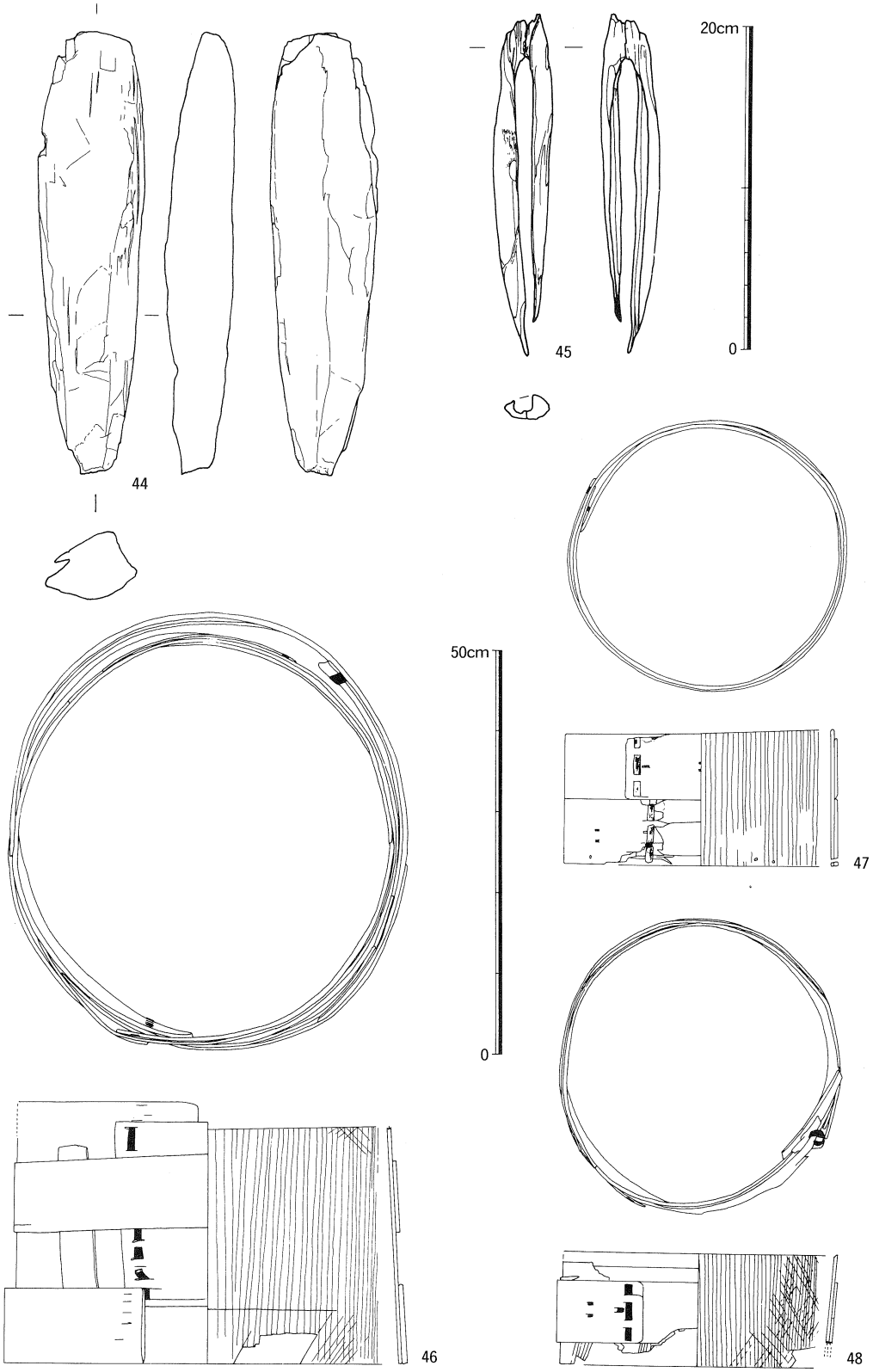
井戸の水溜に使用されていた曲物側板（47・48）が出土している。遺構内での出土位置関係は、47が上段で48が下段で使用されていた。47は１重の側板に２枚のマワシが付き、内面の刻み目は縦方向である。48は１重の側板に１枚のマワシが付き、内面の刻み目は縦方向と斜め方向のものが見られる。

ＳＥ－30（第144図）

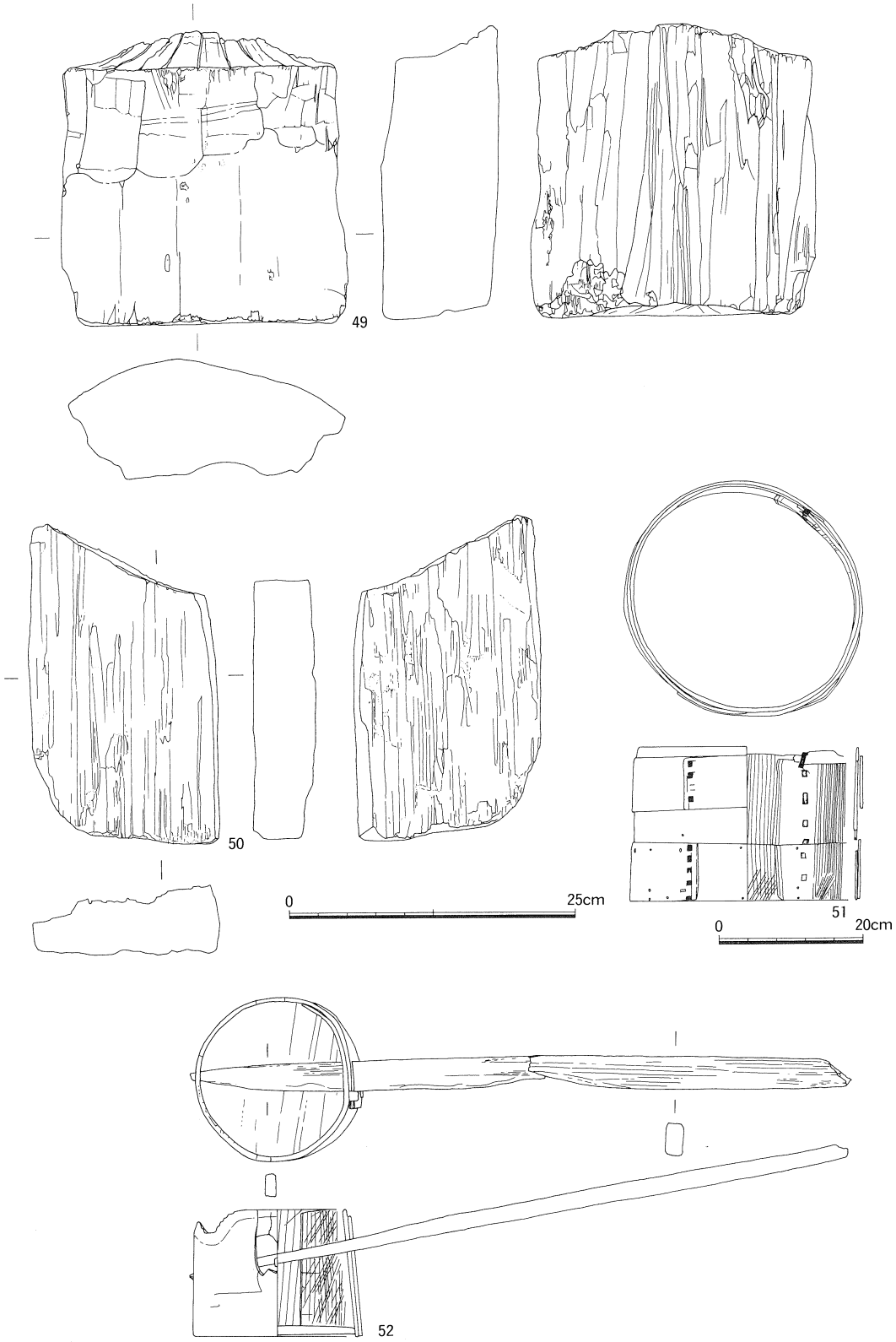
井戸の水溜に使用されていた曲物側板（51）が出土している。１重の側板に２枚のマワ



第142図　ＳＥ－46、ＳＫ－98出土木製品



第143図　ＳＲ－02、ＳＥ－23・24出土木製品



第144図　ＳＫ－61・68、ＳＥ－30出土木製品

シが付いている。下段のマワシには側板まで貫通する木釘穴がみられる。内面の刻み目は縦方向が主であるが、下部に斜め方向のものが見られる。

ＳＫ－61（第144図）

木製挽き臼（49・50）が出土している。49・50は後述するＳＰ－1847出土（54）とＳＰ－2108出土（53）と同一個体である。これらを合わせると上部が凸状の円柱状を呈し、上部中心から外へ放射状に溝が彫られており、これに凹状のものを上に被せ回転させて使用したのであろう。礎板に使用されていた。

ＳＫ－68（第144図）

柄杓（52）が出土している。小型の曲物に柄を差し込んであり、柄の中央部、ちょうど握り部分にあたるところは、使用によるものか、擦り減りへこんでいる。

ＳＰ－2108（第145図）

礎板に使用されていた木製挽き臼（53）が出土している。ＳＫ－61出土（49・50）ＳＰ－1847出土（54）と同一個体である。

ＳＰ－1847（第145図）

礎板に使用されていた木製挽き臼（54）が出土している。ＳＫ－61出土（49・50）ＳＰ－2108出土（53）と同一個体である。

ＳＰ－2230（第145図）

柱根（55）が出土している。円柱形で、底部に加工痕が認められる。

ＳＰ－1904（第146図）

柱根（56）が出土している。面取りをされた角材で、枘穴と推定される３方向からの穴が開けられていたようで、何らかの構築部材を転用していると考えられる。柱根ではなく礎板として使用されていた可能性もある。

ＳＰ－1714（第146図）

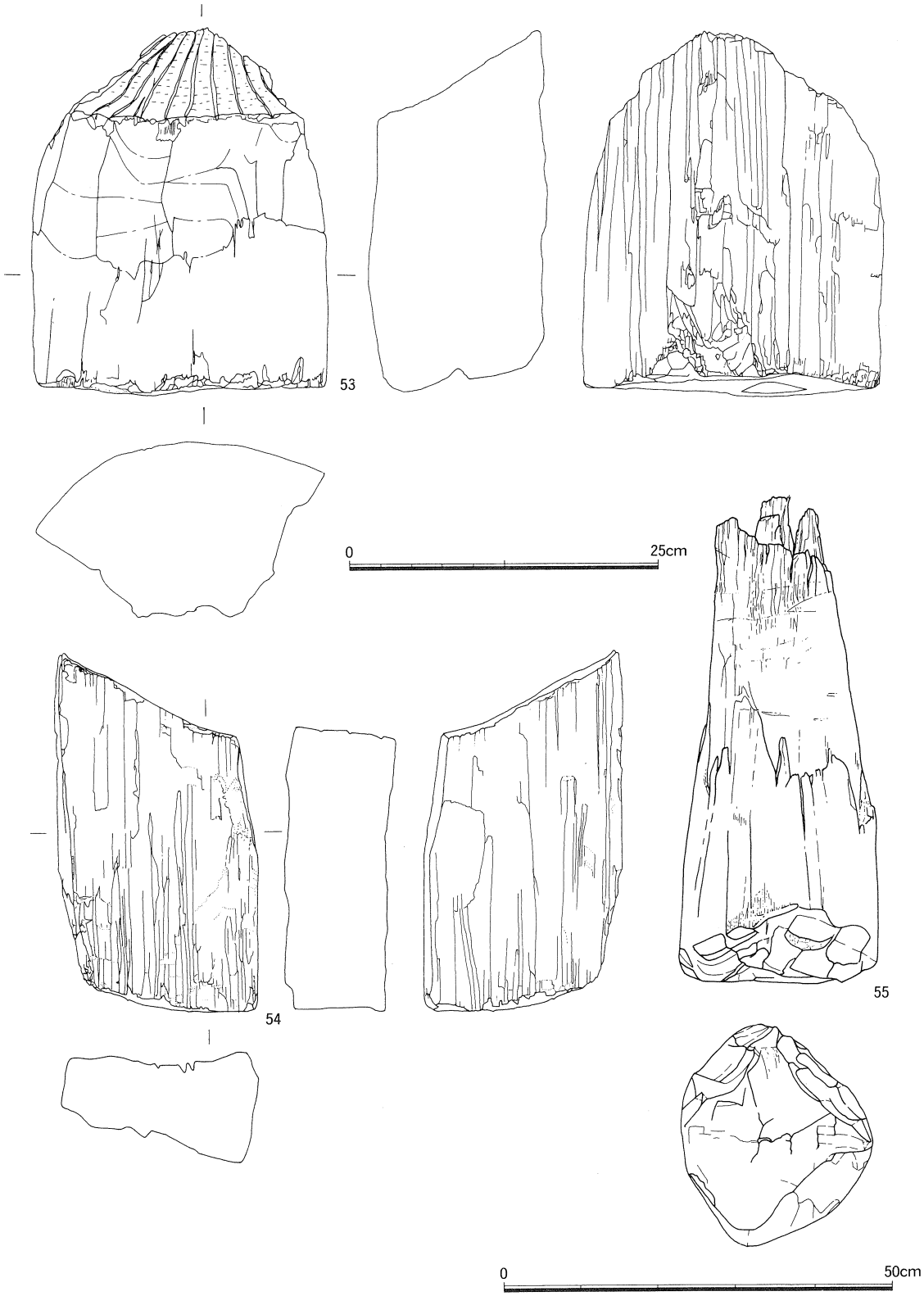
柱根（57）が出土している。遺存状態は悪いが面取りをされた角材で、枘穴と推定される穴が開けられていたようで、何らかの構築部材を転用していると考えられる。柱根ではなく礎板として使用されていた可能性もある。

ＳＰ－2164（第146図）

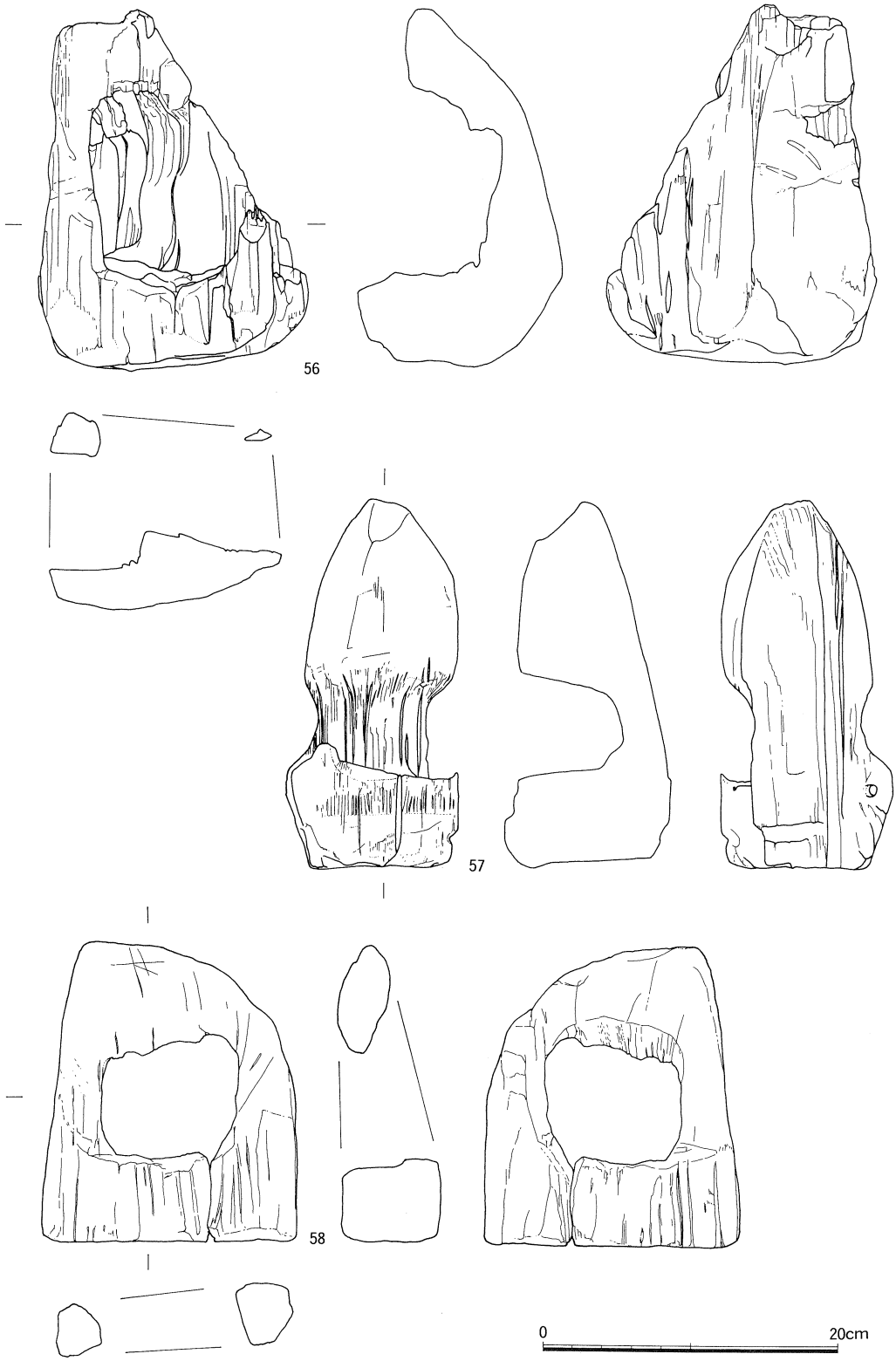
礎板に使用されていた鼻繰（58）が出土している。

ＳＰ－2173（第147図）

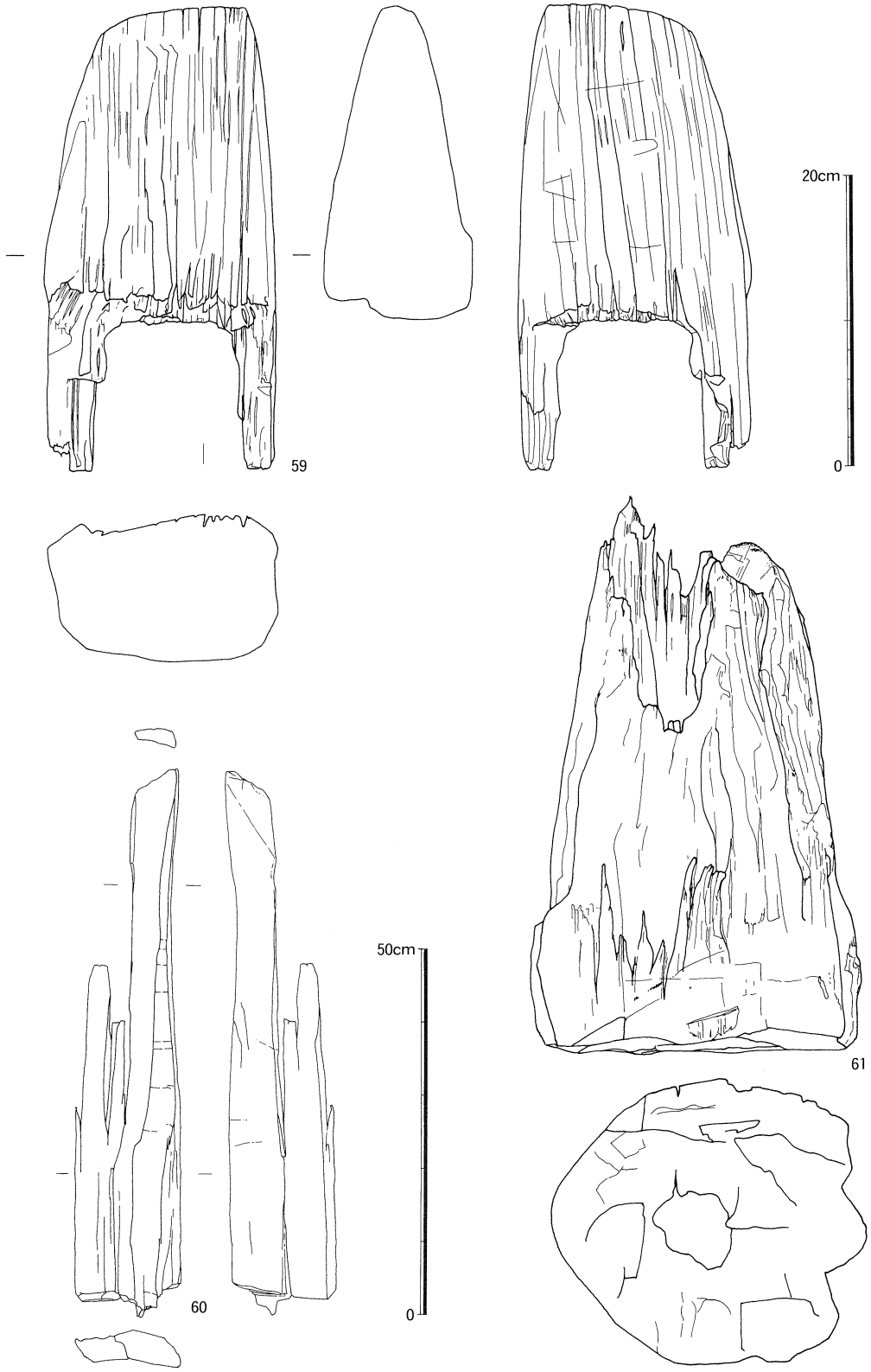
柱根（59）が出土している。面取りをされた角材で、枘穴と推定される穴が開けられて



第145図　ＳＰ－1847・2108・2130出土木製品



第146図　ＳＰ－1714・1904・2164出土木製品



第147図　ＳＰ－2004・2173・2214出土木製品

いたようで、何らかの構築部材を転用していると考えられる。柱根ではなく礎板として使用されていた可能性もある。

ＳＰ－2004（第147図）

礎板に使用されていた板材（60）が出土している。表面に手斧による加工痕が認められる。

ＳＰ－2214（第147図）

柱根（61）が出土している。円柱形で底部を平坦にしており、加工痕が認められる。

ＳＰ－2084（第148図）

柱根（62）が出土している。枘穴が開けられていたようで、底部に斧状工具による加工痕が認められる。

ＳＰ－1905（第148図）

礎板に使用されていた板材（63・64）が出土している。63は両面、木口とも丁寧に加工が施されている。64は原木の周縁部を利用しており、板目取りである。

ＳＫ－84（第149・150図）

杭（65～75、78・79）、棒状木製品（76・77）、木樋状木製品（80）が出土している。杭は自然木の先端を加工しただけで、樹皮が残存している。76・77は遺存状況が悪く、加工痕は認められないが、１部樹皮が残る。80も遺存状況は悪く、丸木の外縁部を刳り貫いているようだが、加工痕は認められなかった。

ＳＪ－01（第151図）

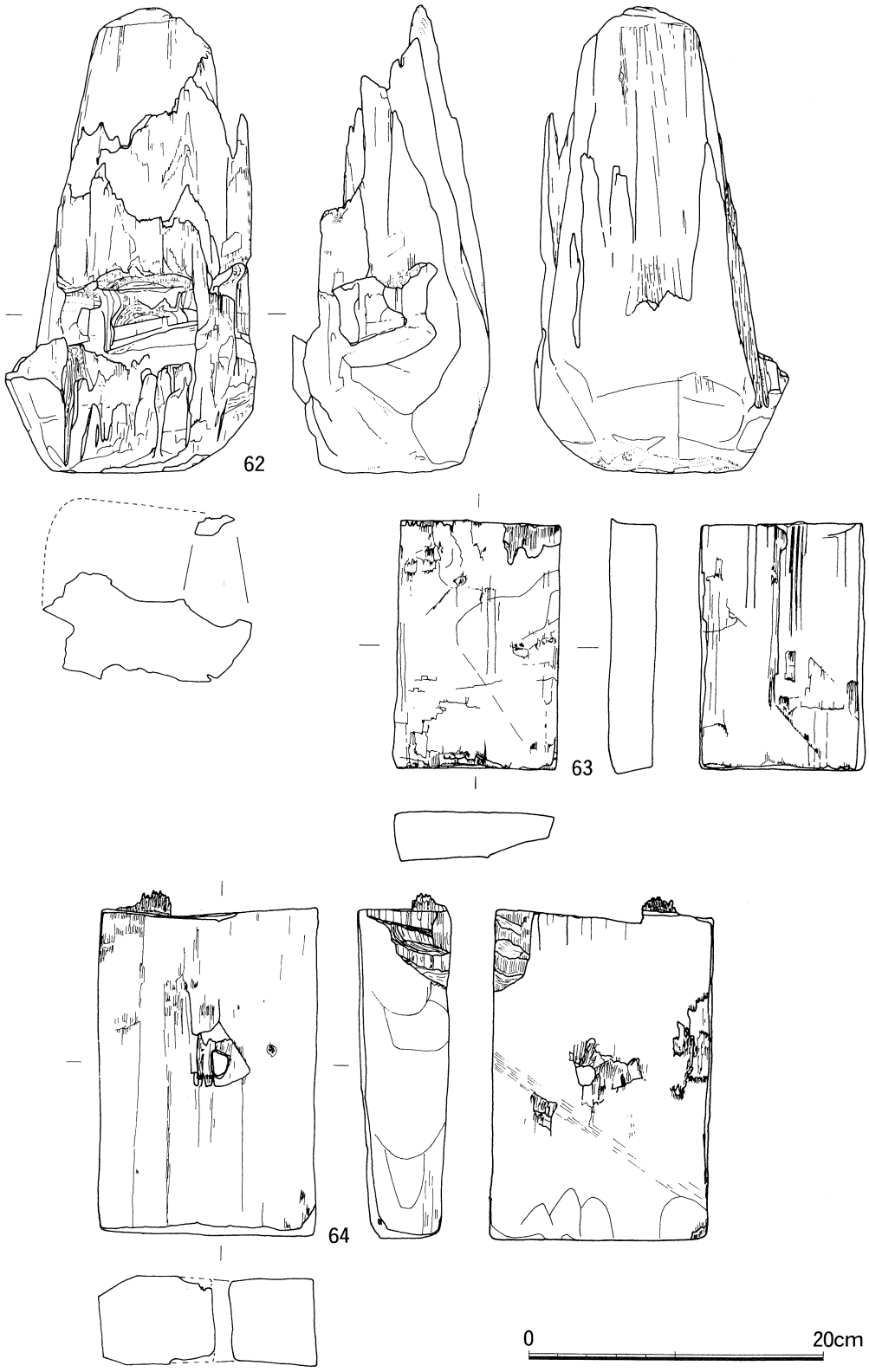
板材（81・83）、杭（82・84）が出土している。81は薄くて遺存状況が非常に悪く、加工痕は認められなかった。83も遺存状況は悪いが、中央部に楕円形の穴がある。杭は先端部に加工痕が認められ、84には樹皮が残る。

第４節　Ｍ・Ｎ区の出土木製品

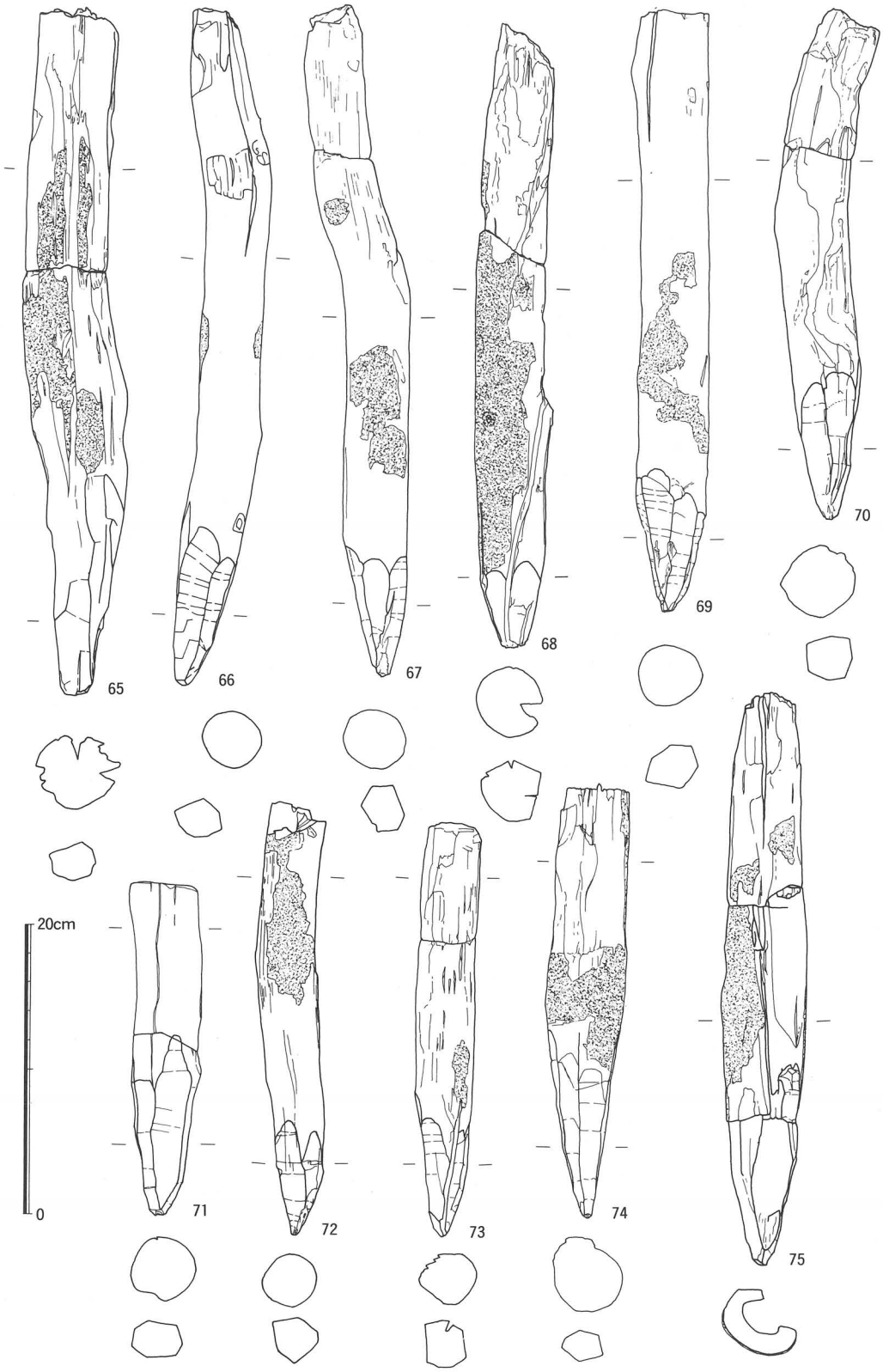
ＳＴ－01（第152・153図）

ＳＴ－01は池と考えられる落ち込み状の遺構で、水性堆積の砂やシルトの混じる粘質土層から多くの木質遺物が出土しており、遺存状況も良く、その種類も多彩である。主な出土遺物には下駄（85・92）、編具（86）、球状木製品（87～89）、毬（90・91）、栓（93）、折敷（94）、曲物底板（95）、漆器椀底部（96）、柄杓の柄（97・98）などがある。

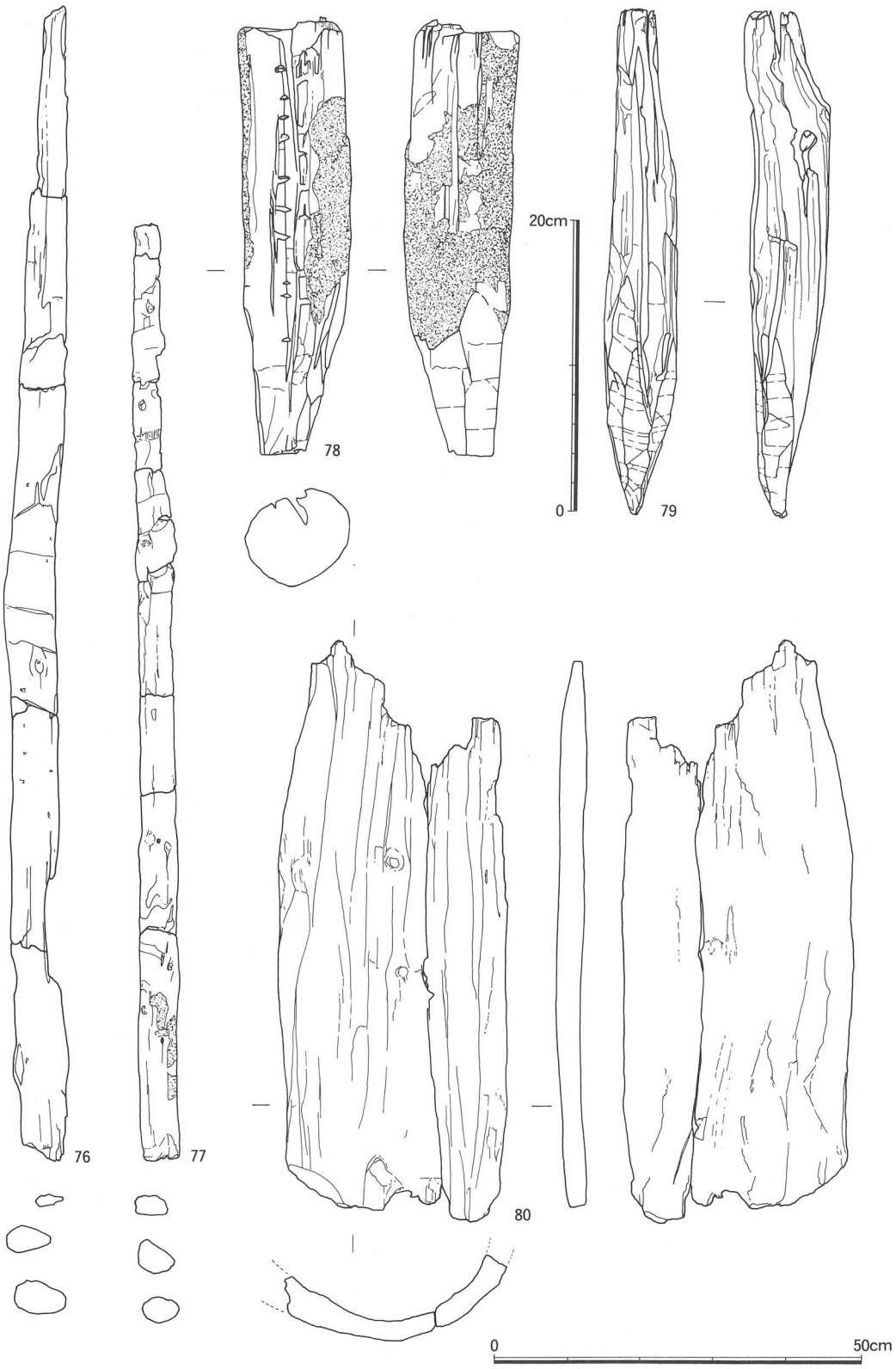
85・92は連歯下駄である。いづれも台は楕円形を呈しており、92の台表側の爪先部分、足指のあたるところは磨耗により窪んでいる。86は俗にツチノコと呼ばれる菰などを編み上げる際に使用される錘である。87～89は木を球状に削り加工したものである。表面は丁



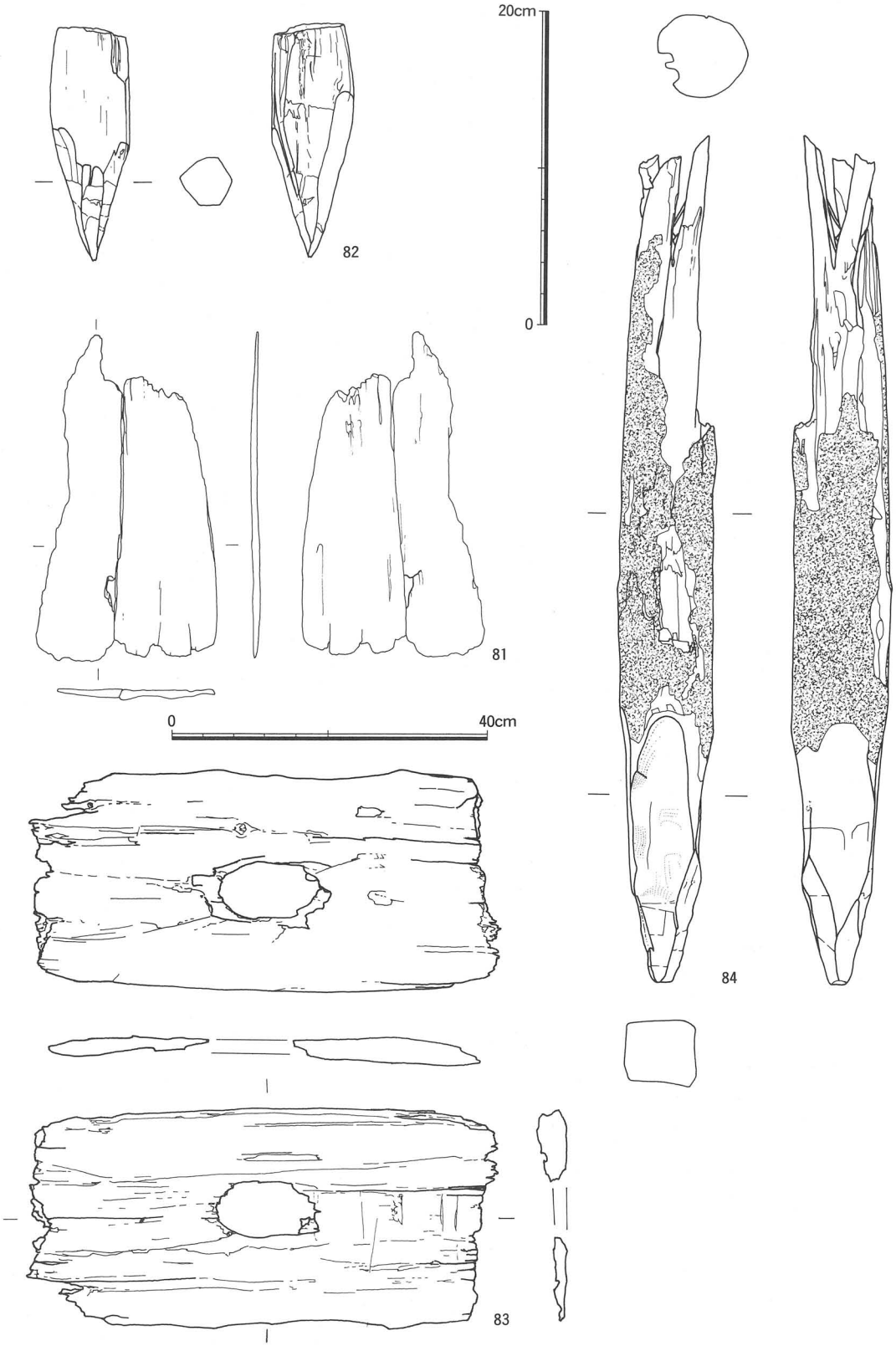
第148図　ＳＰ－1905・2084出土木製品



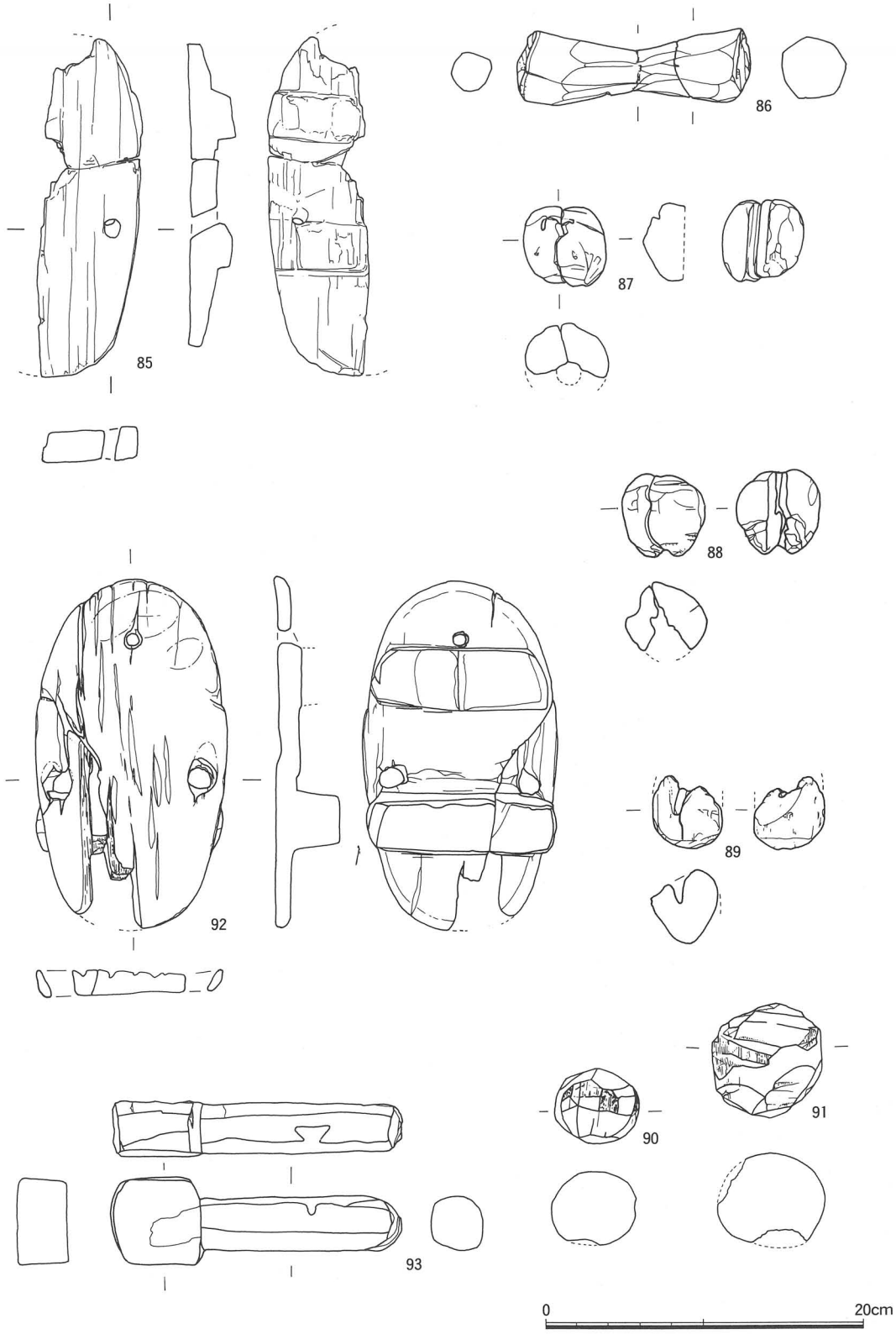
第149図　ＳＫ－84出土木製品（１）



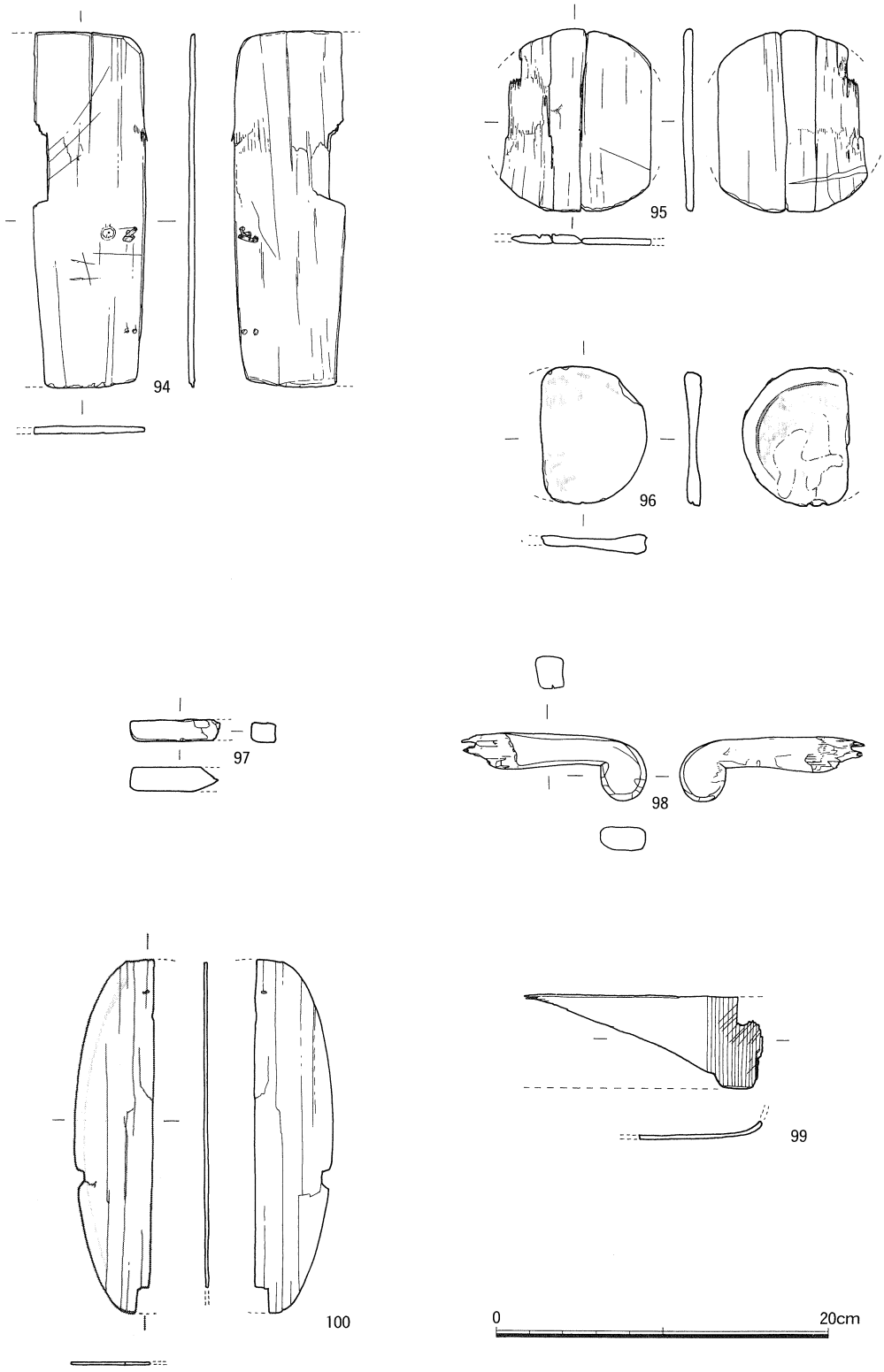
第150図　ＳＫ－84出土木製品（２）



第151図　ＳＪ－01出土木製品



第152図　ＳＴ－01出土木製品



第153図　ＳＴ－01・05出土木製品

寧に仕上げられており滑らかで、いづれも中央に径約８㎜の穴が貫通していた痕跡が認められる。使用目的は不明である。90・91は球状を呈するが、削りが粗く穴はない。当時の遊戯の一種である「打毬」に使用される毬である。93は一木製で、棒状の穴へ差し込む部分と角形の握り部分からなる。94は破片であるが方形を呈しており、縁には樺皮が残る。95は小型の曲物の底板と考えられる。大きさから推定すると、柄杓の筒部分に使用されていたものか。96は遺存状態が悪く表面はかなり傷んでいるが、高台の削り出しと黒漆が僅かに認められる。97・98は同一個体と考えられ、97は先端部、98が持ち手の方で、端は雲形に作られている。

ＳＴ－05（第153図）

曲物側板（99）、草履状木製品（100）が出土している。99は方形の曲物側板の破片で、屈曲部にのみ刻み目が施されているのがわかる。100は「金剛板」と呼ばれている当時の履物の破片である。左右対称の薄板を合わせて、これを芯板にして藁を編んで緒を付ける。外湾部に緒を付けるための抉り込みがあり、また芯板どうしを繋ぎ合わせるための穴が開いている。

ＳＫ－06（第154図）

井戸の水溜に使用されていた曲物側板（107）が出土している。１重の側板を隠すように幅広の２枚のマワシが上下に付いており、内面の刻み目は縦方向である。

ＳＫ－10（第154図）

杓子（104）が出土している。粗削りで加工痕がよく残り、未製品であろう。お玉の部分が小さく、欠損しているようである。

ＳＫ－14（第154図）

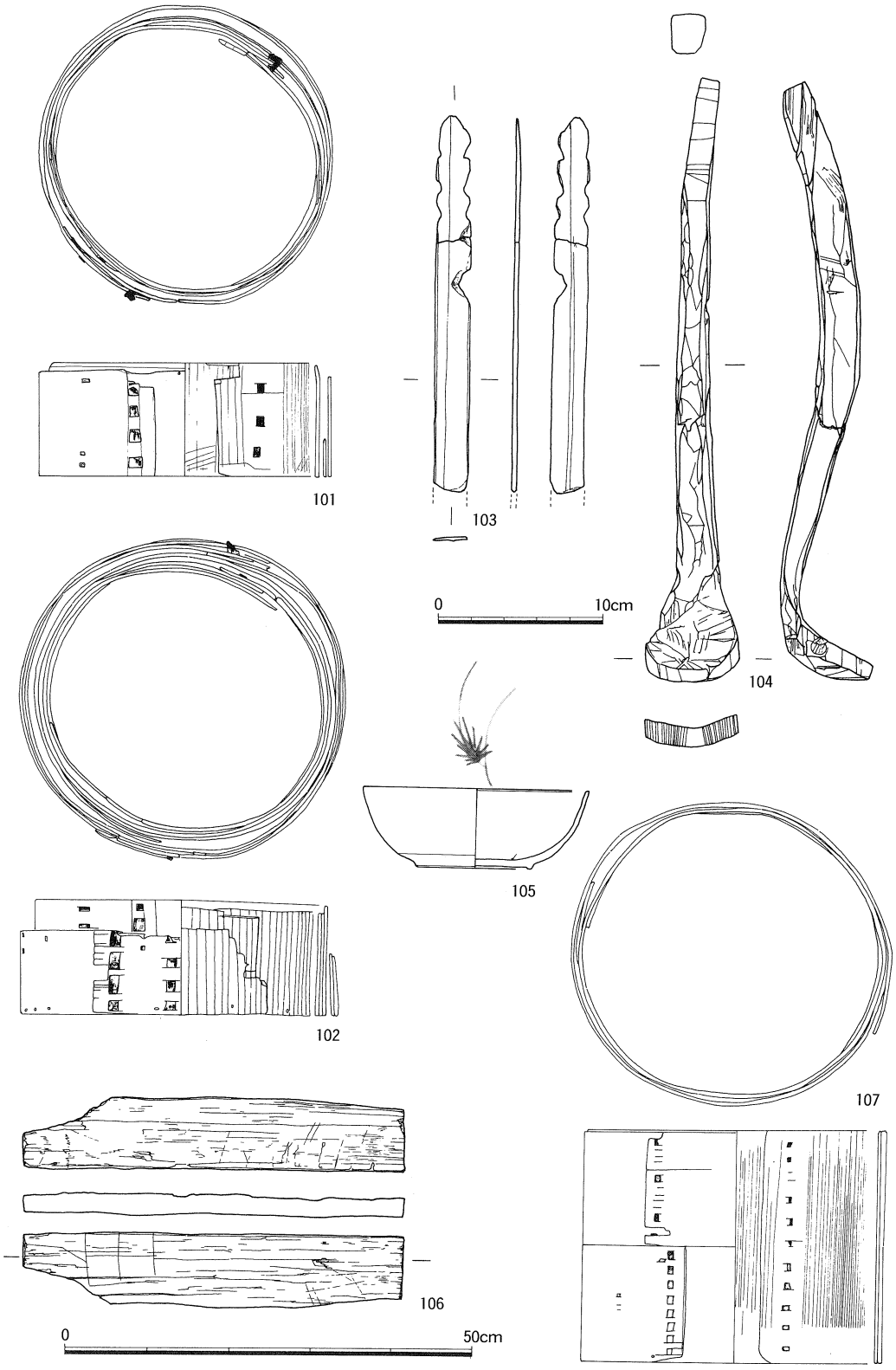
（103）は薄い板状で、左右対称に３箇所の抉り込みがあり、断面は両面の中央に僅かに稜が認められ菱形を呈する。１部に火を受けて焼け焦げた痕があるが、焦げ痕は片面のみである。用途は不明であるが、斎串か焦げ痕のあることから火鑽板の可能性もある。

ＳＫ－15（第154図）

井戸の水溜に使用されていた曲物側板（101・102）が出土している。101は２重の側板に１枚のマワシが付けられている。内面の刻み目は縦方向で、下部に部分的に斜め方向のものが認められる。

ＳＫ－40（第154図）

板材（106）が出土している。端を削って幅を細くしており、井戸側の隅柱の穴に差し



第154図　ＳＫ－06・10・14・15・40、ＳＤ－45出土木製品

込み、横桟として使用されたものである。

ＳＤ－45（第154図）

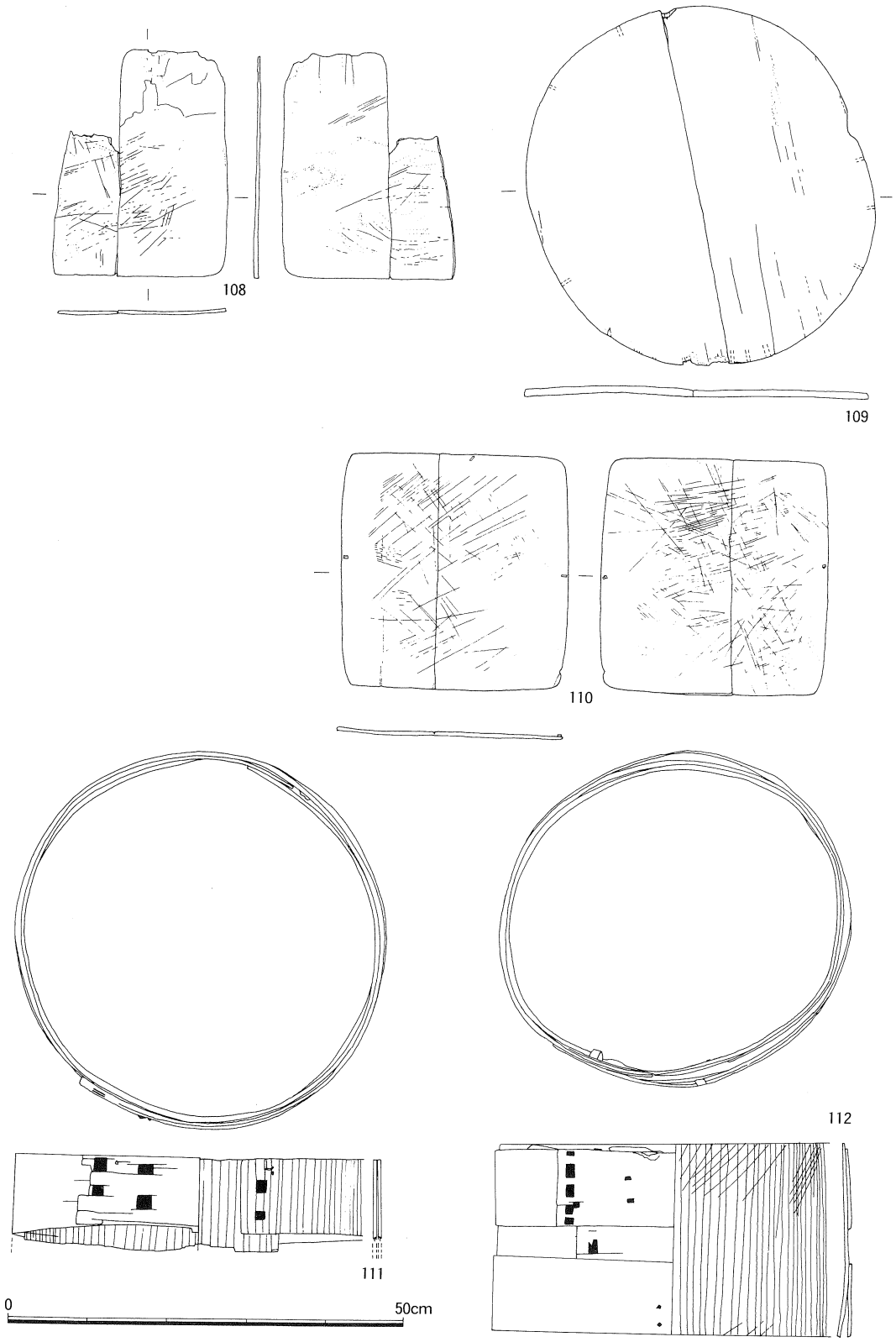
漆器椀（105）が出土している。低い高台を削り出し、全体に黒漆が塗られている。見込みには赤漆で笹文が描かれている。

ＳＥ－07（第155図）

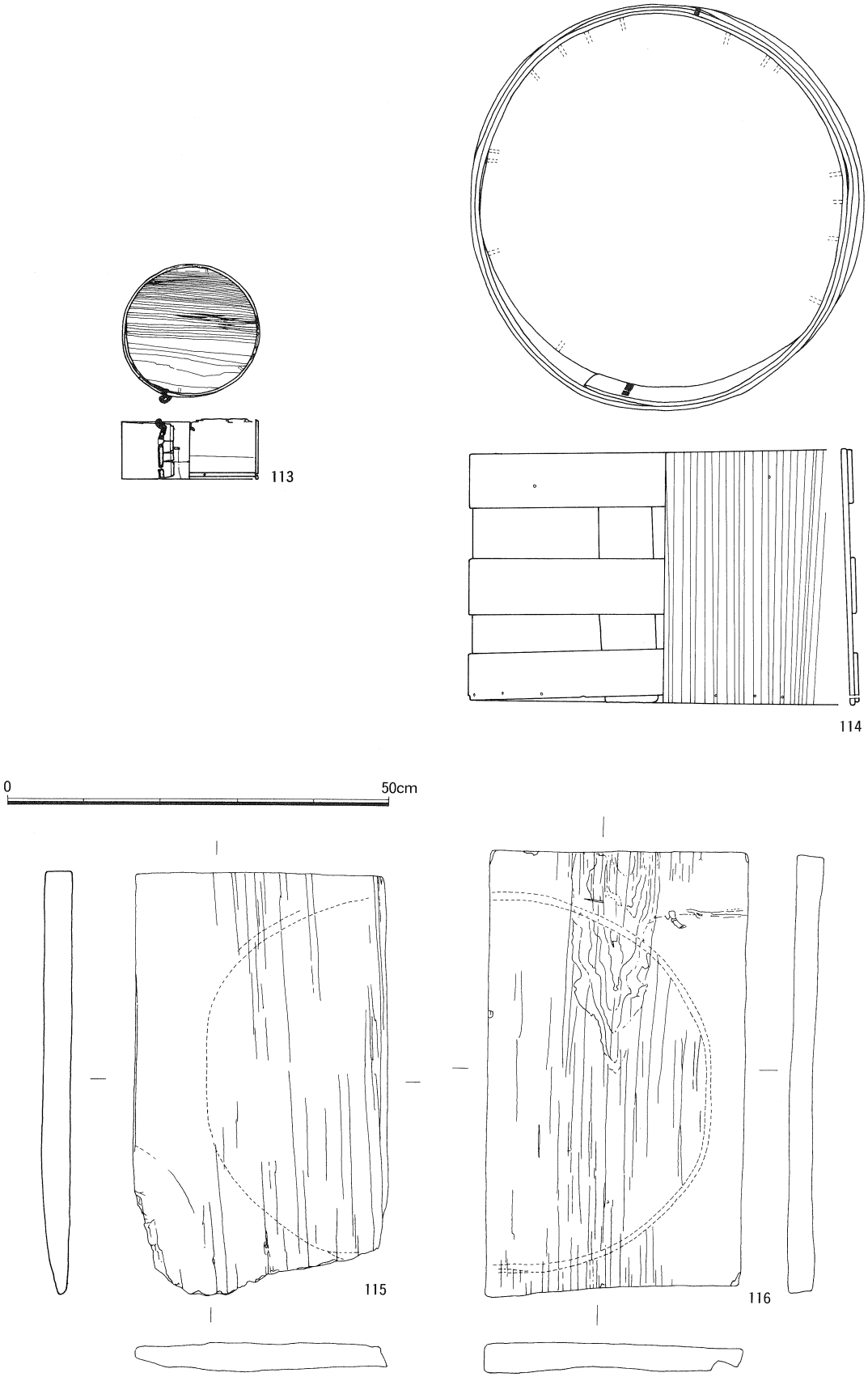
折敷（108・110）、曲物底板（109）、曲物側板（111・112）が出土している。108は欠損しているが110と同様に方形を呈すると考えられる。110には縁を固定する樺皮を通すための穴が、各辺の中央に４箇所認められる。108・110とも両面に多数の刃物傷が認められるので、俎板に転用されていたのであろう。109には側板に固定させるための木釘穴がある。111・112は組み合わされて、井戸の水溜に使用されていた。111は下半分が欠損しているが、112とほぼ同じ大きさのものであろう。１重の側板に１枚のマワシで、内面には縦方向の刻み目が認められる。112は１重の側板に上下に２枚のマワシが付く。内面の刻み目は縦方向で、上下の１部に斜め方向のものが認められる。

ＳＥ－11（第156～169図）

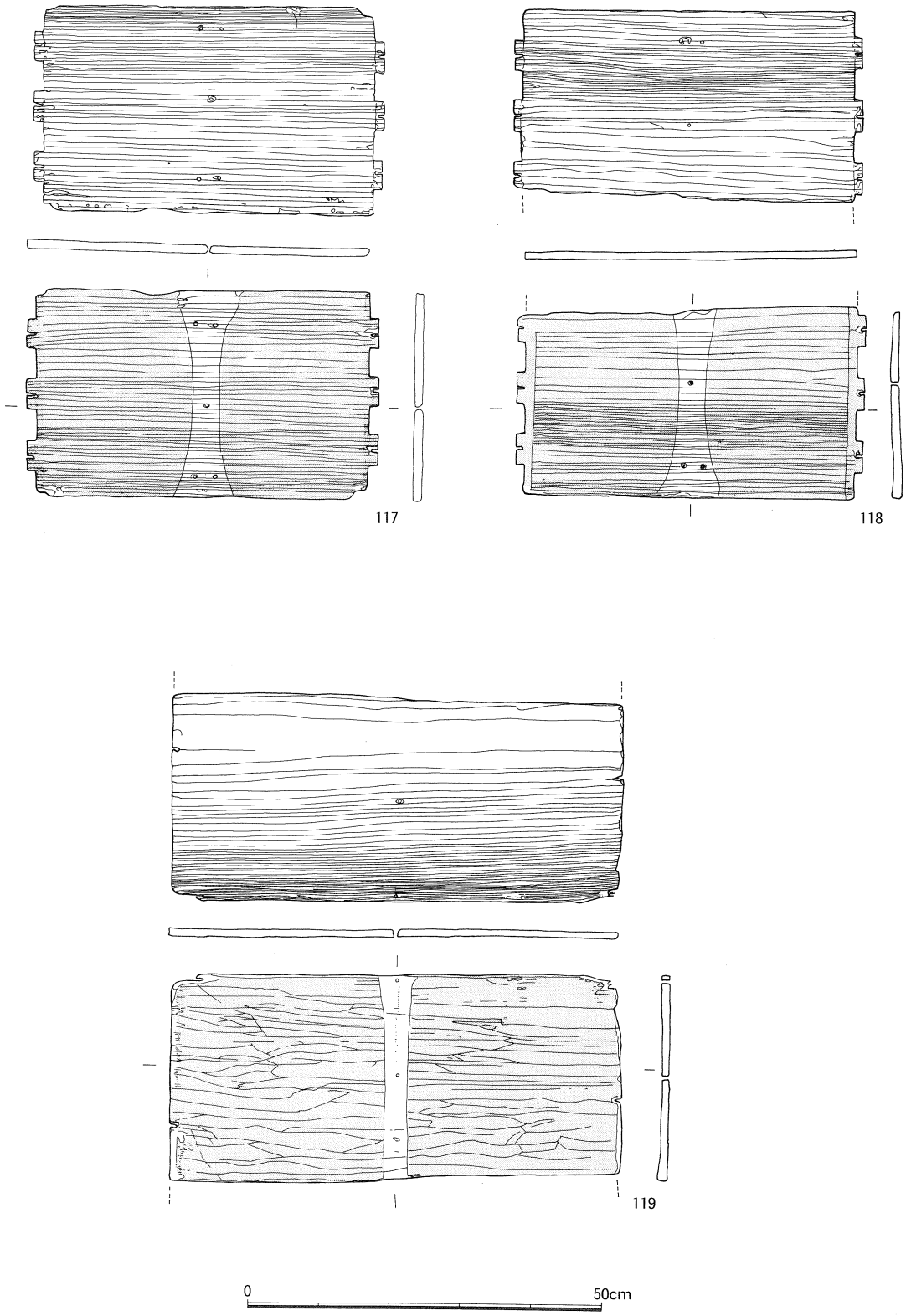
曲物容器（113）、曲物側板（114）、箱材（117～121）の他、井戸側の構築部材として板材、角材が出土している。113は小型の曲物で、底板が底面から約５㎜位、上げ底気味に付く。水溜内から出土しており、水汲み用の容器として使用されていたものと考えられる。114は水溜に使用されていたもので、１重の側板に３枚のマワシが付き、３枚のヘギが差し込まれていた。側板にマワシを固定させるための木釘穴があり、また側板の底部には、下段のマワシから側板を貫通する穴が約20箇所あり、元来は底板が付いていたものと推定される。箱材は側板４枚（117・118・120・121）が組まれた枠の状態で、底板（119）は取り外され、側板の横に立て掛けた状態で出土している。５枚を組み合わせると平面形が長方形の箱になる。側板は両端に組み合わせるため凹凸状に加工が施されており、釘穴が認められる。底板の側縁部にも釘穴が認められので、箱に組み合わせた場合、底板の上に側板が載る形状になる。側板、底板の外面には黒漆が塗られているが、短側板には撥形の、底板には帯状の、長側板には底板から続き舌状におわる、それぞれに漆のかからない木地の部分があり、そこには釘穴があるので、元々は別材が取り付けてあったことが推定される。側板の材は装飾的なものと考えられるが、底板の材は底板外面にある帯状の木地の部分が長側板のそれに続いており、釘で固定して底板が抜け落ちないための補強材であろう。このように底板に何らかの材が取り付けてあったとするならば、箱自体に脚がなければこ



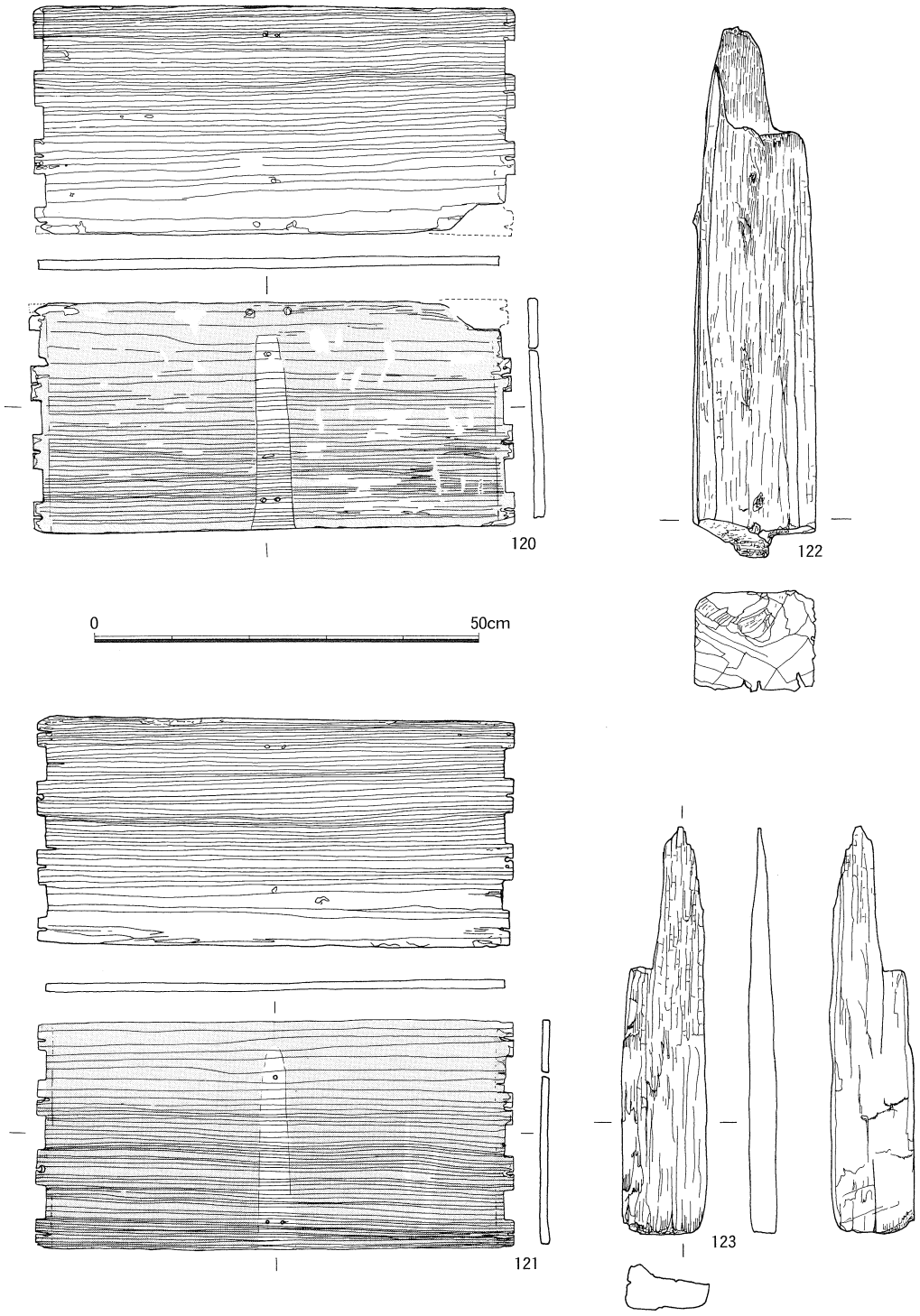
第155図　ＳＥ－07出土木製品



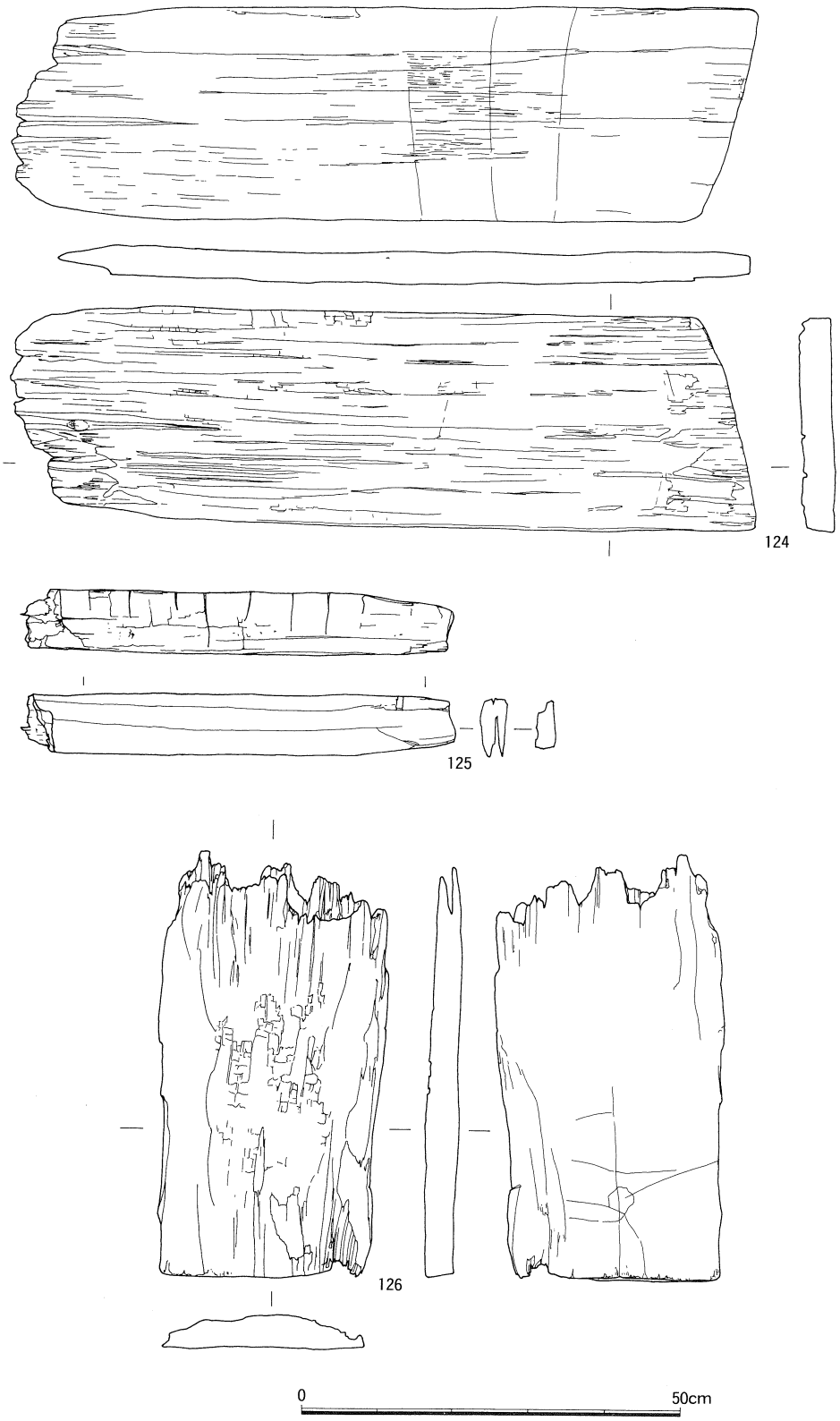
第156図　ＳＥ－11出土木製品（１）



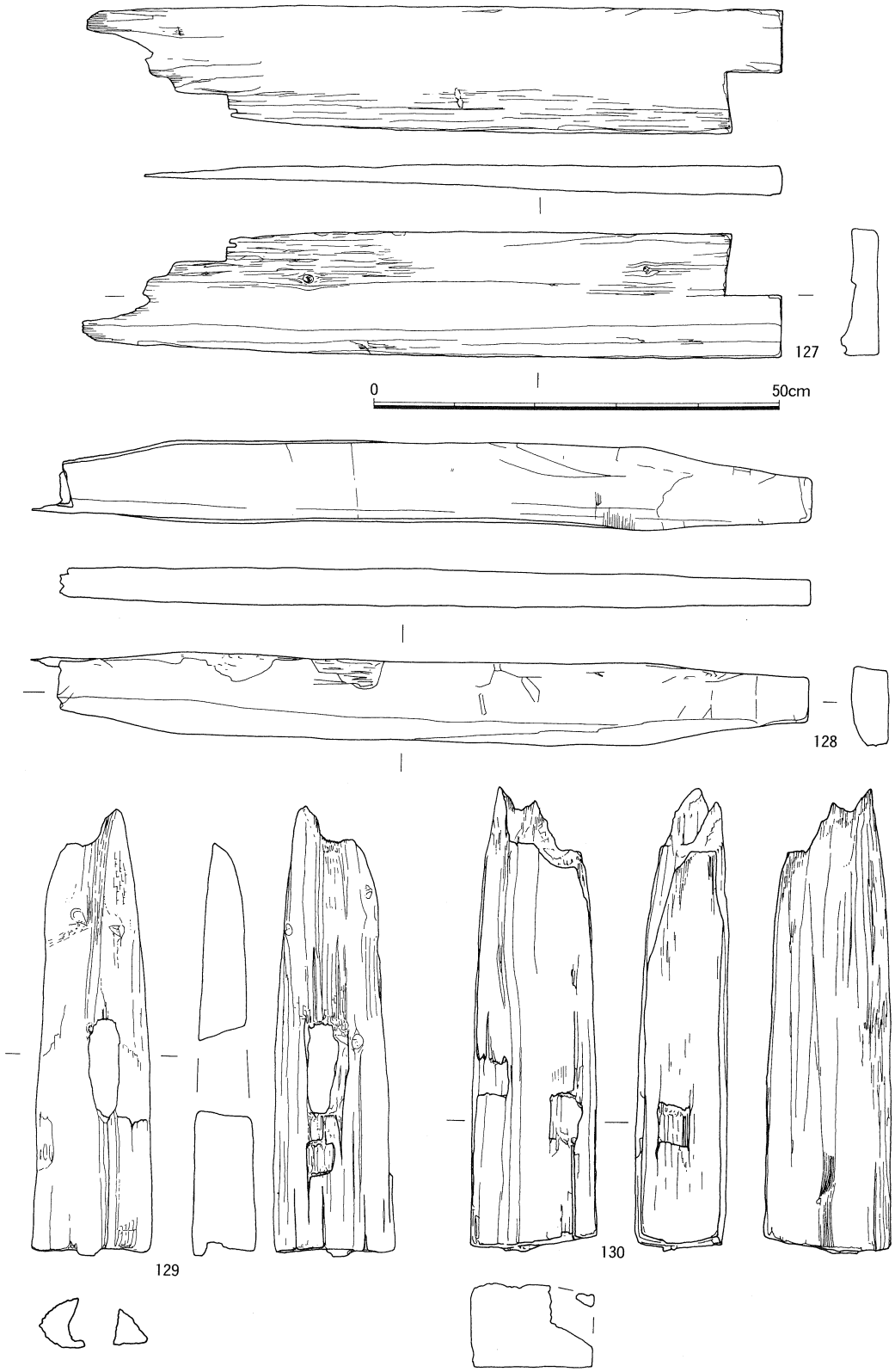
第157図　ＳＥ－11出土木製品（２）



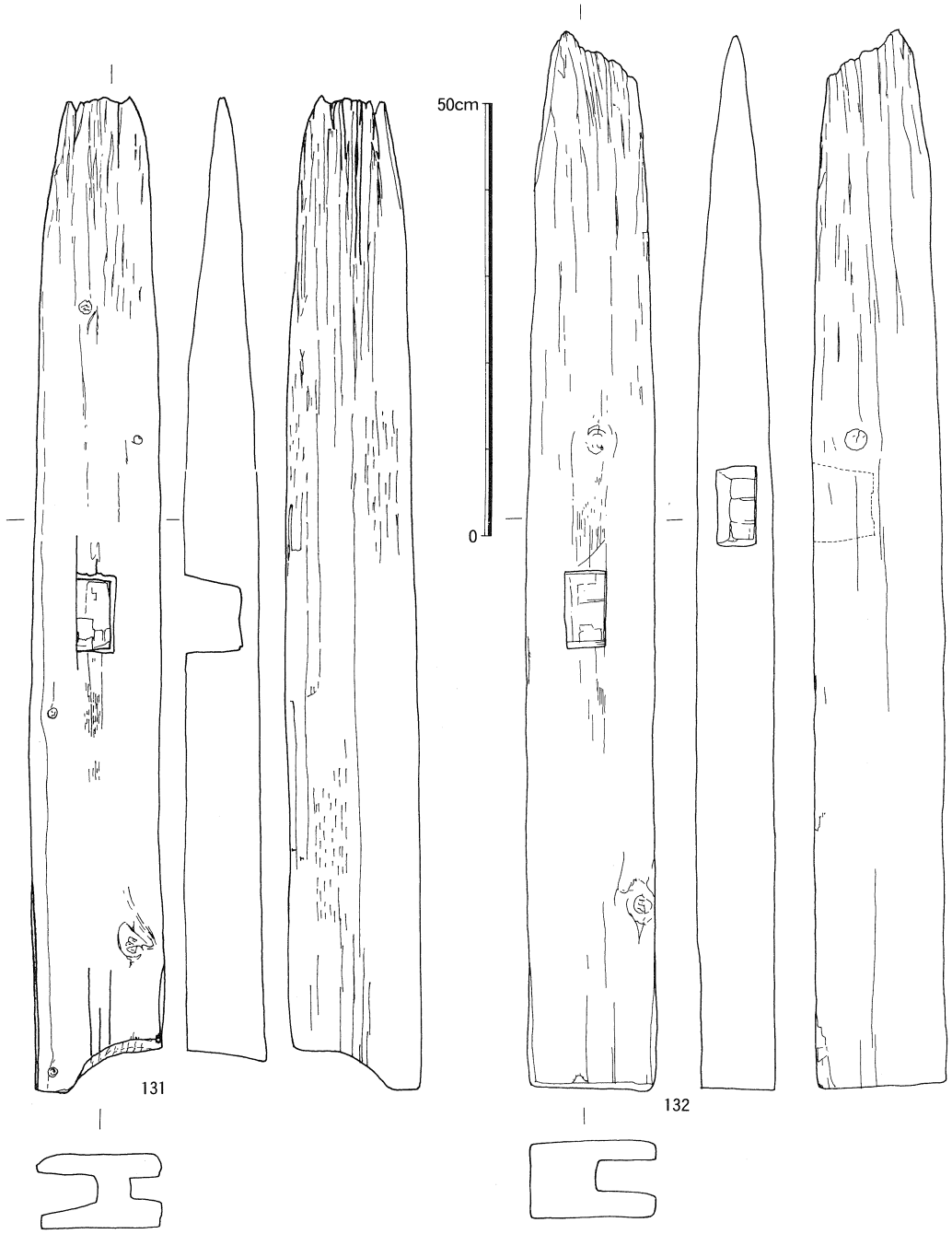
第158図　ＳＥ－11出土木製品（３）



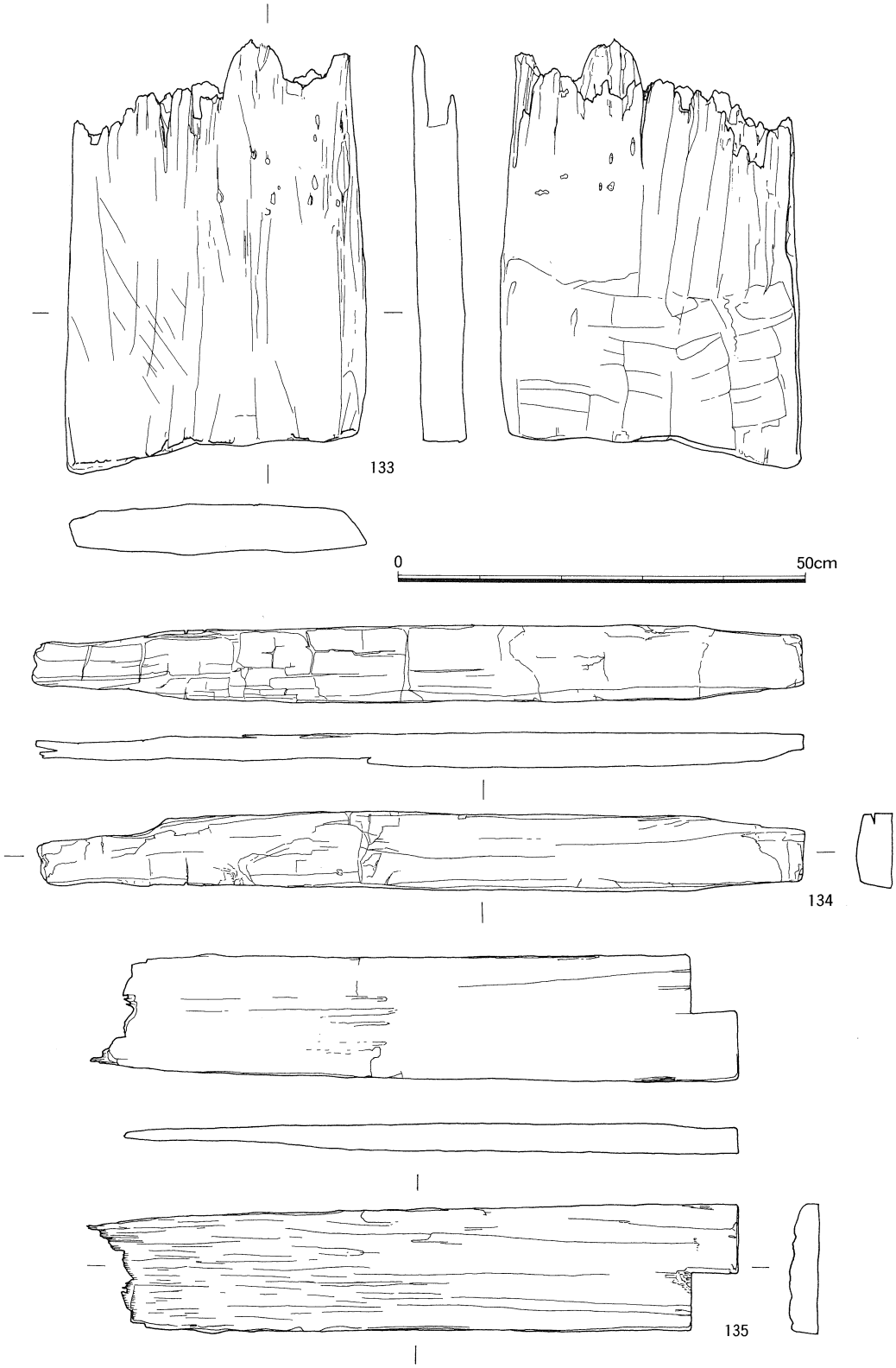
第159図　ＳＥ－11出土木製品（４）



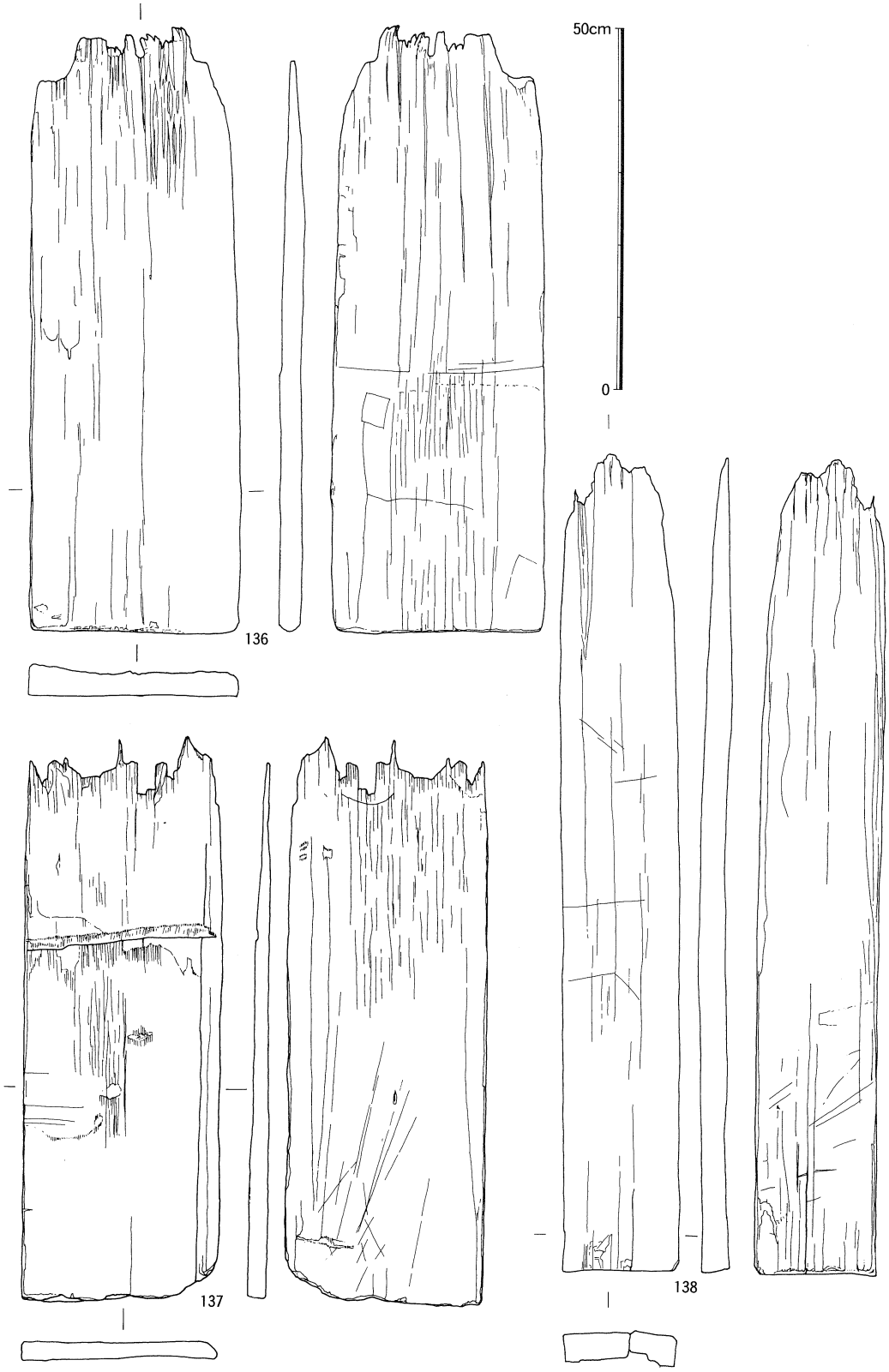
第160図　ＳＥ－11出土木製品（５）



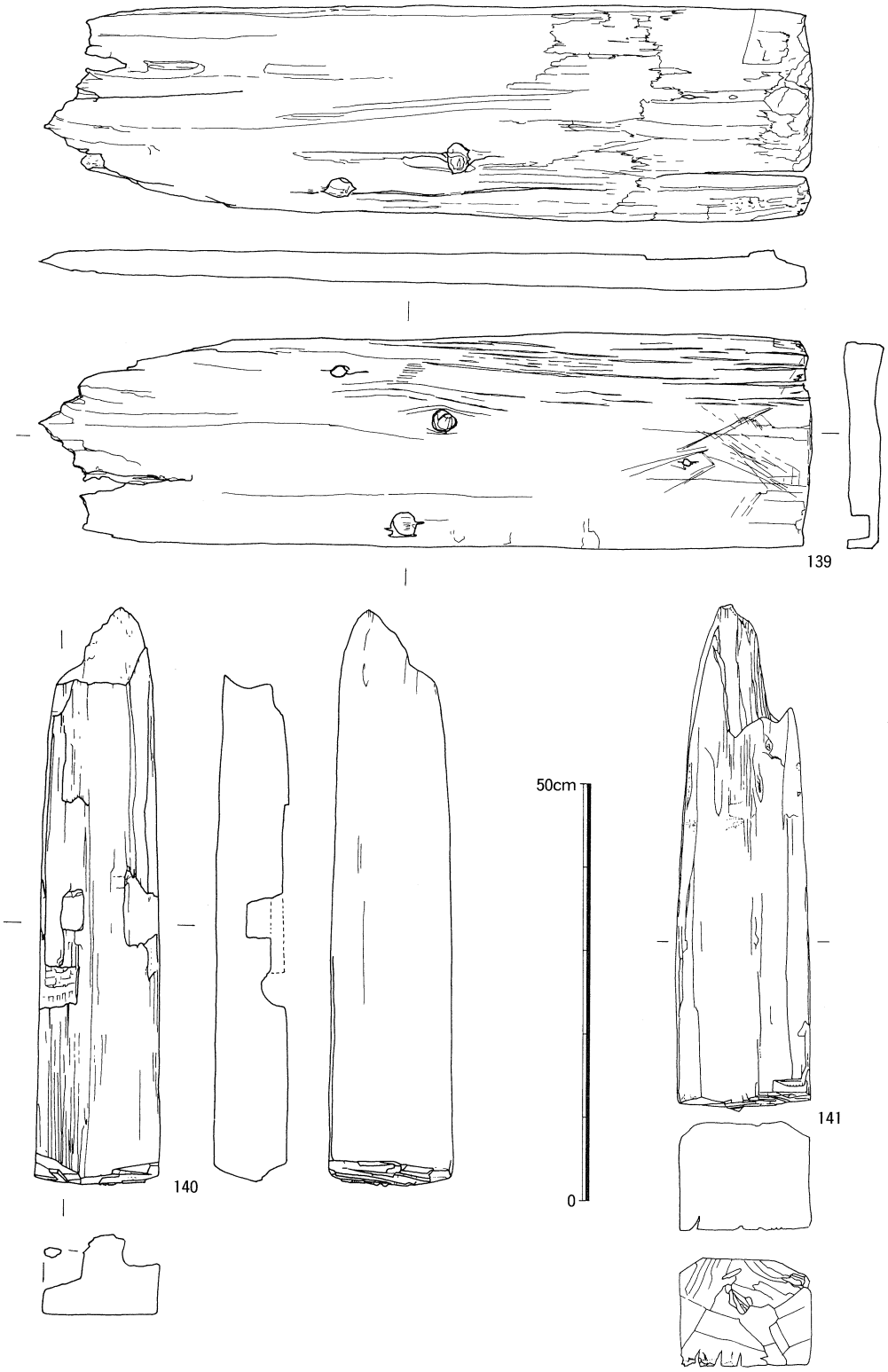
第161図　ＳＥ－11出土木製品（６）



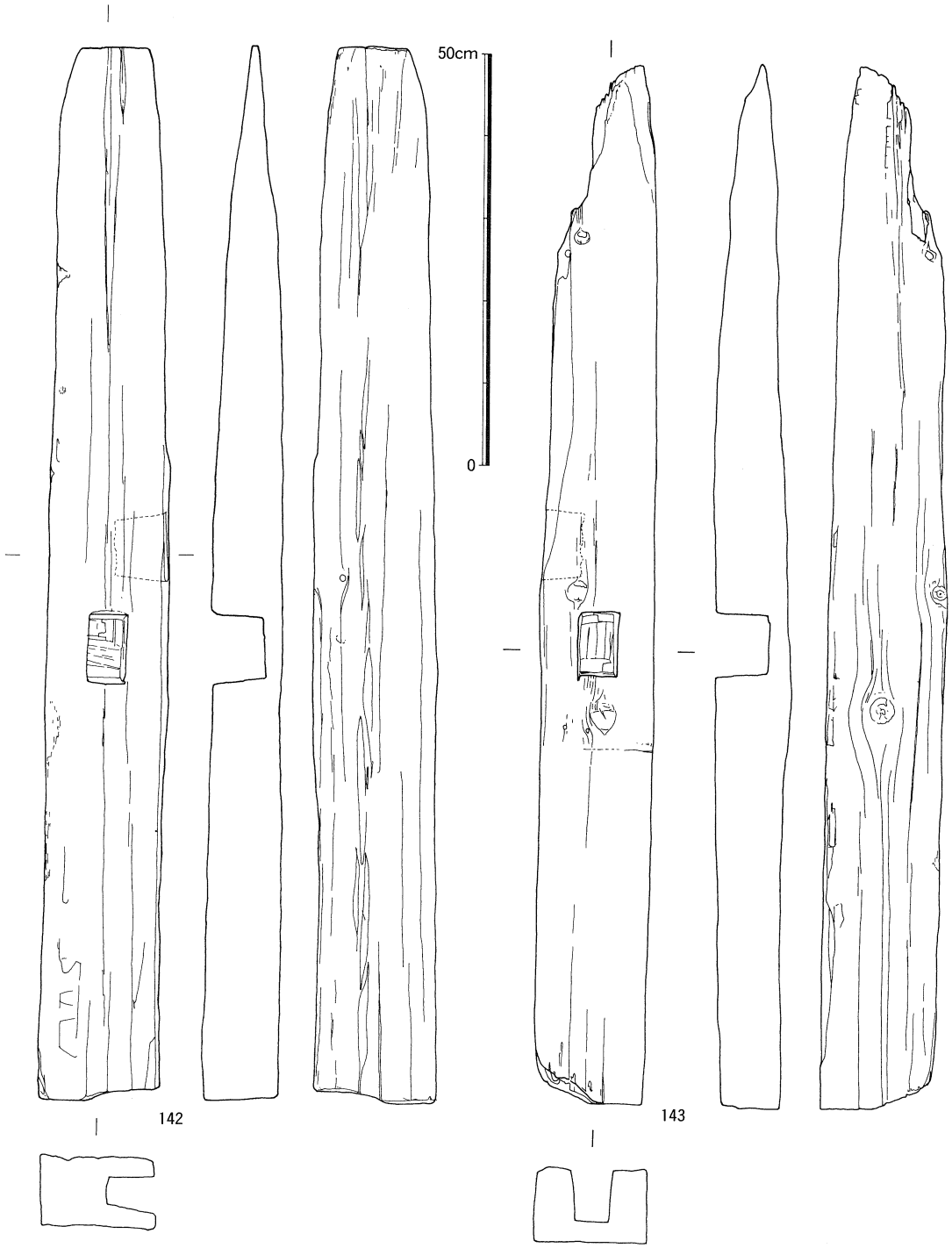
第162図　ＳＥ－11出土木製品（７）



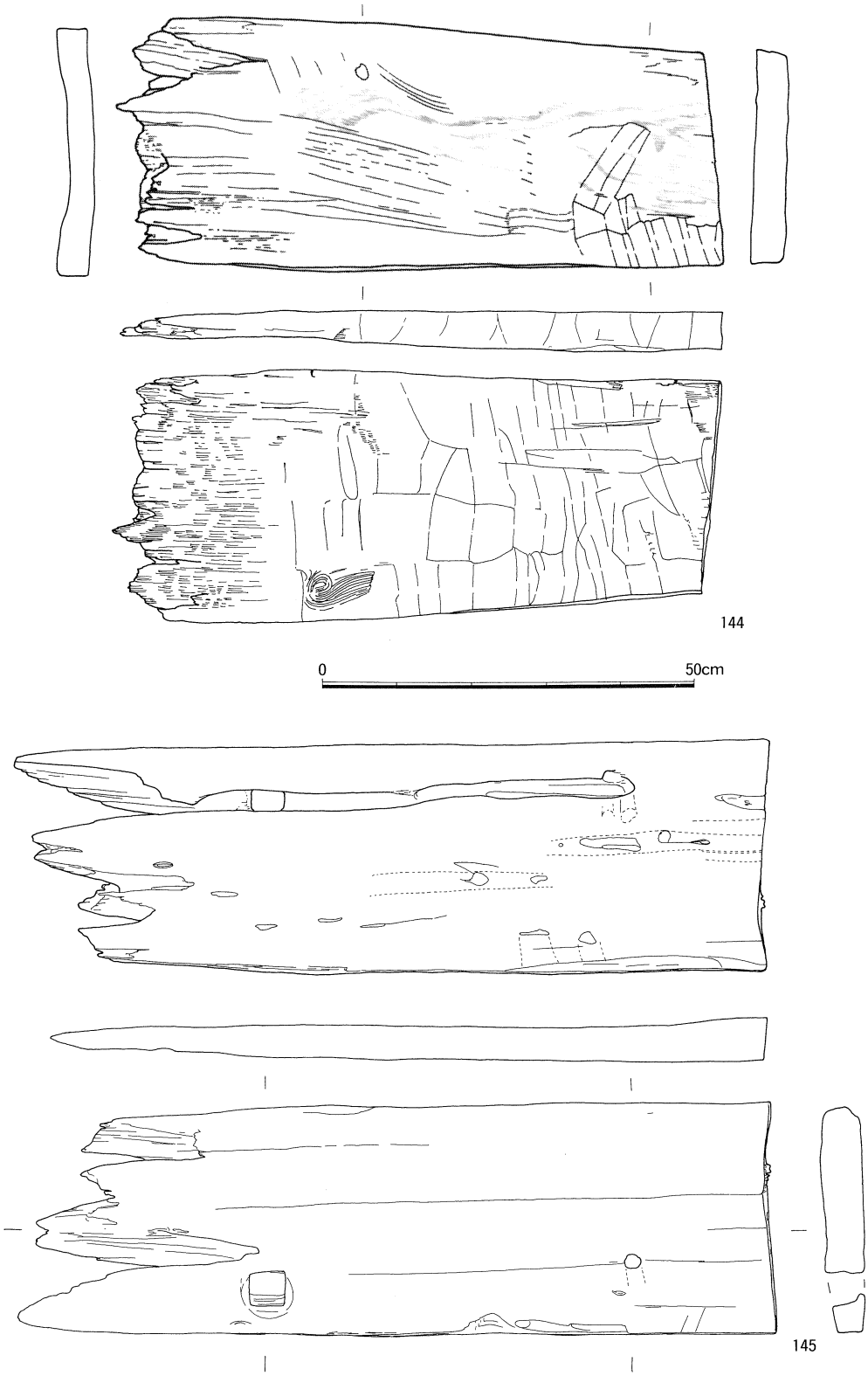
第163図　ＳＥ－11出土木製品（８）



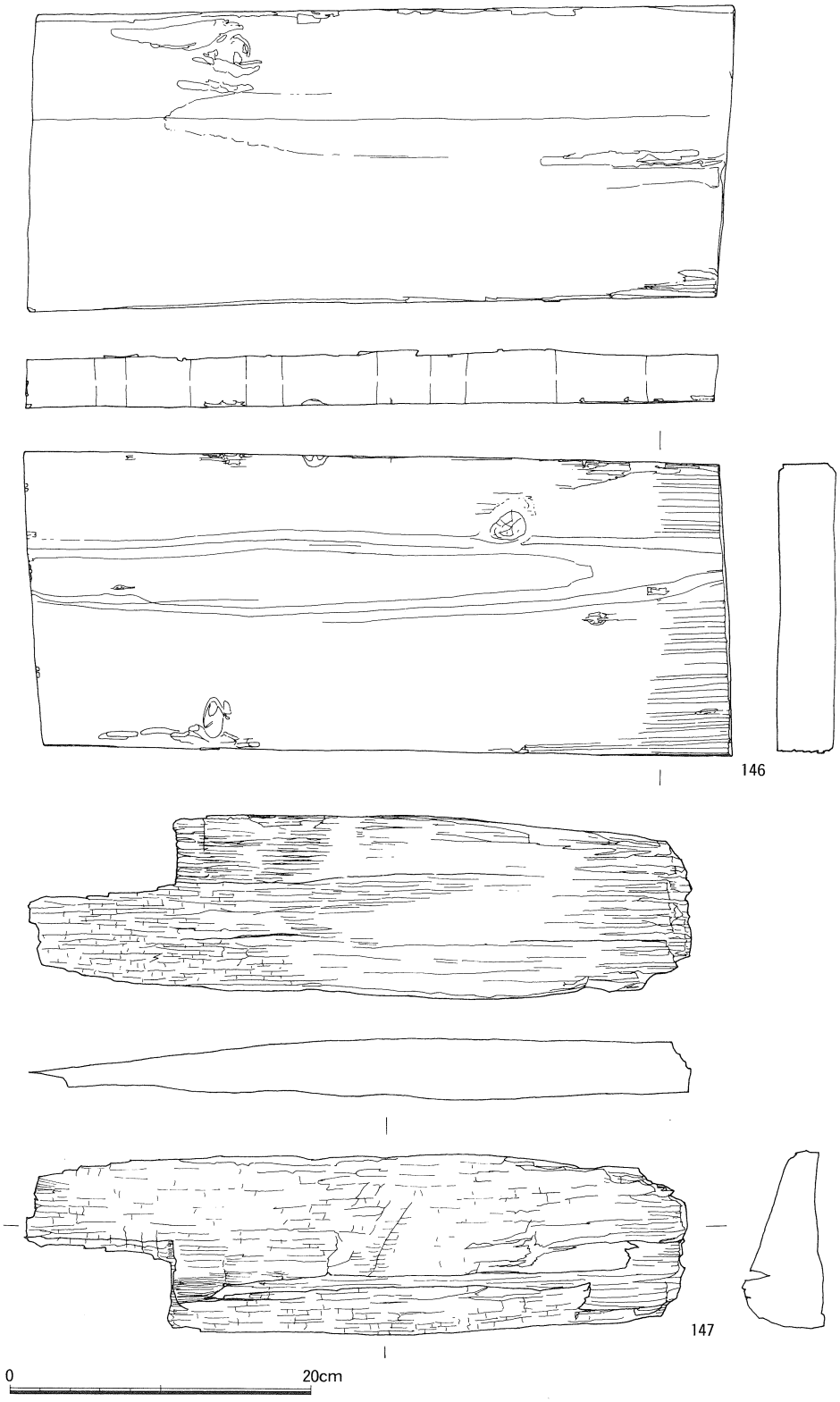
第164図　ＳＥ－11出土木製品（９）



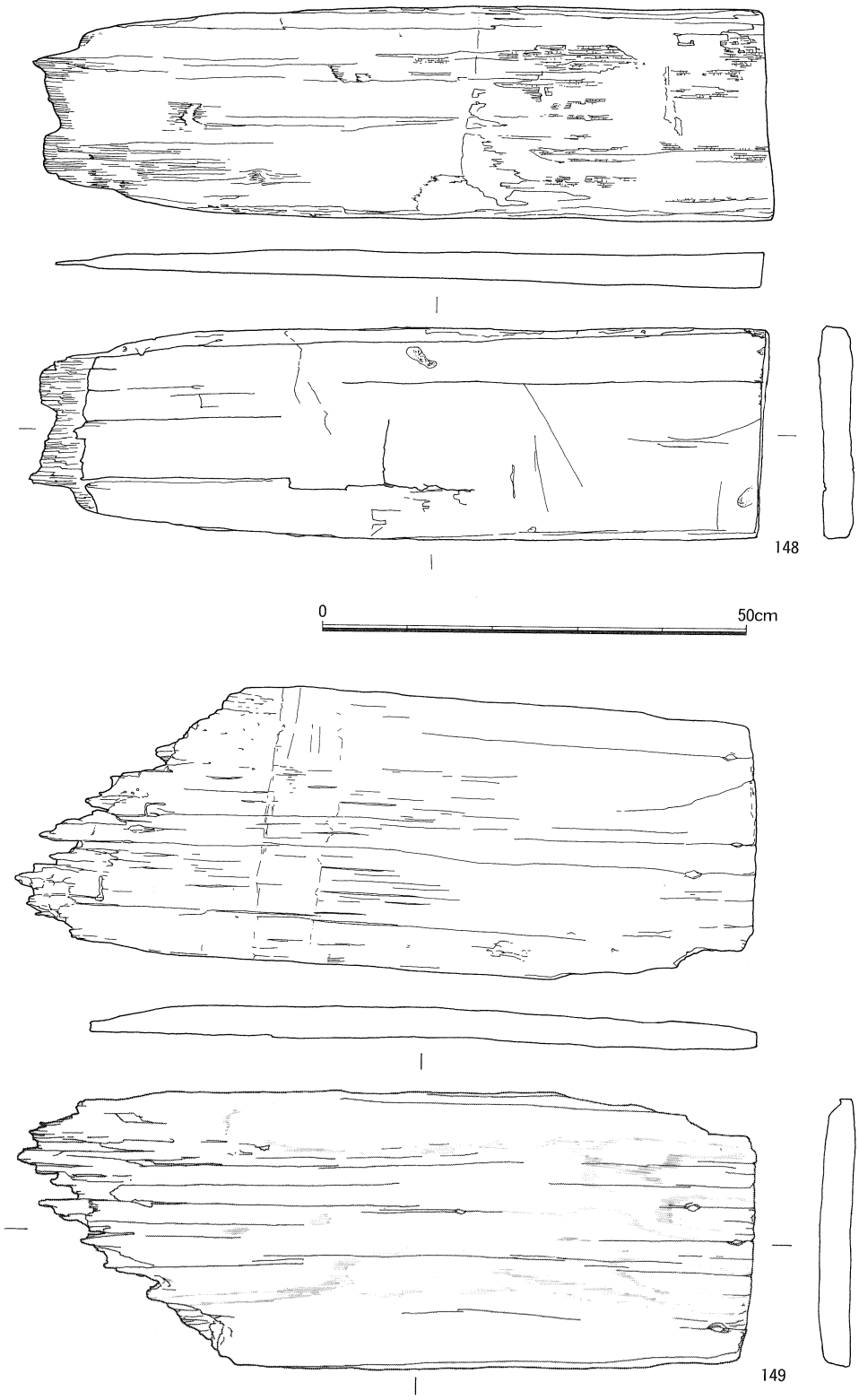
第165図　ＳＥ－11出土木製品（10）



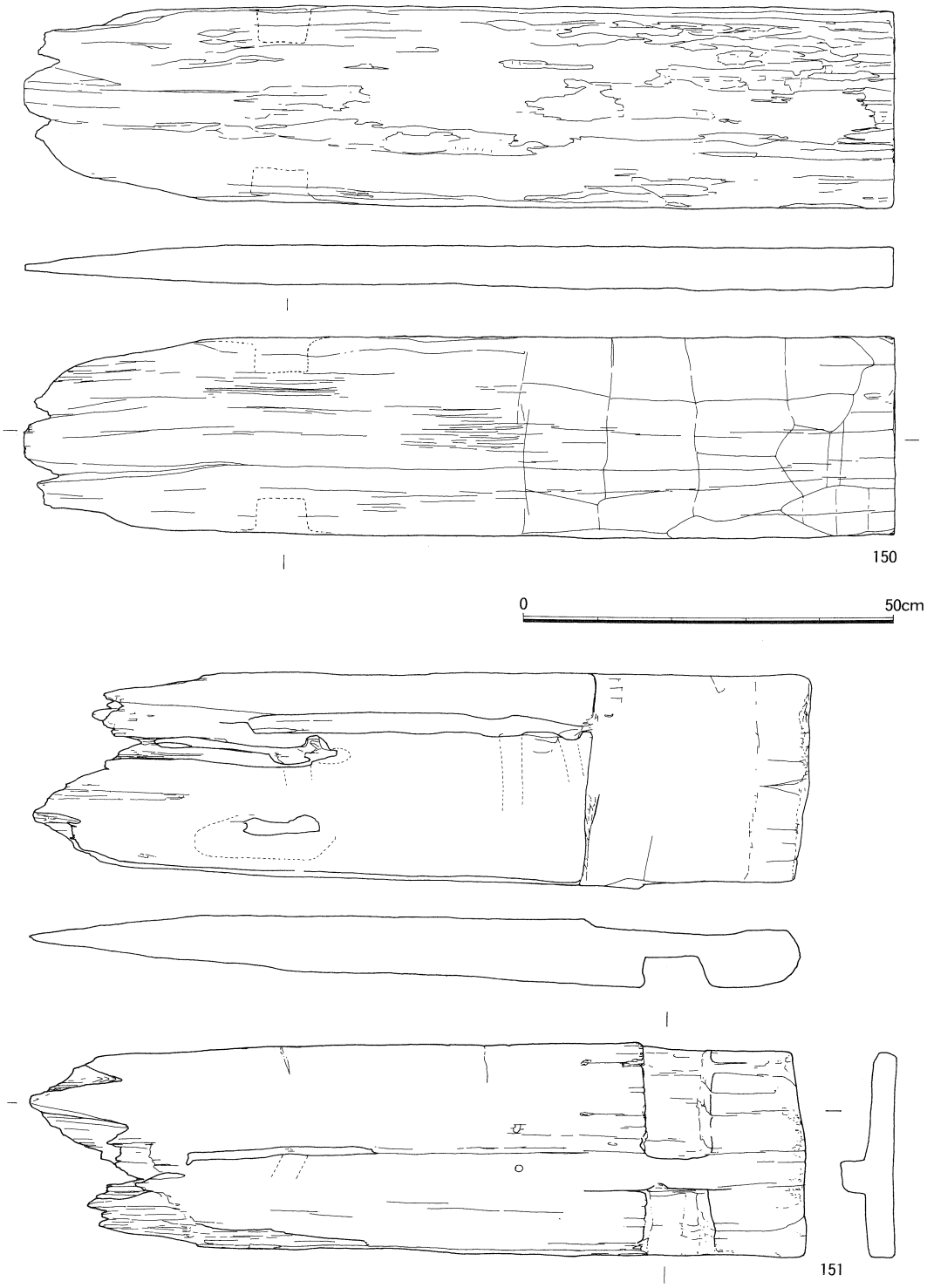
第166図　ＳＥ－11出土木製品（11）



第167図　ＳＥ－11出土木製品（12）



第168図　ＳＥ－11出土木製品（13）



第169図　ＳＥ－11出土木製品（14）

のままでは不安定である。ところが底部には、四隅にも四辺にも脚を取り付けていた形跡が認められないので、側板に取り付けてあった別材が脚の機能を兼ね備えていたのではないかと考えられる。板材（115・116）は井戸の底面に敷かれていたもので、その上に曲物側板（114）が載せてあったので、側板の跡が円形に残っている。角材（131・132・142・143）は井戸側の隅柱に使用されていたもので、２方向から横桟を差し込むための穴が開けられている。井戸側は１度作り直されているようで、この他にも隅柱と思われる穴がある角材（129・130・140）が出土しており、こちらが最初に作られた井戸側の部材であると考えられる。この他に穴のない角材（122・141）が出土しているが、井戸側には使用されておらず、井戸側のさらに外側で検出されているので、井戸の覆屋の柱根の可能性も考えられる。板材（125・128・134）は横桟で、隅柱の穴へ差し込むため端部を加工している。板材（123・124・126・127・133、135～139、144～151）は井戸側の縦板に使用されていた。大きさ、形状の様々なものがみられ、井戸側を作るため色々な材を寄せ集めているようで、なかには縦板そのものの機能には必要のない加工が施されているものもあり、何らかの部材からの転用材であろう。127・135・147の端部には枠を組むような加工が施されている。150には側面の両側に長方形の穴が開けられており、151は片面に両側面からの抉り込みがみられる。その他の板材には特に加工は認められないが、124・136・137・149には、横桟によって擦れた痕跡が残る。

ＳＥ－13（第170・171・172図）

井戸側の縦板に使用されていた板材（152～157）が出土している。157は他と比べると大型で厚みがあり、片側の長側辺に反りを持たせるように作られており、何らかのの部材からの転用材であろう。

ＳＥ－18（第172図）

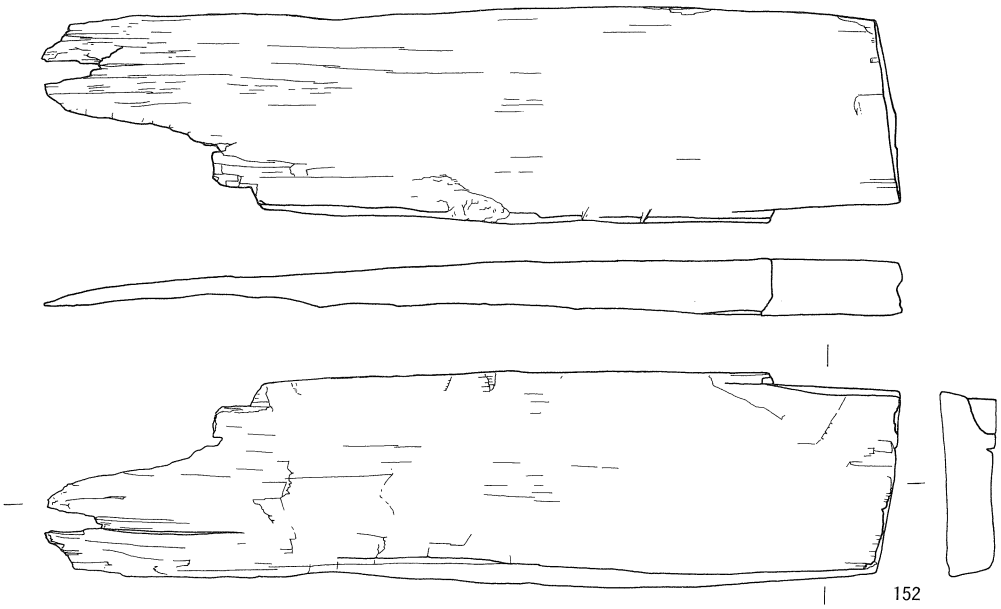
井戸の水溜に使用されていた曲物側板（158・159）が出土している。158はほぼ楕円形を呈しており、内面には格子状の刻み目が四隅の曲がり角にだけ認められる。159には縦方向と格子状の刻み目が認められる。

ＳＰ－157（第173図）

連歯下駄（160）が出土している。台は楕円形で、表側は爪先の足指のあたる部分が、使用のため擦り減り、窪んでいる。裏側にはノミ状工具の痕が顕著に残る。

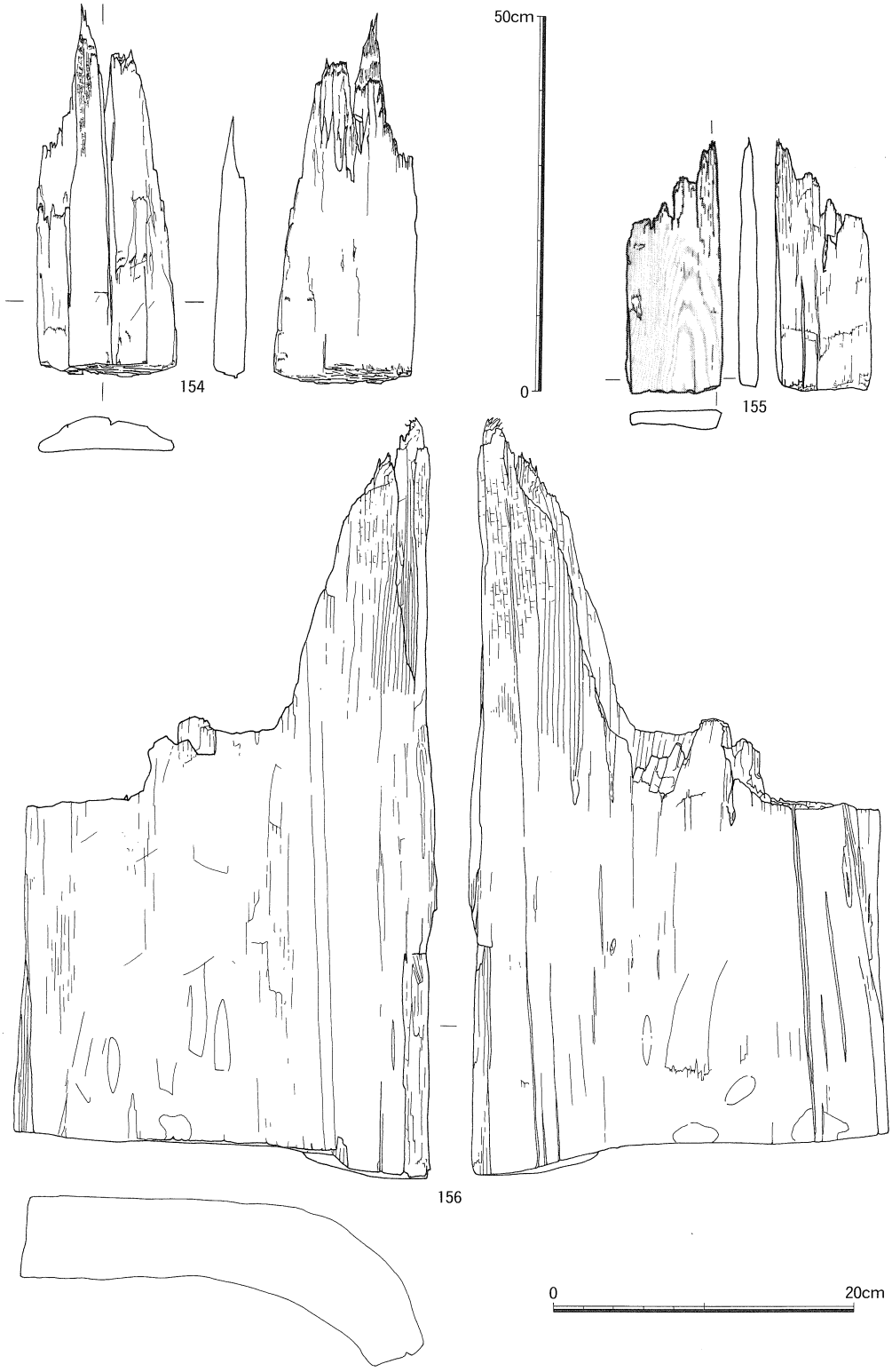
ＳＰ－1104（第173・174図）

柱根（161・166）が出土している。161は面取り加工がなされ、明確ではないが断面正

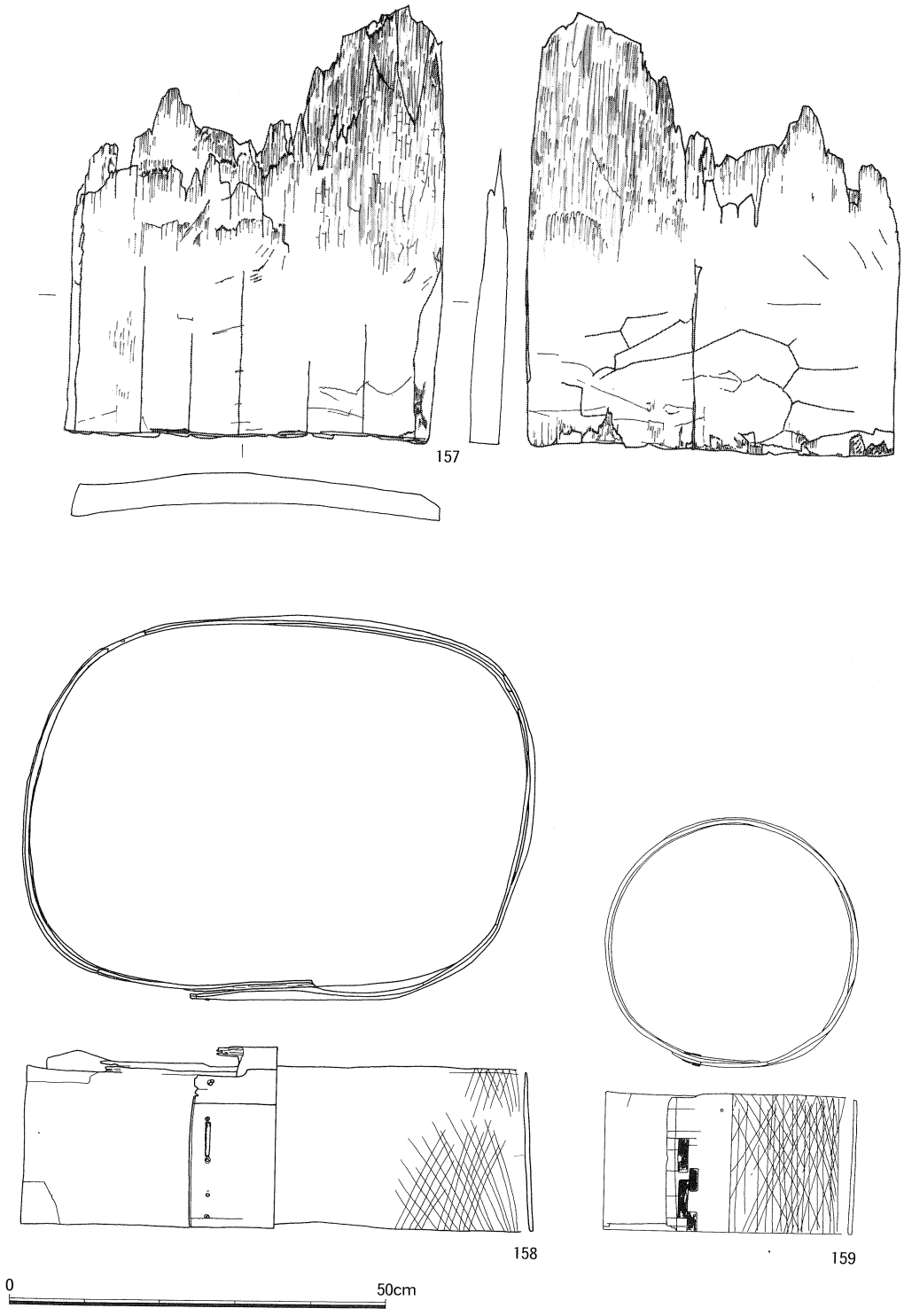


0　20cm

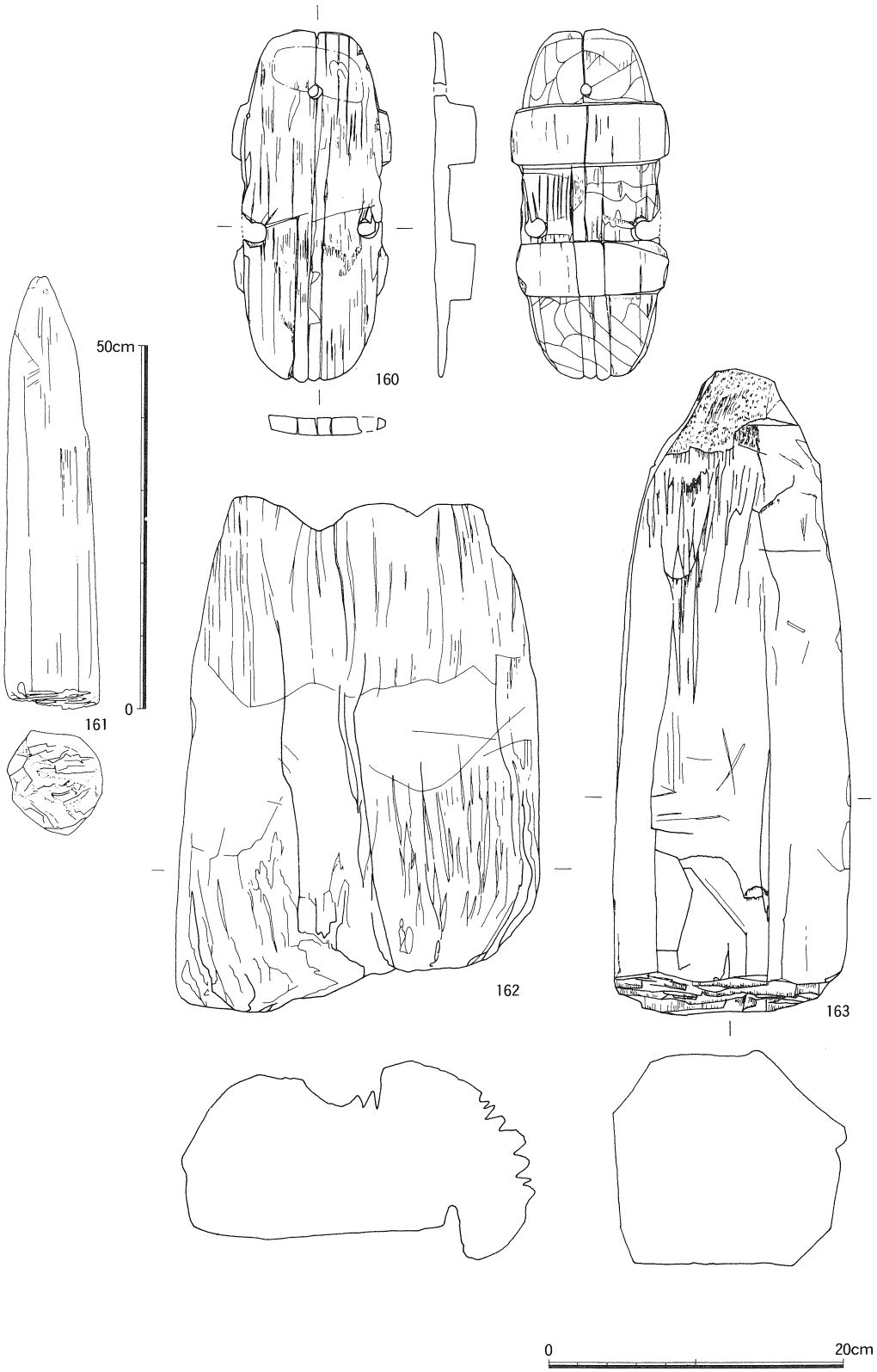
第170図　ＳＥ－13出土木製品（１）



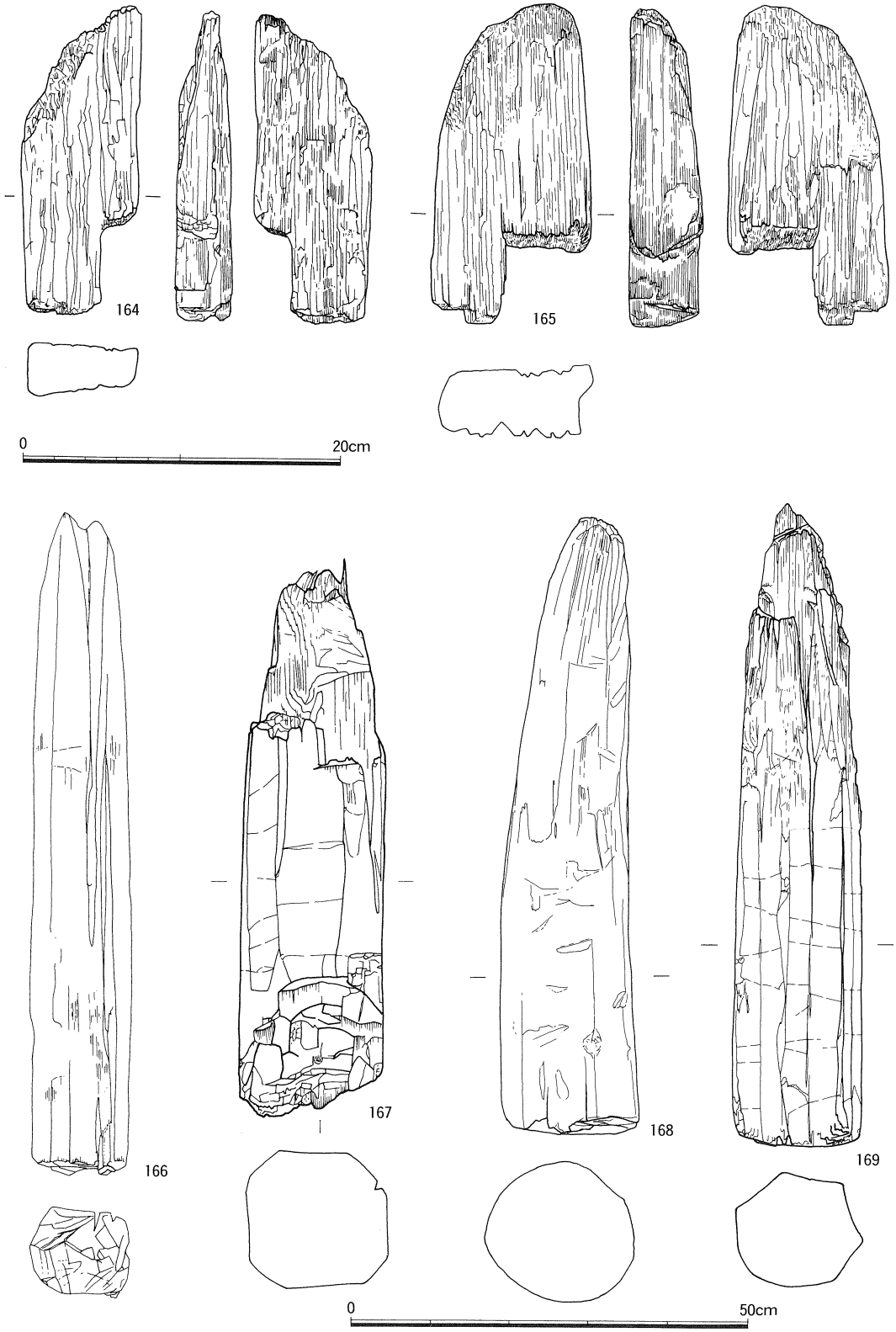
第171図　ＳＥ－13出土木製品（２）



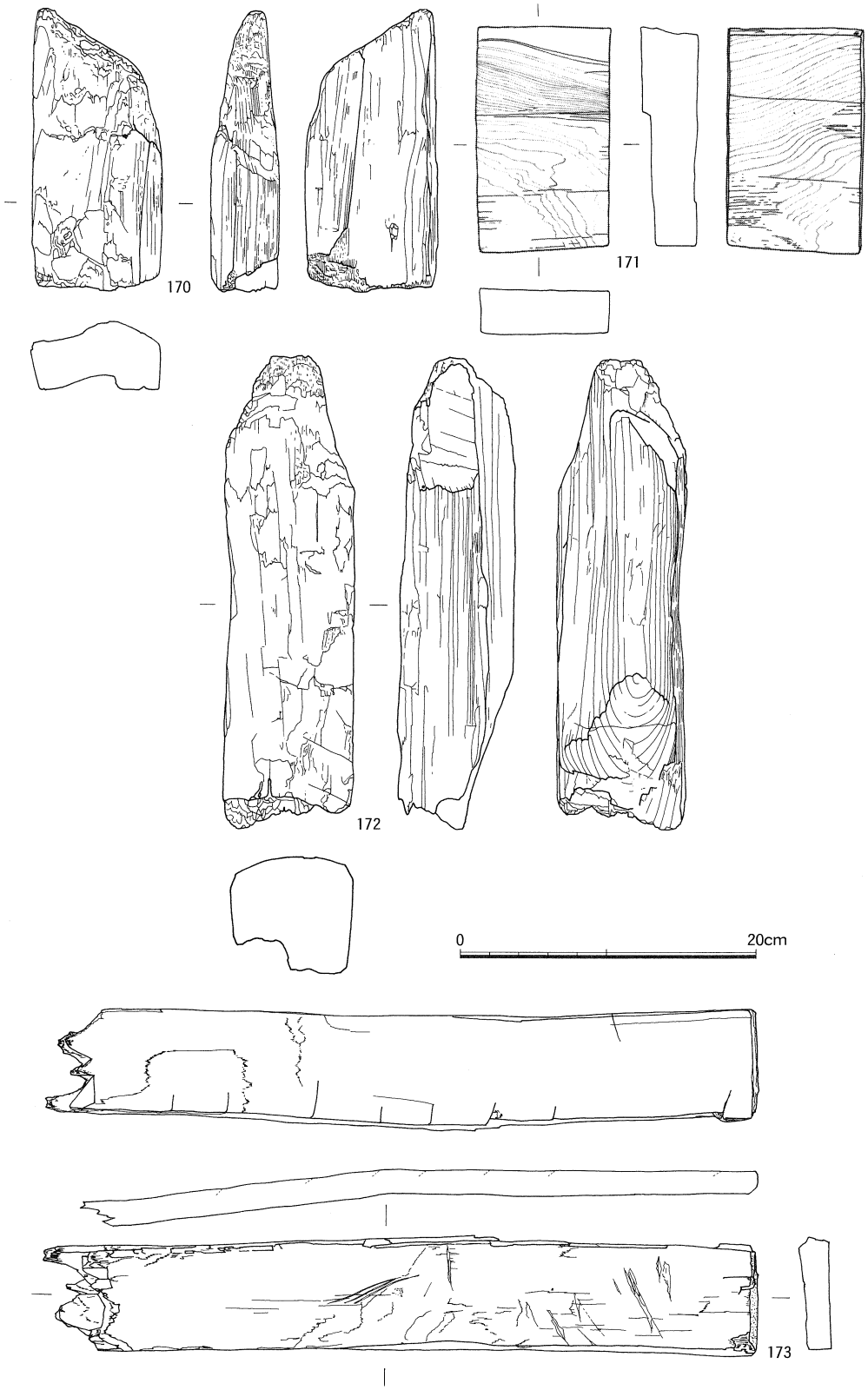
第172図　ＳＥ－13・18出土木製品



第173図　ＳＰ－157・515・1104・1134出土木製品



第174図　ＳＰ－451・619・1104・1152・1327出土木製品



第175図　ＳＰ－1221・1222出土木製品

六角形に近い形状に仕上げられている。166も同様にして、ほぼ正方形の形状に仕上げられている。

ＳＰ－619（第173図）

礎板に使用されていた板材（162）が出土している。遺存状態は悪いが、別の材が密着していた痕跡が、木目に対して直角に認められる。

ＳＰ－515（第173図）

柱根（163）が出土している。７面取りの加工が施されている。

ＳＰ－451（第174図）

礎板に使用されていた板材（164・165）が出土している。両方とも穴のような加工が施されていたようで、転用材である。形状からすると鼻緑であった可能性もある。

ＳＰ－1152（第174図）

柱根（167）が出土している。８面取りの加工が施され、断面形が隅切りの正方形に近い形状に仕上げられている。

ＳＰ－1134（第174図）

柱根（168）が出土している。面取りはされずに、円柱形である。

ＳＰ－1327（第174図）

柱根（169）が出土している。６面取りの加工が施され、断面正六角形に近い形状に仕上げられている。

ＳＰ－1221・1222・1223（第175図）

重複した３個のピットから、礎板に使用されていたと考えられる板材（170・173）、角材（172）が出土している。

ＳＰ－1176（第175図）

礎板に使用されていた板材（171）が出土している。

参考文献

市川秀之・鈴木寛子「第Ⅳ章第２節　西ノ辻遺跡出土の中世木器」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要・Ⅳ』1987大阪府教育委員会

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1993広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1994広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1995広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅳ』1995広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

小谷方明『大阪の民具・民俗誌』1982文化出版局

西村歩「天川村曲物考」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要２』1994

第7章　まとめ

第1章第2節で述べているように住宅敷地内では、既に調査会による第Ⅰ・Ⅱ期調査、そして市教育委員会による都市計画道路部分の調査が実施されており、古墳時代～近世の遺構面が検出されている。今回の調査においても大方は同様の調査成果が得られているが若干相違点などもあるので、ここでは各時代ごとの遺構と遺物について既往の調査と比較し述べることでまとめとしたい。

1．縄文時代

この時期の遺構は、既往の調査と同様に検出されておらず、また遺構面も存在しなかった。基本層序Ⅵ層の黒色粘土より下位の土層堆積状況は、シルト、砂層そしてまた黒色粘土という交互に堆積が繰り返されていることが観察され、この層は河内潟、河内湖による水性の堆積作用によって形成されたものと推定される。遺物は自然河川内やⅥ層を構成する砂層から縄文土器が出土しているがいづれも磨耗が激しく上方からの流れこみによるものであり、北東側にこの時期の遺構が存在するものと推定される。

2．弥生時代

この時期の遺物は各包含層中に破片が散見する程度であり、既往の調査よりもさらに遺構面の存在する可能性は低いと考えられる。縄文時代と同様に、今のところ北東側に遺構の存在が推定されるに過ぎない。

3．古墳時代

この時期の遺構は調査区を北東から南西方向に流れる自然河川や、単発的に土坑が検出される程度で、水田跡も南側のM区で辛うじて畦畔が検出されたに過ぎない。建物跡などの遺構は検出されず、第Ⅱ期調査区と比較して遺構、遺物の量は希薄になる傾向があるので、集落の中心からは外れるようである。自然河川はその出土遺物から古墳時代を通じて流れていたと推定され、後期になるとその幅を縮小している。河川内からは庄内式～布留式に比定される遺物が出土しているので、北東側にこの時期の集落の存在が推定される。水田跡は遺存状況が悪く、所属時期を明確にできるような出土遺物がほとんど無いため、時期の決定はし難いが、畦畔内から出土した土器から、今のところ古墳時代前期頃の時期を考えている。

4．奈良時代～平安時代

この時期は、単一の遺構面としては検出していないが、M区で検出したＳＥ－18がその出土遺物が８世紀後半頃の時期を示している。奈良時代末頃と考えられるが、この時期の遺構はこれだけであり、調査区全体としてはこの時期の遺構は欠落しており、既往の調査結果と同様の状況を示す。

平安時代の遺構も単一の遺構面として検出していないが、次の鎌倉時代の遺構面と同一面で検出されている。出土遺物の内容は黒色土器、緑釉、土釜などであり、その時期は10世紀末～11世紀頃を示しており、このことは集落の成立を平安時代の終わり頃に求めることができよう。なおこの時期の遺構、遺物が検出されるのはM区に顕著であり、Ｋ・Ｌ区ではほとんど検出されなかった。

5．鎌倉時代～近世

今回の調査で最も多くの遺構、遺物が検出されたのが鎌倉時代である。遺構としては井戸、土坑、柱穴などが検出されており、柱穴などは無数あり、何回も建物が建替えられたことを物語っている。遺構の検出のされかたを見ると調査区の西側半分に集中しており、東側は鋤溝が見られ主に耕作地として利用されていたようで、居住地と耕作地とが明確に区別されていたが、その境界は深い溝によって区画されるわけではなく、浅い溝によって隔てられていたに過ぎない。集落の存在した時期であるが、出土遺物から推定すると平安時代末には既に集落は成立しており、途中廃絶されることなく引き続き13世紀末から14世紀初頭頃まで存続したことが出土遺物から推定される。14世紀代の遺構、遺物がほとんど検出されてないのでこの時期には廃絶されたようである。出土遺物を見ると調査区の北側のＫ・Ｌ区に行くほど新しくなる傾向を示しており、平安時代終わり頃に成立した集落が鎌倉時代に入ってから、北側にその範囲を広げていったことが推定される。集落の範囲であるが、近隣での発掘調査の結果から、さらに南西方向に広がっていることが考えられるが、当時、西側一帯には深野池が存在し、かなり池に近い場所で営まれた集落といえよう。M区で検出された池状の落ち込みＳＴ－01やＮ・Ｌ区で検出された水路ＳＴ－02は、川船程度の大きさであれば十分通行可能な規模を持ち、深野池に続いていたのではないかと推定される。

この時期を代表する土器である瓦器椀は、黒色土器Ｂ類から発展する初現期（11世紀）のものから、衰退化に向かう（14世紀初頭）のものまで出土している。近くに産する楠葉型瓦器椀は古い段階で現われるが、12～13世紀代では大和型瓦器椀が主流を占めるようで

ある。ただ細部を見ると典型的な大和型瓦器椀と必ずしも一致するわけではなく形態は大和型に酷似するが、細かい手法において異なる点があるようでる。

また、M区のＳＫ－06では「東大寺」の刻印のある平瓦が出土しているが、この瓦は平安時代末（1180年）に平重衡の南都攻めによって焼失した東大寺を再建するため、大勧進職に任ぜられた俊乗坊重源が、東大寺造営料国となった備前国万富（岡山県赤磐郡瀬戸町万富東大寺瓦窯跡―国史跡）で焼かせたものである。同じくＳＫ－06から出土した他２点の平瓦や、ＳＰ－1509・1515で礎板に使用されていた平瓦も、刻印は見られないものの、タタキメの文様から同窯で焼かれたものと考えられる。このように、東大寺で使用されるはずの瓦が当地で出土したことは、当地と東大寺との間に何らかの関係があったのかも知れない。因みに調査区の西側の小字名が「東大寺（ひがしおおてら）」、「西大寺（にしおおてら）」と称するのは興味深い。

13世紀末～14世紀初頭頃で廃絶された以後は集落が営まれた様子は無く、近世末までは田畑として利用されていたようである。

以上、既往の調査結果との比較で各時代ごとの遺構と遺物についてまとめたが、今回の調査では、当遺跡の集落が少なくとも平安時代終わり頃には成立し、鎌倉時代末まで存続していたという新知見が得られ、第II期調査で報告されている古墳時代中期の建物跡を考え合せると、少しずつ場所を変えながらもさらに長期間にわたって集落が継続的に営まれていたことが明らかになった。今回の報告は、終始遺構と遺物の説明の羅列になった感が否めないが、各時代の遺構の性格の把握、遺物の検討や地理的・歴史的背景を含めたこれら遺跡の総合的な検討は、来年度刊行予定の最終報告書（第Ⅳ期の調査報告）において行ないたいと考えている。御容赦を乞う次第である。

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
73	87	1	瓦器椀 (楠葉) II－1	5.6 15.0	外内 灰色	底部から外上方に開き1/2くらいのところから急勾配で上方に伸び端部は丸く終る　沈線あり　高台は逆三角形	外面	口縁部にヘラミガキ	SE－32
							内面	圏線ミガキと見込みに連結輪状のヘラミガキ	
		2	瓦器椀 (楠葉) I－3	5.8 14.8	外内断 灰色	器壁に厚みがない　底部から外上方に開き端部は丸く終る　端部やや下に沈線あり　高台は台形	外面	指押さえの痕　細い分割ヘラミガキ	SE－32
							内面	密な圏線ミガキ　見込みに連結輪状のヘラミガキ	
73		3	瓦器椀 (楠葉) I－3	5.0 14.8	外内断 灰色	底部から外上方に開いたのち上から1/3位のところから垂直気味に伸び端部は丸く終る　小さな火ぶくれの剥離あと残る　高台は逆三角形	外面	3分割のヘラミガキ　口縁部にナデによる鈍い稜線	SE－32
							内面	圏線ミガキと見込みに連結輪状のヘラミガキ	
		4	土師器高台付皿	残高3.1 底径5.0	外内断 灰白色	体部底部から外下方へ下り端部は丸く終る 杯部形態不明	外面	ヨコナデ	SE－32
							内面		
74		5	瓦器椀 (楠葉) II－3	5.3 14.0	外 暗オリーブ灰色 内外灰色	底部から外上方に開いたのち1/3位のところから外上方にやや急勾配で伸びる　口縁部で厚みをもち端部は丸く終る　沈線あり	外面	3分割のヘラミガキ　指押さえ	SE－34
							内面	粗い圏線ミガキと見込みに簡単な連結輪状ヘラミガキ	
		6	瓦器椀 (楠葉) II－3	5.2 14.7	外内 灰色	底部からゆるやかに伸び1/2位のところから垂直気味に立ち上がり端部は丸く終る　口縁部は厚め　沈線あり　高台はいびつ	外面	口縁部に粗いが分割性のあるヘラミガキ	SE－34
							内面	圏線ミガキと見込みに連結輪状のヘラミガキ	
		7	土師器高台付皿	7.8 4.8	外内 灰白色	「ハ」の字に開く脚部　内反する口縁部を有する	外面	脚杯部ともに多数の指押え	SE－35
							内面	口縁部にヨコナデ	
		8	須恵器壺	残高5.8 底径7.7	外内断 緑灰色	平底から内湾して立ち上がる体部を有する	外面		SE－35
							内面	ナデ	
		9	瓦器椀 (楠葉) II－2	5.1 14.8	外内 暗灰色	器壁は厚め　ゆるやかに開いたのちやや急勾配で伸び端部は丸く終る　端部に沈線あり　高台は台形　完形	外面	4分割の粗いヘラミガキ	SE－38
							内面	密な圏線ミガキと簡単な連結輪状のヘラミガキ	
75		10	瓦器椀 (大和) III－A(古)	5.3 14.8	外内断 灰色	底部からゆるやかに外上方に開き口縁部は直立気味で端部は短く外反して終る　浅い沈線	外面	粗いヘラミガキ　口縁部にナデによる鈍い稜線	SE－39
							内面	圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		11	瓦器椀 (大和) III－A(古)	5.1 13.6	外内断 灰色	底部からゆるやかに開いたのちやや角度をもって外上方に立ち上がり端部は丸く終る　端部上位に沈線あり	外面	指押さえとわずかなヘラミガキ　口縁部にナデによる稜線	SE－39
							内面	圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		12	瓦器椀 (大和) III－A(古)	5.1 14.6	外内断 灰白色	底部からゆるやかに開いたのち角度をもって外上方に立ち上がり端部はやや上向きに終る　端部に沈線あり	外面	指押さえと省略化された粗いヘラミガキ	SE－39
							内面	密な圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		13	瓦器椀 (楠葉) II－3	5.2 15.2	外内断 灰色	底部からゆるやかに伸びやや角度をもって外上方に開く端部は丸く上位に沈線あり　高台は逆三角形	外面	指押さえと口縁部に粗いヘラミガキ	SE－39
							内面	圏線ミガキと省略化された連結輪状のヘラミガキ	
75		14	瓦器椀 (楠葉) II－3	5.4 14.6	外内 灰色	底部より口縁部の方が器壁が厚い　外上方に伸びたのちやや急勾配で立ち上がり端部は丸く終る　沈線はやや下に巡る	外面	指押さえ　風化のためヘラミガキは不鮮明	SE－39
							内面	圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		15	瓦器椀 (大和) III－A(新)	5.1 13.6	外内 暗オリーブ灰色 断灰白色	底部より外上方に開いたのちやや角度をもって外上方に伸びる　口縁部はやや肥厚し端部は丸く終る　高台は逆三角形　沈線あり	外面	指押さえ　ヘラミガキは認められない	SE－40
							内面	隙間の大きい粗い圏線ミガキ	
76	88	16	瓦器椀 (大和) III－A(新)	4.6 14.1	外内 灰	丸底より内湾気味に外上方へ伸びたのち短く外反し端部は丸く終る　沈線あり　高台より底部が突出　完形	外面	指押さえと粗いヘラミガキ	SE－43
							内面	やや隙間のある圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		17	瓦器椀 (大和) III－A(新)	4.5 13.8	外内 灰	丸底から内湾気味に外上方へ伸びたのち短く外反し端部は丸く沈線を有する　ややいびつな器形　完形	外面	指押さえと粗いヘラミガキ	SE－43
							内面	やや密な圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		18	瓦器椀 (大和) III－B	4.3 14.6	外内 灰	丸底から外上方へ伸びたのち短く外反し端部は丸く上向きに沈線を有する	外面	指押さえと粗いヘラミガキ	SE－43
							内面	やや隙間のある圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		19	瓦器椀 (大和) III－B	4.4 13.8	外内断 灰	底部から外上方に伸びたのち短く外反し端部は丸く沈線を有する　高台より底部突出するいびつな器形	外面	粗いミガキとナデによる鈍い稜線　高台は雑な貼り付け	SE－43
							内面	粗い圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		20	瓦器椀 (大和) III－A(新)	4.1 14.4	外内断 灰	丸底から内湾気味に外上方へ伸びたのちわずかに外反する　端部は丸く上向きに沈線を有する	外面	粗いヘラミガキ	SE－43
							内面	隙間のある圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	88	21	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	4.7 12.8	外内断 灰色	底部より内湾気味に外上方へ伸びたのち短く外反する　端部は丸く上向きに沈線を有する　高台より底部が突出するいびつな器形	外面 内面	粗いヘラミガキ 粗い圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	SE－43
		22	土師器皿	1.4 8.6	外内 灰白色	偏平で底部から外反気味に口縁へ続き端部は少し角ばる	ヨコナデ　ナデによる稜線		SE－43
		23	土師器皿	1.1 7.6	外内 にぶい黄橙色	偏平で底部から外上方に短く伸び端部は角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SE－43
76		24	土師器皿	1.5 8.1	外内 灰白色	口縁は内湾気味　器形はいびつ　完形	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SE－43
		25	土師器皿	1.3 8.6	外内断 灰白色	浅い平底から短く外上方に伸び端部は角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SE－43
		26	土師器皿	1.3 8.4	外内断 灰白色	偏平な器形	口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線		SE－43
		27	土師器皿	1.3 8.4	外内 灰白色	浅い平底から短く外上方へ伸び端部は角ばる	内外ともにヨコナデ		SE－43
76		28	瓦器鍋	残高 10.8 32.4	外灰～黒色 内褐内色 断灰白色	逆「ハ」の字に開く口縁部と垂直に伸びる体部をもち口縁端部は外傾する端面を有する　煤付着	外面 内面	指押さえ　板ナデ 口縁部に7本／1cmのハケメ　体部板ナデ	SE－43
		29	瓦器釜 大和B1	残高 11.0 口径 25.0 鍔径 30.0	外灰白～灰黄色 内灰白～灰黄褐色 断灰白色	口縁部は「く」の字形に屈曲し端部は内側に肥厚し鍔は水平方向に伸び端部は丸い	外面 内面	ナデ 板ナデ	SE－43
75	89	30	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	4.4 14.1	外内断 灰白色	浅い器形　外上方にゆるやかに伸び口縁部はやや垂直気味に立ち上がり端部は丸く終る　端部に沈線あり	外面 内面	指押さえ 粗い圏線ミガキと省略化された連結輪状のヘラミガキ	SE－42
		31	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	4.5 13.2	外内 灰色	いびつな形　浅く開いたのち口縁でやや外反し端部は丸く終る	外面 内面	指押さえ　4分割ヘラミガキ 強い板ナデ　圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	SE－42
		32	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	4.1 14.1	外内断 灰色	丸味をもつ底部から内湾気味に外上方に伸びたのち外反し端部は丸く上向きに沈線あり	外面 内面	口縁部に強いナデ　粗いヘラミガキ やや密な圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	SE－42
		33	土師器皿	1.5 8.4	外内断 にぶい黄橙色	やや丸い浅い底部から外上方へ伸びたのち短く上方へ立ち上がり端部は丸い	内外ともに口縁部はヨコナデ		SE－42
		34	土師器皿	1.4 8.0	外内灰白色 断 にぶい黄橙色	凹凸のある平底から外上方へ伸びたのち外反し端部は角ばる	内外ともに口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SE－42
		35	土師器皿	4.1 8.1	外内断 灰白色	平底から外上方に短く伸び端部は角ばる　口縁部に厚みをもつ	口縁部にナデによる稜線　底部に指押え		SE－42
		36	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色	平底から屈曲して外上方へ短く伸び端部は角ばる	内外ともに口縁部はヨコナデ		SE－42
75		37	土師器皿	1.5 8.5	外内断 灰白色	偏平な器形で平底から上方へ短く立ち上がり端部は丸い	摩耗している　ナデによる鈍い稜線		SE－42
		38	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色	平底から内湾気味に外上方へ伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　底部に指押え		SE－42
75		39	土師器皿	1.4 8.0	外内断 浅黄橙色	全体に厚みがある　底部よりゆるやかに外上方へ開き端部はやや角ばる	口縁部にナデによる稜線		SE－42
		40	土師器皿	1.1 8.2	外内断 灰色	浅い平底から短く外上方に開き端部はやや角ばる 内面煤付着	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SE－44

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	89	41	土師器Ⅲ	1.3 8.4	外内断 にぶい橙色	浅い平底から短く外上方に開き端部はやや角ばる	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SE－44
		42	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	4.1 14.2	外内灰色 断灰白色	底部からゆるやかに外上方に開き1/2位からやや上向きに伸び端部は外反して終る　高台は低く雑な作り	外面 内面	指押えと粗いヘラミガキ 条線間に隙間のある粗い圏線ミガキと輪状のヘラミガキ	SE－44
		43	瓦器椀 (大和) Ⅲ－A(新)	4.1 14.0	外内灰色 断灰白色	ゆるやかに外上方に開き口縁部は上向きに伸び端部は丸く終る　端部に沈線あり　高台は低く雑な作り	外面 内面	指押さえと粗いヘラミガキ 隙間のある粗い圏線ミガキと太い連結輪状のヘラミガキ	SE－44
76		44	瓦器椀 (大和) Ⅲ－A(新)	4.3 14.2	外内灰色 断灰白色	浅く開いた器形　器壁はうすいが口縁部はやや厚みをもつ　端部に浅い沈線あり	外面 内面	指押さえと粗いヘラミガキ 隙間のある圏線ミガキと省略化された連結輪状ヘラミガキ	SE－45
		45	瓦器椀 (大和) Ⅲ－A(新)	4.4 14.4	外内灰色 断灰白色	浅く開いた器形　口縁部でやや上向きに伸び端部で少し外反する　端部に上向きの沈線あり　高台逆三角形	外面 内面	指押さえとわずかなヘラミガキ やや密な圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキの１部	SE－45
		46	瓦器椀 (大和) Ⅲ－A(新)	4.5 14.0	外内断 灰　色	かなりいびつ　底部から外上方に伸びたのちやや角度をもって立ち上がり端部は外反して丸く終る　端部の沈線上向き	外面 内面	指押さえと粗いヘラミガキ やや粗い圏線ミガキ　省略化された連結輪状のヘラミガキ	SE－45
		47	土師器Ⅲ	1.3 8.0	外内断 灰白色	浅い平底から外上方に短く開き端部はやや角ばる	口縁部にヨコナデ　強いナデによる稜線　底部に指押さえ		SE－45
		48	土師器Ⅲ	1.8 8.4	外浅黄色 内灰白色	少しいびつ　底部からほぼ直線的に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SE－45
		49	土師器Ⅲ	1.9 8.4	外内 灰白色	底部からゆるやかに外上方に開き口縁は内湾気味に端部は丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SE－45
		50	土師器Ⅲ	1.4 7.8	外内断 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開き端部は丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SE－45
76		51	土師器Ⅲ	1.5 8.4	外内断 灰白色	平底からゆるやかに外と上方に開き口縁は内湾気味で端部はやや角ばる　完形	内外ともに口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SE－45
		52	土師器Ⅲ	1.5 8.4	外内 にぶい黄橙色	偏平な器形　平底から短く外上方に開き口縁へ伸びる	内外ともに口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SE－45
		53	土師器Ⅲ	1.3 8.0	外内断 にぶい黄橙色	平底から短く外上方に開き端部はやや角ばって終る	口縁部はナデによる稜線　底部に指押さえ		SE－45
76		54	土師器高台付Ⅲ	3.5 8.6	外内断 灰白色	底部から外上方に開き口縁端部は丸く終る 脚部は外反する　器壁は全体に厚い	内外ともにヨコナデ 杯部に台部を貼り付け		SE－47
		55	瓦器椀 (大和) Ⅲ－A(新)	4.1 13.0	外内断 暗灰色	底部から外上方に開き口縁部で角度をもって立ち上がり端部はやや外反して丸く終る　端部に上向きの沈線	外面 内面	多数の指押え　粗いヘラミガキ やや密な圏線ミガキ　見込みに連続輪状のヘラミガキ	SE－46
	90	56	瓦器椀 (大和) Ⅲ－A(新)	4.3 12.8	外内 暗オリーブ灰色 断灰白色	底部から外上方に開き口縁端部はやや外反して丸く終る　端部に上向きの沈線	外面 内面	指押さえ　粗いヘラミガキ やや密な圏線ミガキ　形状不明のヘラミガキが残る	SK－92
77		57	瓦器椀 (楠葉) Ⅲ－2～3	3.6 11.2	外内 暗オリーブ灰色 断灰白色	底部から内湾気味に立ち上がり端部は丸く終る　沈線なし	外面 内面	ミガキは認められず 隙間のある粗い圏線ミガキが見込みまでおりる	SK－94
84		58	青磁碗 (龍泉窯系) Ⅰ－2類	破片 5.1×3.6	外内 オリーブ灰色	器壁は薄く口縁部は外上方に向い端部は丸く終る	外面 内面	 片彫りの草花文	SK－94
		59	土師器釜 河内B1	残高 11.5 39.0	外内 浅黄橙色 断灰白色	内湾する口縁部に上方に直立し外に肥厚する口縁端部を有する　鍔は水平に伸びたあと下垂気味	外面 内面	指押さえ　鍔部から口縁部にかけてタテハケ 指押さえ　口縁部にナナメハケ	SK－94
77		60	瓦器椀 (和泉) Ⅱ－3	5.9 14.2	外内断 灰白色	底部から内湾気味に開き口縁でわずかに外反し端部は丸く終る	外面 内面	高台周辺に多数の指押さえ　風化が激しい わずかの圏線ミガキと見込みにジグザグのヘラミガキ	SK－96

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
77	90	61	土師器不明品	長さ 5.7 幅 12.8	外内断 灰白色	土管様のもの？	外面		SK−95
							内面	端部にナデ	
77	90	62	須恵器甕	残高 5.7 30.8	外灰色 内灰白～灰色 断灰白色	端部は上方にやや肥厚し外端面は垂直な面を成す	外面	肩部に斜めのタタキ	SK−97
							内面		
77	90	63	土師器高台付皿	残高 2.9 底径 6.9	外内 灰白～淡黄色 断灰白色	左右脚部の張り出しがいびつ　作りが雑	外面	貼り付けた高台と杯部の境に指押え多数	SK−97
							内面	強い指押さえ	
77	90	64	土師器高台付皿	残高2.7 底径7.0	外内断 灰白色	脚部は肉厚　外下方に開き端部は内湾気味に丸く終る	外面	指押さえ　裾部はヨコナデ　杯に脚部を貼り付け	SK−97
							内面	指押さえ	
77	90	65	土師器高台付皿	3.6 8.4	外内灰白色 断灰白～灰色	杯と台の高さの比１：２　杯の部分は内湾気味に立ち上がり脚部は外下方に開き杯脚部とも端部は丸い	外面	内外面に指押さえ多数	SK−97
							内面	粘土紐痕	
77	90	66	瓦器椀 （大和） Ⅲ−Ｂ	4.6 14.0	外内灰色 断灰白色	いびつ　平底からほぼまっすぐ外上方に伸び口縁部でやや垂直に立ち上がり端部は丸く終る　底部は厚みがある　外面粘土紐痕	外面	指押さえ　口縁部は強いヨコナデ　粗いヘラミガキ	SK−97
							内面	隙間のある圏線ミガキ　粗い連結輪状ヘラミガキ	
77	90	67	瓦器椀 （大和） Ⅲ−Ａ(新)	4.6 14.0	外内灰色 断灰白色	全体にしっかりした作りで底部がややいびつ　底部から内湾し口縁で外反し端部は丸く終る　端部に沈線巡る	外面	高台周辺に指押さえ　口縁部に粗いヘラミガキ	SK−97
							内面	やや密な圏線ミガキ　複雑な連結輪状ヘラミガキ	
77	90	68	瓦器椀 （大和） Ⅲ−Ｂ	4.6 13.6	外内灰白色～にぶい黄橙色 断灰白色	底部からゆるやかに伸びロ縁内面ナデによる凹面有す　端部に沈線巡る	外面	連続して口縁へ伸びる指押さえ　わずかなヘラミガキ	SK−97
							内面	隙間のある圏線ミガキ　省略化された連結輪状ヘラミガキ	
77	90	69	瓦器椀 （大和） Ⅲ−Ｂ	4.3 13.4	外内灰色 断灰白色	ゆるやかに底部から外上方に伸びたのち1/2位のところからやや上向きに立ち上がり端部は外反する　端部に沈線巡る	外面	指押さえ　水平に粗いヘラミガキ	SK−97
							内面	隙間のある圏線ミガキ　見込みのヘラミガキは形状不明	
77	90	70	瓦器椀 （大和） Ⅲ−Ａ(新)	4.8 14.4	外内 暗灰色 断灰白色	ゆるやかに開く体部と外反する口縁を有する　沈線は上位を巡る	外面	指押さえ　分割性のヘラミガキ	SK−97
							内面	やや密な圏線ミガキ　太めの連結輪状ヘラミガキ	
77	90	71	瓦器椀 （大和） Ⅲ−Ａ(新)	4.6 13.1	外内 オリーブ灰色 断灰白色	平底からゆるやかに伸び端部は丸く終る　端部に沈線巡る　楕円でいびつ	外面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	SK−97
							内面	隙間の開いた圏線ミガキ　省略化した連結輪状ヘラミガキ	
77	90	72	土師器皿	1.7 4.3	外内 灰白色	丸底で深みもあり口縁部は厚みをもち角ばる　完形	内外ともヨコナデ　ナデによる稜線		SK−97
77	90	73	土師器皿	1.3 8.2	外内 灰白色	均等な厚みで口縁まで続く　端部は丸い　完形	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−97
77	90	74	土師器皿	1.5 7.7	外内 にぶい黄橙色	底部中央がわずかに突出している 口縁部は内湾し角ばる　完形	内外とも口縁部ヨコナデ　強いナデによる鈍い稜線		SK−97
77	90	75	土師器皿	1.5 8.2	外内断 灰白色	平底よりわずかに屈曲し短く外上方へ伸びる 端部は内湾気味で角ばる	内外ともに口縁部ヨコナデ　鈍い稜線		SK−97
77	90	76	土師器皿	1.8 8.4	外内 灰白色	ゆるやかに口縁まで伸びる器壁は口縁部に厚みをもつ 端部は内湾し角ばる　完形	内外ともに口縁部ヨコナデ　底部に指押え		SK−97
77	90	77	土師器中皿	2.6 13.4	外内灰黄色 断灰白色	平底から屈曲して外上方へ開く 口縁端部は内湾気味でやや角ばる	内外ともに口縁部はヨコナデ 屈曲部に指押さえ		SK−97
77	90	78	土師器皿	1.5 7.8	外内断 にぶい橙色	平底から短く伸び端部はやや内湾気味に丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SK−97
77	90	79	土師器皿	1.8 7.8	外内断 灰白色	平底から伸び口縁部はやや角度をもって外上方に開く	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる鈍い稜線		SK−97
77	90	80	土師器皿	1.4 8.2	外内断 灰白色	やや楕円形 平底からゆるやかに伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる鈍い稜線		SK−97

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	90	81	土師器Ⅲ	1.2 8.4	外内断 灰白色	平底からゆるやかに開き口縁部やや角度をもって立ち上がり丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−97
		82	土師器Ⅲ	1.5 7.9	外内灰白色 断 にぶい黄橙色	ややいびつ　平底から短く開き内湾する口縁をもつ	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−97
		83	土師器Ⅲ	1.7 7.8	外内 灰白色	楕円形で平底からゆるやかに伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SK−97
	91	84	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.4 14.4	外内灰色 断灰白色	形骸化した高台から斜め上方に伸びる体部は口縁でわずかに直立したのち短く外反する沈線は上端に位置する	外面	口縁部やや強いナデ　1条のヘラミガキ　指押さえ	SK−100
							内面	隙間の開いた圏線ミガキ　省略化された連結輪状ヘラミガキ	
		85	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	5.1 13.6	外内暗灰色 断灰白色	高台と底部の高さは等しい　口縁部で厚みをもつ　明瞭な沈線有り	外面	指押さえ　水平方向のヘラミガキ	SK−101
							内面	隙間のある圏線ミガキと輪状の簡単なヘラミガキ	
		86	土師器Ⅲ	1.4 8.4	外内灰白色 断灰色	平底からゆるやかに口縁へ続く　端部はわずかに角ばる	外面	摩耗している　ナデによる稜線	SK−101
							内面		
		87	土師器Ⅲ	1.3 8.6	外内断 灰白色	底部中央がわずかに突出する　ゆるやかに口縁へ開き端部はやや角ばる	外面	摩耗している　ナデによる稜線	SK−101
							内面		
84		88	青磁Ⅲ (同安窯系) Ⅰ−1類	残高1.4	外内 暗オリーブ灰色 〜灰白色 断灰白色	体部中位で屈曲して体部と見込みの境に段を有する	外面	底部は露胎	SK−101
							内面	ヘラによる片彫り	
		89	瓦器椀 (大和) Ⅱ−A〜B	5.7 14.6	外内 暗灰色 断灰白色	底部から口縁まで均等な厚みの器壁は口縁部でわずかに外反し内面に沈線を有する	外面	体部1/2の高さまで3分割ミガキ	SK−108
							内面	密な圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	
78		90	瓦器椀 (楠葉) Ⅱ−2〜3	5.7 14.4	外内 オリーブ灰色 断灰白色	丁寧なつくりの高台と深さと丸みのある体部を有する厚い口縁部でわずかに外反し沈線は上端に位置する	外面	粗い3分割ミガキ　指押さえ	SK−108
							内面	やや隙間をもつ圏線ミガキ　連結輪状ヘラミガキ	
		91	土師器中皿	2.6 13.8	外内 灰白色	平底から直立気味に屈曲し口縁部は内湾し厚みは均等である　完形	内外ともにヨコナデ　屈曲部に指押え		SK−108
		92	土師器甕	14.5 12.4	外内 にぶい黄橙色 断灰白色	丸底から内湾し口頸部で「く」の字に屈曲したのち外上方に伸び端部は丸く終る　砂粒角閃石ともに目立つ	外面	体部に斜めのハケメ　頸部ヨコナデ	SK−111
							内面	指押さえ　ヘラケズリ　2ヶ所に穿孔	
		93	土師器甕	残高16.2 14.6	外内 灰白色	ほぼ球形の体部から内湾して伸びたのち口頸部で「く」の字に屈曲し端部は内側に肥厚し丸く終る	外面	体部に指押え　斜めのハケメ8本／0.9cm	SK−111
							内面	肩部に原体痕　ヘラケズリ	
		94	弥生土器	残高4.6 底径8.2	外内断 にぶい黄橙色	平底から外上方へ伸びる 砂粒が目立つ	外面	風化している	SK−120
							内面	指押さえ　原体痕	
78		95	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.9 14.6	外内 オリーブ黒色	低い高台から内湾し丸みをもって口縁へ続く 細く明瞭な沈線が上位に巡る　器壁は薄目で均等　完形	外面	指押さえ　3分割ミガキ	SK−131
							内面	やや密な圏線ミガキと時計回りの連結輪状ヘラミガキ	
		96	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.6 13.8	外内灰色 断灰白色	低く雑な高台から斜め上方に伸び口縁上端に沈線が巡る	外面	指押さえ　3分割ミガキ	SK−131
							内面	粗い圏線ミガキと時計回りの連結輪状ヘラミガキ	
		97	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	5.7 14.0	外内 オリーブ黒色 断灰白色	いびつであるが厚みのある器壁が口縁まで伸びる 浅い沈線が上端に巡る	外面	斜めに連続する指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	SK−131
							内面	密な圏線ミガキと時計回りの連結輪状ヘラミガキ	
79	92	98	瓦器Ⅲ	1.4 8.8	外内断 灰白色	平底から屈曲して短く外上方へ伸びる　端部は外反する	外面	内外ともに口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ	SD−59
							内面	太いジグザグのヘラミガキ(2mm幅)	
		99	瓦器Ⅲ	1.6 8.6	外内断 灰白色	中央のややふくれた底部から短く伸び口縁部はやや外反する	外面	内外ともに口縁部はヨコナデ	SD−59
							内面	粗いジグザグのヘラミガキ	
79		100	瓦器Ⅲ	1.8 8.5	外内灰色 断灰白色	平底から屈曲して上方へ短く伸び口縁部は外反してわずかに水平方向に伸びる　完形	外面	内外とも口縁部はヨコナデ	SD−59
							内面	太いジグザグのヘラミガキ(2mm幅)	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
79	92	101	瓦器皿	1.7 9.5	外内灰色 断灰白色	平底から屈曲して上方へ向い口縁は外反してわずかに水平方向に伸びる	外面		SD−59
							内面	細いヘラミガキがそれぞれ4往復し十字に重なる	
		102	瓦器皿	1.5 9.6	外内灰色 断灰白色	平底から外上方へ開き端部は丸く終る	外面	摩耗している	SD−59
							内面	判別できず	
		103	瓦器釜 大和B1	残高 7.0 口径 31.8 鍔径 33.8	外内断 灰白色	内湾する体部から口頸部でくの字に屈曲したのち端部は肥厚し丸く終る　内側に凹線を有する　鍔は水平に伸びる	外面	鍔と口縁の間に指押さえ　鍔は貼り付けナデ	SD−59
							内面	口縁部ヨコナデ	
79		104	土師器釜 河内B1	残高 5.2 口径 19.2 鍔径 23.8	外灰白色 内淡黄色 断灰色	口縁部内湾気味　口縁端部は外に肥厚し外に一条の沈線を成す　鍔は水平方向に伸び端部は丸い	外面	鍔は貼りつけナデ	SD−59
							内面	板ナデ　原体痕がわずかに残る	
		105	鉄製品(刀)	長さ 24.2 幅 5.5 厚さ 2.6	外 明黄褐〜黄褐色 断暗赤褐色		断面2等辺三角形		SD−59
85		106	土錘	長さ 4.7 最大径1.7	外灰白色	紡錘形	径0.4cmの紐穴		SD−59
79		107	瓦器椀 (大和) Ⅲ−E	3.8 9.8	外内断 灰白色	丸底から外上方に伸び端部やや外反して丸く終る 器壁は薄い	外面	指押さえ　形骸化した高台	SD−59
							内面	粗い圏線ミガキ	
		108	瓦器椀 (大和) Ⅲ−E	3.3 10.0	外内断 灰白色	丸底から外上方に伸び口縁でやや上向きに立ち上がり端部は丸く終る　端部に沈線巡る　器壁は薄い	外面	指押さえ	SD−59
							内面	隙間の開いた圏線ミガキが底部へ続く	
		109	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.8 12.6	外内灰色 断灰白色	偏平でややいびつ　ゆるやかに開いたのちやや上向きに立ち上がり端部は丸く終る　端部に沈線施される　高台は雑	外面	指押さえ　わずかなヘラミガキ	SD−59
							内面	隙間のある圏線ミガキと簡単な連結輪状ヘラミガキ	
		110	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.1 14.6	外内断 灰白色	偏平な器形　外上方に開いたのち端部やや上向きに終る　端部に沈線巡る	外面	指押さえ　数条のヘラミガキ	SD−59
							内面	やや隙間のある圏線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	
		111	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	4.2 13.4	外内灰色 断灰白色	平底から外上方にゆるやかに伸びたのち端部はやや外反して終る　端部に浅い沈線巡る	外面	分割性のあるヘラミガキ	SD−59
							内面	圏線ミガキと簡単な連結輪状ヘラミガキ	
79		112	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.4 13.6	外内灰色 断灰白色	底部からゆるやかに開いたのちやや角度をもって立ち上がり端部は外反し丸く終る　沈線上向きに巡る　口縁強いナデによる凹みを内面に有す	外面	わずかにヘラミガキが残る	SD−59
							内面	隙間の開いた圏線ミガキと省略化された連結輪状ヘラミガキ	
80		113	土師器中皿	2.4 12.0	外内 淡黄色	平底から屈曲して逆「ハ」の字に伸び口縁部は厚みをもち角ばって終る　完形	内外とも口縁部はヨコナデ　屈曲部に指押さえが顕著		SD−59
		114	土師器中皿	2.3 13.7	外内断 にぶい橙色	平底から屈曲して外上方へ開き口縁部では内湾しやや角ばる	内外とも口縁部はヨコナデ		SD−59
		115	土師器皿	1.9 11.8	外内断 灰白色	平底から逆ハの字に屈曲して開き端部は丸く終る	内外とも口縁部はヨコナデ　指押さえ多数		SD−59
		116	平瓦	破片 7.5×6.3 厚さ1.9	外褐灰〜灰白色 〜にぶい黄橙色 内断灰白色		凹面	布目の痕	SD−59
							凸面	縄目の痕	
79		117	土師器製塩壺	5.2 4.0	外 灰白色	丸底からほぼ垂直に立ち上がる		内外とも口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ	SD−59
80		118	土師器皿	1.5 6.0	外内断 淡黄色	平底から内側に屈曲し口縁はほとんど直行し角ばっている	内外とも口縁部はヨコナデ		SD−59
		119	土師器皿	1.4 7.7	外内 灰白色 〜浅黄橙色	平底から屈曲し短く内湾気味に終る 端部は角ばる　完形	内外とも口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SD−59
		120	土師器皿	1.2 7.9	外内 淡黄色	平底から屈曲して外上方へ向かう　口縁端部は厚みをもって角ばる　完形	内外とも口縁部はヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SD−59

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	92	121	土師器皿	1.5 8.5	外内 浅黄橙色	底部より口縁部の方に厚みをもつ端部は角ばる　完形	口縁部はナデによる稜線		SD−59
80		122	土師器皿	1.2 7.7	外内 淡黄色	底部中央がやや高い丸底からゆるやかに外上方へ伸び 口縁部は内湾気味で端部はやや角ばる	口縁部はナデによる稜線		SD−59
		123	土師器皿	1.5 8.2	外内 浅黄橙色 断灰白色	平底から屈曲し外反して口縁へ続く　端部は角ばる 完形	口縁部に鈍い稜線		SD−59
		124	土師器皿	1.6 8.6	外内 淡黄色	平底から屈曲し直立気味の端部を有する　端部は角ば る　完形	口縁部に鈍い稜線		SD−59
		125	土師器皿	1.5 7.9	外内 淡黄色	丸みをもち端部は内湾気味に終る	口縁部に鈍い稜線		SD−59
80		126	土師器皿	1.3 8.4	外内 淡黄色	平底の底部より口縁部は外上方へ伸びる　ややいびつ	口縁部はナデによる稜線		SD−59
		127	土師器皿	1.5 8.2	外内 淡黄色	底部中央がすこし高くなり丸みをおびて口縁へ続く 端部は全体に厚い	口縁部はナデによる稜線		SD−59
		128	土師器皿	1.6 8.0	外内 浅黄橙色	平底から内湾気味に口縁へ続く 端部は尖る	口縁部はナデによる稜線		SD−59
		129	土師器皿	1.8 8.2	外内 灰黄色	平底から短く外上方に伸び端部は上方に伸びる 底部より口縁部の方が器壁は厚い	口縁部はナデによる稜線		SD−59
		130	土師器皿	1.6 7.7	外内断 灰白色	平底から短く上方に伸び端部は内湾気味で丸く終る	摩耗している		SD−59
		131	土師器皿	1.3 8.0	外内 にぶい黄橙色 断浅黄橙色	偏平で口縁はごく短く外上方に伸びる	内外とも口縁部はヨコナデ　屈曲部に鈍い稜線		SD−59
		132	土師器皿	1.1 8.0	外内 淡黄色	偏平でわずかに屈曲し外上方に伸びる 端部は上方に向かう	内外とも口縁部はヨコナデ		SD−59
		133	土師器皿	1.6 8.0	外内 浅黄色 断灰白色	いびつである　口縁部に厚みをもち内湾気味　端部は 角ばる	内外とも口縁部はヨコナデ		SD−59
		134	土師器皿	1.2 7.8	外内断 灰白色	凹凸の激しい底部から浅く開き端部は丸く終る	内外とも口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SD−59
		135	土師器皿	1.3 8.0	外灰白色 内淡黄色 断灰白色	楕円形　平底から短く内湾気味に開く　端部は上向き	内外とも口縁部はヨコナデ		SD−59
		136	土師器皿	1.4 8.1	外内断 淡黄色	凹凸のある底部から浅く開き端部はやや角ばる	内外とも口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SD−59
		137	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色	平底からゆるやかに逆「ハ」の字に開き端部はやや内 湾気味に丸く終る	内外とも口縁部はヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SD−59
		138	土師器皿	1.4 8.2	外内断 灰白色	凹凸のある底部からゆるやかに開く　内面底部にナデ による凹面あり	内外とも口縁部はヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SD−59
		139	土師器皿	1.4 8.0	外内灰白色 断 にぶい黄橙色	平底からゆるやかに開き端部は丸く終る　口縁部の器 壁は厚め	内外とも口縁部はヨコナデ		SD−59
81	93	140	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	5.1 14.3	外内灰色 断灰白色	全体にいびつ　底部からゆるやかに外上方に伸びたのち1/2位の所から急 勾配で立ち上がり端部はやや上向きに丸く終る　沈線あり	外面	指押さえ　3分割の粗いヘラミガキ	SD−68
							内面	やや密な圏線ミガキと規則制のない連結輪状ヘラミガキ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		141	瓦器椀 (楠葉) II－3	5.1 14.3	外内灰色 断灰白色	底部からゆるやかに開いたのち口縁部は器壁肥厚する 端部下部に浅い沈線巡る　高台の断面は台形	外面 内面	指押さえ　わずかなヘラミガキ やや密な圏線ミガキと太い連結輪状ヘラミガキ	SD－68
81		142	瓦器椀 (楠葉) III－1	4.8 14.2	外内灰色 断灰白色	底部からゆるやかに外上方に開き1/2位のところから急勾配で立ち上がり 口縁部はほぼ垂直気味に伸び端部は丸く終る　沈線あり	外面 内面	指押さえ　わずかなヘラミガキ 密な圏線ミガキと省略化された連結輪状ヘラミガキ	SD－68
		143	瓦器椀 (大和) III－B	4.8 14.4	外内断 灰　色	底部からゆるやかに開いたのち1/2位の所から垂直気味に立ち上がり端部 は丸く終る　上位に沈線あり　口縁部の器壁は肥厚する	外面 内面	指押さえ　口縁部のヘラミガキは不鮮明 やや密な圏線ミガキと省略化された連結輪状ヘラミガキ	SD－68
		144	瓦器椀 (大和) III－A(新)	5.1 14.4	外内 灰　色	底部から内湾気味に外上方に開き口縁部は垂直気味に 立ち上がり端部は下向きに丸く終る　端部沈線巡る	外面 内面	指押さえ　粗い分割性のあるヘラミガキ やや密な圏線ミガキと連結輪状ヘラミガキ	SD－68
81		145	瓦器椀 (大和) III－A(新)	4.7 14.2	外内灰色 断灰白色	ていねいな作り　器壁は厚め　体部1/2位のところから急 勾配に立ち上がり端部は上向きに終る　端部に沈線	外面 内面	口縁部に粗いヘラミガキ 密な圏線ミガキと太い簡単な連結輪状ヘラミガキ	SD－68
		146	瓦器椀 (大和) III－A(新)	5.3 13.8	外内 灰　色	全体的にかなりいびつ　口縁部内面ヨコナデによる凹 面有す　端部上向きに終わる　沈線あり　完形	外面 内面	多数の指押さえ　分割性のないヘラミガキ 隙間のある圏線ミガキと長楕円状ヘラミガキ	SD－68
81		147	瓦器椀 (大和) III－A(新)	4.8 13.8	外内灰色 断灰白色	内湾する体部から1/2位のところで急勾配に立ち上が り端部は上向きに丸く終る　端部に沈線巡る	外面 内面	指押さえ　粗いヘラミガキ 隙間のある圏線ミガキと規則性のない連結輪状ヘラミガキ	SD－68
		148	白磁椀 IV－1類	残高 3.9 底径 5.7	外内断 灰白色	高台は垂直ぎみに立ち上がり体部は外上方に伸びている 外面高台と底部付近は露胎	外面 内面	 体部下位に段を有する	SD－68
81	93	149	土師器中皿	2.6 13.6	外内断 灰白色	平底から逆ハの字に屈曲し口縁は内湾し端部はやや角 ばる	内外とも口縁部はヨコナデ		SD－68
		150	土師器中皿	1.6 13.6	外断 灰白色 内淡黄色	平底から屈曲して外上方へ開く	内外とも口縁部はヨコナデ　屈曲部に指押さえ顕著		SD－68
		151	土師器中皿	2.4 13.5	外内断 灰白色	薄い平底から外上方へ開き厚い口縁端部は内湾し角ばっ ている	内外とも口縁部はヨコナデ		SD－68
		152	瓦器皿	1.7 8.8	外灰色 内灰色～灰白色 断灰白色	底部から外上方に伸び口縁部で外反し端部は上向き丸 く終る	摩耗している		SD－68
		153	土師器皿	1.3 8.7	外浅黄色 灰白色 内灰白色	底部中央凹状より外上方へ伸び端部直行　丸く終る	摩耗している		SD－68
81		154	土師器皿	1.5 8.6	外内 灰白色	平底から外上方へ短く伸び口縁は直行　端部はやや尖 り気味　完形	摩耗している		SD－68
		155	土師器皿	1.4 8.5	外内断 淡黄色	平底より外上方へ短く伸び口縁部は直行気味	摩耗している		SD－68
		156	土師器皿	1.3 8.7	外内 灰白色～淡黄色	平底より外上方に伸び端部は内湾気味　器形いびつ	摩耗している		SD－68
81		157	土師器釜 大和B1	残高 8.3 口径 19.0 鍔径 21.6	色にぶい黄橙色 褐灰～黒灰色 内灰白～にぶい黄橙色 ～灰黄褐～褐灰色 断灰黄褐色	器形いびつ　鍔は水平方向に伸び口縁部は内湾して立 ち上がりその後外反　口縁端部は内側に折り返し	外面 内面	内外の1部に煤が付着 摩耗のため調整不明	SD－68
		158	常滑焼甕	残高 6.7 34.6	外内 灰オリーブ色 断灰白色	口縁部のみ　短い立ち上がりから口縁端部は水平方向 に伸び薄く尖り気味に終る	外面 内面	内外とも口縁部ヨコナデ 	SD－68
82	94	159	須恵器提瓶	残高 11.0 7.4	内外断 灰白色	肩部よりやや下方に把手の根幹部が残る 口縁部は直立したのち外反する	外面 内面	体胴部にカキ目 	SR－02
		160	須恵器杯蓋	3.9 11.9	外内断 灰　色	直立する口縁から屈曲をみせ偏平な天井部へ続く 口縁端部は内傾する面を持つ	外面 内面	回転ヘラケズリ　屈曲部に稜線あり ナデ	SR－01

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
82	94	161	須恵器杯蓋	5.3 14.0	外内灰色 断灰白色	直立する口縁部から屈曲し丸みのある天井部へ続く 口縁端部は内傾し段をなす　厚く大きい	外面	天井部回転ヘラケズリ　屈曲部に稜線あり	SR−01
							内面	ナデ	
		162	須恵器杯蓋	5.2 11.4	外内断 灰　色	口縁端部は内傾する端面を有す　直立する口縁部から 屈曲して天井部へ　中央凹状のつまみを付す	外面	天井部回転ヘラケズリ　屈曲部の稜線は鈍い	SR−02
							内面	ナデ	
		163	須恵器杯身	残高 3.3 13.2	外内断 灰　色	平底からゆるやかに外に続き受部は薄く外上方に伸びる　立ちあ がりはハの字に屈曲し端部は鋭く内傾する端面を有する	外面	底部は回転ヘラケズリ　受部立ちあがり回転ナデ	SR−01
							内面	ナデ	
		164	須恵器杯身	3.8 12.8	外内断 灰　色	立ち上がりは短く「ハ」の字に屈曲し端部は鋭く内傾する端面を 有する　受部は水平に短く伸び断面三角形を成す　底体部	外面	底部は回転ヘラケズリ	SR−02
							内面	ナデ	
		165	土師器杯	5.0 17.0	外内灰白色 断浅黄橙色	大ぶりで厚みをもつ　ゆるやかに内湾して伸び端部は 丸く終る	外面	内外とも口縁部ナデ	SR−02
							内面	中心から放射状にナデ	
		166	土師器甕	残高 16.6 14.6	外内灰白色 断灰色	体部から内湾気味に伸び口頸部でくの字に屈曲したの ち外上方に伸び端部は丸く終る　煤は密に付着	外面	ハケメ（原体幅1.1cm）	SR−02
							内面	口縁部ヨコ方向にナデ　体部は斜めのヘラケズリ	
83		167	瓦器椀 （大和） Ⅲ−A（新）	4.3 13.2	外内 灰　色	全体にややいびつ　浅く開いたのち1/2位のところから角度をもって立ち 上がり端部は丸く終る　高台は低く雑な作りで風化し剥離	外面	指押さえ　わずかなヘラミガキ	SP−2505
							内面	粗い圏線ミガキと規則制のない連結輪状ヘラミガキ	
		168	土師器中皿	2.6 12.3	外内 灰白色	凹凸のある平底から外上方へ伸びたのち口縁部は上方 に伸び角ばる　完形	摩耗しているが口縁部にナデのあと		SP−2505
		169	土師器皿	1.4 8.1	外内 灰黄色	平底からゆるやかに口縁に続き端部は内湾して角ばる 完形	内外ともに口縁はヨコナデ　鈍い稜線をもつ		SP−2505
		170	土師器皿	1.4 8.1	外灰黄色 内淡黄色	平底から外上方に短く開き口縁部は直行気味　完形	内外ともに口縁部はヨコナデ		SP−2505
		171	土師器皿	1.5 8.3	外内断 浅黄橙色	平底からゆるやかに外上方に開き端部はわずかに直行 気味	ヨコナデ		SP−2505
		172	土師器中皿	1.9 12.1	外浅黄橙色 内断灰白色	平底から屈曲して外上方へ開き端部は直立し角ばって いる	内外とも口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SP−2506
		173	瓦器椀 （大和） Ⅲ−A（新）	4.3 13.6	外内断 灰白色	ややいびつ　底部からほぼまっすぐに外上方に開く 口縁部でやや角度をもって立ち上がり端部は丸く終る	外面	多数の指押さえ　ヘラミガキは不鮮明	SP−2506
							内面	一部にヘラミガキが残る	
		174	土師器皿	1.2 8.4	外灰白色 内断 浅黄色	平底から浅く開きやや内湾して角ばって終る	内外とも口縁部はヨコナデ		SP−2531
		175	土師器皿	1.3 8.0	外内断 浅黄橙色	底部中央ややふくらんで口縁は逆「ハ」の字に開き端 部は丸く終る	内外とも口縁部はヨコナデ		SP−2531
		176	土師器皿	1.3 8.0	外内灰白色 断浅黄灰色	平底から短く開き端部はやや角ばる　口縁部は器壁が やや薄い	内外とも口縁部はヨコナデ		SP−2640
83		177	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	5.8 14.4	外にぶい橙色 内オリーブ黒色	平底から外上方に立ち上がり端部は丸く終る　端部下 方に沈線巡る　高台は高く丁寧な作り	外面	口縁部に燻し	SP−2675
							内面	緻密なヘラミガキ　内面全体に燻し	
		178	瓦器椀 （大和） Ⅲ−A（新）	5.1 14.6	外内断 灰白色	平底からゆるやかに伸びたのち1/2位から急角度で立ち上 がり端部はやや上向きに終る　端部に沈線あり　高台は低め	外面	指押さえ　口縁部に粗いヘラミガキ	SP−2828
							内面	密な圏線ミガキと省略化された太い連結輪状ヘラミガキ	
83		179	紡錘車	長さ 2.95 最大径3.7	外 にぶい黄橙色	球状土製	径0.8cmの紐孔		SP−2510
		180	土　錘	長さ 3.65 最大径1.7	外 灰白色	紡錘形	径0.6cmの紐孔		SP−2702

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
85	94	181	土錘	長さ 4.95 最大径1.9	外灰白、黄灰、灰黄色 内断灰黄色	紡錘形	径0.5cmの紐孔		Ⅲ層
	95	182	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	3.9 13.2	外内 緑灰色 断灰白色	形骸化した高台から内湾しながら外上方に開く体部と外反気味に終る口縁を有する　沈線は上端部に位置する	外面	凹凸のある器壁　指押さえと不規則なヘラミガキ	ST－02
							内面	粗略な圏線ミガキが見込みまで続く	
		183	瓦器椀 (大和) Ⅲ－D	3.9 11.0	外内灰色 断灰白色	小ぶり　形をなさない高台から薄い器壁が外上方へ伸びる　口縁部は外反気味で沈線が１巡する	外面	指押さえ　口縁部にわずかに粗いヘラミガキ	ST－02
							内面	極めて粗略な圏線ミガキ	
		184	瓦器椀 (和泉) Ⅳ－1	3.5 11.4	外内 暗灰色 断灰白色	簡単な高台と厚みをもって終る口縁をもつ	外面	連続性のある指押さえ　形骸化した高台	ST－02
							内面	ミガキらしいものは２条	
		185	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	3.2 12.0	外内断 灰白色	高台より底部の方が低い位置にある　形骸化した高台から凹凸の激しい器壁が外上方に伸びる　沈線は上位にある	外面	指押さえ　わずかにヘラミガキが認められる	ST－02
							内面	下半分に圏線ミガキと省略化された連結輪状ヘラミガキ	
		186	瓦器椀 (大和) Ⅲ－E	3.5 10.4	外内灰色 断灰白色	形骸化した高台と底部は等しい位置にある　均等な厚みで口縁まで続く　上端部に沈線がある	外面	高台と底部に指押さえ	ST－02
							内面	２～３条の圏線ミガキと螺旋状のヘラミガキ	
86		187	瓦器椀 (楠葉) Ⅲ－3	5.0 12.8	外褐灰色 断内 灰白色	低い高台から外上方に伸びわずかに屈曲して上方に伸びる　薄い口縁は内湾気味	外面	連続性のある指押さえ　わずかなヘラミガキ	ST－02
							内面	数条の圏線ミガキ　見込みはジグザグのヘラミガキ	
		188	土師器中皿	2.5 11.7	外内灰白色 断浅黄橙色	平底から直立に近い立ち上がりをみせ、外反しながら口縁部は上方に向かう	内外ともに口縁部はヨコナデ		ST－02
		189	土師器皿	1.4 8.4	外内 淡橙色 断灰白色	底部が厚く丸みがある　わずかに屈曲して外方に伸び口縁部は直行気味で丸く終る	強いナデによる稜線をもつ		ST－02
		190	土師器皿	1.5 8.4	外内断 灰白色	平底からわずかに屈曲して短く外上方に伸びる端部は丸みをおびる	ヨコナデ		ST－02
		191	土師器皿	1.5 7.5	外内 灰白色～淡赤橙色 断浅赤橙色	丸みのある底部から屈曲して外上方に伸び端部は薄く丸い	内外とも口縁部ヨコナデ		ST－02
		192	土師器皿	1.6 8.0	外内断 にぶい橙色	丸みのある底部と厚みをもつ口縁を有する端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　鈍い稜線をもつ		ST－02
		193	土師器皿	1.3 7.6	外断 灰白色 内浅黄色	厚みのある平底から屈曲し短く外上方に伸びたのち口縁部は内湾気味	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		ST－02
86		194	土師器皿	1.3 8.5	外内 灰白色	平底からゆるやかに外上方へ開く	内外とも口縁部ヨコナデ		ST－02
		195	土師器皿	1.4 7.9	外内 灰白色	偏平でいびつ　口縁に厚みがある　平底から屈曲して短く外上方に開く　端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		ST－02
		196	土師器皿	1.6 7.6	外内 灰白色	平底から屈曲し短く上方に向かい口縁部は内湾気味に丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		ST－02
86		197	瓦器足釜	残高 16.2 口径 19.0 鍔径 24.1	外内 暗灰～黒色	扁平球状の体部にやや上向きの短い鍔を持ち口縁端部は内傾する	外面	煤が密に不着　調整不明　脚部は貼り付け	ST－02
							内面	不明	
		198	砥石	長さ11.08 幅 5.8 厚さ 1.6	外内 灰白色		両面使用痕		ST－02
		199	瓦器皿	2.0 9.8	外内 暗灰色 断灰白色	底部中央がわずかに高く口縁部で反外する　細い沈線が１条残る	外面	底部に指押さえ　口縁部に４、５周のヘラミガキ	ST－02
							内面	４往復ジグザグのヘラミガキが十字に重ねられる	
		200	瓦器皿	1.5 9.2	外内灰色 断灰白色	平底から屈曲し外上方へ短く伸び口縁でわずかに外反する	外面	口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ	SE－28
							内面	緻密なジグザグのヘラミガキ　口縁部圏線ミガキ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		201	瓦器皿	2.1 9.8	外内灰色 断灰白色	深みのある丸底からゆるやかに外上方に向かい口縁部でわずかに外反する	外面	口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ	SE−28
							内面	緻密なジグザグのヘラミガキ	
87		202	瓦器皿	2.0 9.6	外内灰色 断灰白色	平底から外上方へ開き口縁部は外反する　端部は丸く終る	外面	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ	SE−28
							内面	隙間のあるジグザグのヘラミガキ	
		203	瓦器皿	11.6 9.2	外内断 灰　色	平底から屈曲して外反し口縁端部はわずかに水平方向に伸びる	外面	口縁部ヨコナデ	SE−28
							内面	口縁部に6〜7条の圏線ミガキ	
87		204	瓦器椀 (大和) II−B	5.3 14.8	外内断 灰白色	「ハ」の字に開く高台は低い　厚みのある体部は内湾しながら上方へ開く　口縁部でわずかに外反する　沈線は有り	外面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	SE−28
							内面	隙間のある圏線ミガキ　見込みに粗いジグザグがわずかに残る	
86	95	205	須恵器甕	破片 13.7×7.2	外内灰色 断赤褐色	肩部のみ	外面	縄席文	SE−28
							内面	ナデ	
		206	土師器皿	1.8 8.6	外内 淡黄色 断灰白色	肉厚で口縁まで均等に続く 端部はやや角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SE−22
92		207	土　錘	長さ 3.8 最大径 0.8	外灰白色 〜灰色	紡錘形	径0.25cmの紐孔		SE−31
87		208	黒色土器A類 畿内系III類	5.6 18.2	外内 浅黄橙〜黒褐色 断黒褐色	墨書「福(?)」あり大ぶりな器　内湾気味に立ち上がり口縁は直行　端部は丸く終る	外面	口縁部わずかに燻し　貼り付け高台	SE−31
							内面	密な圏線ミガキと見込みのジグザグヘラミガキ　全面燻し	
		209	黒色土器A類 畿内系III類	残高 2.0 底径 10.0	外にぶい黄橙色 内黒色 断褐灰色	墨書「西」あり	外面	底部近くまでヘラミガキ	SE−31
							内面	見込みは密なジグザグに連結輪状のヘラミガキを重ねる	
	96	210	土師器中皿	2.2 12.4	外内浅黄橙〜にぶい橙色 断 灰白〜灰色	平底より屈曲して体部が立ち上がる　端部は内湾気味に終る	内外ともに口縁部ヨコナデ		SK−56
		211	土師器中皿	2.1 12.8	外内断 灰白〜浅黄橙色	平底から屈曲して口縁部は外上方に伸び端部は丸みをもって終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　その下に連続した指押え		SK−56
		212	土師器中皿	2.2 11.9	外内断 淡黄色	平底の底部より口縁部がやや内湾する 端部は丸みをもって終る	内外ともに口縁部ヨコナデ		SK−56
		213	須恵器杯身	残高 1.3 底径 9.6	外内断 灰〜緑灰色	高台は台形で貼り付け高台	外面	貼り付け高台	SK−56
							内面	ナデ	
		214	瓦器椀 (楠葉) III−1	3.9 12.5	外内 灰白〜灰色 断灰白色	体部は内湾して口縁に続く　端部内部に沈線一条巡る 高台は断面逆三角形　全体にいびつ	外面	口縁部わずかにヘラミガキ	SK−56
							内面	隙間の開いた圏線ミガキ　省略化された連結輪状ヘラミガキ	
		215	瓦器椀 (大和) III−C	4.2 13.2	外内灰白〜オリーブ灰色 断灰白色	やや外反する端部上方に浅い一条の沈線 断面逆三角形の貼りつけ高台	外面	多数の指押さえ　口縁部にわずかのヘラミガキ	SK−56
							内面	隙間の開いた圏線ミガキ	
		216	土師器皿 (墨書)	1.0 8.8	外内灰白 断淡黄色	平底より口縁部が短く外上方に伸びる　端部は尖り気味	口縁部ナデによる鈍い稜線　底部に墨書が認められる		SK−56
		217	白磁椀 VIII−1類	残高 4.05 13.5	外内断 灰白色	口縁で外反し端部は上向き面を成す	外面	ヘラケズリ	SK−56
							内面		
		218	土師器皿	1.5 8.7	外淡黄色 内浅黄色	平底底部よりななめ前方へ内湾に伸びる口縁部に至る 端部は内側へ肥厚　器形は整っている	内外ともに口縁部ヨコナデ		SK−56
		219	土師器皿	1.4 8.6	外淡黄色 断灰白色	ややいびつ　平底から屈曲し外上方へ伸び端部はわずかに外反する　均等に肉厚である	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−56
		220	土師器皿	1.1 8.2	外褐灰色 断褐灰色	平底から屈曲し短く外上方に伸びる　端部は丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ		SK−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
	96	221	土師器皿	1.5 8.4	外浅黄橙色	やや肉厚　端部は丸い	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		222	土師器皿	1.4 8.4	外浅黄橙色 内浅黄橙色	全体に肉厚である 口縁部は外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		223	土師器皿	1.4 8.2	外灰白色 内にぶい黄色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く納まる	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		224	土師器皿	1.4 8.1	内外断 浅黄橙色	平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸び端部は直行気味で丸く納まる	内外ともに口縁部はヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		225	土師器皿	1.3 7.0	外内断 淡黄色	平底からは外上方に伸び端部は丸く終る　器形いびつ	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		226	土師器皿	1.0 8.1	外内断 浅黄橙	平底から外反しながら口縁へ　口縁ではわずかに水平方向に伸び端部は丸く終る　底部浅い	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		227	土師器皿	1.5 8.2	外浅黄橙〜にぶい黄橙色 内橙色,にぶい黄橙色 断橙色,灰白色	底部より口縁部が外上方へ伸びる　端部は角ばって肉厚である	内外ともに口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		228	土師器皿	1.5 8.4	外内灰白色 灰褐色 断灰白色	底部がすこし突出し口縁部は外上方に伸び端部直行気味で丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		229	土師器皿	1.5 8.3	外内断 灰白〜褐灰色	底部中心からゆるやかに外上方の口縁部に続き端部は厚みをもって丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		230	土師器皿	1.5 8.0	外浅黄橙色 内浅黄橙色 断灰白色	平底の底部より屈曲して立ち上がる 端部はやや丸みを帯びている	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		231	土師器皿	1.4 7.7	外内 にぶい橙色 断灰白色	丸底気味の底部から口縁部にゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		232	土師器皿	1.4 8.0	外褐灰〜黒色 内明褐灰〜褐灰色 断褐色	口縁部がやや内湾する　肉厚	内外ともに口縁部はヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		233	土師器皿	1.3 8.4	外内断 浅黄橙〜褐灰色	平底の底部　口縁部と体部の境に明瞭な段がつく	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		234	土師器皿	1.3 8.1	外内断 淡黄色	底部より外上方へ伸び端部は尖り気味である	内外ともに口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		235	土師器皿	1.5 7.9	外内断 淡黄色	平底から口縁部は外上方に伸び端部は丸く納められている　器形はいびつ　口縁部肥厚	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		236	土師器皿	1.0 7.9	外内断 浅黄色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は上方に向かう	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		237	土師器皿	1.5 8.2	外内 淡黄〜黄灰色 断黄灰色	平底から屈曲して口縁部は外上方へ伸び端部は角ばる 全体に肉厚	内外ともに口縁部はヨコナデ	SK−56
		238	土師器皿	1.7 8.2	外 にぶい黄橙〜灰色 内浅黄橙〜灰白色	丸底から口縁部へとゆるやかに外上方に伸び端部は尖りぎみ　肉厚	内外ともに口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		239	土師器皿	1.5 8.0	外内断 灰白色	底部から外上方へ伸び口縁部は内湾し端部は丸く終る	内外ともに口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		240	土師器皿	1.2 8.3	外淡黄色 内断 浅黄橙色	底部から短かく屈曲し口縁端部は尖る	内外ともに口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
	96	241	土師器皿	1.3 8.5	外内断 浅黄橙色	平底から外上方へ伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　屈曲部に鈍い稜線	SK−56
		242	土師器皿	1.3 8.6	外内断 淡黄〜浅黄橙色	平底から外上方へ伸び口縁部はわずかに内湾し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	〃
		243	土師器皿	1.4 8.0	外灰白色 内浅黄色 断灰白〜灰色	平底から外上方に伸び口縁部は内湾し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SE−56
		244	土師器皿	1.0 8.2	外内淡橙〜にぶい橙色 断灰黄色	平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸い　器高は低く器壁は薄い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SE−56
		245	土師器皿	1.5 8.0	外内断 淡黄〜灰白色	底部からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る　全体的に肉厚	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SE−56
		246	土師器皿	1.4 7.8	外内 浅黄橙色	全体にいびつ　平底から外上方へ伸び端部は直行気味丸く納まる	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SE−56
		247	土師器皿	1.2 8.2	外内 灰白色	全体にいびつ　平底から外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SE−56
89		248	土師器皿	1.3 7.7	外内淡黄色 淡赤、橙色 にぶい橙色	平底から外上方へ伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ 屈曲部にナデによる鈍い稜線	SE−56
		249	土師器皿	1.3 8.5	外内断 淡黄色〜浅黄橙色	底面がやや凹凸している 口縁部は外上方に伸び端部はやや尖り気味	内外ともに口縁部ヨコナデ 屈曲部にナデによる鈍い稜線	SE−56
89		250	土師器皿	1.4 8.2	外内 浅黄橙色	肉厚で平底から屈曲して外上方へ伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SE−56
		251	土師器皿	1.3 7.8	外内断 浅黄橙色	底部より屈曲し口縁部へ続く 器形はいびつ	内外ともに口縁部ヨコナデ 屈曲部にナデによる鈍い稜線	SE−56
		252	土師器皿	1.3 8.2	外灰黄色 内にぶい橙色 断灰白色	平底より外上方へ立ち上がる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SE−56
		253	土師器皿	1.0 8.4	外内 灰白色	底面は少し凹凸が見られる　口縁は外上方へ伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SE−56
		254	土師器皿	1.6 7.8	外内断 浅黄橙色	丸底から外上方へ伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SE−56
		255	土師器皿	1.4 8.1	外内 灰白色〜灰色	平底から屈曲し外上方へ短かく伸び端部は内湾し尖り気味	内外ともに口縁部ナデ　ナデによる稜線	SE−56
		256	土師器皿	1.1 7.7	外灰白色 内にぶい橙色 断灰白色	厚みのある平底から屈曲し外上方へ開き口縁部は内湾し端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線	SE−56
		257	土師器皿	1.2 8.0	外浅黄橙色 内にぶい橙色 断褐灰色	平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く納められる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SE−56
		258	土師器皿	1.2 7.8	外内断 灰白色〜浅黄橙色	平底であるが底部中央部がやや上がり気味 口縁部が短く外上方へ伸びる　端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SE−56
89		259	土師器皿	1.4 7.7	外内断 灰白色	平底より短く外上方へ伸びる 端部は丸みがあり肉厚である	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SE−56
		260	土師器皿	1.4 8.0	外灰白色 内黄褐色 断灰白色	器形いびつ　平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SE−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
	96	261	土師器皿	1.3 8.4	外にぶい黄橙色 にぶい橙,褐色 内断浅黄橙色	平底から外上方へ伸び端部は丸く納まる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		262	土師器皿	1.6 8.1	外内淡黄色 黄褐色 断淡黄色	丸底からゆるやかな立ち上がりを見せ口縁部へ続く端部は上方へ伸び丸く納められている	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		263	土師器皿	1.5 7.6	外浅黄橙色 内浅黄橙～ にぶい橙色 断浅黄,灰白色	平底から屈曲して外上方に伸び口縁部は内湾し端部は丸い	内外ともに口内縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		264	土師器皿	1.5 8.2	外灰白色 内断 灰黄色	肉厚　平底から外上方に伸びる 口縁端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		265	土師器皿	1.4 8.4	外内断 灰白色	底部より外上方へ開く	内外ともに口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線	SK−56
		266	土師器皿	1.5 7.7	外にぶい黄橙色 淡赤橙色 内にぶい橙色 断にぶい橙色	底部より外上方に伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ　指押え　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		267	土師器皿	1.2 8.3	外内断 浅黄橙色	丸底からゆるやかに外上方に伸び口縁はわずかに上へ尖り気味	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		268	土師器皿	1.2 8.2	外内淡橙色 断明褐灰色	平底から短かく屈曲し口縁は内湾気味　端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		269	土師器皿	1.1 8.3	外灰白色 内浅黄橙色 断灰白色～褐灰色	中央部が突出する底部から短かく屈曲し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる鈍い稜線	SK−56
		270	土師器皿	1.2 8.2	外淡橙色 内灰白色 断灰白色	中央部が突出する底部から屈曲し外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		271	土師器皿	1.2 8.2	外内灰白～ 褐灰色 断灰白色	丸底から口縁部はゆるやかに外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		272	土師器皿	1.0 8.2	外内 にぶい橙色 断灰白色	器形はいびつ	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
89		273	土師器皿	1.3 8.5	外内 灰白色,浅黄橙色	中央の突出した底部から屈曲し端部はやや尖る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		274	土師器皿	1.4 8.4	外内断 灰白色	底部中央が突出しなだらかに内湾しながら口縁部へ続く　端部は上方に尖る	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		275	土師器皿	1.5 8.2	外内褐灰色～ 浅黄橙色 断浅黄橙色	丸底からゆるやかに外上方へ伸び口縁は内湾し端部は尖る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		276	土師器皿	1.2 7.9	外内断 灰白色	器壁は均等に薄い　丸底からゆるやかに外上方に伸び、口縁端部は角ばる	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		277	土師器皿	1.3 7.5	外内断 浅黄色～ 灰白色	平底から短く屈曲し口縁はやや角ばる	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		278	土師器皿	1.3 8.0	外内断 淡橙色	肉厚で口縁まで均等に続く　ややいびつである　底部にワラ？状の跡あり	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		279	土師器皿	1.1 8.0	外内淡黄,灰白 黄灰色 断灰白色	器形いびつ　平底から外上方に伸び端部は直行気味で丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		280	土師器皿	1.2 8.4	外内断 浅黄橙色	全体にいびつ　底部中央部はやや突出　口縁部は短く外方へ伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
	96	281	土師器皿	1.3 8.1	外内灰白色 断淡黄橙色	丸底、口縁部は短く外方に伸びる　端部はやや内側に湾曲する	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		282	土師器皿	1.6 8.3	外内断 淡黄橙色	雑な作り　丸底から短く外方に伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		283	土師器皿	1.3 7.8	外内断 淡黄橙色	平底の底部、口縁部は短く外上方に伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
	97	284	土師器中皿	1.9 12.1	外内断 淡黄橙色	底部からなだらかに内湾　端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線	SK−56
		285	土師器中皿	1.9 11.8	外内断 灰白〜にぶい黄橙色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は尖り気味　器壁肉厚	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		286	土師器中皿	1.5 11.5	外内断 黄灰〜灰黄色	中央が突出する底部から屈曲して口縁部が外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　底部に多数の指押え	SK−56
		287	土師器中皿	2.5 12.2	外内断 灰白色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く終る　器形はいびつ	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
90		288	土師器中皿	2.1 12.2	外内断 灰白色	平底から屈曲して外上方に伸び、端部は丸く終る　全体に肉厚	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線　底部に指押さえ	SK−56
		289	土師器皿	1.7 8.6	外灰白〜淡黄色 黄灰色 内灰白色	肉厚で端部は丸みがある	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		290	土師器皿	1.3 8.2	外灰白〜浅黄橙色 内浅黄橙色 断灰白〜浅黄橙色	平底から屈曲し外上方へ伸び口縁部は内湾し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線	SK−56
		291	土師器皿	1.1 8.4	外内浅黄橙〜淡黄色 断灰白色	平底から短く屈曲し口縁端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		292	土師器皿	1.1 8.0	外にぶい橙色 内明褐灰色 断灰白色	平底から屈曲し立ち上がる 口縁部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		293	土師器皿	1.7 7.6	外内 灰白〜淡黄色 断淡黄〜褐色	丸底から外上方に開き端部は丸い 器壁に厚みをもつ	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		294	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色	平底からゆるやかに屈曲し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		295	土師器皿	1.3 7.9	外内断 にぶい橙色	器形はいびつ　底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がる　端部は丸く納められている	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		296	土師器皿	1.2 7.9	外内浅黄橙色 断浅黄橙色〜灰白色	丸底	内外ともに口縁部ヨコナデ　指押え　ナデによる明瞭な稜線	SK−56
		297	土師器皿	1.4 7.8	外内灰黄褐色 黒褐色 断にぶい黄色	丸底からゆるやかに外上方へ開き端部は丸く終わる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		298	土師器皿	1.3 8.0	外内浅黄橙色 断浅黄橙色〜灰白色	高さはなく肉厚 端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		299	土師器皿	1.5 8.2	外浅黄橙色 内にぶい黄橙色 断灰白色	平底より屈曲し短く立ち上がる 口縁部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		300	土師器皿	1.3 7.8	外にぶい橙色 内灰黄褐色 断灰白色	平底より外上方へ短かく開く 口縁端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線	SK−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
		301	土師器皿	1.3 8.2	㋐㋑ 灰白～淡黄色 ㋒灰白～灰色	平底　体部が内湾気味に立ち上がる　口縁端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		302	土師器皿	1.1 8.0	㋐灰白～黄灰色 ㋑灰黄色 ㋒灰白色	丸底より口縁部が内湾　端部丸く終る　肉厚	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		303	土師器皿	1.6 8.4	㋐㋑㋒ 灰白～淡黄色	丸底より体部が内湾する　口縁端部は丸く終る　ややいびつ	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		304	土師器皿	1.3 7.9	㋐㋑灰白色 ～黄灰色 ㋒黄灰色	肉厚で偏平　口縁部はなだらかに立ち上がり端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		305	土師器皿	1.0 8.2	㋐㋑ 灰白色 ㋒灰色	平底から屈曲し短かく外上方へ伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		306	土師器皿	1.3 7.6	㋐㋑㋒ 灰白～ 褐灰色	内面は摩耗し調整不明	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		307	土師器皿	1.3 8.4	㋐㋑㋒灰白色 ～灰黄褐色 ～浅黄橙色	平底より内湾する口縁端部は丸く終る　ややいびつ	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		308	土師器皿	1.2 8.1	㋐㋑㋒ 灰白色	平底から口縁へと内湾し端部は上方につまむ	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		309	土師器皿	1.0 8.1	㋐㋑淡黄～ にぶい黄色 ㋒淡黄色	浅い平底から外上方に伸び口縁はやや角ばって直行する	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		310	土師器皿	1.2 8.2	㋐㋑にぶい橙色 灰白、褐灰色 ㋒明褐灰色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
	97	311	土師器皿	1.4 8.1	㋐㋑㋒ 浅黄橙色～褐灰色	丸底から外上方に伸び端部は尖る　器形は偏平	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		312	土師器皿	1.3 8.0	㋐㋑㋒ 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		313	土師器皿	1.7 7.8	㋐㋑㋒ 灰白色	丸底の底部口縁部はゆるやかに外上方に伸びる	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		314	土師器皿	1.2 7.8	㋐淡橙～浅黄橙色 ㋑淡橙、灰白、黒褐色 ㋒褐灰色	平底から短く外方に伸びる　やや楕円形　一部口縁部に煤の付着	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
		315	土師器皿	1.6 7.7	㋐㋑㋒ 灰白色	丸底から外上方に伸びる　やや楕円形　口縁部に煤が付着	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
89		316	土師器皿	1.4 7.8	㋐㋑明褐灰色 ～褐灰色 ㋒灰白色	平底から外上方に伸び端部は丸く終る　煤付着	内外とも口縁部ヨコナデ　指押え　屈曲にナデによる稜線	SK−56
		317	土師器皿	1.4 8.0	㋐㋑ 灰白色	全体に肉厚　平底から短く外上方に伸び端部は丸く終る　煤付着	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		318	土師器皿	1.6 8.2	㋐㋑㋒ 灰白色	平底から屈曲し外上方に伸びる　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		319	土師器皿	1.4 8.2	㋐㋑㋒ 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る 肉厚	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		320	土師器皿	1.2 7.8	㋐浅黄橙色 ㋑㋒淡橙色	いびつである　平底から短く外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		321	土師器皿	1.3 7.8	外内断 淡黄色	平底から屈曲し端部は内湾する	内外とも口縁部ナデによる稜線		SK−56
		322	土師器皿	1.1 8.2	外浅黄橙色 内灰白色～褐灰色 断浅黄橙色	平底から屈曲し外上方へ短く伸びる	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK−56
		323	土師器皿	1.3 8.0	外内断 にぶい橙色	底部から屈曲しゆるやかに外上方へ開く　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK−56
		324	土師器皿	1.3 8.4	外内 灰白色	中央の突出した底部からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SK−56
		325	土師器皿	1.1 8.1	外内浅黄橙色 断灰白色	中央が突出した底部　短く内湾気味の端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK−56
		326	土師器皿	1.2 7.6	外内浅黄橙色 褐灰色 断浅黄橙、灰色	底部中央が高い　口縁部は外上方へ開き、端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−56
		327	土師器皿	1.6 7.6	外内断 浅黄橙、灰白色	いびつな底部から屈曲し短く外上方へ開き端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK−56
		328	土師器皿	1.4 8.6	外内断 浅黄橙色 にぶい橙色	平底から屈曲し短く外上方へ伸びる　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−56
		329	土師器皿	1.6 8.0	外内断 淡黄色	丸い底から外上方に開き端部は上方へ尖る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−56
		330	土師器皿	1.4 7.4	外内にぶい橙～淡黄色 断黒褐色	いびつな底部から外上方へ開き端部は尖る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−56
89	97	331	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色、にぶい橙色	肉厚　平底からゆるやかに外上方へ開く　端部は丸くわずかに内湾する	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−56
		332	土師器皿	1.3 8.2	外内 浅黄橙色	平底から短く外上方に開き端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−56
		333	土師器皿	12.5 8.2	外内断 淡橙色	器形偏平　底部より口縁部の方が肉厚　端部が上方に尖る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−56
90		334	土師器中皿	2.2 11.7	外内断 灰白色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		SK−56
		335	土師器中皿	2.0 11.8	外内断 灰白色	平底から屈曲してゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる凹みと明瞭な稜線		SK−56
		336	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B～C	3.7 12.9	外内暗灰～灰白色 断灰白色	器壁肉厚　端部が外反し不明瞭な沈線一条巡る　高台がわずかに貼り付いている	外面	凹凸のある器壁に指押え　分割性のあるヘラミガキ	SK−56
							内面	粗い圏線ミガキと簡略な連結輪状ヘラミガキ	
90		337	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.2 12.8	外内灰白～灰色 断灰白色	体部は内湾して口縁に続く　端部は上向きの沈線が一条に巡る　高台は雑で断面は低い逆三角形	外面	高台から放射状に伸びる指押さえ　粗いヘラミガキ	SK−56
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ　簡略な連結輪状ヘラミガキ	
		338	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C～D	3.8 12.0	外暗灰色 内灰～黒、灰黄褐色 断灰白色	体部は内湾して口縁に続く　端部に沈線が一条巡る　底部に断面台形の高台	外面	連続した指押さえ　わずかなヘラミガキ	SK−56
							内面	隙間の開いた圏線ミガキと太い連結輪状ヘラミガキ	
90		339	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.25 13.6	外内 灰　色	体部内湾して口縁に続く　端部に上向きの沈線一条巡る　断面逆三角形の簡単な貼り付け高台	外面	横方向へ連続した指押さえ　わずかなヘラミガキ	SK−56
							内面	雑な圏線ミガキと粗略な輪状ヘラミガキ	
		340	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.95 13.1	外内灰色 断灰白色	体部は内湾して立ち上がり口縁でやや外反する　端部に上向き沈線一条巡る	外面	連続する指押さえ　わずかなヘラミガキ	SK−56
							内面	隙間の大きく開いた圏線ミガキが見込みまで降りる	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	97	341	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	4.0 12.8	外内 灰白～灰色 断灰白色	体部は内湾して口縁に続く　端部に沈線が一条巡る 断面は逆三角形の雑な貼り付け高台	外面 内面	指押さえ　粗いヘラミガキ 隙間のある圏線ミガキと太い連結輪状ヘラミガキ	SK－56
		342	土師器皿	1.3 7.6	外内 浅黄橙色	平底から外上方へ伸び端部は直行気味で丸く終る　器形は楕円形に近い	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		343	土師器皿	1.7 7.7	外灰白～褐色色 内灰白～黄灰色 断黄灰～黄褐色	丸底より体部が内湾気味に立ち上がる　器形小ぶり口縁端部は尖り気味	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SK－56
		344	土師器皿	1.2 8.2	外断灰白～にぶい黄橙～灰黄褐色 内灰白～褐灰～にぶい黄橙色	中央の突出する底部から屈曲し外上方へ開く　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK－56
		345	土師器皿	1.6 7.6	外内浅黄灰～にぶい黄橙色 断浅黄橙色	平底より屈曲し端部は丸く終る　深さがある	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		346	土師器皿	1.4 8.5	外灰白～にぶい橙色 内にぶい黄橙色 断橙橙～灰白色	平底から内湾し口縁へ続く 口縁端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		347	土師器皿	1.2 8.1	外内断 淡黄色	平底から屈曲し短く外上方へ開き口縁端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		348	土師器皿	1.3 8.0	外浅黄橙色 内灰白色～褐色色 断灰白色～褐灰色	丸底よりゆるやかに立ち上がる 端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		349	土師器皿	1.4 8.3	外灰白～淡黄色 内灰白～淡黄色 断淡黄～灰黄色	底部より屈曲し外上方へ開く 端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		350	土師器皿	1.3 8.4	外灰白～灰黄色 内灰白～浅黄橙色 断灰白～褐灰色	底部よりゆるやかに立ち上がる 口縁端部は尖る	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線		SK－56
	98	351	土師器皿	1.5 7.9	外灰白～にぶい黄橙色 内灰白～にぶい黄橙色 断淡黄～灰色	平底から屈曲し短かく開く　端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		352	土師器皿	1.3 8.3	外灰白～淡黄橙色 内淡黄色 断灰白～淡黄色	平底より短かく外上方へ開く 口縁端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		353	土師器皿	1.2 7.7	外内 浅黄橙色 断灰白色	平底から短かく外上方へ開き口縁端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		354	土師器皿	1.2 8.4	外内 淡黄色 断灰白色	平底より内湾し口縁端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		355	土師器皿	1.4 7.8	外灰白色 内淡黄色 断灰白色	平底より外上方へ開く 底部にナデの際の爪痕が円形に残る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
89		356	土師器皿	1.3 8.1	外灰白色 内淡黄色	平底より口縁部は短かく外上方へ伸びる　全体にいびつである　端部丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		357	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色～淡黄色	平底で器形は楕円形　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		358	土師器皿	1.2 8.0	外内 浅黄橙色	平底から屈曲し短かく伸びる口縁　端部は丸い　外面底部に雑な粘土接合痕	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		359	土師器皿	1.2 8.8	外内断 灰白色	平底より短かく屈曲する口縁は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		360	土師器皿	1.3 8.1	外内断 浅黄橙色	丸みのある底部より外上方に伸びる　底部に爪痕が数ヶ所点在する　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	98	361	土師器皿	1.1 8.1	外内 にぶい橙色～淡橙色	底部中央が突出する　口縁部は短く外上方に伸び端部は直行し尖り気味	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		362	瓦器椀 （大和） Ⅲ－B	3.6 12.3	外内断 灰色～灰白色	体部は内湾して口縁に続く　端部に沈線が一条巡る 断面逆三角形の貼り付け高台	外面 内面	わずかにヘラミガキが残る 隙間の開いた圏線ミガキと雑な輪状ヘラミガキ	SK－56
90		363	瓦器椀 （大和） Ⅲ－B	3.8 13.0	外内灰色 断灰白色	体部は内湾し口縁部で上方へ立ち上がる　端部に上向きの沈線一条巡る	外面 内面	水平方向にヘラミガキが数条 摩滅した圏線ミガキと太い連結輪状ヘラミガキ	SK－56
		364	瓦器椀 （楠葉） Ⅲ－1～2	3.9 12.9	外灰白色～灰色 内オリーブ黒～灰白色	体部は内湾して口縁に続く　端部に沈線一条巡る　断面逆三角形の小さめな高台	外面 内面	連続性のある指押さえ　ヘラミガキは認められず 隙間の大きい圏線ミガキと太い螺旋状ヘラミガキ	SK－56
		365	瓦器椀 （大和） Ⅲ－C	3.7 13.1	外内断 灰白色	体部は外上方へ開く 端部に沈線が一条巡る　貼り付け高台	外面 内面	指押さえ　水平方向のヘラミガキが数条 隙間の大きい圏線ミガキ　粗略な連結輪状ヘラミガキ	SK－56
90		366	土師器中皿	2.3 11.8	外内淡黄色 断淡黄～灰色	平底から屈曲して立ち上がり端部は直行し丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		367	土師器中皿	2.2 11.7	外内断 灰白～浅黄橙色	平底から外上方に伸びる 口縁端部は内傾する	指押さえ　ナデによる稜線		SK－56
		368	土師器中皿	2.1 12.0	外内断 灰白～浅黄橙色	底部から口縁部へゆるやかに立ち上がり端部は直行気味で丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SK－56
		369	土師器中皿	2.6 12.0	外内灰白～淡黄色 断灰白色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は内径　器形はいびつ	指押さえ　ナデによる鈍い稜線		SK－56
		370	土師器中皿	2.1 11.6	外淡黄色 内浅黄橙色 断褐灰色	平底からゆるやかに内湾気味に立ち上がる　端部は角ばる　器壁底部は薄く体部は厚い	指押さえ　ナデによる鈍い稜線		SK－56
		371	土師器中皿	2.1 11.7	外内断 灰白～淡橙色	器形いびつ　平底の中央器壁は非常に薄い　端部は内湾する	内外とも口縁部ヨコナデ　指押え　ナデによる稜線		SK－56
		372	土師器中皿	2.3 11.8	外淡黄色 内断灰白色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く終る	指押さえ　ナデによる鈍い稜線		SK－56
90		373	瓦器椀 （楠葉） Ⅲ－3	3.5 12.8	外内にぶい赤褐色,灰白～灰色 断灰白色	内湾して立ち上がる体部 口縁端部上位に浅い沈線が１条巡る	外面 内面	水平方向のヘラミガキが数条 隙間の大きい圏線ミガキと粗略な連結輪状ヘラミガキ	SK－56
		374	瓦器椀 （大和） Ⅲ－B	4.1 12.4	外内 灰　色	いびつ　底部からゆるやかに外上方へ開き口縁部では直立気味　端部で外反する　上向きの沈線	外面 内面	高台より放射状に指押さえ　分割性のあるヘラミガキ 隙間の開いた圏線ミガキが見込みまで降りる	SK－56
		375	瓦器椀 （大和） Ⅲ－C	4.6 12.9	外内断 灰　白	ゆるやかに開く体部　浅い沈線が１条　底部に厚みがあり、雑なつくり	外面 内面	指押さえ　わずかなヘラミガキ 隙間の大きい圏線ミガキと粗略な太い輪状ヘラミガキ	SK－56
88		376	瓦器椀 （大和） Ⅲ－C	4.1 12.2	外内 褐灰色 断灰白色	いびつ　底部からゆるやかに外上方へ開き、口縁部は上方へ伸びたのち端部で外反する	外面 内面	粗いヘラミガキ 隙間のある圏線ミガキと太い簡略な連結輪状ヘラミガキ	SK－56
		377	土師器皿	1.7 8.2	外内 灰白色 断黄灰色	いびつな器形 丸底より内湾し立ちあがる　口縁端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		378	土師器皿	1.5 8.2	外内 浅黄橙色 断灰白色	平底　口縁部は内湾し端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		379	土師器皿	1.5 8.0	外内 灰白～淡黄色	底部より屈曲し口縁部は短かく開く 口縁端部は丸く終る　肉厚	内外とも口縁部ヨコナデ　底部屈曲部はやや角ばる		SK－56
		380	土師器皿	1.1 8.1	外灰白～浅黄灰色 内灰白～浅黄橙色	平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
		381	土師器皿	1.6 8.1	外内断 灰白色	丸底でゆるやかに口縁部外上方に伸び端部は丸く納める　底部より口縁部の方が肉厚	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		382	土師器皿	1.3 7.6	外内 淡黄色 灰白色,灰褐色	底部から外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる鈍い稜線	SK−56
89		383	土師器皿	1.1 8.2	外内断 灰白色〜橙色	平底底部中央が高い　器壁薄く浅い　口縁部は外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		384	土師器皿	1.3 8.6	外内断 灰白色〜浅黄橙色	底部から外上方に伸び端部は尖っている	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		385	土師器皿	1.5 8.0	外内 灰白色,黄色	丸底からゆるやかに口縁部へ続きわずかに内湾する 口縁端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		386	土師器皿	1.6 8.2	外内 灰白色	丸底で全体に肉厚　口縁部はなだらかに外上方に伸びる　端部直行気味に丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		387	土師器皿	1.7 8.7	外内 灰白色	体部から口縁部にかけていびつ　底部中央が高い　底部に粘土紐痕あり	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線	SK−56
89		388	土師器皿	1.6 7.9	外内 灰黄色	全体に厚みが均一である　端部は丸く納められる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
	98	389	土師器皿	1.3 8.2	外内 灰白色	平底から屈曲し短かく外上方に開く 端部は上へ押される	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		390	土師器皿	1.5 8.0	外内断 浅黄橙色	底部凹凸あり いびつな平底から屈曲し外上方へ短かく開く	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		391	土師器皿	1.4 8.1	外内断 灰白色	平底より外反気味に上方へ開き端部は上へ向かう 肉厚　楕円に近い	内外とも口縁部ヨコナデ	SK−56
		392	土師器皿	1.5 8.2	内外断 灰白色	丸みをおびた底部　口縁部は外上方へ伸び端部は肉厚で上方に押される	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		393	土師器皿	1.3 7.8	内外断 灰白色〜褐灰色	器壁に凹凸がある　端部は上方に押され尖る	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		394	土師器皿	1.2 7.8	外内断 灰白色	全体に肉厚である　平底	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		395	土師器皿	1.1 9.1	外内断 灰白〜明褐灰色	中央の突出した底部から外上方へ開き端部は上へ押される　浅く大きめの器形	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		396	土師器皿	1.3 7.9	外灰白色 内淡黄,褐灰色 断灰白色	楕円形に近い 丸底から短かく外へ伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56
		397	土師器中皿	2.1 11.7	外内断 淡黄〜にぶい黄色	平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る　器形いびつ	指押さえ　ナデによる稜線	SK−56
	99	398	土師器中皿	2.0 11.1	外内灰白〜淡黄橙色 断灰白〜褐灰色	平底から屈曲して口縁部はゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る　器形いびつ	内外とも口縁部ヨコナデ　底部に指押え　ナデによる稜線	SK−56
		399	土師器中皿	2.0 12.4	外内断 浅黄橙色	中央の高い平底から屈曲して口縁部は外上方に伸び端部上方に押される	内外ともに口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−56
		400	土師器中皿	2.4 12.0	外内断 浅黄橙〜灰白色	上げ底気味の平底から緩やかに外上方へ伸び端部は内湾する	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
		401	土師器中皿	2.0 12.1	外内灰白～浅黄橙色 断黄灰色	平底から外上方へ伸び口縁に至る　端部は内湾する	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK－56
		402	土師器中皿	2.2 11.9	外浅黄橙～黒褐色 内浅黄橙色 断灰白色	底部ほとんど欠損　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK－56
		403	土師器中皿	2.3 11.4	外内断 にぶい赤橙～にぶい橙～黒褐色	平底から外上方に伸び口縁部に至る　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		404	土師器中皿	2.1 12.2	外内断 浅黄橙色	平底から緩やかに外上方に伸び端部は丸く終る　器形いびつ	内外とも口縁部ヨコナデ　連続する指押さえ	SK－56
		405	土師器中皿	2.3 11.6	外内断 浅黄橙色	丸みを帯びた底から外上方へ伸び口縁部に至る　端部は丸く終る　口縁部肉厚	内外とも口縁部ヨコナデ　連続する指押さえ	SK－56
		406	土師器中皿	2.2 12.2	外内断 灰白～浅黄橙色	やや底面が凹状を成している平底から外上方に伸び口縁端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　指押さえ	SK－56
		407	土師器中皿	1.7 10.7	外内 淡黄色 断灰白色	平底から外上方に伸び口縁部に至る 端部は上方に押される	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK－56
100		408	青磁 椀 (龍泉窯系) Ⅰ－2類	残高2.5 底径5.7	外内オリーブ黄～灰オリーブ色 断灰白色	高台断面は台形　細かい貫入	外面　高台内露胎 内面　見込みに片彫りの草花文	SK－56
	99	409	土師器皿	1.2 7.9	外内断 浅黄橙色	平底より内湾して短かく伸びる　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		410	土師器皿	1.3 7.8	外内 淡黄色 断灰白色	平底から外上方へ伸び端部は丸く終る　全体にいびつ	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		411	土師器皿	1.1 8.3	外内断 灰白色	平底より外上方に伸びる　全体にいびつ	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK－56
		412	土師器皿	1.4 7.9	外内断 灰白色	平底より外方へ伸びる　少し楕円形である　端部は丸みがあり平均的に全体が肉厚である	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		413	土師器皿	1.2 7.9	外内断 淡黄色	平底の底部より口縁は外上方へ伸び端部は厚みがありやや尖り気味　厚みがある	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK－56
		414	土師器皿	1.3 7.6	外内 浅黄橙色	作りが粗雑　底部に強い粘土紐の痕残る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		415	土師器皿	1.5 7.8	外浅黄橙色 内灰白色	丸底から内湾して伸びる 端部は丸く納められている	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		416	土師器皿	1.5 8.3	外内 灰白色	いびつで厚みのある形　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		417	土師器皿	1.3 8.6	外内 灰白色	中心が高い平底から肉厚で外上方へ伸びる端部は上方へ押される	居外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK－56
		418	土師器皿	1.5 7.8	外内 浅黄橙色	丸みを帯びた底部器壁は肉厚　口縁部はゆるやかに外上方へ伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK－56
		419	土師器皿	1.2 8.2	外内 灰褐色～にぶい褐色	浅い平底　端部は上方に押される	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる明瞭な稜線	SK－56
		420	土師器皿	1.5 8.2	外内 浅黄橙色	底部中央やや高い 端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK－56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	99	421	土師器皿	1.4 8.0	外灰白～黒色 内淡橙～黒褐色	平底から屈曲し短かく伸びる　端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ 屈曲部にナデによる稜線		SK－56
		422	土師器皿	1.5 7.9	外内 灰白色	底部からなめらかに外上方へ開き端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
89		423	土師器皿	1.5 8.2	外灰白～灰褐色 内にぶい黄橙～褐灰色	平底から屈曲し短かく上方へ伸びる　端部に厚みをもつ	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる鈍い稜線		SK－56
		424	土師器皿	1.0 8.2	外内断 灰白色	底部からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ 屈曲部にナデによる鈍い稜線		SK－56
		425	土師器皿	1.5 8.0	外内断 灰白～ 浅黄橙色	底部中央が高い 内湾して口縁部へ続き端部は上へ押される	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		426	瓦器椀 （楠葉） Ⅲ－2	3.9 12.4	外内 灰白～灰色 断灰白色	体部は内湾気味に口縁に続く　端部に沈線一条巡る 器形は小ぶり　断面逆三角形の貼り付け高台	外面	多数の指押さえ	SK－56
							内面	隙間の大きい圏線ミガキ　粗略な輪状ヘラミガキ	
90		427	瓦器椀 （大和） Ⅲ－C	3.6 12.4	外内灰色 断灰白色	体部は外上方へ伸びロ縁は外反し端部に上向きの沈線一条巡る　断面逆三角形の貼り付け高台	外面	指押さえ　連続性のないわずかなヘラミガキ	SK－56
							内面	隙間の大きい圏線ミガキ ぎこちない連結輪状ヘラミガキ	
		428	瓦器椀 （大和） Ⅲ－B	3.8 13.3	外内 灰白色～ 灰色	体部は外上方に開き口縁部で垂直に立ち上がる　端部は上向きの浅い沈線一条巡る	外面	分割性のないヘラミガキ	SK－56
							内面	隙間の開いた雑な圏線ミガキと粗略な連結輪状ヘラミガキ	
		429	瓦器椀 （大和） Ⅲ－C	3.9 13.0	外黒～灰色 内灰色 断灰白色	体部は外上方に開き口縁で外反　端部に上向きの沈線一条巡る　雑な断面逆三角形の貼り付け高台	外面	指押さえ	SK－56
							内面	隙間の方が大きい圏線ミガキと粗略な輪状ヘラミガキ	
		430	瓦器椀 （大和） Ⅲ－B	4.1 12.9	外内灰色 断灰白色	体部は外上方に開き端部に上向きの沈線一条巡る　器形いびつ　断面逆三角形の貼り付け高台がわずかに残る	外面	指押さえ　ヘラミガキは2～3条のみ	SK－56
							内面	圏線ミガキは10周する程度　粗略な輪状ヘラミガキ	
88		431	瓦器椀 （大和） Ⅲ－B	4.1 12.9	外灰白～灰色 内灰色 断灰白色	体部は外上方に開き口縁部でやや垂直に立ち上がり口縁で外反　端部に上向きの沈線一条巡る	外面	指押さえ　ヘラミガキは数条	SK－56
							内面	隙間の方が大きい圏線ミガキ　形状不明のヘラミガキ	
		432	瓦器椀 （大和） Ⅲ－B	3.7 12.8	外暗オリーブ灰色 内灰色 断灰白色	体部は外上方に開き口縁部でやや垂直に立ち上がり口縁で外反　端部に上向きの沈線一条巡る	外面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	SK－56
							内面	体部下位に10周程の圏線ミガキ　粗略な輪状ヘラミガキ	
	100	433	土師器中皿	2.1 11.4	外灰白～浅黄橙色 内浅黄橙～にぶい黄橙色断褐灰色	平底から外上方に立ち上がり口縁部に至る　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部に指押え		SK－56
90		434	土師器中皿	2.2 12.4	外灰白～淡黄色 内浅黄橙～淡黄色	平底から外上方に伸びロ縁部に至る　端部は尖り気味 器形ややいびつ	内外とも口縁部ヨコナデ　指押さえ　ナデによる明瞭な稜線		SK－56
		435	土師器中皿	2.3 12.0	外内断 にぶい黄橙色	平底から屈曲して外上方に伸びロ縁部に至る　端部は尖る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK－56
		436	土師器中皿	2.0 11.6	外内断 灰白色	平底から外上方へ内湾気味に伸びロ縁部に至る　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　指押さえ　ナデによる稜線		SK－56
		437	土師器中皿	1.9 12.0	外内灰白色 断灰白～褐灰色	平底から屈曲し外上方に伸びロ縁部に至る　端部丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　口縁端部に粘土接合痕　指押え　ナデによる稜線		SK－56
		438	土師器中皿	2.0 11.9	内外断 灰白、浅黄橙色	平底から緩やかに外上方に伸びロ縁に至る　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		439	土師器中皿	2.3 11.6	外断灰白色 内灰白～浅黄灰～にぶい黄灰色	平底から屈曲して伸びロ縁に至る　端部は丸く終る 粗雑な作り	内外とも口縁部ヨコナデ　指押え　ナデによる鈍い稜線		SK－56
		440	土師器中皿	2.2 11.6	外灰白色 内灰白～浅黄灰色 断淡黄色	平底から外上方に立ち上がり肉厚の口縁部に続く　端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　指押さえ　ナデによる明瞭な稜線		SK－56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
90		441	土師器中皿	2.2 12.1	外灰白～淡黄色 内灰白～淡黄色 断灰白色	中央が突出する底部から屈曲して外上方へ開き口縁部に厚みをもち丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　指押さえ　ナデによる稜線		SK－56
		442	土師器中皿	1.9 11.8	外灰白～灰黄色 内断灰白色	平底から緩やかに外上方に伸び口縁に至る　底が浅い　口縁は内湾気味で端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK－56
		443	土師器中皿	1.9 11.7	外灰白～淡黄色 内灰白～浅黄橙色 断灰白色	平底から内湾気味に立ち上がり口縁に至る　端部は上方につまみあげる	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		444	土師器中皿	4.0 12.9	外内灰白～にぶい黄橙色 断灰白色	平底から内湾気味に立ち上がり口縁に至る　端部は内側につまみ出し尖っている　底が深い	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SK－56
		445	土師器中皿	1.8 12.1	外内 灰白色 断黒褐色	平底から体部が大きく逆ハの字形に開く口縁は端部は上方に角ばる　器形いびつ　内面煤付着	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－56
		446	土師器中皿	2.2 12.1	外灰白～浅黄橙色 内浅黄橙色 断浅黄橙色	平底から内湾気味に立ち上がり口縁に至る　底部に激しい凹凸があり雑な作り　口縁端部内側に折り返す	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SK－56
		447	須恵器杯身	3.3 13.6	外内断 灰　色	平底から逆「ハ」の字に立ち上がる　口縁は端部でわずかに内湾し丸みをもって終る	外面	回転ナデ	SK－56
							内面	指ナデ	
88		448	瓦器椀（大和）Ⅲ－C	3.9 13.1	外内黒褐色～灰黄褐～淡黄色 断灰白色	体部は外上方へ開き口縁は外反気味　端部に上向きの沈線一条巡る　断面逆三角形の貼り付け高台	外面	雑なヘラミガキ	SK－56
							内面	隙間の大きい圏線ミガキと粗略な連結輪状ヘラミガキ	
		449	瓦器椀（大和）Ⅲ－C	3.4 12.2	外内灰白～暗灰色 断灰白	体部は外上方に開き口縁は外反　端部に沈線一条巡る　断面逆三角形の貼り付け高台	外面	数条のヘラミガキ	SK－56
							内面	隙間の大きい圏線ミガキと重なる連結輪状ヘラミガキ	
	100	450	土師器皿	1.3 8.1	外内断 浅黄色～灰白色	平底から外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		451	土師器皿	1.0 7.8	外内灰白～浅黄橙色 断灰白色	平底から短かく口縁部が立ち上がる　端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		452	土師器皿	1.1 7.8	外内断 灰白色	平底から短く外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		453	土師器皿	1.5 8.0	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに口縁へ内湾し端部は丸く終る　器壁均等に肉厚	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		454	土師器皿	1.3 8.0	外内断 灰白色	底部から外上方に伸び口縁端部は肉厚で角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線		SK－56
		455	土師器皿	1.4 8.4	外内 灰白色	平底から外上方に伸び口縁は内湾し端部角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		456	土師器皿	1.6 7.5	外内 暗灰色～にぶい黄橙	肉厚で丸底からなだらかに外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		457	土師器皿	1.2 8.4	外内断 灰白色	底部より短く外方に伸びる　底部中央が高い　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		458	土師器皿	1.2 8.2	外内 灰白～黄灰色 断にぶい黄橙色	平底からゆるやかに屈曲して外上方へ開き端部は上方へ押され角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56
		459	土師器皿	1.2 8.4	外内 浅黄橙色 断浅黄橙色	平底から屈曲して短かく外上方へ開き口縁端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線		SK－56
		460	土師器皿	1.0 7.4	外内断 にぶい黄橙色	いびつな器形　丸底から外上方へ伸び端部はわずかに角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SK－56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	100	461	土師器皿	1.2 8.4	外内断 灰白色	平底から屈曲し短かく外上方へ開き口縁端部は厚みをもちわずかに角ばる	内外とも口縁部に強いナデによる稜線		SK−56
		462	土師器皿	1.1 8.2	外淡赤橙色 内淡黄橙色 断橙色	平底から屈曲し極端に短かく外上方へ開き屈曲部は角ばり端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部に稜線		SK−56
		463	土師器皿	1.4 7.4	外内灰白色 断灰白〜明褐灰色	平底から内湾し口縁部へ続く 口縁部は肉厚で丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−56
		464	土師器皿	1.3 7.6	外内 灰白色 断灰色	いびつな器形　平底からゆるやかに屈曲し外上方に開き、口縁端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線		SK−56
		465	土師器皿	1.2 8.4	外内 黒褐色	平底より屈曲し短かく外反し口縁端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−56
90		466	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.8 12.9	外灰〜黒色 内灰〜暗灰色 断灰白色	器形はいびつで外面凹凸があり雑な作り　端部には上向きの一条沈線巡る	外面	指押さえ　数条のヘラミガキ	SK−56
							内面	下方に隙間のある圏線ミガキと螺旋状ヘラミガキ	
88		467	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.7 12.6	外内断 灰　色	口縁部は厚みがなくわずかに外反する　高台は低い断面逆三角形　全体に小ぶりである　沈線は上向きに端部巡る	外面	指押さえ　分割性のある粗いヘラミガキ	SK−56
							内面	隙間のある圏線ミガキ　時計回りの連結輪状ヘラミガキ	
		468	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.6 12.5	外灰白、暗灰色 内灰白、灰色 断灰白色	体部は外上方に開き口縁で外反　端部は上向きの沈線一条巡る　高台は逆三角形の貼り付け高台	外面	指押さえ　分割性のある数条のヘラミガキ	SK−56
							内面	隙間の大きい圏線ミガキと連結輪状ヘラミガキ	
	101	469	土師器皿	1.6 8.6	外淡橙色 内断淡黄色	ていねいな作り　平底からゆるやかに外上方に伸び口縁部は垂直に立ち上がりやや角ばった端部で終る	内外とも口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線		SK−58
		470	土師器皿	1.5 8.2	外内断 灰白色	底部から外上方のび端部は直立し尖って終る　いびつ	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−58
		471	土師器皿	1.1 7.4	外にぶい橙色 内断 にぶい褐色	平底からまっすぐ伸びたのち口縁は内湾し端部は折返し角ばっている　器壁は摩耗している	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SK−58
		472	瓦器釜 河内B1	残高 5.8 口径 23.6 鍔径 31.2	外内 灰白色 断黒褐色	内湾する体部から口縁部はくの字に短かく屈曲し端部は外に肥厚する	外面	風化のため口縁部調整不明　鍔部は貼り付けナデ	SK−58
							内面	板ナデ(腹体幅1.3cm)	
		473	土師器皿	1.8 8.0	外内 淡黄色	平底より屈曲し短かく立ち上がる　端部は丸く終る		内外とも口縁部ヨコナデ	SK−61
		474	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.0 13.8	外内 灰　色	器壁は薄い　平たく浅い　底部から外上方にゆるやかに開く　口縁上位に沈線あり　高台は逆三角形で低い	外面	高台より放射状に伸びる指押さえ　数条のヘラミガキ	SK−61
							内面	隙間の開いた圏線ミガキと連結輪状ヘラミガキの一部	
		475	土師器皿	1.1 8.0	外内 浅黄色	底部中央ふくらみ口縁は逆「ハ」の字に開く　端部はやや角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−66
		476	土師器中皿	2.6 11.8	外内断 灰白色	平底より体部が外上方に立ち上がる　口縁部はやや肥厚し、端部は角ばる	屈曲部に指押さえ		SK−64
		477	土師器皿	1.4 7.6	外内 灰白色	口縁は逆「ハ」の字に短かく開き端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−67
		478	土師器皿	1.4 8.0	外内淡黄色 断 にぶい黄橙色	小さな底部からゆるやかに逆「ハ」の字に開き端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ		SK−67
		479	須恵器片口鉢 (東播系)	残高 9.3 27.0	外内断 灰　色	体部はほぼまっすぐ外上方に開き端部は下外方に肥厚	外面	回転ナデ	SK−67
							内面	横方向へのナデ　口縁部強ナデで凹面をもつ	
91		480	土師器壺	残高 15.0 最大径13.3	外内断 灰白色	丸底から内湾気味に立ち上がる　上から1/3くらいの所で最大径をなし内湾して口頸部へと続く　端部残存しない	外面	調整不明	SK−70
							内面	ヘラケズリ　指押さえ　粘土紐巻きあげの痕	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
91	101	481	土師器甕	29.4 17.8 最大径27.0	外内断 にぶい赤褐色	丸底から上外方に伸び1/2くらいの所で最大径をなし内湾したのち口頸部で垂直に立ち逆ハの字に伸び端部は丸く終る　両脇に黒斑あり	外面 内面	調整不明 底部に指押さえ　ヘラケズリ　一部剝離	SK−70
		482	臼玉	径 0.4 厚さ 0.3	外 暗緑灰色		碧玉製		SK−70
		483	臼玉	径 0.42 厚さ 0.4	外 暗緑灰色		碧玉製		SK−83
91		484	土師器高杯	12.5 17.0	外断 浅黄橙色 内灰白色	杯部は平底からやや外反しながら外上方に開き端部は丸く終る　脚部は垂直に下向し下1/3位のところからハの字に開き丸く終る	外面 内面	杯底部に稜線をなす　杯から脚部にハケメの後ナデ ヘラケズリ　一部に黒斑	SK−80
		485	韓式土器	破片 8.0×7.5	外内断 にぶい橙色		外面 内面	格子タタキ	SK−82
92	102	486	土師器壺	3.8(残)	外内灰褐～灰白色 断褐灰色	2重口縁を成すが端部の形状不明　外側に明瞭な稜線　内面のみ赤色物質塗布	外面 内面	摩耗が激しく調整不明	SK−84
		487	弥生土器壺	15.0 7.6	外淡橙～にぶい橙色内にぶい黄橙色 明褐灰～にぶい橙色　断褐灰色	直立に近い頸部から外反し口縁部は斜め上方へ屈曲	外面 内面	頸部にヘラミガキ　口縁部2段の櫛形列点文 頸部に板ナデ　口縁部に指押さえ	SK−84
		488	土師器甕	5.9 17.2	外内 灰白～灰黄色 断灰白～黄灰色	頸部から「く」の字に開き端部は折り返し尖る	外面 内面	体部は斜め方向のハケメ　頸部口縁部はヨコナデ 指押え　ヘラミガキ　粘土巻きあげの痕	SK−84
		489	石	6.1 11.2	外 褐灰色	中央に凹面がありその個所は組成粒がなめらかになっている　下半分に焼けた痕がある			SK−84
92		490	土錘	長さ 5.5 最大径 3.4	外 灰オリーブ～オリーブ黒色	円柱形	径0.7cmの紐孔		SK−84
		491	土師器壺	残高 11.3 23.0	外灰白 内褐灰色 断灰白～褐灰色	口頸部逆「ハ」の字に開き端部丸く終る	外面 内面	風化が激しくヘラミガキがわずかに残る 口縁部は横方向のナデ粘土紐接合部分に指押さえ	SK−84
91		492	土師器壺	残高 30.2 最大径25.6	外内断 にぶい橙色	丸底から上外方に伸びたのち1/2位で最大径をなし内湾して口頸部でくの字に屈曲する　口縁部の形状は破損のため不明　底部に黒斑	外面 内面	体部は縦方向のヘラミガキが全面に施される 底部は縦方向ヘラケズリ胴部は横方向へハケメ　指押え	SK−84
		493	土師器皿	1.6 10.3	外内 浅黄橙色 断灰色	凹凸のある平底から屈曲して外上方へ伸び口縁部は丸く終る	内外とも口縁部はヨコナデ　指押さえ		SD−39
		494	土師器皿	1.3 8.4	外内 浅黄橙色 断浅黄色	底部中央がやや高く浅い平底からゆるやかに短く外上方へ伸び端部は丸い	内外とも口縁部ヨコナデ		SD−39
90		495	土師器皿	2.0 10.3	外内断 浅黄橙色	厚みのある平底から屈曲して厚みをもって外上方へ伸びる端部は尖り気味	内外とも口縁部ヨコナデ　指押さえ		SD−39
		496	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.0 10.1	外内 灰色 断灰白色	見込みから外上方へ伸びたのち口縁部でわずかに外反し端部は丸い　高台は逆三角形で雑な作り	外面 内面	調整不明 隙間の開いた圏線ミガキが見込まで降りる	SD−39
91		497	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B～C	13.9 残高 3.3	外内断 灰白色	体部は緩やかに外上方に伸び端部でわずかに外反し丸く終わる　体部外面にシダの葉の痕	外面 内面	シダの葉先が押しつけられた痕 隙間の大きい圏線ミガキ	SD−39
		498	丸瓦	破片 14.2×8.6	外内断 黒褐色～浅黄橙色		凹面凸面とも摩耗が激しい		SD−39
		499	石鍋	残高 5.5 31.4	外内 黄灰色 断灰白色	鍔から口縁部のみ残存　口縁部は内湾気味　端部は丸みをおびた面を成し終る　滑石製	外面 内面	鍔部先端欠損	SD−39
		500	瓦器椀 (楠葉) Ⅲ−1	4.5 13.7	外断 灰白色 内灰色	体部、口縁部は外上方へ伸び端部は丸い　見込みは平らで高台は逆三角形　いびつな器形　口縁端部に一条の沈線が施される	外面 内面	指押さえ 隙間の開いた圏線ミガキと連結輪状ヘラミガキ	SD−56

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
95	103	501	土師器甕	残高 6.2 12.8	㊕㊍㊖ 淡橙色	頸部から口縁部は外上方に体部は外下方に伸びる 体部器壁は薄い　端部は内側に肥厚する	外面　摩耗している 内面　肩部にユビナデ　くヘラケズリ	SR－01
		502	須恵器杯蓋	4.3 12.4	㊕㊍灰色 ㊖灰白色	平坦な天井部から内湾して下がる口縁部は端部に内傾 する浅い凹面を有する　稜は鈍い	外面　天井部に回転ヘラケズリ　口縁部とのあいだに稜線 内面　ナデ	SR－01
93		503	須恵器杯蓋	5.1 13.0	㊕㊍㊖ 灰白色	丸い天井部からほぼ垂直に下ったのち内傾する凹面を有す 稜は短いが鋭く下方に沈線巡る	外面　天井部に回転ナデヘラケズリ　口縁部はヨコナデ 内面　指押さえ　ナデ	SR－01
		504	須恵器杯蓋	4.5 12.0	㊕㊍㊖ 灰白色	平らな天井部から緩やかに外下方に下り短く丸い稜を有し たのちほぼ垂直に下り端部は内傾する凹面をなす	外面　天井部は回転ヘラケズリ　口縁部はヨコナデ 内面　指押さえ	SR－01
		505	須恵器杯身	5.2 11.2	㊕灰白色 ㊍㊖灰色	立ち上がりは内傾して伸びる　端部は内傾する面をもち内側に沈線が施される 受部は断面三角形をなし端部は鋭い　底体部は深く丸みをもつ	外面　底部は回転ヘラケズリ　口縁部はヨコナデ 内面　ナデ	SR－01
93		506	須恵器杯身	5.2 9.8	㊕㊍ 灰白色	深く丸みのある底部より外方に開いたのち屈曲して立ち上がる 口縁端部は内傾する凹面を有する　受部は短かく鋭い	外面　底部は回転ヘラケズリ　ナデ 内面　ナデ	SR－01
		507	須恵器杯身	4.7 9.7	㊕㊍㊖ 灰　色	丸い底部から外上方へ開き屈曲して立ち上がり口縁端部は 内傾する凹面を有する　受部はわずかにはね上がる	外面　底部は回転ヘラケズリ 内面　ナデ　受部の内側は強いナデで凹む	SR－01
93		508	須恵器杯蓋	5.0 12.6	㊕㊍㊖ 灰　色	丸い天井部から下外方へ下りゆるやかに屈曲し垂直に 伸びる　口縁は端部でわずかに外反する	外面　天上部に回転ヘラケズリ　口縁部との境に稜線 内面　ナデ	SR－01
		509	須恵器杯蓋	5.1 24.8	㊕㊍㊖ 灰白色	平坦な天井部から内湾して下り口縁部ではほぼ垂直に 伸び端部は丸く終る	外面　天井部は回転ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ 内面　粗いナデ	SR－01
		510	須恵器杯蓋	4.5 12.0	㊕㊍㊖ 灰　色	天井部からゆるやかに外下方に下り浅い鋭い稜をなし たのちほぼ垂直に下り端部は内傾する凹面をもつ	外面　天井部は回転ヘラケズリ 内面　丁寧なナデ	SR－01
93		511	須恵器杯身	4.6 10.4	㊕㊍灰色 ㊖灰白色	立ち上がりは内傾して伸び端部は丸く受部は外上方に 伸び端部は丸い　底体部は深く丸い	外面　底部は回転ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ 内面　ナデ	SR－01
		512	須恵器杯身	4.5 9.8	㊕㊍㊖ 灰　色	平らな底から内湾して伸び立ち上がりわずかに内傾する　端部は 内傾する凹面を有す　受け部は水平に伸び端部は鋭い	外面　底部は狭い範囲に回転ヘラケズリ 内面　ナデ	SR－01
93		513	土師器壺	11.2 10.2 最大径 13.2	㊕ 浅黄橙色	体部は楕円形の丸みをおびる　口頸部で「く」の字に 屈曲し口縁は薄く直行する　底部は厚みがある	外面　肩と体胴部に3本のヘラ描沈線と2本の波状文(5条) 内面　口縁部ヨコナデ	SR－01
95		514	土師器甕	残高6.2 底径3.2	㊕㊍ にぶい黄橙色 ㊖褐灰色	底部内面に黒斑が見られる	外面　斜めのタタキ(3本／1㎝) 内面　ヘラケズリ(原体幅1㎝)	SR－01
		515	土師器甕	残高3.2 底径4.7	㊕淡橙～暗灰色 ㊍にぶい橙色 ㊖明褐灰色	逆「ハ」の字に開く体部を有する　底部中央は凹む 黒斑有り	外面　底部のくびれに指押さえ 内面　板ナデ　(原体幅1.6㎝)	SR－01
93		516	土師器器台	8.5 10.8	㊕ 浅黄橙色	杯部は上外方に伸び直行　端部は丸い　脚部は受部から外反気味 と外下方に伸びる　端部は丸い　脚部中位に円形の透かし孔	外面　脚部にわずかにハケメが残る 内面　ヘラケズリ　指押さえ	SR－01
86		517	砥　石	長さ 7.3 幅　3.6 厚さ 3.5	灰白色	表裏の中央が少し凹状になっている	表裏とも使用痕	SR－01
95	104	518	土師器丸底壺	残高 7.5 10.9	㊕㊍灰白～ 明灰褐色 ㊖浅黄橙色	球形の体部と逆「ハ」の字に開く口縁部を有する 底部欠損	外面　縦＋横＋斜めのハケメ 内面　板ナデ　ヘラケズリ　口縁部は横方向の粗いハケメ	SR－02
		519	土師器甕	残高 6.5 26.0	㊕㊍㊖ にぶい黄橙色	体部から内湾し、口頸部で「く」の字に屈曲したのち 内湾する口縁端部は内傾する端面をもつ	外面　体部にハケメ(原体幅1.3㎝) 内面　ヘラケズリ	SR－02
94		520	土師器高杯	残高 6.5 底径 11.2	㊕㊖ 明褐灰色	円錐型に広がる脚部に脚部上方に4つの透かし孔が施 される	外面　杯、脚部の境に指押さえ 内面　杯底部に原体痕　透かし孔は外→内	SR－02

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
95	104	521	土師器甕	残高5.0 底径4.3	外灰白～黒褐色 内断灰白色	黒斑あり　突出した底部は中央部が凹む	外面	斜めのタタキメ	SR−02
							内面	ヘラケズリ	
94		522	土師器ミニ甕	5.1 4.2	外内断 灰黄褐色	手捏ね　黒斑あり　底部から内湾気味にほぼ垂直に伸び端部は丸く終る	外面	手捏ね　指押さえ	SR−02
							内面	指押え	
		523	土師器高杯	残高 9.0 底径 6.4	外灰白 内断 淡赤橙色	脚部のみ残存　柱状部から裾部にかけて屈曲して開き黒斑あり	外面	脚部の屈曲部に指押さえ	SR−02
							内面	柱状部にヘラケズリ	
94		524	土師器高杯	10.7 15.4 11.0	外内 にぶい褐色 断灰白色	杯底部で細くくびれ脚裾部が大きく開き杯口縁部は薄く外反する	外面	杯部に横方向のヘラミガキ　脚部に縦のヘラケズリ	SR−02
							内面	杯部はナデ　脚部にわずかな布目のあと	
95		525	弥生土器 高杯	口径 30.3 残高 4.3	色灰白色 内にぶい橙、にぶい赤褐色、赤灰色 断明褐灰色	口縁部は屈曲して端部に明確な面を有する	外面	摩耗のため調整不明	SR−02
							内面	屈曲部にユビナデ	
		526	砥石	27.5×8.9×4.2	外内断 淡黄色	石英安山岩製	上面の使用痕は顕著		SR−02
95		527	弥生土器壺	破片 8.0×5.5	外内にぶい黄色 断淡黄～にぶい黄色	頸部、肩部にヘラ描き沈線が施されている	外面	内外とも指押え	SR−02
							内面		
94		528	土師器丸底壺	9.0 7.7	外内断 灰白色	頸部から「く」の字に開く 体部は内湾しながら底部へと続く　底部は丸い	外面	底部から体胴部にハケメ　口縁部はヨコナデ	SR−02
							内面	指押えと板ナデ	
	105	529	土師器甕	20.5 14.0	外内断 灰黄色	球形の体部とくびれたのち逆「ハ」の字に開く口縁を有する　端部は内側に肥厚する	外面	体部に横＋斜めのハケメ　口縁部はヨコナデ	SR−02
							内面	指押さえ　ナデ　ヘラケズリ	
96		530	敲石	長さ 6.7 幅 6.6 厚さ 4.0	外内断 灰色	逆三角形で下端部はすり減った痕が認められることから531とセットと考えられる	下端に使用痕 礫岩		SR−02
		531	凹み石	径 10.5 厚さ 3.6	外内断 灰白色	中央表裏共も凹状(直径２～2.5cm)になっている	中央部に凹み 砂岩		SR−02
94		532	手焙り形 土器	残高 16.6 最大径16.4	外内 浅黄橙色 断橙色	やや平らな底部からゆるやかに外上方にひらき内湾したのちくの字に開き再び内湾し天蓋へとのびる 天蓋はややいびつ　全面は広く開く　天蓋の左右のつけ根に棗状の装飾を施す	外面	天蓋と体部にナデ　突帯と高台は貼り付け	SR−02
							内面	天蓋屈曲部に指押さえが続く	
96		533	石匙	長さ 5.6 幅 2.7 厚さ 0.9	外内 暗灰色 断黒色	サヌカイト製			SR−05
98	106	534	瓦器釜 河内D1	残高 7.5 口径 26.3 鍔径 36.4	色にぶい黄橙～黒褐色 内黄灰～明黄褐黒色 断灰白色	鍔から上が残存　口縁部は「ハ」の字に開き端部は上方凹状の面を成す　鍔は水平に伸びている	外面	口縁部から鍔部にかけて段状にヨコナデ	SP−1608
							内面	板ナデ　指押さえ	
		535	韓式土器	破片 2.8×2.1	外内断 橙色	体部破片	外面	格子タタキ	SP−2054
							内面	ナデ	
		536	韓式土器	破片 4.7×3.9	外内断 橙色	体部破片	外面	格子タタキ	SP−2047
							内面	ナデ	
98		537	土師器中皿	2.1 13.9	色淡橙～にぶい橙、灰白色 内橙～にぶい橙色 断明褐色	底部よりゆるやかに屈曲して立ち上がり口縁に続く端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる稜線		SP−1604
97		538	土師器中皿	2.1 11.5	外内断 淡黄色	平底から屈曲して外反気味に立ち上がり口縁は直行する	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部に指押さえ		SP−1939
		539	土師器中皿	2.2 12.0	外内断 淡黄色	平底から外上方へ伸びる　口縁部は外反し端部は角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　屈曲部に指押さえ ナデによる稜線		SP−2105
		540	土師器皿	1.5 8.1	色淡黄色 内灰白～浅黄橙色 断灰白色	丸底より外上方に伸び端部はやや尖る	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる明瞭な稜線		SP−1604

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
		541	土師器皿	1.5 8.2	外淡橙～淡黄橙 内にぶい橙～淡黄～淡黄橙 断淡黄橙	ややいびつ　平底より外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部指押さえ	SP－1781
		542	土師器皿	1.2 8.8	外灰黄～灰白色 内 断 灰黄～浅黄色	平底より外上方に伸び端部は厚い	口縁部ナデによる稜線	SP－1820
		543	土師器皿	1.5 8.6	外淡黄色 内淡黄～浅黄橙 断灰白色	平底より外上方に伸び端部は内湾し丸く終る　肉厚	口縁部ナデによる稜線	SP－1820
		544	土師器皿	1.3 7.9	外内断 灰白色	浅い平底から内湾気味に外上方へ伸び端部は丸い	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ	SP－1917
97		545	土師器皿	1.5 8.0	外内断 淡黄色	深さがある平底から屈曲して外上方へ伸びる　端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SP－1937
		546	土師器皿	2.0 7.6	外内断 浅黄橙色	凹凸のある底部から屈曲して外上方に伸び端部は丸いいびつな器形　完形	内外とも口縁部ヨコナデ　かなりいびつ	SP－1939
		547	土師器皿	1.2 8.0	外内断 浅黄橙色	浅い平底から外上方に短く伸びたのち口縁端部は上方に押され角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SP－1939
		548	鉄　釘	長さ 7.2 幅 0.8 厚さ 0.4	外内断 明褐色～黒褐色	銹の部分は少ない　頭部欠損 断面長方形		SP－1842
		549	鉄　釘	長さ 3.8 幅 0.8 厚さ 0.6	外内断 黄灰～浅黄～明赤褐色	頭部と先端部欠損 断面長方形		SP－1858
		550	不明鉄製品	長さ 4.9 幅 1.3 厚さ 1.5	外内にぶい黄色 断暗赤褐色	円筒形		SP－1920
	106	551	不明鉄製品	長さ 5.6 幅 4.8 厚さ 0.8	外内 にぶい黄橙色 断暗赤褐色	丸い傘形の不明鉄製品　非常に薄い	飾り金具？	SP－2044
		552	鉄　釘	長さ 8.1 幅 1.0 厚さ 0.7	外内明黄褐色 断暗赤褐色	断面長方形　頭部と先端部欠損		SP－2038
		553	不明鉄製品	長さ 6.6 幅 1.3 厚さ 0.7	外内にぶい黄色 断暗赤褐色	薄い	ノミ状工具の刃先か？	SP－2150
		554	鉄　釘	長さ 11.4 幅 1.0 厚さ 1.5	外内黄色 断暗赤褐色	頭部を折り返し先端部は欠損 断面長方形		SP－2181
		555	土師器皿	1.5 8.2	外内断 淡黄色	浅い平底から外上方へ伸び端部は丸い　完形	口縁部ナデ	SP－2049
		556	土師器皿	1.2 7.8	外内断 浅黄橙色	底部中央がやや高い浅い平底部から内湾気味に短く外上方へのび端部は尖り気味　いびつな器形　完形	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ　ナデによる稜線	SP－2105
		557	土師器皿	1.2 8.0	外内褐色 断浅黄橙色	浅い平底から内湾して短く立ちあがり端部はやや尖り気味	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SP－2105
		558	土師器皿	1.3 8.0	外内断 浅黄色	平底から外上方へ伸び端部は角ばる　いびつな(楕円形)器形である	口縁部ヨコナデ	SP－2121
		559	土師器皿	1.2 8.0	外内断 浅黄色	浅い平底から外上方へ短く伸び端部は角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる段有り	SP－2122
		560	土師器皿	1.4 8.4	外内断 灰白色	中央がやや高い平底から外上方に内湾気味に伸び端部は角ばる　完形	口縁部ヨコナデ　屈曲部に指押さえ	SP－2158

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	106	561	土師器Ⅲ	1.6 8.1	�外㋔㋐㋒ 灰白色	平底から内湾気味に外上方へのび端部は角ばる　肉厚	口縁部ヨコナデ　屈曲部に指押さえ		SP−2158
		562	土師器Ⅲ	1.6 8.1	㋐㋔ 淡黄色 ㋒灰白色	平底から外上方にゆるやかにのび端部は角ばる 全体に厚い器壁　いびつな器形	口縁部ヨコナデ　屈曲部に指押さえ		SP−2158
		563	土師器Ⅲ	1.5 8.3	㋐㋔ 黄灰色 ㋒灰白色	凹凸のある浅い底部から外上方へのび端部は角ばる いびつな器形	口縁部ヨコナデ　底部に強い指押さえ		SP−2265
98	107	564	土師器甕	残高 8.8 20.0	㋐㋔橙〜にぶい黄褐色 ㋒橙色	「く」の字に屈曲する口縁部をもつ　端部は丸い	外面	頸部ヨコナデ　胴部は指押さえ	SP−1880
							内面	口縁部板ナデ　原体痕あり　粘土の接合痕	
		565	土師器甕	残高 4.8 15.2	㋐にぶい褐色 ㋔にぶい黄橙色 ㋒浅黄橙色	口縁は外方に肥厚し上方に面を有す	外面	雑な粘土紐のあと　指押さえ	SP−1896
							内面	ヨコナデ　板ナデ(原体痕)	
97		566	瓦器椀 (大和) Ⅲ−E	3.2 9.7	㋐㋔㋐㋒ 灰白色	端部は外反し沈線を有する	外面	口縁部ヨコナデ　指押さえ　形骸化した高台	SP−1937
							内面	6周するのみの圏線ミガキ	
		567	瓦器椀 (大和) Ⅲ−E	3.2 10.3	㋐㋔㋐㋒ オリーブ灰色	やや平らな底部から内湾気味に外上方に伸び端部は丸く沈線を有する	外面	指押さえ　高台にほとんど高さはない	SP−2016
							内面	見込みに近い位置に数周する圏線ミガキ	
		568	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.0 12.9	㋐オリーブ灰 灰白、淡黄色 ㋔灰白〜灰色 ㋒灰白色	底部からゆるやかに外上方に開き口縁部では垂直に立ちあがり端部で外反する　端部上位に沈線が巡る	外面	雑なつくり	SP−1845
							内面	隙間の多い圏線ミガキ	
86		569	砥石	長さ 8.4 幅 3.6 厚さ 4.8	㋐灰色〜 にぶい赤色 ㋒褐色〜黒褐色		表裏に使用痕		SP−1847
98		570	瓦器釜 大和B1	残高 8.7 口径 22.1 鍔径 25.6	㋐淡橙〜 にぶい橙〜黒色 ㋔灰褐、にぶい橙色 ㋒にぶい橙色	口縁部は逆「ハ」の字に開き端部は内側に折り返し凹状の線を成す　鍔は水平に伸び体部は薄い	外面	煤が付着　体部調整不明　鍔は貼り付け	SP−1792
							内面	調整不明	
97		571	瓦器釜 大和B1	残高 14 口径 23.5 鍔径 28.4	㋐㋔灰白、淡黄 暗灰黄色 ㋒灰白〜淡黄 にぶい橙色	内湾する体部から口縁部は「く」の字に開き口縁端部は内側に折り返す　鍔はほぼ水平　その先端はやや下がる	外面	頸部に段状のナデが巡る　鍔は貼り付け	SP−1677
							内面	指押さえのみ	
		572	瓦器釜 摂津E	残高 18.3 口径 25.0 鍔径 32.2	㋐㋔灰白〜淡黄 〜暗灰黄色 ㋒灰白色	体部はわずかに内湾して口縁へと続く　口縁は内傾する端面を有する　鍔は短かくはねあがり端部は丸い面を有する	外面	連続する指押さえ　粘土の接合痕	SP−1677
							内面	板ナデ	
98		573	瓦器瓶	残高 11.6 底径 11.4	㋐灰白色 ㋔㋐灰色	平底　内面剝落が激しい	外面	わずかに指押さえが残る	SP−2098
							内面	ナデによる凹線	
101	108	574	勾玉	最大幅3.0 厚さ 1.4	乳白緑色	ヒスイ製　中央より少しずれたところに穿孔	径0.6cm強の紐孔		Ⅴ層
		575	土馬	最大幅7.2 厚さ 3.3	㋐淡黄橙〜にぶい黄橙〜明黄褐色 ㋒明褐色	頭部脚部尾の一部を欠失	体胴部全体に指押さえ		Ⅳ層
92		576	土錘	長さ 5.5 最大径2.1	㋐ 灰白〜黄灰色		径0.6cmの紐孔		Ⅲ層
96		577	石鏃	長さ 3.7 幅 2.4 厚さ 0.6	㋐㋔ 暗灰色 ㋒黒色	有茎式　やや大型　サヌカイト製			Ⅱ層
101		578〜587	縄文土器	破片	黄褐色〜 暗黄褐色		外面		Ⅵ層
							内面		南北トレンチ
99		588	緑釉陶器碗	残高 2.2 底径 8.3	㋐黒褐〜暗オリーブ色、褐色 ㋔オリーブ黒色 ㋒灰白〜浅黄橙色	やや高めの高台は「ハ」の字形に開き端部は内傾する凹面をもつ	外面	有段の輪高台　全体に施釉	包含層
							内面		
		589	緑釉陶器碗	残高 2.7 底径 5.5	㋐㋔淡黄色 ㋒灰白色	見込みに丸味をもつ	外面	高台は削りだしのベタ高台	Ⅲ層
							内面		

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
99		590	白磁碗 Ⅳ類	残高 5.4 口径 16.0	外内断 灰白色	底部欠損　体部は玉縁状　内面底部近くに沈線一条巡る	外面 内面	口縁部より1.5cm～2.8cmまで施釉 全面施釉	Ⅲ層
		591	須恵器皿	残高 2.5 12.0	外灰～灰白 灰オリーブ色 内灰白～淡黄 灰オリーブ色 断灰色	底部より外上方に伸び口縁部へと続く　端部は直行し丸く終る	外面 内面	回転ナデ　口縁部に自然釉	Ⅲ層
86	108	592	須恵器杯蓋	2.3 13.2	外内 灰白色 断灰色	低く平らな天井部より外下方に下がり口縁部で屈曲し直下に伸びる端部は丸い　上面凹状偏平な擬宝珠つまみ	外面 内面	回転ナデ　つまみは貼り付け	Ⅲ層
		593	土師器鉢	6.5 12.6	外内断 にぶい黄橙色	やや厚めの底部から外上方に伸び2/3位のところからやや外反し口縁部は直行し丸く終る	外面 内面	摩耗しているが全体に板ナデ	Ⅳ層
86		594	須恵器壺	残高 6.05 21.4	外灰白～にぶい橙色 内灰白色 断浅黄橙色	口縁部は「く」の字に開き端部は上方につまみ上げ口縁は肥厚して断面長方形を呈し一条の沈線を成す	外面 内面	頸部に縦のヘラ描きが６本残る 不明	Ⅱ層
102		595	土師器皿	1.3 8.3	外内断 浅黄橙色	平底から屈曲して逆「ハ」の字に短く開く 口縁端部は薄く丸味をもって終る		摩耗している　立ちあがり部分に強いナデによる凹面が残る	ST－01
		596	土師器皿	1.4 9.6	外内断 灰白色	中央部が少し盛りあがった平底と屈曲して短く伸びる口縁部を有する　端部は厚く角ばる		口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	ST－01
		597	土師器皿	2.3 4.5	外内断 灰白色	丸底からわずかに屈曲して口縁部へ続く 端部は厚みをもち外反する　完形		口縁部強いナデ	ST－01
		598	土師器皿	2.0 9.1	外内断 灰白色	高さがあり丸底から口縁へゆるやかに続く 口縁部で厚みを増し丸味をもって終る		口縁部ヨコナデ	ST－01
		599	土師器皿	1.5 8.4	外内断 灰白色	平底から口縁部は短く屈曲して端部は丸く終る　完形		口縁部ヨコナデ	ST－01
		600	土師器皿	1.8 9.6	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに口縁部へ続く 端部は丸く終る　完形		ヨコナデ	ST－01
102 103		601	土師器皿	1.6 9.6	外内断 灰白色	平底から逆「ハ」の字に開く口縁部を有する 端部は外反し丸く納められる　完形		口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	ST－01
102	109	602	土師器皿	1.5 8.6	外内断 灰白色	平底で高さもなく偏平な器形である 器壁もうすい　口縁部はわずかに外反する　完形		口縁部ヨコナデ	ST－01
102 103		603	土師器皿	1.8 9.8	外内淡灰白色 断淡灰黄色	丸みのある底からゆるやかに口縁部へ続く 端部はわずかに外反し丸みをもって終る　完形		口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ　ナデによる稜線	ST－01
		604	土師器皿	1.6 9.5	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部ですこし外反する 完形		口縁部ヨコナデ	ST－01
		605	土師器皿	1.8 9.5	外内灰白色 断灰黄色	平底から屈曲して外反気味に口縁へ続く 端部は丸く終る　完形		口縁部ヨコナデ 内面見込に平行ナデ	ST－01
		606	土師器皿	2.0 9.3	外内断 灰白色	丸底からわずかに外反する口縁部を有し端部は水平方向にすこし伸びて薄い		口縁部ヨコナデ	ST－01
		607	土師器皿	1.8 9.0	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに口縁部へ続き端部は厚みをもって丸く外反気味である　完形		口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	ST－01
		608	土師器皿	1.8 9.3	外内灰白色 断浅黄橙色	丸底からゆるやかに立ちあがり口縁部へ続く 厚みは均等で口縁部で外反し丸みをもって終る		口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	ST－01
		609	土師器皿	1.6 9.1	外内断 灰白色	平底からわずかに屈曲して口縁へ伸びる 器壁の厚みは均等　口縁部も厚くやや角ばる		口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	ST－01

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
102	109	610	土師器皿	1.5 9.0	外内断 浅黄橙色	少しいびつではあるが丸底からなだらかに口縁部へ続きわずかに外反し端部は丸く納められる　完形	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		ST−01
		611	土師器皿	1.1 7.6	外内断 灰白色	摩耗剝離　完形	口縁部ヨコナデ		ST−01
		612	土師器皿	1.8 9.2	外内断 浅黄橙色	丸底からゆるやかに外上方に開いたのち口縁の端部は厚みをもち丸く終る　完形	口縁部ヨコナデ		ST−01
		613	土師器皿	1.7 7.3	外内断 灰白色	底部中央がやや高くなった底部からゆるやかに口縁部へ続く　端部は丸みをもって終る	内外とも口縁部はヨコナデ		ST−01
		614	土師器皿	1.8 9.2	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに口縁部へ続き端部は厚みをもって角ばる	口縁部ヨコナデ		ST−01
		615	土師器皿	1.6 9.0	外内断 灰白色	平底から屈曲し短かく伸びる口縁部は端部でやや上方に押される　完形	口縁部ヨコナデ　強いナデによる鈍い稜線		ST−01
102 103		616	土師器皿	1.3 8.0	外内断 灰白色	平底から逆「ハ」の字に屈曲して短く伸びる口縁を部有する　中央に小穴あり　完形	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		ST−01
		617	土師器皿	2.4 10.0	外内断 灰白色	中央のやや高くなった底部から直立したあと大きく逆「ハ」の字に開く　端部は丸く終る　完形	斜め方向に指押さえ一周　内面見込みにジグザグ状のナデが残る		ST−01
		618	土師器中皿	3.2 14.1	外内断 灰白色	丸底からゆるやかな立ち上がりを見せ口縁部へつづく端部は直行気味で丸く納められる　厚みは均等である	口縁部ヨコナデ　底部に指押え　ナデによる稜線		ST−01
		619	土師器中皿	3.1 15.6	外灰白色 内灰黄色 断灰白色	平底からゆるやかに屈曲し外上方に開き端部はやや内湾する　内面に煤が付着	指押さえ　強いナデによる稜線		ST−01
		620	土師器中皿	2.3 13.4	外灰黄色 内暗灰色 断灰白色	口縁端部は丸みをおびている　内面に煤が付着	強い指ナデ		ST−01
		621	土師器中皿	2.2 13.8	外内 灰白色〜暗灰色 断灰白色	平底からゆるやかに口縁部へ続く　端部は丸く納められる　内面は全体に煤けている	内外とも口縁部ヨコナデ		ST−01
103		622	土師器中皿	3.0 14.8	外内灰白色 断浅黄色	平底から内湾して立ち上がり端部は肉厚で丸く終る	口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線		ST−01
		623	土師器中皿	2.3 15.8	外内断 灰白色	中央が盛りあがりを見せる底部から屈曲したのち外上方へ伸びる　端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線		ST−01
		624	土師器中皿	2.6 14.0	外淡黄色 内灰白色	口縁部は外上方に向かって開き端部は丸い　底部の形状は不明　1部煤が付着	ナデ＋指押さえ　器壁に凹凸が目立つ		ST−01
		625	土師器中皿	2.7 14.2	外内断 灰白色	なだらかな立ち上がりを見せる体部とやや角ばった口縁を有する	口縁部ヨコナデ　底部指押さえ多数		ST−01
		626	土師器中皿	2.4 14.6	外内断 浅黄色	平底からゆるやかに外上方へ伸びる口縁を有する端部は丸く終る	底部に径0.4cmの押捺痕が不規則に残る		ST−01
138		627	紡錘車	上辺径 2.4 下辺径 4.1	外内断 オリーブ灰色			側面は7個の鋸歯文(中に数本の条線)、底面は6個の鋸歯文の組み合わせで構成　0.6cmの芯穴は上辺下辺より施す	ST−01
102		628	鬼瓦	破片 17.8×6.8	外内灰色 断灰白色	ほぼ半分欠損　立体感があるが仕上げは粗い	表	目玉、鼻など貼り付け　ナデ　細部はヘラ描き	ST−01
							裏	板ナデ	
104	110	629	瓦器椀 (大和) II−A〜B	5.6 15.0	外内灰色 断灰白色	高台から内湾して体部は伸びる端部で外反する　内側上位に沈線あり	外面	放射状の指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	ST−01
							内面	ナデのあと圏線ミガキと時計回りの連結輪状のヘラミガキ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		630	瓦器椀 (大和) II－A～B	5.4 14.8	外内灰色 断灰白色	底部より口縁の方が厚みをもつ 口縁端部にも厚みがあり丸い　沈線は下位にある	外面 内面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ やや密な圏線ミガキと複雑な連結輪状のヘラミガキ	ST－01
		631	瓦器椀 (大和) II－B	5.5 14.2	外内灰色 断灰白色	深くしっかりしたつくりである　沈線あり	外面 内面	分割性のあるヘラミガキ　高台は貼り付け　ナデ 隙間のある圏線ミガキと簡単な円状ヘラミガキ	ST－01
		632	瓦器椀 (大和) II－A	6.3 15.5	外内 オリーブ黒色 断灰白色	大きいが高さのない高台から内湾する体部が続く 口縁内側上位に沈線が１条巡る　端部は丸く終る	外面 内面	分割性のあるヘラミガキ 密な圏線ミガキと時計回りの連結輪状ヘラミガキ	ST－01
		633	瓦器椀 (楠葉) II－1～2	5.7 15.2	外内 暗オリーブ灰色 断灰白色	底部より厚みのある口縁部に沈線は認められず　高台に高さはないが丁寧なつくり	外面 内面	体部2/3まで３分割ヘラミガキ タテ、ヨコの板ナデ　緻密な圏線と太い連結輪状のヘラミガキ	ST－01
		634	瓦器椀 (楠葉) II－1～2	5.9 15.0	外内灰白色 ～暗灰色 断灰白色	深く器壁は薄い　沈線がやや下方に巡る	外面 内面	分割性のあるミガキ　高台は貼り付けナデ形成 密な圏線ミガキと丁寧な連結輪状ヘラミガキ	ST－01
104		635	瓦器椀 (大和) II－B	5.4 15.5	外内灰色 断灰白色	大ぶりで器壁の厚みが均等である　沈線有り	外面 内面	指押さえ　粗い３分割ヘラミガキ 隙間の少しある圏線ミガキ　太い連結輪ヘラミガキ	ST－01
	110	636	瓦器椀 (大和) II－B	5.1 14.8	外内灰色 断灰白色	断面台形の高台と底部との高さは等しい 口縁部でやや外反し端部は丸い　沈線が１条巡る	外面 内面	分割性のあるヘラミガキ 密な圏線ミガキと太い時計回りの連結輪状ヘラミガキ	ST－01
		637	瓦器椀 (楠葉) II－2	5.4 16.0	外内灰色 断灰白色	大ぶり　器壁に厚みがある　高台はしっかりとしたつくり　口縁部に１条の沈線巡る	外面 内面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ やや密な圏線ミガキと太い連結輪状ヘラミガキ	ST－01
		638	瓦器椀 (大和) II－A	5.5 15.0	外内灰色 断灰白色	広い高台と外反する口縁部をもつ 口縁端部は丸く納められ沈線は上位に巡る	外面 内面	指押さえと３分割ヘラミガキ 細く密な圏線ミガキと太く粗いジグザグのヘラミガキ	ST－01
		639	瓦器椀 (楠葉) II－1	5.5 15.4	外内灰色 断灰白色	丁寧なつくりの高台と口縁部にむかって厚みをもつ体部　口縁端部は丸く沈線はやや下方に位置する	外面 内面	体部2/3まで分割ヘラミガキ 密な圏線ミガキと太い連結輪状ヘラミガキ	ST－01
		640	瓦器椀 (大和) III－A(古)	4.9 15.0	外内 黒褐色 断灰白色	口縁部は外上方に向かって開く　外面に重ね焼の痕がみられる　口縁部沈線巡る	外面 内面	粗い３分割のヘラミガキ　体部に指押さえ やや隙間のある圏線ミガキと単純な輪状ヘラミガキ	ST－01
		641	瓦器椀 (大和) I－C	6.1 15.2	外内灰色 断灰白色	広く高い高台から均等な厚みをもつ体部が口縁まで内湾して続く　内面には浅い沈線有り	外面 内面	体部2/3まで密なヘラミガキ 緻密な圏線ミガキとジグザグのヘラミガキが格子に重なる	ST－01
		642	瓦器椀 (大和) III－A(古)	4.6 15.2	外内灰色 断灰白色	広い高台に対して、器高はない　均等な厚みで口縁まで達し、端部はわずかに外反し内側に沈線が巡る	外面 内面	体部～底部まで粗いミガキ　丁寧な高台は貼り付け 隙間の少しある圏線ミガキと簡単な連結輪状ヘラミガキ	ST－01
105		643	瓦器椀 (大和) II－B	5.7 15.2	外内 暗灰色 断灰白色	高さはないが端正な高台　底部より口縁部の方が厚みをもつ　口縁端部はわずかに外反し丸く納められる　沈線が１条巡る	外面 内面	高台～体部へ放射状に指押さえ　４分割ヘラミガキ タテヨコのナデ　細い圏線ミガキ　見込みに時計廻りの連結輪状ヘラミガキ	ST－01
	111	644	瓦器椀 (楠葉) II－2	残高5.8 16.0	外内 灰白色 断灰白色	浅い沈線を有する口縁は丸みをもつ 高台は剝落している	外面 内面	体部2/3位に４分割のヘラミガキ 隙間のある圏線ミガキ　形状の判別できないヘラミガキがわずかに残る	ST－01
		645	瓦器椀 (楠葉) II－2～3	5.4 15.2	外内 暗灰色 断白色	口縁部の器壁がやや厚い 沈線巡る	外面 内面	分割性のあるヘラミガキ　断面逆三角形の貼り付け高台 細い緻密な圏線ミガキと太目の連結輪状ヘラミガキ	ST－01
		646	瓦器椀 (楠葉) II－2～3	5.0 15.2	外内灰色 断 オリーブ灰色	「ハ」の字に開く高台のつくりは丁寧である　体部はゆるやかに外上方に開く　沈線は２条残存	外面 内面	体部1/2に分割性のあるヘラミガキ 緻密な圏線ミガキ　見込みに時計廻りの連結輪状ヘラミガキ	ST－01
		647	瓦器椀 (大和) III－C	3.1 12.3	外内灰色 断灰色	形骸化した高台は底部に等しい高さになる ゆるやかに外上方につづく体部と丸みのある口縁部	外面 内面	粗いミガキがわずかに残る 円辺から見込にかけて0.3cm幅の太い圏線ヘラミガキ	ST－01
		648	瓦器椀 (大和) III－C	3.1 12.0	外内灰色	偏平で小ぶり　口縁部浅い沈線が巡る	外面 内面	体部にヘラミガキがわずかに残る 隙間の大きい圏線ミガキ	ST－01
		649	瓦器椀 (大和) III－C	3.4 12.4	外内 暗灰色 断灰白色	小さくていびつな形　器壁が薄い　外反する端部上方に0.2mm幅の沈線巡る	外面 内面	口縁部に強い横ナデ 粗い圏線ミガキ	ST－01

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	111	650	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	3.6 13.1	外内灰色 断灰白色	偏平な高さのない器形は高台高と底部がほぼ等しい 口縁はわずかに外反し沈線が1条巡る	外面	重ね焼きの痕が残る	ST－01
							内面	ナデの上に口縁部～底部に時計廻りの粗いヘラミガキ	
		651	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	3.6 12.0	外内 暗オリーブ灰色 断灰白色	底部から口縁まで器壁厚は均等である 口縁端部上方に沈線有り	外面	指押さえ　わずかなヘラミガキ	ST－01
							内面	圏線ミガキと簡単な輪状のヘラミガキ	
		652	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	3.6 12.4	外内灰色 断灰白色	口縁部は外上方に向かって開く　端部は上向きで沈線らしきものあり　形骸化した高台	外面	口縁部ナデ　体部指押えと数条のヘラミガキ	ST－01
							内面	隙間の大きい圏線ミガキと簡単な輪状のヘラミガキ	
		653	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	3.5 13.6	外内 黒灰色 内灰白色	偏平な器形　口縁部は外上方に向かってゆるやかに開く　高台は雑なつくり	外面	口縁部ナデ　体部に指押さえ	ST－01
							内面	圏線ミガキと連結輪状ヘラミガキ	
		654	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	4.3 12.8	外内暗灰色 ～灰白色 断灰白色	形骸化した高台　沈線あり　内面に煤	外面	口縁部はヨコナデ　わずかにヘラミガキが残る	ST－01
							内面	隙間の開いた圏線ミガキと簡単な輪状ヘラミガキ	
		655	瓦器椀 (大和) Ⅱ－A	残高1.4 底径6.0	外内灰色 断灰白色	底部のみ残存　大きな高台で整っている	外面	調整不明	ST－01
							内面	見込みにジグザグのヘラミガキが格子に重なる	
		656	瓦器椀 (楠葉) Ⅱ－2	残高1.9 底径5.4	外内灰色 断灰白色	断面三角形の張り付け高台で高さはあるが作りは雑	外面	調整不明	ST－01
							内面	見込みにジグザグのヘラミガキが鮮明に残る	
		657	瓦器椀 (大和) Ⅱ－B	残高2.9 底径4.5	外内灰色 断灰白色	器壁は均等な厚み	外面	わずかにヘラミガキが残る	ST－01
							内面	丁寧な連結輪状のヘラミガキ	
		658	瓦器椀 (大和) Ⅱ－B	残高3.5 5.0	外内断 灰白色	口縁部欠損　ゆるやかに丸い体部と「ハ」の字に開く高台を有する	外面	ヘラミガキがわずかに残る	ST－01
							内面	大きな連結輪状のヘラミガキ	
		659	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B	残高4.2 13.4	外内断 灰白色	体部から口縁に向かって外上方に開き口縁部で外反する	外面	口縁部は横ナデによる稜線	ST－01
							内面	隙間の少しある圏線ミガキ	
		660	須恵器甕	残高4.9 19.8	外内断 灰白色	口縁部は外傾する端面を有す　端部は上方に押される	外面	口縁部は強いナデ　体部にわずかな格子タタキ	ST－01
							内面	体部板ナデ	
106		661	須恵器甕	残高9.4 38.4	外灰オリーブ 内灰オリーブ 黄灰色 断灰色	口頸部は上外方に伸び端部はつまみ上げ肥厚外端面は垂直な凹面を成す	外面	体部に自然釉が残る	ST－01
							内面		
103	112	662	瓦器Ⅲ	2.2 9.7	外内断 灰白色	底部中央がわずかに高い底部から口縁部は外反し端部は上向きの面をもつ	外面	底部に指押さえが顕著　屈曲部に稜線	ST－01
							内面	見込みに密なジグザグのヘラミガキと口縁部に圏線ミガキ	
		663	瓦器Ⅲ	1.8 9.1	外内灰色 断灰白色	平底から屈曲したのち短かく開く 口縁端部は肉厚で角ばる	外面	口縁部は横ナデ	ST－01
							内面	隙間の開いたジグザグのヘラミガキ	
		664	瓦器Ⅲ	1.9 9.6	外内緑灰色 ～灰色 断灰色	丸底から立ち上がりは角度をもつ	外面	口縁部は強い横ナデ　屈曲部に稜線	ST－01
							内面	見込みは細かいジグザグと周辺は5～6条の圏線ミガキ	
		665	瓦器Ⅲ	1.8 9.8	外内灰色 断灰白色	平底から屈曲して立ち上がりわずかに外反する口縁部を有する	外面	口縁部に強いヨコナデ　底部に指押さえ	ST－01
							内面	ナデの上に0.2cm幅のジグザグのヘラミガキ	
		666	瓦器Ⅲ	2.0 9.4	外内灰色 断灰白色	ていねいなつくり 丸みのある底部から外反して立ち上がる	外面	底部に指押さえ　屈曲部に稜線	ST－01
							内面	幅のあるジグザグのヘラミガキ	
106		667	白磁碗 Ⅳ類	残高5.1 15.0	外内断 灰白色	口縁は玉縁状	外面	口縁部1～2cm下位まで施釉	ST－01
							内面		
		668	土師器鍋	残高 18.2 11.4	外内断 灰黄色	口頸部よりゆるやかに「く」の字に開き端面は外傾する	外面	全体に煤付着のため調整不明	ST－01
							内面	ナデ	
		669	瓦器釜 山城F	残高 5.7 口径 25.2 鍔径 30.4	外内灰色 断灰白色	底体部欠損　口縁部は内傾しながら端部は平坦面を有する　鍔は水平方向に伸びる	外面	鍔貼り付け　ナデ　口縁部ヨコナデ	ST－01
							内面	板ナデ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
103	112	670	瓦器皿	1.8 9.6	外内灰色 断灰白色	平底から口縁部は外上方に伸び端部は角ばる	外面	口縁部はヨコナデ	ST−01
							内面	ナデの上にジグザグのヘラミガキ	
		671	瓦器皿	1.5 9.0	外灰色 断灰白色	平底から屈曲し口縁部で外反する 雑なつくり	外面	口縁部はヨコナデ　屈曲部に稜線	ST−01
							内面	見込みにジグザグのヘラミガキが格子に重なる	
		672	瓦器皿	1.7 9.6	外内灰色	底部から直立して口縁部で外反する	外面	口縁部強いナデ　屈曲部に稜線	ST−01
							内面	粗いジグザグのヘラミガキ	
		673	瓦器皿	2.0 9.0	外内灰色 断灰白色	火ぶくれで剝落した部分が多い 口縁部外反	外面	口縁部はヨコナデ	ST−01
							内面	見込みに太いヘラミガキが不規則に残る	
105		674	土師器高台付皿	3.6 9.6	外内断 灰白色	台部は内湾して立ちあがる　少しくびれたのち外上方へ伸び端部は厚みをもって丸く終る	外面	ナデ　杯部指押さえ　ナデ	ST−01
							内面	ナデ	
		675	土師器高台付皿	残高4.1 底径6.6	外内 黄橙色 断灰色	脚部は外下方に開き端部は丸く終る	外面	杯底部中央よりに穿孔が1ヶ所	ST−01
							内面		
		676	土師器高台付皿	4.4 底径9.2	外内 灰白色 断黒色	脚部はゆるやかな湾曲をみせ端部はわずかに角ばる	外面	ナデ	ST−01
							内面	ナデ	
		677	瓦器高台	残高 4.7 底径 10.4	外灰色 内灰黄色 断灰白色	器種は不明　基部から脚部は下外方に向かってまっすぐ伸び端部は丸く終る	外面	高台部分に連続する指押さえ	ST−01
							内面	指押さえ	
103		678	土師器皿	1.0 8.2	外内断 灰白色	平底から「ハ」の字に短かく屈曲した異形の皿 端部は丸く見込みは平らである	外面	底部に指押さえ　ナデ	ST−01
							内面	口縁部内側に折り返しナデ	
105		679	瓦器不明品	残高 11.8 底径 11.4	外灰色 内断 灰白色	体部は底部からほぼ直立する 粘土紐の痕が残る	外面	ナデ及び板ナデ(幅は1.2cm位)	ST−01
							内面	体部ナデ　底部は強い指ナデ	
		680	砥石	長さ 4.5 幅 3.0 厚さ 2.0	外内断 灰白色	使用面は凹状になっている			ST−01
		681	砥石	長さ 6.0 幅 3.8 厚さ 2.4	外内断 灰白色	四面に使用痕残る　108と同じ石			ST−01
106		682	瓦器火鉢	残高7.0 49.3	外暗灰色 内灰白〜灰色 断灰白色	端部は内傾する平坦面を有する	外面	横方向のヘラミガキ	ST−01
							内面	丁寧なヘラミガキ	
107	113	683	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	5.2 15.8	外内灰色 断灰色	大きい器形は高台を欠損する　底部より口縁部の方が厚みをもつ　口縁端部は丸く内面に浅い沈線が巡る	外面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	ST−02
							内面	ナデのあと密な圏線ミガキ　見込みに3回転連結輪状ヘラミガキ	
		684	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.8 12.4	外内 オリーブ黒色 断灰白色	小ぶりで口縁へと厚みを増す　高台より底部の方が低い位置にある　口縁は外反し沈線は上端部に位置する	外面	高台貼りつけナデとわずかなミガキ	ST−02
							内面	周辺〜底部へ圏線ミガキ　見込み時計廻り3回転(0.2cm幅)ヘラミガキ	
106		685	土師器釜 摂津E	残高 9.5 口径 28.2 鍔径 33.8	外浅黄橙〜にぶい橙色 内灰白 断灰白〜褐灰	口縁端部は内傾する端面を有する　鍔は上方にそる 器形は大ぶり	外面	鍔下に指押さえ　摩耗のため調整不明	ST−02
							内面	ナデ　調整不明	
		686	土師器釜 大和B1	4.2 26.4	外灰白色 内灰白〜褐灰色 断灰色	頸部より「く」の字に開き端部は内側に折り返し、体胴部に張りがない	外面	ナデ	ST−02
							内面	ナデ	
		687	瓦器皿	1.5 11.6	外内断 灰白色	底部欠損　口縁部で逆「ハ」の字に屈曲し口縁端部は少し角ばる	外面	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ	ST−02
							内面	口縁部数条の圏線ミガキ　見込みにジグザグのヘラミガキ	
106		688	須恵器甕	残高 6.8 口径 18.8	外灰白色 内断 灰白〜灰色	口頸部で垂直に立ち上がりその後外反　口縁端部は上方につまみあげ	外面	体部はタタキ	ST−02
							内面	体部、胴部は板ナデ	
		689	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B〜C	4.3 13.8	外内灰色 断灰白色	均等な厚みが底部から口縁まで続き口縁部はわずかに外反し内面上位に浅い沈線が1条巡る	外面	高台は丁寧な貼り付けナデ　口縁部にヘラミガキ	ST−02
							内面	円辺から底部へ隙間のあるヘラミガキ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	113	690	瓦器椀 (大和) Ⅲ－D	3.1 12.0	外内 オリーブ黒色 断灰白色	ゆるやかに底部から口縁へ続く器形は小さい　ほとんど高さのない高台　口縁上端面に沈線が巡る	外面 内面	凹凸の激しい体部、口縁部にわずかにヘラミガキ 円辺から底部へ隙間の大きい圏線ミガキ	ST－02
106		691	土師器中皿	2.0 15.6	外内明褐色 断 にぶい橙色	平底から屈曲し逆「ハ」の字に広がる　端部はわずかに角ばる	屈曲部にナデ		ST－02
		692	土師器皿	1.5 9.5	外内断 にぶい黄橙色	平底から外上方へ短く伸びる　口縁部はいびつである　端部は丸く終る	ナデ　口縁部ヨコナデ		ST－03
		693	土師器皿	2.0 10.4	外内 灰白色 断灰黄色	丸底から外上方へ開き口縁部は外反する　端部は丸く終る　偏平な器形	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ ナデ		ST－03
107		694	土師器中皿	2.4 14.2	外内浅黄橙～灰白色 断灰白色	端部は丸く終る	口縁部に強いナデ　指押さえ多数 屈曲部に稜線		ST－04
		695	瓦器椀 (大和) Ⅲ－B～C	3.5 12.2	外内断 灰白色	高台を有し内湾して伸びる体部に厚みをもつ　口縁は外反したのち直行する　沈線有り	外面 内面	口縁部にヘラミガキ やや密な圏線ミガキ　見込みのヘラミガキは形状不明	ST－04
107		696	瓦器釜 摂津C1	残高 2.9 口径 22.8	外黒色 内灰色 断灰白色	口縁部は垂直に伸び上端面にナデによる浅い溝が残る　鍔は短かい	外面 内面	ヨコナデ	ST－04
		697	須恵器甕	残高 6.7 24.8 21.8	外内断 灰白色	頸部から逆「ハ」の字に開き口縁端部で上方につまみあげる	外面 内面	肩部に格子タタキ　口縁端部は上方につまみあげ ナデ	ST－04
		698	土師器皿	2.4 7.8	外内 にぶい黄橙 断灰黄色	底部中央が高い底部から内湾気味に外上方に伸び口縁部は丸い	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		ST－04
		699	土師器皿	1.8 9.2	外内断 灰白色	丸底から外上方へ伸びる体部　口縁部に厚みをもち端部は外反し丸く終る	ナデ　口縁部ヨコナデ		ST－04
107		700	瓦器 奈良火鉢	破片 11.5×2.0	外内 灰白～灰色 断灰白色		外面 内面	菊花紋(径3.6cm) ナデ	ST－04
		701	土師器中皿	2.0 12.8	外内 灰白～ 浅黄橙色	平底からゆるやかに外上方へ伸びる口縁を有する　端部は角ばる	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		ST－05
		702	土師器皿	1.3 8.8	外内断 にぶい黄橙色	器壁に厚みがあり平底から屈曲して外上方に伸び端部も厚みをもって丸く終る	口縁部ナデ　底部に指押さえ ナデ		ST－05
		703	土師器皿	1.4 9.2	外内断 灰白色	平底から屈曲して外上方に伸びる体部と粗雑なつくりの角ばった端部を有する	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		ST－05
107		704	土師器皿	1.2 8.4	外内 浅黄橙色	平底から屈曲したのち短く外上方へ伸びる口縁を有する　端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線		ST－05
		705	土師器皿	1.6 8.6	外内断 浅黄色	完形　平底から屈曲して外上方に伸びる　底部に厚みをもちしっかりしたつくり　籾痕あり	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		ST－05
		706	土師器皿	1.7 9.2	外内断 にぶい黄橙色	完形　接合痕が鮮明に残る　平底からなだらかに口縁へと続き厚みをもって終る	ヨコナデ　指押さえ		ST－05
107		707	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	3.8 13.0	外内 暗灰色 断灰白色	形骸化した高台と底部はほぼ等しい位置にある　器壁は均等の厚さを保ち口縁部で内側に肥厚する　沈線は上位に巡る	外面 内面	指押さえ　わずかなヘラミガキ 隙間の開いた圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	ST－05
		708	瓦器椀 (大和) Ⅲ－C	4.0 12.6	外内 暗黄褐色 断灰色	高台より底部が低い　均等な厚みで口縁部まで続く　端部は丸く納められ沈線は浅く下位にある	外面 内面	連続する指押さえ　数条のヘラミガキ 隙間の開いた圏線ミガキ　連結輪状ヘラミガキ	ST－05
	114	709	瓦器釜 摂津E	残高 4.2 22.6	外内 灰白色 断灰色	口縁部はわずかに内傾し平坦面を有し鍔は水平に伸びる	外面 内面	鍔は体部に貼り付けナデ 板ナデの原体痕	SE－01

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		710	土師器中皿	2.2 14.8	外内 灰白色 断灰白色	口縁部の形状いびつ　口縁内側に強いナデによる凹線 口縁部内湾	粘土紐の痕　ナデによる稜線 口縁部ヨコナデ　体部はナデを指押さえ		SE−02
109		711	土師器皿	1.3 8.6	外内 浅黄橙色 断灰白色	平底と屈曲したのち短く開く口縁を有する　端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ		SE−02
		712	瓦器皿	1.8 9.4	外内断 灰白色	丸みをおびた底部からゆるやかに口縁へ続く　端部はわずかに水平方向に伸び丸く終る	外面	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ	SE−02
							内面	見込みに不規則なジグザグのヘラミガキが格子に重なる	
		713	須恵器片口鉢 （東播系）	残高 6.4 26.8	外灰色 口縁部 暗灰色	体部から口縁部にかけて上外方に開く 口縁端部は外に肥厚し凹面を有する	外面	口縁部強いナデ	SE−02
							内面	ヨコナデ	
109		714	瓦器椀 （大和） Ⅲ−B〜C	3.9 12.8	外内灰色	偏平で小ぶり　口縁部は垂直に伸び浅い沈線が巡る	外面	連続する指押さえ　わずかなヘラミガキ	SE−02
							内面	隙間の大きい圏線ミガキ	
		715	土師器皿	0.9 7.6	外灰白〜 灰黄色 内断灰白色	平底から屈曲し短かく開く口縁部端部は丸く終る	ナデ　底部屈曲部に稜線		SE−03
		716	土師器皿	1.4 7.6	外内断 灰白色	体部から口縁にかけて外上方に伸びる	ナデ　ナデによる稜線		SE−03
	114	717	土師器中皿	2.7 13.0	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部で外反する	口縁部強いナデと指押さえ		SE−04
		718	土師器中皿	1.7 13.0	外内断 灰白色	偏平な底部から逆「ハ」の字に開き口縁端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ		SE−04
		719	土師器皿	1.7 8.5	外内灰白色 断明褐灰色	凹凸のある底部からゆるやかに外上方に開き口縁端部は角ばる	口縁部ヨコナデ 屈曲部に稜線		SE−04
		720	土師器皿	1.8 9.2	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開く　口縁端部は厚みをもち丸く終る	口縁部ヨコナデ		SE−04
		721	砥石	長さ 7.3 幅 6.2 厚さ 2.0	表裏灰色 断灰色	両面使用	使用痕が条線状に残る		SE−04
		722	土師器中皿	2.2 15.6	外内断 灰白色	浅いが大ぶり　器壁は薄い　端部は上方につまみあげ	口縁部ヨコナデ　指押え　「て」の字状口縁		SE−04
		723	瓦器椀 （大和） Ⅲ−A（新）	4.2 14.3	外暗灰色 内灰色 断灰白色	やや浅く口縁部にかけてゆるやかな広がりを持って口縁部沈線は上位を巡る	外面	体部に指押さえ　分割性のみられる粗いヘラミガキ	SE−04
							内面	やや密な圏線ミガキと太く簡単な連結輪状ヘラミガキ	
109		724	瓦器椀 （楠葉）	3.0 8.0	外内断 灰白色	体部2/3位から上方に立ち上がる　沈線あり 完形	外面	1条のヘラミガキが口縁に残る	SE−04
							内面	やや密な圏線ミガキ　1重の輪状ヘラミガキ	
108		725	瓦器椀 （楠葉） Ⅰ−3	6.7 15.1	外内灰色〜 暗灰色 断灰白色	深く大ぶりで器壁が厚く重い　丸みのある器形	外面	密な3分割ミガキ　高台は貼り付け　ナデ　断面台形	SE−08
							内面	緻密な圏線ミガキと見込みはジグザグのヘラミガキ	
109		726	瓦器椀 （大和） Ⅰ−D	5.7 15.0	外黒色 内灰色 断灰白色	深く大ぶり　端部上方に明確な沈線を施す 口縁部でわずかに外する	外面	3分割ミガキ	SE−08
							内面	密な圏線ミガキと曲線的なジグザグのヘラミガキ	
108	115	727	瓦器椀 （楠葉） Ⅱ−1〜2	5.9 15.6	外内灰色〜 暗灰色 断灰白色	深く口縁部に厚みをもつ やや下位に沈線を有する	外面	1条のヘラミガキ　高台断面台形	SE−08
							内面	密な圏線ミガキとジグザグのヘラミガキ	
		728	土師器皿	1.4 9.2	外内断 灰白色	緩やかに開いた口縁部　端部は上方につまみあげ	ヨコナデ＋ナデ　指押さえ 「て」の字状口縁		SE−08
		729	土師器皿	1.5 9.6	外内断 灰白色	底部から体部に粘土接合の痕が残る	ヨコナデ＋ナデ		SE−08

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	115	730	土師器Ⅲ	1.7 9.3	外内断 灰白色	底部から口縁にかけてゆるやかな曲線で外上方に開く 口縁部でわずかに外反する	ヨコナデ+ナデ　体部に指押さえ		SE−08
		731	常滑焼甕	残高8.5 39.8	外褐灰色 内にぶい褐色 断にぶい橙色	口縁部のみ残存　粘土紐の痕あり　口縁端部は三角形となりナデによる凹線をもつ	外面	ナデ	SE−09
							内面	指押さえ	
		732	須恵器杯身	3.1 14.6	外内断 灰白色	平底から屈曲し外上方に開き口縁端部は直行する	外面	ヨコナデ+ナデ	SE−09
							内面		
		733	土師器Ⅲ	1.9 10.4	外内断 灰白色	平底から屈曲し外上方へ開く　口縁端部は上方へ押される	ヨコナデ+ナデ		SE−09
		734	土師器Ⅲ	1.6 8.2	外内断 灰白色	底部中央が高くなりゆるやかに口縁部伸びる　口縁端部は厚みがあり上方へ押される	調整不明		SE−09
		735	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	3.9 13.8	外内断 灰白色	偏平で体部から口縁にかけてゆるやかに外上方に開く 端部沈線あり	外面	口縁部にわずかにミガキ　指押さえ	SE−09
							内面	隙間のある太めの圏線ミガキ	
		736	土師器Ⅲ	1.4 8.4	外内断 灰白色	偏平でいびつ　端部は丸く器壁がやや厚め	ヨコナデ　体部に指押さえ		SE−10
		737	瓦器足釜	残高 13.0 23.2	外淡橙色 内灰白色 断灰白色	底部から下1/3位から張り出し2/3位から内湾する　内外底・体部に煤付着　端部は丸い　三脚は三方に貼り付けられていた	外面	底部近くに指押さえ	SE−10
							内面	口縁部に板ナデ	
109		738	土師器 足付き鍋	残高 10.3 24.0	外淡橙色 内灰白色 断灰白色	体部は半球形で内湾する口縁部に内傾する端面をもつ　頸部で「く」の字に屈曲する　三脚は三方に貼り付けられていた	外面	脚部つけ根に指押さえ　体部は斜めのハケメ	SE−10
							内面	口縁部ヨコナデ　体胴部は斜めのハケメが切りあう	
		739	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(古)	4.3 14.2	外内灰色 断灰白色	偏平で浅い　端部に沈線あり	外面	体部1/2にヘラミガキ　指押さえ数個	SE−10
							内面	隙間のある圏線ミガキ　見込みのヘラミガキは形状不明	
		740	瓦器椀 (楠葉) Ⅱ−1	5.2 14.6	外褐灰色 内黒褐色	厚い器壁　端部に浅い沈線あり　高台は高さもあり形も整っている	外面	体部2/3にヘラミガキ　貼り付けた断面台形の高台	SE−10
							内面	密な圏線ミガキ　見込みはジグザグのヘラミガキが格子に重なる	
109		741	白磁碗 Ⅳ−2類	7.3 15.1	外内 灰白色	体部器壁は薄い　口縁部は玉縁状	外面	口縁より2/3の位置まで施釉	SE−10
							内面	見込み部分に段を有する	
	116	742	土師器甕	残高 4.5 15.8	外浅黄橙色 内灰白色 断灰白色	体部から口頸にかけて内湾し「く」の字に開く　端部は丸い	外面	連続する指押さえ　口縁部に強いナデ	SE−11
							内面		
110		743	土師器甕	残高 4.3 16.6	外灰色 内黄灰色 断灰白色	頸部は「く」の字に屈曲する 口縁端部は外に肥厚する	外面	ヨコナデ　指押さえ	SE−11
							内面	ナデ	
		744	土師器甕	残高3.1 20.6	外内断 灰　色	口縁部は外反　端部は上向きに面を成し中央わずかに凹状を呈する	外面	ヨコナデ　ナデ	SE−11
							内面		
		745	土師器甕	残高4.8 15.4	外黒色 内黒褐色 断灰黄褐色	口頸部と体部の境から器壁が薄い　頸部から「く」の字に開き端部は角ばる	外面	調整不明	SE−11
							内面		
		746	須恵器不明品	残高4.6 底径9.0	外内断 灰　色	中央の高い底部は体部の器壁に比べてかなり薄い	外面	強いナデ	SE−11
							内面	ナデ	
126		747	緑釉陶器碗	残高4.3 底径8.1	外内 オリーブ灰色 断灰色	底部は平らで厚く体部外上方に伸びる 高台はやや斜めに開き高めである　断面台形	外面	全体に施釉	SE−11
							内面	ナデ	
110		748	須恵器壺	残高 4.8 底径 10.5	外内灰色 断灰白色	底部は平らで「ハ」の字型の高台　高台端面は水平な平面を成す	外面	回転ナデ	SE−11
							内面	回転ナデ	
		749	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	5.1 15.2	外褐灰色 内断灰色	かなりいびつ　底部は広い　熱を受けた痕あり　高台より底部が低い位置にある	外面	指押さえ	SE−11
							内面	摩耗して調整不明　燻し	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
110		750	土師器皿	1.6 10.2	外内断 灰白色	器壁薄く端部は上につまみ上げ丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ 「て」の字状口縁		SE−11
110		751	土師器中皿	2.0 13.4	外橙色 内にぶい橙〜橙色 断オリーブ灰色	器壁薄い 上向きに面を成す	内外とも口縁部ヨコナデ		SE−11
110		752	土師器杯	残高0.9 底径6.4	外淡橙色 内断灰白色	高台表裏に指押えの痕が残る　高台外側底面に墨書 「廣正？」と書かれている	外面 内面	貼りつけ　ナデの高台 ナデ	SE−11
		753	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	5.5 15.0	外内灰色 断灰白色	底部から体部へゆるやかに開き口縁部は直立し端部で外反する　端部に太い沈線が施される	外面 内面	粗いヘラミガキと指押さえ　断面逆三角形の貼り付け高台 密な圏線ミガキ　太い3回転の連結輪状ヘラミガキ	SE−12
110	116	754	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.9 14.6	外灰色 内黒色 断灰白色	器壁が厚くしっかりした作り　太めの沈線あり	外面 内面	3分割の粗いヘラミガキ やや密な圏線ミガキと太い簡単な連結輪状ヘラミガキ	SE−12
		755	土師器高台付皿	6.4	外浅黄橙〜灰白色 内灰白色 断灰白〜灰色	杯の部分は形態不明　脚部は内湾して外下方へ下りたのち1/3位より外反気味に下り端部は丸い　いびつな器形	外面 内面	脚基部に多数の指押さえ　裾部に強いヨコナデ 裾部に指押え	SE−12
115		756	土師器皿	1.4 9.0	外内 にぶい黄橙色 断浅黄橙色	平底から屈曲し外上方へ伸びたのち外反して端部はやや角ばる	内外ともヨコナデ		SE−12
		757	瓦器皿	1.8 9.6	外内断 灰色	平底から屈曲し外上方へ伸びたのち外反して端部はやや角ばる	外面 内面	口縁部にナデによる稜線 見込みにジグザグのヘラミガキ	SE−12
109		758	土師器中皿	2.6 15.7	外内 にぶい黄橙色 断灰白色	平底から屈曲し水平に開いたのち口縁部は水平方向へ伸びる　端部ははねあげ	ナデ　指押え　1部煤付着		SE−13
		759	土師器中皿	2.2 12.6	外内灰白色 断浅黄橙色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁部でわずかに内湾する	口縁部ヨコナデ　指押さえ		SE−16
		760	土師器皿	1.6 8.4	外内断 にぶい橙色 〜灰白色	全体にいびつ　底部から屈曲し立ち上がる　端部は上方に押される	ヨコナデ＋ナデ　底部指押さえ		SE−16
		761	土師器皿	1.6 8.8	外内断 灰白色	いびつな平底から内湾気味に立ち上がる口縁端部はわずかに角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SE−16
		762	土師器皿	1.4 8.4	外内断 灰白色	底部からゆるやかに外上方に開く	ヨコナデ＋ナデ　ナデによる稜線		SE−16
111		763	土師器皿	1.4 8.9	外内浅黄橙色 断にぶい黄橙色	平底から屈曲して短く上方に伸びる口縁を有する 端部は内湾気味でやや角ばる	ナデによる鈍い稜線		SE−16
	117	764	土師器皿	1.7 8.4	外内断 灰白色	底部から緩やかに外上方に開き端部は丸く終る	ヨコナデ　ナデによる稜線		SE−16
111		765	土師器皿	1.5 8.3	外内断 灰白色	丸底から屈曲して外上方へ開く　口縁端部はややつまみあげ　完形	口縁部ヨコナデ　底部指押え		SE−16
		766	土師器皿	1.4 8.2	外内断 灰白色	底部からゆるやかな曲線で外上方に開く　端部は上方に押される	ヨコナデ＋ナデ		SE−16
		767	土師器皿	1.2 8.6	外内断 灰白色	底部からゆるやかに外上方に開く　底部は薄く体部から口縁にかけて厚みをもつ	口縁部ヨコナデ		SE−16
111		768	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B〜C	3.8 12.5	外灰白色 内灰色	偏平でいびつ　端部に沈線が上向きに施される　底部が高台より低い	外面 内面	体部1/2まで3分割ミガキ 隙間の開いた圏線ミガキと簡単な連結輪状ヘラミガキ	SE−16
		769	瓦器椀 (楠葉) Ⅰ−2〜3	6.4 15.0	外内断 灰色	しっかりした作りで器壁も厚い　底部からゆるやかに外上方に開き口縁へ直行　端部に沈線はなし	外面 内面	体部に連続する指押さえ 緻密な圏線ミガキ　曲線的なジグザグのヘラミガキ	SE−17

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
111	117	770	瓦器釜 河内B1	残高7.1 25.4	(外)明褐灰色 (内)褐灰色 (断)黒褐色	体部から口縁にかけて内湾気味に伸び端部下2cm位の所から直立する　鍔はやや水平　下に煤が付着	外面　わずかに指押さえ　鍔は貼り付けナデ 内面　密な斜めハケメ	SE−16
		771	瓦器釜 大和B1	残高6.1 27.0	(外)(内) 灰白色 (断)灰色	体部から口縁にかけて内湾し「く」の字に開く　口縁は端部で肥厚し丸い　鍔は少し上がり気味　端部ナデによる凹線	外面　口縁部ヨコナデ　鍔は貼り付け　ナデ 内面　ヨコナデ	SE−16
		772	瓦器釜 河内B1	残高 7.6 25.4	(外)灰白色 (内)にぶい黄橙色 (断)灰白色		外面　口頸部に多数の指押さえ　鍔は貼り付けナデ 内面　密な斜めハケメが切り合う	SE−16
		773	瓦器鍋	5.4 22.0	(外)(内) 灰白色 (断)灰色	体部から上外方に向かって立ちあがり端部から下2cm位の所で水平に短く伸び再び上外方に開く　外端部は外傾凹面を有す	外面　粘土紐の痕　口縁部ヨコナデ 内面	SE−16
		774	土師器皿	1.6 9.2	(外)(内)(断) 灰白色	底部からゆるやかに外上方に開き端部は上方につまみあげ	内外とも口縁部ヨコナデ　端部はつまみあげ　体部に指押さえ 「て」の字状口縁	SE−17
113		775	土師器皿	1.8 9.3	(外)(内)(断) 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き水平方向に外に伸びたのちにつまみあげ　端部はやや角ばる	内外とも口縁部ヨコナデ　口縁端部つまみあげ　体部に指押さえ 「て」の字状口縁	SE−17
		776	土師器皿	1.3 8.8	(外)(内) 浅黄橙色	全体にいびつ　底部からゆるやかに外上方に開く	内外とも口縁部ヨコナデ	SE−17
113		777	土師器皿	1.6 9.1	(外)(内)(断) 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開きわずかに水平方向に伸びたのち端部は上方につまみあげ	内外とも口縁部ナデ　強いナデによる稜線　端部つまみあげ 「て」の字状口縁	SE−17
		778	土師器皿	1.3 9.2	(外)(内)(断) にぶい黄橙色	平底からゆるやかに外上方へ開き水平方向に伸び端部は上方へつまみあげ	内外とも口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線 端部はつまみあげ　「て」の字状口縁	SE−17
		779	土師器皿	1.7 8.8	(外)(内)(断) 灰白色	底部から口縁にかけてゆるやかに開き水平方向に伸びたのち端部は上方にわずかにつまみあげ	口縁外面に強いナデによる凹面をもつ 「て」の字状口縁	SE−17
113		780	土師器杯	3.0 13.8	(外)(内)(断) 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁部でわずかに外反して端部は厚みをもって丸く終る　完形	内外とも口縁部ヨコナデ　底部に指押さえとナデ	SE−17
112		781	瓦器椀 (楠葉) I−2	6.2 15.2	(外)(内)灰色 (断)灰白色	器壁は厚く全体に深く大ぶり　ゆるやかに外上方に開く	外面　体部2/3に太いの3分割ミガキ　貼り付け高台 内面　太く密な圏線ミガキ　0.3cm幅の平行ミガキが見込みに並ぶ	SE−17
		782	瓦器椀 (楠葉) I−2〜3	6.4 14.6	(外)(内)灰色	器壁厚く深い　底部から外上方に開く　口縁部はほぼ垂直に立ち上がる　沈線は浅い　高台は台形	外面　円辺から底部まで緻密な3分割ミガキ　貼り付け高台 内面　密な圏線ミガキと長楕円の輪状ヘラミガキ	SE−17
		783	瓦器椀 (楠葉) I−2〜3	5.7 14.6	(外)(内)灰色 (断)灰白色	体部から口縁にかけて外上方に開く　口縁部は直行　高台は台形でしっかりした作り　沈線は浅い	外面　体部2/3に太めの3分割ミガキ 内面　密な圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	SE−17
113		784	瓦器皿	9.8 2.3	(外)(内)黒色	丸底で器壁は厚い　口縁部は緩やかに外上方に伸び端部は外反し丸く終る	外面　口縁部にミガキ 内面　底部にジグザグのヘラミガキ	SE−17
112		785	瓦器椀 (大和) I−C	6.1 14.6	(外)オリーブ黒色 〜暗灰色 (断)灰白色	いびつな形　器壁厚く深い　体部から口縁にかけて外上方に開く　口縁部はやや垂直気味に立ち上がる　沈線有り　高台は台形	外面　多数の指押さえ　体部2/3に3分割のヘラミガキ 内面　緻密な圏線ミガキ　ジグザグのヘラミガキが斜め格子に重なる	SE−17
114	118	786	須恵器杯蓋 (墨書)	2.0 16.6	(外)(内)(断) 灰白色	天井部は低く平らで中央に宝珠つまみ 天井部に⊗の墨書	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	SE−18
		787	須恵器杯身 (墨書)	4.3 15.0	(外)(内)(断) 灰白色	平底 体部から口縁部にかけて外上方に伸び端部はわずかに外反 高台は「ハ」の字型 底部高台に⊗の墨書	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	SE−18
113		788	須恵器鉢	残高8.8 18.3	(外)オリーブ黒〜灰色　(内)灰白色 (断)灰色	底部から体部にかけて内湾　口縁端部は内傾角ばっている　端部に細い沈線有り	外面　ヘラケズリ(1.8cm幅)にヘラミガキが施される 内面　ナデ	SE−18
		789	土師器甕	17.3 21.4	(外)(内)(断) 灰白色	丸底から外上方に伸びたのち体部はまっすぐ伸び口頸部は逆ハの字に屈曲し外上方に伸び端部は上方に押される	外面　体部上位粗いハケメ(5本/1.2cm)下部異なる工具(11本/1.2cm) 内面　指押さえ　指ナデ　斜めのハケメ	SE−18

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		790	土師器盤	2.4 21.0	外内断 灰白色	器壁薄く口縁でわずかに外反し端部は尖る	ハケメがわずかに残る		SE−18
		791	白磁碗 Ⅳ−1類	6.5 16.6	外断 灰白色 内灰色	口縁部は外へ肥厚する	外面	内外とも口縁部から体部に施釉	SE−20
							内面	見込みに浅い沈線が巡る	
		792	瓦器椀 (大和) Ⅰ−C〜D	5.9 15.0	外灰白色 内暗灰色 断灰白色	体部から口縁にかけて外上方に開く　口縁部はほぼ垂直に伸び端部でやや外反　沈線あり　高台は「ハ」の字に開く	外面	隙間の開いた分割性のあるヘラミガキ　指押さえ	SE−20
							内面	密な圏線ミガキ 見込みは曲線的なジグザグのヘラミガキが格子に重なる	
115		793	瓦器椀 (大和) Ⅰ−D	5.9 14.2	外内 灰色 断灰白色	直立した口越部から端部は外反する　器壁は厚く外面は凹凸が激しい　沈線は上位に位置する	外面	体部2/3までの3分割ミガキ	SE−20
							内面	密な圏線ミガキ 簡単で曲線化したジグザグのヘラミガキ	
		794	瓦器椀 (大和) Ⅰ−D	5.4 14.6	外内 オリーブ黒色 断灰白色	底部から端部へゆるやかに開く　沈線あり	外面	体部2/3までのヘラミガキ	SE−20
							内面	密な圏線ミガキ　細いジグザグのヘラミガキ	
115		795	瓦器椀 (大和) Ⅱ−A〜B	5.8 15.0	外黒色 内灰色 断灰白色	底部から外上方にゆるやかに開き2/3位からやや直立気味に開く　沈線あり	外面	円辺から高台までまばらなヘラミガキ　指押さえ	SE−20
							内面	密な圏線ミガキ　連結輪状ヘラミガキ	
		796	土師器皿	1.4 8.4	外内 淡黄色 断灰白色	底部からゆるやかに外上方に開く 端部は丸く終る	口縁部内外ともヨコナデ		SE−20
109	118	797	土師器皿	2.0 9.0	外内灰白 断淡黄色	丸底から外上方へ開く　底部から口縁まで厚みは均等である　完形	口縁部は内外ともにヨコナデ		SE−20
		798	土師器皿	1.9 9.4	外内断 淡黄色	中央の高い底部から外上方へ開きやや角ばった厚い口縁を有する　完形	口縁部は内外ともヨコナデ　指押さえ		SE−20
		799	土師器中皿	2.8 14.4	外内断 浅黄橙色	丸底からゆったりと外上方に開き口縁部は厚みをもって丸く終る	口縁部は内外ともヨコナデ　底部に指押さえ		SE−20
115		800	土師器中皿	2.8 15.8	外内断 灰白色	ややいびつ　平底からゆるやかに外上方に開き端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ　底部体部に指押さえ		SE−20
		801	瓦器皿	2.4 9.8	外内断 灰　色	深みのある丸底からゆるやかに屈曲し外上方へ開く口縁端部は丸く終る	外面	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ	SE−20
							内面	口縁部立ち上がりに密な圏線ミガキ 見込みはジグザグのヘラミガキが格子に重なる	
		802	瓦器皿	2.0 10.8	外内 オリーブ黒色	平底から垂直に立ち上がり口縁部では水平に伸びる端部は丸く終る	外面	底部に指押さえ	SE−20
							内面	口縁部立ち上がりに圏線ミガキ 見込みにジグザグのヘラミガキ	
115		803	瓦器皿	2.0 10.0	外内断 暗灰色	凹凸の激しい平底から屈曲して垂直に短く開く口縁部を有する	外面	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ	SE−20
							内面	口縁部立ち上がりに圏線ミガキ 見込みにジグザグのヘラミガキ	
116		804	平瓦	厚さ 45.0 幅 5.5 厚さ 2.8	外内断 暗青灰色	凹面両辺に面取りが施されている	凹面	ヘラケズリ	SK−06
							凸面	菱井桁のタタキ	
	119	805	平瓦	長さ 26.9 幅 17.4 厚さ 2.7	外内断 黒褐色	熱を受けた痕があり煤が付着	凹面	ヘラケズリ	SK−06
							凸面	菱井桁のタタキ	
117		806	平瓦	長さ 30.9 幅 35.2 厚さ 2.6	外内 暗青灰色 断青灰色	凹面の両辺は面取りが施される 「東大寺」刻印有り　帯状に黄鉄鉱付着	凹面	ヘラケズリ　「東大寺」刻印1ヶ所	SK−06
							凸面	菱井桁のタタキ	
119		807	須恵器片口鉢 (東播系)	9.6 26.0	外内断 灰　色	体部は外上方に伸び端部は外へ肥厚し丸く終る	外面	ナデ	SK−06
							内面	ナデ　指痕	
	120	808	須恵器片口鉢 (東播系)	残高6.3 30.4	外内断 明青灰	底部からまっすぐ口縁に伸びる　口縁端部は外へ肥厚上方へ押され丸みをもって終る	外面	ナデ	SK−06
							内面	ナデ	
119		809	瓦器鍋	残高3.3 27.6	外暗灰色 内灰色 断灰白色	段状口縁　外傾する端面は凹状を成す	外面	調整不明	SK−06
							内面		

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
118	120	810	常滑焼甕	残高 54.0 52.0	外灰黄褐～黒褐～明緑灰色 内にぶい黄橙～灰白色 断灰白色	肩部内湾して外下方へ張り出す　端部は上方に肥厚し外端面はほぼ垂直な平面を成す	外面　縦のハケメの上に横移動の手法で押印(体部に3段) 内面　ナデ　指押さえ	SK−06
116		811	土師器皿	1.5 8.3	外内断 淡黄色	中央が高くなった底部から屈曲して短く上方に伸びる端部はわずかに内湾し丸みをもって終る　完形	強いナデによる稜線　屈曲部に明瞭な稜線	SK−06
		812	土師器皿	1.6 8.0	外内 浅黄橙色 断灰白色	底部中央がやや高い平坦な器形	口縁部ヨコナデ	SK−06
116		813	土師器皿	1.5 7.8	外内 にぶい黄橙色 断浅黄橙色	深さのある丸底からゆるやかに屈曲し口縁部で外反する	口縁部ヨコナデ	SK−06
		814	土師器皿	1.5 8.2	外内 明黄褐色 断浅黄橙色	平坦な器形	口縁部ヨコナデ	SK−06
		815	土師器皿	1.3 7.7	外内断 にぶい黄褐～灰白色	平底からゆるやかに屈曲し外上方に開く	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−06
		816	土居器皿	1.5 7.7	外内断 浅黄橙色	底部からゆるやかに外上方へ開く	口縁部ヨコナデ	SK−06
		817	土師器皿	1.4 7.7	外内断 浅黄色	平底から屈曲しゆるやかに広がる	口縁部ヨコナデ	SK−06
116		818	土師器中皿	2.5 12.2	外内灰白色 断浅黄橙色	平底より屈曲し外反して口縁部に続く　端部はわずかに上方に押される	口縁部ヨコナデ　端部はわずかに上方につまみあげる	SK−06
		819	鉄　釘	長さ 7.7 幅 1.1 厚さ 1.1	断 暗赤褐色	頭部は折り返し先端部は欠損　断面長方形		SK−06
		820	土師器皿	1.7 9.4	外内断 浅黄橙色	底部からゆるやかに外上方に開いたのち口縁部で水平に伸び上方につまみあげ	口縁部ヨコナデ　体部指押さえ 「て」の字状口縁	SK−07
		821	土師器皿	1.6 9.6	外内断 浅黄橙色	平底から外上方に開き端部は水平に短かく伸び丸く終る	口縁部ヨコナデ　指押さえ	SK−08
		822	土師器皿	1.6 9.7	外内断 浅黄橙色	平底から屈曲し外上方へまっすぐ立ち上がる	口縁部ヨコナデ	SK−08
		823	土師器皿	1.5 9.2	外内断 浅黄色	平底からなだらかに開く	口縁部ヨコナデ	SK−08
		824	土師器皿	1.8 9.4	外灰黄色	中央がすこし高くなった丸底から口縁へ内湾して続く端部は丸い　器壁の厚みは均等である	口縁部ヨコナデ　強いナデによる稜線	SK−08
		825	土師器皿	1.6 8.8	外内断 灰白色	ややいびつ　平底から口縁へ内湾して開く	口縁部ヨコナデ	SK−08
		826	土師器皿	1.6 9.0	外内断 浅黄橙色	器壁は少し厚め　底部中央はやや高くゆるやかに外上方に開く	口縁部ヨコナデ	SK−08
		827	土師器皿	1.7 10.0	外内断 浅黄橙色	全体にいびつ　口縁までの高さが余りなく全体に開いた形	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線	SK−08
		828	土師器皿	1.8 8.8	外内 淡黄色 断灰白色	平底より内湾気味に伸びる体部とやや角ばった口縁を有する	ナデ　口縁部強いナデによる稜線	SK−08
		829	土師器皿	1.3 8.5	外内断 にぶい橙色	厚めの底部からゆるやかに開く　完形	口縁部はヨコナデ　端部はわずかに上方へつまみあげる 「て」の字状口縁	SK−08

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
119	120	830	土師器皿	1.7 9.2	外内断 浅黄橙色	中央が高くなった底部から内湾気味に口縁へと続く 端部はわずかに角ばる　完形	ナデ　ナデによる鈍い稜線		SK−08
		831	土師器椀	2.9 底径9.0	外内断 淡黄色	器の全体像は不明	外面	高台は厚さ高さがあり貼り付けナデ 接合部に強いナデ	SK−08
							内面	調整不明	
		832	瓦器足釜	残高 12.5 16.8	外内 灰黄色 断灰色	口縁部は内傾し上方に端面を有する　鍔は短かくはね あげ斜め上方に端面を有する	外面	口縁部ヨコナデ　鍔は貼り付け　ナデ	SK−08
							内面	板ナデ	
119		833	瓦器足釜	残高 12.1 13.8	外内断 灰白色	底からゆるやかに外上方に開き屈曲したのち上内方へ内傾し端部 は丸く終る　鍔は水平方向に伸び内傾する端面をもつ	外面	鍔脚部貼りつけナデ　指押さえ	SK−08
							内面	板ナデ	
	121	834	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(古)	4.9 1.2	外内 オリーブ黒色 断灰色	体部からゆるやかに伸び丸い端部で終る　沈線あり 高台ややいびつ	外面	指押さえ 数条のヘラミガキ 断面逆三角形の貼りつけ高台	SK−10
							内面	密な圏線ミガキと簡単な輪状のヘラミガキ	
120		835	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(古)	5.3 15.0	外内断 灰　色	底部から体部にかけ外上方に開く　口縁部はやや外反 し端部に沈線あり	外面	体部2/3に粗い3分割ヘラミガキ	SK−10
							内面	密な圏線ミガと簡単な連結輪状のヘラミガキ	
119		836	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	5.2 15.0	外内灰色 断灰白色	体部から外上方に開き口縁部はやや外反する　沈線は 上向き	外面	体部1/2に雑なヘラミガキ	SK−10
							内面	やや密な圏線ミガキ　整った連結輪状のヘラミガキ	
		837	土師器皿	1.7 9.1	外内断 浅黄橙色	丸底から屈曲して短く外上方へ伸びロ縁は外反気味で 端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線		SK−10
119		838	土師器皿	1.4 8.6	外内断 明黄褐色	平底から短く外反気味の口縁が続く	口縁部ヨコナデ		SK−10
116		839	土師器皿	1.0 11.0	外内断 浅黄橙色	平底から内側に屈曲して短いハの字に折り返した異形 最大径の位置でわずかに稜線をもつ	折り返し内面は強いナデ		SK−10
		840	土師器中皿	1.8 14.0	外内断 灰白色	平らな底部から屈曲し外上方に開き端部は丸く終る		口縁部ヨコナデ	SK−10
								底部弱い指押さえ	
123		841	土師器釜 大和B1	残高 6.2 口径 17.2 鍔径 24.8	色にぶい橙〜橙色 色にぶい橙色 色明褐灰色	口縁部は上外方に伸び端部は上方に凹面をもつ　鍔は 長くほぼ水平に伸びる	外面	口縁部立ち上がり強いナデ　鍔部は貼り付けナデ	SK−10
							内面	ナデ	
		842	砥　石	長さ 13.1 幅　4.3 厚さ　4.2	外内断 明緑灰色	使用痕あり　四面使用したと思われる			SK−11
119		843	灰釉陶器 合　子	残高2.7 8.0	外内断 にぶい黄橙 〜灰白色	立ち上がりは直立　受部断面は三角形を成し水平方向 に短く伸び受部端は鋭い	外面	ヘラケズリ	SK−12
							内面	ナデ	
120		844	土師器皿	1.7 8.3	外内断 浅黄色	偏平で内湾して口縁へ続く体部　端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−14
		845	土師器皿	1.6 7.8	外内断 にぶい黄橙色	底部からゆるやか外上方に開き端部は丸く終る　器壁 は厚い	口縁部ヨコナデ		SK−14
120		846	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.4 14.0	外内 暗オリーブ灰色 断灰白色	端部はわずかに外反する　沈線は上向きに巡る　外面 は凹凸が激しい　高台より底部の方が低い	外面	指押さえ　太い数条のヘラミガキ	SK−14
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ　規則性のない連結輪状ヘラミガキ	
		847	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.5 14.0	外内 オリーブ黒色 断灰色	底部からゆるやかに外上方に開き口縁部で高台は底部の方 が低い位置にある　内面部口縁端部に一条の沈線を有する	外面	口縁部に数条ヘラミガキ	SK−14
							内面	摩耗しているが密な圏線ミガキと簡単な連結輪状ヘラミガキ	
		848	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.0 14.0	外内 オリーブ黒色 断灰白色	底部からゆるやかに外上方に開く　沈線は上向きに巡る	外面	口縁部に数条のヘラミガキ　指押え	SK−14
							内面	隙間の開いた圏線ミガキと簡単な輪状ヘラミガキ	
120		849	土師器中皿	2.4 12.9	外内断 灰白色	平底より屈曲し外上方へ開き口縁部は丸く終る	口縁部ヨコナデ　底面はナデ		SK−14

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
120		850	土師器中皿	2.6 13.5	外内断 浅黄色	ほぼ平らな底から外上方に開き端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線　指押さえ		SK−14
		851	土師器中皿	2.7 12.4	外内断 灰白色	平底よりほぼ直立する屈曲をみせ立ち上がる　口縁は丸く終る	口縁部ヨコナデによる鈍い稜線 底面に指押さえ		SK−14
		852	瓦器釜 河内D1	残高7.4 29.7	外内 灰黄色 断褐灰色	体部は半球形で口縁部は内傾する　先端の下向きになった鍔をめぐらす	外面	口頸部に段状のナデ　鍔は貼り付けナデ	SK−14
							内面	口縁部ヨコナデ　体胴部斜めのハケメが切りあう	
		853	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.5 13.6	外内断 灰　色	底部から外上方に開き端部は外反する　沈線は上を向いて巡る	外面	連続する指押さえ　数条のヘラミガキ	SK−15
							内面	隙間のある圏線ミガキが円辺から見込みにおりる	
120		854	土師器皿	1.2 8.2	外内断 灰白色	平底から屈曲して短く外上方に開く体部とやや角ばった口縁を有する	ヨコナデ　屈曲部にナデによる鈍い稜線		SK−16
	121	855	土師器皿	1.6 7.8	外内断 灰白色	丸底からゆるやかに口縁部へ続く　端部は丸く終る 底部の小穴は焼成時の異物混入と考えられる	口縁部ヨコナデ		SK−16
		856	土師器中皿	2.5 11.6	外内断 灰白色	平底より屈曲し外上方に伸び端部はわずかに外反する	口縁部強いナデによる稜線		SK−16
		857	土師器中皿	2.0 11.6	外内断 灰白色	平底から外上方へ開き端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線　口縁部は肥厚する		SK−16
119		858	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.9 12.8	外内灰色 断灰白色	ゆるやかに外上方に開いて口縁部へ続く 端部に浅い沈線が一巡する　高台は底部より高い	外面	指押さえ　数条のヘラミガキ	SK−16
							内面	隙間のある圏線ミガキと簡単な連結輪状ヘラミガキ	
		859	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.8 13.4	外灰白〜灰色 内暗灰色 断灰色	ゆるやかに外上方へ開き口縁部へ続く 端部上位に沈線が巡る　高台は底部より高い	外面	指押さえ　数条のヘラミガキ	SK−16
							内面	隙間の開いた圏線ミガキ	
		860	土師器釜 河内D1	残高 10.3 口径 34.8 鍔径 44.2	外浅黄橙色 内灰白色 断にぶい黄橙 灰色	鍔上から内湾し口縁部続く　口縁端部は丸く終る 鍔ははねあげ、端部は丸く終る	外面	鍔の下方に煤が付着	SK−16
							内面	ハケメが施されているが摩耗して不鮮明	
121	122	861	土師器皿	1.5 8.0	外内断 浅黄色	平底からゆるやかに外上方へ伸び端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ		SK−21
		862	土師器皿	1.3 8.1	外内断 にぶい黄橙色	底部中央は少し高くゆるやかに外上方へ伸び内湾気味の口縁部で端部は丸く終る　底部より端部の方が器壁に厚みがある	口縁部ヨコナデ		SK−21
		863	土師器皿	1.2 8.5	外内断 灰白色	偏平で短く立ち上がる口縁は内湾してやや尖る	口縁部ヨコナデ		SK−21
		864	土師器皿	1.3 8.2	外内断 淡黄色	底部中央がわずかに高くなり、内湾して立ち上がる口縁を有する	口縁部ヨコナデ		SK−21
		865	土師器皿	1.4 8.0	外内断 にぶい黄橙色	平底から外上方へ開き口縁は内湾気味にやや角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−21
		866	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色	底部より口縁部の方が厚みをもつ　端部は上方へ押される	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−21
		867	土師器皿	1.5 8.1	外内断 明褐灰色	薄い器壁で深さもある　口縁は内湾しやや角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−21
		868	土師器皿	1.7 7.0	外内断 灰白色	丸みがあり底部より口縁の方に厚みをもつ　口縁部は角ばる　完形	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−21
		869	土師器皿	1.5 8.0	外内断 灰白色	底部より口縁が厚みをもつ　端部は角ばる　完形	口縁部ナデ　ナデによる稜線		SK−21

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
121		870	土師器皿	1.4 8.3	外内断 灰白色	底部中央が高くなり器壁も薄い　口縁部は内湾ぎみで厚みをもって尖る　完形	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－21
		871	土師器中皿	1.9 12.5	外内 にぶい黄橙色 断灰白色	平底からゆるやかに開き口縁部は内湾気味で端部は丸く納められる	底部に指押さえ		SK－21
		872	土師器中皿	1.9 12.1	外内断 浅黄橙色	平底から外上方に開く　口縁部に厚みをもつ	体部中位にナデによる稜線　底部に指押さえ		SK－21
		873	土師器中皿	2.1 12.2	外内断 にぶい黄橙～黄色	中央が少し高くなった平底と屈曲し開く口縁部端部は上方に押される	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－21
		874	土師器中皿	1.7 14.9	外内断 灰白～淡黄色	平底から屈曲し短い立ち上がりをみせ内湾気味の口縁部	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－21
122		875	瓦器椀 (大和) HI－B	4.5 13.4	外内断 黒　色	平底からゆるやかに開き端部は丸く終る　浅い沈線有りややいびつな形である	外面	連続性のある指押さえ　数条のヘラミガキ	SK－21
							内面	隙間のある圏線ミガキと小さい連結輪状ヘラミガキ	
		876	土師器皿	1.5 8.1	外内断 灰白色	雑な作り方　底部はやや高く内湾気味に開き端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK－25
121		877	瓦器椀 (大和) III－B	4.0 14.8	外内灰色 断灰白色	ゆるやかに外上方に開き口縁部へ続く端部上位に沈線は巡る	外面	規則性のないヘラミガキ	SK－25
							内面	隙間のある圏線ミガキ　見込みのヘラミガキは形状不明	
122		878	瓦器足釜	残高 18.2 口縁 18.0 鍔径 22.2	外内断 灰白色	内湾する体部に内傾面をもつ口縁部が続く三脚のうち一脚欠失　鍔は上方に短く伸びる	外面	鍔貼り付けナデ　つけ根と体部に指押さえの痕	SK－22
							内面	ヨコハケ（9本／1.2cm）	
121	122	879	土師器甕	残高7.0 29.0	外内浅黄橙～明黄褐色 断浅黄橙色	口頸部は大きく逆「ハ」の字に開き端部は上方につまみあげ、外端面を有する	外面	肩部にハケメ（9本／1.0cm）	SK－26
							内面	板ナデ	
		880	土師器皿	1.4 8.1	外内断 灰白色	中央がわずかに高くなった底部と、屈曲して短く内湾する口縁　端部はやや角ばる	ヨコナデ　口縁部ナデによる稜線		SK－27
122		881	瓦器椀 (大和) III－C	3.9 12.4	外内断 灰　色	底部から浅く開き器壁は凹凸がある 沈線あり いびつ	外面	連続性のある指押さえ　かすかにヘラミガキ？	SK－27
							内面	隙間の大きい圏線ミガキが口縁より見込みへおりる	
121		882	瓦器椀 (大和) III－A(新)	4.7 14.4	外内 灰～灰白色 断灰白色	底部から口縁部にかけてゆるやかに外上方に伸び端部で外反　端部は上向きの沈線巡る　器壁は薄い	外面	指押さえ　数条のヘラミガキ	SK－28
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ 見込みヘラミガキは形状不明	
		883	土師器甕	残高6.5 13.6	外にぶい橙～橙色 内浅黄橙～にぶい黄橙色 断橙～浅黄橙色	口縁部は外上方に伸び端部は内傾する平面をもつ	外面	体部に指押さえ　口頸部と体部の境に粘土紐の痕	SK－28
							内面	指押さえ	
122		884	瓦器椀 (大和) III－C	4.7 12.6	外内 灰　色	底部からゆるやかに外上方に開き端部は丸く終る浅い沈線が上向きに巡る　完形	外面	連続性のある指押さえ　数条のヘラミガキ	SK－29
							内面	隙間の開いた圏線ミガキが口縁より見込みへおりる	
		885	土師器中皿	2.2 12.5	外内断 灰白色	平底からゆるやかに口縁端部に続く　端部は厚く丸みをもつ	口縁部ヨコナデ　口縁部肥厚する		SK－34
		886	土師器皿	1.7 8.2	外内断 灰白色	平底から内湾して続く口縁　端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ		SK－34
		887	須恵器片口鉢 (東播系)	10.8 27.1	外内灰色 断 暗灰色(一部)	平底から外上方に伸び端部で垂直ぎみに外方に肥厚する外端面を成す　器中央に1ヶ所注ぎ口をもつ	外面	口縁部から体部　ナデによる鈍い稜線	SK－35
							内面	口縁部はヨコナデ　指押さえ	
		888	鉄　釘	長さ 4.6 幅 0.7 厚さ 0.4	外内断 暗赤褐色	頭部は折り返し先端部は欠損　断面長方形			SK－40
122	123	889	瓦器椀 (大和) III－A(新)	4.5 15.0	外内断 灰　色	器壁は厚い　底部からゆるやかに開き口縁部はわずかに外反する　沈線は一巡せず	外面	体部1/3まで粗い3分割ミガキ	SK－46
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	123	890	瓦器 皿	2.1 9.6	外内断 灰白色	平底から垂直に立ち上がり口縁端部は外反して丸く終る	外面	口縁部ヨコナデ	SK−54
							内面	見込みにジグザグのヘラミガキ	
		891	瓦器 椀 (大和) Ⅲ−A(新)	4.7 15.8	外内灰〜オリーブ灰色 断灰白色	高台は欠損　内湾気味に外上方に伸びた後直立　沈線一条巡る	外面	体部2/3まで分割性のあるヘラミガキ　指押さえ	SK−55
							内面	やや密な圏線ミガキ　見込みは欠損	
		892	瓦器 椀 (大和) Ⅲ−B	4.0 13.4	外灰色 内灰〜オリーブ黒色 断灰白色	底部欠損　外上方に伸びたあと口縁部で直立気味にたち上がり端部で外反する　一部に二重の沈線みられ	外面	連続性のある指押さえ　粗いヘラミガキ	SK−55
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ　見込み欠損	
		893	瓦器 椀 (大和) Ⅲ−A(新)	5.1 14.8	外内暗オリーブ灰色〜灰色 断灰白色	高台部欠損　外上方に伸びる口縁部周辺に厚みがある　沈線は高い位置にある	外面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	SK−55
							内面	やや密な圏線ミガキ　見込みの太目のヘラミガキは形状不明	
		894	瓦器 椀 (大和) Ⅲ−B	4.4 15.4	外内オリーブ灰〜灰色 断灰白色	高台部欠損　内湾ぎみに外上方に伸び口縁部でわずかに外反　上位に沈線一条巡る	外面	指押さえ　分割性のあるヘラミガキ	SK−55
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ　見込み欠損	
		895	瓦器 椀 (大和) Ⅲ−B	4.8 14.4	外灰色 内オリーブ灰色 断灰白色	高台欠損　内湾ぎみに外上方に伸び口縁部で外反　沈線一条巡る	外面	不規則なヘラミガキ	SK−55
							内面	雑な圏線ミガキ　見込み欠損	
		896	土師器中皿	2.6 14.6	外内灰白色 断浅黄橙色	凹凸のある底部からやや垂直に立ち上がり端部は外反する	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−55
122		897	土師器中皿	2.7 14.2	外内灰白色 断 にぶい黄橙色	平底から屈曲しゆるやかに立ち上がる　端部は丸い	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		SK−55
		898	土師器皿	1.6 9.0	外内断 淡黄色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁ではわずかに外反し端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ		SK−55
		899	土師器皿	1.8 8.9	外内断 灰白色	丸底からわずかに屈曲して短く外上方へ開く口縁　端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線		SK−55
		900	土師器皿	1.6 8.5	外内 浅黄橙色 断灰白色	平底からわずかに屈曲し外上方に開き端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ		SK−55
123		901	瓦器 釜 大和B2	残高 8.6 口径 24.0 鍔径 28.4	外内 黄灰〜灰白色 断灰白色	口縁部は「く」の字に屈曲し端部は内側に折り返し鍔は水平方向に伸び端部は下方に肥厚	外面	頸部くびれに指押さえ　鍔は貼り付け　ナデ	SK−55
							内面	板ナデ	
		902	瓦器 釜 大和B2	残高 5.0 鍔径35.8	外内断 明褐灰色	体部は大きく内傾し口縁部へ続く　端部は破損して形態不明　鍔は少しはね上がる	外面	鍔は貼りつけナデ	SK−55
							内面		
123		903	瓦器 釜 山城F	残高 14.3 口径 28.8 鍔径 32.8	外内 灰白〜黄灰色 断灰白色	口縁部は上内方に伸び端部は水平の面を成し中央でわずかに凹面を成す　鍔は短かい	外面	調整不明　鍔下方に指押さえ	SK−55
							内面		
124	124	904	土師器皿	2.6 10.8	外内断 にぶい橙色	中央がやや突出した底部から屈曲して外上方に開く体部と外反気味に丸く終る口縁を有する	外面	口縁部にナデによる稜線　口縁部肥厚	SD−29
							内面		
		905	土師器皿	3.7 15.0	外内断 浅黄橙色	丸底からゆるやかに外上方に向い口縁部で外反し端部はやや角ばって厚みをもつ	外面	口縁部にヨコナデによる稜線	SD−30
							内面		
123		906	平　瓦	破片 9.9×10.4 厚さ 1.9	外内断 灰　色		凹面	布目の痕	SD−31
							凸面	縄目の痕	
		907	土師器釜 摂津C2	残高 7.3 口径 17.2 鍔径 21.1	外淡黄〜灰黄褐色 内にぶい黄橙色 断淡黄色	体部は直立して伸び鍔は口縁端部と同位置にあってはねあがる　鍔上面は凹状	外面	指押さえ顕著	SD−31
							内面	粘土接合痕	
124		908	土師器皿	1.8 7.8	外内断 灰白色	平底から屈曲して口縁部に向かって大きく外反する	ヨコナデ　ナデによる稜線　体部に指押さえ		SD−31
		909	土師器脚付皿	4.2 11.3	外内 灰白色 断淡黄色	ゆるやかに外上方に開く杯部と貼り付けた三方の脚を有する	外面	体部中位にナデによる稜線　脚貼り付け部に指押さえ	SD−31
							内面		

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
124	124	910	瓦器 Ⅲ	1.9 9.1	外内断 灰色	丸底からゆるやかに外上方へ開き端部は丸く納められる	外面	指押さえ　ナデ	SD−32
							内面	ジグザグのヘラミガキ	
124		911	土師器Ⅲ	2.5 10.4	外内 浅黄橙色 断黄橙色	平底からゆるやかに立ち上がり口縁部は外反して端部は丸く終る	口縁部にヨコナデ　ナデによる稜線　底部に指押さえ		SD−33
		912	土師器中Ⅲ	2.2 10.4	外内断 浅黄橙色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁部は内湾気味端部はわずかに角ばる	口縁部にヨコナデ　ナデによる稜線		SD−33
123		913	灰釉陶器椀	残高3.6 底径6.8	外内断 灰白色	見込みは平らで「ハ」の字型の高台	外面	外内面とも風化している	SD−33
							内面		
		914	土師器Ⅲ	1.3 8.0	外内断 淡黄色	中央のふくらんだ底部から外上方に開き端部は丸く終る	口縁部にヨコナデ		SD−39
		915	土師器Ⅲ	1.4 8.6	外内断 淡黄色	中央ふくらんだ底部よりゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る　器壁は厚い	口縁部にヨコナデ		SD−39
		916	土師器Ⅲ	1.4 8.3	外内断 淡黄色	平底から屈曲して短く外上方へ伸びる　端部は内湾気味でやや角ばる	口縁部にヨコナデ		SD−39
		917	土師器Ⅲ	0.9 8.5	外内断 淡黄色	中央が高い平底から内湾する口縁部が続く　端部は角ばる	口縁部にヨコナデ　風化している		SD−39
124		918	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B〜C	3.8 12.7	外内断 灰色	平たくいびつ　底部から外上方にゆるやかに伸び端部へ続く　上位に沈線	外面	数条のヘラミガキ	SD−39
							内面	隙間の開いた圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	
124		919	土師器Ⅲ	1.6 8.4	外内褐色 断 にぶい橙色	丸底から屈曲して短く外上方へ伸びる　端部は丸く終る	口縁部にヨコナデ		SD−40
		920	土師器Ⅲ	1.5 8.2	外内断 淡黄色	平底からゆるやかに外上方へ伸び内湾気味の口縁　端部はやや角ばる	口縁部にヨコナデ		SD−40
		921	土師器中Ⅲ	1.8 12.2	外内灰白色 断にぶい褐色	中央の高い底部からゆるやかに外上方に伸びたのちやや外反し端部へと続く	口縁部にヨコナデ　底部に指押さえ		SD−42
		922	土師器中Ⅲ	2.1 11.0	外内灰白 断浅黄橙色	少々いびつな平底から屈曲し口縁は上方につまみあげ端部はやや角ばる	口縁部にヨコナデ		SD−42
124		923	土師器中Ⅲ	2.0 11.5	外内灰白色 断浅黄橙色	平坦な器形で平底からゆるやかに外上方へ開く　端部は外反し丸く終る　器壁は薄い	口縁部にヨコナデ		SD−42
		924	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B〜C	3.8 12.8	外内断 灰色	底部からゆるやかに外上方に開く　端部にある沈線は浅く上向きに巡る　全体にややいびつ　高台もいびつで低い	外面	指押さえ　規則性のないヘラミガキ	SD−42
							内面	口縁から見込みまで隙間の大きい圏線ミガキがおりる	
		925	瓦器椀 (楠葉) Ⅲ−1〜2	3.8 12.6	外内断 灰色	底部から外上方にゆるやかに開く　沈線は不明瞭	外面	連続性のある指押さえ　ヘラミガキは認められず	SD−42
							内面	隙間のある圏線ミガキ　連結輪状のヘラミガキ	
		926	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.8 12.8	外内断 灰色	いびつ　底部よりゆるやかに外上方に開き端部で外反する　沈線は上位に巡る	外面	規則性のないヘラミガキ	SD−42
							内面	隙間の大きい圏線ミガキ　太い連結輪状のヘラミガキ	
		927	土師器中Ⅲ	2.0 14.4	外内断 褐灰色	中央がやや高い底部から外上方に開きやや角ばった端部で終る	内外とも口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線 底部に指押さえ		SD−45
		928	土師器中Ⅲ	2.9 14.4	外内断 灰白色	凹凸の激しい底部から外上方に向かい口縁部は厚みをもって丸く終る	口縁部にヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SD−45
123		929	土師器不明品	残高5.5	外淡赤橙〜灰白色 内灰白〜褐灰色 断淡灰〜褐灰色	脚部(？)不明	外面	指押さえ	SD−45
							内面	指押さえ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
125	125	930	黒色土器B類 畿内系V類	5.2 15.8	外内断 灰色	見込みから内湾気味に外上方に伸び端部は外反し丸い　沈線かどうか判断つかない凹線が有る　高台は低く「ハ」の字型	外面 内面	分割性のあるヘラミガキが口縁から高台まで施される 太いヘラミガキが密に周回する　見込みはジグザグのヘラミガキ	SI−01
		931	黒色土器B類 畿内系V類	5.9 17.4	外内断 暗灰色	深くて大ぶり器壁も厚い　見込みからゆるやかに外上方に開き端部はやや外反して丸く終る　端部に浅い沈線が上位に巡る　高台は頑丈で大ぶりである	外面 内面	太いヘラミガキがわずかに残る 外面と同様の太いヘラミガキ	SI−01
		932	土師器皿	1.3 8.8	外内 灰白色 断淡黄色	底部中央部はややくぼんでいる　口縁部はゆるやかに外方向に広がり端部は上方につまみあげる	口縁部ヨコナデ　ナデによる稜線 「て」の字状口縁		SI−01
125		933	土師器皿	1.4 9.8	外内断 灰白色	平底から屈曲上方に伸びたのち水平方向に開いて端部は上方につまみあげる	口縁部ナデによる稜線　指押さえ 「て」の字状口縁		SI−01
		934	土師器皿	1.3 9.6	外内 灰白色 断淡黄色	平底から屈曲して水平方向に伸び端部は短く上方へつまみあげる	口縁部ナデによる稜線　「て」の字状口縁		SI−01
		935	土師器皿	1.5 9.6	外内浅黄色 断灰白色	平坦な底部　やや凹凸が激しい　外上方にゆるやかに開き水平に伸びたのち端部は丸く終る　完形	口縁部ヨコナデ　強いナデ 口縁部底部に指押さえ　「て」の字状口縁		SI−01
		936	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B〜C	4.4 13.6	外内断 灰白色	底部からゆるやかに外上方に開く　高台は低く雑な作り	外面 内面	連続性のある指押さえ　分割性のあるヘラミガキ 隙間の開いた圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	SI−01
125		937	土師器釜 摂津C2	残高 8.1 口径 19.2 鍔径 24.0	外にぶい黄橙色 内灰白色 断にぶい黄橙色	体部直立ぎみ　鍔端部はわずかにはねあがる　口縁部短く内傾する	外面 内面	縦方向に工具のあと　鍔は貼りつけ ナデ	SI−01
		938	土師器釜 摂津C2	残高6.2 18.8	外内断 明褐灰色	口縁部端部は内側へせり出す　鍔は水平方向へ伸び端部はやや上向きに反っている	外面 内面	胴部に指押さえ　鍔に粘土接合あととヨコナデ	SI−01
125		939	土師器釜 河内B1	残高 6.0 口径 31.4 鍔径 40.4	外内にぶい橙〜灰褐色 断灰褐色	口縁部は「く」の字に屈曲　鍔は水平方向に伸び端部はやや肥厚	外面 内面	ヨコナデ　鍔は貼り付けナデ ナデ	SI−01
		940	瓦器足釜	残高 11.2 18.6	外内断 灰色	内湾する体部と水平に短く伸びる鍔を有する　口縁端部は中央わずかに凹状の面をなす　煤付着	外面 内面	脚基部に指押え顕著　鍔は貼り付けナデ 指押さえ数ヶ所	SI−02
133	126	941	平瓦	破片 11.4×8.0 厚さ 2.4	外内断 にぶい橙色	砂粒が目立つ	凹面凸面とも風化が激しい		SP−37
		942	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.5 13.6	外内灰色 断灰白色	簡単な高台とゆるやかに外上方に伸びる体部を有する　口縁はわずかに外反し沈線は上端に位置する	外面 内面	指押さえ やや隙間のある圏線ミガキ	SP−75
		943	瓦器足釜	残高 11.1 14.7	外内橙色 断 浅黄橙色	短い鍔が水平に伸び口縁部は内湾し内にやや肥厚する　脚は3方向に付くと考えられる	外面 内面	脚基部に指押え顕著　鍔は貼り付けナデ 指押さえ　板ナデ(ハケメ)	SP−118
127		944	瓦器皿	1.8 8.5	外内断 灰〜灰白色	丸底から屈曲して外上方に開く　端部は丸く終る	外面 内面	指押さえ　口縁部ヨコナデ 見込みにジグザグのヘラミガキ	SP−106
		945	瓦器皿	1.7 8.8	外内 灰白色 断灰色	丸底からわずかに屈曲して短く外上方に伸び口縁端部は外反する	外面 内面	口縁部ヨコナデ 見込みに4〜5回のジグザグのヘラミガキが十字に重なる	SP−106
127		946	土師器皿	1.6 8.5	外内 灰白色 断にぶい黄橙	丸底からゆるやかに口縁部へ続く　端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		SP−106
		947	土師器皿	1.4 8.8	外内灰白色 断浅黄灰色	底部中央部がわずかに高くなっている　口縁部は内湾気味にやや角ばる	口縁部ヨコナデ　底部に指押さえ		SP−106
127		948	土師器皿	1.3 7.7	外内断 灰白色	偏平な器形　口縁部は丸く終る	口縁部ヨコナデ		SP−106
		949	土師器皿	1.5 8.4	外内断 浅黄橙色	器壁は厚めで平底からゆるやかに立ち上がる　端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ		SP−106

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		950	土師器皿	1.4 8.2	外内断 浅黄色	底部中央がやや高くなる　ゆるやかに外上方に開き端部丸く終る	口縁部ヨコナデ		SP−106
		951	土師器皿	1.5 8.1	外内断 浅黄橙色	平底からゆるやかに内湾し短く上方へ向かう　端部はやや尖り気味	口縁部ヨコナデ		SP−106
127		952	土師器皿	1.4 8.0	外内断 灰白色	偏平な器形で屈曲したのち外上方へ開く　端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ		SP−106
		953	土師器皿	1.4 8.2	外内断 淡黄色	偏平な器形で屈曲して外反気味に端部へ続く　端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ		SP−106
138		954	紡錘車	直径≒4.4 上辺径2.4 下辺径4.4	外内断 灰　色	滑石製	表裏とも摩耗している　0.75cmの穿孔		SP−43
133		955	土師器高台付皿	残高4.0 底径7.2	外内断 浅黄橙色	裾部が外反する　端部は丸く終る	外面	風化している　内外ともに指押えのみ認められる	SP−38
							内面		
	126	956	土師器皿	1.5 8.1	外内断 浅黄橙色	底部中央が高くゆるやかに外上方に開き端部は丸く終る	口縁部にヨコナデ		SP−75
		957	瓦器皿	1.6 9.1	外内灰色 断灰白色	平底からゆるやかに外反し短く上方に伸びる　端部は尖り気味	外面	底部に指押さえ　口縁部ヨコナデ	SP−131
							内面	見込みに5往復のジグザグのヘラミガキが十字に重なる	
		958	土師器皿	1.2 8.0	外内 淡黄色 断灰白色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁端部は角ばる	口縁部にヨコナデ　指押さえ		SP−157
		959	土師器皿	1.6 8.1	外内 淡黄色	平底から屈曲し口縁端部はわずかに内湾し尖る 完形	口縁部にヨコナデ　屈曲部に鈍い稜線		SP−161
127		960	土師器皿	1.8 9.4	外内断 にぶい黄橙色	丸底からゆるやかに外上方に開き水平方向に伸びたのち端部はわずかに上方つまみあげる	口縁部はヨコナデ　端部はわずか上方につまむ 底部に指押さえ　「て」の字状口縁		SP−200
133		961	土師器甕	残高5.1 16.5	外内 にぶい褐色 断橙色	口頸部は短く直立し端部は外反して稜線を有する	外面	連続する指押さえ　口頸部ヨコナデ	SP−203
							内面	不明　粘土紐のあと	
127		962	瓦器椀 （大和） Ⅲ−D	4.4 12.6	外内灰色 断灰白色	高台より底部の方が低い位置にある　ゆるやかに外上方に伸び口縁部で外反する　沈線は上端部に位置する	外面	口縁部にわずかなヘラミガキ　多数の指押えで器壁に凹凸	SP−203
							内面	円辺から見込みまで隙間の開いた圏線ミガキ	
126		963	縁釉陶器	残高4.0 底径8.8	外内断 緑色〜黄色	短く「ハ」の字に開く高台から内湾気味に立ちあがる体部を有する	外面	高台は貼り付け	SP−244
							内面	ナデ	
127		964	黒色土器B類 畿内系Ⅴ類	5.3 14.0	外内断 黒　色	均等な厚みの器壁が内湾しながら口縁へと続く　沈線は端部よりやや下に位置する　端部は丸い	外面	全体が摩耗しているが密なヘラミガキ　両面に燻し	SP−260
							内面	密な圏線ミガキ　見込みはジグザグのヘラミガキ	
		965	土師器皿	1.7 10.2	外内断 灰白色	平坦な形で口縁部で水平方向へ伸び端部でわずかに上方へつまみあげる	口縁部はヨコナデ　底部に指押え 「て」の字状口縁		SP−260
127	127	966	土師器皿	1.8 10.2	外内断 浅黄橙色	器壁は薄く口縁部で水平方向へ伸び端部は短く外上方へ向う	口縁部はヨコナデ　底部に指押え　「て」の字状口縁		SP−260
		967	土師器皿	1.6 9.3	外内断 浅黄橙色	口縁部に厚みをもち内湾する	口縁部ヨコナデ　底部に指押え		SP−270
128		968	土師器甕	残高9.2 22.0	外にぶい橙〜にぶい褐色 内にぶい黄橙色 断灰白〜にぶい橙色	口縁部で逆「ハ」の字型に開き端部は外反し上向きの平面を成す	外面	体部に指押え多数	SP−269
							内面	不明	
		969	土師器鍋	残高 10.2 29.4	外橙〜灰褐色 内橙〜にぶい褐色 断橙〜暗赤褐色	体部は直立気味口頸部で大きく屈曲 外端面は外傾しわずかに凹面を成す	外面	口縁部に指押さえ多数	SP−280
							内面	板ナデ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
128	127	970	鉄製鍬先	最大幅17.2 刃幅 3.0		U字型			SP−320
		971	須恵器杯	24.2 7.5	外内断 灰白色	外上方に伸びたのち短く外反し端部は丸く厚みがある	外面	回転ナデ	SP−322
							内面	回転ナデ	
		972	土師器甕	残高7.4 13.6	外内 にぶい橙色 断橙色	端部は外に肥厚し上部に面をなす	外面	ナデ(布地のあと) 指押さえ	SP−408
							内面	ナデ	
		973	瓦器椀 (和泉) I−2	6.3 15.8	外内灰色 断灰白色	高台は高さのある断面形 厚みがあり底部から口縁まで均等 端部直行 沈線無し	外面	高台の上方に太めのミガキが不規則に残る	SP−425
							内面	外面同様のヘラミガキが見込み近くに認められる	
		974	須恵器杯身	4.5 10.8	外内断 青灰色	「ハ」の字に開く高台と外反気味の口縁部を有する 端部は丸い	外面	高台は貼り付け 体部口縁部はナデ	SP−426
							内面	ナデ	
		975	土師器皿	1.0 9.2	外内断 浅黄橙色	体部口縁部は外上方に伸びたのち短くほぼ水平に開き 端部は上方につまみあげる	口縁部ヨコナデ 端部はわずかに上方へつまむ 「て」の字状口縁		SP−408
128		976	土師器皿	1.7 9.4	外内断 灰白色	いびつではあるがわずかに屈曲し口縁は上方につまみあげる	口縁部ヨコナデ 端部はほんのわずか上方へつまむ 「て」の字状口縁		SP−433
		977	土師器皿	1.7 9.6	外内断 浅黄色	平坦な器形で口縁部は水平方向に伸びたのち上方へ短くつまみあげる	口縁部ヨコナデ 端部上方へつまみあげ 「て」の字状口縁		SP−434
		978	瓦器椀 (楠葉) I−2	5.8 15.8	外内灰色 断灰白色	厚みのある器壁は「ハ」の字に開く高台から、外反気味の口縁まで均等である 端部よりやや下に細い沈線が一条巡る	外面	表面に密な4分割ヘラミガキ	SP−433
							内面	太めで隙間のある圏線ミガキ 見込みはジグザグのヘラミガキ	
129	128	979	土師器甕	残高 15.8	外内断 にぶい褐色	体部内湾しながら伸び口縁部立ち上がり部に面をもち外反する 端部も上向きに凹面を有する 外面に煤付着	外面	体部に多数の指押さえ	SP−436
							内面	板ナデ	
130		980	土師器甕	残高5.0 15.6	外内断 橙 色	口頸部で「く」の字形に開き口縁部で短く外反 端部は丸い	外面	調整不明	SP−436
							内面		
		981	土師器甕	残高 9.4 14.2	外内にぶい橙 灰黄〜黒色 断にぶい橙色	体部は内湾しながら伸び口頸部は外上方へ 端部は内傾する面を成す	外面	無数の指押さえ	SP−436
							内面	板ナデ	
129		982	土師器杯	3.5 11.9	外内断 にぶい橙色	平底から外上方へ開いたのち口縁端部は外反し丸く終る	外面	口縁部はヨコナデ 強いナデによる稜線と凹面	SP−436
							内面	屈曲部に指押さえ	
130		983	土師器杯	残高3.5 14.0	外内断 浅黄橙色	外上方に伸び口縁部でわずかに直立その後外反し端部は尖り気味	外面	口縁部に強いナデによる稜線 指押さえ	SP−436
							内面	不明	
129		984	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	5.1 14.9	外内浅黄橙〜 オリーブ黒色 断浅黄橙色	高い高台から内湾して立ち上がる体部と直行する口縁を有する 細い沈線あり	外面	連続する指押さえ	SP−436
							内面	粗い圏線ミガキ 見込みはジグザグのヘラミガキ	
130		985	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	4.2 12.7	外内にぶい橙〜 灰黄〜黒色 断黒色	器壁薄く小ぶりである 端部内側に沈線一条巡る	外面	体部に指押さえ 口縁部のみ燻す	SP−436
							内面	見込みジグザグ暗文 全面に燻し	
129		986	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	4.7 15.0	外内にぶい橙〜 オリーブ黒色 断褐灰色	大きな器形 断面逆三角形の小さな高台 内湾する体部と外反気味の口縁を有する 細い沈線が巡る	外面	指押さえ 口縁部に燻し	SP−436
							内面	圏線ミガキ図化不可 全面に燻し	
130		987	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	4.7 14.8 4.0	外 黒褐〜 にぶい黄橙色 内 黒褐色 断 黒褐〜 にぶい黄橙色	器壁は薄い 内湾気味に外上方に伸びる端部内面に浅い沈線一条巡る	外面	連続する指押さえ	SP−436
							内面	密な圏線ミガキ 丁寧なジグザグのヘラミガキ 全面燻す	
		988	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	13.2 4.0	外橙〜 黒褐色 内黒色	薄い器壁で見込から端部に直行する	外面	指押さえ 体部2/3に燻し	SP−436
							内面	見込みに粗いジグザグのヘラミガキ 全面に燻し	
		989	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	5.3 13.6	外内明褐〜にぶい 黄橙〜黒色 断にぶい黄橙色	内湾気味に外上方に伸びる 端部内側下位に沈線一条巡る	外面	体部に指押さえ多数 口縁部のみ燻し	SP−436
							内面	圏線ミガキと見込みのジグザグのヘラミガキがわずかに残る 全面に燻し	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
130	128	990	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	4.1 15.0	外にぶい橙～橙色 内黑色 断灰白色	内湾気味に外上方に伸びる　端部内側下位に浅く沈線 一条巡る　高台わずかに残る	外面	指押さえ　口縁部わずかに燻し	SP−436
							内面	見込みのジグザグのヘラミガキは太い　全面に燻し	
142		991	土　錘	長さ 5.2 最大径2.0	外内 灰白～ にぶい橙色	紡錘形	中心に径0.4cmの紐孔が穿たれる		SP−436
129		992	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	残高0.7 底径7.5	外淡黄色 内黑色 断黑～淡黄色	内面が黒く燻されミガキが施されている 底部外面に文字「廣」が刻まれている	外面	底部にヘラ状工具で文字を刻む	SP−436
							内面	見込みにジグザグのヘラミガキ	
		993	土師器杯	3.6 15.6	外内断 黄褐色	丸底から外上方へ向かい口縁部は外反する　端部はや や角ばる	口縁部は内外ともにヨコナデ　強いナデによる稜線 連続する指押さえ		SP−439
		994	土師器中皿	3.0 14.2	外内断 灰白色	少しいびつな平底からゆるやかに外上方へ伸び外反気 味に口縁部へ続く　端部は丸く終る	底部に指押さえ		SP−721
130		995	土師器杯	3.4 15.2	外内 明赤褐色～ にぶい黄橙色	底部からゆるやかに外上方に伸び端部で内傾　尖り気 味　外内とも指押えが多く残る	摩耗している		SP−593
		996	土師器皿	1.6 9.6	外内断 灰白色	底部からゆるやかに外上方に伸び口縁部で水平に開い たのち端部は丸く終る	口縁部にヨコナデによる凹面 指押さえ　「て」の字状口縁		SP−558
		997	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.5 14.6	外内 灰白～灰色 断灰白	底部から口縁部へゆるやかに外上方に伸び口縁端部で 垂直ぎみに立ち丸く終る　底部が高台より低い	外面	指押さえ　分割性のある粗いヘラミガキ	SP−537
							内面	やや隙間をもつ圏線ミガキと連結輪状ヘラミガキ	
138		998	鉄　釘	長さ 4.4 幅 1.8 厚さ 1.8	外内 明黄褐色 断暗褐色	銹が多量　頭部を折り返している 断面長方形			SP−604
129		999	瓦器椀 (楠葉) Ⅳ−2	2.9 10.4	外内灰色 断灰白色	形骸化した高台から内湾しながら口縁へ続く 端部は尖り気味で沈線は無し	外面	指押さえ　口縁部はヨコナデ	SP−593
							内面	口縁より底部へ7周回のヘラミガキ	
142		1000	土　錘	長さ 7.5 最大径0.8	外内断 褐灰色	紡錘形	中心に径0.3cmの紐孔が穿たれる		SP−672
		1001	鉄　釘	長さ 9.5 幅 1.9 厚さ 1.9	断 暗赤褐色	頭部欠失			SP−734
131	129	1002	土師器皿	1.3 8.3	外内 灰白色 断淡黄色	平底よりゆるやかに短く内湾し端部は丸く終る	口縁部にナデ		SP−757
		1003	土師器皿	1.8 8.0	外内断 淡黄色	平底より屈曲し短く立ち上がり端部は丸く終る	口縁部にヨコナデ		SP−757
		1004	土師器皿	1.6 8.0	外内 灰白色 断淡黄色	底部よりゆるやかに外上方に開く　端部は丸く終る 口縁部に厚みをもつ	口縁部にヨコナデ		SP−757
		1005	土師器皿	1.7 8.0	外内断 淡黄色	深さのある底部から外上方に伸び端部は丸い	口縁部にヨコナデ		SP−757
		1006	土師器皿	1.6 8.2	外内 灰白色 断淡黄色	平底より屈曲し外上方へ伸びる　完形	口縁部にヨコナデ		SP−757
		1007	土師器皿	1.5 8.3	外内断 灰白色	底部から端部まで肉厚で均質	口縁部にヨコナデ		SP−757
		1008	土師器皿	1.8 8.1	外内断 淡黄色	底部から鈍く屈曲し外上方へ伸びる　口縁部に厚みが あり端部は丸く終る	口縁部にヨコナデ		SP−757
		1009	土師器皿	1.9 8.0	外内断 にぶい黄橙色	底部から鈍く屈曲し外上方へ伸び端部は上方に押される	口縁部はヨコナデ　ナデによる鈍い稜線		SP−757

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
131	129	1010	土師器皿	1.5 8.1	外内断 浅黄橙色	偏平で小さい　口縁は内湾気味	摩耗している	SP−757
		1011	土師器皿	1.8 8.1	外内断 淡黄色	ゆるやかに口縁へ立ちあがり端部は丸く内湾する	口縁部はヨコナデ	SP−757
		1012	土師器皿	1.8 8.2	外内断 にぶい黄橙色	いびつ	口縁部はヨコナデ	SP−757
		1013	土師器皿	1.7 8.0	外内断 淡黄色	肉厚で口縁は内湾する	口縁部はヨコナデ	SP−757
		1014	土師器皿	1.4 8.2	外内断 にぶい黄橙色	口縁部で内湾し端部はやや角ばる	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SP−757
		1015	土師器皿	1.5 7.9	外内断 浅黄色	底部より口縁部の方が厚みをもつ　口縁部は内湾する	口縁部はヨコナデ　口縁部に厚みをもつ	SP−757
		1016	土師器皿	1.9 7.9	外内断 浅黄色	小さく丸みがある　器形は整っている	ナデ　ナデによる稜線　口縁部から底部にナデ	SP−757
		1017	土師器皿	1.5 8.2	外内断 にぶい黄橙色	平底から短く内湾する　端部は尖り気味	口縁部はヨコナデ	SP−766
129		1018	土師器皿	1.8 9.2	外内浅黄橙色 断にぶい黄橙	平底からゆるやかに外上方へ開き口縁部へ続く　端部は丸く終る	口縁部はヨコナデ　底部に指押え	SP−770
		1019	土師器皿	2.0 10.0	外内断 浅黄橙色	少しいびつな丸底からゆるやかに外上方へ伸び口縁部は丸く終る	口縁部はヨコナデ　底部に指押え	SP−770
132		1020	土師器皿	1.7 8.1	外内断 灰白色	厚みをもち底部に凹凸は見られるが深さがある	摩耗しているが口縁部にナデによる稜線	SP−799
		1021	土師器皿	1.7 8.2	外内断 灰白色	丸みのある底部と内湾する口縁を有する	摩耗しているが口縁部にナデによる稜線	SP−799
		1022	土師器皿	1.4 8.4	外内断 灰白色	器壁は薄い　屈曲し短く立ち上がる口縁部　その端部はわずかに内湾する	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SP−799
		1023	土師器皿	1.4 8.1	外内断 灰白色	偏平で底部はうすい　口縁は内湾ぎみ	摩耗している	SP−799
		1024	土師器皿	1.5 8.0	外内断 灰白色	いびつ　器壁の厚みは均質ではない	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SP−799
		1025	土師器皿	1.4 8.1	外内断 灰白色	偏平である　口縁は内湾し角ばる	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SP−799
		1026	土師器皿	1.2 8.2	外内断 灰白色	偏平　底部より口縁の方に厚みをもつ	摩耗している	SP−799
		1027	土師器皿	1.4 8.1	外内断 灰白色	楕円形　口縁部は内湾する	摩耗している	SP−799
		1028	土師器皿	1.6 8.4	外内断 淡黄色	偏平な器形で口縁は短かく内湾する	摩耗している	SP−799
		1029	土師器皿	1.5 8.0	外内断 灰白色	偏平な器形　短く立ちあがる口縁は内湾する	口縁部はヨコナデ	SP−799

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
132		1030	土師器皿	1.3 7.9	外内断 淡黄色	丸みがあり口縁部は内湾する	摩耗している　わずかにナデのあと	SP−799
		1031	土師器皿	1.7 8.0	外内断 浅黄橙色	丸みのある器形で口縁部は内湾する	口縁部はヨコナデ	SP−799
		1032	土師器皿	1.4 8.1	外内断 灰白色	偏平で底部から屈曲し短く外上方へ開く　端部は丸い	摩耗している	SP−799
		1033	土師器皿	1.5 7.9	外内断 灰白色	底部から外上方へ開く　端部は丸い　完形	口縁部はヨコナデ	SP−799
		1034	土師器皿	1.3 8.5	外内断 灰白色	平底から屈曲し垂直な立ちあがりをみせる	摩耗している	SP−799
		1035	土師器皿	1.4 8.0	外内断 灰白色	厚みは均等　丸みがあり口縁部はやや角ばる	摩耗している	SP−799
		1036	土師器皿	1.3 7.9	外内断 淡黄色	偏平で口縁は厚みをもつ	摩耗している	SP−799
		1037	土師器皿	1.7 7.9	外内断 灰白色	丸底から内湾して口縁部へ伸び端部は尖る	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線	SP−799
132	129	1038	土師器皿	1.3 8.2	外内断 灰白色	平底から短く屈曲する偏平な形	口縁部はヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線	SP−799
		1039	土師器皿	1.4 7.9	外内断 灰白色	偏平で口縁は内湾する	口縁部はヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線	SP−799
		1040	土師器皿	1.5 8.4	外内断 灰白色	整った器形　口縁部は内湾する	口縁部はヨコナデ　屈曲部にナデによる稜線	SP−799
		1041	土師器皿	1.6 8.1	外内断 灰白色	偏平な器形　器壁は薄い　口縁は内湾ぎみで尖る	口縁部はヨコナデ	SP−799
		1042	土師器皿	1.4 8.4	外内断 灰白色	偏平で厚みは均等　口縁端部は上方に押される	口縁部はヨコナデ　屈曲部に明瞭な稜線	SP−799
		1043	土師器皿	1.5 8.1	外内断 灰白色	整った器形　口縁は内湾	口縁部はヨコナデ　屈曲部に鈍い稜線	SP−799
		1044	土師器皿	1.5 8.1	外内断 灰白色	丸みのある整った器形　口縁は内湾し丸く終る	口縁部はヨコナデ　屈曲部に稜線	SP−799
		1045	瓦器椀 (大和) Ⅲ−B	4.0 12.2	外内灰色 断灰白色	形骸化した高台と底部は等しい高さにある　内湾しながら立ち上がりわずかに屈曲をみせて外反する　沈線は上位に位置する	外面　不規則なヘラミガキ　口縁部はヨコナデによる鈍い稜線 内面　隙間のある圏線ミガキ　見込みは輪状のヘラミガキがわずかに残る	SP−803
		1046	土師器皿	1.2 8.2	外内断 灰白色	平底から屈曲して短く立ち上がり口縁部は厚みをもつ	口縁部ヨコナデ	SP−803
		1047	土師器皿	1.2 7.4	外内断 灰白色	平底からゆるやかに内湾して短く立ち上がる 口縁は薄く尖り気味	底部に指押え　口縁部ヨコナデ	SP−803
		1048	土師器皿	1.4 8.0	外内断 灰白色	底部中央がわずかに突出しゆるやかに屈曲したのち短く上方に伸びる　口縁端部はやや尖る	底部に指押さえ　口縁部にナデによる鈍い稜線	SP−803
		1049	土師器杯	残高3.6 14.6	外内断 灰褐色	底部欠損 内湾する体部とわずかに外反する口縁を有する	指押さえが連続する　口縁部はヨコナデ	SP−803

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
	129	1050	瓦器椀（楠葉）Ⅲ－3	3.7 12.4	外内暗灰色 断灰白色	いびつ 底部欠損　沈線あり	外面	指押さえ　規則性のないヘラミガキ	SP－803
							内面	粗い圏線ミガキが周回する	
133		1051	瓦器椀（楠葉）Ⅳ－2	3.7 12.2	外内灰色 断灰白色	形骸化した高台と内湾しながら伸びる体部　わずかに外反する口縁部を有する　明瞭な沈線が一巡する	外面	指押さえ　数条のヘラミガキ	SP－803
							内面	口縁から見込みまで5周回する圏線ミガキ	
		1052	土師器皿	1.2 8.0	外内断 灰白色	平底から短く外上方へ伸び端部は角ばる	口縁部はヨコナデ　口縁と立ち上がり屈曲部に稜線		SP－805
133		1053	土師器杯	3.9 13.3	外内淡橙色 断浅黄橙色	平底から逆「ハ」の字に屈曲したのち外上方へ伸び口縁に続く　端部はやや角ばる	外面	体部に指押さえ 口縁部に強いナデによる凹面が生じる	SP－805
							内面		
		1054	瓦器椀（大和）Ⅲ－B～C	4.0 12.6	外内断 灰白色	均等な厚みで口縁まで続く　形骸化した高台と外反する口縁部を有する　端部上位に沈線一巡	外面	指押さえ　数条のヘラミガキ	SP－805
							内面	隙間のある圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	
		1055	瓦器椀（大和）Ⅲ－B～C	5.0 12.5	外内 暗オリーブ灰色 断灰白色	高台より底部が低い位置にある　簡単な高台と凹凸のある器壁　口縁上端部に浅い沈線が施される	外面	指押さえ	SP－812
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ 連結輪が外周する珍しいヘラミガキ	
		1056	瓦器椀（大和）Ⅲ－C～D	3.9 12.2	外内灰色 断灰白色	器壁は薄い　高台より底部の方が低い 口縁部で外反し沈線は上端部に位置する	外面	連続する指押さえ　数条の不規則なヘラミガキ	SP－812
							内面	隙間の大きい圏線ミガキが口縁より底部におりる	
		1057	瓦器椀（大和）Ⅲ－B	3.8 12.0	外内灰色 断灰白色	高台と底部が等しい位置にある　厚みのある底部から外上方へ開く体部　口縁部では外反気味　沈線は上位にあり	外面	不明瞭なヘラミガキ	SP－812
							内面	やや隙間のある圏線ミガキ　簡単な連結輪状ヘラミガキ	
130	130	1058	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	残高2.4 底径8.2	外にぶい橙色 内黒色 断灰白色	器壁は薄い　内湾気味に外上方に伸びる　高台は低く小さめ	外面	指押さえ　高台は貼り付け	SP－823
							内面	見込みにわずかにヘラミガキ　内面に燻し	
133		1059	黒色土器A類 畿内系Ⅱ類	3.0 14.8	外内浅黄橙色～オリーブ黒色 断灰白色	高台に高さがある　ゆるやかに外に伸び端部は直行し丸く終る	外面	高台は貼り付け　ナデ	SP－823
							内面	わずかにヘラミガキ　内面に燻し	
		1060	土師器皿	2.0 7.8	外内断 にぶい黄橙色	底部中央が突出し口縁部は外上方へ向かう　端部は丸く納められる　完形	口縁部はヨコナデ		SP－826
		1061	土師器皿	2.3 8.3	外内断 浅黄橙色	底部中央が突出し口縁部は外上方へ向かいわずかに外反したのち端部は丸く終る	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SP－826
		1062	土師器皿	1.8 7.7	外内断 浅黄色	底部中央がわずかに突出し口縁部は外上方へ伸び端部は丸く終る	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SP－826
		1063	土師器中皿	2.4 11.5	外内断 浅黄橙色	平底から内湾気味に外上方へ伸びたのち短く外反し端部はやや角ばる	底部に指押さえ　口縁部にヨコナデによる凹面 口縁部ヨコナデ		SP－826
		1064	土師器中皿	2.7 11.0	外内断 浅黄橙色	平底から外上方へ伸び口縁部は外反気味で端部はやや角ばる	底部に指押さえ　口縁部にヨコナデによる稜線		SP－826
		1065	土師器大皿	2.6 22.2	外内橙色 断にぶい橙色	平底から屈曲し外反して口縁へ続く　端部は外へ肥厚し外傾する端面を有する　内面に沈線あり	底部に指押さえ　口縁部ヨコナデ		SP－835
		1066	土師器中皿	2.5 15.0	外内断 灰白色	平底からゆるやかに外上方に伸び端部は厚みをもって丸く終る	底部に指押さえ		SP－878
		1067	土師器皿	1.4 8.0	外内浅黄橙色 断にぶい橙色	偏平な器形で端部は内湾する	指押さえ		SP－878
133		1068	土師器杯	残高 3.6 底径 19.7	外浅黄橙 内断橙色	平底から内湾気味に外上方に伸びる	外面	高台は貼り付け　断面台形	SP－883
							内面	斜めのヘラミガキ　見込みは2周回する連結輪状ヘラミガキ	
134		1069	土師器皿	1.5 8.4	外内断 灰白色	底部から屈曲して外上方に短く開き端部は内湾気味で角ばる	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SP－919

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
134	130	1070	土師器皿	1.6 8.5	外内断 灰白色	平底からゆるやかに口縁部に続く　端部は丸く内湾する	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SP−919
		1071	土師器皿	1.7 8.5	外内断 淡黄色	底部中央が少し高くなっている　屈曲して外上方に短く開き口縁は内湾する	口縁部はヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線		SP−919
		1072	土師器皿	1.5 8.4	外内断 灰白色	底部中央が少し高くなり屈曲して外上方に短く開き口縁は直立	口縁部はヨコナデ　屈曲部にナデによる明瞭な稜線		SP−919
		1073	土師器皿	1.5 8.3	外内断 淡黄色	底部中央がわずかに高い　屈曲して外上方に伸びたのち口縁部は内湾する	口縁部はヨコナデ　ナデによる稜線		SP−919
		1074	土師器皿	1.3 8.4	外内断 灰白色	底部中央が少し高くなっている　屈曲して外上方へ伸びたのち口縁は内湾	口縁部はヨコナデ		SP−919
		1075	土師器皿	1.4 8.4	外内 灰白色 断淡黄色	平底からゆるやかに外上方へ短く伸びる　口縁は内湾			SP−919
		1076	土師器皿	1.3 8.8	外内断 灰白色	底部中央がわずかに高くなりゆるやかに外上方に伸びる　口縁は内湾			SP−919
		1077	土師器皿	1.5 8.4	外内断 灰白色	底部中央がわずかに高くなり屈曲したのち口縁部は直行	口縁部はヨコナデ		SP−919
		1078	土師器皿	1.4 9.8	外内 灰白色 断淡黄色	平底より屈曲して外上方に短く開く　口縁は直行	立ち上がり屈曲部にナデによる稜線		SP−919
		1079	瓦器椀 (和泉) Ⅳ−1	3.9 14.0	外内断 灰白色	形骸化した高台と偏平な器形　口縁に沈線は無し　端部は外反する	外面	指押え　凹凸のある器壁　口縁は強いヨコナデ	SP−1095
							内面	0.3cm幅の太いヘラミガキが残る	
134		1080	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	4.3 16.8	外内断 暗灰色	浅い高台と内湾しながら外上方に伸びる口縁部を有する　見込みの広いもの　端部は薄く丸い	外面	連続する指押さえ　貼り付け高台	SP−1164
							内面	圏線と連結輪の重なる体部 見込みはジグザグヘラミガキ	
		1081	土師器杯	2.6 15.2	外内 にぶい橙色 断淡橙色	平底からゆるやかに屈曲し外上方に開く体部は薄く口縁で外反して端部は丸く終る	外面	口縁部はヨコナデ	SP−1178
							内面	口縁近くにわずかにヘラミガキが認められる　沈線あり	
134		1082	土師器杯	3.5 15.3	外内 明赤褐色 断橙色	低い高台　ゆるやかに逆「ハ」の字に開き口縁部は外反気味で端部は上方へつまみあげ	外面	口縁部はヨコナデ　数条のヘラミガキ	SP−1078
							内面	斜めのヘラミガキがわずかに残る	
135		1083	土師器皿	1.4 8.1	外内断 淡黄色	底部より口縁の方が厚みがある 平底から屈曲して外上方へ向い端部は丸い	口縁部はヨコナデ　屈曲部に明瞭な稜線		SP−1189
		1084	土師器皿	1.5 8.2	外内断 灰白色	平底からゆるやかに外上方へ開き口縁部は内湾気味で丸く終る	口縁にヨコナデ		SP−1189
		1085	土師器皿	1.5 8.4	外内 灰白色 断淡黄色	平底から屈曲し短く直行する	摩耗している		SP−1189
		1086	土師器皿	1.4 8.0	外内断 灰白〜浅黄橙色	偏平な器形で短く外上方へ伸び口縁は内湾する	口縁部ヨコナデ		SP−1189
		1087	土師器皿	1.4 7.8	外内断 淡黄色	平底から屈曲し外反気味に口縁へ続く	立ちあがり屈曲部に稜線		SP−1189
		1088	土師器皿	1.3 7.7	外内断 淡黄色	偏平な器形　口縁部は内湾し丸く終る	摩耗している		SP−1189
		1089	土師器皿	1.6 7.8	外内断 淡黄色	凹凸のある底部から屈曲し外上方へ伸び端部は内湾する	口縁部はヨコナデ　屈曲部に稜線		SP−1189

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
135	130	1090	土師器皿	1.3 7.8	外内断 淡黄色	底部中央が少し高くなり器壁は薄い	口縁部はヨコナデ		SP−1189
		1091	土師器皿	1.5 7.8	外内断 浅黄橙色	丸底よりわずかに屈曲をみせ口縁端部はわずかに内湾する	口縁部はヨコナデ　屈曲部に稜線		SP−1189
		1092	土師器皿	1.3 8.4	外内断 浅黄橙色	器形はいびつ	口縁部はヨコナデ		SP−1189
		1093	土師器皿	1.3 7.8	外内断 灰白〜淡黄色	ゆるやかに内湾して口縁に続く	摩耗している		SP−1189
		1094	土師器皿	1.8 8.2	外内断 灰白〜浅黄橙色	ゆるやかに内湾しながら口縁へ続く	摩耗している		SP−1189
136		1095	土師器皿	1.6 9.6	外内断 灰白色	大ぶりな器形 ゆるやかに外上方に開き口縁端部は上方へつまみあげる	底部に指押さえ　口縁部はヨコナデ　端部は上方につまみあげる　「て」の字状口縁		SP−1193
		1096	土師器皿	1.8 9.6	外内断 灰白色	平坦な底部から屈曲したのち外上方に開く 口縁端部は上方へつまみあげる	底部に指押さえ　口縁部にヨコナデ 「て」の字状口縁		SP−1193
136		1097	土師器皿	1.9 9.6	外内断 灰白色	深さのある丸底からゆるやかに外上方へ開き口縁端部は上方へつまみあげる	底部に指押さえ　口縁部にヨコナデ 「て」の字状口縁		SP−1193
		1098	土師器皿	1.8 9.6	外内断 灰白色	深い平底から屈曲し外上方へ立ち上がり口縁端部は上方へつまみあげる	底部に指押さえ　口縁部にヨコナデ 「て」の字状口縁		SP−1193
		1099	土師器皿	1.8 9.6	外内断 灰白色	深さ厚みあり　口縁部に段をなす　端部は上方へつまみあげる	口縁部ヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線 「て」の字状口縁		SP−1193
		1100	土師器皿	2.2 10.0	外内断 灰白色	丸みのある底部より口縁部が外上方に伸びる　端部は厚く丸く終る	口縁部はヨコナデ　底部に指押さえ		SP−1193
136		1101	土師器皿	1.7 9.4	外内断 灰白色	丸みのある底部と外反する口縁を有する　端部は厚みがありやや角ばる	口縁部はヨコナデ		SP−1193
		1102	土師器皿	1.9 10.3	外内断 灰白色	平たい底から外反気味に口縁が伸びる　端部は上方に押される	口縁部はヨコナデ		SP−1193
		1103	土師器皿	2.1 10.1	外内断 灰白色	丸みのある底部からわずかに屈曲し外反する口縁部 端部は角ばる	口縁部はヨコナデ　立ちあがり屈曲部に稜線		SP−1193
136		1104	土師器皿	1.4 9.6	外内断 灰白色	丸みのある底部と段をなす口縁部を有する　端部は上方につまみあげる	口縁部はヨコナデ　ナデによる明瞭な稜線 「て」の字状口縁		SP−1193
	131	1105	土師器杯	残高3.6 11.4	外内橙〜灰白色 断にぶい橙色	内湾する体部と直行する口縁をもつ	外面	ハケメ(7本／1.3cm)	SP−1228
							内面		
		1106	黒色土器B類 畿内系Ⅳ類	残高4.1 底径6.8	外内 オリーブ黒色 断灰色	高台は丸みのある台形で内湾して体部は立ち上がる 口縁部欠損	外面	密なヘラミガキ　貼り付け高台　全面に燻し	SP−1304
							内面	密な圏線ミガキ　見込みはジグザグ　全面に燻し	
		1107	土師器皿	1.5 8.1	外内断 灰白色	平底から屈曲して外上方へ開く 口縁部でわずかに外反　端部は角ばっている	口縁部ヨコナデ　屈曲部に明瞭な稜線		SP−1383
		1108	瓦器椀 (大和) Ⅲ−A(新)	残高4.9 14.8	外内灰色 断灰白色	底部欠損　内湾して立ち上がる体部と外反する口縁部を有する　端部上位に沈線は位置する	外面	連続する指押えの上に分割性はあるが雑なヘラミガキ	SP−1403
							内面	風化しているが密な圏線ミガキ　見込みに連結輪状ヘラミガキ	
		1109	土師器甕	残高4.5 16.0	外内暗褐色 断にぶい橙色	密な胎土で口縁上端部に面をなし内側に肥厚する	外面	口縁部ヨコナデ　肩部に指押さえ	SP−1403
							内面	口縁部ヨコナデ　体部ユビナデ	

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
		1110	瓦器釜 大和B1	残高6.6 31.6	㋜㋔㋝ 灰白色	短い鍔は上方に反り口縁は「く」の字に屈曲し端部は内側に折り返し肥厚する	外面	頸部に指押さえ　口縁と貼り付けた鍔はヨコナデ	SP−1438
							内面	板ナデ　原体痕あり	
		1111	平瓦	長さ 17.3 幅 22.4 厚さ 2.5	㋜㋔ 暗灰色 ㋝灰白色	煤付着	凹面	ヘラケズリ　側面に面取り	SP−1436
							凸面	菱井桁のタタキ	(133)
136		1112	瓦器椀 (大和) Ⅲ−C	3.7 11.8	㋜㋔ 暗灰色 ㋝灰白色	高台より底部が低い位置にある　口縁部でわずかに外反し沈線は上端部に細く存在する	内面	指押さえ　とぎれとぎれの雑なヘラミガキ	SP−1440
							内面	隙間の大きい圏線ミガキが口縁より底部へおりる	
		1113	瓦器椀 (楠葉) Ⅰ−2	6.1 15.0	㋜㋔灰色 ㋝灰白色	しっかりとした高台から均等な厚みの体部が内湾して立ち上がる　沈線は口縁下位に明瞭に一巡する　端部は丸く終る	外面	高台貼り付けナデ　3分割ミガキ　底部に×印	SP−1583
							内面	密な圏線ミガキ 見込みはジグザグのヘラミガキが格子に重なる	
		1114	平瓦	長さ 16.4 幅 9.9 厚さ 2.8	㋜㋔暗灰色 ㋝灰黄褐色		凹面	ヘラケズリ	SP−1515
							凸面	菱井桁に横線が交差するタタキ	
	131	1115	平瓦	長さ 22.6 幅 24.5 厚さ 2.8	㋜㋔ オリーブ黒色 ㋝灰白色	煤付着	凹面	ヘラケズリ	SP−1509
							凸面	菱井桁に横線が交差　(2重)のタタキ	
142		1116	土錘	長さ 2.8 最大径0.9	㋜㋝黒色 ㋔灰色	紡錘形	中心に径0.2cmの孔が穿たれる		SP−681
		1117	土錘	長さ 4.5 最大径0.9	㋜㋝橙〜 浅黄橙色	紡錘形	中心に径0.3cmの孔が穿たれる		SP−1142
		1118	土錘	長さ 2.9 最大径0.8	㋜㋔㋝ 灰色	紡錘形	中心に径0.3cm強の孔が穿たれる		SP−1305
		1119	投弾 ?	長径 5.4 短径 3.9	㋜㋔㋝ 灰褐色	卵形			SP−407
		1120	黒色土器A類 畿内系Ⅲ類	5.5 14.6	㋜㋔ 浅黄橙色 ㋝黒色	器壁が厚くしっかりした作り　体部から外上方へ伸び端部は丸く終る	外面	内外とも摩耗している	Ⅲ層
							内面	高台は貼り付けナデ　内面に燻し	
		1121	土師器中皿	2.1 12.0	㋜㋔㋝ 灰白色	ややいびつ　平底から逆「ハ」の字の口縁を有し端部は丸く終る	口縁部はヨコナデ		Ⅲ層
		1122	土師器壺	残高4.6 19.0	㋜㋔㋝ 浅黄橙色	口縁部は体部よりくの字に屈曲し外方に広がり端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ　摩耗のため他の調整は判断できず		Ⅲ層
140		1123	灰釉陶器碗	6.0 13.0	㋜㋔㋝ 灰白色	内湾ぎみに外上方に伸び口縁でやや外反　端部は丸く終る　「ハ」の字形に開く高めの高台	外面	ナデによる鈍い稜線	Ⅲ層
							内面		
	132	1124	緑釉陶器碗	残高 3.6 底径 10.7	㋜灰白色 ㋔黄灰色 ㋝灰白色	高台は低めの輪高台で内傾する端面を有する	外面	高台は貼り付け	Ⅲ層
							内面		
		1125	緑釉陶器碗	残高1.8 底径6.3	㋜㋔灰白〜 オリーブ灰色 ㋝明オリーブ灰色	高めの輪高台をもつ丁寧な作り	外面	高台は貼り付け	Ⅳ層
							内面		
		1126	緑釉陶器碗	残高1.9 底径4.6	㋜灰オリーブ灰色 ㋔灰オリーブ〜 オリーブ黒色 ㋝灰黄褐〜黄灰色	厚みと丸みのある器形　円板状高台をもつ	外面	高台に渦巻状の糸切り痕	Ⅳ層
							内面		
142		1127	土錘	長さ 5.5 最大径1.9	㋜灰黄〜浅黄色 ㋝灰黄色	紡錘形	中心に径0.6cm強の孔が穿たれる		Ⅱ層
		1128	土錘	長さ 4.4 最大径1.9	㋜ 黄灰色	紡錘形	中心に径0.4cmの孔が穿たれる		Ⅲ層
		1129	土錘	長さ 5.1 最大径3.6	㋜ にぶい黄橙色	断面「工」字形	側面中央にV字の溝がある		Ⅲ層

遺物観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	法量(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法		遺構名
140	132	1130	緑釉陶器皿	2.4 14.4	㋜㋝淡黄～灰白色 ㋞淡黄色	体部は外方に大きく広がり口縁は外反する 端部は丸く終る　低めの円板状高台	外面	口縁部は回転ナデ　高台は削り出し	II層
							内面		
138		1131	紡錘車	上辺径2.0 下辺径3.7 厚さ 1.8	㋝ 灰黄褐～黒褐色	全体に摩耗している　滑石製	外面	中心に径0.6cm強の孔が上辺下辺から施される	II層
							内面		
142		1132	土師器杯	3.0 10.6	㋜㋝ 灰白～浅黄橙色	平底から逆「ハ」の字に屈曲して外上方に伸び端部は尖り気味	外面	連続する指押え　口縁部はヨコナデ	III層
							内面	指押さえが顕著　口縁部に厚みをもつ	
143		1133	瓦器椀 （大和？）	3.6 8.2	㋜㋝ 灰白色 ㋞灰色	底部から内湾気味に外上方に伸び端部は丸い　器壁全体厚い　高台は「ハ」の字型に開く　口縁に浅い沈線一条巡る	外面	体部2/3まで太いヘラミガキと細いミガキが重なる	III層
							内面	隙間の大きい圏線ミガキ　見込みにジグザグのヘラミガキ？	

木製品観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	遺構名	遺構内での使われ方	法量（cm）			特徴
144	134	1	燭台	SD−87		7.6(径)		0.8(厚)	縁辺が高く、中央に金属が残る
		2	折敷	SE−36		28.5	7.5	0.6	曲物内より検出　刃物傷多数
		3	折敷	SE−36		31.4	6.6	0.8	墨書あり　片面に無数の刃物傷
		4	曲物	SE−34	水溜	36.0(径)		17.5(高)	内面の刻み目は粗い　綴じ皮残存
		5	曲物	SE−36	水溜	28.4(径)		9.2(高)	内面に縦方向の刻み目　綴じ皮残存
		6	曲物	SE−36	水溜	27.2(径)		10.5(高)	５の下段として検出　木釘穴が残る
	135	7	箱材	SE−41	井戸側	39.0	24.5	1.7	箱組の切り込み部分に漆が残る 樹種はスギ
		8	箱材	SE−41	井戸側	36.1	23.0	1.5	７、９と同仕様
	136	9	箱材	SE−41	井戸側	36.6	21.3	1.6	７、８と同仕様
		10	杭	SE−41	井戸側	49.2		4.0(最大径)	先端に加工痕
145		11	杭	SE−41	井戸側	45.3		3.7(最大径)	先端に加工痕
		12	杭	SE−41	井戸側	55.7		3.5(最大径)	先端に加工痕
		13	杭	SE−41	井戸側	55.4		3.7	先端に加工痕
	137	14	曲物底板	SE−42	水溜と井戸側の間にしきつめる	48.1	23.5	1.3	綴じ皮が残る　多数の刃物傷残る
		15	曲物底板	SE−42	水溜と井戸側の間にしきつめる	44.4	14.5	1.5	綴じ皮が残る　多数の刃物傷残る
		16	曲物底板	SE−42	水溜と井戸側の間にしきつめる	42.0	24.0	1.0	木釘穴が縁辺に残る
145		17	曲物	SE−42	水溜	46.5(径)		31.6(高)	１重の側板に２枚のマワシ 綴じ皮、木釘残存
		18	曲物	SE−42	水溜	32.6(径)		21.2(高)	２重の側板と１枚のマワシ
146	138	19	角材	SE−42	井戸側の横桟	85.6	6.2	4.5	両端に目違いの枘を切る
		20	角材	SE−42	井戸側の横桟	84.9	6.6	5.9	19と同仕様
		21	角材	SE−42	井戸側の横桟	82.0	6.8	5.7	樹種はアスナロ
		22	角材	SE−42	井戸側の横桟	78.6	6.8	3.7	
		23	曲物底板	SE−42	水溜と井戸側の間に敷く	48.8	24.1	1.4	綴じ皮が残る　弧形にくる 無数の刃物傷
145		24	曲物底板	SE−42	水溜と井戸側の間に敷く	37.6	21.0	0.9	木釘のあとが縁辺に残る　弧形
	139	25	不明品	SE−42	水溜と井戸側の間に敷く	37.2	30.8	1.3	中央に円形孔　周縁部より３cm内側で ゆるい段差をつくる
146		26	曲物	SE−42	水溜	22.2(径)		15.2(高)	小ぶりだが残存状態良好　底板は厚く、 周縁は斜めにカット　綴じ皮のそばに 「井(井？)」の刻印　樹種はヒノキ
147		27	不明品 柄振？	SE−43		27.3	11.1	3.7	方形の穴に歯が３ヶ所残る　穴は計７ケ 所　中央は貫通する　破損箇所を補修し たつる状の木皮がわずかに残る
		28	梳櫛	SE−43		9.4	4.2	0.9	樹種はツゲ
		29	曲物	SE−43	水溜	45.2(径)		22.8(高)	１重の側板に２枚のマワシ 側板を補修した小穴が多数　綴じ皮残存
	140	30	角材	SE−43	井戸側の横桟	84.9	6.9	4.4	枘部分が別材とこすれた痕が残る
		31	角材	SE−43	井戸側の横桟	82.8	6.6	3.4	30と同仕様
		32	角材	SE−43	井戸側の隅柱	84.1	6.4	6.2	２方向から木組穴が施される 手斧あとが顕著

木製品観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	遺構名	遺構内での使われ方	法量（cm）			特徴
147	140	33	角材	SE−43	井戸側の隅柱	81.6	8.7	6.0	32、34と同仕様
		34	角材	SE−43	井戸側の隅柱	78.0	8.7	6.5	32、33と同仕様
148	141	35	曲物	SE−44	水溜	43.6(径)		16.9(高)	2重　綴じ皮残存　タテの刻み目
147		36	曲物	SE−44	水溜	38.0(径)		17.0(高)	1重の側板と2枚のマワシ
148		37	曲物	SE−44	水溜	46.0(径)		29.6(高)	1重の側板と2枚のマワシ 縦方向と斜めの刻み目が施される
147		38	曲物	SE−44	水溜	53.2(径)		30.8(高)	1重の側板に3枚のマワシ 縦方向と斜めの刻み目が施される
148	142	39	曲物	SE−46	水溜	36.8(径)		18.2(高)	1重の側板と1枚のマワシ 綴じ皮、木釘が残存
		40	曲物	SE−46	水溜	33.6(径)		18.2(高)	1重の側板と2枚のマワシ
		41	曲物	SE−46	水溜	33.6(径)		15.6(高)	1重板　木釘穴数ヶ所
		42	曲物	SK−98	水溜	45.6(径)		23.0(高)	1重の側板と2枚のマワシ 縦方向と斜めの刻み目
		43	曲物	SK−98	水溜	52.1(径)		31.7(高)	1重の側板と3枚のマワシ 丁寧な綴じ
	143	44	杭	SR−02	護岸用？(SR−02の肩)	27.9		6.6	SR−02から数本検出される
151		45	不明品	SR−02		20.8		3.6	先端は鋭く尖る
		46	曲物	SE−23	水溜	45.6(径)		31.6(高)	1重の側板に2枚のマワシ 4.8cm幅のヘギが縦に4ヶ所 そのうち1枚は一端が舟形に削られる
		47	曲物	SE−24	水溜	34.0(径)		17.0(高)	1重の側板と2枚のマワシ 48の下段として検出
		48	曲物	SE−24	水溜	36.5(径)		14.1(高)	1重の側板と1枚のマワシ 47の上段として検出
149	144	49	木臼	SK−61	礎板	26.2	24.9	10.0	上端に木芯より放射状の溝が残る 木表面上半分に手斧の痕 50、53、54と同個体
		50	木臼	SK−61	礎板	26.1	16.4	6.1	49、53、54と同仕様
		51	曲物	SE−30	水溜	33.0(径)		21.7(高)	側板、マワシとも綴じが丁寧で残存 状態良好
149		52	柄杓	SK−68		14.6(径)	11.3(高)	59.0(柄)	曲物から柄が抜けないための木釘が残存 柄と曲物部のすりへりから右利き使用痕？
	145	53	木臼	SP−2108	礎板	30.0	24.0	10.0	49、50、54と同仕様
		54	木臼	SP−1847	礎板	27.4	17.2	9.2	49、50、53と同仕様
150		55	柱根	SP−2230	柱根	64.7		27.2(径)	木口に手斧痕が顕著
	146	56	柱根	SP−1904	柱根	24.4	15.6	14.0	三方向から抉りが施される
		57	柱根	SP−1714	柱根	25.4	11.7	11.2	
151		58	鼻緑	SP−2164	礎板	20.6	17.2	6.9	ドーナツ型
	147	59	柱根	SP−2173	柱	32.3	15.7	10.3	
		60	板材	SP−2004	礎板	76.6	14.5	4.0	
150		61	柱根	SP−2214	柱	38.6	23.6	19.4	中央は空洞になっている

木製品観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	遺構名	遺構内での使われ方	法量（cm）			特徴
150	148	62	柱根	SP−2084	柱	32.5	17.2	10.6	複雑な抉りが施される
		63	板材	SP−1905	礎板	18.0	12.0	3.4	
		64	板材	SP−1905	礎板	24.0	14.8	6.3	中央部に貫通穴
	149	65	杭	SK−84		42.1		6.8(径)	先端に加工痕
		66	杭	SK−84		47.4		4.6(径)	先端に加工痕
		67	杭	SK−84		46.8		4.4(径)	先端に加工痕
		68	杭	SK−84		43.7		5.3(径)	先端に加工痕
		69	杭	SK−84		42.5		5.3(径)	先端に加工痕
		70	杭	SK−84		35.6		5.0(径)	先端に加工痕
		71	杭	SK−84		23.3		4.8(径)	先端に加工痕
		72	杭	SK−84		30.3		4.0(径)	先端に加工痕
		73	杭	SK−84		28.9		4.1(径)	先端に加工痕
		74	杭	SK−84		30.0		5.4(径)	先端に加工痕
		75	杭	SK−84		40.2		5.6(径)	先端に加工痕
	150	76	棒状木製品	SK−84		162.0		8.0(径)	貫通する小穴が数ヶ所
		77	棒状木製品	SK−84		132.0		5.6(径)	76と対で使用？
		78	杭	SK−84		30.6		6.8(径)	先端に加工痕
		79	杭	SK−84		35.3		5.2(径)	先端に細かい加工痕
		80	木樋状木製品	SK−84		81.3	30.8	2.0	木樋の可能性　弧形にくりぬく
	151	81	板材	SJ−01		47.2	30.0	1.6	
		82	杭	SJ−01		14.8		5.2(径)	先端に加工痕
149		83	板材	SJ−01		61.2	28.2	4.0	中央の楕円形の穴に杭が入った状態で検出
		84	杭	SJ−01		52.6		6.2(径)	先端に加工痕　木皮が残る
152	152	85	下駄	ST−01		21.8	6.2	2.9	楕円形の連歯下駄　横緒の穿孔は後歯の前に位置する
		86	編具	ST−01		14.8	3.9	2.4	中央が細くなり、全体に粗い削りあと
		87	球状木製品	ST−01		5.2(径)			中央に丸い溝がある　浮子？
		88	球状木製品	ST−01		5.2(径)			中央に丸い溝がある　浮子？
		89	球状木製品	ST−01		4.8(径)			球を刃物で切り落としている
		90	毬	ST−01		5.2(径)			削りが粗い
		91	毬	ST−01		7.0(径)			削りが粗い
		92	下駄	ST−01		22.5	12.1	4.0	台幅が広い楕円形の連歯下駄 台表に足指の痕　台裏は面取
		93	栓	ST−01			18.4	5.7	残存状態良好
153	153	94	折敷	ST−01		21.2	6.8	0.4	桟をとめた綴皮が残る
		95	曲物底板	ST−01		10.6	8.6	0.4	両端欠損
		96	漆器椀底部	ST−01		8.1	6.4	1.0	
		97	柄杓の柄	ST−01		5.3	1.2		先端部分98と同一個体
152		98	柄杓の柄	ST−01		10.8	1.9		97と同一個体　雲形に成形
153		99	曲物	ST−05		14.4	5.6	0.2	楕円形容器の側板

木製品観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	遺構名	遺構内での使われ方	法量（cm）			特徴
153	153	100	草履状木製品	ST−05		21.6	4.6	0.2	2重の板と綴じる小穴が両端にあったと思われる「金剛板」
	154	101	曲物	SK−15	水溜	35.2(径)		13.7(高)	2重の側板　縦と斜めの刻み目　102と組み合わせた状態で検出
		102	曲物	SK−15	水溜	40.0(径)		13.6(高)	2重の側板　2重のマワシで構成
161		103	斎串	SK−14		22.8	1.8	0.4	上部側面凹凸があり2ヶ所に焦げたあと
		104	杓子	SK−10		37.6		5.8	お玉の部分が小さい　粗削り
		105	漆器椀	SD−45		13.8(径)		4.8(高)	黒漆地に朱赤でモチーフは笹
		106	板材	SK−40		47.9	9.0	2.8	
		107	曲物	SK−06	水溜	38.0(径)		28.6(高)	1重の側板と2枚のマワシで構成 上下マワシ板の綴じは逆　刻み目は縦
	155	108	折敷	SE−07		28.9	21.6	0.6	無数の刃物傷　組板に転用？
153		109	曲物底板	SE−07		46.9(径)		1.0	やや楕円形　2つに割れている
		110	折敷	SE−07		29.2	28.4	0.6	綴皮が3辺に残る　刃物傷多数
		111	曲物	SE−07	水溜	46.4(径)		12.0(高)	2重の側板　刻み目は縦
		112	曲物	SE−07	水溜	44.6(径)		25.1(高)	111と組み合わさって検出 1枚の側板と2段のまわし板 刻み目は縦＋斜め
156	156	113	曲物容器	SE−11		17.8(径)		8.0(高)	114の曲物内で検出　水汲みに使用？
		114	曲物	SE−11	水溜	53.3(径)		34.0(高)	1重の側板と3枚のマワシ 縦の刻み目　7.5cm幅のヘギが3枚 下辺に木釘穴残る 出土曲物の中最大を測る
		115	板材	SE−11	曲物の底板	55.6	34.4	3.9	116と組み合わせて114の曲物の底板として検出
		116	板材	SE−11	曲物の底板	59.5	34.6	4.0	115と同仕様　曲物のあとが残る
154	157	117	箱材	SE−11	井戸側	49.5	30.0	1.0	118、120、121と組み合わせて箱組み 片面のみ黒漆塗布、パチ形に木地が残る 短側板
		118	箱材	SE−11	井戸側	49.6	27.5	1.1	117と同仕様の短側板 117、118と120、121は凹凸状の加工
155		119	箱材	SE−11	井戸側	65.0	29.9	1.1	底板？釘穴が残る　帯状に木地が残る
154	158	120	箱材	SE−11	井戸側	64.8	30.0	1.2	片面に舌状に木地が残る 凹凸状の加工　長側板
155		121	箱材	SE−11	井戸側	64.6	30.0	1.1	120と同仕様　長側板
		122	角材	SE−11	井戸履屋	70.5	16.0	13.4	底辺に加工痕が残る
		123	板材	SE−11	井戸側縦板	64.5	18.0	5.8	
	159	124	板材	SE−11	井戸側縦板	100.0	28.6	5.0	裾部が斜めにカット　下辺より1/3位置に別材でこすれた痕
157		125	板材	SE−11	井戸側横桟	58.4	8.0	3.8	
		126	板材	SE−11	井戸側縦板	57.2	30.0	4.4	

木製品観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	遺構名	遺構内での使われ方	法量（cm）			特徴
157		127	板材	SE−11	井戸側横桟	87.1	15.4	4.5	135と同仕様
153	158	128	板材	SE−11	井戸側横桟	95.8	10.6	4.8	両脇を細く削る　125、134と同仕様
		129	角材	SE−11	井戸側隅柱	56.4	15.0	8.0	130と同仕様
		130	角材	SE−11	井戸側隅柱	58.0	15.4	10.6	129と同仕様　2方向から抉り
157	159	131	角材	SE−11	井戸側隅柱	117.0	15.4	9.2	132と同仕様　3方向から抉り
		132	角材	SE−11	井戸側隅柱	122.0	15.0	9.2	131と同仕様　2方向から抉り
		133	板材	SE−11	井戸側縦板	54.2	37.0	6.3	片面に手斧あとが顕著　126と類似
155	160	134	板材	SE−11	井戸側横桟	97.0	9.4	4.4	両端が細く削られる　125、128と同仕様
		135	板材	SE−11	井戸側横桟	81.1	15.5	3.6	相欠きの枘が切られる　127と同仕様
		136	板材	SE−11	井戸側縦板	84.5	29.0	3.2	片面に別材でこすれた痕
157	161	137	板材	SE−11	井戸側縦板	79.4	27.2	2.5	別材でこすれた痕
		138	板材	SE−11	井戸側縦板	111.7	16.5	5.2	
		139	板材	SE−11	井戸側縦板	93.8	25.9	4.2	円形の抉りが数ヶ所に残る
159	162	140	角材	SE−11	井戸側隅柱	70.0	15.0	9.0	複雑な木組穴
		141	角材	SE−11	井戸履屋	61.4	15.8	13.1	裾部に加工痕　122と類似
157	163	142	角材	SE−11	井戸側隅柱	128.1	15.0	9.5	2方向から抉り　132と対角線の柱
		143	角材	SE−11	井戸側隅柱	126.0	14.1	10.0	2方向から抉り
155	164	144	板材	SE−11	井戸側縦板	82.4	35.2	5.4	両面に手斧痕が顕著
158		145	板材	SE−11	井戸側縦板	100.8	30.4	5.6	木目に平行して虫喰い穴？
	165	146	板材	SE−11	井戸側縦板	45.7	20.0	3.7	木口に手斧あと
		147	板材	SE−11	井戸側縦板	43.6	12.0	5.4	四角い抉り
	166	148	板材	SE−11	井戸側縦板	88.6	25.2	4.1	
156		149	板材	SE−11	井戸側縦板	88.7	33.7	3.6	片面に別材の痕
158	167	150	板材	SE−11	井戸側縦板	120.0	26.2	6.0	両側面に四角い抉り、片面に手斧のあと
		151	板材	SE−11	井戸側縦板	107.6	29.2	9.2	片面に両脇から深い抉り
156	168	152	板材	SE−13	井戸側縦板	45.3	11.8	3.0	
		153	板材	SE−13	井戸側縦板	45.5	12.6	3.2	片面に手斧痕
		154	板材	SE−13	井戸側縦板	49.5	18.8	4.5	断面カマボコ状
160	169	155	板材	SE−13	井戸側縦板	34.6	12.8	2.6	
160		156	板材	SE−13	井戸側縦板	50.6	28.5	5.5	厚くL字に屈曲する　転用材？
159		157	板材	SE−13	井戸側縦板	59.6	49.3	4.0	
160	170	158	楕円形曲物	SE−18	水溜	69.3(長径)		24.2(高)	丁寧なつくり　隅丸に斜めの刻み目
		159	曲物	SE−18	水溜	33.8(径)		18.7(高)	158の内部より検出　斜めの刻み目　綴じ皮2列どめ
		160	下駄	SP−157		24.2	9.7	2.8	楕円形の連歯下駄　足指の摩擦痕が台表に、台裏にノミあと顕著
161	171	161	柱根	SP−1104		59.6	13.4	14.3	
		162	板材	SP−619	礎板	35.2	24.6	13.0	遺存状態悪い　横方向に別材の痕
		163	柱根	SP−515		45.0	16.1	14.9	
		164	板材	SP−451	礎板	19.5	7.7	3.5	四角い抉り
	172	165	板材	SP−451	礎板	20.0	10.5	4.7	四角い抉り
		166	柱根	SP−1104		85.3	13.3	12.7	

木製品観察表

図版No.	挿図No.	遺物No.	器種	遺構名	遺構内での使われ方	法量（cm）			特徴
162	174	167	柱根	SP−1152		70.0		17.6	
		168	柱根	SP−1134		78.0		17.8	
162		169	柱根	SP−1327		82.0		16.2	
	175	170	板材	SP−1221/1222	礎板	19.2	9.0	4.7	
		171	板材	SP−1176	礎板	15.5	9.4	4.0	残存状態良好
		172	角材	SP−1221/1222		31.9		8.9	
		173	板材	SP−1221/1222		48.7	8.0	2.0	片面に浅い斜めの刻み目

K区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SD−03	4、14	第1	115、1,580	21	——	近世	——	——	——	——	水路　L・M区へ続く
55	8、18	第1	137、1,660	4～23	——	近世	6	1	——		水路 SD−90に合流 L区に続く
87	1、11	第1	165、3,180	12～30	——	近世	——	——	——	144	水路
88	1、2	第1	117、1,700	7～25	——	近世	——	——	——	——	水路　SD−87に合流
89	3、13	第1	82、2,100	14	——	近世	——	——	——	——	水路　SD−88に合流　SD−91を分岐
90	14～18	第1	50、3,750	4～12	——	近世	——	——	——	——	SD−03,55に合流
91	11、12	第1	38、1,430	7	——	近世	——	——	——	——	鋤溝？
59	8、18	第2（上）	385、1,565	5～22	——	13	22	2、4	92	79、80、85	排水溝？
68	6、16	第2（上）	182、1,560	13～21	——	12末～13前	22	3	93	81	区画溝？
92	20	第2（上）	48、656	17～58	——	中世	——	——	——	——	
SE−34	18	第2（上）	75、88	51	楕円形	12末～13初	8	5	87、134	74、144	曲物
35	19	第2（上）	102、95	53	不整円形	12末～13初	——	——	87	74	井戸形態残存せず　土坑？
36	18	第2（上）	93、102	68	不整円形	12末～13初	9	——	134	144	曲物
37	9	第2（上）	98、116	60	隅丸方形	中世	——	——	——	——	井戸形態残存せず　土坑？
38	8	第2（上）	131、134	78	不整円形	12後	10	5	87	74	井戸形態残存せず　土坑？
39	7	第2（上）	112、105	40	不整円形	12末～13前	11	——	87	75	井戸形態残存せず　土坑？
40	7	第2（上）	105、116	49	不定形	13前	——	——	87	——	井戸形態残存せず　土坑？
41	19	第2（上）	108、105	76	隅丸方形	13前	12	——	135、136	144、145	井戸側と曲物
42	8	第2（上）	252、230	122	隅丸方形	13前	13	6	89、137～9	75、145、146	井戸側と曲物
43	8	第2（上）	207、143	94	隅丸長方形	12末～13前	14	5	88、139、140	76、147	井戸側と曲物
44	18	第2（上）	193、150	76	隅丸方形	13前	15	——	89、141	147、148	曲物、石
45	18	第2（上）	163、165	54	不定形	13前	16	——	89	76	井戸形態残存せず
46	18	第2（下）	192、142	108	不定形	12末～13初	23	——	89、142	76、148	曲物　5段以上
47	18	第2（下）								76	
SK−90	10	第2（上）	116、151	55	半円	中世	——	——	——	——	
91	20	第2（上）	155、43	16	半円	中世	——	——	——	——	
92	19	第2（上）	140、160	64	円形	13初	17	−	90	——	
93	19	第2（上）	136、127	52	円	中世	——	——	——	——	
94	18、19	第2（上）	135、88	21	不定円	13後	18		90	77	
95	1	第2（上）	215、273	144	隅丸長方形	近世？	19	——	90	77	底に枝が束ねられた状態 杭有り
96	9	第2（上）	73、82	44	円形	13前	——	——	90		
97	18、19	第2（上）	272、273	52	隅丸方形	12末～13前	20	4、7	90	77	菰状の植物遺体、石
98	8、9、18、19	第2（上）	187、215	120	不定形	中世	21	7	142	148	井戸構造を有する（曲物、2段）
131	18	第2（上）	101、105	3	円形	12後～13初	——	——	91	78	
99	15	第2（下）	140、168	36	長円形	中世	24	——	——	——	内部に塔心礎？の石
100	15、16	第2（下）	612、254	59	隅丸方形	13初～前	——	——	91	−	
101	5、15	第2（下）	231、251	64	楕円形	13前	——	8	91	——	
102	15	第2（下）	120、113	56	円形	中世	——	——	——	——	

K区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SK－103	5	第2（下）	99、 88	49	隅丸方形	中世	―	―	―	―	
104	5	第2（下）	90、 89	68	円形	中世	―	―	―	―	
105	6	第2（下）	61、 68	80	円形	中世	―	―	―	―	
106	5	第2（下）	77、 83	35	円形	中世	―	―	―	―	
107	13	第2（下）	72、 67	11	円形	中世	―	―	―	―	
108	18	第2（下）	158、 178	84	不定形	12後	―	―	91	78	
109	8	第2（下）	91、 76	42	円形	中世	―	―	―	―	
110	19	第2（下）	125、 138	71	円形	中世	―	―	―	―	
111	20	第2（下）	159、 138	57	不整円形	古墳前	25	8	91	78	
112	14	第2（下）	72、 74	42	円	中世	―	―	―	―	
113	14	第3	97、 49	12	楕円形	古墳	―	―	―	―	
114	14	第3	124、 85	15		古墳	―	―	―	―	
115	15	第3	65、 58	17	円形	古墳	―	―	―	―	
116	16	第3	173、 83	33	楕円形	古墳	―	―	―	―	
117	17	第3	145、 122	27	楕円形	古墳	―	―	―	―	
118	7	第3	92、 88	40	円形	古墳	―	―	―	―	
119	7	第3	88、 159	18	楕円形	古墳	―	―	―	―	
120	7	第3	58、 55	17	円形	古墳以前	―	―	91	―	
121	19	第3	83、 100	31	半円	古墳	―	―	―	―	
122	19、20	第3	132、 206	10	隅丸方形	古墳	―	―	―	―	
123	20	第3	118、 287	15	不定形	古墳	―	―	―	―	
124	20	第3	75、 83	8	半円	古墳	―	―	―	―	
125	20	第3	129、 102	43	隅丸方形	古墳	―	―	―	―	
126	20	第3	247、 96	33	隅丸方形	古墳	―	―	―	―	
127	6 、16	第3	97、 105	12	円形	古墳	―	―	―	―	
128	10	第3	120、 208	25	楕円形	古墳	―	―	―	―	
129	2	第3	98、 144	33	楕円形	古墳	―	―	―	―	
130	4	第3	108、 112	42	円形	古墳	―	―	―	―	
SR－01	7 、17	第2（下）	490、1,545	79	―	古墳後	―	9	―	82	
02	7、17、18	第3	690、1,560	15	―	古墳前	26	12	―	82	
03	1、2、3、13、14	第3	196、3,940	35	―	古墳以前	―	―	―	―	
07	14、15	第3	470、 620	47	―	古墳以前	―	―	―	―	
08	5 、15	第3	183、1、140	60	―	古墳以前	―	―	―	―	
09	10、19	第3	200、2,090	30～60	―	古墳以前	―	―	―	―	
10	10、20	第3	235、1,650	26	―	古墳以前	―	―	―	―	
11	3、13、14	第4	195、1,500	49	―	弥生以前	―	14	―	―	
12	1、2、11	第4	430、2,200	80	―	弥生以前	―	―	―	―	

L区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SD−03	1、7	第1	100、1,790	3～20	——	近世	——	——	——	——	K、M区に続く
54	1～6	第1	120、5,720	6～21	——	近世	27	15	——	——	O区に続く　杭列　石
55	4、10	第1	125、　520	12～25	——	近世	——	——	——	——	K区に続く
31	4、11	第2（上）	70、　195	2～20	——	中世	——	——	——	——	M区に続く
39	3、9	第2（上）	135、1,370	5～16	——	13後	——	——	102	91	M区に続く
56	11、12	第2（上）	20、　380	6～17	——	中世	——	——	102	−	
57	6、12	第2（上）	42、1,300	2～8	——	中世	——	——	——	——	
58	4、10	第2（上）	145、1,870	4～12	——	中世	——	——	——	——	
59	11	第2（上）	90、　760	22～31	——	13前～後	——	——	——	——	K区に続く　ST−01につながる
60	5	第2（上）	39、　470	3～9	——	中世	——	——	——	——	
61	11	第2（上）	86、　154	14	——	13前～後	——	——	——	——	
62	11	第2（上）	44、　184	11	——	中世	——	——	——	——	
63	11	第2（上）	46、　324	7～11	——	中世	——	——	——	——	
64	6	第2（上）	72、　594	5～10	——	中世	——	——	——	——	
65	6	第2（上）	22、　180	6	——	中世	——	——	——	——	
66	6	第2（上）	50、　432	7～12	——	中世	——	——	——	——	
67	5	第2（上）	34、　400	7	——	中世	——	——	——	——	
68	2、8	第2（上）	175、1,960	4～23	——	中世	——	——	——	——	K区に続く
69	3、4	第2（下）	53、1,235	6～38	——	古墳	——	——	——	——	
70	3、4	第2（下）	50、　446	6～11	——	古墳	——	——	——	——	
71	1、2、8	第2（下）	26、　117	2～11	——	中世	——	——	——	——	
72	11、12	第3	45、　412	4～32	——	古墳前	——	——	——	——	
SE−22	12	第2（上）	64、　52	51	楕円形	13後	29	18	95	——	曲物と石
23	12	第2（上）	98、　88	65	不整円形	中世	——	——	143	——	井戸形態残存せず
24	11、12	第2（上）	106、　102	41	円	中世	——	——	143	——	井戸形態残存せず
25	5	第2（上）	100、　124	72	楕円形	中世	——	——	——	——	井戸形態残存せず
26	5	第2（上）	87、　82	40	円	中世	——	——	——	——	井戸形態残存せず
27	5	第2（上）	108、　92	72	円	中世	——	——	——	——	井戸形態残存せず
28	6	第2（上）	224、　195	118	楕円形	12前	30	18	95	86、87	井戸形態残存せず　須恵器甕
30	2、3	第2（上）	88、　80	65	円	中世	31	——	144	——	曲物
29	3、4	第2（下）	132、　128	69	円	中世	37	——	——	——	曲物　黒色土器
31	3	第2（下）	172、　140	52	不整円形	10前	38	24	95、133	87、92、97	曲物　古銭
SK−56	3	第2（上）	180、　295	101	不定形	13	32	20	96～100	88～90	廃棄土坑　遺物大量に出土　植物遺体
57	9	第2（上）	366、　500	44	隅丸方形	中世	——	——	——	——	
58	12	第2（上）	78、　138	35	隅丸方形	13後	——	——	101	——	
59	10	第2（上）	164、　210	13	不定形	中世	——	——	——	——	
60	9	第2（下）	122、　106	3	不整円	中世	——	——	——	——	
61	3	第2（下）	192、　102	64	不定形	13前	33	18	101、144	149	礎板、礎石　3個のピット重複

L区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SK−63	2、3	第2（下）	102、 74	6	不定形	中世	——	——	——	——	
64	9	第2（上）	98、 82	39	円形	中世	——	——	101	——	
65	9	第2（上）	112、 106	64	円形	中世	——	——	——	——	
66	10	第2（上）	86、 90	36	円形	中世	——	——	101	——	
67	10	第2（上）	330、 440	12	不定形	13前	34	18	101	−	焼土混じる
68	12	第2（上）	75、 70	80	円形	13前	35	19	——	149	柄杓出土　井戸？
69	10	第2（上）	40、 86	16	半円	13前	——	——	——	——	
70	2	第2（下）	166、 172	56	円形	古前	39	24	101	91	臼玉出土　植物遺体　炭化材
71	6	第2（下）	78、 44	49	半円	中世	——	——	——	——	
72	6	第2（下）	116、 164	54	隅丸方形	中世	——	——	——	——	
73	5	第2（下）	146、 200	39	不整円	中世	——	——	——	——	
74	8	第2（下）	155、 120	19	隅丸方形	中世	——	——	——	——	
75	7	第2（下）	53、 109	30	楕円形	中世	——	——	——	——	
77	6	第2（下）	83、 84	11	半円	中世	——	——	——	——	
79	3	第3	136、 150	42	不整円	古前	——	——	——	——	
80	3	第3	105、 90	21	円形	古前	41	——	101	91	
81	2	第3	238、 254	51	不整円	古前	——	——	——	——	
82	9	第3	297、 383	73	不定形	古前	——	25	101	——	
83	9	第3	193、 198	40	不整円形	古前	——	25	101	——	
84	9、10	第3	990、 700	58〜100	不定形	古前	42	25、27	102、149、150	91、92	
ST−02	11、12	第2（上）	1,500、300	72	——	13前〜後	36	——	95	86	水路　SD−59につながる
SJ−01	5	第3	350、 252	49	不定形	古前？	44	28	151	149	杭・板材多く出土
SR−01	5、6、10、11	第2（下）	168、5,200	42〜66	——	古後	40	23	103	86、93〜95	
02	5、6、10、11	第3	381、2,660	14〜68	——	古前	43	26、29	104、143	93〜96、151	
05	2、8	第4	490、1,925	53	——	弥生以前？	——	——	150	96	

M区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SD−01	9	第1	95、 120	16	——	近世	——	——	——	——	
02	10	第1	29、 64	5～9	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
03	2、11	第1	115、 158	1～21	——	近世	——	——	——	——	K・L区に続く
04	2、11	第1	50、 166	14	——	近世	——	——	——	——	
05	11、17	第1	80、 595	2～27	——	近世	——	33	——	——	
06	11、15	第1	55、 373	3～15	——	近世	——	33	——	——	
07	6～15	第1	120、1,760	7～26	——	近世	——	——	——	——	
08	6、15	第1	40、 970	4～16	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
09	6、15	第1	95、1,422	2～8	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
10	6	第1	41、 215	−	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
11	8、17	第1	34、 350	2	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
29	16	第2（上）	84、1,684	4～10	——	中世	——	——	124	124	
30	7、16	第2（上）	72、2,320	9～29	——	中世	——	——	124	124	
31	6、15	第2（上）	105、 775 80、1,340	8～24	——	11末	——	——	124	123、124	L区に続く
32	6、15	第2（上）	88、 195	2～20	——	12後	——	——	124	124	
33	6	第2（上）	58、1,020	7～40	——	12後	——	——	124	123、124	
34	15	第2（上）	37、 700	3～9	——	中世	——	——	——	——	
35	5	第2（上）	48、 302	19～23	——	中世	——	——	——	——	
36	6	第2（上）	47、 456	12～29	——	中世	——	——	——	——	
37	5、6	第2（上）	60、 514	4～10	——	中世	——	——	——	——	
38	13	第2（上）	63、1,020	5～13	——	中世	——	——	——	——	
39	4、13	第2（上）	104、1,358	16～57		13前	——	——	124	124	L区に続く
42	6	第2（上）	130、 306	10～24	——	12末～13前	64	47	124	124	
43	14	第2（下）	32、 135	8	——	中世	——	——	——	——	
44	4、 13～15	第3	193、 253	10～14	——	古墳～奈良	——	——	——	——	
45	4	第3	122、 342	66	——	中世	——	66	124、154	123、161	
46	6	第3	83、 288	10～19	——	古墳～奈良	——	——	——	——	
47	5～8、 12～14	第3	135、 515	5～37	——	古墳前	——	——	——	——	
48	15～17	第4	38、1,660	2～6	——	弥生以前	——	——	——	——	
49	7、14～15	第4	66、3,110	7～18	——	弥生以前	——	——	——	——	
50	2～3、12	第4	70、2,360	3～9	——	弥生以前	——	——	——	——	
51	1、2、10	第4	75、4,680	1～6	——	弥生以前	——	——	——	——	
52	10	第4	70、 572	5～12	——	弥生以前	——	——	——	——	
SE−03	17	第2（上）	206、 218	104	隅丸方形	13前	46	36	114	——	曲物　石積みの井戸側
04	6、7	第2（上）	178、 187	182	円形	13初	47	37	114	109	井戸側と曲物
05	4	第2（上）	334、 221	103	円形	中世	——	——	——	——	井戸形態残存せず
08	15	第2（上）	226、 220	66	不整円形	11末～12初	50	36	115	108、109	曲物
09	14	第2（上）	216、 205	68	長円形	12後～13初	51	——	115	——	曲物3段
10	14	第2（上）	137、 119	55	長円	12	52	38	115	109	井戸形態残存せず　土坑？

M区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SE−11	15	第2（上）	167、 170	144	方形	10末〜11初	53	39、40	116、156〜169	110、153〜159	井戸側と曲物　箱枠
12	15	第2（上）	185、 243	80	不定形	12後	54	——	116	110	井戸形態残存せず　井戸抜き取り跡？
13	13	第2（上）	195、 175	110	半円	11後	55	41	116、170〜172	109、159、160	井戸側と曲物
14	6	第2（下）	151、 143	76	円形	中世	——	——	——	——	井戸形態残存せず　土坑？
15	6	第2（下）	73、 205	35	半円	中世	——	——	——	——	井戸形態残存せず
16	15	第2（下）	139、 240	58	不定形	12初〜13初	68	56	117	111	曲物3段
17	2	第3	192、 188	37	円形	11後〜12初	72	64	117	111〜113	井戸形態残存せず
18	4	第3	280、 220	47	長円形	8後	73	65、67	118、172	113、114、161	楕円形曲物　墨書須恵器蓋杯
19	14	第3	191、 210	59	円	平安	——	——	——	——	井戸形態残存せず
20	4	第3	165、 170	64	隅丸方形	11末〜12前	74	67、68	118	115	板材　石　井戸抜き取り跡
21	4	第3	130、 130	52	円	12	75	67、69	——	——	曲物と石積みの井戸側
SK−01	1	第1	80、 70	8	円形	近世	——	——	——	——	野井戸？
02	13	第1	75、 120	8	楕円形	近世	——	——	——	——	野井戸？
03	6	第1	60、 100	−	隅丸方形	近世	——	——	——	——	野井戸？
04	15	第1	60、 150	−	隅丸方形	近世	——	——	——	——	野井戸？
06	17	第2（上）	248、 201	126	不定形	13前	56	42、43	119、120、154	116〜119	井戸構造を有する　曲物、石　常滑甕の井筒　東大寺瓦
07	16	第2（上）	166、 204	54	円	中世	——	——	120	——	
08	16	第2（上）	184、 152	56	不定形	13中〜後	57	44	120、133	119	
09	16	第2（上）	84、 143	19	半円	中世	58	44	——	——	井戸構造を有する　石積みの井戸側？
10	16	第2（上）	162、 300	50	楕円形	12後	——	——	121、154	109、116 119、120 123、161	
11	16	第2（上）	68、 268	26	〃	中世	——	——	121	——	
12	7	第2（上）	96、 95	54	隅丸方形	中世	——	——	121	119	
13	7	第2（上）	73、 145	16	不定形	中世	——	——	——	——	
14	15	第2（上）	165、 176	110	半円	12末〜13前	59	44	121、154	120、161	井戸構造を有する　曲物5段　石
15	15	第2（上）	98、 92	64	楕円形	13前	60	44	121、154	——	井戸構造を有する　曲物2段
16	15	第2（上）	117、 138	46	楕円形	13前	——	——	121	119、120	
19	14	第2（上）	152、 134	36	円形	中世	——	——	——	——	
20	14	第2（上）	110、 54	62	半円	中世	——	——	——	——	
21	14	第2（上）	183、 173	130	不整円形	13	61	45	122	121、122	井戸構造を有する　曲物6段
22	14	第2（上）	100、 125	64	隅丸方形	13前	——	——	122	121、122	
23	15	第2（上）	81、 40	44	半円	中世	——	——	——	121	
24										121	
25	14	第2（上）	110、 98	52	不定形	13前	62	46	122	121	井戸構造を有する　曲物
26	14	第2（上）	75、 32	19	半円	10中	——	——	122	121	
27	14	第2（上）	72、 81	66	不定形	13中〜後	63	46	122	121、122	井戸構造を有する　曲物
28	14	第2（上）	57、 86	20	楕円形	中世	——	——	122	121	
29	14	第2（上）	79、 78	20	円形	13前	——	——	122	122	
30	13	第2（上）	110、 44	16	半円	中世	——	——	——	——	
31	5	第2（下）	74、 110	45	楕円形	中世	——	——	——	——	

M区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SK－32	5	第2（下）	72、 77	26	円形	中世	——	——	——	——	
33	5	第2（下）	79、 79	18	円形	中世	——	——	——	——	
34	5	第2（下）	58、 55	24	円形	13後	——	——	122	122	
35	5	第2（下）	58、 60	50	円形	13初	69	56	122	122	
36	6	第2（下）	230、 120	36	隅丸方形	中世	——	57	——	——	土壙墓？
37	13	第2（下）	132、 129	16	円形	中世	——	——	——	——	
38	6	第2（下）	78、 105	10	隅丸方形	中世	——	——	——	——	
39	6	第2（下）	98、 81	72	楕円形	13前	70	58	——	——	井戸構造を有する　曲物、石
40	6	第2（下）	45、 115	49	楕円形	中世	——	——	122、154		
41	6	第2（下）	120、 120	76	不整円	13	71	59	——	——	井戸構造を有する　曲物
42	6	第2（下）	121、 9	1	楕円形	12	中世	——	——	——	——
43	16、17	第2（下）	94、 92	15	隅丸方形	中世	——	——	——	——	
47	11	第3	230、 182	15	不定形	中世？	——	——	——	——	
48	11	第3	144、 158	17	不定形	中世？	——	——	——	——	
49	2	第3	84、 138	16	隅丸方形	中世？	——	——	——	——	
50	13	第3	75、 72	22	円形	中世	——	——	——	——	
51	13	第3	70、 63	21	円形	中世	——	——	——	——	
53	2	第3	72、 60	13	円形	中世	——	——	——	——	
ST－01	4、5	第2（下）	1,670、1,000	80	不定形	11末～13後	——	54、55	109～112 152、153	102～106、 138、 152、153	
03	6	第2（下）	250、 460	40	不定形	13後	——	——	113	——	
04	4	第3	498、 426	48	隅丸方形	13前	75	67	113	107	
SF－01	7、8	第2（上）	404、 356	26～44	不定形	11末～12初	65	48	——	——	
SI－01	7	第2（上）	——	－	——	10末～11前	66	47	125	125	
02	6	第2（上）	——	－	——	12後	67	——	125	125	

N区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SD−05	2	第1	80、 600	2～27	——	近世					
12	1、2	第1	25、 345	2	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
13	1	第1	22、 192	−	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
14	1	第1	21、 140	−	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
15	1	第1	21、 150	−	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
16	1	第1	20、 178	11～23	——	近世	——	——	——	——	
17	2	第1	22、 80	−	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
18	〃	第1	31、 955	3	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
19	4、5	第1	33、 315	2	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
20	〃	第1	35、 403	3	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
21	〃	第1	35、 424	4	——	近世	——	——	——	——	鋤溝
22	6	第1	89、 550	7～16	——	近世	——	——	——	——	
23	8	第1	38、 515	5	——	近世	——	——	——	——	
24	〃	第1	110、 710	3～7	——	近世	——	——	——	——	
25	〃	第1	143、 359	5～7	——	近世	——	——	——	——	
26	4、5	第1	218、 264	14	——	近世	——	——	——	——	畝状遺構
27	5	第1	155、 268	3～11	——	近世	——	——	——	——	畝状遺構
28	2	第2（上）	42、 418	5～13	——	中世	——	——	——	——	
40	3	第2（上）	125、 400	3～6	——	13前	——	——	124	124	
41	4	第2（上）	70、 426	5～13	——	中世	——	——	——	——	
53	5	第2（上）	102、 146	15～17	——	中世	——	——	——	——	
SE−01	1	第2（上）	222、 239	82	半円	12	——	——	114	——	井戸形態残存せず
02	2	第2（上）	150、 186	50	隅丸半円	13前	——	——	114	109	井戸形態残存せず
06	1	第2（上）	136、 112	64	不定形	13	48	36	——	——	曲物
07	1	第2（上）	200、 170	140	不定形	13初	49	38	155	153	井戸側と曲物3段 SE−01に切られる
SK−05	3	第2（上）	90、 122	43	隅丸方形	中世	——	——	——	——	
54	5	第2（上）	150、 186	34	楕円形	13前	——	——	123		
55	〃	第2（上）	130、 172	54	不定形	12後～13前	——	——	123	122、123	
44	7	第2（下）	118、 219	13	不定形	中世	——	——	——	——	
45	〃	第2（下）	73、 92	8	半円	中世	——	——	——	——	
46	〃	第2（下）	83、 89	15	円形	13初	——	——	123	122	
ST−02	5、6	第2（上）	212、 484	70	——	13前～後	——	——	113	106、107	
05	5	第2（下）	260、 400	62	不定形	13前	——	——	113、153	107、153	

遺構一覧表

O区

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SD−54	3、6	第1	152、1,530	13〜34	——	近世	76	30	——	——	水路　杭列の跡
73	6	第3	37、 600	3〜8	——	古墳以前	——	——	——	——	
SK−76	3	第2（下）	67、 72	29	不整円形	中世？	——	——	——	——	
78	4	第2（下）	74、 80	61	隅丸円形	中世？	——	——	——	——	
85	6	第3	71、 76	42	円形	古墳以前	——	——	——	——	
86	5	第3	120、 135	36	不整円	古墳以前	——	——	——	——	
SR−03	1,2,4	第3	256、2,250	59	——	古墳以前	——	32	——	——	
04	1	第3	200、 520	52	——	古墳以前	——	32	——	——	

P区

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SD−81	2、3	第1	95、105	33	——	近世	——	——	——	——	水路
82	1	第2（上）	50、375	5〜8	——	中世	——	——	——	——	
83	1	第2（上）	55、365	26〜30	——	中世	——	——	——	——	
84	2	第2（上）	55、 70	10	——	中世	——	——	——	——	
85	4	第2（下）	20、165	10〜15	——	中世	——	——	——	——	
86	2	第2（下）	100、140	16〜22	——	中世	——	——	——	——	
SE−32	2	第3	100、100	29	円形	12前〜後	——	——	87	73	井戸形態残存せず
SK−88	2	第2（上）	160、160	35	不定形	中世	——	——	——	——	板材
89	1	第2（上）	125、165	11	不定形	中世	——	——	——	——	

Q区

遺構番号	地区	遺構面	規模（cm）	深さ(cm)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿図	図版	挿図	図版	
SD−74	4	第1	17、 250	26	——	近世	——	——	——	——	
75	3	第1	180、 230	24	——	近世	——	——	——	——	
76	3	第2（下）	225、 235	−	——	中世	——	——	——	——	
78	4	第3	590、 335	28	——	中世	——	——	——	——	
79	3	第3	260、 412	31〜50	——	古墳以前？	——	——	——	——	
80	4	第4	240、 384	9〜21	——	古墳以前？	——	——	——	——	
SK−87	2	第2（上）	113、 96	52	円形	中世	——	——	——	——	

報告書抄録

ふりがな	きたしんまちいせきだいさんじはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	北新町遺跡第３次発掘調査概要報告書
副書名	府営大東北新町住宅建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	――――――――
シリーズ名	――――――――
シリーズ番号	――――――――
編集者名	黒田淳
編集機関	大東市北新町遺跡調査会
所在地	〒574　大阪府大東市新町13番30号　☎0720－73－3521
発行年月日	1997年（平成９年）　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きたしんまちいせき 北新町遺跡	おおさかふ 大阪府 だいとうし 大東市 きたしんまち 北新町	27218	45	34度 43分 34秒	135度 38分 24秒	Ⅲ－１次 1990年11月27日 ～ 1991年５月18日 Ⅲ－２次 1991年７月29日 ～ 1992年２月14日 Ⅲ－３次 1992年７月13日 ～ 1993年３月３日	M・N区 2544m² L・O・Q区 2071m² K・P区 2034m²	府営大東北新町住宅建替え

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北新町遺跡		縄文時代 弥生時代	自然河川	縄文土器 弥生土器	ヒスイ製勾玉出土
	集落跡	古墳時代	水田跡、自然河川 土坑	土師器、須恵器	手焙り形土器、臼玉
	集落跡	奈良時代	井戸	土師器、須恵器	須恵器墨書蓋杯
	集落跡	中世	建物跡、井戸、土坑、柱穴、溝 屋敷地の区画溝 水路、池	土師器、須恵器 瓦器、輸入陶磁器、緑釉・灰釉陶器、国産陶磁器、瓦、木製品 銅銭	溝で区画された集落 広範囲に検出 10世紀末～13世紀末頃まで存続 「東大寺」の刻印のある平瓦出土（岡山県万富瓦窯産、重源の東大寺再建に関連する）
	畑、耕作地	近世	東西方向、南北方向に走る水路	染付などの陶磁器類	

北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書(本文編)

大阪府大東市北新町所在

1997年3月

発行　大東市北新町遺跡調査会

印刷　株式会社　中島弘文堂印刷所